佐伯有義校訂標注

增補 六國史

卷參

朝日新聞社藏版

裝畫・・田中咄哉州

續日本紀

巻上

續日本紀

解說

一、書名

續日本紀は、日本書紀に次ぎて文武天皇元年丁酉の年より元明・元正・聖武・孝謙・淳仁(淡路廢帝)稱德・光仁天皇を歷て、桓武天皇延曆十年まで九代九十五年間の恒例臨時の公事・政事・法制・外交・任官・叙位より祥瑞・災異に至るまで、悉く網羅して遺す所なし、之を續日本紀と名づけられしは、日本書紀の續篇といふ意なるが、其の名稱は延曆十三年の上表には未だ見えず、同十六年の上表中に始めて見えたり、されぱかく書名を決定せらるゝまでには、種々の說出で、幾度か論議を經て確定せしものなるべし、其の讀方は、一般にショクニホンギと言ひならへるが、思ふにかく讀めるは、當時の博士等の相議して定めたるが、自ら世に傳はれるなるべく、後の好事家の說にはあらざるべし、然るに之に就きて伊勢貞丈氏の說に、我が朝廷の事漢音を用ふる事は少く、多くは吳音を用ふる例なり、されば此書名も吳音にてゾクニホンギと唱ふ

べし、すべて續の字付きたる和書は、皆漢音にてショクとよまば其下もジッポンとよむべしと云へり、此は一理ある說なれど、物類の稱呼は一つの習慣あるものなれば、道理のみにては推し難く、尙ほ讀み慣れたるまゝにショクニホンギと讀むぞ穩當なるべき、

二、編修

此の書編修の沿革を考ふるに、全部四十卷完成したるは、桓武天皇延曆十六年二月なるが、是より先前後數回に涉りて編修せられ、幾度か改撰補修を經て始めて成れり、其の沿革の大要は、延曆十三年八月、及同十六年二月の上表に見えたり、十三年の上表は、類聚國史卷百四十七に、

延曆十三年八月癸丑、右大臣從二位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩等、奉勅修國史成、詣闕拜表曰、臣聞、黃軒御暦、沮誦攝其史官、有周闢基、伯陽司其筆削、故墳典斯闡、步驟之蹤可尋、載籍聿興、勸沮之儀允備、暨乎班馬迭起、述實錄於西京、范謝分門、騁直詞於東漢、莫不表言旌事、播百王之通猷、昭德塞違、垂千祀之炯光、史籍之用、蓋大矣哉、伏惟聖朝、求道纂極、貫三才而君臨、就日均明、掩八州而光宅、遠安邇樂、文軌所以

大同、歳稔時和、幽顯於焉禔福、可謂英聲冠於胥陸、懿德跨於勛華者焉、而負扆高居、凝旒廣慮、修國史之墜業、補帝典之缺文、爰命臣與正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守臣菅野朝臣眞道、少納言從五位下兼侍從守右兵衞佐行丹波介臣秋篠朝臣安人等、銓次其事、以繼先典、若夫襲山肇基以降、淨原御寓之前、神代草昧之功、往帝庇民之略、前史□著、粲然可知、降自文武天皇、訖于聖武皇帝、記注不昧、餘烈存焉、但起自寶字、至于寶龜、廢帝受禪、韞遺風於簡策、南朝登祚、闕茂實於徒誦、是以故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足、主計頭從五位下上毛野公大川等、奉詔編緝、合成廿卷、唯存案牘、類無綱紀、臣等更奉天勅、重以討論、芟其蕪穢、以撮機要、摭其遺逸、以補闕漏、刊彼此之牴牾、矯首尾之差違、至如時節恒事、各有司存、一切詔詞、非可爲訓、觸類而長、其例已多、今之所修、並所不取、若其蕃國入朝、非常制勅、語關聲教、理歸勸懲、總而書之、以備故實、勒成一十四卷、繫於前史之末、其目如左、臣等學謝研精、詞慙質辨、奉詔淹歳、伏深戰兢、有勅藏于秘府、

と見え、此の文にて、寶字より寶龜に至る十四卷は、十三年八月に成れること明かなり、其の他の卷々は之に次ぎて、十六年二月に成れること、日本後紀卷五に、

延暦十六年二月己巳、先是重勅從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野

朝臣眞道、從五位上守左少辨兼行右兵衞佐丹波守秋篠朝臣安人、外從五位下行大外記兼常陸少掾中科宿禰巨都雄等、撰續日本紀、至是而成、上表曰、臣聞、三墳五典、上代之風存焉、左言右事、中葉之迹著焉、自茲厥後、世有史官、善雖小而必書、惡雖微而无隱、咸能徽烈絢緗、垂百王之龜鏡、炯戒照簡、作千祀之指南、伏惟天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以總萬機、懷神珠以臨九域、遂使仁被渤海之北、貊種歸心、威振日河之東、毛狄屛息、化前代之未化、臣往帝之不臣、自非魏々盛德、孰能與於此也、既而負扆餘閑、留神國典、爰勅眞道等、銓次其事、奉揚先業、夫自寶字二年、至延曆十年、卌四年廿卷、前年勒成奏上、但却起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有舊案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者、唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文、雅論英猷、義關貽謀者、總而載之、細語常事、理非書策者、並從略諸、凡所刊削廿卷、并前九十五年卌卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素總畢、其目如別、庶飛英騰茂、與二儀而垂風、彰善癉惡、傳萬葉而作鑒、臣等輕以管窺、裁成國史、牽愚歷稔、伏增戰兢、謹以奉進、歸之策府、

と見えたり、此の上表と前に擧げたる十三年の上表とにて、其の沿革は知らるれど、頗る複雜にして解し易からざる點も亦少からず、故に年月の順序に從ひて、少しく之を説明せむと欲す、

(一)文武天皇より元明、元正、聖武天皇まで四代五十二年間の史は、夙に編修せられたりしこと、前表(延暦十三年の上表をいふ、下同じ)に『自文武天皇訖于聖武皇帝、記注不昧』とあるにて明かなり、されど之を編修せしめられし年月、及其の人名も詳ならず、其の卷數も何卷なりしか詳ならず、

(二)次に光仁天皇の御代に、石川名足上毛野大川等に勅して、淳仁天皇寶字二年八月より、當代即ち光仁天皇寶龜八年迄二十年間の史を編修せしめられたり、此の事は、前表に『起自寶字、至于寶龜、廢帝受禪、韞遺風於簡策、南朝登祚、闕茂實於徒訓、是以故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足、主計頭從五位下上毛野公大川等、奉詔編緝、合成廿卷』とある是なり、其の年月は伴信友の撰續日本紀次第考に詳ならずとあれど、寶龜九年或は十年頃なるべきかと思はる、其は名足等の編修したるは、上文には起自寶字、至于寶龜と概略を擧げたれど、寶字二年八月即ち淳仁天皇の即位より、光仁天皇寶龜八年まで二十年間なりしこと明かなると、名足の經歴を考ふるに、其の右

大辨に任せられしは寶龜九年二月なるが、凡そ修史の事業は、太政官の要職にある人之を擔任するは代々の例なれば、名足の任官と、寶龜八年にて筆を止めしとを參考して、其の翌年に修史の勅ありしならむと推定す、此の二十年間の記事は、二十卷に編修せられしが、其の完成の年月は詳ならず、

(三)次に石川朝臣名足、淡海眞人三船、當麻眞人永嗣等に勅して、前に成りし寶字二年乃至寶龜八年の史の前紀、即ち文武天皇元年より孝謙天皇寶字元年まで六十一年間の事を撰修せしめ給へり、此事は後表(延曆十六年二月の上表をいふ)に起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有舊案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存とあり、寶字二年より寶龜八年迄の史は既に成れるを以て、其の前紀即ち日本紀の後を承けて、文武天皇元年丁酉より寶字元年まで、六十一年間の史を、修史の事業に既に經驗ある名足を首とし、當時文筆を以て聞えし三船及永嗣の兩人をして、分擔して修撰せしめられたり、然るに文武天皇元年より、聖武天皇の御代まで五十六年間の史は、既に編修せるものありしかば之を補修し、孝謙天皇

勝寶元年より、寶字二年七月まで十年間の史を、新に編修したるなり、然るに、其所レ上者唯廿九卷、寶字元年之紀、全亡不レ存とあれば、實は勝寶八年十二月迄の紀にて、寶字元年より二年八月までの紀は、編修當時より缺け、語多ニ米鹽一事亦疎漏とあるが如く、未だ十分に精選せられざりしなるべし、此の紀奏上の年月も詳ならざれど、名足は延暦七年に薨じ、三船は同四年に卒し、永嗣も延暦二年には既に退官して散位なりしこと下に記せるが如くなれば、延暦二年十月以前に奏上せしこと明かなり、以上三回の修史にて、文武天皇より光仁天皇寶龜八年まで八十一年間の正史は、先づ脫稿したるなり、

(四)然るに石川名足上毛野大川等の編修せし、寶字元年より寶龜八年までの史は、十分に筆削を加へざりし故に、桓武天皇の御代、右大臣藤原朝臣繼繩、民部大輔菅野眞道、少納言秋篠安人等に更に勅して、之を訂正增補せしめ給ひ、元來二十卷なりしを删定して十四卷とし、同十三年八月撰成りて奏上せり、其の事は繼繩の上表に、故中納言石川朝臣名足、主計頭上毛野公大川等、奉レ詔編緝、合成ニ廿卷一、唯存ニ案牘一、殊無ニ綱紀一、臣等更奉ニ天勅一、重以討論、芟ニ其蕪穢一、以撮ニ機要一、摭ニ其遺逸一、以補ニ闕漏一、刊ニ彼此之牴牾一、矯ニ首尾之差違一云々、勒成ニ一十四卷一、繫ニ於前史之末一とあり、此の十四卷は今の續日本紀卷二十一

より三十四までなり、之に次ぎて寶龜九年より延曆十年まで十四年間の史、卽ち卷三十五より四十までの六卷は、此後引續きて編修し、程なく完成し、延曆十六年以前に奏上せり、故に後表に、自寶字二年、至延曆十年、卅四年廿卷、前年勒成奏上とあり、是は十三年八月に奏上せる卷二十一より三十四までと、卷三十五より四十まで六卷とを合せて記せるものなるが、十三年の上表に、勒して十四卷とすとあれば、十三年八月に奏上せしは十四卷なることいふまでもなく、殘餘の六卷も、前年勒成とあれば、其の翌年十四年頃には撰修を畢りて奏上せしなるべし、然るに伴信友翁の說に、此の六卷は延曆十六年二月、卷一より卷二十まで完成して上りし時に、共に奏上せりと云はれしは、上表文と合はざれば諾ひ難し、思ふに繼繩の薨去は、延曆十五年七月なれば、遲くとも其の以前、卽ち公の在世中に奏上せられたりしなるべし、故に卷三十五より四十までも、卷二十一より三十四までと同じく、每卷の首に右大臣正二位兼行皇太子傅中衞大將臣藤原朝臣繼繩等奉勅撰と書せり、

(五)斯くの如く寶字二年以後の史は、再度の補修を經て完成せしが、文武天皇以後聖武天皇までの史は再び補修せられたれど、未だ盡さゞる所あり、勝寶以後寶字二年七月までの史は、一たび編修せられて、前紀を繼ぎたるのみにて、舊案に因循し、未だ

十分なる刊正を加へず、殊に寶字元年の紀は、全く存せざりし故に、重ねて菅野眞道秋篠安人等に勅して撰修せしめ給へり、是に於て其の補ふべきは之を補ひ、削るべきは之を削りて二十卷とし、延曆十六年二月奏上せり、其の上表に、爰勅二眞道等一云々、自二寶字二年一、至二延曆十年一、卅四年廿卷、前年勒成奏上、但却起二文武天皇元年歲次丁酉一、盡二寶字元年丁酉一、總六十一年、所レ有舊案卅卷、語多二米鹽一、事亦疎漏、前朝詔二故中納言石川朝臣名足云々等一、分レ帙修撰、以繼二前紀一、而因二循舊案一、竟无二刊正一、其所レ上者唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不レ存、臣等搜二故實於司存一、詢二前聞於舊老一、綴二叙殘簡一、補二緝缺文一云々、凡所二刊削一廿卷、幷レ前九十五年卌卷、始レ自二草創一、迄二于斷筆一、七年於茲、油素總畢とあり、草稿を始めしより斷筆に至るまで七年とあれば、延曆十年に勅撰の命を受け、十六年二月に至り、從來三十卷なりしを删定して二十卷と爲し、十三年に奏上せし寶字二年以後の上に之を加へたり、今の續日本紀卷一より二十に至る二十卷即ち是なり、卷二十一以後は、右大臣藤原繼繩編修總裁たりし故に、其の名を卷首に書し、卷一より二十まで二十卷は菅野眞道勅を奉じ、主として之を編修せし故に、卷首毎に從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野朝臣眞道等奉勅撰と書せり、斯の如く此の紀の編修は、文武天皇より聖武天皇まで四代五十二年の初稿を除き、光仁の御代に石川

名足等に勅命以來、凡そ二十年の歲月を經て、始めて完成せり、

三、撰者

次に撰者の事に就きて少しく述べむに、

(一)文武天皇より聖武天皇に至る四代五十二年間、最初の編修に關係せし人の氏名は詳ならず、

(二)寶字二年より寶龜八年に至る二十年間の修史に關係せし人の氏名は、類聚國史に、

　故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足
　主計頭從五位下上毛野公大川

と見えたり、

　石川朝臣名足は續紀卅九に、延曆七年六月丙戌、中納言從三位兼兵部卿皇后宮左京大夫大和守石川朝臣名足薨、名足御史大夫正三位年足之子也、寶字中授從五位下、除伊勢守、稍遷寶龜初、任兵部大輔、遷民部大輔、授從四位下、出爲大宰大貳、居二年、徵入歷左右大辨、尋爲參議兼右京大夫云々、延曆初授從三位中納言兼兵部卿皇后宮左京

大夫、薨時年六十一と見ゆ、石川氏は、武内宿禰の子宗我石川宿禰の後にて、名足は其の十一世の孫御史大夫兼神祇伯年足の子なり、祖父石足も從三位左大辨に至り、累代の名家たり、名足が修史の命を蒙りしは、太政官の要職にありしに由れり、傳に延暦七年六十一歳にて薨ずとあるによりて推算するに、寶龜九年に修史の命を受けたりと假定すれば、同年は五十一歳にて、此の年二月右大辨に任ぜられたり、

上毛野公大川は、續紀卷三十五寶龜九年十月乙未の條に、其の名初めて見え、遣唐使錄事とあり、翌年四月辛卯に、授遣唐使錄事正六位上上毛野公大川外從五位下、天應元年五月癸未に、大外記外從五位下上毛野公大川爲兼山背介と見ゆ、大外記に任ぜられしは、十年四月以後、天應元年五月以前の事なり、延暦五年正月外從五位上より從五位下を授けられ、同年六月主計頭に任ぜらる、

(三)次に文武天皇より孝謙天皇寶字元年に至る六十一年間の修史に關係せしは、

中納言從三位石川朝臣名足

刑部卿從四位下淡海眞人三船

刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣

等なりき、石川名足は前囘の修史より引續きて其の長官となり、淡海三船と當麻永

嗣とは新に其の命を受けしなり、

淡海眞人三船は、續日本紀卷三十八に其傳記を載せ、延曆四年七月庚戌、刑部卿從四位下兼因幡守淡海眞人三船卒、三船大友親王之曾孫也、祖葛野王正四位上式部卿、父池邊王從五位上內匠頭、三船性識聰敏、涉覽群書、尤好筆札、寶字元年、賜姓淡海眞人、起家拜式部少丞、累遷寶字中、授從五位下、歷式部少輔參河美作守云々、除近江介、遷中務大輔、兼侍從、尋補東山道巡察使云々、頗乖朝旨、有勅譴責之、出爲大宰少貳、遷刑部大輔、歷大判事大學頭兼文章博士、寶龜末授從四位下、拜刑部卿兼因幡守、卒時年六十四とあり、當時文人の首と稱せり、

當麻眞人永嗣は、神護景雲元年正月、正六位上より從五位下に敍せられ、寶龜四年從五位上に進む、官は景雲元年七月刑部大判事と爲り、後左右少辨土左守出雲守等を歷任して、天應元年五月、刑部大輔と爲る、延曆二年十月紀に、散位從五位上とあれば、當時は既に退官せりと見ゆ、左右少辨大判事等を歷任して、官務に通じ、亦法律にも精通せしより、修史の任に當らしめられしなるべし、當麻氏は用明天皇皇子麻呂古王の後なり、

(四)次に寶字より寶龜に至る修史に關係せし人々は、

右大臣從三位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩
正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守菅野朝臣眞道
少納言從五位下兼侍從守右兵衞佐丹波介秋篠朝臣安人

なるが、藤原繼繩は寶龜十一年二月中納言に任せられ、延暦二年七月大納言に進み、同九年二月右大臣に任せられ、十五年七月薨ず、年七十とあり、

菅野眞道は、續紀卷四十に、延暦十年正月己丑、東宮學士從五位上菅野朝臣眞道爲兼治部少輔、左兵衞佐伊豫守如故とあり、十三年八月續紀奏上當時には、此に見ゆるが如く、正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守たり、公卿補任に、其祖百濟國人山守之男、初賜津連、寶龜九年二月少內記、(卅八)延暦四年十一月入內、爲東宮學士、八年三月圖書頭、(學士如元)九年七月勅賜菅野朝臣、十一年二月治部大輔、六月民部大輔(兼官如故)十三年正月正五位上、七月從四位下、十六年三月左大辨、廿四年正月參議兼左大辨、大同四年三月從三位、弘仁二年正月致仕、五年六月薨とあり、

秋篠朝臣安人は、續紀卷卅七に、延暦元年五月癸卯、少內記正八位上土師宿禰安人等言云々、於是安人兄弟男女六人賜姓秋篠と見え、同八年大外記に、十年二月大判事に、同五月少納言と爲り、同十五年正月右少辨、同十七年左中辨、同二十四年正月參議

右大辨、弘仁十一年十二月致仕、同十二年正月薨ず、時に年七十とあり、延暦の初年には菅野眞道と同じく少内記にして、同十年には少納言たりき、

（五）延暦十六年續日本紀奏上の當時、之に關係ありし人々の中、其の主たる人は上に述べし眞道、安人、及中科宿禰巨都雄の三人なりき、依りて奏上の當日勅ありて叙位あり、其の他の人々にも叙位ありき、日本後紀卷五に、延暦十六年二月己巳是日詔曰、天皇詔旨良麻止勅久、菅野眞道朝臣等三人、前日本紀與利以來、未レ修繼一在留、久年乃御世々々乃行事乎、勘搜修成氏、續日本紀卌卷進留、勞勤美譽美奈毛所念行須、故是以、冠位舉賜治賜波久止勅御命乎、聞食止宣、從四位下菅野朝臣眞道授二正四位下一、從五位上秋篠朝臣安人正五位上、外從五位下中科宿禰巨都雄從五位下、癸酉、太政官史生從七位下安都宿禰笠主、式部史生賀茂縣主立長、叙二位二階一、中務史生大初位下勝繼成、民部史生大初位下別公淸成、式部書生無位雀部豐公一階、以レ供二奉撰二日本紀一所レ也と見ゆ、眞道安人の事は既に前に擧げたれば、巨都雄以下の事をこゝに述ぶべし、

中科宿禰巨都雄は、續紀卷四十に、延暦十年正月癸酉、少外記津連巨都雄等兄弟姉妹七人、因レ居賜二中科宿禰一とあり、初めは津連と稱す、葛井船氏と同族にて、菅野氏も亦同祖なり、姓氏錄に、中科宿禰菅野朝臣同祖鹽君孫宇志之後也とあり、巨都雄は少外

記の職にありしより修史の事に與り、續紀奏上の當時には大外記たりき、編修の功に依り、外從五位下より從五位下に進めり、

安都宿禰笠主は、上に引ける後紀に見ゆるが如く、續紀の編修に關係せるに依りて、從七位下より正七位下に進められたり、安都宿禰は、姓氏錄左京神別に、阿刀宿禰石上同祖神饒速日命六世孫伊香色雄命之後也と見え、山城神別にも見ゆ、

賀茂縣主立主は、同じく後紀に從七位下式部史生賀茂縣主立主敍位二階と見え、編修の功に依り、安都笠主と同じく從七位下より正七位下に進めり、賀茂縣主は、姓氏錄山城神別に、賀茂縣主、神魂命孫武津之身命之後也と見え、世々賀茂別雷神社の神職となれり、

勝繼成は、同じく後紀に中務史生大初位下勝繼成一階とあり、安都笠主と共に大初位下より大初位上に進めらる、勝氏は、姓氏錄山城蕃別に、勝上勝同祖、百濟國人多利須々之後也とあり、

別公清成は、同じく後紀に、民部史生大初位下別公清成一階とあり、編修の功に依り、大初位下より大初位上に進めらる、別氏は、姓氏錄右京皇別に、別公建部公同祖日本武尊之後也とあり、山城皇別には、別公堅井公同祖彥坐命之後也とあり、開化天皇

皇子彥坐命の後なるもあり、其の何れなるか詳ならず、

雀部豐公は、同じく式部書生無位豐公一階とあり、編修に關せしによりて、少初位下に叙せらる、雀部氏は、姓氏錄左京皇別に、雀部朝臣建內宿禰之後也、(攝津皇別にも見ゆ)また和泉皇別に、雀部臣多朝臣同祖、神八井耳命之後也とあれば、其の何れなるか詳ならず、

四、異本

續日本紀の類本は、書紀の如く多數ならず、村尾氏考證に、從來世に傳ふる諸本を擧げて、此編校正所レ據凡有二六本一、一曰卜本、卷末皆書二延文及應永應長等數字一、又載二卜部兼豐及兼熈兼敦兼夏等小跋一、乃卜部家歷世所レ傳也、二曰永正本、亦出二於卜部家一、卷末所レ署、與二卜本一相似而最後載二永正十二年老槐散木識語一、老槐散木蓋西三條實隆公別號、則是實隆公借二卜部家傳本一所レ寫也、三曰金澤本、舊係二金澤文庫中所レ收、余幸得レ借二覽影鈔本一、其本自二首卷一至二第十卷一、與二後三十卷一筆意不レ同、前十卷蓋後人所二補寫一、而毎卷首欄外右方、題二金澤本寫四字一、則疑其補寫、所レ由本亦金澤之舊物歟、將他本耶、並未レ可レ詳也、第十一卷以下、毎卷首末捺二黑文金澤文庫印一、四曰宮本、係二伊勢山田郷豐宮崎文庫藏一、承應年間、文庫

書生劉力謄寫、以所納者見跋尾、五曰鴨本、卷末無識語、未詳原本所由、疑出於鴨氏也、六曰堀本、出於平安堀氏、每卷首印平安堀氏時習齋藏八字、卷末載寬永十四年等字及識語、其下捺重圈印、印文曰杏庵、案杏庵堀氏名正意、時習齋其曾孫正修別號也と云へるが如く、大略右の外に出でず、而して卜本、永正本は其の實同本にして內閣本も亦同じ、梭齋以下校本に所謂官本と稱するも亦別種のものにあらず、五にいへる鴨本、六にいへる堀本氏の二本は今何れに存するか詳ならず、永正本も三條西家に傳はらざるを以て、六本中所在の明かなるものは、卜本卽ち吉田本、金澤本、宮本の三本のみ、其の外に寫本の現存し、予が親しく閲覽したるは、

一、內閣本　　二、尾張本
三、薩摩本　　四、曾我本
五、淀本　　六、谷森本

以上の六本にて、前に擧げたる三本と合せて九本なり、凡そ書寫の年代の順序に隨ひて之を擧ぐれば、

(一) 金澤本

書寫の年月は明かならざれど、もと金澤文庫に所藏したる故に、世に金澤本と稱す、

其の年代は推して知るべし、卷一より十までは尾州德川侯爵家に、卷十一より同四十までは宮內省圖書寮に所藏す、考證にも金澤一本、文字精好誤脫亦少、迥出諸本之右とあるが如く、續日本紀古寫本中の白眉たり、

（二）內閣本

慶長の寫本にして、奧書に據るに永正本の寫なり、卷二に永正十三年閏二月四日書寫了、卷三に永正十二年二月廿二日終書了とあり、以下每卷多くは永正十二年書寫の由を記せるは、三條西實隆公の奧書にて卜部本を借りて書寫せしめられしなり、されば本書は此の永正本を慶長年中に寫したるものなり、

（三）吉田本

慶長十八年正月、右續日本紀四十冊遂全部之功者也梵舜とあり、梵舜が卜部本を書寫せしめたるものなり、卷九及十の二卷は缺く、

（四）尾張本

尾張德川侯爵家の所藏にて、奧書に元和八仲夏廿日以實隆公自筆本考了西山期遠とあり、奧書に據るに內閣本と同じく三條西本の複寫なり、

（五）薩摩本

金澤本の寫にて卷首に薩邸藏書と云る印あり、今帝國圖書館に所藏す、每卷筆者の氏名を明記す、

（六）曾我本

水戸德川侯爵家の所藏にて、奧書及書寫の年月も無し、內閣本淀本と頗る相似たり、されど亦異なる點も往々ありて、大に參考とすべし、

（七）淀本

舊淀藩卽ち稻葉子爵家の所藏なりしが、今予の所藏と爲る、奧書なく書寫の年月も詳ならざれど、內閣本曾我本とよく似たる本にて、考證に所謂堀本とも最もよく相似たり、されど亦往々異なる點もありて、同本にはあらず、

（八）神宮本

舊豐宮崎文庫の所藏なりしが、今神宮文庫に藏せらる、奧書に承應二年三月書寫之とあり、同志の人々分擔して書寫せるものなり、

（九）谷森本

谷森建男氏（谷森善臣翁の息）の所藏にして、中原職忠の印あり、版本とよく相似たり、書寫の年月は詳ならず、

五、書紀との比較

書紀は、神代及神武天皇より持統天皇に至るまで、四十餘代の正史なるが、續日本紀は之に續ぎて、文武天皇より桓武天皇に至る九代九十五年の正史にて、年數に於ても書紀に次ぎて長く、六國史中の重要なる書なるが、書紀と之を對照するに、其の最も異なるは、御歷代の詔勅卽ち宣命を漢譯せずして、原文のまゝに之を揭載したるにあり、之に據りて當時及上古の事蹟の眞相を明瞭に知ることを得、文學上の裨益も甚だ大なるものあり、書紀の舊套を襲はずして、新に機軸を開きたるは、其の功大なりと云ふべし、次に此の書の編修は、度を累ねて補修せられし故に、文辭も相當に精練せられしなるべし、然るに書紀の如く、漢史の文辭を其のまゝ用ひしものなきは、史料の如何にも因りしなるべけれど、宣命と同じく此の點も亦異なれり、次に制度の沿革を明かにせむが爲に、詔勅官符の類は悉く之を擧げ、政事外交等に就きても、編修上深く留意せられたり、任官敍位に就きても悉く之を列擧せられしは、煩雜なるが如くなれど、當時に於て必要なる事なればなり、たゞ其の事の繁多なる爲に、敍位の文字に誤謬多く、干支を推すに記事の錯簡せるもの少からず、傳寫の誤なら

一

むかとも思へど、必しも然らざるものあり、此の事は比古婆衣にも既に注意したるが、數次の補修を經たる爲に、却てかゝる誤を生じたるにはあらざるか、類聚國史及日本紀略も本書と同じきを見れば、恐くは傳寫の誤のみにはあらざるべし、

そはいづれにもあれ、本史は九代九十五年間、國家の大事を始め、政事・法制・外交等に關する事は、悉く之を網羅して精細に叙述せるが故に、藤原朝及奈良朝時代の事實は、之に據りて明かに窺ひ知ることを得、此時代の正史として、實に萬世に仰ぎ尊むべき貴重なる寶典なり、

佐伯有義述

校訂標注　續日本紀

凡例

一、本書は、明暦三年立野春節校訂の版本を以て底本とし、左の諸本を以て校訂せり、

一、古寫本

		符號
一金澤本 巻一より十尾張徳川侯爵所藏 巻十一以下圖書寮所藏	三十巻	(金本)
一内閣本 内閣文庫所藏	四十巻	(閣本)
一薩摩本 帝國圖書館所藏	四十巻	(薩本)
一尾張本 尾張徳川侯爵所藏	四十巻	(尾本)
一曾我本 水戸徳川侯爵所藏	四十巻	(曾本)
一淀本 予所藏	四十巻	(淀本)

一　神　宮　本 豐宮崎文庫所藏　四十卷　（宮　本）

二、校合本

一　水戶考訂本　（水戶校本）
一　伴信友校合本　（伴校本）
一　狩谷棭齋校合本　（狩谷校本）
一　山崎知雄校合本　（山崎校本）

三、注釋書

一　續日本紀考證 村尾元融　十二卷　（考　證）
一　續日本紀私記 矢野直道　十三卷　（私　記）
一　續日本紀問答 寺村成相　一　卷

二、本書の校訂に方りて、底本と校合し、或は參照せる諸書は凡そ左の如し、略稱

一　日本書紀　（書　紀）
一　日本後紀　（後　紀）
一　續日本後紀　（續後紀）

一文德實錄　(文德紀)

一三代實錄　(淸和紀、又陽成紀、光孝紀)

一類聚國史　(類史)

一日本紀略　(紀略)

一扶桑略記　(略記)

一帝王編年記　(編年記)

一新撰姓氏錄　(錄)

一公卿補任　(補任)

一延喜式　(式)

一新撰字鏡　(字鏡)

一類聚倭名抄　(抄)

一箋注類聚倭名抄　(箋注)

一類聚名義抄　(名義抄)

一伊呂波字類抄　(字類抄)

三、訓點は主として底本に據れり、されど誤謬も亦少からざるを以て、之に據り難き

ものは、狩谷校本、山崎校本、及考證等の說に據りて改めたり、宣命の傍訓は、底本施す所完備せざるを以て、主として歷朝詔詞解に據り、說あるものは標注に之を述べたり、

四、其の他校訂標注に關する義例は、大略日本書紀に同じきを以て、こゝに之を略す、

昭和四年五月

佐伯有義識

校訂標注 六國史第三卷目次

卷第九【元正紀三及聖武紀一・起養老六年正月盡神龜三年十二月】

天璽國押開豐櫻彥天皇（聖武天皇）

卷第十【聖武紀二・起神龜四年正月盡天平二年十二月】

卷第十一【聖武紀三・起天平三年正月盡六年十二月】

卷第二十【孝謙紀三・起天平寶字元年正月盡二年七月】

巻第一、金本闕本巻の字なし下同じ

續日本紀卷第一

起丁酉年八月盡庚子年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇　第卌二

天之眞宗豐祖父天皇、天渟中原瀛眞人天皇之孫、日並知皇子尊之第二子也、日並知皇子尊者、寶字二年有勅、追崇尊號、稱岡宮御宇天皇也、母天命開別天皇之第四女、平城宮御宇日本根子天津御代豐國成姬天皇是也、天皇天縱寛仁、慍不形色、博渉經史、尤善射藝、高天原廣野姬天皇十一年、立爲皇太子、

【即位前紀】

○天之眞宗豐祖父天皇、卷三慶雲四年十一月丙午奉諡曰倭根子豐祖父天皇とあり一代要記歷代皇紀には天津足根豐大父天皇に作る皇代記亦同し御諱は輕天武天皇十二年生とあり御名義は天之眞宗は天渟中原瀛眞人天皇天武の御嫡統を受繼ぎ給ふ意なり御父草壁皇子には天武天皇の皇太子にましまし且御嫡子にましますに依て眞宗と稱へ奉れるなり豐祖父は天性寛仁にして長者の風ましますに因れる稱へ名なるべし　○日並知皇子、天武天皇の皇子、同紀には草壁皇子尊と記せり日並知は天武紀十年二月に皇太子となり給ひ持統天皇に至るもなほ皇太子として母帝を輔け給ひしに因れる名なり粟原寺鑪盤銘には日並知御宇東宮と見えたるを狩谷望之の說に太子云々雖未嗣皇統而實與天子之尊無異古以帝位比之太陽之精而謂天日嗣是也故當時稱曰日並御宇東宮與帝相並統御天下也といへり　○第二子、大日本史に爲以元正帝爲姉故爲第二子とあり　○寶字二年、原本三年に作る卷廿一天平寶字二年八月戊申並に紹運要略に據て改む　○岡宮御宇天皇、紹運要略云草壁皇子號岡本天皇寶字二年追稱天皇爲淨御原四代孫之謂也、岡宮は此皇子の宮號なるべし岡本宮は大和國高市郡岡村にあり舒明天皇齊明天皇の宮所なるが而後は天武天皇の都たりし飛鳥淨御原宮と同郡にて程近ければ此處にましましなるべし　○天縱、論語子罕に天縱之將聖とあり天より縱されたる聖德を有つことなり　○慍不形色、原本慍を溫に作る金本閣本曾本等に據て改む　○射藝、支那に所謂六藝の中の弓射ることを最も能くせさせ給ふを云ふの諡號を文武天皇と申奉るは此に渉經史尤善射藝とあるに因れり、原本藝を勢に作る金本曾本淀本に據て改む　○立爲皇太子、前紀に紀記曰云云持統紀云持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午立皇太子とあり、懷風藻葛野王傳に高市皇子薨後皇太后引王公卿士於禁中謀立日嗣時群臣

各挾私好衆議紛紜王子進奏曰我國家爲法也神代以來此典仰論天心誰能敢測、然以人事推之從來子孫相承以襲天位若兄弟相及則亂興嗣自然定矣此外誰敢間然乎、弓削皇子在座欲有言王子叱之乃止皇太后嘉其一言定國特閱授正四位拜式部卿とあるは此時の事なり

【元年】八月、考證に按八上當有元年秋三字且提行と云り今便宜に據て別提す

〇甲子朔、持統紀十一年八月乙丑朔天皇定策禁中禪位於皇太子とあり此年始て儀鳳暦を用ひられ舊暦と新暦の間に一日の差ありしなり

〇詔、西宮記に詔書事、改元改錢並赦令等類也臨時大事爲詔尋常小事爲勅云々宣命事、神社山陵告文立后太子任大臣節會任僧綱天台座主及喪家告文類也とあり後には文體に依り詔勅と宣命とを區別したれど續紀時代は未ださる區別なく共に詔勅と云り詔詞解（以下略して解と云）に宣命といふ目（ナ）は續紀卷十に始めて見え命を宣（ノル）よしにて宣とは命を受傳へて告げ聞かするを云なり繼體紀に宣勅使とあるも勅を宣る使也、古語のにまれ漢文のにまれ勅命をうけ給りて宣聞する事をさし

〇八月甲子朔、受禪卽位、〇庚辰、十七詔曰、現御神止大八嶋國所知天皇大命良麻止詔大命乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民、諸聞食止詔、高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世中今至麻氐爾、天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾、大八嶋國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、聞看來此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氐、此乃食國天下乎、調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母、隨神所思行佐久止詔天皇大命乎、諸聞食止詔、是以百官人等、四方食國乎治奉止、任賜幣留國國宰等爾至麻氐爾、天皇朝庭敷賜行賜幣留國法乎、過犯事無久、明支淨支直支誠之心以而、御稱稱而緩怠事無久、務結而仕奉止詔大命乎、諸聞食止詔、故如此之狀乎聞食悟而、欵將仕奉人者、其仕奉禮良牟狀隨、品品讃賜上賜、治將賜物曾止詔天皇大命乎、諸

て云る目にこそあれ其文をさしていふ名にはあらざりしを後世には直に其文をさして宣命さいひさるから宣字をも詔勅のことゝぞ心得ためる西宮記に別無宣命或詔書之可宣命調之宣命さあることは又一說を擧られたるにてこれぞ古の意なりけるさあり

聞食止詔、仍免今年田租雜徭幷庸之半、又始自今年三箇年、不收大稅之利、高年老人加恤焉、又親王已下百官人等賜物有差、令諸國毎年放生、○癸未、以藤原朝臣宮子娘爲夫人、紀朝臣竈門娘、石川朝臣刀子娘爲妃、○壬辰、賜王親及五位已上食封各有差、

○現御神止、明御神また明津神さも書けり舊の訓にアラミカミさあれどアキツミカミさ訓べし現御神さは天皇は明に見え給ふ神さいふ義なり止は二テさ云むが如し　○大八嶋國、書紀神代紀八洲起元章に云り　○所知、國土人民を大御心にうけ入れて治め給ふ義　○大命良麻止、良麻止は附ていふ辭なり武烈紀に臣をヤッコラマ顯宗紀に御奴僕をミアナスヱヤッコラマなど訓るに同じ意にて、天皇の大命ぞさ確かに強めて宣り聞かす意に添へしなり　○皇子等王等、皇子は親王、王は諸王なり原本王等を王臣に作る金本曾本淀本に據て改む　○百官人等、諸の官人を云　○諸、皇子等以下の諸にて上に屬く　○聞食、舊訓にキコシメセさあるにてもよけれど下の詔には多くセをサへさ延べてキコシメサへさ訓り熟く承るべしさなり　○詔、ノリタマフさ訓むべし、宣命使は天皇の大御言葉を其まゝ宣るにて自ら宣るに非ざればなり詔詞解の說は穿ち過ぎたり　○高天原爾、原本爾を乎に作る和銅七年二月紀の詔に據て改む　○事始而、此語は下の天坐神之依之奉之隨さ云に係りて、天津日嗣の御事を始め給ふを云　○遠天皇祖、古へよりの御世々々の天皇を申し奉れり　○御世御世、原本御世の二字に作る解に從て二字を增補す　○中今、後世にはその時々を降れる世、後の世など云を、こゝは當時を盛なる眞中の世さほめたるなり此語は下の天都神乃御子隨母云々聞看來さ云に係る　○阿禮坐牟、生坐むなり　○彌繼繼爾、次第に相繼ぎての意　○次止、ツギテトさ訓み天津日嗣知ろしめさむ次第にさ云ことなり下の依之奉之に係れり　○天都神乃御子隨母、天都神乃御子は天照大御神の御子の義にて天忍穗耳命を始め奉り御世々々の天皇を申奉る隨は天照大御神の御子に坐しますまゝにさ云義　○天坐神、天津神さ云に同じ、天照大御神高皇產靈神を申奉れり　○依之奉之隨、此の國土人民を寄せ授け奉らせ給ひしまに〱の義　○聞看來、此三字原本になし解に本紀卷十七、廿一の二詔を證さして之を補ひ、こゝに此語なくては上の中今爾至麻氏爾さ云る語を承る所なく又次の語へも續かざればなりさ云るによりて補ふ　○高御座之業、解に天の御座さ云むが如し高さは天を云たゞ高きよしにはあらず天皇の御座は卽ち高天原にして天照大御神のまします御座を受傳へますよしをもて高御座さは申すなりさて高御座之業さは天皇の此御座に坐して天下を治めさせ給ふ御業を申すなりさ云り　○倭根子天皇命、倭根子は御世々々の天皇に通へる御稱號なりこゝは持統天皇を申す　○授賜比負賜布、高御座の御業を授け給ひ負せ持たしめ給ふなり　○廣支、此二字原本になし金本閣本曾本淀本に據て補ふ　○受賜利、持統天皇の授け給ひし大命を文武天皇の承け給ふなり　○恐坐氏、今俗に恐入り畏まりなど云さ同意、閣本氏を弖に作る氏の俗字なり　○食國、舊訓にケクニさあれどヲスクニさ訓むべしヲスは國を治ろしめす義なり　○調賜比平賜比、調は物のちり〱になれるを一つに纏るを云ひ平は人心を平和にして不平なからしむるを云　○隨神所思行佐久止、隨神は天皇は神にてまし〱ながらの意、所思行佐久はおぼしめすにて佐久はすの延びたるなり　○四方食國云々、天皇の治め給ふ四方の國々を治め申せさ遣され給へ

ゐ國司等に至るまでの意、ミコトモチは天皇の大命を負持ちて執務する意　○天皇朝庭云々、解に天皇以下の十字諸本共に百官人等の上にあるは次第の亂れたるにて必ず下の國法といふへ係れる語なり百官人云々と續きては語の條理整ずされば至麻氏爾の下に移すべきなりと云るに從て修換へたり　○御稱稱、解に彌奬奬の誤なるべしと云り　○務結而、原本結を給に作る次々の宣命に彌結爾云々勤結理云々などあるに據て改む手擧く引締るを云　○故如此之狀乎、原本故の下に細字爾の字あり閣本曾本乎に作る何れも次々に見ゆる宣命の例に據て削る　○欸、解に卷世一の詔に欸事明美とあるに據てイソシクと訓むべしと云り　○品品、褒め賜ひ上げ賜ふ等差のあるをいふ　○治將賜、治とは吉凶何事にあれことわり行ひ給ふを云　○田租、孝德紀大化二年に出づ　○雜傜、崇神紀十二年に出づ　○庸、同上　○大稅、賦役令義解に凡官稻之源出自田租即分爲三一曰大稅二曰郡稻一也とあり令抄に大稅謂正稅也本顯也每國置本顯券班給作公田輩十束加三把利返納充公用雜稻在此中每國有式數とあり或る數の稻を國每に貯へ置きこれを民に貸し其利を收めて元は動かさぬを云　○放生、天武紀五年に注す　○爲妃、卷六和銅六年十一月乙丑貶石川紀二嬪號不得稱嬪とあるに據れば妃は嬪の誤なるべし　○王親、皇親と云に同じ　○五位已上、直冠四階に當れるを追書せるなり

（九月）大神大網造、出自詳ならざれど大神氏の族ならむ大網は攝津國住吉郡大依羅神社に由ありて聞ゆ百足は紀略石足に作る　○白鷩、抄龜貝部に鼈本草云鼈（唐韻云并列反魚鼈字或作鷩、加波可女）箋注に今俗呼壽都保無　○白鹿、治部式に白鹿仁獸也色如霜雪とあり　○勤大壹、大寶元年の制の正六位に當る　○丸部臣君手、原本マロへと訓すれどワニベの誤ならむ天武紀に和珥部臣君手とあり原本手を午に作る金本並に天武紀及大寶元年紀七月壬辰の條に據て改む　○一吉飡、新羅官十七等の七位

○九月（甲午朔）丙申（三）、京人大神大網造百足家生嘉稻、近江國獻白鷩、丹波國獻白鹿、○壬寅（九）、賜勤大壹丸部臣君手直廣壹、壬申之功臣也、○冬十月（甲子朔）壬午（十九）、陸奥蝦夷貢方物、○辛卯（廿八）、新羅使一吉飡金弼德、副使奈麻金任想等來朝、○十一月（癸巳朔）癸卯（十一）、遣務廣肆坂本朝臣鹿田、進大壹大倭忌寸五百足於陸路、務廣肆土師宿禰大麻呂、進廣參習宜連諸國於海路、以迎新羅使于筑紫、○十二月（癸亥朔）庚辰（十八）、賜越後蝦狄物、各有差、○閏十二月（癸巳朔）己亥（七）、播磨、備前、備中、周防、淡路、阿波、讃岐、伊豫等國飢、賑給之、又勿收負稅、○庚申（廿八）、禁正月往來行拜賀之禮、如有違犯者、依淨御原朝庭（天武）制、決罰之、但聽拜祖兄及氏上者、

○奈麻、同上の十一等　○務廣肆、大寶の制の從七位下　○坂本朝臣鹿田、木角宿禰の後（紀）原本鹿を塵に作る閣本曾本淀本に據て改む　○進大壹、大寶の制の少初位上　○大倭忌寸、天武紀十三年九月連を、同十四年六月忌寸を賜ふ　○土師宿禰、野見宿禰の後（垂仁紀）天武紀十二年十二月宿禰を賜ふ　○習宜連、養老三年五月癸卯中臣習宜連笠麻呂等四人賜朝臣姓錄右京神別中臣習宜朝臣見ゆ習宜の訓種々の說あれど姓氏錄考證に大和國菅原鄉の地名なればスゲと訓べしと云り金本習を摺に作る　○賑給、米鹽を給して飢民を賑恤するを云　○負稅、負は受貸不償也とあり人民に貸與せる稅の未だ返納せざるを云　○禁正月往來云々、天武紀八年正月戊子勅制に凡當正月之節諸王諸臣及百寮者除兄姉以上親及己氏長以外莫拜焉其諸王者雖非王姓者莫拜凡諸臣亦莫拜卑母云々若有犯者隨事罪之と、紀略に禁の下止の字あり　○祖兄、紀略に兄を父に作る　○氏上、通證に後世藤原長者源氏長者卽此とあり氏族制を廢せられても尙其遺風を捨てず一氏の本宗にして官職も亦貴きものを氏上として重むぜられしなり

【二年】（正月）大極殿、皇極紀四年に見ゆ抄居處部に大極殿朝堂院正殿名也、拾芥抄に八省院是也とあり
○一吉飡、原本吉を金に作り飡の下に食の字あり吉は紀略及上文に據て改め食は閣本曾本淀本等に據て削る
○金弼德、原本德の字なし金本閣本曾本本等に據て補ふ
○牛黃、廐牧令に見ゆ本草和名下に牛黃生黃蘇敬注云作牛咀相而得者也散黃粒如麻豆漫黃如雞子黃闇黃塊形有大小已上四種出蘇敬注とあり
○馬手、原本馬牛に作る金本閣本曾本に據て改む
○大內山陵、諸陵式に檜隈大內陵飛鳥淨御原御宇天武天皇在大和國高市

（戊戌）二年春正月壬戌朔、天皇御大極殿受朝、文武百寮及新羅朝貢使拜賀、其儀如常、○甲子、新羅使一吉飡金弼德等貢調物、○己巳、土左國獻牛黃、○戊寅、供新羅貢物于諸社、○庚辰、遣直廣參土師宿禰馬手獻新羅貢物于大內山陵、○二月壬辰朔甲午、金弼德等還蕃、○丙申、車駕幸宇智郡、○癸卯、賜百官職事已上及才伎長上祿各有差、○丙午、賜武官祿各有差、○三月乙丑、因幡國獻銅鑛、○丁卯、越後國言疫、給藥救之、○己巳、詔、筑前國宗形、出雲國意宇二郡司、宜聽連任三等已上親、○庚午、任諸國郡司、因詔、諸國司等銓擬郡司、勿有偏黨、郡司居任、必須如法、自今以後不違越、○辛巳、禁山背國賀茂祭日會衆騎射、○壬午、詔以惠施法師爲僧正、智淵法師爲少僧都、善往法師爲律師、○夏四月壬辰、

近江紀伊二國疫、給醫藥療之、侏儒備前國人秦大兄、賜姓香登臣、○壬寅、遣務廣貳文忌寸博士等八人于南嶋覓國、因給戎器、○戊午、奉馬于芳野水分峯神、祈雨也、○五月庚申朔、諸國旱、因奉幣帛于諸社、○甲子、遣使于京畿、祈雨於名山大川、○乙亥、遣使于諸國巡監田疇、○甲申、令大宰府繕治大野基肄鞠智三城、○六月丙申、近江國獻白樊石、○壬寅、越後國蝦狄獻方物、○丙辰、奉馬于諸社祈雨也、○丁巳、直廣參田中朝臣足麿卒、詔贈直廣壹、以壬申年功也、

郡陵墓要覽に高市郡高市村大字野口字王墓にありと云

(三月)宇智郡、考證に郡疑當作野と云萬葉一に玉刻内大野云々仙覺鈔に内野大和國宇知郡野也大和志に宇智郡内大野大野村とあり吉野川の北岸なり

○職事、公式令に凡内外諸司有執掌者爲職事官无執掌者爲散官とあり散官に對する稱なり ○才伎長上、釋紀に才伎者錦織衣縫之類と見え技術官なり、長上は分番せず日々出勤して職に從ふものを云 ○武官、公式令に五衛府軍團及諸帶仗者爲武義解に謂馬寮兵庫等是也とあり

(三月)銅鑛、字書に鑛は金璞也同礦とあり銅鑛は銅の鑛山より掘出したるまゝなるを云 ○給藥、類史に賜醫藥の三字に作る ○筑前國宗形云々、神郡の郡司任用を特定せられしなり宗形郡には宗像神社意宇郡には熊野神社ありて之を神郡と定められたり故に此詔ありしなり、式部式上に凡郡司者一郡不得併用同姓若他姓中无人可用者雖同姓除同門外聽任神郡(中略)者不在制限とあるは此制に據れり三等以上親とは儀制令に凡五等親者父母養父母夫子爲一等(中略)曾祖父母伯叔婦夫姪從父兄弟姉妹異父兄弟姉妹夫之祖父母夫之伯叔姑姪婦繼父同居夫前妻妾子爲三等と云 ○銓擬郡司云々、選叙令に凡郡司取性識清廉堪時務者爲大領少領强幹聰敏工書計者爲主政主帳とあり之に據るべき由を嚴命せられしなり ○山背國、山背を山城と改めしは延暦十三年十一月なり ○賀茂祭日、神名式に山城國愛宕郡賀茂別雷神社(名神大月次相嘗新嘗)同賀茂御祖神社二座(並名神大月次相嘗新嘗)とあり祭日は四月中酉日なり ○會衆騎射、原本會を命に作る類史及紀略に據て改む大寶二年四月亦此禁あり ○壬午、廿二日に當れり、僧綱年表には十八日とす ○惠施、僧綱補任に唐學生小豆氏とあり ○僧正、並に僧都律師を任ずることと天武紀十二年三月に見ゆ ○智淵、同書に不經律師惠輪在俗子 ○善往、原本往を徃に作る金本閣本淀本に據て改む同書に元興寺律師始也とあり天武紀十二年に既に律師あれば始とするは非なり

(四月)侏儒、神武紀に見ゆ ○秦大兄、秦氏は錄山城諸蕃に秦始皇帝の後と見ゆ ○香登臣、姓氏錄に見えず、抄國郡部備前國和氣郡香止(加々止)郷あり之に因れるならむ ○文忌寸博士、文忌寸は王仁の後、博士は持統九年三月紀に博勢とあり ○南嶋、多褹夜久菴美度感等の諸嶋を云 ○芳野水分峯神、神名式に大和國吉野郡吉野水分神社(大月次新嘗)とあり今吉野郡吉野村吉野山上字丹治なる水分山に在り水分神は記に天之水分神國之水分神と見え水戸神の子なり

(五月)田疇、字書に疇は耕治之田也とあり ○大宰府、原本大を太に作る金本閣本會本淀本に據て改む ○大野、天智紀四年八月に見ゆ筑後國大

野郡にあり ○基肄、肥前國基肄郡にあり今佐賀縣三養基郡基山村の邊なり ○鞠智、肥後國菊池郡にあり城址は詳かならざれど今同郡河原村大字木庭の城山是なりと云 〔六月〕白礬石、抄天地部山石類に礬石蘇敬曰礬石、礬音繁此間云問尺、有青礬白礬黃礬絳礬黑礬五種、箋注に按白礬今俗呼明礬者とあり ○奉馬、延喜式祈雨祭に丹生川上貴布禰社各加黑毛馬一疋、其霖雨不止祭馬用白毛とあり ○田中朝臣足麻呂、田中朝臣は天武紀十三年十一月紀に見ゆ錄に京皇別に武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり

〔七月〕公私奴婢、吏學指南に古者以罪沒爲奴婢、故有官私奴婢之限とあり官衙に使役せらるゝものと個人の所有となれる者とあり ○亡匿、原本已匿に作る淀本に據て改む ○容止、僧尼令に知情容止とありゆるして隱匿し置くを云 ○博戲、捕亡令義解に博戲者雙六樗蒱之屬とあり ○與居同罪、考證云居字疑衍 ○白鑞、抄寶貨部に錫鈹名苑云一名白鑞(和名之路奈麻利)、箋注に純錫謂之砂利、錫雜鉛謂之領受錫一斤砂利十兩煉成者謂之志呂米、皇國古籍所云白鑞即志呂米也とあり ○高橋朝臣、錄左京皇別に阿倍朝臣同祖大稻輿命之後也とあり ○石川朝臣小老、大寶二年十一月紀に子老に作る

○秋七月己未朔、日有蝕之。○乙丑、以公私奴婢亡匿民間、或有容止不肯顯告、於是始制笞法、令償其功、事在別式。又禁博戲遊手之徒、其居停主人、亦與居同罪。○乙亥、下野備前二國獻赤烏、伊豫國獻白鑞。○癸未、以直廣肆高橋朝臣嶋麻呂爲伊勢守、直廣肆石川朝臣小老爲美濃守。○乙酉、伊豫國獻鑞鑛。○八月戊子朔、茨田足嶋賜姓連。○丙午、詔曰、藤原朝臣(御足)所賜之姓、宜令其子不比等承之、但意美麻呂等者、緣供神事、宜復舊姓焉。○丁未、修理高安城。(天智天皇五年築城也)○癸丑、定朝儀之禮、語具別式。○九月戊午朔、以无冠麻續豐足爲氏上、无冠大贄爲助、進廣肆服部連佐射爲氏上、无冠功子爲助。○甲子、下總國大風、壞百姓廬舍。○丁卯、遣當耆皇女侍于伊勢齋宮。○壬午、周芳國獻銅鑛。○乙酉、令近江國獻金青、伊勢國朱沙雄黃、常陸國備前伊豫日向四國朱沙、安藝長

門二國金青緑青、豐後國眞朱、○冬十月庚寅、以藥師寺搆作略了、詔衆僧令住其寺、○己酉、陸奥蝦夷獻方物、○十一月丁巳朔、日有蝕之、○辛酉、伊勢國獻白鑞、○癸亥、遣使諸國大祓、○己卯、大嘗、直廣肆榎井朝臣倭麻呂竪大楯、直廣肆大伴宿禰手拍竪楯桙、賜神祇官人及供事尾張美濃二國郡司百姓等物各有差、○乙酉、下總國獻牛黃、○十二月辛卯、令對馬嶋冶金鑛、○丁未、令越後國修理石船柵、○乙卯、遷多氣大神宮寺于度合郡、○丙辰、贈勤大貳山代小田直廣肆、

○鑞鑛、鑞の鑛石なり　（八月）茨田足嶋、錄右京皇別に茨田連多朝臣同祖神八井耳命男彦八井耳命之後也とあり　○意美麻呂等者云々、持統紀に葛原朝臣麻呂と見え意美麻呂等も藤原氏を稱せしを舊姓中臣氏に復せしめられしものなり　○高安城、河内國高安（今中河内）郡にあり天智紀六年に注す注の五は六の誤なるべし　○朝儀之禮、朝廷にて行はるゝ恒例臨時の儀式なり

（九月）无冠、无冠は無位と云に同じ　○麻續、考證に續下疑脱二連字一とあり延暦十年二月紀に麻續連廣河あり錄右京神別神麻續連天物知命之後也とあり同族なるべし狩谷氏云續即績字古鈔本作レ續と云　○爲助、氏助は此に始て見ゆ　○服部連、兩氏あり錄大和神別服部連天御中主命十一世孫天御桙命之後也、攝津神別服部連熯之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也とあり何れなるか明ならず　○廬舍、原本廬を庐に作る曾本淀本に據て改む考證云庐廬之俗省　○當耆皇女、天武天皇々女、天武紀には託基又は多紀に作れり　○周芳、元年十二月紀に周防に作る　○金青、抄調度部圖繪具に本草稽疑云金青者空青之最上也とあり　○朱沙、同部に本草云朱砂最上者謂二之光明沙一箋注に證類本草玉石部上品丹砂條引二陶隱居一云即今朱砂也とあり　○雄黃、本草和名に、一名黃食石一名石黃雄黃者地精也金之精也和名岐爾出二伊勢國一とあり　○常陸國、國字疑くは衍　○緑青、抄調度部圖繪具に本草云緑青一名碧青（緑青俗云二祿省一）とあり　○眞朱、本草和名に丹砂一名眞朱、抄調度部圖繪具に考聲切韻云丹砂似二朱砂一而不二鮮明一者也とあり　（十月）藥師寺、大和國添下郡にあり天武紀九年十一月に注す　（十一月）大祓、大嘗祭を行はせ給はむが爲の大祓なり　○大嘗、神祇令に凡大嘗者每世一年國司行事踐祚大嘗祭式に凡踐祚大嘗七月以前即レ位者當年行レ事八月以後者明年行レ事とあり　○榎井朝臣、物部氏の同族　○竪大楯、大嘗祭式に石上榎井二氏各二人皆朝服率二內物部四十人一立二大嘗宮南北門神楯戟一訖即分就二左右楯下胡床一伴佐伯各二人分就二南門左右外掖胡床一待レ時開門と見ゆ　○大伴宿禰、高皇產靈命五世孫天押日命之後（錄左京神別）　○桙、狩谷氏云桙即鉾字蓋古用レ木造レ之所レ謂杠谷樹八尋矛之類是也故變レ金从レ木耳と　○尾張美濃二國、尾張は悠紀美濃は主基なり　（十二月）冶金鑛、大寶元年三月甲午對馬貢レ金建レ元爲二大寶元年一と見ゆ　○石船柵、越後國石船郡にあり孝德紀四年に注す　○多氣大神宮寺、伊勢國多氣郡にあり原本大を太に作る金本閣本及紀略に據て改む寺は神宮文庫本に據て補ふ　○度合郡、閣本及類史合を會に作る　○贈、曾本賜に作る　○山代小田、天武紀元年に山背部小田に作る姓氏錄に山代忌寸山代直ありその何れなるか詳ならず

三年春正月壬午、京職言、林坊新羅女牟久賣、一產二男二女、賜絁五疋、綿五屯、布十端、稻五百束、乳母一人、○癸未、詔授內藥官桑原加都直廣肆、賜姓連、賞勤公也、是日、幸難波宮、○甲申、淨廣參坂合部女王卒、○二月丁未、車駕至自難波宮、○戊申、詔免從駕諸國騎兵等今年調役、○三月己未、下野國獻雌黃、○甲子、河內國獻白鳩、詔免錦部郡一年租役、又獲瑞人犬養廣麻呂戶給復三年、又赦畿內徒罪已下、○壬午、遣巡察使于畿內、撿察非違、○夏四月己酉、越後蝦夷一百六人賜爵有差、○五月辛酉、詔曰、圖勳之義、聳自前修、創功之賞、歷代斯重、蓋所以昭壯士之節、著不朽之名者也、汝坂上忌寸老、壬申年軍役、不顧一生、赴社稷之急、出於萬死、冒國家之難、而未加顯秩、奄爾隕殂、思寵往魂、用慰冥路、宜贈直廣壹、兼復賜物、○丁丑、役君小角流于伊豆嶋、初小角住於葛木山、以咒術稱、外從五位下韓國連廣足師焉、後害其能、讒以妖惑、故配遠處、世相傳云、小角能役使鬼神、汲水採薪、若不用命、卽以咒縛之、○六月戊戌、施山田寺封三百戶、限卅年也、○丙午、淨廣參日向王卒、遣使弔賻、

【三年】林坊、京師は左右兩京に別ち之を北より南へ一條より九條に別ち一條毎に四坊あり更に之を保に分てり坊は町と云に同じ
○絁、賦役令義解に細爲絹麁爲絁
○五疋、賦役令に疋は長五丈一尺廣二尺二寸
○綿五屯、同義解に綿二斤曰屯
○布十端、同義解に布五丈二尺曰端
○稻五百束、束は十把にて一束より米五升を得
○桑原加都、天武紀朱鳥元年に侍醫桑原村主訶都授直廣肆因以賜姓曰連とあり重複す一は誤なるべし
○難波宮、攝津國東成郡にあり天武紀十二年十二月に出づ
〔三月〕雌黃、抄調度部圖繪具に兼名苑云雌黃一名金液(雌黃俗云之王)山有金其精熏則生雌黃耳とあり
○白鳩、治部式に中瑞とす
○錦部郡、河內國の郡名、今南河內郡に入る同郡鳩原村(今川上村大字)

○丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第會喪、○庚戌、淨大肆春日王卒、遣使弔賻、

○秋七月(癸丑朔)辛未、多褹、夜久、菴美、度感等人從朝宰而來貢方物、授位賜物各有差、其度感嶋通中國於是始矣、○癸酉、淨廣貳弓削皇子薨、遣淨廣肆大石王、直廣參路眞人大人等監護喪事、皇子天武天皇之第六皇子也、○八月(壬午朔)己丑、奉南嶋獻物于伊勢大神宮及諸社、○壬辰、賜百官人祿各有差、○壬寅、伊豫國獻白燕、○九月(壬子朔)丙寅、修理高安城、○辛未、詔令正大貳已下無位已上者、人別備弓矢甲桙及兵馬各有差、又勅京畿、同亦儲之、○丙子、新田部皇女薨、勅王臣百官人等會葬、天智天皇之

白鳩を出し、處と云 ○巡察使、持統紀八年七月に始て見ゆ (四月)蝦夷、紀略夷を狄に作る (五月)圖勳、勳功を計議する云 ○前修、文選離騷に見ゆ前代と云に同じ ○不朽、考證に朽即朽字古鈔本諸書多用之と云 ○坂上忌寸老、天武紀元年に坂上直に作る ○復賜物、紀略賜を賻に作る ○役君、靈異記に役優婆塞者賀茂役公氏今高賀茂朝臣者也攷證に今昔物語云江優婆塞者賀茂江氏袖中抄亦云俗姓賀茂江公按續日本紀又云養老三年七月上賀茂役首石穗等賜賀茂役君姓同姓也(節略)とあり ○伊豆嶋、扶桑略記水鏡元亨釋書並に伊豆大嶋に流すとあり ○葛木山、大和志に葛城山連亙葛上忍海葛下三郡西隷河州第一峯曰高天原又呼金剛山とあり ○外從五位下、此時未だ此位なし追書せしなり ○配遠處、刑部式に伊豆爲遠流とあり ○世相傳云小角云々、此事靈異記今昔物語扶桑略記元亨釋書等に載す ○以咒縛之、類史咒の下に術の字あり (六月)山田寺、大和志に在十市郡山田村一名華嚴寺孝德天皇五年蘇我倉山田大臣建とあり今磯城郡安倍村大字山田に址あり ○日向王、詳ならず○遣使弔賻、喪葬令に五位以上身喪並奏聞遣使弔とあり ○春日王、木野戸翁云按皇胤紹運錄有施基皇子之子春日王正四位下蓋此

(七月)多褹、大隅國熊毛郡種子嶋なり原本褹を禰に作る及天平五年六月紀に據て改む ○夜久、大隅國屋久嶋なり推古紀に掖玖とあり ○菴美、大隅國奄美大島なり齊明紀に海見島に作る ○度感、南嶋志に德嶋舊作度九島國史所謂度感島在永良部北而東北接大海とあり今大隅國大島郡德之島なり又一説には寶七島を云ふ ○朝宰、二年四月遣務廣貳文忌寸博士等八人于南嶋覓國とあり文忌寸

皇女也、○冬十月甲午、詔赦天下、有罪者、但十惡強竊二盜、不在赦限、爲欲營造越智、山科二山陵也、○辛丑、遣淨廣肆衣縫王、直大壹當麻眞人國見、直廣參土師宿禰根麻呂、直大肆田中朝臣法麻呂、判官四人、主典二人、大工二人於越智山陵、淨廣肆大石王、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參土師宿禰馬手、直廣肆小治田朝臣當麻、判官四人、主典二人、大工二人於山科山陵、並分功修造焉、○戊申、遣巡察使于諸國、檢察非違、○十一月辛亥朔、日有蝕之、○甲寅、文忌寸博士、刑部眞木等、自南嶋至、進位各有差、○己卯、施義淵法師稻一万束、襃學行也、○十二月癸未、淨廣貳大江皇女薨、令王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、○甲申、令大宰府修三野、稻積二城、○庚子、始置鑄錢司、以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官、

等を朝宰と記せしなり　○中國、我國を中國と書けること始て見ゆ　○弓削皇子、天武天皇々子　(八月)奉南嶋、原本奉の下に于の字あり紀略に據て削る　○大神宮、原本大を太に作る謄本會本淀本に據て改む下同じ　(九月)人別備弓矢云々、天武紀十三年閏四月詔にも文武官諸人務習用兵及乘馬則馬兵幷當身裝束之物務具儲足云々とあり　○天智天皇之皇女、天智紀七年に阿倍倉梯麻呂大臣女橘娘新田部皇女を生むとあり第六皇女なり拾遺は此上に皇女者の三字を補へり　(十月)十惡、謀反謀大逆謀叛惡逆不道大不敬不孝不睦不義內亂を云　(十一月)刑部眞木、原本刑部を利鄕に作る四年六月紀に據て改む　○義淵、元亨釋書に傳あり行基道慈玄昉良辨等の師なり　○襃、紀略に褒に作る集韻に襃同褒とあり　(十二月)大江皇女、天智紀七年に忍海造小龍女色夫古娘の女とあり　○三野、日向國兒湯郡三納鄕あり此の地か　○稻積、大隅國桑原郡に稻積鄕あり今始良郡に屬すれど詳かならず　○始置鑄錢司、持統紀八年三月黄書本實拜鑄錢司とあれば此に始置とあるはいぶかし內藤廣前の說に持統紀の鑄錢司は臨時に置かれしことにて事竣りて罷められしならむ既に罷めて復置かれしが故に始置と書けるなりと云

【四年】新田部皇子、天武天皇々子
○多治比眞人嶋、天平寶字四年正月紀に志麻に作れり
○靈壽杖、持統紀十年に賜右大臣丹比眞人輿杖以哀致事とあれば重出せしならむ靈壽杖は漢書孔光傳注に靈壽木名似竹有枝節長不過八九尺圍三四寸自然合杖制不須削治也とあり
○優高年、原本優を僵に作る紀略に據て改む
（二月）安房郡大少領云々、養老二年五月紀に割上總國四郡置安房國とあり當時は上總に屬す安房郡は安房神社の神郡なれば郡司の任用を特別にしたるなり（二年二月己巳條參照）
（三月）道照、考證に狩谷氏曰一本及日本紀三代格靈異記扶桑略記帝王編年記拾遺往生傳皆照作昭可從此及三代實錄今昔物語宋史佛祖統記作照誤とあり
○卽弔、紀略には卽の字なし恐くは衍
○丹比郡、淀本曾本比を北に作る民部式にも丹比

四年春正月丁巳、授新田部皇子淨廣貳。○癸亥、有詔、賜左大臣多治比眞人嶋靈壽杖及輿、優高年也。○二月乙酉、上總國司請安房郡大少領連任父子兄弟、許之。○戊子、令丹波國獻錫。○己亥、令越後佐渡二國修營石船柵。○壬寅、遣巡察使于東山道、撿察非違。○丁未、累勅王臣京畿、令備戎具。○三月己未、道照和尚物化。天皇甚悼惜之、遣使弔賻之。和尚河內國丹比郡人也。俗姓船連。父惠釋少錦下。和尚戒行不缺、尤尚忍行。嘗弟子欲究其性、竊穿便器、漏汙被褥。和尚乃微笑曰、放蕩小子汙人之床。竟無復一言焉。初孝德天皇白雉四年、隨使入唐。適遇玄奘三藏、師受業焉。三藏特愛、令住同房。謂曰、吾昔往西域、在路飢乏、無村可乞。忽有一沙門、手持梨子、與吾食之。吾自啖後、氣力日健。今汝是持梨沙門也。又謂曰、經論深妙、不能究竟。不如學禪流傳東土。和尚奉教、始習禪定。所悟稍多。於後隨使歸朝。臨訣、三藏以所持舍利經論、咸授和尚而曰、人能弘道、今以斯文附屬。又授一鐺子曰、吾從西域自所將來、煎物養病、無不神驗。於是和尚拜謝、啼泣而辭。及至登州、使人多病。和尚

出鐺子、暖水煮粥、遍與病徒、當日卽差、既解纜、順風而去、比至海中、船漂蕩不進者七日七夜、諸人怪曰、風勢快好、計日應到本國、船不肯行、計必有意、卜人曰、龍王欲得鐺子、和上聞之曰、鐺子此是三藏之所施者也、龍王何敢索之、諸人皆曰、今惜鐺子不與、恐合船爲魚食、因取鐺子抛入海中、登時船進還歸本朝、於元興寺東南隅、別建禪院而住焉、于時天下行業之徒、從和尙學禪焉、於後周遊天下、路傍穿井、諸津濟處、儲船造橋、乃山背國宇治橋、和尙之所創造者也、和尙周遊凡十有餘載、有勅請還、還住禪院、坐禪如故、或三日一起、或七日一起、倏忽香氣從房出、諸弟子驚怪、就而謁和尙、端坐繩床、无有氣息、時年七十有二、弟子等奉遺教、火葬於粟原、天下火葬從此而始也、世傳云、火葬畢、親族與弟子相爭、欲取和上骨斂之、飄風忽起、吹颺灰骨、終不知其處、時人異焉、後遷都平城也、和尙弟及弟子等奏聞、徙建禪院於新京、今平城右京禪院是也、此院多有經論、書迹楷好、並不錯誤、皆和上之所將來者也、○甲子、詔諸王臣讀習令文、又撰成律條、○丙寅、令諸國定牧地放牛馬、○夏四月

郡とあり丹南丹北の二郡としたるは遙に後の事なり
○船連、欽明紀十四年に王辰爾船連之先也とあり亦姓氏錄に見ゆ
○惠釋、皇極紀四年に見えし船史惠尺なり
○被得、夜着なり原本得を帳に作る閣本淀本曾本に據て改む
○遣使入唐、宋史日本傳に孝德天皇白雉四年律師道照求法至中國從三藏玄奘受經律論とあり
○玄奘、慈恩寺三藏傳及續高僧傳に詳なり
○飢乏、原本乏を之に作る閣本に據て改む
○禪定、大乘義章に禪此翻名思惟修習一心住一緣離於散動故名爲定とあり六波羅密の一にて梵語禪那の略、靜慮の意にて定は其譯名梵漢並擧げたるなり
○而曰、而の字衍ならむ
○人能弘道、論語衞靈公篇に出づ
○鐺子、抄器皿部に鐺唐韻云鐺（音楚庚反字亦作鎗阿之奈倍）小鼎也とあり
○登州、河南道東牟郡に

屬す
○和上、上文には和尙とあり
○索之、金本閣本曾本等之の字なし
○合船、原本合を含に作る閣イ本淀本に據て改む
○登時、卽時に同じ
○元興寺、大和國添上郡にあり推古紀に出づ
○宇治橋、拾芥抄大橋部に山崎勢多宇治、延喜雜式に山城國宇治橋敷板近江國十枚丹波國八枚以正税充料云々とあり
○和尙之所創造、狩谷氏云按宇治橋道登所造常光寺斷碑靈異記可證予作靈異記考證辨之此云和尙創造者誤
○時年、年の字は紀略に據て補ふ
○奉遣敎、敎の字は閣本淀本及紀略に據て補ふ
○粟原、原本粟を栗に作る閣一本に據て改む粟原は大和國十市郡にあり大和志に粟原廢寺と見ゆ今磯城郡多武峯村の大字となる
○般、淀本曾本歛に作る般は歛の俗字
○和尙、和の字は閣本曾本及類史に據て補ふ

癸未、淨廣肆明日香皇女薨、遣使弔賻之、天智天皇之皇女也、○五月辛酉、以直廣肆佐伯宿禰麻呂、爲遣新羅大使、勤大肆佐味朝臣賀佐麻呂、爲小使、大少位各一人、大少史各一人、○六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、衣評督衣君縣、助督衣君弖自美、又肝衝難波、從肥人等、持兵剽劫覓國使刑部眞木等、於是勅竺志惣領、准犯決罸、○甲午、勅淨大參刑部親王、直廣壹藤原朝臣不比等、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參下毛野朝臣古麻呂、直廣肆伊岐連博得、直廣肆伊余部連馬養、勤大壹薩弘恪、勤廣參土部宿禰甥、勤大肆坂合部宿禰唐、務大壹白猪史骨、追大壹黃文連備、田邊史百枝、道君首名、狹井宿禰尺麻呂、追大壹鍜造大角、進大壹額田部連林、進大貳田邊史首名、山口伊美伎大麻呂、直廣肆調伊美伎老人等、撰定律令、賜祿各有差、○八月戊申、宇尼備、賀久山、成會山陵、及吉野宮邊樹木無故彫枯、○乙卯、長門國獻白龜、○乙丑、勅僧通德、惠俊、並還俗、代度各一人、賜通德姓陽侯史、名久爾曾、授勤廣肆、賜惠俊姓吉、名宜、授務廣肆、爲用其藝也、○丁卯、赦天下、但十惡盜人、不在赦限、

○徙建禪院、三代實錄元慶元年十二月紀に和銅四年八月移二建平城京一と見ゆ
○多有經論、玄蕃式に凡禪院寺經論三年一度曝涼者寮僧綱三綱檀越等相共撿挍と見ゆ
○揩好、揩は字書に模也式也法也とあり書體の正しく立派なるを云
○並不錯誤、並の字は類史に據て補ふ
○牧地、牧場なり諸國の牧名は馬寮式に見ゆ
（四月）明日香皇女、天武紀に飛鳥皇女に作る
○天智天皇之皇女、之皇の二字は一本に據て補ふ
○大少位、考證云ノ寶元年正月紀有二遣唐人位及中位少位一瑞氏曰大少位郎判官位疑術字之誤と云
（六月）薩ア、薩摩なり
○比賣久僧波豆、詳ならず
○衣評督、衣は薩摩國頴娃（エ）郡なり評督は郡の大領次の助督は少領なり考證に按韓方言謂郡爲評梁書新羅傳其邑在內曰啄評在外曰邑勒又天平寶字八年七月紀有二氷高評一蓋此間因用レ之評

高年、賜物、又依巡察使奏狀、諸國司等、隨其治能、進階賜封、各有差、阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行、並授正廣參、因幡守勤大壹船連秦勝封卅戶、遠江守勤廣壹漆部造道麻呂廿戶、並褒善政也、○冬十月壬子、施京畿、年九十已上、僧尼等絁綿布、始置製衣冠司、○己未、以直大壹石上朝臣麻呂為筑紫總領、直廣參小野朝臣毛野為大貳、直廣參波多朝臣牟後閇為周防總領、直廣參上野朝臣小足為吉備總領、直廣參百濟王遠寶為常陸守、○癸亥、直廣肆佐伯宿禰麻呂等至自新羅、獻孔雀及珍物、○庚午、遣使于周防國造舶、○十一月壬午、新羅使薩飡金所毛來赴母王之喪、○乙未、天下盜賊往々而在、遣使追捕、○壬寅、大倭國葛上郡鴨君粳賣一產二男一女、賜絁四疋、綿四屯、布八端、稻四百束、乳母一人、○十二月庚午、大倭國疫、賜醫藥救之、

續日本紀卷第一

督亦見神護景雲元年三月紀及下野國那須國造碑皇大神宮儀式帳又案儀式帳云難波朝廷天下立評時云々新家連阿久良督領礒連牟良助督仕奉督領助督亦謂大領少領也とあり
○衣君、詳ならず
○肝衡難波、肝衡は氏難波は名なるべし
○從肥人等、詳ならず矢野直道氏は從肥一傍訓須比據此肝衡以下蓋爲地名歟といひ考證に從肥人謂從肥前肥後之人也とあれど尚よく考ふべし　○笠志惣領、十月己未の條に筑紫惣領と見ゆ考證云笠俗竺字見龍龕手鑑竺志卽筑紫とあり惣領は伊豫總領周芳總領などに同じく當時大國の國司數國を兼知せしを云　○伊岐連博得、大寶三年二月紀に伊吉連博得に作る類史は岐を支に得を德に作る　○勤大壹薩弘恪、以下十四字類史に據て補ふ　○白猪史骨、原本史を大に金本閣本火に作る類史に據て改む賜姓の事欽明紀卅年に見ゆ　○道君首名、君の字は類史に據て補ふ大彥命の後なり（錄右京皇別）　○狹井宿禰、原本狹を挾に作る金本閣本淀本に據て改む　○鍛造大角、神龜五年紀に鍛冶造大隅賜守部連姓とあり考證に案鍛造和銅四年四月紀作鍛師連曰連曰造未知孰是鍛當作鍛輿鍛同新撰字鏡鍛加奴知是也と云り　○山口伊美伎、大日本史氏族志に山口氏出自爾波伎有朝臣姓有宿禰姓有忌寸姓云々と云　（八月）八月、八の上秋の字あるべし　○宇尼備、畝傍山なり　○賀久山、香山なりこゝに御陵あることは詳ならず　○成會山陵、諸陵式に成相墓押坂彥人大兄皇子在大和國廣瀨郡大和志に在平尾村稱王子冢とあれど今其趾なし　○吉野宮、大和志に吉野郡に行宮五所ありと云吉野宮の事は雄略紀に注せり　○彫枯、考證に彫卽凋字五經文字云凋論語及釋文皆作彫とあり　○陽侯史、錄左京諸蕃楊侯忌寸出自隋煬帝之後達率楊侯阿子王也とあり　○賜惠俊、淀本曾本賜の字なし　○姓吉、錄左京皇別吉田連觀松彥香殖稻天皇々子天帶彥國押人命四世孫彥國葺命之後也昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彥天皇御代任那國奏曰請將軍令治此地卽爲貴國之部也天皇大悅勅群卿令奏應遣之人卿等奏曰彥國葺命孫鹽垂津彥命天皇令鹽垂津彥命遣奉勅而鎭守彼俗稱宰爲吉故謂其苗裔之姓爲吉氏男從五位下知須等家居奈良京田村里仍天璽押開豐櫻彥天皇神龜元年賜吉田連姓　○諸國司等、原本諸の上詔の字あり金本閣本及紀略に據て削る　○隨其治能、治は紀略に據て補ふ諸本詔に作るは治の譌なり　○因幡守、考證に因上疑脫賜字　（十月）製衣冠司、原本製を制に作る金本淀本及紀略に據て改む　○波多朝臣牟後閇、持統紀三年四月に羽田朝臣齊に作り注に齊此云牟五閇とあり　○上野朝臣、上の下疑くは毛の字を脫す小足は下文男足に作る　○孔雀、推古紀六年八月新羅貢孔雀一隻と見ゆ　（十一月）薩食、新羅の官名、十七等の第八なる沙飡なり　○赴告王之喪、字書に赴は告喪也とあり　○追捕、淀本曾本逐捕に作る　（十二月）卷第一、金本閣本卷の字なし原本一の下に終の字あり金本閣本に據て削る下同じ

【大寶元年】
○受朝、略記朝の下拜字あり
○樹烏形幢、類史烏を鳥に作る宮衛令に凡元日朝日若有二蕃集一及蕃客宴會辭見皆立二儀仗一また兵庫式に凡元日及即位構二建寶幢一者云々從二殿中階一南去十五丈四尺建二烏像幢一左日像幢次朱雀旗次青龍旗右月像幢次白虎旗次玄武旗とあり、烏形幢は金銅の烏を竿に居ゑ其嘴りに總珞を爲けり幢の柄には黑漆塗にて五彩の雲を畫けり、日像幢には金塗の丸板に三足の烏を畫き月像幢は銀塗の丸板に銀の兎蟾蜍と月桂樹と瑠璃色の白きを畫く幢の柄に黑塗丸輪九を以て柄を貫く幢と

續日本紀卷第二

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起大寶元年正月盡二年十二月

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇

大寶元年(辛丑)春正月乙亥朔、天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢、左日像青龍朱雀幡、右月像玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀、於是備矣、○戊寅、天皇御大安殿受祥瑞、如告朔儀、○戊子、新羅大使薩飡金所毛卒、賻絁一百五十疋、綿九百三十二斤、布一百段、小使級飡金順慶及水手已上、賜祿有差、○己丑、大納言正廣參大伴宿禰御行薨、帝甚悼惜之、遣直廣肆榎井朝臣倭麻呂等監護喪事、遣直廣壹藤原朝臣不比等等、就第宣詔、贈正廣貳右大臣、御行、難破朝右大臣大紫長德之子也、○庚寅、宴皇親及百寮於朝堂、直廣貳已上者、特賜御器膳并衣裳、極樂而罷、○壬辰、廢大射、以贈右大臣喪故也、○丁酉、以守民部尙

幡との區別は幢は釋名に童也其貌童々然也とあり童々は盛なる貌を云說文には幢字なく古へ橦字を借用ひたり後漢書馬融傳注に幢者旗之竿也とあり倭名抄には幢をハタホコと訓ず幡は同書征戰具に考工記云幡（音翻波多）旌旗之惣名也とあり釋名に幡幡也其貌幡々然也とあり幡々は毛詩巷伯傳に猶翩々也と見え幢幡共に其形狀より名づけたるなり

○朱雀幡、原本雀を萑に作る閣本曾本淀本及類史紀略に據て改む淀本紀略幡を幢に作る白虎幡亦同じ

○備矣、略記備の上に始の字あり

○大安殿、天武紀に見ゆ大極殿を云

○祥瑞、儀制令に凡祥瑞應見若麟鳳龜龍之類、依圖諜合大瑞、隨卽表奏上瑞以下並申所司元日以聞とあり

○告朔、太政官式に凡天皇孟月臨軒視朔中務式に視告朔者前一日置版位於大極殿前庭云々とあり天武紀五年に見ゆ

書直大貳粟田朝臣眞人、爲遣唐執節使、左大辨直廣參高橋朝臣笠間爲大使、右兵衞率直廣肆坂合部宿禰大分爲副使、參河守務大肆許勢朝臣祖父爲大位、刑部判事進大壹鴨朝臣吉備麻呂爲中位、山代國相樂郡令追廣肆掃守宿禰阿賀流爲小位、進大參錦部連道麻呂爲大錄、進大肆白猪史阿麻留、无位山於億良爲少錄、○癸卯、直廣壹縣犬養宿禰大侶卒、遣淨廣肆夜氣王等、就第宣詔、贈正廣參、以壬申年功也、○二月丁未、詔始任下物職、○丁巳、釋奠、注釋奠之禮、於是始見矣、○己未、遣泉内親王侍於伊勢齋宮、○癸亥、行幸吉野離宮、○丙寅、任勸民官戸籍史等、○庚午、車駕至自吉野宮、○三月丙子、賜宴王親及群臣於東安殿、○戊子、遣追大肆凡海宿禰麁鎌于陸奥冶金、○壬辰、令僧弁紀還俗、代度一人、賜姓春日倉首名老、授追大壹、○甲午、對馬嶋貢金、建元爲大寶元年、始依新令、改制官名位號、親王明冠四階、諸王淨冠十四階、合十八階、諸臣正冠六階、直冠八階、勤冠四階、務冠四階、追冠四階、進冠四階、合三十階、外位始直冠正五位上階、終進冠少初位下階、合二十階、勳位始正冠正三位、終

追冠從八位下階、合十二等、始停賜冠、易以位記、語在年代曆、又服制、親王四品已上、諸王諸臣一位者皆黑紫、諸王二位以下、諸臣三位以上者皆赤紫、直冠上四階深緋、下四階淺緋、勤冠四階深綠、務冠四階淺綠、追冠四階深縹、進冠四階淺縹、皆漆冠綺帶、白襪、黑革舃、其袴者、直冠以上者皆白縛口袴、勤冠以下者白脛裳、授左大臣正廣貳多治比眞人嶋正二位、大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位、中納言直大壹石上朝臣麻呂、直廣壹藤原朝臣不比等正正三位、直大壹大伴宿禰安麻呂直廣貳紀朝臣麻呂正從三位、又諸王十四人諸臣百五人、改位號進爵、各有差、以大納言正從二位阿倍朝臣御主人爲右大臣、中納言正正三位石上朝臣麻呂、藤原朝臣不比等、正從三位紀朝臣麻呂、並爲大納言、是日罷中納言官、○己亥、丹波國地震、三月、○壬寅、賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人、絁五百疋、絲四百絇、布五千段、鍬一萬口、鐵五萬斤、備前備中但馬安藝國田二十町、

○大伴宿禰御行薨、公卿補任に御行正月五日任大納言、叙正三位、同十五日薨、年五十六、廿日贈正廣武右大臣云々と見ゆ贈官位の始なり
○難破朝、原本破を波に作る金本閣本に據て改む
○御器膳、御食を食器と共に賜はりしなり
○大射、雜令に凡大射正月中旬親王以下初位以上皆射之と見え太政官式には大射正月十七日とあり
○守民部尙書、守の字或は衍ならむ尙書は後の卿なり凡そ諸省の長官唐にては尙書と稱せしを我國にて大寶令制定の時に卿と稱することに定められしかど其以前には唐制に倣ひて尙書とも稱せしなるべし元明紀にも和銅元年八月攝津大夫從三位高向朝臣麻呂難波朝廷刑部尙書大花上國忍之子也と見えたり
○高橋朝臣笠間、二年八月爲遣大安寺司、三年十月爲造御鑑官副とあるを見れば此人は入唐せざりしなるべし
○右兵衞率、原本率を卒に作る閣本督本等に據て改む後之を改めて督とす　○坂合部宿禰大分、養老二年十二月紀に爲大使とあり上に云る高橋朝

臣笠間に代れるなるべし　○大位、位は佑或は佐の誤なるべし下の中位小位の位も同じ　○郡令、欽明紀に見ゆ郡令は卽ち郡領なり　○山於億良、曾本淀本於を上に作る於上何れもウヘと訓ず萬葉集靈異記大神宮儀式帳多度寺資財帳倭名抄の郡鄕等於をウヘと訓る例多し慶雲二年四月紀には山上臣に作り萬葉集亦同じ錄右京皇別山上朝臣同祖天足彦國忍人命之後とあり　（二月）下物職、持統紀七年四月に監物をオロシモノツカサと訓り監物は職員令中務省に大監物二人掌下監二察出納一請中進管鑰上とあり出納を監察する官なるが下物とは出すを主としたるなり　○丁巳、紀略丁未に作る水鏡略記同じされど此月甲辰朔なれば丁未は四日にて上と重複す　○釋奠、學令に凡大學國學每年春秋二仲之月上丁釋二奠於先聖孔宣父一義解に謂釋釋レ菜也奠奠レ幣也祀二其先聖一以示レ敬道一宣父是孔子諡也とあり其式は大學寮式に詳なり注の釋奠云々の十字は後人の攙入なるべし　○泉內親王、天智天皇々女　○行幸、上に一本太上天皇の四字あり　○民官、天武紀に紀朝臣弓張誅二民官事一とあり民官は民部省なり　（三月）賜宴王親、金本淀本及紀略宴を宴に作り王一に皇に作る　○東安殿、大安殿に對し其東にあるに由て名く　○麁鎌、天武紀朱鳥元年に蒼浦に作る訓通す　○弁紀、萬葉には弁基に作れり　○春日倉首老、懷風藻には春日藏老とあり　○對馬嶋貢金、大日本史に水鏡一代要記並云對馬始貢二白金一因建二元大寶一朝野群載有二對馬貢銀記一據二聖武紀一天平感寶元年陸奥始貢二黃金一然則是年所レ貢者白金非二黃金一とあり天武紀二年白金を貢ること見ゆ併見るべし略記には此下對馬島出白銀郡司等授二階位幷賜絁綿布鍬等の廿字あり　○新令、律令撰定の事庚子年七月及是歲八月紀に見ゆ　○親王明冠四階云々、考證に冠猶レ位所レ謂明位四階卽一品二品三品四品是爲二親王之位一淨位十四階卽正從一位正從二位正從三位正從四位上下正從五位上下是爲二諸王之位一親王一品至二四品一四階相二當承前明位一諸王正一位至二從五位下一十四階相二當承前淨位一故云二親王明冠四位諸王淨冠十四階一非レ言二當時仍有二明淨等之稱一也下皆倣レ此案至二是時一諸王既與二諸臣一同二其位號一所レ謂淨冠十四階卽諸王位三十階中之正冠六階直冠八階今特爲レ明二其相當一別言レ之耳非レ言二三十階之外有一此十四階一也と云り金本閣本階を品に作る　○正冠六階、正從一位、同二位同三位是なり　○直冠八階、原本冠を階に作る曾本淀本に據て改む正從四位上下同五位上下合せて八階　○勤冠四階、正從六位上下合せて四階　○務冠四階、正從七位上下合せて四階　○追冠四階、正從八位上下　○進冠四階、大少初位上下合せて四階なり　○外位、蒲生氏曰後周宇文氏慕二姬周禮制一而國號レ周置二六官一且改二魏之九官一曰二九命一而命有二內外一內命叙二王朝之官一外命叙二諸侯及州縣官一皇朝因レ之制二內位外位一蓋自二天武一始也　○勳位、武功の爵を勳と云蒲生氏云唐六典司勳郎中掌二邦國官人之勳級一凡勳十二等皇朝之制因レ之而建二勳位一自二正三位一以下唐自二正二品一則所レ比崇一等也と　○始停賜冠、考證に按天武紀十一年三月詔親王以下百寮諸人自今以後位冠及襌褶脛裳莫レ著六月男女始結レ髮仍著二漆紗冠一持統紀云三年九月遣二石上朝臣麻呂等筑紫一給二送位記一五年二月授二官人位記一據レ此停レ賜レ冠給二位記一自二天武持統朝一然而非レ昉二于此一未詳と云り　○年代曆、考證に按扶桑略記敏達六年條引二和漢年代曆一未レ知二與レ此同異一也と云り　○服制、天武紀十二年持統紀四年並に服制のこと見ゆ　○黑紫、深紫を云　○赤紫、淺紫を云　○漆冠、天武紀に見ゆ　○綺帶、持統紀に見えたり綺は抄布帛部綺蔣魴切韻云似レ錦而薄者也（於利毛能又一訓加無波太）とあり綺を以て作れる帶なり　○黑革舃、烏皮舃なり抄裝束部に唐令云諸舃履並烏色舃重皮底履單皮底とあり　○白縛口袴、持統紀に見ゆ　○白脛裳、脛裳は天武紀に見ゆハヽキモと訓す　○多治比眞人嶋正二位、下文の例に據るに正の上正字を重ぬべし考證に按に上の正は正冠の正下の正は正從の正なり此日官名位號を改むるの始なり故に授くる所の位階の上に冠するに此字を以てし其承前の正冠に相當するを明にす下みな此に倣へと云り　○御主人、本居翁云美宇志と訓むべし　○罷中納言官、考證に中納言未レ詳レ置二何代一案持統紀有二中納言三輪高市麻呂一天平勝寶五年三月巨勢朝臣奈氐麻呂傳云淡海朝中納言大雲比登之子也蓋天智天皇時置二是官一至レ是罷レ之故令不レ載至二慶雲二年四月一又置とあり　○三月、原本月を日に作る金本閣本に據て改む　○絇、賦役令義解に絲十六兩曰レ絇とあり　○段、類史に端に作る　○鐵、卽ち鐵の字なり五經文字相承けて鐵に作る

(四月)月讀神、神名式に山城國葛野郡葛野坐月讀神社(名神大月次新嘗)と見え今同郡松尾村大字松室に坐ます金本闕本淀本讀の字なし

○樺井神、神名式に山城國綴喜郡樺井月神社(大月次新嘗)山城志に今在水主神社傍稱曰川上神祠、故趾村西北、今久世郡寺田村大字水主に坐ます

○木嶋神、神名式に山城國葛野郡木嶋坐天照御魂神社(名神大月次相嘗新嘗)今同郡大秦村大字大秦に坐す

○波都賀志神、神名式に山城國乙訓郡羽束師坐高御産日神社(大月次新嘗)今同郡羽束師村大字志水に坐す

○右大弁、弁は卽ち辨の字なり狩谷氏云上野國多胡郡和銅四年碑飯異記寬平大安寺緣起等用此字

○親王、考證云下疑脫諸王二字

○下毛野朝臣、毛は紀略に據て補ふ

○大通事、通事は通譯なり推古紀十五年に出づ

○夏四月甲辰朔、日有蝕之、○丙午、勅、山背國葛野郡月讀神、樺井神、木嶋神、波都賀志神等神稲、自今以後、給中臣氏、○庚戌、遣右大弁從四位下下毛野朝臣古麻呂等三人、始講新令、親王諸臣百官人等就而習之、○癸丑、遣唐大通事大津造廣人賜垂水君姓、○乙卯、遣唐使等拜朝、○戊午、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、罷田領、委國司巡檢、○五月癸酉朔、太政官處分、王臣五位已上上日、本司月終移式部、然後式部抄錄、申送太政官、○丁丑、令群臣五位已上、出走馬、天皇臨觀焉、○己卯、入唐使粟田朝臣眞人授節刀、勅、一位已下、賜休暇、不得過十五日、唯大納言已上、不在聽限、○己亥、始改勳位已下之號、內外有位六位已下者、進階一級、○六月壬寅朔、令正七位下道君首名、説僧尼令于大安寺、○癸卯、正五位上忌部宿禰色布知卒、詔贈從四位上、以壬申年功也、始補內舍人九十人、於太政官列見、○己酉、勅、凡其庶務、一依新令、又國宰郡司、貯置大稅、必須如法、如有闕怠、隨事科斷、是日、遣使七道、宣告依新令爲政、及給大租之狀、并頒付新印樣、○壬子、以正五位上波多朝臣牟胡閇、從五

位上許曾倍朝臣陽麻呂、任造藥師寺司、○丁巳、引王親及侍臣宴於西高殿、賜御器膳幷帛各有差、○丙寅、以時雨不降、令四畿內祈雨焉、免當年調、○庚午、(持統)太上天皇幸吉野離宮、

○秋七月(壬申朔)辛巳、車駕至自吉野離宮、○壬辰、勅、親王已下、准其官位賜食封、又壬申年功臣、隨功第亦賜食封、並各有差、又勅、先朝論功行封時、賜村國小依百二十戶、當麻公國見、縣犬養連大侶、榎井連小君、書直知德、書首尼麻呂、黃文造大伴、大伴連馬來田、大伴連御行、阿倍普勢臣御主

○大津造、系詳ならず
○垂水君、豐城入彦命四世孫賀表乃眞稚命の後(錄左京皇別)內藤氏云垂水大津白ら別姓なれば蓋し本垂水氏故ありて大津造を冒しけるが今其本姓に復せしなるべし
○大川、原本川を山に作る紀略に據て改む　○田領、卽ち田令なり令領相通ず　○上日、出勤日なり式部式に每月一日正月三日諸司各計前月上日造簿令主典申送省とあり　○出走馬、太政官式に凡五月五日天皇觀騎射幷走馬弁及史等撿挍諸事所司設御座於武德殿是日內外群官皆著菖蒲鬘諸司各供其職と見え次に走馬を進るに就ての制も見ゆ　○節刀、軍防令義解云凡節者以旄牛尾爲之使者所杖也今以刀劍代之故曰節刀と
○賜休暇云々、假寧令云凡在京諸司每六日並給休假一日(中略)五月八月給田假分爲兩番各々十五日其風土異宜種收不等通隨便給とあり十五日とあるは田暇なるべし　(六月)大安寺、大和國添上郡にあり聖德太子の建立なり大和志に大安廢寺在大安寺村とあり　○忌部宿禰色布知、天武紀に色弗に作る貞觀十一年紀に神祇大祐正六位上忌部宿禰高善改忌部爲齋部と見えたり　○從四位上、一本上を下に作る　○內舍人、軍防令云凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者每年京國官司勘撿知實限十二月一日幷身送式部申太政官撿簡性識聰敏儀容可取充內舍人　○列見、公事根源に上卿辨少納言外記史など參りて太政官にて行へる公事なり六位以下の藝能あるものをえらびて式部兵部の二省より率して參れるを上卿のそれをめしよせて器量容儀をみる也同補注に列置而撰見之意也と云　○大租、下文二年二月丙辰諸國大租驛起稻及義倉幷兵器數文始送于辨官と見ゆ大租は大稅に同じ卽ち正稅なり　○新印樣、公式令に內印方三寸外印方二寸半諸司印方二寸二分諸國印方二寸とある是なり　○本胡閒、本紀一に胡を後に作る　○造藥師寺司、藥師寺は二年戊戌十月紀に見ゆ　○王親、金本閣本親を臣に作る　○西高殿、二年正月紀に宴群臣於西閣とも見ゆるに同じ　○時雨、爾雅釋天に時雨曰澍とあり澍ぎて萬物を生ずるを云　○四畿內、大和山城河內及攝津なり　○太上天皇、持統天皇なり正統記に太上天皇本朝には昔其例なし此天皇よりぞ太上號は侍りける云々と見えたり
(七月)行封時賜、狩谷氏云時恐特字
○村國小依、天武紀に村國連男依に作る此氏姓氏錄に載せず
○當麻公國見、考證に按に國見姓已亥年十月紀書當麻眞人此云當麻公者蓋論功行封在賜姓前仍擧當時之稱以

示、大寶二年以下諸人並皆倣此さ云り
○大侶、天武紀に大伴に作る
○小君、天武壬申紀に朴井連雄君に作り同五年紀物部連雄君に作る
○書首尼麻呂、天武紀根摩呂に、慶雲四年四月紀爾麻呂に作る
○黃文造大伴、天武紀に黃書造に作る
○大伴連馬來田、天武紀望多に作る
○神麻加牟陀君兒首、天武紀三輪君子首或は大三輪眞上田子人君に作る
○一十人、原本十一人に作る今本閣本に據て改む
○和爾部臣君手、元年丁酉九月紀に丸部臣君手さあるに據て部の下に君の字を補ふ
○依令、祿令に凡五位以上以功食封者其身亡者大功減半傳三世上功減三分之一傳二世中功減四分之三傳子下功不傳さあり
○皇大妃、公式令義解に天子母居嬪位者爲皇太妃さあり阿閇皇女なり
○多治比眞人嶋薨、扶桑略記公卿補任に年七十八

人、神麻加牟陀君兒首一十人各一百戶、若櫻部臣五百瀨、佐伯連大目、牟宜都君比呂、和爾部臣君手四人各八十戶、凡十五人賞雖各異、而同居中第、宜依令四分之一傳子、又皇大妃、內親王、及女王、嬪封各有差、是日、左大臣正二位多治比眞人嶋薨、詔遣右少弁從五位下波多朝臣廣足、治部少輔從五位下大宅朝臣金弓等、監護喪事、又遣三品刑部親王、正二位石上朝臣麻呂、就第弔賻之、正五位下路眞人大人爲公卿之誄、從七位下下毛野朝臣石代爲百官之誄、大臣、宣化天皇之玄孫、多治比王之子也、○戊戌、太政官處分、造宮官准職、造大安藥師二寺官准寮、造塔丈六二官准司焉、凡選任之人、奏任以上者、以名籍送太政官、判任者、式部銓擬、而送之、又功臣封應傳子、若無子勿傳、但養兄弟子爲子者聽傳、其傳封之人亦無子、聽更立養子、而轉授之、其計世葉、一同正子、但以嫡孫爲繼、不得傳封、又五位以上子、依蔭出身、以兄弟子爲養子聽敍位、其以嫡孫爲繼不得也、又書工及主計主稅筭師雅樂諸師如此之類、准官判任、

さあり左大臣に任ぜられしは扶桑略記に四年八月廿六日さす補任亦同じ　○正二位石上、三月甲午紀及二年八月紀に據るに二は三の誤なり　○爲公卿之誅、誅の事推古紀廿年に見ゆ　○多治比王之子、三代實錄貞觀八年二月廿一日丹墀眞人貞峰の上表に宣化天皇之皇子加美惠波皇子生十市王十市王生多治比古王此王生産之夕忽多治比花飛浮湯沐釜以斯冥感名多治比古王成長之後固執謙退奏請求姓因賜姓多治比公便以名爲姓存其舊志さ見ゆ　○選任、原本選を遷に作る紀略に據て改む　○奏任、選叙令に凡任官大納言以上左右大辨八省卿五衞督彈正尹大宰帥勅任餘官奏任義解に謂内外諸司主典以上其郡領軍毅亦爲奏任也さあり　○判任、同令に主政主帳及家令等判任義解に謂依軍防令内舍人亦爲判任其文學才伎長上亦同さあり　○功臣封云々、上文壬辰の注に見ゆ　○養子、戸令に凡無子者聽養四等以上親於昭穆合者即經本屬除附さあり　○依蔭出身、親王諸王及諸臣五位以上のもの其蔭に依て嫡子庶子共に相當の位階に叙せらるゝを云其制選叙令に詳なり

○八月（辛丑朔）壬寅（二）、勅僧惠耀、信成、東樓、並令還俗復本姓、代度各一人、惠耀姓錄、名兄麻呂、信成姓高、名金藏、東樓姓王、名中文、○癸卯（三）、遣三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、從四位下下毛野朝臣古麻呂、從五位下伊吉連博德、伊余部連馬養等、撰定律令於是始成、大略以淨御原朝廷爲准正、仍賜祿有差、○甲辰（四）、太政官處分、近江國志我山寺封、起庚午年計滿三十歲、觀世音寺筑紫尼寺封、起大寶元年計滿五歲、並停止之、皆准封施物、又齋宮司准寮、屬官准長上焉、○丁未（七）、先是、遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬嶋、冶成黃金、至是、詔授五瀬正六位上、賜封五十戶、田十町、幷絁綿布鍬、仍免雜戶之名、對馬嶋司及郡司、主典已上、進位一階、其出金郡司者二階、獲金人家部宮道授正八位上、幷賜絁綿布鍬、復

○（八月）僧惠耀、金本惠を慧に作る　○並令、令は略記に據て補ふ　○姓錄名兄麻呂、考證に神龜元年五月賜姓羽林連案養老三年正月紀及萬葉集錄作角角古音祿詳見通雅又案天智紀載韓人角福牟以閑於陰陽授小山上而養老三年正月紀書陰陽角兄麻呂則兄麻呂蓋福牟之後襲祖業者也さあり　○以淨御原朝廷云々、天武紀十年二月詔朕今更欲定律令造法式八月造法式さ見ゆ廷は原本庭に作る曾本淀本に據て改む　○志我山寺、拾芥抄に崇福寺近江國志賀郡號志賀寺天智天皇建さあり　○庚午年、天智天皇九年なり同年より起算するに

其戶終身、百姓三年、又贈右大臣大伴宿禰御行首遣五瀨冶金、因賜大臣子封百戶、田四十町、（注年代暦日、於後五瀨之詐欺發、知贈右大臣爲五瀨所誤也、）撰令所處分、職事官人賜祿之日、五位已下、皆參大藏受其祿、若不然者、彈正糺察焉、○戊申、遣明法博士於六道、（除西海道、）講新令、○己酉、皇親年滿者、不論官不、皆入賜祿之額、○甲寅、播磨、淡路、紀伊三國言、大風潮漲、田園損傷、遣使巡監農桑存問百姓、又遣使於河內、攝津、紀伊國、營造行宮、兼造御船三十八艘、豫備水行也、○辛酉、參河、遠江、相摸、近江、信濃、越前、佐渡、但馬、伯耆、出雲、備前、安藝、周防、長門、紀伊、讃岐、伊豫、十七國蝗大風、壞百姓廬舍、損秋稼、詔、贈從五位下調忌寸老人正五位上、以預撰律令也、○丙寅、廢高安城、其舍屋雜儲物、移貯于大倭、河內二國、令諸國加差衞士配衞門府焉、

昨年にて三十年に滿てり故に滿三十年と云原本午を子に作る曾本淀本に據て改む
○觀世音寺、筑前續風土記に三笠郡にあり普門山淸水寺といふと見え今同國筑紫郡水城村に屬し太宰府趾の東二丁にあり
○滿五歲並停止、祿令に凡寺不在食封之例若以別勅權封者不拘此令（注・權謂五年以下）とあり
○齋宮司云々、齋宮は神龜四年に初て寮官を任じ其後廢置定制なし此時には齋宮司と稱し未だ寮たらず故に寮に准じて屬官を長上に准ぜられたり
○三田首、寶龜元年五月紀に三田毗登家麻呂等四人賜姓道田連と見ゆ
○黃金、考證に按是年所貢白金非黃金也此據五瀨所詐言故曰黃金耳　○家部宮道、神護景雲二年六月備前國赤坂郡人家部大水美作國勝田郡人家部國持等六人賜姓石野連と見え錄左京諸蕃石野連百濟國人近速古王孫憶頼福留之後也とあり　○大臣子云々、田令に凡應給功田若父祖未請及未足而身亡者給其子孫とあり　○注、注以下二十五字傍注なること明なり　○五位已下皆參大藏云々、大藏省にて季祿を賜ふ事大藏式に見ゆ三代格延暦十一年十一月十九日勅例賜位祿季祿者諸五位以上自參大藏省受若不參者彈正糺之と見え後には五位以上も大藏省に參りて受くる事に定められ其事彈正式にも見ゆ　○明法博士、職令を論ずるに就て之を置かる令外官なり天平二年三月格明法博士を定めて正七位下の官とす　○六道、寶龜元年五月紀及養老三年九月紀に見ゆ　○皇親云々、祿令に凡皇親年十三以上皆給時服料　○紀伊國、紀略紀伊の下等の字あり　○調忌寸老人正五位上、原本上の字なし類史及紀略に據て補ふ　○預撰、金本閣本預を豫に作る預豫相通ず

○九月庚午朔戊寅九、遣ニ使諸國ニ巡ニ省產業ニ賑ニ恤百姓ニ○丁亥十八、天皇幸ニ紀伊國ニ○冬十月庚子朔丁未八、車駕至ニ武漏(ムロノユ)溫泉ニ○戊申九、從官幷國郡司等、進レ階幷賜ニ衣衾ニ及國內高年給レ稻各有レ差、勿レ收ニ當年租調幷正稅利ニ唯武漏郡本利並免、曲ニ赦罪人ニ○戊午十九、車駕自ニ紀伊ニ至、○己未二十、免ニ從レ駕諸國騎士當年調庸ニ及擔夫田租ニ○十一月己巳朔壬申四、大ニ赦天下ニ但盜人者不レ在ニ赦限ニ老疾及僧尼賜レ物、各有レ差、○丙子八、始任ニ造大幣司ニ以ニ正五位下彌努(ミヌノ)王從五位下引田朝臣爾閇(ニヘ)ニ爲ニ長官ニ○丁丑九、令ニ彈正臺ニ巡ニ察畿內ニ○乙酉十七、太政官處分、承前有レ恩赦レ罪之日例、率ニ罪人等ニ集ニ於朝廷ニ自今以後、不レ得ニ更然ニ赦令已降、令ニ所司ニ放上之、○十二月己亥朔戊申十、賜ニ諸王卿等帒樣(チ)ニ○癸丑十五、制、五位以上婦不レ得レ著ニ夫服色ニ但朝會之日聽レ著ニ得色已下ニ○乙丑廿七、大伯(オホク)內親王薨、天武天皇之皇女也、○是年、夫人藤原氏誕ニ皇子(聖武)ニ也、

(九月)天皇幸紀伊國、萬葉九に大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸ニ紀伊國ニ時歌十三首を載す太上天皇は持統天皇を申し大行天皇は文武天皇を申奉れるなるべし大行とは崩御後未だ諡を奉らぬ程の稱なれば之を編したる時は未だ御諡號を奉らざりし故に大行天皇と記し奉れるならむ然らば此度の紀伊の行幸は持統天皇と文武天皇と御二柱なりしを紀には太上天皇を略して天皇をのみ記し奉れるならむ

(十月)武漏溫泉、齊明紀に牟婁溫湯とあり通證に紀伊國牟婁郡湯峯の湯なりとすれど南紀名勝志に牟漏溫湯崎村白良濱中有ニ溫泉數個所ニ曰ニ走湯ニ者在ニ村西三町許ニ土人稱ニ佐伎乃湯ニ是也按牟漏郡中有ニ溫泉數箇所ニ不ニ他所傳ニ稱臨幸之事ニ然則謂ニ此所溫泉ニ曰ニ牟婁湯ニ乎と云り　○曲赦、文獻通考に晉武帝泰始五年曲ニ赦交阯九眞日南五歲刑ニと見えまた宋朝赦宥之制云々有ニ釋ニ雜罪至ニ死者上其恩需之及有ニ止ニ於京城兩京兩路一路數州一州之地ニ者上則謂ニ之曲赦ニと云大赦に對し一部曲の罪を赦すを云　(十一月)老疾、戶令義解に六十以上爲ニ老癈疾爲ニ疾とあり　○造大幣司、大幣とは神祇に供する幣物なり神祇令義解に見ゆ　○彌努王、彌努は美濃又は三野に作れり　○引田朝臣、阿倍氏と同祖なり慶雲元年十月及和銅五年十一月改めて阿倍朝臣を賜ふこと見ゆ　○令彈正臺、淀本及紀略令を命に作り金本閣本會本にはなし　○朝廷、原本廷を庭に作る淀本會本に據て改む　(十二月)帒、袋に同じ抄調度部行旅具に蠻蔣魴切韻云袋(音代字亦作ニ帒布久路)公式令に其隨ニ身者仍以ニ袋盛とあり　○五位以上婦、衣服令に

外命婦夫服色以下任服彈正式云婦人得著夫服色但節會之日不在此例と異なり　○聽著得色已下、山田以文氏云得色以下着假令著紫人婦得服蘇芳以下諸色之義然作位色非也　○大伯內親王、天武紀に大來に作り、齊明紀に大伯に作る　○夫人藤原氏、不比等の女　○皇子、聖武天皇に坐ます

【二年】禮服、衣服令に所謂禮服なり大祀大嘗元日則服之とあり　○朝服、同令に朝服朝廷公事則服之とあり　○杠谷樹、新撰字鏡に杠谷樹比々良木抄草木部に本草云黃芩(比々良岐)楊氏漢語抄云杠谷樹(杠音江和名同上)とあり記景行の段に比比羅木之八尋矛とあるも同じ原本杠を杜に作る金本閣本等に據て改む　○賀陁驛家、紀伊國海部郡にあり今の海草郡加太町なり兵部式に紀伊國驛馬萩原賀太各八疋とあり　○五帝太平樂、帝は常の誤なるべし五常樂は唐樂平調の曲名なり抄音樂部には五聖樂に作る太平樂も唐樂にして抄には道調曲とせり出時曲謂之朝少子武昌樂也と注せり　○善往、略記善住に作る　○辨照、同弁昭に作る　○僧照、同僧昭に作る
(二月)大幣、上に見ゆ

二年春正月(壬寅)己巳朔、天皇御大極殿受朝、親王及大納言已上始著禮服、諸王臣已下着朝服、○丙子、造宮職獻杠谷樹長八尋、俗曰比比良木、○戊寅、始置紀伊國賀陁驛家、○癸未、宴群臣於西閣、奏五帝太平樂、極歡而罷、賜物有差、○乙酉、以從三位大伴宿禰安麻呂爲式部卿、正五位下美努王爲左京大夫、正五位上布勢臣耳麻呂爲攝津大夫、從五位下當麻眞人橘爲齋宮頭、從四位上大神朝臣高市麻呂爲長門守、正六位上息長眞人子老、丹比間人宿禰足嶋、並授從五位下、○癸巳、詔以智淵法師爲僧正、善往法師爲大僧都、辨照法師爲少僧都、僧照法師爲律師、○二月戊戌朔、始頒新律於天下、○庚戌、越後國疫、遣醫藥療之、是日、爲班大幣、馳驛追諸國國造等入京、○丙辰、諸國大租、驛起稻、及義倉、并兵器數文、始送于辨官、○丁巳、任諸國國師、○己未、歌斐國獻梓弓五百張、以充大宰府、是日、分遷伊太祁曾、大屋都比賣、都麻都比賣三神社、○乙丑、諸國司

等始給鑰而罷。（先是、別有税司主鑰、至是始給國司焉。）○三月壬申（戊辰朔五）、因幡伯耆隱伎三國、蝗損禾稼。○乙亥、始頒度量于天下諸國。○戊寅、正五位下中臣朝臣意美麻呂、從五位下忌部宿禰子首、從六位下中臣朝臣石木、忌部宿禰狛麻呂、正七位下菅生朝臣國桙、從七位下巫部宿禰博士、正八位上忌部宿禰名代、並進位一階。○己卯、鎭大安殿大祓、天皇御新宮正殿齋戒、惣頒幣帛於畿內及七道諸社。○甲申、令大倭國繕治二槻離宮。分越中國四郡屬越後國。○庚寅、美濃國多伎郡民七百十六口、遷于近江國蒲生郡。○甲午、信濃國獻梓弓一千二十張、以充大宰府。○丁酉、聽大宰府專銓擬所部國掾已下及郡司等。○夏四月庚子（戊戌朔三）、禁祭賀茂神日、徒衆會集執仗騎射。唯當國之人不在禁限。○乙巳、飛驒國獻神馬。大赦天下。唯盜人不在赦限。其國司目已上、出瑞郡大領者、進位各一階、賜祿有差。百姓賜復三年。獲瑞僧隆觀免罪入京。（流僧幸甚之子也。）又普賜親王以下畿內有位者物。免諸國今年田租、并減庸之半。○丁未、從七位下秦忌寸廣庭獻杠谷樹八尋桙根。遣使者奉于伊勢大神宮。○庚戌、詔定諸國國造之氏。其名具國造

○追諸國國造等、考證に追猶召也とあり當時諸社の祭祀は國造專ら奉仕せるが故に之を召して幣帛を班たれしなり
○大租、上に出づ
○驛起稻、和銅二年六月紀に令諸國進驛起稻帳、天平元年四月紀に爲造山陽道諸國驛家充驛起稻五萬束と見え廐牧令に馬有闕失者卽以驛稻市替とあり驛起稻とは驛の用途に充る稻なり
○義倉、賦役令に凡一位以下及百姓雜色人等皆取戶粟以爲義倉義解に分富賑貧其情合義故曰義倉とあり
○國師、諸國に每國公に置く法師の意なり延曆二年十月紀其數を定めて大國師一人少國師一人中下國は各國師一人を任ずることに定め同十一年之を改めて講師と稱することゝ弘仁十三年三月の官符に見ゆ
○歌斐國、甲斐國なり
○梓弓、抄草木部に梓孫愐曰梓（音子阿都佐）木名楸之屬也とあり弓材に用ふる梓は俗に赤芽柏（アカメカシ）と稱する木にて眞

弓さ云も之をもて作れるものにて同じ木なりさ云　○伊太祁曾、神名式に紀伊國名草郡伊太祁曾神社（名神大、月次、相嘗新嘗）さあり今海草郡西山東村大字伊太祁曾にあり五十猛命を祀れり　○大屋都比賣、同式に大屋都比賣神社（名神大、月次、新嘗）さあり今同郡川永村大字宇田森にあり大屋都姫命を祀る　○都麻都比賣、同式に都麻都比賣神社（名神大、月次、新嘗）さあり今同郡東山東村大字平尾にあり抓津姫命を祀る

記、○壬子、令筑紫七國及越後國簡點采女兵衞貢之、但陸奧國勿貢、○五月辛未、勅、若五世王自有辭訟須受理者、特給坐席而與所分、○丁亥、勅、從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下粟田朝臣眞人、從四位上高向朝臣麻呂、從四位下下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野、令參議朝政、○六月壬寅、復大倭國吉野宇知二郡百姓、○癸卯、上野國疫、給藥救之、○庚申、以從三位大伴宿禰安麻呂爲兵部卿、○甲子、震海犬養門、○乙丑、遣唐使等去年從筑紫而入海、風浪暴險、不得渡海、至是乃發、

○給綸、金本閣本及紀略綸を鎰に作る、抄居處部門戶具に綸音藥今按俗人印綸之處用鎰字非也とあれど箋注に按部稱手鑑云綸正鎰俗蓋綸作鎰者後世諧聲字也さあり　（三月）隱伎、原本伎を岐に作る諸本に據て改む　○度量、原本量を置に作る類史及紀略に據て改む　○子首、養老二年正月紀、三年閏七月紀に子人に作る　○二槻離宮、齊明紀二年九月造觀田身嶺上兩槻樹邊曰兩槻宮さ見ゆ是なり其處に云り　○越中國四郡、地理志料に蓋久比國造所部也さ云　○多伎郡、民部式多藝に作る　○張、此下に金本郡の字あり　○銓擬、原本銓を詮に作る考證に詮疑當作銓和銅六年四月紀詮衡人物亦銓字蓋銓詮音近字樣亦相涉致譌也さ云るに據て改む　（四月）禁祭賀茂神云々、二年三月にも此禁ありたり　○神馬、治部式祥瑞に大瑞さす　○僧隆觀、大寶三年十月甲戌僧隆觀還俗本姓金名財沙門幸甚子也頗涉藝術知算曆さ見ゆ　○八尋桙根、八尋さは其長さをいひ桙は添へて云るなり　○大神宮、原本大を太に作る閣本等に據て改む　○國造記、狩谷氏云舊事紀所載國造本紀蓋此等之類　○筑紫七國、大隅薩摩は此時未だ置れねば此二國を除けば七國なり大隅の建國は和銅六年四月、薩摩の建國は詳ならざるも和銅二年六月紀に薩摩多褹兩國司さ見ゆれば其以前なるべし　○采女、仁德紀、安閑紀及孝德紀等に見ゆ後宮職員令に貢采女者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申中務省奏聞さあり天平十四年五月に采女者自今以後每年一人貢進之さ定めらる　○兵衞、軍防令に凡兵衞國司簡郡司子弟强幹便於弓馬者郡別一人貢之若貢采女郡不在貢兵衞之例さあり　（五月）五世王、繼嗣令に自親王五世雖得王名不在皇親之限さあるを慶雲三年五月五世之王已絕皇親之籍遂入諸臣之例顧念親々之恩不勝絕籍之痛自今以後五世之王在皇親之限其承嫡者相承爲王さ改めらる　○特給坐席、刑部式に凡五世以上犯罪聽推者皆設床席さあり原本席を席に作る今金本淀本に據る席は席の俗字　○與所分、考證に所疑當作處　○令參議朝政、當時は未だ正官にあらず之を正官さするは天平三年八月式部卿藤原宇合を擢用せられしを始さす　○海犬養門、拾芥抄宮城部或書云延曆十二年六月庚午令諸國造新宮諸門、若狹越中二國造安嘉

門海犬甘氏也とあり海犬甘氏が貢擔して造れる門なれば海犬甘門と呼びしを安嘉の文字を充てしなるべし　○乃發、原本乃を及に作る紀略に據て改む

（（七月））火雷神、神名式に山城國乙訓郡乙訓坐火雷神社（名神大月次新嘗）と見え同郡乙訓村大字井之內にあり大山咋命を祀る

○大幣、祈年の幣帛を云

○月次幣、神祇令に季夏月次祭、義解に謂於神祇官祭、與祈年祭同、如庶人宅祭（季冬亦同じ）とあり六月十二月に行はれ月次の幣帛に預るは三百四座なり

○新令、紀略及類史令を律に作る

○神人大、錄河內神別、和泉雜姓に並に神人あり同氏なるべし、大は原本太に作る金本閣本等に據て改む

○八蹄馬、蹄は抄毛郡部に蒼頡篇云蹄比都米畜足下也と見え八蹄あるを云

（（八月））丙申、此下朔の字を脫せしなるべし

○薩摩多褹、多褹は既に上に見え種子嶋なり當時薩摩に屬す故に薩摩の多褹と云薩摩を一國とする事は養老元年二月紀に見

○秋七月丙寅朔己巳（四）、有勅斷親王乘馬入宮門、○癸酉（八）、詔、伊勢大神宮封物者、是神御之物、宜準供神事、勿令濫穢、又在山背國乙訓郡火雷神、每旱祈雨、頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、○乙亥（十）、詔、令內外文武官讀習新令、美濃國大野郡人神人大獻八蹄馬、給稻一千束、○丙子（十一）、天皇幸吉野離宮、○乙未（三十）、始講律、是日、赦天下罪人、○八月丙申、薩摩多褹、隔化逆命、於是發兵征討、遂挍戸置吏焉、授出雲狛從五位下、○己亥（四）、以正五位上高橋朝臣笠間、爲造大安寺司、○庚子（五）、駿河下總二國大風、壞百姓廬舍、損禾稼、○癸卯（八）、震倭建命墓、遣使祭之、○戊申（十三）、有勅、五衛府使部、始准兵衞給祿、○辛亥（十六）、以正三位石上朝臣麻呂、爲大宰帥、○癸亥（廿八）、勅伊勢大神宮服料、用神戸調、○九月乙丑朔、日有蝕之、○戊寅（十四）、制、諸司告朔文者、主典以上送辨官、官惣納中務省、○討薩摩隼人軍士、授勳各有差、○辛巳（十七）、駿河、伊豆、下總、備中、阿波五國飢、遣使存恤、○癸未（十九）、遣使於伊賀、伊勢、美濃、尾張、三河五國、營造行宮、○乙酉（廿一）、從五位下出雲狛賜臣姓、○丁亥（廿三）、大赦天

えたるが上文四月庚戌條に筑紫七國とあれば此時薩摩は未だ一國たりしにはあらざるべし原本織を幟に作る金本閣本曾本に據て改む
○遣大安寺司、上に見ゆ
○震倭建命墓、景行天皇四十年紀に見え伊勢國能褒野を始め三處にあり通證には倭琴彈原陵なりと云へどいづれとも定め難し
○五衛府、左右兵衛左右衛士府と衛門府となり
○大神宮服料、神祇令に神衣祭義解に謂伊勢神宮祭此神服部氏等齋戒潔淸以參河赤引神調糸織作神衣又麻績連等績麻以織敷和衣以供神明故曰神衣とあり金本閣本及類史料を斷に作る斷は俗字
(九月)告朔文、百官の去月の上日を記したるを云太政官式に見ゆ
○乙丑、九月朔乙丑なれば此月更に乙丑あるべからず乙は己の誤なるべし
○不所、或云倒置すべしと
(十月)大宰、原本大を太に作る諸本に據て改む

下、○乙丑、詔、甲子年(天智三年)定氏上時、不所載氏、令被賜姓者、自伊美吉以上、並悉令申、○冬十月乙未朔、從四位下路眞人登美卒、○丁酉、先是征薩摩隼人時、禱祈大宰所部神九處、實賴神威、遂平荒賊、爰奉幣帛、以賽其禱焉、唱更國司等(今薩摩國也)言、於國內要害之地、建柵置戍守之、許焉、鎭祭諸神、爲將幸參河國也、○甲辰、太上天皇幸參河國、令諸國無出今年田租、○乙巳、近江國獻嘉禾異畝同穗、○戊申、頒下律令于天下諸國、○乙卯、詔、上自曾祖、下至玄孫、奕世孝順者、擧戶給復、表旌門閭、以爲義家焉、○十一月丙子、行至尾張國、尾治連若子麻呂、牛麻呂、賜姓宿禰、國守從五位下多治比眞人水守封一十戶、○庚辰、行至美濃國、授不破郡大領宮勝木實外從五位下、國守從五位上石河朝臣子老封一十戶、○乙酉、行至伊勢國、守從五位上佐伯宿禰石湯賜封一十戶、○丁亥、至伊賀國、行所經過尾張、美濃、伊勢、伊賀等國郡司及百姓、叙位賜祿各有差、○戊子、車駕至自參河、免從駕騎士調、○十二月(癸巳朔)甲午、勅曰、九月九日(天武忌日)、十二月三日(天智忌日)、先帝忌日也、諸司當是日宜爲廢務焉、○戊戌、星晝見、○壬寅、始開美濃

國岐蘇山道、○乙巳、太上天皇不豫、大赦天下、度一百人出家、令四畿内講金光明經、○甲寅、太上天皇崩、遺詔、勿素服擧哀、内外文武官釐務如常、喪葬之事務從儉約、○乙卯、以二品穗積親王、從四位上犬上王、正五位下路眞人大人、從五位下佐伯宿禰百足、黃文連本實、爲作殯宮司、三品刑部親王、從四位下廣瀨王、從五位上引田朝臣宿奈麻呂、從五位下民忌寸比良夫爲造大殿垣司、○丁巳、設齋於四大寺、○辛酉、殯于西殿、○壬戌、廢大祓、但東西文部解除如常、

續日本紀卷第二

○唱更、注に今薩摩國也とあり文字の出典は史記の吳王濞の傳に卒踐更輒與平賈とある注に正義曰踐更若今唱更行更者也とあるに據れり卒の踐更とは漢書昭帝紀の注に更有三品有卒更有踐更有過更古者正卒無常人皆當迭爲之一月一更是爲卒更貧者欲得顧更錢(顧は雇也)者次直者出錢顧之是爲踐更也天下人皆直戍邊三日亦名爲更律所謂繇戍也諸不行者出錢三百入官官以給戍者是爲過更也とありされば卒更も踐更過更も何れも邊境を戍る者の稱にて唱更行更も亦同じ者なれば薩摩の國内要害の地に柵を建て戍を置き其防備に當る人を唱更と稱せしがやがて國名となりしなるべしされば隼人を唱更と云ろにはあらで防人の如く邊境を守る人を云ろがもさなり考證にはハヤヒトと訓べしとあれど作氏は字音のまゝに讀べしといはれたり　○幸參河國、萬葉一に二年壬寅太上天皇幸于參河國とと見えて其時の歌を多く擧げたり　○令諸國云々、此に諸國とあるは車駕所歷の諸國なるべし　○嘉禾、瑞稻なり天武紀八年八月縵造忍勝獻嘉禾異畝同頴と見えたり　○表旌門閭、賦役令に凡孝子順孫義夫節婦志行聞於國郡者申太政官奏聞表其門閭同籍悉免課役有精誠通感者別加優賞義解に謂於其門及里門築堆立牓題云孝子門若里也とあり　(十一月)國守云々、大寶三年七月紀に從五位下多治比眞人水守爲尾張守とあれば國守の二字は誤なるべし　○宮勝、姓氏錄に載せずされど同書諸蕃に勝、及上勝、不破勝、奏勝等見え右京諸蕃に不破勝百濟國人淳武止等之後也とあれば宮勝は勝、不破勝の同族なるべし　○從五位上、佐伯宿禰類史上を下に作る　○賜封、類史賜の字なし　(十二月)先帝忌日廢務、廢務とは諸司執務せざるを云儀制令に國忌日皇帝不視事一日注に謂先帝崩日依別式合廢務者とあり　○岐蘇山道、和銅六年七月紀に美濃信濃二國之堺徑道險阻往還艱難乃通吉蘇路同七年閏二月紀に賜美濃守笠朝臣麻呂封七十戶田六町以通吉蘇路也と見ゆ岐蘇は當時美濃國に屬しけるが元慶三年九月信濃國に入れられたり　○金光明經、開元釋教目錄に金光明經四卷北涼三藏曇無讖譯とあり　○民忌寸、姓氏錄に見えず延曆四年六月紀に據るに坂上大忌寸と同祖なり　○四大寺、大安藥師元興弘福寺なり　○廢大祓、神祇令に六月十二月晦日大祓とあり諒闇に依て之を廢せらる　○東西文部、神祇令義解に謂東漢文直西漢文首也とあり都賀直の後文直は世々倭に居る依て倭文直といひ王仁の後文首世々河内に居る依て河内文首と云其大和は都の東にあり河内は西にあるを以て文直を東文と云ひ文首を西文と云ふ又並稱して東西文部といふ義訓なり　○解除如常、賀茂眞淵翁云文部の解除は漢土の風を傳へたるものにて皇國の事にあらず是を以て諒闇といへども廢せざるなり

【大寶三年】第卌二、曾本淀本此三字なし　○廢朝、西宮記に廢朝諸司政如常、但天皇不臨朝云々とあり　○房前、懷風藻に房を總に作る　○東海道、以下七道の名正しく此に始て見ゆ　○冤枉、原本枉を抂に作る閣本に據て改む抂は枉の俗字　○弘福、川原寺なり孝德紀に出づ　○薩飡、原本飡を韓に作る前後の例に據て改む下同じ新羅第八等官なり紀下附錄を見よ　○級飡、原本飡を韓に作る前後の例に據て改む新羅第九等の官　○赴國王喪、三國史記に據るに大寶二年七月孝昭王の薨ぜしを云ふ赴は訃なり　○主禮、職員令に內禮司主禮六人掌分察非違とあり　○蠲其課役、課役を免することは賦役令に詳なり　○知太政官事、職原抄に准大臣者文武天皇大寶三年正月三品刑部親王爲知太政官事、又聖武朝太

續日本紀卷第三

起大寶三年正月盡慶雲四年六月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇　第卌二

三年春正月癸亥朔、廢朝。親王已下百官人等拜太上天皇殯宮也。○甲子、遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、從六位上多治比眞人三宅麻呂于東山道、從七位上高向朝臣大足于北陸道、從七位下波多眞人余射于山陰道、正八位上穗積朝臣老于山陽道、從七位上小野朝臣馬養于南海道、正七位上大伴宿禰大沼田于西海道。道別錄事一人。巡省政績、申理冤枉。○丁卯、奉爲太上天皇設齋于大安、藥師、元興、弘福四寺。○辛未、新羅國遣薩飡金福護、級飡金孝元等、來赴國王喪也。是日制、主禮六人、元以大舍人爲之。宜准斯例。蠲其課役。○壬午、詔三品刑部親王知太政官事。○二月丁未、詔從四位下下毛野朝臣古麻呂等四人、預定

政大臣高市親王二男參議從三位大藏卿鈴鹿王知太政官事是濫觴云々とあり知太政官事とは太政大臣となすには德望未だ至らざる故に暫く太政大臣に准じて後日の撰を待給ふものなり准太政大臣といふが如し

(二月)丁未、狩谷氏云丁當作乙三日也

○定律令、元年八月及庚子年八月の條等に見えたり

○伊吉連、原本連の字なし類史及紀略に據て補ふ

○封五十戶、堀本五の上百の字ありと云

○封戶止身、祿令に凡五位以上以功食封者云々下功不傳

○田傳一世、田令に凡功田下功傳子とあり

○茨田足嶋、此人の連姓を賜りしこと既に卷一の二年八月紀に見ゆ蓋重出

○七七、釋氏要覽に人亡每至七日營齋追薦謂之累七又云齋七とあり、紀略に此下日の字あり

○四大寺、正月五日の條に見ゆ

○四天王、持國、增長、

律令、宜議功賞、於是古麻呂及從五位下伊吉連博德、並賜田十町封五十戶、贈正五位上調忌寸老人之男、田十町封百戶、從五位下伊余部連馬養之男、田六町封百戶、其封戶止身、田傳一世、○丙申、從七位下茨田足嶋、衣縫造孔子、並賜連姓、○癸卯、是日當太上天皇七七、遣使四大寺及四天王山田等三十三寺、設齋焉、大宰史生更加十員、○三月戊辰、賜從四位下下毛野朝臣古麻呂功田二十町、○辛未、詔四大寺讀大般若經、度一百人、○丁丑、下制曰、依令、國博士於部內及傍國取用、然溫故知新、希有其人、若傍國無人採用、則申省、然後省選擬、更請處分、又有才堪郡司、若當郡有三等已上親者、聽任比郡、○戊寅、信濃、上野二國疫、給藥療之、○乙酉、以義淵法師爲僧正、○夏四月癸巳、奉爲太上天皇、設百日齋於御在所、○乙未、從五位下高麗若光賜王姓、○辛亥、從七位下和氣、坂本賜君姓、○戊午、安藝國被略爲奴婢者二百餘人、免從本籍、○閏四月辛酉朔、大赦天下、饗新羅客于難波館、詔曰、新羅國

使薩飡金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辭聖朝、朕思、其蕃君雖居異域、至於覆育、允同愛子、雖壽命有終、人倫大期、而自聞此言、哀感已甚、可差使發遣弔賻、其福護等、遙涉蒼波、能遂使旨、朕矜其辛勤、宜賜以布帛、是日、右大臣從二位阿倍朝臣御主人甍、遣正三位石上朝臣麻呂等弔賻之、○五月壬辰、金福護等還蕃、正七位上倉垣連子人、高祖根猪以來子孫、正七位上私小田、從七位上私比都自長嶋、及昆弟等皆訴、得免雜戸、○癸巳、流來新羅人付福護等還本鄕、○己亥、令紀伊國奈我、名草二郡、停布調獻絲、但阿提、飯高、牟漏三郡獻銀也、○丙午、相模國疫、給藥救之、○六月乙丑、以從四位上大神朝臣高市麻呂爲左京大夫、從五位下大伴宿禰男人爲大倭守、從五位上引田朝臣廣目、爲齋宮頭兼伊勢守、

寶目、毘沙門の四天王を云、此寺の事崇峻紀に見ゆ

○大宰史生、職員令に大宰府史生廿人とあり、原本大を太に作る金本閣本に據て改む下同じ

（三月）功田二十町、古麻呂の功田は前に賜ふ所と合せて卅町なり

○大般若經、六百卷唐三藏玄奘法師譯

○依令云々、選叙令に凡國博士醫師者並於部內取用若無者得於傍國通取とあるを云

○温故知新、論語爲政に温故而知新可以爲師なとあるに據れり

○若傍國無人云々、元明紀和銅元年四月の條に諸國博士醫師自今以後補遣者云々とあるは即ちかゝる場合を云へり

○選擬、選の字疑くは詮の誤なり

○若當郡云々、二年三月の條を參考すべし

○義淵法師、釋家初例抄に興福寺僧義淵爲僧正自凡位直任僧正初例也とあり

（四月）高麗若光、姓氏錄考證に此氏は高麗王の後にて高麗朝臣（好台王七世孫延興王の後）の族なるべし賜王姓とあれど例とは異なり氏人ものに見えずと云り

○和氣坂本賜君姓、錄右京皇別に別公、和泉皇別に和氣公とあると同族にて日本武尊の後なり

○破略爲奴婢者云々、戸令に凡良人家人被略充賤云々とあり

（閏四月）難波館、推古紀十六年に難波高麗館、舒明紀二年に三韓館とあるに同じ

○寡君、原本寡を宣に作る紀略に據て改む

○阿倍朝臣御主人甍、持統紀元年正月の條に布勢朝臣御主人と見ゆ公卿補任に御主人本姓布勢、麻呂古臣男持統八年正月爲納言後改布勢爲阿倍朝臣甍年六十九とあり

（五月）倉垣連、考證に慶雲四

年正月紀云椋垣直子人賜連姓此云連追書也　○子孫、此下恐くは脱文あらむ　○私、敏達紀六年二月の條に私部を置くこと見ゆ私部の略稱なり
○雜戸、圖書寮に紙戸、內藏寮に百濟戸、主船司に船戸、主鷹司に鷹戸ある類にして諸司に屬して各其用を勤る人民なり戸令に凡戸籍惣寫三通二
通申送太政官一通留國其雜戸陵戸籍則更寫一通各送本司とあるにて諸司に屬することを知るべし其種類多く種々ある故に雜戸と云　○奈我、
民部式倭名抄に那賀に作る　○阿提、靈異記に安諦に作る卽ち今の在田郡なり日本後紀大同元年七月の條參看すべし　○飯高、民部式倭名抄に日高
に作る

(七月)庚午年籍、庚午は天智天皇九年なり天智紀に九年二月造戸籍とある卽是なり
○多治比眞人水守、此人既に尾張國守たること二年十一月の條に見えたり
○擧賢良方正之士、所謂野に遺賢なからしめむとなり
(八月)作番直軍團云々、此事慶雲元年六月(四〇頁)に詳なり
○一同散位、散位は位ありて官なきを云其選叙の法は選叙令に凡散位若見官無闕雖有闕而才識

秋七月甲午、詔曰、籍帳之設、國家大信、逐時變更、詐僞必起、宜以庚午年籍爲定、更無改易、以從五位上大石王爲河內守、正五位下黄文連大伴爲山背守、從五位下多治比眞人水守爲尾張守、從五位下引田朝臣祖父爲武藏守、正五位上上毛野朝臣男足爲下總守、正五位下猪名眞人石前爲備前守、以災異頻見年穀不登、詔減京畿及大宰府管內諸國調半、幷免天下之庸、又詔五位已上、擧賢良方正之士、○壬寅、令四大寺讀金光明經、○丙午、近江國山火自焚、遣使祈雨于名山大川、○壬子、贈從五位下民忌寸大火正五位上、正六位上高田首新家從五位上、並遣使弔賻、以壬申年功也、○八月辛酉、以從五位上百濟王良虞爲伊豫守、○甲子、大宰府請有勲位者作番直軍團、考滿之日送於式部、一同散位、永預選叙、許之、○九月辛卯、賜四品志紀親王近江國鐵穴、

不相當者六位以下分番上下毎有闕各依本位量才任用世經八考者八考中進一階云々と見ゆ
（九月）志紀親王、天智紀七年二月に施基に作る
○近江國鐵穴、聖武紀天平十四年十二月に令近江國禁諸有勢之家專貪鐵穴貧賤之民不得採用とまた淳仁紀天平寶字六年二月には賜大師藤原惠美朝臣押勝近江國淺井高嶋二郡鐵穴各一處と見えたり
○法蓮、養老五年六月紀にも褒賞せられし事見ゆ宇佐の人にて彌勒寺初代の別當たり
○四十町、曾本に四を五に作る
（十月）穗積親王、天武天皇々子蘇我赤兄の女大蕤娘の御腹なり天武紀二年に見ゆ
○御裝長官、考證に所謂裝束司也案踐祚大嘗祭及行幸等亦任裝束司見太政官式とあり
○故人、判官なり倭名抄職官部に神祇曰祐省曰丞彈正曰忠勘解由曰判官云々皆万豆利古止比止とあり

○庚戌、以從五位下波多朝臣廣足、爲遣新羅大使。○癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也。○冬十月丁卯、任太上天皇御葬司、以二品穗積親王爲御裝長官、從四位下廣瀨王、正五位下石川朝臣宮麻呂、從五位下猪名眞人大村爲副、政人四人、史二人、四品志紀親王爲造御竈長官、從四位上息長王、正五位上高橋朝臣笠間、正五位下土師宿禰馬手爲副、政人四人、史四人。○甲戌、僧隆觀還俗、本姓金、名財、沙門幸甚子也。頗涉藝術、兼知算曆。○癸未、天皇御小安殿、詔賜遣新羅使波多朝臣廣足、額田人足、各衾一領、衣一襲、又賜新羅王錦二匹、絁四十匹。○十一月癸卯、太政官處分、巡察使所記諸國郡司等、有治能者、式部宜依令稱擧、有過失者、刑部依律推斷。○十二月甲子、始皇親五世王、五位已上子、年滿二十一已上者、錄其歷名、申送式部省。○己巳、以正五位下路眞人大人爲衞士督。○癸酉、從四位上當麻眞人智德率諸王諸臣、奉誄太上天皇、謚曰大倭根子天之廣野日女尊。是日、火葬於飛鳥岡。○壬午、合葬於大內山陵。

○造御竈長官、御火葬なれば其御竈を造る長官なり　○正五位上、曾本淀本正を從に作り金本閣本には此字闕く　○小安殿、金本曾本淀本に小字なし、紀略大に作る是なるに似たれど姑く原本に據る　○衾、抄裝束部に衾説文云衾(和名布須万)大被也四聲字苑云被衾別名也　○衣・襲、衣は同云野王案在上曰衣在下曰裳惣謂之服也また襲は史記音義云衣之單複相具謂之襲(和名加左禰)爾雅注云襲猶重也とあり　(十一月)刑部、原本刑を邢に作る金本曾本に據て改む　(十二月)年滿二十一已上者云々、選叙令に凡授位者皆限年廿五以上唯以蔭出身皆限年廿一以上軍防令に凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者云々限十二月一日幷身送式部申太政官云々とあり叙位任官の調査の爲なり　○率諸王、原本率を卒に作る類史に據て改む　○大倭根子云々、御謚號の意持統紀に注す　○飛鳥岡、大和國高市郡　○大内山陵、天武天皇御陵、高市郡高市村大字野口にあり

【慶雲元年】座、原本坐に作る類史に據て改む　○榻、抄車具部に唐韻云榻(吐盍反和名之知)床也とあり　○大市王、天平十一年正月紀に无位大市王見ゆ別人なり　○倭王、和銅五年正月紀に无位倭王、天平寶字三年十一月紀に從五位下和王見ゆ是皆別人なり　○垂麻呂、原本垂を乘に作る類史並に和銅元年三月丙午紀に據て改む　○枚夫、和銅三年四月紀に比頁夫に作る　○太朝臣、天武紀十三年十一月に多朝臣に作る　○釋加、原本釋を釈に作り金本閣本曾本に尺に作る省文なり　○三品新田部親王、既に淨廣貳たり三品に降るべき理なし、恐らくは二品の誤ならむ

(甲辰)慶雲元年春正月丁亥朔、天皇御大極殿受朝、五位已上座始設榻焉、○癸巳、詔以大納言從二位石上朝臣麻呂爲右大臣、无位長屋王授正四位上、无位大市王、手嶋王、氣多王、夜須王、倭王、宇太王、成會王、並授從四位下、從六位上高橋朝臣若麻呂、從六位下若犬養宿禰檳榔、正六位上穗積朝臣山守、巨勢朝臣久須比、大神朝臣狛麻呂、佐伯宿禰垂麻呂、從六位下阿曇宿禰虫名、從六位上采女朝臣枚夫、正六位下太朝臣安麻呂、從六位上阿倍朝臣首名、從六位下田口朝臣益人、正六位下笠朝臣麻呂、從六位上石上朝臣豐庭、從六位下大伴宿禰道足、曾禰連足人、正六位上文忌寸釋加、從六位下秦忌寸百足、正六位上佐太忌寸老、漆部造道麻呂、上村主大石、米多君北助、王敬受、從六位上多治比眞人三宅麻呂、正六位上臺忌寸八嶋、並從五位下、○丁酉、二品長親王、舍人親王、

○石川夫人、天武紀朱鳥元年に出づ蘇我赤兄大臣女大蕤娘なり
○聽連任、原本連の字なし金本閣本に據て補ふ
○始停百官跪伏之禮、按に天武十一年九月勅して跪禮匍匐禮を止め難波朝廷の立禮を用ひ給ひしかご舊慣を改むることは容易ならずして實行せられざる故に此詔を發して嚴禁し給ひしにはあらざるか四年十二月辛卯の條を參考すべし
二月、大宮主、臨時祭式に凡宮主取卜部堪事者任之とあり神祇官の卜部中より任ずる例なり大宮主とは大は中宮東宮の宮主に對する稱、宮主は卜術を以て主として其宮に奉仕する由の名なり蒲生氏曰宮主置未詳其始
○長上例、從來は番上な

穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戶、三品新田部親王、四品志紀親王、各一百戶、右大臣從二位石上朝臣麻呂二千一百七十戶、大納言從二位藤原朝臣不比等八百戶、自餘三位已下、五位已上十四人各有差、○壬寅、詔、御名部內親王、石川夫人、益封各一百戶、○戊申、伊勢國多氣度會二郡少領已上者、聽連任三等已上親、○辛亥、始停百官跪伏之禮、○二月丙辰朔、日有蝕之、○癸亥、神祇官大宮主入長上例、○乙亥、從五位上村主百濟、改賜阿刀連、○三月甲寅、信濃國疫、給藥療之、○夏四月甲子、令鍛冶司鑄諸國印、○庚午、以信濃國獻弓一千四百張、充大宰府、○甲戌、讃岐國飢、賑恤之、○壬午、備中、備後、安藝、阿波四國苗損、並加賑恤、○五月甲午、備前國獻神馬、西樓上慶雲見、詔大赦天下、改元爲慶雲元年、高年老疾並加賑恤、又免壬寅年以往大稅、及出神馬郡當年調、又親王諸王百官使部已上、賜祿有差、獻神馬國司、守正五位下猪名眞人石前進位一階、初見慶雲人、式部少丞從七位上小野朝臣馬養三階、並賜絁十疋、絲二十絇、布三十端、鍬四十口、○庚子、武藏國飢、賑恤

之。○六月丁巳、勅、諸國兵士、團別分爲十番、毎番十日、教習武藝、必使齊整、令條以外、不得雜使、其有關須守者、隨便斟酌、令足守備。○己未、令諸國、勳七等以下身無官位者、聽直軍團續勞、上經三年、折當兩考、滿之年送式部、選同散位之例、其身材强幹須堪時務者、國司商量充使之、年限考第、一准所任之例。○乙丑、河內國古市郡人高屋連藥女一產三男、賜絁二疋、綿二屯、布四端。○己巳、阿波國獻木連理。○丙子、奉幣祈雨于諸社。

秋七月甲申朔、正四位下粟田朝臣眞人自唐國至、初至唐時、有人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、我使反問曰、此是何州界、答曰、是大周楚州鹽城縣界也、更問、先是大唐、今稱大周、國號緣何改稱、答曰、永淳二年、天皇太帝(高宗)崩、皇太后(則天武后)登位、稱號聖神皇帝、國號大周、問答略了、唐人謂我使

りしが是に至て長上の例に預らしめ給ひしなり金本閣本長の下に官の字あるは非なり　○從五位上村主、村の上恐らくは上の字を一字脫す上は氏、村主は尸なれば上の字なくては通ぜず　(四月)鍛冶司、原本冶を治に作る曾本淀本に據て改む抄人倫部に四聲字苑云鍛打金鐵爲器也冶(俗云鍛冶訛也)燒鑠銷鑠也とあり　○諸國印、公式令に諸國印方二寸上京公文及案調物則印とあり　(五月)西樓上、略記水鏡に此上に大極殿の三字あり　○慶雲、治部式に慶雲狀若烟非烟若雲非雲とあり大瑞とす　○使部、神祇官を始め諸省寮司にあり雜事に使役するなり　(六月)諸國兵士云々、軍防令に凡軍團大毅領二千人少毅副領とあり一千人を一團とす之を十番に分ちて教習せしむるなり　○齊整、原本齊を齋に作る金本淀本に據て改む　○隨便、原本便を使に作る神本に據て改む　○斟酌、原本斟を勘に作る諸本に據て改む　○折當兩考、上直すること三年を經ば准へ折(へ)ぎて兩考に當つべしとなり　○滿之年、考證に滿上疑脫考字とあり　○木連理、治部式に下瑞とす

(七月)粟田朝臣眞人云々、眞人が唐に遣はされたることは大寶元年正月に見ゆ唐書東夷傳に長安元年其王文武立改元曰大寶遣朝臣眞人粟田貢方物朝臣眞人者猶唐尙書也冠進德冠云々眞人好學能屬文進止有容武后宴之麟德殿授司膳

○歸還之とあり
○楚州鹽城縣、唐書地理志に淮南道楚州淮陰郡鹽城縣あり
○永淳二年、天武天皇十二年に當る
○天皇太帝、唐高宗を云ふ弘道元年十二月崩
○皇太后、則天武后なり高宗晩年病に罹り天下の事一に武后に附す號を進めて天后と云ふ帝崩じて中宗即位、天后を皇太后と稱す太后帝を廢して廬陵王と爲し自ら朝に臨み因て國號を改めて周と號し自ら聖神皇帝と稱し武三子を以て太子とす狄仁傑の言を以て唐嗣を復するを得たり
○幽閒、紀略に幽を承に作る
○君子國、山海經後漢書淮南子等に見ゆ
○太淨、原本太を大に作る紀略に據て改む
○白鶯、抄羽族部に爾雅集注云鶯（和名都波久良女）白脰小鳥也とありツバクラは鳴聲を以て名づくメはムレの約
○白鳥、治部式に太陽之精也とあり中瑞とす
○公廨稻、公廨は官衙な

曰、亦聞海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮義敦行、今看使人、儀容太淨、豈不信乎、語畢而去、○丙戌、左京職獻白鶯、下總國獻白鳥、○壬辰、以時雨不降、遣使祈雨於諸社、○庚子、公廨稻給式部省大學散位等寮、○壬寅、詔、京師高年八十已上者、咸加賑恤、○甲辰、奉幣帛于住吉社、○乙巳、贈從五位上坂合部宿禰唐正五位下、右大臣從二位阿倍朝臣御主人功封百戶四分之一、傳子從五位上廣庭、贈從五位上高田新家首功封四十戶四分之一、傳子无位首名、○八月丙辰、遣新羅使從五位上波多朝臣廣足等至自新羅、○戊午、伊勢伊賀二國蝗、○辛巳、周防國大風、拔樹傷秋稼、○冬十月丁巳、有詔、以水旱失時、年穀不稔、免課役幷當年田租、○辛酉、粟田朝臣眞人等拜朝、正六位上幡文通爲遣新羅大使、○戊辰、幡文通賜造姓、○十一月癸巳、設太上天皇百七齋于諸寺、○庚寅、遣從五位上忌部宿禰子首、供幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢大神宮、○丙申、改從四位下引田朝臣宿奈麻呂姓、賜阿倍朝臣、賜正四位下粟田朝臣眞人、大倭國田二十町穀一千斛、以奉使絕域也、○壬寅、始

り官衙の雜費は諸國にある公田の賃租を太政官に送り之を以て其費に充つる制なるが式部大學散位等の祿を公廨稻を以て賜はりしなるべし、類史には祿の字なし

〇住吉社、攝津國住吉郡住吉坐神社なり奉幣は何に因れるか詳ならず　〇坂合部宿禰、考證云庚子年五月與刑部親王等撰定律令とあり其功勞に因れるか　〇高田新家首、大寶三年七月壬子に高田首新家と見ゆ姓を名の後に記したるは特例なり　(十月)蟠文通、金本通を道に作る蟠文造は錄左京諸蕃別に大崗忌寸同祖出自魏文帝之後安貴公とあり　(十一月)癸巳、此條當に庚寅の下にあるべきなり　〇百七齋、考證に案大寶三年四月癸巳奉爲太上天皇設百日齋疑以是日干支與彼同重出且百日誤作百七歟と云ひ私記に或曰自崩至此七百日也とあれどいかゞあらむ　〇鳳凰鏡、背面の摸樣によりて名づく原本凰鳳鏡に作る金本曾本及類史紀略に據て改む　〇窠子錦、織文によりて名づく織部式に一窠錦二窠錦四窠錦五窠錦等の名見ゆ皆窠子錦なるべし　〇始定藤原宮地、藤原宮に遷居せられたることは持統紀八年十二月の條に見えたり今藤原宮を定められたることを記して遷都のこと見えず恐くは誤

定藤原宮地、宅入宮中百姓一千五百五烟賜布有差、〇十二月辛酉、供幣帛于諸社、〇辛未、大宰府言、去秋大風、拔樹傷年穀、〇是年夏、伊賀伊豆二國疫、並給醫藥療之、

【慶雲二年】

(三月)倉橋離宮、崇峻紀卽位前紀に倉梯に作る大和國十市郡倉橋村にあり　〇豐國女王卒、系詳ならず

(四月)菜色、禮記王制に雖有凶旱水溢民無菜色、集註に飢而食菜則色病故云菜色と見えたり　〇擧稅、出擧せし稅を云ふ　〇官員令、卽ち職員令なり此にかくあるに據れば養老刪定の日に職員令と改められしなるべし

(乙巳)二年春正月丙申、賜宴文武百寮于朝堂、〇庚子、无位安八萬王授從四位下、〇三月癸未、車駕幸倉橋離宮、〇丙戌、正四位下豐國女王卒、〇夏四月壬子、詔曰、朕以菲薄之躬、託于王公之上、不能德感上天、仁及黎庶、遂令陰陽錯謬、水旱失時、年穀不登、民多菜色、每念於此、惻怛於心、宜令五大寺讀金光明經、爲救民苦、天下諸國、勿收今年擧稅之利、幷減庸半、〇甲寅、遣使巡省天下諸國、〇庚申、賜三品刑部親王越前國野一百町、〇丙寅、勅、依官員令、大納言四人、職掌既比大臣、官位亦超諸卿、朕顧念之、任重事密、充員難滿、宜廢省二員、爲定兩人、更置中納言三人、以

○咲頌念之、原本に頌字なし略運記に據て補ふ
○中納言、大寶元年三月之を廢す是に至て再び之を置けり
○待問參議、集解に侍從獻替參議庶事とさ見ゆ
○請其位、原本に位を任に作る集解に據て改む
○正四位上官、金本閣本等に官の字なし
○肩巾田、原本に巾を甲に作る諸本に據て改む考證に天武紀十一年三月詔諸大采女肩巾並莫服、肩巾又曰領巾、和名抄領巾婦人項上飾也日本紀私記云比禮即此拔肩巾婦人服物置田以供采女資用、名曰肩巾田、猶今俗言化粧料之類也民部式凡貢采女郡各置養田三町亦此類とあり
○給大宰府云々、諸國に鈴を給することさ公式令に見え大宰府に給する數は廿口とあり此に記すところは常數の外別に給する數なり
○飛驛鈴八口傳符十枚、職員令に少納言掌奏宣小事、請進鈴印傳符、進付飛驛函鈴云々とあり公式令に凡給驛傳馬皆

補大納言不足、其職掌敷奏宣旨、待問參議、其官位料祿准令、商量施行、太政官議奏、其職近大納言、事關機密、官位料祿、不可便輕、請其位擬正四位上官、別封二百戶、資人三十人、奏可之、先是、諸國采女、肩巾田、依令停之、至是復舊焉、○辛未、天皇御大極殿、以正四位下粟田朝臣眞人、高向朝臣麻呂、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂三人、爲中納言、從四位上中臣朝臣意美麻呂、爲左大辨、從四位下息長眞人老、爲右大辨、從四位上下毛野朝臣古麻呂、爲兵部卿、從四位下巨勢朝臣麻呂、爲民部卿、給大宰府飛驛鈴八口、傳符十枚、長門國鈴二口、○五月丙戌、三品忍壁親王薨、遣使監護喪事、天武天皇之第九皇子也、○丁亥、以正五位下大伴宿禰手拍、爲尾張守、○癸卯、幡文造通等自新羅至、○六月乙亥、奉幣帛于諸社、以祈雨焉、○丙子、太政官奏、比日亢旱、田園燋卷、雖久零祈、未蒙嘉澍、請遣京畿內淨行僧等祈雨、及罷出市廛、閉塞南門、奏可之、○秋七月丙申、大納言正三位紀朝臣麻呂薨、近江朝御史大夫贈正三位大人之子也、○丙午、大倭國大風、損壞百姓廬舍、○八月戊午、詔曰、陰陽失

依鈴傳符剋數、其驛鈴傳符還到三日內送納と見えたり
（五月）忍壁親王、上文四月庚申に忍壁を刑部に作る
（六月）亢旱、原本亢を元に作る考證に據て改む
○燋卷、百穀燋枯して葉悉くに捲くを云
○嘉澍、澍は字書に時雨澍生萬物也又借作霔濡滋植意とあり
○龍出市廛云々、祈雨の爲なり皇極紀元年七月（紀下一五一頁）に見ゆ
（七月）御史大夫、大納言なり天智紀十年に見ゆ
○贈正三位、原本に贈の字なし考證に據て補ふ
（九月）八咫烏社、神名式に大和國宇陀郡八咫烏神社鍬靫とあり大和志に在鷹塚村と見ゆ
（十一月）正四位上、和銅二年正月紀上を下に作る
○諸王臣、原本に王の字なし諸本に據て補ふ
○先是五位云々、此事大寶元年八月の條に出づ
○位祿、祿令に凡在京文武職事及大宰壹岐對馬皆依官位給祿云々とあり

度、炎旱彌旬、百姓飢荒、或陷罪網、宜大赦天下、與民更新、死罪已下、罪無輕重、咸赦除之、老病鰥寡、惸獨、不能自存者、量加賑恤、其八虐常赦所不免者、不在赦限、又免諸國調之半、又授遣唐使粟田朝臣眞人從三位、其使下人等、進位賜物各有差、以從三位大伴宿禰安麻呂爲大納言、從四位下美努王爲攝津大夫、○九月壬午、詔二品穗積親王、知太政官事、○丙戌、置八咫烏社于大倭國宇太郡祭之、○丁酉、以從五位上當麻眞人櫻井爲伊勢守、○癸卯、越前國獻赤烏、國司幷出瑞郡司等進位一階、百姓給復一年、獲瑞人完人臣國持授從八位下、並賜絁綿布鍬、各有差、○冬十月壬申、詔遣使於五道、除山陽西海道賑恤高年老疾鰥寡惸獨、幷免當年調之半、○丙子、新羅貢調使一吉飡金儒吉等來獻、○十一月己卯、以正四位上小野朝臣毛野爲中務卿、○庚辰、從五位下當麻眞人楯爲齋宮頭、有詔、加親王諸王臣食封各有差、先是、五位有食封、至是代以位祿也、○己丑、徵發諸國騎兵、爲迎新羅使也、以正五位上紀朝臣古麻呂爲騎兵大將軍、○甲辰、以大納言從三位大伴宿禰安麻呂爲兼大宰帥、從四

○騎兵大將軍、諸國の騎兵を徵發するにつき古麻呂を以て其大將軍させられしなり

（十二月）權施、原本に權を推に作る考證に據て改む

○天下婦女云々、此事天武紀十一年十一月同十三年四月の條並に朱鳥元年七月の條等に詳なり神部齋宮宮人は巫祝の類老嫗は女年四十以上の者を云

○髻髮、抄形體部に唐韵云髻（音計毛斗々利）髮也また髻髮の條に野王案髮（音發加美）首上長毛也とあり

○正四位上葛野王、原本に上を下に作る紀略に據て改む王は弘文天皇の長子、傳は懷風藻に見ゆ

○正六位上三國眞人、原本正を從に作る金本閣本等に據て改む

○狛朝臣秋麻呂、元明紀和銅元年三月丙午に阿倍狛朝臣秋麻呂に作る

○田口朝臣廣麻呂、原本廣の字なし諸本に據て補ふ

○二十、類史なし

【慶雲三年】諸方樂、諸蕃の樂なり

位下石川朝臣宮麻呂爲大貳。○十二月乙卯、都下諸寺權施食封、各有差。○乙丑、令天下婦女、自非神部齋宮宮人及老嫗、皆髻髮。語在前紀。至是重制也。○丙寅、正四位上葛野王卒。○癸酉、无位山前王授從四位下、丹波王、阿刀王並從五位下、正六位上三國眞人人足、藤原朝臣武智麻呂、正六位下多治比眞人夜部、佐味朝臣笠麻呂、藤原朝臣房前、從六位上中臣朝臣石木、狛朝臣秋麻呂、坂本朝臣阿曾麻呂、多治比眞人縣守、阿倍朝臣安麻呂、從六位下波多朝臣廣麻呂、佐伯宿禰男、阿倍朝臣眞君、田口朝臣廣麻呂、巨勢朝臣子祖父、紀朝臣男人、正七位上大伴宿禰大沼田、正六位上坂合部宿禰三田麻呂、從六位下縣犬養宿禰筑紫、正六位上坂上忌寸忍熊、船連秦勝、從六位下美努連淨麻呂、並從五位下。○是日、新羅使金儒吉等入京。○是年、諸國二十飢疫、並加醫藥賑恤之。

三年春正月丙子朔、天皇御大極殿受朝。新羅使金儒吉等在列。朝廷儀衞有異於常。○己卯、新羅使貢調。○壬午、饗金儒吉等于朝堂。奏諸方樂于庭。叙位賜祿各有差。○丁亥、金儒吉等還蕃。賜其王勅書曰、天皇敬問

新羅王、使人一吉湌金儒吉、薩湌金今古等至、所獻調物並具之、王有國以還、多歷年歲、所貢無虧、行李相屬、欵誠既著、嘉尚無已、春首猶寒、比無恙也、國境之內、當並平安、使人今還、指宣往意、幷寄土物、如別、○壬辰、定大射祿法、親王二品、諸王臣二位、一箭中外院布二十端、中院二十五端、內院三十端、三品四品三位、一箭中外院布十五端、中院二十端、內院二十五端、四位一箭中外院布十端、中院十五端、內院二十端、五位一箭中外院布六端、中院十二端、內院十六端、其中皮者、一箭同布一端、若外中內院及皮重中者倍之、六位七位、一箭中外院布四端、中院六端、內院八端、八位初位、一箭中外院布三端、中院四端、內院五端、中皮者一箭布半端、若外中內院、及皮重中者如上、但勳位者不著朝服、立其當位次、○閏正月庚戌（丙午朔五）、以從五位上猪名眞人大村、爲越後守、○京畿及紀伊、因幡、參河、駿河等國並疫、給醫藥療之、是日、令掃淨諸佛寺幷神社、亦索捕盜賊、○戊午（十三）、奉新羅調於伊勢神宮及七道諸社、勅、收貯大藏諸國調者、令諸司每色撿按相知、又收貯民部諸國庸中、輕物絁絲綿等類、自今

○其王、新羅聖德王にて慶雲三年は同王即位五年なり
○行李、貪暇集に李字訛作レ李李古使字とあり
○土物、原本土を王に作る金一本に據て改む
○大射祿法、此に記す所は大藏式載する所と異同あり
○外院、唐六典兵部に武擧其試用有レ七一曰射長垜入二中院一爲レ上入二次院一爲二次上一入二外院一爲レ次とあり的に三重の圈子あり圈之を院と云院は垣墻なり中院とは今の射的當中の黑星なり
○四位一箭中外院布十端、原本に布の字なし前後の例に據て補ふ
○內院二十端、原本二十の下五の字あり諸本に據て削る
○中皮者、皮は的中の皮を云
○外中內院及皮重中者如上、原本に院の字なし前例に據て補ふ
○勳位者云々、式部式に凡勳位朝參者服二文位服一列二當位次第一若无二文位一著二黃袍一と見ゆ

(一)閏正月(二)收貯大藏云々、大藏式に凡受納調庸雜物者國帳至省先可納狀申官期月之後廿日以前隨次收納また凡受納出納者先申辨官辨官仰諸司共集然後給納さあり
○檢校、原本挍を授に作る金本に據て改む
○禱祈、類史に祈禱に作る
○泉內親王、天智天皇々女聖武紀天平六年二月薨す、天智紀七年に見ゆ
(二)二月(三)大神朝臣、持統紀六年に三輪朝臣に作る
○大花上、孝德紀大化五年所定の第七等
○利金、此人書紀に見えす
○季祿准右大臣、季祿は春夏秋冬の四季に賜ふ祿なり其色目數量式部式に見ゆ
○大舍人、左右大舍人寮に各八百人あり令義解に謂大舍人是供奉之人さあり分番宿直して雜事に供奉す
○食封之列、從來食封は三位に賜はりしを四位以上に賜ふことに改められしなり原本に列を例に作

以後、收於大藏、而支度年料、分充民部也、○乙丑、勅、令禱祈神祇、由天下疫病也、○癸酉、泉內親王參于伊勢大神宮、○二月庚辰、左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒、以壬申年功、詔贈從三位、大花上利金之子也、○辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿、准右大臣給之、○戊子、以從五位下阿倍朝臣首名、爲大宰少貳、山背國相樂郡女、鴨首形名三產六兒、初產二男、次產二女、後產二男、其初產二男、有詔爲大舍人、○庚寅、河內、攝津、出雲、安藝、紀伊、讃岐、伊豫七國飢、並賑恤之、詔曰、准令、三位以上已在食封之列、四位以下寔有位祿之物、又四位有飛蓋之貴、五位無冠蓋之重、不應有蓋无蓋同在位祿之列、故四位宜入食封之限、又案令、諸王諸臣、位封、自正一位三百戶、差降止從三位一百戶、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戶、差降止從四位八十戶、又制七條事、准令、諸長上官遷代、皆以六考爲限、餘色得選、色別加二考、以十二考爲選限、百官得選之限太遠、宜色別減二考、各定選限、其准令、藉蔭入選、雖有出身之

る諸本に據て改む
○飛蓋、儀制令に凡蓋三位以上紺四位縹とあり抄調度部服玩具に華蓋兼名苑云華蓋(岐沼加散)黃帝征蚩尤時當帝頭上有五色雲因其形所造也と見ゆ
○正一位六百戶云々、祿令の集解に正一位六百戶從一位五百戶正二位三百五十戶從二位三百戶正三位二百五十戶從三位二百戶正四位百戶從四位八十戶とあり
○色別加二考、選叙令義解に凡考選之限都有四科内長上六考内分番八考外長上十考外散位十二考とあり尚此事稱德紀天平寶字八年十一月に詳なり
○出身、其身出で、官職に就くを云選叙令に凡授位皆限年廿五以上唯以蔭出身皆限年廿一以上集解に入色年限起從十七也また古記を引きて十七出身起十八盡二十五合八年考滿成選叙位とあり
○未明、原本に明を闇に作る諸本に據て改む
○貢擧、考課令に凡貢人

條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身、非因貢擧及別勅處分、並不在常選之限、其二 准律令、於律雖有除名之人六載之後聽叙之文、令內未載除名之罪限滿以後應叙之式、宜議作應叙之條、其三 准令、京及畿內人身輸調、於諸國減半 宜罷人身之布輸戶別之調、乃異外邦之民、以優內國之口、輸調之式、依一戶之丁制四等之戶、輸調多少、議作餘條例、其四 准令、正丁歲役收庸布二丈六尺、當欲輕歲役之庸、息人民之乏、並宜減半、其大宰所部、皆免收庸、若公作之役、不足傭力者、商量作安穩條例、永爲法式、其五 准令、一位以下、及百姓雜色人等、皆取戶粟以爲義倉、是義倉之物、給養窮民、預爲儲備、今取貧戶之物、還給乏家之人、於理不安、自今以後、取中々以上戶之粟、以爲義倉、必給窮乏、不得他用、若官人私犯一斗以上、即日解官、隨贓決罰、其六 准令、五世之王、雖得王名、不在皇親之限、今五世之王、雖有王名、已絕皇親之籍、遂入諸臣之例、顧念親親之恩、不勝絕籍之痛、自今以後、五世之王、在皇親之限、其承嫡者相承爲王、自餘如令、其七 ○[廿二]丙申、授船號佐伯從五位下、入唐執節使從三位粟田朝臣眞人之所乘者也 ○[廿三]丁酉、車駕幸、

皆本部長官貢、送太政官、若无長官、次官貢其人、臨朝集使赴集、辛日引見弁官、即付式部、云々其大學擧人具狀申太政官、與諸國貢人同試とあり ○除名、名例律に凡除名者官位勳位悉除、課役從本色、六載之後聽敍とあり

内野。○己亥、五世王朝服、依格始著淺紫。○庚子、京及畿内盗賊滋起。因差強幹人、悉令逐捕焉。是日、甲斐、信濃、越中、但馬、土佐等國一十九社、始入祈年幣帛例。其神名具神祇官記。

○聽敍之文、原本文を又に作る諸本に據て改む ○除名之罪、原本に名を目に作る諸本に據て改む ○身幷調、孝德紀大化二年に出づ ○(廿)於諸國減半、賦役令に凡調絹絁絲綿布云々正丁一人布二丈六尺並二丁成端、京及畿内一丈三尺とあり ○人身之布、人々其身に就て出さしむる布なり、云原本に人を入に作る諸本に據て改む ○外邦、畿外の國をいふ ○四等之戶、用令集解に格文を載せて一戶之内八丁以上爲大戶、六丁爲上戶、四丁爲中戶、二丁爲下戶、二丁不在計例也とあり ○議作餘條例、令本に議の字なし、閣本に餘の字なし ○正丁歲役、賦役令に凡正丁歲役十日者須收庸者布二丈六尺須留役者滿卅日租調俱免通正役並不得過卅日とあり ○皇親、繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲親王云々自親王五世雖得王名不在皇親之限とあるを實にし、五世王は皇親とせられしなり ○義倉、賦役令義解に謂分富貧其情合義故曰義倉也とあり 令制上々戶より下々戶まで九等に分ち等級に應じて上々戶は二石下々戶は一斗を收めしめたるを改て中下戶以下を除外することに定められしなり ○皇親之籍、籍は名籍なり職員令に正親正掌皇親名籍事とあり ○舳號佐伯、原本に號を首に作る令本閣本に據て改む ○(注)入唐云々、考證に以下十九字正文此爲分行小字非是とあり ○內野、二年二月紀に辛宇智郡とあるに同じ ○始著淺紫、衣服令に諸王一位深紫衣二位以下五位以上並淺紫衣とあり ○強幹人、考課令義解に幹は強也とあり ○新年、神祇令に仲春祈年祭、義解に祈猶禱也欲令歲災不作時令順度即於神祇官祭之故曰祈年とあり ○(注)神祇官記、即ち神名帳なり

(三月)禮者天地經義、左傳昭二十五年に子大叔曰夫禮天之經也地之義也民之行也天地之經而民實則之とあり ○人倫、原本に倫を俗に作る諸本に據て改む ○道德仁義云々、禮記曲禮に道德仁義非禮不成教訓正俗非禮不備とあり ○穢臭、字鏡に嗅臭同、

○三月丙辰、右京人日置須太賣、一産三男。賜衣粮并乳母。○丁巳、詔曰、夫禮者、天地經義、人倫鎔範也。道德仁義、因禮乃弘。教訓正俗、待禮而成。比者、諸司容儀、多違禮義。加以男女无別、晝夜相會。又如聞、京城内外、多有穢臭。良由所司不存撿察。自今以後、兩省五府、並遣官人及衛士、嚴加捉搦。隨事科決。若不合與罪者、錄狀上聞。又詔曰、軒冕之群、受代耕

之祿、有秩之類、無妨於民農、故召伯所以憇甘棠、公休由其拔園葵、頃者、王公諸臣多占山澤、不事耕種、競懷貪婪、空妨地利、若有百姓採柴草者、仍奪其器、令大辛苦、加以被賜地、實止有一二畝、由是踰峯跨谷、浪爲境界、自今以後、不得更然、但氏々祖墓及百姓宅邊、栽樹爲林、并周二三十許歩、不在禁限、○夏四月(甲戌朔)壬寅(廿九)、河內、出雲、備前、安藝、淡路、讚岐、伊豫等國飢疫、遣使賑恤之、○五月(癸卯朔)丁巳(十五)、河內國石川郡人河邊朝臣乙麻呂獻白鳩、賜絁五疋、絲十絇、布二十端、鍫二十口、正稅三百束、○六月癸酉朔、日有蝕之、○丙子(四)、令京畿祈雨于名山大川、○丙申(廿四)、從四位下與射女王卒、○秋七月(壬寅朔)壬子(十一)、以從四位上巨勢朝臣太益須爲式部卿、○辛酉(廿)、以從五位下笠朝臣麻呂爲美濃守、○乙丑(廿四)、丹波、但馬二國山災、遣使奉幣帛于神祇、卽雷聲忽應、不撲自滅、大倭國宇智郡猤嶺山火、撲滅之、○戊辰(廿七)、以從五位下阿倍朝臣眞君爲大倭守、○己巳(廿八)、周防國守從七位下引田朝臣秋庭等獻白鹿、○諸國飢、遣使於六道、(除西海道)並賑恤之、○大宰府言、所部九國三嶋亢旱大風、拔樹損稼、遣使巡省、因免被災尤甚者調役、○八月(壬申朔)

許救、居久二反、加久、又久佐之とあり
○良由、原本に由を田に作る諸本に據て改む
○兩省、式部兵部なり
○五府、五衛府なり
○軒冕之群、字書に軒は車廂也冕は冠之前後垂旒者也とあり玉冠を載き車に乘る官位高き人を云
○代耕、禮記王制に諸侯之下士視上農夫祿足以代其耕也中士倍下士上士倍中士云々とあり官吏は農民が代て耕す所の祿を受くるを云
○有秩之類、秩祿ある者を云
○召伯云々、毛詩召南甘棠に見ゆ召伯は百姓を煩勞せしめざらむか爲に甘棠の下にやどり休息して男女の訟をきゝし故に國人其德化を思ひ其樹を敬したるなり
○公休云々、史記循吏列傳に公儀休食茄而美拔其園葵而棄之云々欲令農士工女安所讐其貨乎と見え民と利を爭はざるをほめたるなり
○仍奪、原本に奪を奪に作る俗字なり
(六月)與射女王、系詳

ならず
(七月)狹嶺山火、狹嶺山は大和志に宇智郡大深村(今坂合部村大字)にありと見ゆ原本に狹を狡に作る諸本に據て改む類史火を災に作る
○九國、大隅國を置きしは和銅六年なれば此に九國とあるは追書せるなり
○三嶋、壹岐對馬多褹なり
○亢旱、原本亢を冗に作る金本に據て改む
(八月)美努連、原本努を弩に作る二年十二月癸酉の條に據て改む
(九月)始定田租法、田令に段租稻二束二把町租稻廿二束、義解に束稻舂得米五升也とあり格文を以て一段の租を七升五合一町の租を七斗五升と定められしなり租稅志に慶雲三年九月廿日の格に田租令以前の束を取て令內の把に擬すれば令條の段租其實猶益すと云々宜しく段の租一束五把町の租一十五束を收むべしとあるを引きて試に令前の大升を以て令の二束二把の米を量るに七升六合三勺八撮有奇を得令前の東五把

甲戌、越前國言、山災不止、遣使奉幣部內神救之、○壬辰、以從五位下美努連淨麻呂、爲遣新羅大使、○庚子、遣三品田形內親王、侍于伊勢大神宮、○九月甲辰、以從五位下坂合部宿禰三田麻呂、爲三河守、○丙辰、遣使七道、始定田租法、町十五束、及點役丁、○丙寅、行幸難波、○冬十月壬午、還宮、攝津國造從七位上凡河內忌寸石麻呂、山背國造外從八位上山背忌寸品遲、從八位上難波忌寸濱足、從七位下三宅忌寸大目、合四人、各進位一階、○乙酉、從駕諸國騎兵六百六十人、皆免庸調并戸內田租、○十一月癸卯、賜新羅國王勅書曰、天皇敬問新羅國王、朕以虛薄、謬承景運、慚無練石之才、徒奉握鏡之任、日旰忘飡、翼翼之懷愈積、宵分輟寢、業々之想彌深、冀覃覆載之仁、遐被寰區之表、況王世居國境、撫寧人民、深秉並舟之至誠、長脩朝貢之厚禮、庶磐石開基、騰茂響於窮岫、維城作固、振芳規於鴈池、國內安樂、風俗淳和、寒氣嚴切、比如何也、今故遣大使從五位下美努連淨麻呂、副使從六位下對馬連堅石等、指宣往意、更不多及、○戊申、從五位下大市王、爲伊勢守、○十二月辛未朔、

に較ぶれば一合三勺八撮有奇を增す令前の十五束は令條の廿一束六把に當れり因て更に租法を折衷施行せむと謂ふに在りと云り

日有蝕之、○丙子(六)、遣四品多紀内親王、參于伊勢大神宮、○己卯(九)、有勅、令天下脫脛裳、一著白袴、是年、天下諸國疫疾、百姓多死、始作土牛大儺、

(十月)攝津國造云々、凡河内忌寸石麻呂以下四人何れも地方の名族たるを以て特に叙位ありしなるべし　(十一月)練石之才、淮南子覽冥訓に女媧鍊五色石以補蒼天とあり　○握鏡、帝範の序に啓金鏡而握金樞、藝文類聚云把神珠握金鏡擊天鼓揮地鐘皆喩人君總攬乾綱之意とあり　○翼翼之懷、毛詩大雅に小心翼々、傳に翼々恭也とあり恭謹なるを云　○業々之想、尙書皐陶謨に兢々業々、爾雅釋訓に業々危也とあり危ぶみ恐れて戒愼するを云　○並舟、古事記仲哀天皇の段に雙船不乾船腹また持統紀に新羅並舳不干檝奉仕之國とも見えたり之に據て記せるなるべし　○磐石、漢書文帝紀に高帝王子弟犬牙相制所謂磐石之宗也とあり　○礪岫、下の厲池と相對す　○維城、詩大雅生民之什に懷德維寧宗子維城とあり繼體紀元年に見ゆ　○厲池、未詳　○嚴切、原本切を功に作る諸本に據て改む　○從五位下大市王、慶雲元年正月紀に无位大市王授從四位下とあり五は四の誤なるべし　(十二月)令天下脫脛裳云々、持統紀朱鳥元年七月の條に男夫著脛裳と見えしを禁じて一に白袴を著せしめられしなり考證に按衣服令白袴一品以下初位以上皆通用之卽此然依紀文令條所載疑亦係養老追改也とあり　○土牛、陰陽式に土牛童子等像大寒日前夜半時立於諸門立春之日前夜半時乃撤とあり陽明待賢門には青色美福朱雀門には赤色談天藻壁門には白色安嘉偉鑒門には黑色郁芳皇嘉殷富達智の四門には黃色の土牛を立つるなり　○大儺、儺は年中の疫氣をはらふなり字書に驅疫也とあり鬼やらひとも云

【慶雲四年】正月、此下恐くは脫文あらむ　○乙亥、干支を推すに正月庚子朔にて乙亥なし二月は庚午朔にて乙亥は六日なり　○議遷都事、元明紀和銅三年三月都を平城に遷せること見ゆ　○椋垣直、原本椋を掠に作る和銅二年正月紀に據て改む　○授成選人等位、大日本史注に據年中行事公事根源列見擬奏于此とあ

四年(丁未)春正月(庚子朔)乙亥(六)、因諸國疫、遣使大祓、○戊子(九)、詔諸王臣五位已上、議遷都事也、○辛卯(十二)、主稅寮助從六位上椋垣直子人賜連姓、○甲午(廿五)、天皇御大極殿、詔授成選人等位、親王已下五位已上男女、一百十人各有差、又授无位直見王從六位上、紀朝臣諸人從六位下、高向朝臣色夫智、小治田朝臣安麻呂、小治田朝臣宅持、上毛野朝臣堅身、正七位下高橋朝臣上麻呂、從六位下中臣朝臣人足、平群朝臣安麻呂、正六位上高志連

り
○直見王、系詳ならず
○國覓忌寸、原本に忌寸を尋の一字に作る棭齋の說に據て改む聖武紀神龜二年閏正月の國覓忌寸勝麻呂は即ち其同姓なり
○並授、授恐くは衍なるべし
(三月)巨勢朝臣邑治、考證に邑治大寶元年與粟田朝臣眞人等入唐凡經六年而歸且據爲大位此書副使者蓋大使高橋朝臣笠間罷不往唐副使坂合部宿禰大分代之邑治又代大分爲副使也とあり
○從四位上下毛野朝臣、原本上を下に作る二年四月の條に據て改む
○下毛野川內朝臣、下野國河內郡あり此地に因て改むるか
○印牧駒犢、牧にある駒犢二歲に至れば每年九月國司牧長と共に檢印して籍簿を作りしこと廐牧令左馬寮式等に詳なり
(四月)日並知皇子命、持統紀三年四月に注せり
○國忌、先皇崩御の日を云ふ
○藤原朝臣、不比等なり

村君、國覓忌寸八嶋、幡文造通、並授從五位下。○三月庚子、遣唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等自唐國至。○庚申、從四位上下毛野朝臣古麻呂、請改下毛野朝臣石代姓爲下毛野川內朝臣、許之。○甲子、給鐵印于攝津伊勢等二十三國、使印牧駒犢。○夏四月庚辰、以日並知皇子命薨日、始入國忌。○壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃仕奉狀者今乃未母不在、掛母畏支天皇御世御世仕奉而、今母又朕卿止爲而、以明淨心而、朕乎助奉仕奉事乃、重支勞支事乎、所念坐御意坐爾依而、多利麻比豆夜夜彌賜閇婆、忌忍事爾似事乎志奈母常勞彌重彌所念坐久止宣。又難波大宮御宇　掛母畏支天皇命乃、汝父藤原大臣乃仕奉賈流狀乎婆、建內宿禰命乃仕奉賈流事止同事叙止勅而、治賜慈賜賈利。是以令文所載多流乎跡止爲而、隨令長遠久、始今而次次被賜將往物叙止、食封五千戶賜久止勅　命　聞　宣。辭而不受、減三千戶、賜二千戶、一千戶傳于子孫。又詔、益封親王已下四位已上及內親王、諸王嬪命婦等、各有差。○丙申、天下疫飢、詔加賑恤。但丹波、出雲、石見三國尤甚、奉幣帛於諸社。又令

○重支勞支事、解に重支はやむことなく重く大きなる意勞支は俗に苦勞なる事といふ意なり
○多利麻比弖、解に利は知の誤にて立廻るなるべし不比等の功勞を賞せむとの御心をつけて其機を窺ひ給ふを云
○夜夜彌、漸看なり速に行はずして事のさまを見つゝあるを云
○忌忍事爾云々、忌憚りて忍びて默止し居るを云か
○難波大宮云々、孝德天皇を申奉る
○藤原大臣、鎌足なり大臣はオホオミと訓むぞ古言なる
○仕奉賈流、賈は覇の誤なるべし下同じ
○五千戸、食封は祿令に太政大臣三千戸左右大臣二千戸とあるを此は特に五千戸賜へるなり同令に凡令條之外若有特封及増者並依別勅とあるに據られしなり
○賜二千戸一千戸、稱德紀天平神護元年四月の條に據るに一千戸の三字は疑らくは衍
○山田史御方、持統紀に

京畿及諸國寺讀經焉、賜正六位下山田史御方布鍫鹽穀、優學士也、○五月己亥、兵部省始錄五衞府五位以上朝參及上日、申送太政官、○乙巳、以正五位下多治比眞人水守為河内守、○壬子、給從五位下巨勢朝臣邑治、從七位上賀茂朝臣吉備麻呂、從八位下伊吉連古麻呂等、絁綿布鍫并穀、各有差、並以奉使絶域也、○癸丑、美濃國言、村國連等志賣一産三女、賜穀四十斛、乳母一人、○戊午、畿内霖雨損苗、遣使賑恤之、○癸亥、讃岐國那賀郡錦部刀良、陸奧國信太郡生王五百足、筑後國山門郡許勢部形見等、各賜衣一襲及鹽穀、初救百濟也、官軍不利、刀良等被唐兵虜、沒作官戸、歴四十餘年乃免、刀良至是遇我使粟田朝臣眞人等、隨而歸朝、憐其勤苦有此賜也、○乙丑、從五位下美努連淨麻呂、及學問僧義法、義基、惣集、慈定、淨達等至自新羅、○六月丁卯朔、日有蝕之、○辛巳、天皇崩、遺詔、擧哀三日、凶服一月、○壬午、以三品志紀親王、正四位下犬上王、正四位上小野朝臣毛野、從五位上佐伯宿禰百足、黃文連本實等、供奉殯宮事、擧哀著服、一依遺詔行之、自初七至七七、於四大寺設齋、

焉、○冬十月丁卯（乙丑朔三）、以二品新田部親王、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下佐伯宿禰太麻呂、從五位下紀朝臣男人、爲造御竈司、從四位上下毛野朝臣古麻呂、正五位上土師宿禰馬手、正五位下民忌寸比良夫、從五位上石上朝臣豐庭、從五位下藤原朝臣房前、爲造山陵司、正四位下犬上王、從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位下黃文連本實、米多君北助、爲御裝司、○十一月丙午（乙未朔十二）、從四位上當麻眞人智德率誄人奉誄、謚曰倭根子豐祖父天皇、卽日火葬於飛鳥岡、○二十日、奉葬於檜隈安古山陵、

續日本紀卷第三

御形、萬葉に三方に作る懷風藻に大學頭從五位下山田史三方とあり詩三首を載せたり

（五月）伊吉連古麻呂、懷風藻に從五位上上總守伊支連古麻呂とあり　○賑恤、紀略賑を振に作る賑は賑の古字　○刀良、原本刀を力に作る諸本に據て改む　○生王、類史に壬生に作る　○初救百濟、天智二年紀に百濟を救ふこと見ゆ今に至る迄四十五年を經たり　○官戶、唐六典に凡反逆相坐沒其家爲官奴婢一免爲番戶再免爲雜戶三免爲良人皆因赦宥所及則免之、注に諸律令格式有言官戶者是番戶之總號非謂別有一色とあり

（六月）天皇崩、大日本史に天皇崩年二十五、注に年據懷風藻水鏡一代要記神皇正統記愚管抄とあり　○黃文連本實、大寶二年十二月及下文に據るに黃上恐くは從五位下の四字を脫す　（十月）從四位上下毛野朝臣、原本正四位下に作る三月庚申の條及和銅元年三月同年七月紀に據て改む　（十一月）倭根子豐祖父天皇、一代要記に天津足根大父天皇とあり　○二十日、四年十一月紀に甲寅に作る　○檜隈安古山陵、諸陵式に檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇在大和國高市郡陵墓要覽に同郡阪合村大字栗原とあり　略記に山陵高三丈方一町と見ゆ

【慶雲四年】阿閇皇女、或は阿倍又安倍に作る
○宗我嬪、天智紀に蘇我山田石川麻呂大臣女姪娘生御名部皇女與阿陪皇女とさ見ゆ
○石川麻呂大臣、孝德天皇の御代に右大臣さなる大化改新の元勳の一人なりしが弟日向の讒に由て自殺す、元慶七年十二月石川朝臣木村言、始祖大臣武內宿禰男宗我石川生於河內國石川別業故以石川爲名賜宗我大家爲居云々さ見え石川氏の由來明なり
○東樓、大極殿の東樓蒼龍樓即ち左近陣なるべし
○督率、原本率を卒に作る紀略に據て改む督率は五衛府の長官なり衛士衛

續日本紀卷第四

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起慶雲四年七月盡和銅二年十二月

日本根子天津御代豐國成姬天皇　元明天皇　第卅三

日本根子天津御代豐國成姬天皇、小名阿閇皇女、天命開別天皇之第四皇女也、母曰宗我嬪、蘇我山田石川麻呂大臣之女也、適日並知皇子尊、（草壁）生天之眞宗豐祖父天皇、（文武）慶雲三年十一月、豐祖父天皇不豫、始有禪位之志、天皇謙讓、固辭不受、四年六月、豐祖父天皇崩、○庚寅、（廿四）天皇御東樓、詔召八省卿及五衛督率等、告以依遺詔攝萬機之狀、○秋七月（丙申朔）壬子、（十七）天皇卽位於大極殿、詔曰、現神八洲御宇倭根子天皇詔旨勅命、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民、衆聞宣、關母威岐藤原宮御宇倭根子天皇丁酉八月爾、此食國天下之業乎、日並所知皇太子之嫡子、今御宇豆留天皇爾授賜而並

坐而、此天下乎治賜比諧賜岐、是者關母威岐、近江大津宮御宇大倭根子天皇乃與二天地一共長、與二日月一共遠、不レ改常典止、立賜比敷賜留法乎、受被賜坐而行賜事止、衆受被賜而、恐美仕奉利豆羅久止詔命乎、衆聞宣、如是仕奉侍爾、去年十一月爾威加母我王朕子天皇乃詔豆羅久、朕御身勞坐故、暇間得而御病欲レ治、此乃天豆日嗣之位者、大命爾坐世大坐坐而治可レ賜止、讓賜命乎、受被賜坐而、答曰豆羅久、朕者不レ堪止辭白而、受不レ坐在間爾、遍多久日重而讓賜倍婆、勞美威美、今年六月十五日爾、詔命者受賜止白奈賀羅、此重位爾繼坐事乎奈母、天地心乎勞美重美、畏坐左久止詔命、衆聞宣、故是以親王始而、王臣百官人等乃、淨明心以而、彌務爾彌結爾、阿奈奈比奉輔佐奉牟事爾依而志、此食國天下之政事者、平長將在止奈母所念坐、又天地之共長遠不レ改常典止立賜覇留食國法母、傾事無久動事无久、渡將去止奈母所念行左久止詔命、衆聞宣、遠皇祖御世乎始而、天皇御世御世、天豆日嗣止

門に督と云ひ兵衞に率と云

(七月)壬子、十七日なれば此の條下の辛丑の次に叙すべし

○天皇即位、大日本史注に愚管抄歴代皇記爲二六月十五日一、蓋以二帝崩受一遺詔二之日爲二即位之日一と云り

○現神八洲御宇云々、文武天皇即位詔(一頁)に注せり

○關母威岐、原本關を開に作る淀本に據て改む下同じ關字をカケと訓むは關係の意なりカケマクのマクはムの延語にて言の葉にかけむも恐れ多しとの意

○丁酉、持統天皇十一年にて卽ち文武天皇の元年なり

○日並所知皇太子、原本所の字なし諸本に據て補ふ

○今御宇豆留天皇、文武天皇に坐せり

○並坐、此時持統天皇は太上天皇に坐しゝが文武天皇と並び坐して天下の大政を見そなはし給ふ由なり

○近江大津宮御宇、天智

高御座爾坐而、此食國天下乎、撫賜比慈賜事者、辭立不在、人祖乃意能賀弱兒乎養治事乃如久、治賜比慈賜來業止奈母、隨神所念行須、是以先豆先豆天下公民之上乎慈賜久、大赦天下、自慶雲四年七月十七日昧爽以前大辟罪以下、罪無輕重、已發覺未發覺、咸赦除之、其八虐之內已殺訖、及强盜竊盜、常赦不免者、並不在赦例、前後流人非反逆緣坐、及移鄕者、並宜放還、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、給侍高年百歲以上、賜籾二斛、九十以上一斛五斗、八十以上一斛、八位以上、級別加布一端、五位以上不在此例、僧尼准八位以上、各施籾布、賑恤鰥寡惸獨不能自存者、人別賜籾一斛、京師畿內、及大宰所部諸國今年調、天下諸國今年田租、復賜久止詔天皇大命乎、衆聞宣、○庚子、有事于大內山陵、○辛丑、遣使於大宰府、授南嶋人位、賜物各有差、○丙辰、始置授刀舍人寮、

天皇に坐せり ○不改常典、此の句解にカハルマジキツネノノリと字の如く訓めり所謂近江朝廷の令を制定して永世の法を立てられしを云 ○敷賜留、敷き施し給ふを云 ○受被賜坐、持統天皇も文武天皇も次々に其常典を承はりて政ごち給ふとなり ○衆受被賜云々、親王王諸臣百官天下公民諸なり ○仕奉利豆羅久止、衆の仕へ奉るとなりツラクはツルの延語 ○詔命、元明天皇の詔命なり ○我王朕子天皇、文武天皇を申す ○勞坐、原本の訓イタハリマスを解にツカラシクマスと訓むべしと云り ○日嗣、原本嗣を詞に作る嗣は詞の假字なり今諸本に據て改む ○大命爾坐世云々、原本坐世の世を母に作る他の例に據て改む、大命に坐世の句解に穢さも解に坐世は令隨(マヽ)の意なりと云り天皇の大命のまに〳〵天位にましまして天下を治め給へと讓り給へりとなり ○治可賜止、上の天日嗣者とあるは此に係れり ○答曰、元明天皇のなり ○漏多、解にタビマネクと訓べしと云り ○日重、日の字を原本曰に作るは誤なれば改む ○受賜、元明天皇時自らの御詞なり ○重位爾、爾は乎とあるべき語呂なるを爾とせるは此頃の用ひざまなるべし ○天地心乎、天津神國津神

の御心とあるべきを字の如く支那風の天地の心と書けるなり　○阿奈奈比奉、輔佐(タスク)は奉ると同意の語なり解に倭名抄造作具に麻作アナヽヒとあり此は今の世の足代(アシ、ロ)と云もの丶如し之をアナ、ヒと云は足荷(アシニナヒ)の義なるべしその如く臣の下に在て君を輔持するを云也と云り　○依而志、原本志を者に誤れるを改む　○渡將去、御世々を經行くを云　○遠皇祖云々、此上に又の字あらまほしと云　○獨立、獨は單なり常に異なりて殊なることをするを云　○人祖、人の父母の意　○弱兒、幼稚き兒を云　○養治、ヒタスは日足にて兒を育つるを云　○昧爽、夜明けを云　○不免者、例に據るに不の上に所の字を脫す　○流人、原本流を諸に作る紀略に據て改む　○反逆緣坐、名例律に反逆緣坐流、疏に謂緣坐反逆得流罪者とあり　○移郷、賊盗律に殺人應死會赦免者移郷若群盗共殺止移下手者及頭首一人とあり後世の所拂なり　○亡命山澤、山林澤池に逃隱るゝを云　○挾藏軍器、養老元年十一月詔に藏禁兵器とあり　○給侍、戸令に凡年八十及篤疾給侍一人、九十二人、百歳五人とあるを云　○糺、原本粗に作る紀略に據て改む　○庚子、及辛丑の二條壬子の條の上に移すべし　○大内山陵、天武天皇山陵を云　○南嶋、文武紀三年八月に見ゆ　○授刀舍人寮、職官志に此不載其官員和銅元年三月以小野馬養爲帶劍長官亦其次官以下不載養老四年正月置授刀舍人寮醫師一員是已五年十二月令授刀寮及五衛府各設鉦鼓一面作將軍之號令習兵士之耳目蓋授刀舍人寮或略稱授刀寮又其稱帶劍義同授刀此臨時所置是以其官若無定名亦不有定員也とあり

(八月)水手等云々、賦役令集解に靈龜三年十一月八日官符を載せて遣大唐國水手已上彼家徭役事正身一戸方巳免不及別考とあり

(九月)氏長、氏上なり文武丁酉年閏十二月紀に云り

(十月)文忌寸禰麻呂、原本禰を彌に作る天武紀に根麻呂大寶元年七月紀に尼麻呂、古京遺文に禰麻呂とあるに據て改む古京遺文に壬申年將軍左衛士府督正四位上文禰麻呂忌寸慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒とあり、狩谷氏云此云十月壬子卒者疑史筆之誤但正四位上是

八月(丙寅朔)辛巳(十六)、入唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等、進位有差、從七位上鴨朝臣吉備麻呂授從五位下、水手等給復十年、○九月(丙申朔)丁未(十二)、正五位下大神朝臣安麻呂爲氏長、○冬十月(乙丑朔)戊子(廿四)、從四位下文忌寸禰麻呂卒、遣使宣詔、贈正四位上、並賻絁布、以壬申年功也、○十一月(乙未朔)丙申(二)、賑恤志摩國、以從五位下安倍朝臣眞君、爲越後守、○甲寅(廿)、葬倭根子豐祖父天皇(文武)于安古山陵、○戊午(廿四)、彈正尹從四位下衣縫王卒、○十二月乙丑朔、日有蝕之、○戊辰(四)、伊豫國疫、給藥療之、○辛卯(廿七)、詔曰、凡爲政之道、以禮爲先、无禮言亂、言亂失旨、往年有詔、停跪伏之禮、今聞、内外廳前、皆不嚴

贈位等二年四月紀天平寶字元年十二月紀亦並云贈正四位上可以證焉曰不曰贈者蓋書人之誤其爲右衞士督史不載乃缺文也と云

肅、進退无禮、陳答失度、斯則所在官司不恪、其次、自忘禮節之所致也、宜自今以後、嚴加糺彈、革其弊俗、使靡淳風、

〔十一月〕阿倍朝臣眞君、此人な越後守と爲すここ和銅元年三月紀に見えたり　○興祖父、金木閣本及紀略等祖な大に作る　○安古山陵、奈良縣高市郡坂合村大字栗原　○衣縫王、持統紀七年に遣京司衣縫王と見えたれど系詳ならす　〔十二月〕位跪伏之禮、往年とは慶雲元年正月な云

【和銅元年】和銅、熟銅なり銅銖な經たるを云銅鑛に對して云り
○高天原與利天降坐志天皇、遍々勅命な申奉る金木閣本與利な由の一字に作る
○天豆日嗣、解に此下に止と讀付べし前詔後詔天豆日嗣止高御座爾坐而とある例也と云
○慈賜來、解云末に出でたる御慈の作々な詔給はむ爲に先づかくは詔給ふなり
○食國天下之業、天下を治め給ふ天皇の大御業の義
○隨神、金木閣本等に神隨とあり
○天豆日嗣之業、此下に止の字を置きて訓むべし
○皇朕、天皇の御親ら詔ふ言

和銅元年（戊申）春正月乙巳（十一）、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、高天原與利天降坐志天皇御世乎始而、中今爾至麻氏爾、天皇御世御世、天豆日嗣高御座爾坐而、治賜慈賜來、食國天下之業止奈母、隨神所念行佐久止詔命乎、衆聞宣、如是治賜慈賜來留天豆日嗣之業、今皇朕御世爾當而坐者、天地之心乎勞彌重彌辱彌恐彌坐爾、聞看食國中乃東方武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、此物者、天坐神地坐祇乃相于豆奈比奉福波倍奉事爾依而、顯久出多留寶爾在羅之止奈母、神隨所念行須、是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波久止詔命乎、衆聞宣、故改慶雲五年而和銅元年爲而、御

世年號止定賜、是以天下爾慶命詔久、冠位上可賜人人治賜、大赦天下、自和銅元年正月十一日昧爽以前、大辟罪已下、罪无輕重、已發覺未發覺、繫囚見徒、咸赦除之、其犯八虐、故殺人、謀殺人已殺、賊盜常赦所不免者、不在赦限、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、高年、百姓、百歲以上、賜籾三斛、九十以上二斛、八十以上一斛、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、優復三年、鰥寡惸獨不能自存者、賜籾一斛、賜百官人等祿各有差、諸國々郡司加位一階、其正六位上以上不在進限、免武藏國今年庸、當郡調庸、詔天皇命乎、衆聞宣、是日、授四品志貴親王三品、從二位石上朝臣麻呂、從二位藤原朝臣不比等、並正二位、正四位上高向朝臣麻呂從三位、正六位上阿閇朝臣大神、正六位下川邊朝臣母知、笠朝臣吉麻呂、小野朝臣馬養、從六位上上毛野朝臣廣人、多治比眞人廣成、從六位下大伴宿禰宿奈麻呂、正六位上、阿刀宿禰智德、高庄子、買文會、從六位下日下部宿禰老、津嶋朝臣堅石、无位上金元、並從五位下、○二月甲子朔、甲戌、始置催鑄錢司、以從五位上多治比眞人三宅

○勞彌重彌辱彌恐彌、こゝの辱彌は恐れ憚る意にて恥づる意も添ひて俗に恐多い勿體ないなどと云に當れり

○出在、イデタリと訓べしタリに在字を訓ること例多し

○相于豆奈比、神の受納し給ふを云、相は添ひたる語、于豆はうるはしくめでたきを云、奈比は活きを助くる語なり

○御世年號、ミヨノナと訓べし次々の詔の例に據る

○慶命詔久、次の冠位云々の文即ち御命なり

○冠位、冠はカヾフリと訓べし此時は已に冠を賜ふに代へて位記を以てすることに改りたれど宣命などにはなほ如此歴史的の名目を以て冠位と宣ふなり

○治賜、冠位を上げ給ふを云

○軍器、金本閣本會本禁書に作る

○諸國々郡司、々は原本之に作る誤なること明なれば改む

○當郡、和銅の出でし秩父郡を云

○調庸、庸の字は紀略に據て補ふ　○高庄子、神龜元年五月紀に賜正八位上高庄勝姓三笠連と見ゆ（姓氏錄には御笠連に作る）庄勝は其の子孫なるべし　○賈文會、內藤氏云賈疑賈字之譌、養老五年正月紀に賈受君あり錄右京諸蕃にも見ゆ　○日下部、金本閣本日下を早の一字に作る　○金上元、元は原本无に作る二年十一月紀に據て改む

（二月）備錢司、紀略に備の字なし　○上玄、天を云文選甘泉賦に惟漢十紀將郊上玄とあり　○紫宮、皇位を云　○作之者勞云々、此二句張衡の東京賦に出づ、作は原文爲に作れり　○揆日瞻星、毛詩鄘風定之方中作于楚宮、揆之以日作于楚室、疏云揆日瞻星以定東西南北とあり　○卜世相土、卜世は左傳に成王定鼎於郟鄏卜世三十卜年七百天所命也とあり相土は尚書周官傳に來者相土遷宅以享永祚とあり　○定鼎之基永固、原本永は定の下にあり金本閣本等に據て改む　○獨逸豫、逸は安逸、豫は安樂なり考證に一本獨の上に豈の字ありと云　○其可遠乎、考證云遠疑違字之譌　○殷王五遷、尚書盤庚に出づ湯王より盤庚に至るまで五たび國都を徙せるを云　○周后三定、三定は豐邑、鎬京、洛邑の三所に都を定めしを云　○安以遷云々、こゝも脫文あるべし安宅は毛詩小雅に鴻鴈劬勞其究安宅とあるに據る　○四禽叶圖、所謂四神相應の地を云　○三山作鎭、三山は香久山畝傍山耳梨山を云　○龜筮並從、尚書洪範に龜從筮從とあるに據る　○宜其營構資、鴨本宜を且に作ると云宜恐くは須ならむ　○令造、令は原本合に作る紀略に據て改む　○子來之義、毛詩大雅に經始靈臺經之營之庶民攻之不日成之經始無亟庶民子來とあるに據れり

（三月）山背備前二國、類史に山背備後備前三國

麻呂任之、讃岐國疫、給藥療之、○戊寅、詔曰、朕祗奉上玄、君臨宇內、以菲薄之德、處紫宮之尊、常以爲、作之者勞、居之者逸、遷都之事、必未遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基永固、無窮之業斯在、衆議難忍、詞情深切、然則京師者、百官之府、四海所歸、唯朕一人、獨逸豫、苟利於物、其可遠乎、昔殷王五遷、受中興之號、周后三定、致太平之稱、安以遷其久安宅、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、龜筮並從、宜建都邑、宜其營構資、須隨事條奏、亦待秋收後、令造路橋、子來之義、勿致勞擾、制度之宜、令後不加、

○三月乙未、山背備前二國疫、給藥療之、○丙午、以從四位上中臣朝

に作る

○正三位大伴宿禰云々、內藤氏云按慶雲二年八月戊午大伴安麻呂爲大納言時從三位蓋嘗罷而再任乎爲正三位无所見又按一代要記云和銅元年二月十二日叙正三位公卿補任又同又案慶雲二年八月爲大納言蓋爲中納言之誤と云

○百濟王遠寶、王は文武四年庚子十月紀に據て補ふ

○左兵衞率、職員令には督とあれどこゝには率の字を用ひ天平寶字に至て督と爲せりされば大寶の制率の字を用ひ後衞門衞士と同じく督を用ひしな

臣意美麻呂爲神祇伯、右大臣正二位石上朝臣麻呂爲左大臣、大納言正二位藤原朝臣不比等爲右大臣、正三位大伴宿禰安麻呂爲大納言、正四位上小野朝臣毛野、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位上中臣朝臣意美麻呂、並爲中納言、從四位上巨勢朝臣麻呂爲左大弁、從四位下石川朝臣宮麻呂爲右大弁、從四位上下毛野朝臣古麻呂爲式部卿、從四位下彌努王爲治部卿、從四位下多治比眞人池守爲民部卿、從四位下息長眞人老爲兵部卿、從四位上竹田王爲刑部卿、從四位上廣瀨王爲大藏卿、正四位下犬上王爲宮內卿、正五位上大伴宿禰手拍爲造宮卿、正五位下大石王爲彈正尹、從四位下布勢朝臣耳麻呂爲左京大夫、正五位上猪名眞人石前爲右京大夫、從五位上大伴宿禰男人爲衞門督、正五位上百濟王遠寶爲左衞士督、從五位上巨勢朝臣久須比爲右衞士督、從五位上佐伯宿禰垂麻呂爲左兵衞率、從五位下高向朝臣色夫知爲右兵衞率、從三位高向朝臣麻呂爲攝津大夫、從五位下佐伯宿禰男爲大倭守、正五位下石川朝臣石足爲河內守、從五位下坂合部

るべし
○大麻呂、原本大を太に作る會本從本及下文に據て改む
○美努連、金本閣本努を弩に作る
○阿倍狛朝臣、慶雲二年十一月紀には狛朝臣に作り阿倍の二字なし
○笠朝臣麻呂、此人美濃守になれること慶雲三年七月紀に見ゆ
○阿倍朝臣眞君、此人越後守になれること慶雲四年十一月紀に見ゆ
○多益首、三年六月紀に多益須とあり

宿禰三田麻呂、爲山背守、正五位下大宅朝臣金弓、爲伊勢守、從四位下佐伯宿禰大麻呂、爲尾張守、從五位下美努連淨麻呂、爲遠江守、從五位上上毛野朝臣安麻呂、爲上總守、從五位下賀茂朝臣吉備麻呂、爲下總守、從五位下阿倍狛朝臣秋麻呂、爲常陸守、正五位下多治比眞人水守、爲近江守、從五位上笠朝臣麻呂、爲美濃守、從五位下小治田朝臣宅持、爲信濃守、從五位上田口朝臣益人、爲上野守、正五位下當麻眞人櫻井、爲武藏守、從五位下多治比眞人廣成、爲下野守、從四位下上毛野朝臣小足、爲陸奥守、從五位下高志連村君、爲越前守、從五位下阿倍朝臣眞君、爲越後守、從五位上大神朝臣狛麻呂、爲丹波守、正五位下忌部宿禰子首、爲出雲守、正五位上巨勢朝臣邑治、爲播磨守、從四位下百濟王南典、爲備前守、從五位上多治比眞人吉備、爲備中守、正五位上佐伯宿禰麻呂、爲備後守、從五位上引田朝臣爾閇、爲長門守、從五位上大伴宿禰道足、爲讚岐守、從五位上久米朝臣尾張麻呂、爲伊豫守、從三位粟田朝臣眞人、爲大宰帥、從四位上巨勢朝臣多益首、爲大貳、○乙卯、勅、大宰府

帥大貳并三關及尾張守等、始給傔仗、其員、帥八人、大貳及尾張守四人、三關國守二人、其考選事力及公廨田並准史生、以從五位下鴨朝臣吉備麻呂爲玄蕃頭、從五位上佐伯宿禰百足爲下總守、○丙辰、以從五位下小野朝臣馬養爲帶劍寮長官、○庚申、美濃國安八郡人國造千代妻如是女、一產三男、給稲四百束、乳母一人、

○夏四月己巳、授无位村王從五位下、○癸酉、制、貢人位子、无考之日、須入常選、白丁冒名、預貢人例、此色且多、是由式部不察之過焉、今宜按覆撿實申知、其式部史生已上、若能知罪自首者免其罪、終隱執不首者、准律科罪、亦其位子、准令、嫡子唯得貢用、庶子不合、今卽兼用、此亦式部違令、若其庶子、雖授位記、皆追還本色、但其才堪時務、欲從貢人例者、

○三關、鈴鹿、不破、愛發なり

○傔仗、在外官吏を護衛する人を云、字書に傔は侍從也仗は兵器總名とあり兵器を執て侍從する意唐書に傔從の外に傔人傔卒の名も見ゆ養老二年五月紀に禁三關及大宰府陸奥國傔仗取白丁式部式に凡大宰帥大貳并陸奥出羽按察使及守等傔仗者申太政官補之不得輒取白丁若情願以子補之者聽取二人但身不赴任者不給之とあり

○事力、文献通考に唐書親王府屬並給士力と見ゆ士力即ち事力なり大宰府及國司等に賜はる職分田を耕さしむる人を云軍防令に大宰及國司並給事力帥卅人大貳十四人少貳十人大監少監等各六人大工少判事等各四人令史三人史生二人大國守八人上國守大國介七人中國守上國介六人下國守大上國掾五人中國掾大上國目四人中下國目三人史生二人一年一替皆取上等戸內丁並不得收庸また賦役令に凡舍人防人帳內資人事力云々在役並免課役とあり

○帶劍寮、卽ち上の授刀舍人寮なり

○國造、古事記開化天皇の段に神大根王者三野國之本巣國造之祖とあり國造本紀三野前國造春日率川朝皇子彦坐王子八爪命定賜國造とあり八爪命は八爪入日子命にて神大根王の一名なり

（四月）貢人、令制大學國學より考試を經て出身する道を之を貢擧と云而して大學より出すを擧人と云ひ國學より出すを貢人と云

○位子、五位以上の人の子又は孫其父祖の蔭に依て出身するを蔭子孫と云ひ之に對して六位以下の人の子の特別に登用せらるゝを位子と云石原氏曰

據選敍令五位以上蔭及子三位以上及孫乃蔭子五位以上之子蔭孫三位以上之孫也位子之稱令條不載蓋六位以下八位以上之子謂之位子職と云式部式民部式を參考すべし ○其位子准令云々、軍防令に見ゆ ○自朝遣補者、大寶三年三月紀に依し令(選叙令を云)國博士於部内及傍國取用溫故知新希有其人若傍國無人採用則申省然後省選擬更請處分こと見ゆ

○考選一進史生例、史生を敍するには八考を以てすること選敍令に見ゆ ○考第各從本色、考は功過行能を考按するをいひ第は等級なり等級を定めそれにあてはめて上中下の等級を定むるを考第と云、國博士醫師考第のこと考課令に凡國博士並一等考第云々其醫師准効驗多少云々と見ゆ ○柿本朝臣佐留、此人歌聖柿本人麻呂にあらざるかといふ說あり天武紀十年十二月には佐留を猨の一字に作る (五月)銀錢、大日本史注に顯宗紀要略銀錢一文天武十二年四月詔自今以後必用銅錢莫用銀錢然則先是既有銀錢據天武二年對馬始出白金顯宗紀所謂銀錢蓋異域所貢而本是始鑄之也と云 ○給近江守、原本守を國に作る紀略に據て改む ○甘露、天武紀七年に見ゆ ○美努王、原本努を弩に作る紀略及上文に據て改む左京皇別橘朝臣の條に敏達天皇々子難波皇子男贈從二位栗隈王男治部卿從四位下美努王と見えて敏達天皇の曾孫なり (六月)詔從天下云々、大日本史注云年中行事曰是年十月十七日勅旨起今年一年別一度讀大般若經是爲季讀經始二代要記同是年二月始修季御讀經然本書不載云々

(七月)始置史生、令制内藏寮に史生なかりしを此時に至りて始て置かれしなり ○賑恤之、舍本閣本谷本恤を意に作る意は舊に同じ于は原本于に作る閣本谷本蓬本に據て改む ○垂拱、尚書武成に出づ

聽之、又諸國博士醫師等、自朝遣補者、考選一進史生例、考第各從本色、若取土人及傍國者、並依令條、又諸位子資人、堪貢名籍、皆令本部案記、臨用式部乃下本部追召之、○壬午、從四位下柿本朝臣佐留卒、○五月壬寅、始行銀錢、○庚戌、給近江守傔仗二人、○庚申、長門國言、甘露降、○辛酉、從四位下美努王卒、○六月丙戌、三品但馬内親王薨、天武天皇之皇女也、○己丑、詔爲天下太平百姓安寧、令都下諸寺轉經焉、

○秋七月丁酉、内藏寮始置史生四員、但馬伯耆二國疫、給藥療之、○甲辰、隱岐國霖雨大風、遣使賑恤之、○乙巳、召二品穗積親王、左大臣石上朝臣麻呂、右大臣藤原朝臣不比等、大納言大伴宿禰安麻呂、中納言小野朝臣毛野、阿倍朝臣宿奈麻呂、中臣朝臣意美麻呂、左大弁巨勢

朝臣麻呂、式部卿下毛野朝臣古麻呂等於御前、勅曰、卿等情存公平、率先百寮、朕聞之喜慰于懷、思由卿等如此、百官爲本、至天下平民、垂拱開衿、長久平好、又卿等子孫、各保榮命、相繼供奉、宜如此意各自努力、又召神祇官大副、太政官少弁、八省少輔以上、侍從、彈正、弼以上、及武官職事五位、勅曰、汝王臣等、爲諸司本、由汝等劾力、諸司人等須齊整、朕聞、忠淨守臣子之業、遂受榮貴、貪濁失臣子之道、必被罪辱、是天地之恒理、君臣之明鏡、故汝等知此意、各守所職、勿有怠緩、能堪時務者、必擧而進、亂失官事者、必无隱諱、因授從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂正四位上、從四位上下毛野朝臣古麻呂、中臣朝臣意美麻呂、巨勢朝臣麻呂、並正四位下、文武職事五位已上、及女官、賜祿各有差、○丙午、(十六)有詔、京師僧尼、及百姓等、年八十以上賜粟、百年二斛、九十一斛五斗、八十一斛、○丙辰、(廿八)令近江國鑄銅錢、○八月(庚申朔)己巳、(十)始行銅錢、○庚辰、(廿一)兵部省更加史生六員、通前十六人、左右京職各六員、主計寮四員、通前十八人、○丙申、制、自今以後、衣標口闊、八寸已上、一尺已下、隨人大小爲之、又衣領得接作、但

垂衣拱手の略、字書に言天子之無爲而治天下也とあり
○宜如此意、考證に如は知の誤なるべしと云
○劾力、考證云劾當依一本作勁或曰疑勠字之譌
○齊整、原本齋整に作る金本に據て改む
○忠淨、忠清に同じ
○因授、原本授下に紀伊國名草郡旦來鄉壬戌歲戶籍の十四字あり考證に以下十四字與前後文不屬蓋錯簡也云々伴信友曰古人多寫書於故紙背疑舊寫此書於戶籍紙背者後人傳寫戶籍之文羼入于此也未知果然否と云り、壬戌は天智天皇元年なり考證の說の如く前後の文と接續せず攙入なること明なれば削る
○銅錢、和銅開珍の文ある錢なり、泉貨鑑に按ズルニ此錢徑リ八分重サ一錢一分面文循讀和銅開珍ト云文字製作唐ノ開元錢ニナラフ今世在コト最モ多シと云り
(八月)左右京職各六員、始て置くなり
○丙申、是月庚申朔なれ

ば丙申なし長暦を以て推すに丙申は閏八月七日なり疑らくは此上に閏八月の三字を脱せるか
○衣褾口闊云々、褾は字書に袖端也とあり拾芥抄所載寳龜六年の格に袖口濶五位以上一尺爲限六位以下八寸、彈正式には衣袖口濶無問高下同作一尺二寸已下とあり考證に或曰奈良朝衣服用大尺延喜時用小尺則格所載與式其實大抵相同也と云り
○褾口空小、狩谷氏云空疑窄字之譌
○高向朝臣麻呂薨、天武紀十年十二月に初て見ゆ大寶二年五月朝政に參議せしめられ慶雲二年三月中納言、和銅元年三月攝津大夫となる
○刑部尚書、尚書は卽ち卿なり大寶元年正月紀に見ゆ
○國忍、書紀に見えず
（九月）安八万王、万の字は慶雲二年正月紀に據て補ふ
○菅原、大和志に添下郡菅原村あり今生駒郡伏見村大字菅原なり
○岡田離宮、四年四月紀

不得褾口空小、衣領細狹、○丁酉、攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨、難波朝廷刑部尚書大花上國忍之子也、○九月壬戌、以從四位下安八万王爲治部卿、從四位下息長眞人老爲左京大夫、正五位上大神朝臣安麻呂爲攝津大夫、○壬申、行幸菅原、○戊寅、巡幸平城、觀其地形、○庚辰、行幸山背國相樂郡岡田離宮、賜行所經國司目以上袍袴各一領、造行宮郡司祿各有差、幷免百姓調、特給賀茂久仁二里戶稻卅束、○乙酉、至春日離宮、大倭國添上下二郡勿出今年調、○丙戌、車駕還宮、越後國言、新建出羽郡、許之、○戊子、以正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂從四位下多治比眞人池守爲造平城京司長官、從五位下中臣朝臣人足、小野朝臣廣人、小野朝臣馬養等爲次官、從五位下坂上忌寸忍熊爲大匠、判官七人、主典四人、○冬十月庚寅、遣宮內卿正四位下犬上王、奉幣帛于伊勢大神宮、以告營平城宮之狀也、○十一月己未朔、日有蝕之、○乙丑、遷菅原地民九十餘家、給布穀、○己卯、大嘗、遠江但馬二國供奉其事、○辛巳、宴五位以上于內殿、奏諸方樂於庭、賜祿各有差、○癸未、賜宴職事六位

に始置山背國相樂郡岡田驛さ見ゆ山城志に離宮廢趾在賀茂鄕北村さあり
○賀茂久仁二里、賀茂は山城國相樂郡にあり今も加茂村さ稱す、久仁も同郡なり今の木津村是なりさ云　○春日離宮、大和國添上郡にあり舊趾は詳ならず　○出羽郡、五年九月置出羽國さあるに據れば當時の地域は頗る廣かりしこさ推して知べし　○造平城京司、原本京を宮に作る金本閣本會本及紀略に據て改む　(十一月)遠江、略記近江に作る　○設賜、黑川春村云設は訖の誤なるべしさ淀イ本には無さ注す　(十二月)鎭祭、持統紀五年十月遣使者鎭祭新益京六年五月遣淨廣肆難波王鎭祭藤原宮さ見え臨時祭式に新宮地を鎭むる祭を載す後世の地鎭祭なり

【和銅二年】正四位下小野朝臣、元年三月紀及慶雲二年十一月紀同四年六月紀に正四位上に作るに據るべし
○長目、原本目を自に作る六年四月紀に據て改む
○調連淡海、天武紀に調首淡海に作る萬葉亦同じ
○椋垣忌寸子人、慶雲四年正月紀に椋垣直子人賜連姓さあり然るに此に忌寸さあるは後改め賜ひしなるべし
○兼濟、字書に兼は幷也濟は利用也又益也又賙救也又相助也さあり官民を幷せ益するを云
○居先、居は忠友云按恐民字之誤かさ

以下設賜絁各一疋、○乙酉、神祇官及遠江、但馬二國、郡司、幷國人、男女、惣一千八百五十四人、叙位賜祿各有差、○十二月己丑朔癸巳、鎭祭平城宮地、

(己酉)二年春正月戊午朔丙寅、授正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、正四位下小野朝臣毛野、並從三位、正五位上大伴宿禰手拍、大神朝臣安麻呂、土師宿禰馬手、正五位下多治比眞人水守、並從四位下、正六位下上毛野朝臣荒馬、正六位上土師宿禰甥、從六位上大伴宿禰牛養、從六位下笠朝臣長目、大春日朝臣赤兄、穗積朝臣老、正六位上調連淡海、正六位下椋垣忌寸子人、正六位上大私造虎、並從五位下、○戊寅、下總國疫、給藥療之、○壬午、詔、國家爲政、兼濟居先、去虛就實、其理然矣、向者頒銀錢、以代前錢、又銅錢並行、比奸盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢、自今以後、私鑄銀錢者、其身沒官、財入告人、行濫逐利者、加杖二百、加役常徒、知情不告者、各與

○前錢、金本閣本及紀略錢を銀に作る
○逐利、原本逐を遂に作る考證に據て改む下同じ
○私鑄云々、四年十月紀勅云凡私鑄錢者斬從者沒官云々とも見えなほ寶龜十一年十一月紀及三代格に詳なり
○常徒、狩谷氏云常恐當字、當徒とは徒罪に處すべき罪なり
〔二月〕戊子、此下に朔の字を脱せり
○觀世音寺、大寶元年八月、養老七年二月、及天平十七年十一月紀に出づ
○五十許人、類史五千人に作る
○乃逐閑月、閑月は農事に暇ある月なり軍防令に凡城隍崩壞云々逐閑月修さ見ゆ是なり令抄に閑月とは正月二月三月十月十一月十二月を謂ふと見えたり原本乃を及に逐を遂に作る乃は類史に據り、逐は令に據て改む
○長田郡、抄國郡部に遠江國長上（長乃加美）長下（准上）とあり長上長下の二郡とせるなり今の濱名郡是なり
〔三月〕野心、左傳宣四

同罪、○二月戊子、詔曰、筑紫觀世音寺、淡海大津宮御宇（天智）天皇奉爲後岡本宮御宇天皇、誓願所基也、雖累年代、迄今未了、宜大宰商量充駈使丁五十許人、乃逐閑月、差發人夫、專加撿挍、早令營作、○丁未、遠江國長田郡、地界廣遠、民居遥隔、往還不便、辛苦極多、於是分爲二郡焉、○三月辛酉、隱岐國飢、賑恤之、○壬戌、陸奥越後二國蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使、徴發遠江、駿河、甲斐、信濃、上野、越前、越中等國、以左大弁正四位下巨勢朝臣麻呂、爲陸奥鎭東將軍、民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯、爲征越後蝦夷將軍、内藏頭從五位下紀朝臣諸人、爲副將軍、出自兩道征伐、因授節刀并軍令、○辛未、取海陸兩道、喚新羅使金信福等、○庚辰、初置造雜物法用司、以從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位下舟連甚勝、笠朝臣吉麻呂爲之、○甲申、制、凡交關雜物、其物價銀錢四文已上、卽用銀錢、其價三文已下、皆用銅錢、○夏四月丁亥朔、日有蝕之、○壬寅、從四位下上毛野朝臣男足卒、○五月庚申、筑前國宗形郡大領外從五位下宗形朝臣等抒授外從五位上、尾張國愛知郡、

年譜曰狼子野心
○鎭東將軍、蒲生氏云蝦夷不馴服叛無常在古冠邊也命將征之而未建將軍之號其有將軍之號蓋起自此と云り
○節刀、軍防令に凡大將出征皆授節刀義解に謂凡節者以旄牛尾爲之使者所權也今以刀皴(蓋劔字)代之故曰節刀云々とあり
○法用司、六年十月紀に板屋司注に蓋改法用司爲板屋司也とあり
○甚勝、慶雲二年十二月紀に秦勝に作る
○銀錢四文、養老五年正月紀に令天下百姓以銀錢一當銅錢廿五以銀一兩當一百錢行用之とあり是に據れば銀錢四文とは卽ち銀一兩なり
(四月)上毛野朝臣男足、文武紀四年十月に上毛野朝臣小足と見え吉備總領たり大寶三年七月下總守和銅元年三月陸奥守
(五月)等抒、原本抒を抪に作る諸本に據て改む
○賜國王云々、大藏式に賜蕃客例新羅王絁廿五疋絲一百絇綿一百五十屯並以白布裹束とあり此

大領外從六位上尾張宿禰乎己志外從五位下。○乙亥、河內、攝津、山背、伊豆、甲斐五國、連雨損苗。是日、新羅使金信福等貢方物。○壬午、宴金信福等於朝堂。賜祿各有差。幷賜國王絹廿疋、美濃絁卅疋、絲二百絇、綿一百五十屯。是日、右大臣藤原朝臣不比等、引新羅使於弁官廳內、語曰、新羅國使、自古入朝、然未曾與執政大臣談話。而今日披晤者、欲結二國之好成往來之親也。使人等卽避座而拜、復座而對曰、使等、本國卑下之人也、然受王臣教、得入聖朝。適從下風、幸甚難言。況引升榻上、親對威顏、仰承恩教、伏深欣懼。○六月丙戌、金信福等還國。○甲午、上總、越中、二國疫、給藥療之。○辛丑、遣使雩于畿內。○乙巳、令諸國進驛起稻帳。筑前國御笠郡大領正七位下宗形部堅牛、賜益城連姓。嶋郡少領從七位上中臣部加比、中臣志斐連姓。○辛亥、紀伊國疫、給藥療之。○癸丑、散位正四位下犬上王卒。從七位下殖栗物部名代、賜姓殖栗連。勅、自大宰率已下至于品官、事力半減。唯薩摩多禰兩國司、及國師僧等、不在減例。

さ同じからず原本壬を主に作る紀略に據て改む　○美濃絁、賦役令に美濃絁六尺五寸八丁成匹とあり普通の絁よりは長寬なり　○恩敕、原本恩を思に作る略記に據て改む　○避峯、原本峯を坐に作る略記に據て改む下同じ峯を避くるは敬意を表するなり　（二六月）丙戌、此下に朔の字あるべし　○驛起稱、大寶二年二月紀に注す　○宗形部、出自詳ならず宗形氏の部民より出しならむ、四年閏六月紀に宗形部加麻麻伎、萬葉十六に宗像郡百姓宗形部津麻呂見ゆ　○益城連、肥後國益城郡益城鄕あり是に由あるか　○嶋郡、嶋は民部式志麻、倭名抄に志摩とあり六年の制に郡鄕名著二好字一とありしに據て文字を改めしなり　○中臣志斐連、淀本此上に賜の字あり　○大上王、大寶二年十二月紀に始て見え元年三月宮內卿となる　○物自大宰卒云々―事力半減、靈龜二年八月紀參照すべし卒は即ち率の字なり　○品官、延曆二年二月廿二日官符に大宰府綿十萬屯宜レ簡二差主典已上幹了者一期月貢上一不レ得三妄差二品官一以致二稽留一とあり字書に官之入二流品一者也一品至二九品一皆是とあり總て有位の官を云事力は大宰帥以下諸令史まで悉く之を給はるに依て合せて品官と云たるも史生は官位の相當なき故に此中には加はらざるべし　○事力、元年三月（六六頁）に注す　○多褹、原本褹を禰に作る淀本に據て改む多褹は即ち多禰なり

（二七月）出羽柵、羽前國西田川郡最上川の邊にありしなるべし始め蝦夷の西上を拒ぎて皇化を東北に及ぼさむが爲に渟垂柵を越後に置き尚北に進みて出羽柵を置かれしが天平五年十二月之を秋田村高淸水岡に徙されたりこれ後に秋田城となりて東の鎮守府と相對するに至れり

（二八月）廢銀錢、原本廢を癈に作る金本淀本に據て改む

（二九月）將領、式部式上に凡修理職長上工太工五人云々將領廿二人並預考とあり將領は字書に猶言將帥とあり工匠の頭たる人を云

○秋七月乙卯朔、以從五位上上毛野朝臣安麻呂爲陸奧守、令諸國運送兵器於出羽柵、爲征蝦狄也、○丁卯、令越前、越中、越後、佐渡四國、船一百艘、送于征狄所、○八月乙酉、廢銀錢、一行銅錢、太政官處分、河內鑄錢司官屬、賜祿考選、一准寮焉、○戊申、征蝦夷將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下紀朝臣諸人、事畢入朝、召見特加優寵、○辛亥、車駕幸平城宮、免從駕京畿兵衞戶雜徭、○九月乙卯、授大倭守從五位下佐伯宿禰男從五位上、造宮大丞從六位下臺忌寸宿奈麻呂從五位下、是日、車駕巡撫新京百姓焉、○丁巳、賜造宮將領已上物有差、○戊午、車駕至自平城、○乙丑、賜征狄將軍等祿各有差、○己卯、遠江、駿河、甲

○關剗、職員令三關國掌關剗及關契事義解に依律關者檢判之處剗者塹柵之所とあり

((十月))考選文、太政官式に凡諸司及畿內國司長上考選文者十月一日進弁官訖同日弁惣計造目申太政官卽下式部兵部式部式上に凡考選文者太政官長上番上並作符下省云々凡諸司考選文送官及式部兵部者五位以上長官次官將送若不在者臨時聽處分とあり考選文とは凡そ內外の文武官初位以上每年當司の長官其屬官卽ち次官以下の一年中の功過行能を考へ其優劣を詮議して九等に定め八月卅日までに挍定し京官畿內の官人は十月一日に考文を太政官に申送る（外國は十一月一日に朝集使に附して申送る）其考文卽ち考選文なり

○便令、便は更の誤なるべしと云

斐、常陸、信濃、上野、陸奧、越前、越中、越後等國士、經征役五十日已上者、賜復一年、遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二道、撿察關剗、巡省風俗、仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓、尾張守從四位下佐伯宿禰大麻呂、近江守從四位下多治比眞人水守、美濃守從五位上笠朝臣麻呂、當國田各一十町、穀二百斛、衣一襲、美其政績也、○冬十月癸未朔、日有蝕之、○甲申、制、凡內外諸司考選文、先進弁官、處分之訖、還附本司、便令申送式部兵部、○庚寅、備後國葦田郡甲努村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費太多、仍割品遲郡三里、隷葦田郡、建郡於甲努村、○癸巳、勅、造平城京司、若彼墳隴、見發掘者、隨卽埋歛、勿使露棄、普加祭酹、以慰幽魂、○丙申、禁制、畿內及近江國百姓、不畏法律、容隱浮浪及逃亡仕丁等、私以駈使、由是多在彼、不還本鄉本主、非獨百姓違慢法令、亦是國司不加懲肅、害蠹公私、莫過斯弊、自今以後、不得更然、宜令曉示所部撿括、十一月三十日使盡、仍卽申報、符到五日內、无間逃亡隱藏、並令自首、限外不首、依律科罪、若有知情故隱、與逃亡同罪、不得官

○品遲部、民部式に品治に作る抄同じ
○鞍、金本鞍に關本鞍に作る鞍は鞍の字にて千祿字書に鞍俗鞍止さ見ゆ
○建部於甲努村、是即ち甲努郡なり民部式には甲奴さあり倭名抄甲努に作る建部於の三字は金本曾本淀本に據て補ふ
○遷平城京司、原本京た宮に作る諸本及紀略に據て改む
○墳隴、字書に墳は墓之封土隆起者、隴は壟に同じ壟は冢也さあり原本隴た瀧に作る金本關本淀本に據て改む
○祭酺、字書に酺は以酒祭地也さあり酒な地にそゝぎて神祇を祭るを云
○畿內及近江國百姓云々、養老元年五月紀詔曰率土百姓云々さあるを參考すべし
○掄括、原本括を挍に作る金本谷本曾本に據て改む掄括は字書に言盡取其物無有孑遺也さあり
○符到、原本符を府に作る諸本に據て改む
○依律科罪、唐捕亡律云

當蔭贖、國司不糺者、依法科附、○戊申、薩摩隼人郡司已下一百八十八人入朝、徵諸國騎兵五百人、以備威儀也、○庚戌、詔曰、比者、遷都易邑、搖動百姓、雖加鎭撫、未能安堵、每念於此、朕甚愍焉、宜當年調租並悉免之、○十一月甲寅、以從三位長屋王為宮內卿、從五位上田口朝臣益人為右兵衞率、從五位下高向朝臣色夫智為山背守、從五位下平群朝臣安麻呂為上野守、從五位下金上元為伯耆守、正五位下阿倍朝臣廣庭為伊豫守、○十二月丁亥、車駕幸平城宮、○壬寅、式部卿大將軍正四位下下毛野朝臣古麻呂卒、

諸部内容㆓止他界逃亡浮浪㆒者一人里正笞四十四人加㆓一等㆒とあり

○官當、名例律に犯㆓私罪㆒以㆑官當㆑徒者一品以下三位以上以㆓一官㆒當㆓徒三年㆒とあり

○蔭贖、吏學指南に藉㆓親蔭㆒而收㆑銅贖㆑罪所㆑謂藉㆓蔭親屬㆒也と見ゆ

(十一月)右兵衞率、原本率を卒に作る前例に據て改む

○平群朝臣、原本平を手に作る淀本に據て改む

○大將軍、考證に十一月薩摩隼人入朝徵㆓諸國騎兵㆒以備㆓威儀㆒古麻呂蓋爲㆓騎兵大將軍㆒歟未㆑詳と云り

○下毛野朝臣古麻呂卒、孝德紀三年十月に初て見え文武紀四年六月刑部親王以下と共に律令撰定の命を受け、大寶二年撰定の功に據て功田十町を賜はれり、又同年五月朝政に參議せしめらる

續日本紀卷第四

【和銅三年】左將軍、蕃客朝貢の時は左右將軍を任命して儀衛に備ふるを例とす七年十一月紀にも見ゆ
○旅人、神龜元年二月紀に多比等に作る
○皇城門、朱雀門を云宮城の正門なり
○葛木王、長屋王の御子なり橘諸兄を始め葛城王とも葛木王とも云しかどそれとは別なり
○授位者云々、式部式上に凡六位以上授五位者頓除前考但不除當年上日又凡據才伎叙者有位蔭叙之日通計前勞无位者頓除前考若加級不及選階者聽從一高其別勅叙位者聽通計前勞とぞ見ゆ

續日本紀卷第五

起和銅三年正月盡五年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

日本根子天津御代豐國成姫天皇　元明天皇　第卌三

三年春正月壬子朔、天皇御大極殿受朝、隼人蝦夷等亦在列、左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於皇城門外朱雀路、東西分頭、陳列騎兵、引隼人蝦夷等而進、○戊午、授无位門部王、葛木王、從六位上神社忌寸河內、並從五位下、○壬戌、制、授位者不得通計前考、散位從四位下高橋朝臣笠間卒、○甲子、授无位鈴鹿王、交部王、並從四位下、正六位上吉野連久治良、黃文連益、田邊史比良夫、刀利康嗣、正六位下大倭忌寸五百足、山田史御方、從六位上路眞人麻呂、押海連人成、車持朝臣益、下毛野朝臣人並從五位下、○丙寅、大宰府獻銅錢、○

〇高橋朝臣笠間卒、笠間は大寶元年正月に遣唐大使同二年八月造大安寺司となれり

〇交部王、靈龜二年八月紀に六人部王とあるに同じく交は六人の訛なるべし

〇刀利康嗣、懷風藻に大學博士刀利康嗣とあり詩一首を載す天平寶字五年三月紀に百濟國人刀利甲斐麻呂等七人賜丘上連と見えたれど姓氏錄に載せず出自詳ならず、之と同氏ならば百濟人なり

〇押海連、一に忍海連に作る

〇下毛野朝臣人、桉齋云人字可疑、淀本は人を位に作り金本はイ扁のみ存して旁缺けたりされば人は誤なること明なり

〇大宰府、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ

〇重閣門、抄居處部に閣音各今案俗謂朱雀門爲重閣是とあり亦古本拾芥抄にも見ゆ蓋延曆遷都以後重閣門を改て朱雀門と稱せしなり

〇從五位已上、從の字恐くは衍なり

十六丁卯、天皇御重閣門、賜宴文武百官幷隼人蝦夷、奏諸方樂、從五位已上賜衣一襲、隼人蝦夷等、亦授位賜祿各有差、〇廿七戊寅、播磨國獻銅錢、日向國貢采女、薩摩國貢舍人、〇廿九庚辰、日向隼人曾君細麻呂、敎喩荒俗、馴服聖化、詔授外從五位下、〇二月(壬午朔)十一壬辰、信濃國疫、給藥救之、〇廿九庚戌、初充守山戸、令禁伐諸山木、〇三月(壬子朔)七戊午、制、輙取畿外人、用帳內資人、自今以去、不得更然、待官處分、而後充之、〇十辛酉、始遷都于平城、以左大臣正二位石上朝臣麻呂爲留守、〇夏四月辛巳朔、日有蝕之、〇廿一辛丑、陸奧蝦夷等請賜君姓、同於編戸、許之、〇廿二壬寅、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、〇廿三癸卯、以從三位長屋王爲式部卿、從四從下多治比眞人縣守爲宮內卿、從四位下多治比眞人水守爲右京大夫、從五位上采女朝臣比良夫爲近江守、從五位上佐太忌寸老爲丹波守、從五位下山田史御方爲周防守、〇廿九己酉、參河遠江美濃三國飢、並加賑恤、〇五月(辛亥朔)八戊午、以從五位下大伴宿禰牛養爲遠江守、〇六月(庚辰朔)二辛巳、大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須卒、〇秋七月(庚戌朔)七丙辰、左大臣舍人正八位下牟佐村主相摸

依文武百官因奏賀辭、賜祿各有差、京裏百姓、戸給穀一斛、相摸進位二階、賜絁一十匹、布廿端、○九月乙丑、禁天下銀錢、○冬十月戊寅朔、日有蝕之、○辛卯、正六位上黃文連大伴卒、詔贈正四位下、幷弔賻之、以壬申年功也、

四年春正月丁未、始置都亭驛、山背國相樂郡岡田驛、綴喜郡山本驛、河內國交野郡楠葉驛、攝津國嶋上郡大原驛、嶋下郡殖村驛、伊賀國阿閇郡新家驛、○二月辛丑、從四位下土師宿禰馬手卒、○三月辛亥、伊勢國人磯部祖父、高志二人、賜姓渡相神主、割上野國甘良郡織裳、韓級、矢田、

○曾君、天平十二年十月紀に隼人贈唹君多理志佐見え、同十三年閏三月紀に曾乃君多理志佐に作る、共に大隅國贈唹郡に因れる氏なるべし　(二)(一月)初充守山戸、應神紀に見えたる山守部なり初充とあれど一時罷められしを復置かれたるなるべし

(二)(三月)禁取畿外人云々、帳内は親王に朝廷より附置かるゝものにて朝廷の舍人に同じく、資人は一位以下五位以上の人に附置かるゝものにて親王家の帳内に同じ其員數は軍防令に詳なり、四年五月紀に先是禁取畿外人充帳內資人至是始許之と見え此制を改めらる　○始遷都于平城、天智紀七年二月に阿倍皇女及有天下居于藤原宮移都于乃樂と見え萬葉一にも和銅三年三月藤原宮より寧樂宮に遷り坐しゝ由見えたり　○爲留守、爲都の留守長官とせられしなるべし　(二)(四月)同於編戸、寶龜元年十月紀には爲編戸民とあり內地の民と同じく戸籍に編入するを云天平二年正月、寶字二年六月紀にも此に類すること見えたり　○多治比眞人縣守、原本縣の上に大の字あり曾本淀イ本に據て削る大日本史注云推前後文位階誤且衍大字疑錯簡也狩谷氏云按四年四月庚寅紀云宮內卿從四位下多治比眞人水守卒據此大縣守恐水守之訛水守爲左京大夫或是池守之誤とあり　(二)(六月)巨勢朝臣多益須卒、多の字は紀略に據て補ふ持統紀朱鳥元年十月に始て見え、慶雲三年七月式部卿に、和銅元年三月大宰大貳となる、懷風藻にも其名見ゆ　(二)(七月)左大臣舍人、左大臣は石上麻呂、舍人は皇子に賜りて侍給せしめらるゝこと常にて臣下に賜しことは見えずされど特例もありしにや或は職分の資人を云しにもあるべし尚考ふべし　○牟佐村主相摸依、依は閣本底に作る誤脫あるべし　○賀辭、新都を賀するなるべし　(二)(十月)正六位上黃文連、大寶三年七月紀に已に正五位下とあれば正六位上は正五位下の誤なるべし

【和銅四年】都亭驛、都は郵の誤なるべしと云都亭の文字は後漢書張綱傳に出で注に都城之亭也とありて意通ぜず郵亭は漢書黃霸傳の注に傳送文書所止之處、亭は字書に道路舍所以停集行人也漢制十里一亭とあり　○岡田驛、山城志に在

大家、綠野郡武美、片岡郡山等六鄉、別置多胡郡、

北村とあり今相樂郡加茂村大字北是なり　○山本驛、抄國郡部に山城國綴喜郡山本鄉見ゆ今同郡三山木村大字三山木なり筒城の普賢寺谷の谷口にして八幡より木幡に通ずる路に衝る　○楠葉驛、抄國郡部に河內國交野郡葛葉鄉見ゆ今北河內郡樟葉村大字楠葉あり　○大原驛、攝津志に嶋上郡原川東西中古謂之大原莊とあれど今詳ならず或は三島郡(舊嶋上郡を含む)島本村櫻井驛ならむと云　○殖村驛、詳ならねど攝津志嶋上郡に上野村あり今三島郡春日村の大字なり　○新家驛、抄國郡部に阿拜郡新居鄉とある是なるべし今阿山郡新居村あり古への新家驛新居河原は新居村大字東の地なり後世驛家は其西一里餘に移る島ヶ原驛是なりと云　(三月)土師宿禰馬手卒、文武紀二年正月に始て見ゆ此人任官の事所見なし　(三月)磯部祖父云々、磯部は又石部に作り舊姓神主なりしが天智天皇庚午年籍に誤て石部の姓を負ひて貫せしを此に至て舊姓に復し始て渡相神主を賜はりしなり度會神主は天村雲命の孫天日別命一名天日鷲命の後なり(豐受宮禰宜補任神名秘書)　○甘良郡云々、甘良は民部式並倭名抄に甘樂とあり織裳は抄に織裳(於利毛)韓級は辛科(加良之奈)矢田は八田(ヤタ)大家は大家(オホヤケ)とあり　○武美、抄に綠野郡武美(ムミ)　○山等、抄に山宗(也末奈)とあれば山の下宗の字を脫せしか或は等は宗の誤なるべし、古京遺文に建多胡郡弁官符を載す其文に弁官符上野國片岡郡綠野郡甘良郡幷三郡內三百戶郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅とあり甲寅は九日なり紀に辛亥即ち六日とす追記の誤なるべし給羊の二字は解し難し

○夏四月丙子朔、日有蝕之、○(五)庚辰、大倭佐渡二國飢、並加賑給、○壬午、詔、叙文武百寮成選者位、從五位上熊凝王、長田王、並授正五位下、正四位下中臣朝臣意美麻呂、巨勢朝臣麻呂、並正四位上、從四位上石川朝臣宮麻呂正四位下、從四位下息長眞人老從四位上、正五位上猪名眞人石前、路眞人大人、大伴宿禰旅人、從五位上石上朝臣豐庭、並從四位下、正五位下忌部宿禰子首、阿倍朝臣廣庭、石川朝臣難波麻呂、石川朝臣石足、大宅朝臣金弓、太朝臣安麻呂、多治比眞人三宅麻呂、從五位

(四月)叙文武百寮成選者位、成選とは位を叙するには文武百官の上日を計算し其勤勞を考へて之を叙する制なるが選は其功過を考へて選擇する意而して其選に入りしものは即ち成選者なり式に之を選成れる人と云、二月十一日列見の時の成選短冊を式部兵部の二省より持て參れるを四月七日に大臣奏聞す其式を擬階奏と云、大日本史注に據年中行事公事根源擬階奏蓋權輿于此と云り　○中臣朝臣意美麻呂、中臣朝臣の四字は曾本及本

朝月令に據て補ふ麻呂は原本麿に作る金本曾本に據て改む
○難波麻呂、原本麻呂を麿に作る金イ本に據て改む
○武智麻呂、原本麻呂を麿に作る金イ本に據て改む
○必登、七年十一月紀に人の一字に作る
○正七位上高橋朝臣、曾本正を從に作る本朝月令にに正七位下とす
○袁志比、原本袁を表に作る摭齋の說に據て改む養老四年正月紀には于志比とあり
○鍛師連、文武紀庚子年六月に鍛造大角、元正紀養老四年正月に鍛治造に作り前後何れも造なれば連は造の誤なるべし
○置始連秋山、曾本秋の下一字空白とし、月令に置初連秋山、神龜三年正月紀にも置始連秋山と見えたる事に據て補ふ
○多治比眞人水守、三年四月紀に多治比眞人縣守とあるは此水守の誤なるべし
○賀茂祭日、類史及紀略賀茂の下に神の字あり

上室朝臣麻呂、並正五位上、從五位上多治比眞人吉備、上毛野朝臣安麻呂、佐伯宿禰百足、阿倍朝臣船守、采女朝臣比良夫、阿倍朝臣首名、大神朝臣狛麻呂、曾禰連足人、並正五位下、從五位下藤原朝臣武智麻呂、藤原朝臣房前、巨勢朝臣子祖父、多治比眞人縣守、縣犬養宿禰筑紫、小治田朝臣安麻呂、中臣朝臣人足、平群朝臣安麻呂、並從五位上、正六位下池田朝臣子首、石川朝臣足人、從六位上阿倍朝臣駿河、從六位下粟田朝臣必登、正七位上中臣朝臣東人、正七位上高橋朝臣毛人、正六位上民忌寸袁志比、黄文連備、鍛師連大隅、道君首名、從六位上置始連秋山、並從五位下、○甲申、大倭國芳野郡、始置大少領各一人、主政二人、主帳一人、○庚寅、宮内卿從四位下多治比眞人水守卒、○乙未、詔、賀茂祭日、自今以後、國司毎年親臨撿察焉、○五月辛亥、制、帳内資人、雖名入式部、不在豫選之限、既叙位記者許之、職分不在此例、唯聽帳内三分之一、資人四分之一、其雖叙位、逗留方便、違主失禮、郎追其位、還之本貫、若得他處位者不退焉、或本主亡者、不得豫選、皆還本色、但

欲廻入者聽、以外如令、尾張國疫、給醫藥療之、○乙卯、從四位下當麻眞人智得卒、○己未、以穀六升當錢一文、令百姓交開各得其利、先是、禁取畿外人充帳內資人、至是始許之、○六月乙未、詔曰、去年霖雨、麦穗既傷、今夏冗旱、稻苗殆損、憐此蒼生、仰彼雲漢、今見膏雨、有勝衆瑞、宜黎元同悅共賀天心、仍賜文武百寮物有差、○閏六月丙午、始五位已上卒者、即日申送弁官、○丁巳、遣挑文師于諸國、始教習織錦綾、○甲子、宗形部加麻麻伎賜姓穴太連、○乙丑、中納言正四位上兼神祇伯中臣朝臣意美麿卒、

○秋七月甲戌朔、詔曰、張設律令、年月已久矣、然纔行一二、不能悉行、良由諸司怠慢不存恪勤、遂使名充員數空廢政事、若有違犯而相隱

(**五月**)豫選、豫は預に同じ　○位記、狩谷氏云記字衍なり　○職分、軍防令に資人不得取內八位以上子唯充職分者聽、式部式に凡外散位六位勳七等以下情願者聽充帳內及職分資人とあり、職分とは資人に位分職分の別あり一位以下五位以上其位によりて給はるを位分資人大納言以上其職によりて給ふを職分資人と云　○不退焉、狩谷氏云退疑くは逐字或は追字の譌　○本主亡者云々、七年六月紀に太政官處分職分資人若本主亡幷以理去官者不限年遠近並留省焉と見えたり　○從四位下當麻眞人、大寶三年十二月紀及慶雲四年十一月紀に據るに從四位上に改むべし　○智得、紀略智德に作る　○交開、開は闕の俗字淀本會本開に作る　○先是、三年三月紀に見たえり　(**六月**)麦穗、類史に麦を麥に作る麦は麥の俗字なり　○冗旱、冗は亢の字なり亢旱は旱の甚だしきをいふ　○稻苗、原本苗を田に作る類史に據て改む　○雲漢、毛詩大雅雲漢の篇あり雲漢とは天河を云　(**閏六月**)五位已上、喪葬令に五位以上身喪並奏卒外記每日勘錄來月二日送於弁官とあるを改められしなり　○挑文師、職員令に織部司挑文師四人掌挑錦綾羅等文挑文生八人とあり　○意美麿、持統紀或は臣麻呂に作る尊卑分脈に在任卅六年左大臣(又作左大辨)神祇伯祭主中納言正四位上意美麿大織冠爲鎌子不比等以前相續家業と見ゆ

(**七月**)張設律令云々、令は大寶元年三月、律は同二年二月に之を天下に頒たれしより已に十年に至れるも未だ十分に實行

せられざるを云
○逐使、考證云逐疑當作遂
○考第、原本第を弟に作る金本曾本淀本に據て改む
○狛部宿禰奈賣、紀略奈の字なし
○尾張守、原本守の上に國の字あり紀略に據て削る
○從四位下、原本四を五に作る紀略に據て改む
（八月）酒部君、景行記に神櫛王木國之酒部阿比古宇陀酒部之祖、姓氏錄にも酒部公は同王の後とす
○庚寅年籍、庚寅は持統天皇の四年なり
（九月）衞士、令制衞門府と衞士府とにあり衞門府に屬するものは諸門の禁衞に當り其數延暦四年には四百人あり左右衞士府に屬するものは宮掖（義解に掖とは正門の傍の小門を云とあり）を禁衞す同じく廿四年に各六百人左右合せて千二百人ありしを各百人を減じ衞門府に屬するものは七十人を減ぜられたり何れも諸國の軍團より上番せし

考第者、以重罪之無有所原。○戊寅、山背國相樂郡狛部宿禰奈賣、一産三男、賜絁二疋、綿二屯、布四端、稻二百束、乳母一人。○壬午、尾張守從四位下勳四等佐伯宿禰大麻呂卒。○八月丙午、酒部君大田、粳麿、石隅三人、依庚寅年籍、賜鴨部姓。○九月癸酉朔、日有蝕之。○甲戌、詔曰、凡衞士者、非常之設、不虞之備、必須勇健應堪爲兵、而悉皆尫弱、亦不習武藝、徒有其名、而不能爲益。如臨大事、何堪機要、傳不云乎、不教人戰、是謂棄之、自今以後、專委長官、簡點勇敢便武之人、每年代易焉。○丙子、勅、頃聞、諸國役民、勞於造都、奔亡猶多、雖禁不止、今宮垣未成、防守不備、宜權立軍營禁守兵庫。因以從四位下石上朝臣豐庭、從五位下紀朝臣男人、粟田朝臣必登等爲將軍。○冬十月甲子、勅、依品位始定祿法、職事二品二位各絁卅匹、絲一百絇、錢二千文、王三位絁廿匹、錢一千文、臣三位絁十匹、錢一千文、王四位絁六匹、錢三百文、五位絁四匹、錢二百文、六位七位各絁二匹、錢卌文、八位初位絁一匹、錢廿文、番上大舍人、帶劍舍人、兵衞、史生、省掌、召使、門部、物部、主帥等、並絲二絇、錢十文、女亦准此、又詔曰、夫錢

めらる軍防令に凡兵士向京者名衞士とある是なり

○不教人戰云々、論語子路に以不教民戰是謂棄之とあり

○奔亡、原本亡を巳に作る金本閣本曾本に據て改む

（十月）始定祿法、令と同じからず新錢を鑄むが爲に此法を定めしなるべし祿令を參考すべし

○匹、原本疋に作る金本曾本に據て改む下同じ

○帶劍舍人、授刀舍人を云慶雲四年七月紀に見ゆ

○兵衞、職員令に左兵衞府兵衞四百人とあり左右合せて八百人なり

○召使、太政官式に凡太政官幷左右弁官史生召使等每年一人除諸國主典式部式に太政官召使者省取散位年卅九以下有容儀云々とあり

○門部、衞門府に二百人あり

○物部、衞門府に三十人其他囚獄司東西市司等にあり

○主師、軍防令義解に主師者隊正以上校尉以下也

之爲用、所以通財貨易有无也、當今百姓、尙迷習俗、未解其理、僅雖賣買、猶無蓄錢者、隨其多少、節級授位、其從六位以下、蓄錢有一十貫以上者、進位一階叙、廿貫以上進二階叙、初位以下、每有五貫進一階叙、大初位上若初位、進入從八位下、以一十貫爲入限、其五位以上及正六位、有十貫以上者、臨時聽勅、或借他錢而欺爲官者、其錢沒官、身徒一年、與者同罪、夫申蓄錢狀者、今年十二月內、錄狀并錢申送訖、太政官議奏、令出蓄錢、勅、有進位階、家存蓄錢之心、人成逐緡之趣、恐望利百姓或多盜鑄、於律私鑄、猶輕罪法、故權立重刑、禁斷未然、凡私鑄錢者斬、從者沒官、家口皆流、五保知而不告者同罪、不知情者減五等罪之、其錢雖用、悔過自首減罪一等、或未用自首免罪、雖容隱人、知之不告者與同罪、或告者同前首法、○十一月辛未朔甲戌、蓄錢人等始叙位焉、○廿一辛卯、從六位下菅生朝臣大麿、正七位上高橋朝臣男足、並授從五位下、○廿二壬辰、詔曰、諸國大税三年之間、借貸給之、勿收其利、又賜畿內百姓年八十以上、及孤獨不能自存者、衣服食物、又出擧私稻者、自今以後、不得過半利、餘者如令、○十二月辛丑朔

とあり隊正は五十人長校尉は二百人長なり庶人の弓馬に便ならむ人を取て之に充つ
○隨其多少、考證に按隨上當₂增₂蓄₁錢者三字₁
○節級授位、蓄錢の多少に依て等級を設け位を授くるを云
○欺僞、狩谷校本に僞與₂僞通ずと云
○成遂㡧之趣、考證云遂恐逐字之譌、㡧は字書に謂₂錢貫₁也とあり錢なば錢貫（ゼニサシ）に貫きて充たしむるを逐㡧と云上旬と同じく蓄錢の心を助長するを云

壬寅、大初位上丹波史千足等八人、僞造外印、假與人位、流信濃國。以從五位下葛木王、補馬寮監。○丙午、詔曰、親王已下、及豪強之家、多占山野、妨百姓業。自今以來、嚴加禁斷。但有應墾開空閑地者、宜經國司、然後聽官處分。○壬子、從五位下狛朝臣秋麿言、本姓是阿倍也。但當石村池邊宮御宇聖朝、秋麻呂二世祖比等古臣使高麗國。因卽號狛、實非眞姓。請復本姓。許之。○庚申、又制蓄錢敍位之法、无位七貫、白丁十貫、並爲入限。以外如前。

○於律云々、從來の刑罰は輕に失するを云　○私鑄錢者斬、天平勝寶五年の制に一等を降して遠流に處すべしと云ることと實龜十一年十一月紀に見えたり　○五保、戶令に凡戶皆五家相保一人爲₂長以相檢察勿₁造₂非違₁又云凡戶逃走者令₂五保追訪₁とあり後世の五人組の構輿なり（十一月）詔曰、紀略曰の字なし　○借貸、舊本從本儥を貸に作る儥正しくは貸に作るべし貸は貸の字なり　○出擧私稻、雜令に以₂私稻₁出擧者任₂私契₁官不₂爲₁理仍以₂一年₁爲₂斷不₁得₂過₁一倍とあり出擧とは他人に稻を貸して其利稻を收むるを云令に一倍に過ぐるを得ずとありしを半減せられしなり（十二月）僞造外印、外印は公式令に外印方二寸半六位以下位記及太政官文案則印とあり　○流信濃國、唐詐僞律に諸僞寫官文書印者流二千里とあり　○空閑地、閑は類史に據て補ふ　○比等古臣、用明紀に見えず

【和銅五年】轉塡溝壑、孟子の凶年饑歲君之民老弱轉₂乎溝壑₁の語より出づ饑餓して堀溝に落て命を失ふを云壑は溝の譌體なり
○如有死者云々、賦役令に凡丁匠赴₂役身死者給

五年春正月乙酉、詔曰、諸國役民、還鄕之日、食粮絕乏、多饉道路、轉塡溝壑、其類不少。國司等宜勤加撫養、量賑恤。如有死者、且加埋葬、錄其姓名、報本屬也。○戊子、授无位上道王、大野王、倭王、並從四位下。无位額田部

棺在道亡者所在國司以官物作給並於路途埋殯立牌并告本貫云々とあり

○倭王、此王に從四位下を授くること慶雲元年正月紀に見ゆ重出に似たり

○佐伯禰宜麿、曾本伯の下に宿の字あり元年三月紀に佐伯宿禰麻呂とあり之に據れば宜は衍なり又曾本麿を麻呂の二字に作る

○從五位下紀朝臣、原本從五位下の四字なし男人は慶雲二年十二月癸酉從五位下を授けられ同四年十月紀和銅四年八月紀にも從五位下と見えたれば之に據て補ふ

○麿、曾本麻呂の二字に作る下同じ

○大伴宿禰宿奈麿、宿奈の二字は和銅元年正月紀寶龜元年五月紀に據て補ふ

○後部王、天武紀に後部王博阿于見え神龜三年閏正月紀に後部王越見ゆ後部王とは高麗の後部より歸化せしに因れるなるべし錄左京諸蕃に後部高麗國長王周之後也とあり書紀巻下附錄を參考すべし

王、壹志王、田中王、並從五位下、正五位上佐伯禰宜麿、巨勢朝臣祖父、並從四位下、從五位上穗積朝臣山守、巨勢朝臣久須比、大伴宿禰道足、佐太忌寸老、並正五位下、從五位下紀朝臣男人、笠朝臣吉麿、多治比眞人廣成、大伴宿禰宿奈麿、並從五位上、從六位上大神朝臣忍人、鴨朝臣堅麿、正六位上佐伯宿禰果安、小治田朝臣月足、正六位下額田首人足、從六位下後部王、同並從五位下、○壬辰、廢河內國高安烽、始置高見烽、及大倭國春日烽、以通平城也、○二月戊午、詔賜京畿高年鰥寡惸獨者、絁綿米鹽、各有差、高年僧尼亦同施焉、○三月戊子、美濃國獻木連理幷白鴈、○夏四月丁巳、詔、先是郡司主政主帳者、國司便任、申送名帳、隨而處分、事有率法、自今以後、宜見其正身、准式試練、然後補任、應請官裁、○五月壬申、駿河國疫、給藥療之、○癸酉、禁六位已下以白銅及銀餝革帶、○辛巳、詔曰、諸國大稅、三年賑貸者、本爲恤濟百姓窮乏、今國郡司及里長等、緣此恩借、妄生方便、害政蠹民、莫斯爲甚、如顧潤身、枉收利者、以重論之、罪在不赦、○甲申、初定國司巡行幷遷代時、給粮馬脚夫之法、語

○高安烽、大寶元年八月高安城を廢し是に至りて烽を廢せらるなり高安城及烽のこと既に云り
○高見烽、今河内國中河内郡孔舍衛村生駒山の南峯上なりといひ傳へたり平城京を一瞰するに一目に遮るものなき地なり
○大倭、金本閣本等大和に作る
○春日烽、大和志に烽火山在添上郡鹿野苑東所謂春日烽卽此とあり今同郡東市村大字鹿野に鉢伏山と云あり烽を置きし所なりと云ひ傳ふ
〔二月〕辛亥、原本亥を寅に作る金本管本及類史に據て改む
〔三月〕戊子、紀略戊寅に作る
○白鷹、紀略は白鷹に作る
〔四月〕見其正身云々、式部式に凡郡司有闕國司銓擬歷名附朝集使申上其身正月內集省若二月以後參者隨返却正身とは其本人を云
〔五月〕六位已下云々、靈龜元年九月紀に禁文武百寮六位以下用虎豹羆皮及金銀飾鞍具幷橫

具別式、太政官奏偁、郡司有能繁殖戸口、增益調庸、勸課農桑、人少匱乏、禁斷逋逃、肅清盜賊、籍帳皆實、戸口無遺、割斷合理、獄訟無寃、在職匪懈、立身淸愼、其居官貪濁、處事不平、職用既闕、公務不擧、侵沒百姓、請託公施、肆行奸猾、以求名官、田疇不開、減闕租調、籍帳多虛、口丁無實、逋逃在境、畋遊無度、又百姓精務農桑、產業日長、助養窮乏、存活獨惸、孝悌聞閭、材識堪幹、其若有郡司及百姓准上三條有合三勾以上者、國司具狀、附朝集使擧聞、奏可之、○乙酉、詔諸司主典以上、幷諸國朝集使等曰、制法以來、年月淹久、未熟律令、多有過失、自今以後、若有違令者、卽准其犯、依律科斷、其彈正者、月別三度、巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀、移送式部省、日勘問、又國司因公事入京者、宜差堪知其事者充使、使人亦宜問知事狀、幷惣知在任以來年別狀迹、隨問辨答、不得礙滯、若有不盡者、所由官人及使人、並准上科斷、自今以後、每年遣巡察使、撿按國內豐儉得失、宜使者至日、意存公平、直告莫隱、若有經問發覺者、科斷如前、凡國司、每年實錄官人等功過行能幷景迹、皆附考狀、申送式部

省、省宜勘會巡察所見、○丙申、太政官處分、凡位記印者、請於太政官下
諸國符印者申於弁官、○六月（己亥朔）乙巳（七）、地震、

○秋七月（戊辰朔）壬午（十五）、伊賀國獻玄狐、令伊勢、尾張、參河、駿河、伊豆、近江、越前、
丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、播磨、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波、伊豫、讃岐
等廿一國、始織綾錦、○甲申（十七）、播磨國大目從八位上樂浪河內、勤造正倉、
能効功績、進位一階、賜絁十匹、布卅端、○八月（戊戌朔）庚子（三）、太政官處分、諸國之
郡稻乏少、給用之日有致廢闕、宜准國大小、割取大稅、以充郡稻、相通出
舉、所息之利、隨即充用、事須取足、勿令乏少、但割配本數、不令減損、自
今以後、永爲恒例、○庚申（廿三）、行幸高安城、○九月（丁卯朔）己巳（三）、詔曰、故左大臣正二

刀帶端、但朝會日用者許之と見え、なほ衣服令、彈正式等に詳なり　○賑貸、金本閣本貸を借に作る　○里長、戸令に凡戸以五十戸爲里毎里置長一人とあり　○初定國司云々、田令集解外官新至條に和銅五年の格を載せて國司巡行部內將從次官以上三人判官以下二人史生一人並食公廨日米二升酒一升史生酒八合將從一人米一升五合と見え、遷代のことは政事要略に詳なり　○太政官奏儞云々、三代格に載する養老三年七月の格及延曆五年四月の官奏、大同四年九月の官符等を合せ見るべし、儞は稱の本字なり　○遺乏、考證に遺當依堀本作匱按匱俗作遺與遺字様相涉致譌也と云り　○割斷、原本割を制に作る金本曾本淀本に據て改む　○清愼、原本愼を情に作る類史及三代格に據て改む　○公施、三代格公行に作る　○合三勾、原本合を令に勾を句に作る諸本に據て改む三勾は三事といふが如し　○其彈正云々、彈正式に見ゆ　○所由、字書に所由は州郡の官也と云　○凡國司云々、考課令に凡國司毎年量郡司行能功過立四等功第云々毎年國司皆考對定訖具記附朝集使送省とあり　○景迹、考課令義解に景像也、猶言狀迹也とあり　○位記印、公式令に五位以上位記內印六位以下位記外印とあり　○請於太政官下諸國符、原本符を府に作る類史及紀略に據て改む太政官式に凡太政官下諸司諸國符隨事請內外印云々とあり

（（七月））玄狐、治部式に玄狐神獸也とあり　○駿河、原本河を川に作る諸本に據て改む　○始織綾錦、四年閏六月遣挑文師于諸國始敎習織錦綾と見えたり其結果なるべし　○樂浪河內、神龜元年五月紀に樂浪河內賜姓高丘連と見え神護景雲二年六月高丘宿禰比良麻呂傳に祖沙門詠近江朝歲次癸亥自百濟歸化云々と見え姓氏錄にも出でたり　○造正倉、原本造を建に作る淀本曾本及類史に據

て改む正倉は官より諸國郡に置て正税の穎穀等を納る、倉なり
○十四、原本十を一に作る類史に據て改む
八月 郡稲、賦役令義解に割置田租以充雜用是爲郡稲也云々、凡官稲之源出自田租即分爲三一曰大税二曰穎穀三曰郡稲也と見ゆ
九月 詔曰、紀略に曰の字なし
○家原音那、家原は姓氏録に見えず六年六月紀に家原河内等三人並に賜連姓と見え文德實錄齊衡二年八月家原連氏主云々等賜宿禰三代實錄貞觀二年十一月紀家原氏主云々等賜朝臣と見えたれど氏主の父富依は已の系を後漢光武帝より出づといひ子は宣化天皇第二の皇子より出づといひ父子の言ふ所異なれば出自何れかを別き難し、金本從本曾本那を郡に作る下同じ
○右大臣、金本閣本右を左に作る
○舊者、淀イ本及紀略者を老に作る
○阿直敬、阿直は記應神

位多治比眞人嶋之妻、家原音那、贈右大臣從二位大伴宿禰御行之妻、紀朝臣音那、並以夫存之日、相勸爲國之道、夫亡之後、固守同墳之意、朕思彼貞節、感歎之深、宜此二人各賜邑五十戸、其家原音那加賜連姓、又詔曰、朕聞、舊者相傳云、子年者穀實不宜、而天地垂祐、今茲大稔、古賢王有言、祥瑞之美、無以加豐年、況復伊賀國司阿直敬等所獻黑狐、即合上瑞、其文云、王者治致太平則見、思與衆庶共此歡慶、宜大赦天下、其強竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、但私鑄錢者、降罪一等、其伊賀國司目已上、進位一階、出瑞郡免庸、獲瑞人戸給復三年、又天下諸國今年田租、并大和河內山背三國調、並原免之、○庚午、授正六位上阿直敬從四位下、○辛巳、觀成法師爲大僧都、弁通法師爲少僧都、觀智法師爲律師、○乙酉、以從五位下道君首名、爲遣新羅大使、○己丑、太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴、設官撫民、文教所崇、其北道蝦狄、遠憑阻險、實縱狂心、屢驚邊境、自官軍雷擊、凶賊霧消、狄部晏然、皇民無擾、誠望便乘時機、遂置一國、式樹司宰、永鎭百姓、奏可之、於是始置出羽國、○乙未、禁取三

の段に阿知吉師者阿直史等之祖と見え天武紀十二年十月阿直史賜姓曰連と見ゆ、敬は名なり
○大和、天平勝寶元年大倭を大和に改む（字類抄に據る）此に大和とあるは追書せるなるべし下亦同じ
○阿直敬從四位下、四は恐くは五の誤なるべし官位相當らざればなり
○觀成、釋家初例抄大僧都直任例に見ゆ
○辟彊、辟は闢と通ず
○始置出羽國、元年九月越後國に新に出羽郡を建て是に至て國となせるなり拾芥抄に是年始て陸奧の二郡を割て出羽國を置くとあれど先づ越後國の出羽郡を國に昇せ出羽郡田川郡及飽海郡の三郡を管せしめ後下文の陸奧國最上置賜二郡を割きて之に隸けしにて主として今の羽前國を建てられ次々に今の羽後國までに及べる大國となされしなり
○禁取三關人云々、軍防令に凡帳內資人並不得取三關及大宰部內陸奧石城石背越中越後國人とあり、三關は伊勢國鈴

關人爲帳內資人、○冬十月丁酉朔、割陸奧國最上置賜二郡、隸出羽國焉、○癸丑、禁六位已下及官人等服用蘇芳色幷賣買、○丙辰、從四位上息長眞人老卒、○甲子、遣新羅使等辭見、○乙丑、詔曰、諸國役夫及運脚者、還鄕之日、粮食乏少、無由得達、宜割郡稻別貯便地、隨役夫到、任令交易、又令行旅人必齎錢爲資、因息重擔之勞、亦知用錢之便、○十一月辛巳、加左右弁官史生各六人、通前十六員、○乙酉、從三位阿倍朝臣宿奈麿言、從五位上引田朝臣邇閇、正七位上引田朝臣東人、從七位上引田朝臣船人、從七位下久努朝臣御田次、少初位下長田朝臣太麻呂、无位長田朝臣多祁留等六人、實是阿倍氏正宗、與宿奈麿無異、但緣居處更成別氏、於理斟酌、良可哀、於今宿奈麿特蒙天恩、已歸本姓、然此人等未霑聖澤、冀望、各正別氏、俱蒙本姓、詔許之、○十二月辛丑、制、諸司人等、衣服之作、或褾狹小、或裾大長、又衽之相過甚淺、行趍之時易開、如此之服、大成無禮、宜令所司嚴加禁止、又无位朝服、自今以後、皆著襴黃衣、襴廣一尺二寸以下、又諸國所送調庸等物、以錢換、宜以錢五文

鹿美濃國不破及越前國新發關を云
（十月）癸丑、原本丑を酉に作る此月丁酉朔なれば癸酉なし從イ本及紀略に據て改む
○蘇芳色、養老四年四月紀制三位已上妻子及四位五位妻並聽服蘇芳色とあり抄棠色具に蘇敬本草注云蘇枋（音方俗音須方）人用染色とあり
○運脚、調庸を運ぶ脚夫なり養老四年三月紀及天平寶字元年十月勅また賦役令に詳なり
（十一月）十一月、原本一を二に作る河海抄に據て改む干支を推すに十月丁酉朔にして辛巳は十一月十六日なり狩谷氏校本亦長屋王文武天皇の御爲に所寫大般若經跋文を引て明かに之を證す
○長田朝臣、養老元年八月紀に安倍朝臣宿奈麻呂言他田臣古萬呂本系同族實非異姓云々請賜安倍他田朝臣許之、後紀に弘仁三年二月阿倍長田朝臣爾麻呂等八人阿倍朝臣を賜はりしこと見え他田長田同訓にて何れも阿倍氏の同族なり

准布一常。○己酉、東西二京始置史生各二員。○丁巳、有司奏、自今以後、

公文錯誤、内印著了、事須改正者、少納言宜申官長、然後更奏印之、

○太麻呂、原本太を大に作る金本淀本曾本に據て改む
○多祁留、原本祁を初に作る諸本に據て改む
○宿奈麿、原本宿の下に禰の字あり曾本淀本に據て削る曾本麿を麻呂に作る
○哀於、於は當に矜に作るべし
○各正別氏、山田以文云正恐止字
(十二月)十二月、原本此上に閏の字あり金本閣本及紀略に據て除く干支を推すに閏十二月にあらざることは明かなり蓋上に十一月を十二月とせしより來れる誤なるべし
○相過、狩谷校本に過一作レ遇と云
○著禰黄衣、禰は抄裝束部に禰衫(須曾豆介乃古呂毛一云奈保之能古路毛)とあり黄衣は卽ち黄袍なり紀略には禰黄衣の三字なし
○調庸等物以錢換、調庸等錢を以て換ふること始て見ゆ養老六年九月紀には令三伊賀伊勢等國始輸二錢調一とあり　○布一常、賦役令義解に布一丈三尺是爲二一常一とあり　○二京、類史京を市に作る恐くは非　○始置、類史始を加に作るは誤れり、職員令京職に史生なし史生を置くは此に始まれり　○公文錯誤云々、太政官式に見ゆ　○内印、公式令に内印方三寸五位以上位記及下二諸國一公文則印とあり

續日本紀卷第五

○大輔、原本大を太に作る金本淀本に據て改む

【和銅六年】嘉瓜、考證に瓜疑當作不、聲近之譌と云
○從四位下、原本下の下に行の字あり紀略に據て削る
○伊福部女王、系未詳
○石川朝臣宮麻呂、宮の字は金本閣本及下文に據て補ふ
○无位門部王、三年正月紀に无位門部王に授從五位下また養老元年正月紀に授從五位上とあれば此に云々とあるは誤か又門は内の誤にて養老五年六月紀内部王爲大判事とある此人ならむとの說あり尙考ふべし
○高安王、天平十一年四月姓大原眞人を賜ふ
○阿倍朝臣廣庭等朝臣麻

續日本紀卷第六

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起和銅六年正月盡靈龜元年八月

日本根子天津御代豐國成姫天皇　元明天皇

六年(癸丑)春正月戊辰、備前國獻白鳩、伯耆國獻嘉瓜、左京職獻稗化爲不一莖、○丙子、從四位下伊福部女王卒、○丁亥、授正四位上巨勢朝臣麻呂、正四位下石川朝臣宮麻呂、並從三位、无位門部王從四位下、无位高安王從五位下、正五位上阿倍朝臣廣庭、笠朝臣麻呂、多治比眞人三宅麻呂、藤原朝臣武智麻呂、並從四位下、正六位下巨勢朝臣安麻呂、正七位上石川朝臣君子、從六位下佐伯宿禰沙彌麻呂、正七位上久米朝臣麻呂、正七位下大神朝臣興志、從七位下榎井朝臣廣國、正六位上大藏忌寸老、錦部連道麻呂、伊吉連古麻呂、並從五位下、○二月甲午朔、日有蝕之、○壬子、始制度量調庸義倉等類五條事、語具別格、○丙辰、志摩國

疫、給藥救之、○三月（甲子朔）壬子（十九）、詔曰、任郡司少領以上者、性識清廉、雖堪時務、而蓄錢乏少、不滿六貫、自今以後、不得遷任、又詔、諸國之地、江山遐阻、負擔之輩、久苦行役、具備資粮、闕納貢之恒數、減損重負、恐殣路之不少、宜各持一囊錢、作當爐給、永省勞費、往還得便、宜國郡司等、募豪富家、置米路側、任其賣買、一年之內賣米一百斛以上者、以名奏聞、又賣買田、以錢爲價、若以他物爲價、田幷其物共爲沒官、或有糺告者、則給告人、賣及買人並科違勅罪、郡司不加撿挍、違十事以上、即解其任、九事以下、量降考第、國司者式部監察、計違附考、或雖非用錢、而情願通商者聽之、

呂、廣以下の五字は金本淀本曾本に據て補ふ　○石川朝臣君子、萬葉三左注云石川朝臣君子號曰少郞子とあり君子或は吉彌侯に作れり　○廣國、原本廣を麻に作る八月紀及次々に見えたるに據て改む　○錦部連、諸本錦を綿に作る傍訓及大寶元年正月紀に據て改む

（二月）始制度量云々、格文は田令戶令及賦役令集解に載す　○度量、雜令に凡度地五尺爲歩とあるを田令集解に載する和銅六年二月十九日格文には其度地以六尺爲歩とあり集解に令以五尺爲歩者是高麗法准今尺大六尺相當と云

○調庸、賦役令集解所載の格文に其庸布以二丁成段長二丈六尺とあり　○義倉、格文に其資財百貫以上爲上上戶六十貫以上爲上中戶四十貫以上爲上下戶廿貫以上爲中上戶十六貫以上爲中中戶十二貫以上爲中下戶八貫以上爲下上戶四貫以上爲下中戶二貫以上爲下下戶也とあり　（三月）性識清廉、選叙令に凡郡司取性識清廉堪時務者爲大領少領とあり　○蓄錢、四年十月紀に見ゆ　○江山遐阻、遐は遠、阻は險なり隔なり、道途遠く隔るを云　○殣路、左傳宣二年注に餓死爲殣とあり　○各持一囊錢、五年十月詔令行旅人必齎錢爲資因息重擔之勞とあるも同じ、袋に錢を入れて物資に易ふる用意をせよとなり　○作當爐給　原本爐を廬に作る諸本に據て改む當爐給とは孝德紀大化二年二月詔（紀下一八八頁）に役之民路頭炊飯とあるが如く上古は自ら米を負て途中到る處にて爐を借り飯を炊ぎて之を食したるを錢を懷中し之にて米を購ひ飯を炊げば大に便利なる故にかくせしめられしなり

（四月）丹波國五郡、加佐、與謝、丹波、竹野、加

○夏四月（癸巳朔）乙未（三）、割丹波國五郡、始置丹後國、割備前國六郡、始置美作國、

割日向國肝坏、贈於、大隅、始纙四郡、始置大隅國。大和國疫、給藥救之、
○戊申、頒下新格幷權衡度量於天下諸國。○己酉、因諸寺田記錯誤、更爲改正、一通藏所司、一通頒諸國。○乙卯、授從四位下安八萬王從四位上、正五位下大石王從四位下、從五位上益氣王正五位下、從四位上多治比眞人池守正四位下、正五位上百濟王遠寶從四位下、從五位上大伴宿禰男人正五位上、從五位下賀茂朝臣吉備麻呂正五位下、笠朝臣長目、穗積朝臣老、小野朝臣馬養、調連淡海、倉垣忌寸子首、並從五位上。讃岐國飢、賑恤之。始制、五位以上同位階者、因年長幼以爲列次、
○丁巳、制、銓衡人物、黜陟優劣、式部之任、務重他省、宜論勳績之日、無式部長官者、其事勿論焉。○五月甲子、畿內七道諸國郡鄕名著好字、其郡內所生、銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目、及土地沃塉、山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上。○己巳、制、夫郡司大少領、以終身爲限、非遷代之任、而不善國司、情有愛憎、以非爲是、强云致仕、集理解却、自今以後、不得更然、若齒及縱心、氣力尪弱、筋骨

能野郡是なり
○備前國六郡、英多、勝田、苫田（貞觀五年東西二郡に分つ）久米、大庭、眞嶋郡是なり
○肝坏、文武紀肝衡に、倭名抄は肝屬に作る
○贈於、民部式及倭名抄贈唹に作る
○始纙、式及抄始羅に作る
○大和國、原本此上に大隅國の三字あり衍なり金本閣本曾本に據て削る、和は類史倭に作る
○權衡度量、抄稱權具に權衡廣雅云錘謂之權（波加利及於毛之）衡名苑云銓一名衡（楊氏漢語抄云權衡加良波可利）稱也また漢書律歷志に度者所以度長短、量者所以量多少、權者所以稱物平施知輕重とあり
○笠朝臣長目、笠の上に從五位下の四字を補ふべし、金本閣本目を日に作る
○倉垣、金本閣本曾本倉を蒼に作る
○銓衡人物、職員令に式部卿掌內外文官名帳考課選敍禮儀版位位記校定勳績論功封賞云々事

とあり其任他省より重し
原本銓を詮に作る紀略に據て改む
○黜陟、原本陟を渉に作る淀本及類史に據て改む
(五月)畿內、畿上に制の字あるべし
○郡鄕名著好字、略記には此下に又令作風土記とあり皇代記亦同じ
○郡內、部內の誤なるべし
○涐堉、涐は沃の俗字
○載于史籍言上、金本閣本史の字なく紀略に于の字なし曾本言の上二字空白、略記に只宜の二字を塡む
○强云致仕、天平六年四月紀禁斷以年七十以上人新擬郡司とあり七十以上の人の新に任ずるをば禁ぜしも從來其職にあるものは强て致仕せしめざるなり
○集理、鴨本集を奪に作ると云
○縱心、論語爲政に七十而從心所欲不踰矩とあるに據れり、縱疑らくは從の誤か
○發狂言、恐らくは脫字あらむ
○心素、本心といふが如

衰耗、神識迷亂、又久沈重病、起居不漸、發狂言、無益時務、如此之類、披訴心素、歸田養命、於理合聽、宜具得手書陳牒所司、待報處分、撰擇替補、○癸酉、相摸、常陸、上野、武藏、下野五國輸調、元來是布也、自今以後、絁布並進、又令大倭參河並獻雲母、伊勢水銀、相摸石流黃、白樊石、黃樊石、近江慈石、美濃青樊石、飛驒、若狹並樊石、信濃石流黃、上野金青、陸奧白石英、雲母、石流黃、出雲黃樊石、讃岐白樊石、○甲戌、讃岐守正五位下大伴宿禰道足等言、部下寒川郡人物部亂等廿六人、庚午(天智九年)以來、並貫良人、但庚寅(持統四年)校籍之時、誤渉飼丁之色、自加覆察、就令自理、支證的然、已得明雪、自厥以來、未附籍貫、故皇子命宮、撿括飼丁之使、誤認亂等爲飼丁焉、於理斟酌、何足憑據、請從良色、許之、○丁亥、始令山背國點乳牛戶五十戶、○六月(癸巳朔)庚戌、從七位上家原河內、正八位上家原大直、大初位上首名等三人並賜連姓、○辛亥、右京人支半于刀、河內國志紀郡人刀母離余叡色奈、並染作暈繝色而獻之、以勞各授從八位下、幷賜絁十疋、絲四十絇、布四十端、鹽十籠、穀一百斛、○癸丑、始置大膳職史生四員、○乙卯、行

し

○大倭、諸本及紀略倭を和に作る

幸甕原離宮、○戊午、還宮、

○雲母、抄珍寶部に本草云雲母（和名岐良々）とあり色彩に依て雲珠雲華雲英雲液雲沙等の名ありキラ、は其光映のきらくしきよりいふ　○水銀、抄珍寶部に蔣魴切韻云汞（和名美豆加禰）水銀別名也とあり　○石流黃、抄天地部水土類に流黃本草疏云石流黃（和名由乃阿和俗云由王）礬石液也とあり　○白礬石、抄天地部山石類に蘇敬曰礬石（此間云閼只）有青礬白礬綠礬黃礬五種矣　○慈石、抄天地部山石類に本草云慈石吸針（此間云之蠟久）と云　○金青、抄圖繪具に本草稽疑云金青者空青之最上也　○白石英、本草和名に白石英一名白埘とあり　○誤涉飼丁之色、飼丁は馬飼なり職員令有馬寮集解に飼丁猶言飼戶とあり　○支證、獄令義解に謂支證者支擧也猶云擧證也とあり　○故皇子命宮、草壁皇子を云　○使、原本便に作る金本閣本淀本に據て改む　○乳牛戶、職員令典藥寮乳戶集解に別記を引て云乳戶五十戶經年役一番輸十丁是爲品部免調及雜徭とあり紀略乳牛の上に飼の字あり　〔六月〕大直、原本直を眞に作る諸本に據て改む　○首名、此上に家原の二字を脫せるなるべし　○支半于刀、詳ならす　○刀母離、詳ならす　○余眞色奈、考證に余姓眞色奈名、案養老元年正月有余眞人、五年正月余秦勝、七年正月余仁軍、天平勝寶元年五月余足人賜百濟朝臣姓皆同姓也狩谷氏曰余卽餘字案餘百濟本姓見東國通鑑と云　○暈繝色、抄布帛部錦の注に本朝式有暈繝錦云々等之名繝字所出未詳、箋注に按暈繝本彩色之名云々其色各種相間皆橫終幅假令白次之以紅次之以赤次之以紅次之以白次之以縹次之以青次之以縹次之以白之類漸次濃淡如日月暈氣雜色相間之狀故謂之暈間以後名錦俗从糸とあり　○以勞、以の字は類史に據て補ふ　○布四十端、布四十の三字は閣本淀本及類史に據て補ふ　○甕原離宮、山城志に在相樂郡瓶原鄕岡崎井平尾二村間とあり今山城國相樂郡瓶原村なり

〔七月〕勳級、勳には等級あり故に勳級と云ふ　○今討隼賊、此事前に見えず逸せしならむ　○宇太郡、原本宇を守に作る淀本及紀略に據て改む延喜式拾芥抄に宇陀に作る　○波坂郷、抄國郡部に大和國宇陀郡郷名須坂奈無佐加、大和志に須坂郷已廢存于井村とあり今同郡榛原町政始村神戸村の何れかならむ　○銅鐸、抄伽藍具に寶鐸四聲字苑云鐸大鈴也とあ

○秋七月丙寅、詔曰、授以勳級、本據有功、若不優異、何以勸奬、今討隼賊、將軍幷士卒等、戰陣有功者一千二百八十餘人、並宜隨勞授勳焉、○丁卯、大倭國宇太郡波坂郷人大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而獻之、高三尺、口徑一尺、其制異常、音協律呂、勅所司藏之、○戊辰、美濃信濃二國之堺、徑道險阻、往還艱難、仍通吉蘇路、○八月辛丑、從五位下道公首名至自新羅、○乙卯、大風、拔木發屋、○丁巳、以正五位下大伴

り
○長岡野地、未詳、紀略地の下に中の字あり
○勅所司藏之、雜令に得古器者形製異者悉送官酬直とあり
○美濃信濃云々、大寶二年十二月紀に云へり
○險阻、金本閣本阻を隘に作る
○仍通吉蘇路、萬葉十四に信濃道は今の墾道(ハリミチ)と見え當時始て開きし由を詠めり
○發屋、原本發を廢に作る諸本及紀略に據て改む
○道君首名、原本名の字なし、上文及靈龜元年正月紀に據て補ふ
(九月)○大伴宿禰手拍、持統紀元年六月に初て見え慶雲二年五月尾張守となる
○玖左佐村、雄略紀來狹々村に作る神名式攝津國能勢郡久佐々神社あり攝津志に能勢郡宿野村舊名來狹々とあり今豐能郡西鄕村大字宿野是なり又春海の説に按能勢郡有村乎無(良)枳根(木子)二鄕見和名抄一本爲是と見ゆ
○請置郡司、原本置を署

宿禰道足爲彈正尹、從四位下大石王爲攝津大夫、從五位下榎井朝臣廣國爲參河守、從五位下大神朝臣興志爲讃岐守、從五位下道君首名爲筑後守。○九月丁丑、造宮卿從四位下大伴宿禰手拍卒。○己卯、攝津職言、河邊郡玖左佐村、山川遠隔、道路嶮難、由是大寶元年始建館舍、雜務公文、一准郡例、請置郡司。許之、今能勢郡是也。詔、和銅四年已前、公私出擧稻粟、未償上者、皆免除之。○辛巳、加大藏省史生六員。○冬十月戊戌、制、諸寺多占田野、其數無限、宜自今以後、數過格者、皆還收之。○庚子、板屋司班秩、一准寮焉。蓋改法用司爲板屋司也。○丁巳、更加民部史生六員。○戊午、詔、防人赴戍、時差專使、由是驛使繁多、人馬並疲、宜遞送發焉。○十一月辛酉朔、伊賀、伊勢、尾張、參河、出羽等國言、大風傷秋稼、調庸並免、但已輸者、以稅給之。○乙丑、貶石川紀二嬪號、不得稱嬪。○丙子、詔、正七位上按作磨心、能工異才、獨越衆侶、織成錦綾、實稱妙麗、宜磨心子孫免雜戶、賜姓栢原村主。大倭國獻嘉蓮、近江國獻木連理十二株、但馬國獻白雉。太政官處分、凡諸司功過者、皆申送弁官、乃官下式部。○乙

に作る狩谷校本に據て改む
〔十月〕諸寺云々、僧尼令に凡僧尼不得私蓄田宅財物及興販出息とあり然るに實行せられぬよりかゝる制の出でしなり、天平十八年三月にも太政官處分凡寺買地律令所禁比年之間占買寔多於理商量深乖憲法宜令京畿內嚴加禁制等と見えたり　○(注)法用司、二年二月紀に見ゆ析[illegible]司と改し年月詳ならず　○起戊、原本戊を戎に作る金本從も曾本に據て改む　○時差專使、考證に時は特の誤なるべしと云軍防令に凡防人至津之間皆令國司親自部領自津發日專使部領付大宰府とあり　〔十一月〕辛酉朔、原本朔を闕く、此月辛酉朔なれば例に據て補ふ　○石川紀二嬪、文武元年丁酉八月紀に紀朝臣竈門娘、石川朝臣刀子娘爲嬪　○拔作鞍心、拔作は姓氏錄に見えず萬葉三に拔作村主あり狩谷氏は鞍作は鞍部と同氏にして司馬達等の子に鞍部多須奈、其子に鞍作鳥見ゆ佛工師を世職の氏族也と云り賢は紀略麻に作る　○獨越、紀略越を超に作る　○雜戸、大寶三年五月紀に見ゆ　○楢原村主、主は金本曾本及紀略に據て補ふ　○大倭國、紀略倭を和に作る　○太政官、原本太を大に作る諸本及紀略に據て改む　○乃官下式部、乃官の二字は諸本及紀略に據て補ふ考課令に諸司の功過は當司長官より太政官に申送れとあるを諸司より弁官に申送し太政官を經て式部に下す事に定められしなり　〔十二月〕丹取、抄國郡部陸奧國の郡名に名取奈止里とあり民部式拾芥抄共に名取に作る丹取名取音通す今の陸前國名取郡なり　○從三位石川朝臣宮麻呂薨、從三位の三字は紀略に據て補ふ宮麻呂は慶雲二年十一月大宰大貳、和銅元年三月右大弁となる　○近江朝大臣大紫連子、天智紀三年五月大紫蘇我連大臣薨とあり天平寶字六年九月紀には大紫蘇我臣牟羅志に作る　○宮內、類史內の下に省字あり　○己酉、類史此條を十月に係く

酉、權充兵馬司史生四人。○十二月辛卯、新建陸奧國丹取郡。○乙未、右大弁從三位石川朝臣宮麻呂薨、近江朝大臣大紫連子之第五男也。○庚子、始加中務史生十員。○乙巳、近江國言、慶雲見。丹波國獻白雉。仍曲赦二國。○己酉、始加宮內史生十員。

【和銅七年】田租全給、賦役令に凡封戸皆以課戸充調庸全給其田租爲二分一分入官一分給主とあり天平十一年五月の詔を以て此の如く一般に全く給することゝなりぬ
○無位河內王、無位の二字は諸本に據て補ふ天平九年十月及寶龜元年十月紀に見ゆるは別人なり

七年春正月壬戌、二品長親王、舍人親王、新田部親王、三品志貴親王、益封各二百戸、從三位長屋王一百戸、封租全給、其食封田租全給封主、自此始矣。○甲子、授正四位下多治比眞人池守從三位。無位河內王從四位下、无位櫻井王、大伴王、佐爲王、並從五位下、從四位下大神朝臣安麻呂從四位上、正五位上石川朝臣石足、石川朝臣難波麻呂、忌部宿禰

○春日椋首、大寶元年三月僧弁紀還俗賜姓春日倉首名老とみえたり
○刑義善、原本義字一字衍れり諸本に據て削る刑は考證に疑荊字之譌と云り神龜元年正月紀に荊軌武、懷風藻に左大史荊助仁見ゆ同族なるべけれど系詳ならず
○吉宜、文武紀四年庚子八月僧惠俊還俗賜姓吉名宜と見え神龜元年五月姓吉田連を賜ふ
○津守連道、下文十月丁卯紀及聖武紀に據るに道は通の訛なり
○猪名眞人石前卒、大寶三年七月備前守、和銅三年三月右京大夫となる
○氷高內親王、元正天皇に坐す、內親の二字は淀本及紀略に據て補ふ
○武藏下野五國、原本武藏下野の四字なく五を三に作る諸本に據て補訂す
○欲輸布者、布の下者の字は金本曾本に據て補ふ
○大神朝臣安麻呂卒、持統紀三年二月に判事、慶雲四年九月氏長、和銅元年九月攝津大夫となる又懷風藻に見ゆ
（二月）商布、抄布帛部

子首、正五位下阿倍朝臣首名、從五位上阿倍朝臣爾閇、並從四位下、從五位上船連甚勝正五位下、正六位上春日椋首老、正六位下引田朝臣眞人、小治田朝臣豐足、山上臣憶良、刑義善、吉宜、息長眞人臣足、高向朝臣大足、從六位上大伴宿禰山守、菅生朝臣國益、太宅朝臣大國、從六位下粟田朝臣人上、津嶋朝臣眞鎌、波多眞人餘射、正七位上津守連道、並從五位下、○庚午、散位從四位下猪名眞人石前卒、○己卯、益二品氷高內親王食封一千戸、○甲申、令相摸、常陸、上野、武藏、下野五國、始輸絁調、但欲輸布者許之、○丙戌、兵部卿從四位上大神朝臣安麻呂卒、○二月己丑朔、日有蝕之、○庚寅、制、以商布二丈六尺爲段、不得用常、如有蓄常布、自擬産業者、今年十二月以前、悉賣用畢、或貯積稍多、出賣不盡者、便納官司、與和價、或限外賣買、沒爲官物、有人糺告、皆賞告者、其帶關國司、商旅過日、審加勘搜、附使言上、上總國言、去京遙遠、貢調極重、請代細布、頗省負擔、其長六丈、闊二尺二寸、每丁輸二丈、以三人成端、許之、○辛卯、詔曰、人足衣食、共知禮節、身苦貧窮、競爲奸詐、宜令輸絁

絲綿布調國等、調庸以外、每人儲絲一斤、綿二斤、布六段、(調年十五以上六十五以下者)以資産業、无使苦乏、國郡能加監察、務依數儲備者、加考一等、或里長者、免當年調、若以虛妄顯稱、國郡司卽解見任、里長徵調止掌、○丁酉、以從五位下大倭忌寸五百足爲氏上、令主神祭、○戊戌、詔從六位上紀朝臣清人、正八位下三宅臣藤麻呂、令撰國史、○辛丑、始令出羽國養蠶、○壬寅、遣使于七道諸國、錄囚徒焉、○閏二月戊午朔、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂封七十戶田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兒人、各進位階、匠從六位上伊福部君荒當賜田二町、以通吉蘇路也、○己卯、行幸甕原離宮、○三月丁酉、沙門義法還俗、姓大津連、名意毗登、授從五位下、爲用占術也、○壬寅、隼人昏荒野心、未習憲法、因移豐前國民二百戶、令相勸導也、○乙卯、授從五位下上毛野朝臣廣人、大伴宿禰牛養並從五位上、

に本朝式云商布(多遍)とあり手布々々の轉と云り調庸に納むる外自用とし又は交易に用ふる布の稱なり　○不得用常、常は一丈三尺なるを云必す段とし常を用ふることを禁じたるなり　○擬産業、原本擬を授に作る諸本及類史に據て改む擬は字書に準也とあり　○細布、細布と調布との異同は賦役令に布二丈六尺二丁成端注に端長五丈二尺廣二尺四寸とあるが細布は長六丈廣二尺二寸とあり細布は長さ八尺長きも廣さに於て二寸を減じ毎丁二丈を輸し二人を以て端を成すが故に重量に於て約三分の一を減ず故に頗る負擔を減すと云り但し主計式には細布二丁端を成すとあり後に改まれるなるべし　○三人、狩谷氏は人は丁なるべしと云り閣本三を二に作り金本從本三人を三丈に作れり　○人是衣食云々、史記管仲傳に倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱とあるに據れり　○(注)調、原本調に作る諸本及紀略に據て改む　○儲備、原本備の字なし諸本に據て補ふ　○大倭、金本閣本等大和に作る下同じ　○令主神祭、崇神紀七年十一月以長尾市爲祭倭大國魂神之主と見ゆ五百足は長尾市の後なれば其祖先より奉仕せし大國魂神の祭を主らしめ給ひしなるべしと考證に云り然らば令主大和神祭とあるべきにさはなくてたゞ神祭とあるは氏神の祭祀

〇夏四月辛未、中納言從三位兼中務卿勳三等小野朝臣毛野薨、小治田朝大德冠妹子之孫、小錦中毛人之子也、〇戊寅、制、諸國庸綿、丁五兩、但安藝國絲、丁二兩、遠江國絲三兩、並以二丁成屯絇也、〇壬午、太政官奏、諸國租倉、大小并所積數、比挍文案、無所錯失、因斯、國司相替之日、依帳承付、不更勘驗、而用多缺少、徒立虛帳、本無實數、良由國郡司等不撿挍之所致也、自今以後、諸國造倉、率爲三等、大受肆仟斛、中參仟斛、小貳仟斛、一定之後、勿虛文案、〇辛巳、給多褹嶋印一圖、

〇五月丁亥朔、大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨、帝深悼之、詔贈從二位、安麻呂難波朝（孝德）右大臣大紫長德之第六子也、〇癸丑、土左

の意なるべきか考ふべし　〇正八位下、原本此四字なし類史及紀略に據て補ふ　〇藤麻呂、類史及紀略勝麻呂に作る　〇撰國史、天武紀十二年二月に詔川島皇子忍壁皇子云々令記定帝紀及上古諸事云々とある後を承けて撰修せしめられしなり（卷上解說を參考すべし）（閏二月）匠従六位上、原本匠を并に作る諸本に據て改む　〇伊福部君荒當、錄山城神別に伊福部、大和神別に伊福部宿禰及伊福部連見ゆ、火明命の後なり此に君とあれば異同は詳ならず、紀略君を若に作る　〇（三月）丁酉、干支を推すに二月は戊午朔にして丁酉は三月十日なり依て三月の二字を補ふ　〇大津連、姓氏錄に見えず系詳ならず　〇意毗登、元正紀聖武紀並に首の一字に作る　〇昏荒、原本昏を民に作る淀本曾本に據て改む

（四月）小野朝臣毛野薨、慶雲二年十一月中務卿、和銅元年三月中納言となる　〇大德冠、紀下附錄に見ゆ　〇妹子、推古紀に見ゆ　〇毛人、古京遺文に所載の墓志に飛鳥淨御原治天下天皇御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上小野毛人朝臣之墓營造歲次丁丑年十二月上旬即葬と見ゆ丁丑年は天武天皇六年なり　〇二丁、原本丁を町に作る諸本に據て改む　〇壬午、干支を推すに次の辛巳と錯置せり壬午は廿六日なり　〇租倉、原本倉を食に作る考證に食一本に依て倉に作るべしとあるに從て改む　〇大小、金本閣本此二字なし　〇國司相替云々、交替式に倉庫令を引て凡倉藏及文案孔目官人交替之日並相分付然後放還若數多不可移動據帳分付と云　〇徒立虛帳、原本徒を從に作る諸本に據て改む　〇肆仟斛、四千石なり公式令に簿帳科罪計贓過所抄膀之類有數者爲大字とある是なり下同じ　〇一圖、狩谷校本に云圖恐面

（五月）大伴宿禰安麻呂薨、天武紀元年六月に初見、大寶二年正月式部卿、同六月兵部卿、慶雲二年八月大納言、同十一月兼

大宰帥たり、大將軍たりしこと見えず實に大宰帥の誤か
○六月己若帶日子姓、史に見えず若帶日子は成務天皇の御諱なり
○國造人、詳ならず
○寺人姓、養老七年二月紀に寺人小君等改賜道守臣姓と見ゆれど別同には決め難し
○職分資人、位分の資人と職分の資人とあり職分資人は官職に依て附せらるゝを云
○留省、後に留省資人の稱あり天平寶字二年十二月紀に見え續後紀天長十年二月留省七位[illegible]弘連豐山と見ゆ
○舛謬、舛は原本殊に作る考證に據て改む舛は字書に相背也錯亂とあり
○南畝、毛詩豳風七月に三之日于耜四之日擧趾同我婦子饁彼南畝とあるに據りて農事の意に用ひしなり
○田園、紀略園を圖に作る
○嘉澍、慶雲二年六月(四三頁)紀に注す
○元服、漢書昭帝紀註に元、首也、冠者、首之

國人物部毛蟲咩一產三子、賜穀四十斛幷乳母、○六月己巳、若帶日子姓、爲觸國諱、改因居地賜之國造人姓、除人字、寺人姓本是物部族也、而庚午年籍、因居地名、始號寺人、疑涉賤隷、故除寺人、改從本姓矣、○甲戌、太政官處分、職分資人若本主亡、幷以理去官者、不限年遠近、並留省焉、如本主去官亦有復任、以舊人充焉、○戊寅、詔曰、頃者陰陽舛謬、氣序乖違、南畝方興、膏澤未降、百姓田園、往々損傷、宜以幣帛、奉諸社、祈雨于名山大川、庶致嘉澍、勿虧農桑、○庚辰、皇太子加元服、○癸未、大赦天下、自和銅七年六月廿八日午時已前、大辟罪以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫因見徒、沒爲奴婢、及犯八虐、常赦所不免者、咸赦除之、其私鑄錢、及竊盜强盜、並不在赦限、但鑄盜之徒合死坐降罪一等、諸老人歲百以上賜穀伍斛、九十已上參斛、八十已上壹斛、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡惸獨、篤疾重病之徒、不能自存者、宜令所司量加賑恤、○甲申、從七位下大津造元休、從八位下船人等、並賜連姓、

所レ著、故曰二元服一とあり　○已結正、獄令に所謂獄成るを云獄案已に成て罪名の完まれるなり　○未結正、已結正に對して罪名の未だ定まらざるものを云　○見徒、徒刑に處せられ現に服役するものを云　○強盜、此二字は金本曾本淀本に據て補ふ　○歳百、紀略百歳に作る　○壹斛、原本斛を石に作る紀略に據て改む　○篤疾云々、戸令に惡疾癲狂二支癈兩目盲如レ之類皆爲二篤疾一とあり紀略には重病の二字なし　○大津造、姓氏錄に見えず原本津を律に作る金本淀本に據て改む

○秋八月（丙辰朔）乙丑（十）、制、散事五位如レ應レ賜レ祿、自今以後、准二職事正六位一焉、○九月（乙酉朔）甲辰（廿）、制、自今以後、不レ得レ擇レ錢、若有二實知官錢一、輙嫌擇者、勅使杖一百、其濫錢者、主客相對破之、即送二市司一、○壬子（廿八）、授二正七位上栢原村主磨心從五位下一、○冬十月乙卯朔、美濃、武藏、下野、伯耆、播磨、伊豫六國、大風發レ屋、仍免二當年租調一、○丙辰（二）、勅、割二尾張、上野、信濃、越後等國民二百戸一、配二出羽柵戸一、○丁卯（十三）、以二從四位下石川朝臣難波麻呂一爲二常陸守一、從五位上巨勢朝臣兒祖父爲二伊豫守一、從五位下津嶋朝臣眞鎌爲二伊勢守一、從五位上平群朝臣安麻呂爲二尾張守一、從五位下佐伯宿禰沙彌麻呂爲二信濃守一、從五位下大宅朝臣大國爲二上野守一、從五位下津守連通爲二美作守一、○辛未（十七）、造宮省加二史生六員一、通二前十四人一、○十一月（乙酉朔）戊子（四）、大倭國添下郡人大倭忌寸果安、添上郡人奈良許知麻呂、有智郡女日比信紗、並終レ身勿レ事、旌二孝義一也、果安、孝二養父母一、友二于兄弟一、若有二人病飢一、自齎二私粮一、巡加二

（八月）秋八月、原本秋の字なし例に據て補ふ　○散事五位、散事は職事官に對して執掌する所なきを云　○如應賜祿、原本賜の上に加の字あり如の字なし金本曾本淀本に據て訂す

（九月）濫錢、考證に藤貞幹曰和銅錢一種有二銅質黑濁輕小不レ精者一史所レ謂濫錢即此と云　○栢原、原本栢を柏に作る金本曾本淀本に據て改む

（十月）發屋、原本發を廢に作る金本及紀略類史に據て改む　○出羽柵戸、二年六月紀に出づ　○兒祖父、父の字は四年四月紀に據て補ふ　○佐伯宿禰、宿禰の二字は曾本淀本及六年正月紀に據て補ふ

（十一月）大倭、金本曾本淀本倭を和に作る　○大倭忌寸、大の字は金本閣本等に據て補ふ

看養、登美箭田二鄕百姓、咸感恩義、敬愛如親、麻呂、立性孝順、與人無恐、營被後母讒不得入父家、絕無怨色、孝養彌篤、信紗、氏直果安妻也、事舅姑以孝聞、夫亡之後、積年守志、自提孩稚并妾子惣八人、撫養無別、事舅姑、自竭婦禮、爲鄕里之所歎也、○乙未、新羅國遣重阿飡金元靜等二十餘人朝貢、差發畿內七道騎兵合九百九十、爲擬入朝儀衛也、○己亥、遣使迎新羅使於筑紫、○庚戌、從四位下大伴宿禰旅人爲左將軍、從五位上多治比眞人廣成、從五位下久米朝臣麻呂爲副將軍、從四位下石上朝臣豐庭爲右將軍、從五位上上毛野朝臣廣人、從五位下粟田朝臣人上爲副將軍、○十二月戊午、少初位下太朝臣遠建治等、率南嶋奄美、信覺及球美等嶋人五十二人、至自南嶋、○己卯、新羅使入京、遣從六位下布勢朝臣人、正七位上大野朝臣東人、率騎兵一百七十、迎於三椅、

○奈良許知麻呂、續後紀承和十年十二月奈良已智豐運等八人賜姓人瀧宿禰其先百濟國人也とあり

○有智郡、今の宇智郡なり金本閣本有知に作る

○日比、狩谷氏は日佐に作るべしといひ內藤氏は疑らくは四比の譌と云り天智紀に四比福夫、神龜元年五月紀に四比忠勇見ゆ

○友于兄弟、尙書君陳に出づ

○登美、添下郡にあり西大寺田園目錄に鳥見莊と見ゆ大和志に添下郡鳥貝今曰鳥見莊と云地理志料には鳥貝鳥見を並擧ぐ

○箭田、同じく添下郡にあり倭名抄に矢田と書けり大和志に添下郡郷名の條に矢田方廢村存と云今生駒郡[illegible]是也

○敬愛、原本愛を受に作る金本閣本に據て改む

○無恐、狩谷棭本に恐疑怨、また怨の誤かとも云へり

○怨色、原本怨色に作る考證に據て改む　○孝養、孝は山崎校本に據て補ふ　○氏直果安、狩谷氏は氏疑民字、又按民直果安與上倭忌寸果安別人と云り又一說に直は是の誤にて信紗氏是果安妻也とあるべきなりと云　○孩稚、字書に孩は幼稚也稚は凡人物幼小皆曰稚とあり　○所歎、原本歎を欲に作る諸本に據て改む　○重阿飡、原本阿を河に作る紀略に據て改む重阿飡は新羅第七等の官名　○差發云々、薩摩隼人の入朝、新羅國の朝

貢、唐客の入朝の度に此事あり　○左將軍、三年正月紀に云り　○粟田朝臣人上、上の字は淀本に據て補ふ　〔十二月〕○奄美、今の大島、文武紀に菴美に作る○信覺、南島志に今之八重山嶋、石垣、入表二島之地總稱以爲八重山云々とあり今の石垣島なりと云　○球美、南島志に舊作九米嶋在那覇港及計羅摩嶋西とあり今久米島と稱し那覇の西四十八里に在りと云　○布勢朝臣人、淀本及紀略人の上に巨の字あり　○三橋、寶龜十年四月紀に唐客入京將軍等率騎兵二百蝦夷廿人迎接於京城門外三橋と見えたる三橋に同じきか金本閣本には三を一に作り紀略には橋を埼に作る

【靈龜元年】始加禮服、服の字は諸本及類史紀略に據て補ふ
○鉦鼓、鉦と鼓となり鉦は樂家に所謂鉦鼓にて抄音樂具に鉦鼓後漢書云鉦鼓之聲（鉦音征俗云常古）兼名苑云鉦一名鐃金鼓也とあり鼓は鼓（和名都々美）とあり
○白鴿、抄羽族部に本草云鴿（和名伊閇波止）頸短灰色とあり白鴿は全身純白の鴿なと云
○盜□人、□は類史に據て補ふ
○三品志紀親王二品、三品の二字は和銅七年正月紀に據り二品の二字は金本閣本等に據て補ふ
○多治比、比の字は淀本に據て補ふ
○藤原朝臣武智麻呂、朝臣の二字は前後の例に據て補ふ
○曾禰連足人、人の字は慶雲元年正月紀及和銅四年四月紀に據て補ふ

靈龜元年（乙卯）春正月甲申朔、天皇御大極殿受朝、皇太子（聖武）始加禮服拜朝、陸奧出羽蝦夷、幷南嶋奄美、夜久、度感、信覺、球美等來朝、各貢方物、其儀朱雀門左右陣列鼓吹騎兵、元會之日、用鉦鼓自是始矣、是日、東方慶雲見、遠江國獻白狐、丹波國獻白鴿、○癸巳、詔曰、今年元日、皇太子始拜朝、瑞雲顯見、宜大赦天下、但犯八虐、私鑄錢、盜□人、常赦所不原者、並不在赦限、內外文武官六位以下、進位一階、又授二品穗積親王一品、三品志紀親王二品、從四位下路眞人大人、巨勢朝臣邑治、大伴宿禰旅人、石上朝臣豐庭、多治比眞人三宅麻呂、百濟王南典、藤原朝臣武智麻呂、並從四位上、正五位上大伴宿禰男人、太朝臣安麻呂、正五位下當麻眞人櫻井、從五位上多治比眞人縣守、藤原朝臣房前、並從四位下、正五位下曾禰連足人、佐伯宿禰百足、百濟王良虞、並正五位上、從五位上笠朝臣吉

麻呂、中臣朝臣人足、並正五位下、從五位下臺忌寸少麻呂、道君首名、並從五位上、從六位上下毛野朝臣石代、當麻眞人大名、紀朝臣淸人、從六位下土師宿禰豐麻呂、並從五位下、又授二品氷高內親王一品、○甲午、三品泉內親王、四品水主內親王、長谷部內親王、益封各一百戶、○戊戌、蝦夷及南嶋七十七人、授位有差、○己亥、宴百寮主典以上、幷新羅使金元靜等于中門、奏諸方樂、宴訖、賜祿有差、○庚子、賜大射于南闈、新羅使亦在射列、賜綿各有差、○二月丙辰、制、尙侍從四位者、賜祿准典藏焉、○丙寅、從五位下大神朝臣忍人爲氏上、從四位下當麻眞人櫻井卒、○丁丑、勅以三品吉備內親王男女、皆入皇孫之列焉、○三月壬午朔、車駕幸甕原離宮、○丙申、散位從四位上竹田王卒、○甲辰、金元靜等還蕃、勅大宰府、賜綿五千四百五十斤、船一艘、○丙午、相摸國足上郡人丈部造智積、君子尺麻呂、並表閭里、終身勿事、旌孝行也、

○少麻呂、或は宿奈麻呂に作る　○水主內親王、原本水を氷に作る今は舊本谷本及紀略に據て改む　○長谷部內親王、長谷は天武紀泊瀨に作る萬葉亦同じ　○南闈、字書に闈は宮中之門也とあり南門たり云天平十二年正月紀に天皇御二大極南門一觀二大射一とあり南の字は金本閣本及紀略に據て補ふ

（二月）尙侍云々、祿令に凡給祿者云々典藏准二從四位一尙侍准二從五位一とあるが從四位の尙侍は典藏に准することに改められしなり　○當麻眞人櫻井卒、持統紀三年に初見、文武紀慶雲二年八月伊勢守、和銅元年三月武藏守となる　○吉備內親王、草壁皇子の御女にて長屋王の妃となり長屋王の自盡し給ひし時此親王も自ら縊れて薨じ給へり

（三月）竹田王、原本竹を以に作る紀略及和銅元年三月紀に據て改む　○皇孫之列、原本列を例に作る今從本に據て改む　○足上郡、此に初見、天平七年相摸國封戶租交易帳に足上郡岡本鄕見ゆ　○丈部造、錄左京皇別に丈部造孝元天皇々子大彥命之後也とあり丈は杖に同じ景雲三年三月紀に陸奧國白河郡人丈部老、安積郡人丈部直繼足其他信夫郡柴田郡會津郡等にも同氏の人見ゆ大彥命の裔は東北に大に繁衍せしことを思ふべし　○君子尺麻呂、君子は神龜元年二月紀

に君子部立花、二年閏二月紀に君子龍麻呂見え寶字元年三月紀に勅改君子爲吉彌侯部とあり吉美侯部は豐城入彥命の後なり　○並表閭里、表は狩谷校本に並下一有表字とあるに據て補ふ

○夏四月(壬子朔)庚申(九)、櫛見山陵(垂仁)(生目入日子伊佐知天皇之陵也)充守陵三戶、伏見山陵(安康)(穴穗天皇之陵也)四戶、○庚午(十九)、諸直丁經廿年已上者、預考選例、憐其勞也、○癸酉(廿二)、上村主通改賜阿刀連、○丙子(廿五)、詔叙成選人等位、授從三位粟田朝臣眞人正三位、正五位下長田王、大神朝臣狛麻呂、田口朝臣益人、並正五位上、從五位上小治田朝臣安麻呂、縣犬養宿禰筑紫、平群朝臣安麻呂、並正五位下、從五位下三國眞人人足、佐味朝臣加作麻呂、阿倍朝臣秋麻呂、坂本朝臣阿曾麻呂、日下部宿禰老、阿倍朝臣安麻呂、並從五位上、

(四月)櫛見山陵、垂仁紀に九十九年天皇崩葬於菅原伏見陵とみえ諸陵式に菅原伏見東陵とあり、本居翁の說に伏と櫛と訓相近ければ斯く書けるなるべしと云、考證には一本節に作れるがあればそれならむと云り、今奈良縣生駒郡都迹村大字尼辻にあり　○(注)生目入日子伊佐知天皇、垂仁天皇　○伏見山陵、諸陵式に菅原伏見西陵石上穴穗宮御宇安康天皇在大和國添下郡と見え今奈良縣生駒郡伏見村大字寶來にあり　○(注)穴穗天皇、安康天皇　○直丁、神祇太政の二官を始め諸司にあり令集解職員令神祇官の條に官內に驅使すとあり官衙の雜事に使役するものなり　○改賜、原本改を政に作る淀本閣イ本に據て改む　○阿刀連、阿刀宿禰は左京並山城神別に阿刀連は山城神別に見ゆ石上同祖饒速日命の後なり　○小治田朝臣、金本に小治田以下の十九字なし脫漏なり　○日下部宿禰老、原本禰の下阿倍の二字あり衍なること明かなり故に削る

○五月辛巳朔、勅諸國朝集使曰、天下百姓、多背本貫、流宕他鄕、規避課役、其浮浪逗留、經三月以上者、卽土斷輸調庸、隨當國法、又撫導百姓、勸課農桑、心存字育、能救飢寒、實是國郡之善政也、若有身在公庭、心

(五月)流宕他鄕云々、八月紀に京人流宕畿外云々とあり養老元年五月紀、四年三月紀等參考すべし原本宕を宿に作る山崎校本に據て改む　○土斷、狩谷校本に云一

作土考證に云、當作作土、文獻通考云、天下之民不土斷而地著、不更版籍、而得其實、通雅云、土斷土著也、晉以後流寓者多、爲僑戸、後行法不便、一以土著論之、名曰土斷、とあるに據て改む
○侵蝉、漢書景帝紀に侵牟萬民とあり、注に李奇曰、牟食苗根蟲也、侵牟食民比之蝉賊也とあり、蝉牟通す
○周行、毛詩小雅鹿鳴の傳に周至、行道也とあり
○過所、釋名に過所、至關津以示也とあり、關所通行の手形なり、關市令に凡欲度關者、皆經本部本司請過所、官司撿勘然後判給とあり
○賑貸之、之の字は例に據て補ふ
○運輸調庸云々、賦役令に凡調庸物、毎年八月中旬起輸、近國十月卅日、中國十一月卅日、遠國十二月卅日以前納訖、其調糸七月卅日以前輸訖とあり
○要道、原本要を惡に作る、狩谷氏本從或本作要とあるに據て改む
○海路漕庸云々、賦役令に凡調庸物云々、其運脚均

顧私門、妨奪農業、侵蝉萬民、實是國家之大蠹也、宜其勸催產業、資產豐足者爲上等、雖加催勸、衣食短乏者爲中等、田疇荒廢、百姓飢寒、因致死亡者爲下等、十人以上、則解見任、又四民之徒、各有其業、今失職流散、此亦國郡司教導無方、甚無謂也、有如此類、必加顯戮、自今以後、遣巡察使、分行天下、觀省風俗、宜勤敦德政、庶彼周行、始今諸國百姓、往來過所、用當國印焉、丹波丹後二國飢、賑貸之、○己丑、始充京職印、○壬辰、伯耆國言、甘露降、○甲午、詔曰、凡諸國運輸調庸、各有期限、今國司等、怠緩違期、遂妨耕農、運送之民、仍致勞擾、非是國郡之善政、撫養之要道也、自今以後、如有此類、以重論之、又海路漕庸、輙委舂民、或已漂失、或多濕損、是由國司不順先制之所致也、自今以後、不悛改者、節級科罪、所損之物、即徵國司、又五兵之用、自古尚矣、服强懷柔、咸因武德、今六道諸國、營造器仗、不甚牢固、臨事何用、自今以後、每年貢樣、巡察使出日、細爲按勘焉、○乙巳、從六位下畫師忍勝姓改爲倭畫師、○攝津、紀伊、武藏、越前、志摩五國飢、賑貸之、○遠江國地震、山崩壅麁玉河、水爲之不

流、經數十日、潰流沒敷智、長下、石田、三郡民家百七十餘區、并損苗、○乙亥、太政官奏、更定義倉出粟法、分爲九等、語在別格、○壬寅、以從三位巨勢朝臣麻呂爲中納言、從四位上多治比眞人三宅麻呂爲左大弁、從四位上巨勢朝臣邑治爲右大弁、從四位上大伴宿禰旅人爲中務卿、從四位下阿倍朝臣首名爲兵部卿、從四位上阿部朝臣廣庭爲宮内卿、從四位下多治比眞人縣守爲造宮卿、從五位上大伴宿禰宿奈麻呂爲左衛士督、正五位上大神朝臣狛麻呂爲武藏守、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲但馬守、從五位下石川朝臣君子爲播磨守、從三位多治比眞人池守爲大宰帥、○丙午、參河國地震、壞正倉四十七、又百姓廬舍、往々陷沒、○庚戌、移相摸、上總、常陸、上野、武藏、下野六國富民千戸、配陸奧焉、

出調庸之家皆國司領送云々とありなほ民部式に見ゆ　○惷民、惷は愚也愚民を云　○悛改、原本悛を換に作る淀本に據て改む　○五兵、字書に弓殳矛戈戟也とあり周禮注に鄭司農云五兵者戈殳戟酋矛夷矛とあり　○六道、七道の中西海を除く、大寶元年八月紀に見ゆ　○毎年貢樣、營繕令に凡營造軍器皆須依樣、義解に謂樣者形制法式也とあり依樣とは見本の通りにするを云　○乙巳、此月辛巳朔なれば乙巳は廿五日なり鴨本乙未に作れりと云、乙未は十五日なりされど類史も乙巳とあれば輙く改めず　○倭畫師、天武紀に倭畫師音檮、天平十七年四月紀に養德畫師楯戸弁麻呂見え神護景雲三年五月紀に倭畫師種麻呂等十八人賜姓大岡忌寸とあり大岡忌寸は錄左京諸蕃に出自魏文帝之後安貴公と見ゆ金本閣本等倭を和に作る　○遠江國、國の字は類史紀略に據て補ふ　○山崩、紀略に壞崩に作る　○麁玉河、原本麁を麄に作る類史紀略に據て改む天平寶字五年七月紀に荒玉川とあり今馬込川と云源を遠江國引佐郡麁玉村に發し南流濱松の東を過ぎて海に入る　○潰流、流の字は類史紀略に據て補ふ　○石田、寶龜元年三月紀に磐田に作り民部式倭名抄亦同じ　○乙亥、干支を推すに此月乙亥なし己亥の誤なるべし己亥は十九日　○更定義倉出粟法、和銅六年二月義倉九等の戸を定め是に又此法を制む故に更定と云此格文は天平寶字二年五月廿九日格文中に見ゆ

○六月甲寅、一品長親王薨、天武天皇第四之皇子也、○庚申、開大倭國都祁山之道、○壬戌、太政官奏、懸像失度、亢旱彌旬、恐東皐不耕、南畝損稼、昔者周王遇旱、有雲漢之詩、漢帝祈雨、興改元之詔、人君之願、載感上天、請奉幣帛、祈於諸社、使民有年、誰知堯力、○癸亥、設齋於弘福法隆二寺、詔遣使奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、於是未經數日、澍雨滂沱、時人以爲、聖德感通所致焉、因賜百官人祿各有差、○丁卯、諸國人廿戶、移附京職、由殖貨也、

○秋七月庚辰朔、日有蝕之、○己丑、地震、行幸甕原離宮、賜從五位下紀朝臣淨人數人穀百石、優學士也、○壬辰、授刀舍人狛造千金、改賜大狛連、○丙午、知太政官事一品穗積親王薨、遣從四位上石上朝臣豐庭、從五位上小野朝臣馬養、監護喪事、天武天皇之第五皇子也、尾張國

（（六月））一品長親王、天武紀二年に次妃大江皇女生長皇子とある見ゆ
○都祁山之道、原本祁を祈に作る神名式並臨時祭式に據て改む都祁は山邊郡にあり大和志に長瀨越乃長瀨村名張郡界至白石二里三十三町靈龜元年六月開都祁山之道即此とあり
○懸像、日月を云像は象なり日月は高く天に懸る故に云
○東皐、文選秋興賦に耕東皐之沃壤兮、注に水田曰皐東者取其春意とあり
○南畝、毛詩豳風七月篇に出づ上に見ゆ　○雲漢之詩、毛詩大雅蕩之什に出づ周宣王旱災に遇て德を修め政を勤て雨を致したるをほめたる詩なり
○漢帝云々、漢書武帝紀天漢元年の注に應劭曰時頻年苦旱故改元爲天漢以祈甘雨とあり　○誰知堯力、論衡に堯時百姓無事有五十之民擊壤於塗觀者曰大哉堯之德也擊壤者曰吾日出作日入而息鑿井而飲耕田而食堯何力於我也とあるに據る　○弘福法隆二寺、弘福寺は川原寺と云高市郡にあり上に出づ法隆寺は推古紀に云り

（（七月））地震、地の字は淀本及類史紀略に據て補ふ
○淨人、此下恐くは等の字を脫す
○穗積親王、天武紀二年に初見、慶雲二年九月知太政官事となる公卿補任には十三日薨とす
○從四位上石上朝臣、原

本上を下に作る正月癸巳紀に據て改む
○天武天皇之第五皇子、天武紀二年に次夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘生二一男二女一其一曰二穗積皇子一
○席田君、姓氏錄に載せず他にも見えず
○席田郡、抄國郡部美濃國郡名席田無之呂太とあり今本巢郡に入れり
（八月）流宕畿外、原本宕を宿に作る金本閣本淀本に據て改む
○顯著三公、原本公を台に作る金本閣本及紀略に據て改む、三公に象れる斑文ありしなるべし
○背負七星、原本背を脊に作る金本及紀略に據て改む七星は北斗星を云其數七あり故に七星と云
○並有離卦、前脚に並に易の離卦に似たる文ありしなるべし
（九月）己卯朔、朔字は例に據て補ふ
○皇親二世云々、養老四年五月の制に皇親服制者以二孫王一准二五位一疎親准二六位一焉とあり二世は卽ち孫王三世以下は疎親なり
○熊皮及金銀、原本熊を

人外從八位上席田君邇近、及新羅人七十四家、貫于美濃國、始建席田郡焉、○八月己未、制、大宰府官人家口、皆免課役、從四位上路眞人大人爲大宰大貳、○甲戌、京人流宕畿外、則貫當國而從事、○丁丑、左京人大初位下高田首久比麻呂獻靈龜、長七寸、闊六寸、左眼白、右眼赤、頸著三公、背負七星、前脚並有離卦、後脚並有一爻、腹下赤白兩點、相次八字、○九月己卯朔、詔、皇親二世准五位、三世以下准六位、禁文武百寮六位以下用虎豹熊皮、及金銀、飾鞍具并横刀帶端、但朝會日用者許之、婦女依父夫蔭服用、亦聽之、凡横刀鋏者、以絲纏造、勿用素木、令脆焉、○庚辰、天皇禪位于氷高内親王、詔曰、乾道統天、文明、於是馭曆、大寶曰位、震極所以居尊、昔者揖讓之君、旁求歷試、干戈之主、繼體承基、貽厥後昆、克隆鼎祚、朕君臨天下、撫育黎元、蒙上天之保休、賴祖宗之遺慶、海内晏靜、區夏安寧、然而兢々之志、夙夜不怠、翼々之情、日愼一日、憂勞庶政、九載于茲、今精華漸衰、耄期斯倦、深求閑逸、高踏風雲、釋累遺塵、將同脫屣、因以此神器、欲讓皇太子、而年齒幼稚、未離深宮、庶

縣に作る金本閣本從本に據て改む和銅五年五月紀に禁六位已下以白銅及銀飾革帶と見えたるを改められしなり、及は紀略に據て補ふ
○樣刀鋏、原本鋏を鋏に作る狩谷氏鋏字恐誤或是鋏字莊子說劍篇云韓魏爲鋏と云るに據て改む
○纒造、原本纒を纏に作る[illegible]に據なり
○乾道統天、易乾卦の象に大哉乾元、萬物資始、乃統天云々とあり
○馭圖、御暦に同じ、隋書牛弘傳に撫符御暦有國有家者云々とあり天子日官を置きて暦時を正すを云
○大寶曰位、易の繫辭傳に聖人之大寶曰位とあり
○震極、震は宸に作るべし、宸極は晋書律暦志に聖人擬宸極以運璿璣とありて北極をいひ又天子の尊位に譬へしなり
○揖讓之君、堯舜を云
○干戈之主、殷の湯王周の武王を云
○後昆、子孫の意、尚書仲虺之誥に出づ
○夙夜不怠、毛詩大雅烝

務多端、一日萬機、一品氷高内親王、早叶祥符、夙彰德音、天縱寛仁、沈靜婉嫕、華夏載佇、謳訟知歸、今傳皇帝位於内親王、公卿百寮、宜悉祇奉、以稱朕意焉、

民篇に夙夜匪㆑解とあり

〇翼々之情、同大雅烝民篇に小心翼々、箋に翼々然恭敬とあり

〇日愼一日、淮南子人間訓に出づ

〇耄期斯倦、尙書大禹謨に耄期倦㆓于勤㆒、傳に八十九十曰㆑耄百年曰㆓期頤㆒言已年老厭㆓倦萬幾㆒云々とあり

〇脫屣、漢書郊祀志注に屣小履、脫屣者言㆓其便易無㆑所㆑顧也とあり孟子盡心篇に舜視㆑棄㆓天下㆒猶㆑棄㆓敝蹤㆒也とも見ゆ

〇一日萬機、尙書皐陶謨に出づ

〇祥符、原本符を府に作る金本及紀略に據て改む

〇天縱、文武紀卽位前紀(一頁)に出づ

〇婉孌、孌は孌に同じ毛詩曹風候人篇に婉兮孌兮、傳に婉少貌孌好貌とあり

〇載佇、山崎校本佇を仰に作るに從ふべし

〇謳訟知歸、孟子萬章に堯崩舜避㆓堯之子於南河之南㆒訟獄者不㆑之㆓堯之子㆒而之㆑舜謳歌者不㆑謳㆓歌堯之子㆒而謳㆓歌舜㆒(節略)とあるに據る　〇皇帝位、紀略に帝の字なし　〇稱朕意焉、東大寺要錄焉を矣に作る　〇卷第六、金本に卷の字なし

續日本紀卷第六

【靈龜元年】日並知皇子尊之皇女、一代要記に文武天皇同母の御姉とあり
○言必典禮、字書に典は法也禮は體也得其事體也とあり言語必ず法ありて事體を得るを云
【九月】詔曰、文武天皇並元明天皇卽位の詔は古言を以てせられしが此に至て漢文を以てせられ其内容も甚簡明にして祥瑞に因て改元の事を述べられしに過ぎず從來に比して大いに異なる所あるを知るべし
○天表嘉瑞、紀略天を大に作る
○貺施、字書に貺は賜也與也施は惠也與也とありてタマモノの意
○天下諸社、紀略天を已

續日本紀卷第七

起靈龜元年九月盡養老元年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

日本根子高瑞淨足姬天皇　元正天皇　第卌四

日本根子高瑞淨足姬天皇、天渟中原瀛眞人天皇之孫、日並知皇子尊之皇女也、天皇神識沈深、言必典禮、○九月庚辰、受禪、卽位于大極殿、詔曰、朕欽承禪命、不敢推讓、履祚登極、欲保社稷、粤得左京職所貢瑞龜、臨位之初、天表嘉瑞、天地貺施、不可不酬、其改和銅八年、爲靈龜元年、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸從赦除、但謀殺々訖、私鑄錢、强竊二盜、及常赦所不原者、並不在赦限、親王已下及百官人、幷京畿諸寺僧尼、天下諸社祝部等、賜物各有差、高年鰥寡孤獨疾病之徒、不能自存者、量加賑恤、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、免天下今年之租、又五位已上子孫、年廿已上者、宜授蔭位、

に作る
○孤獨疾病、原本獨疾に作る淀本に據て補ふ紀略には孤獨疾疹に作る
○蔭位、五位以上の人の子又は孫たるもの其父祖の蔭に依て位を賜ふを蔭位と云
(十月)貨食、字書に貨は財也、食は殖也所以自生殖也とあり
○刑錯、漢書武帝紀に詔曰周之成康刑錯不用とあるより出づ刑名あれども之に觸るゝ人なく措て用ひざるを云
○產術、原本產を彥に作る淀本及三代格に據て改む生產の道を云
○趣水澤之種、水田に稻を作ることのみに專ら心を走らせ力を盡すを云
○陸田之利、陸田は畠なり麥粟等を作ることを云養老三年九月紀に詔給天下民戶陸田一町以上二十町以下輸地子段粟三升と見ゆ
○澇旱、字書に澇は亦作潦とあり潦は路上流水也一曰積水と注す旱は不雨也とあり
○百姓懈懶、懶は金本閣本等に據て補ふ三代格に

獲瑞人大初位下高田首久比麻呂、賜從六位上、幷絁廿疋、綿四十屯、布八十端、稻二千束、○冬十月乙卯、詔曰、國家隆泰、要在富民、富民之本、務從貨食、故男勤耕耘、女脩紝織、家有衣食之饒、人生廉恥之心、刑錯之化爰興、太平之風可致、凡厥吏民豈不勗歟、今諸國百姓未盡產術、唯趣水澤之種、不知陸田之利、或遭澇旱、更無餘穀、秋稼若罷、多致饑饉、此乃非唯百姓懈懶、固由國司不存教導、宜令佰姓兼種麥禾、男夫一人二段、凡粟之爲物、支久不敗、於諸穀中、最是精好、宜以此狀遍告天下、盡力耕種、莫失時候、自餘雜穀、任力課之、若有百姓輸粟轉稻者聽之、○丁丑、陸奧蝦夷第三等邑良志別君宇蘇彌奈等言、親族死亡子孫數人、常恐被狄徒抄略乎、請於香河村造建郡家、爲編戶民、永保安堵、又蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下、相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閇村便建郡家、同於百姓、共率親族、永不闕貢、並許之、○十二月己酉朔、日有蝕之、○己未、常陸國久慈郡人占部御蔭女一產三男、給粮幷乳母一人、

は百姓僻願志業とあり　○敎導、金本閣本等導を道に作る　○佰姓、佰は卽ち百の字なり紀略百に作る　○赍禾、赍と粟とを云　○第三等、蝦夷の爵は一二を以て等級を定む寶龜九年六月紀に第二等伊治公呰麻呂、類聚國史に延暦十一年十一月陸奥夷俘爾散南公阿波蘇宇漢米公隱賀並授爵第一等と見え式部式にも凡諸夷入朝給祿者第一等絁六疋と見えたり　○邑良志別君、後紀弘仁二年七月紀に出羽國夷邑良志閇村降俘吉彌侯部都留岐申云々と見ゆ其地詳ならねど邑良志別君とあるは地名を以て姓氏とせしなるべし宇蘇彌奈は名なり　○香河村、原本河を阿に作る金本閣本淀本に據て改む香河は今陸前國登米郡石森村大字加賀野卽是なるべし此に郡家を建つとあれば當時香河郡と稱せしを後に登米郡と改めしならむ　○須賀君、須賀は地名に據れるなり復軒雜纂に閇村の地は昆布を採るとあれば海邊なりしなり奥州の海にて昆布あるは金華山以北なりとす牡鹿郡中なるべし奥州方言に洲沙の地をスカと云蝦夷の名の須賀君も海邊に因あるかと云されど牡鹿郡には須賀と云る地名聞えず陸中國下閉伊郡には小本村の隣村に須賀村あり或は此地に據るか考ふべし　○昆布、抄菜蔬部に昆布本草云昆布(比呂米一云衣比須女)味鹹寒無毒生東海とあり　○國府、陸奥國府は倭名抄に宮城郡と見ゆれど此時には石城石背分國以前(分國は養老六年五月)なりしかば當時の國府は信夫郡なるべしと云　○閇村、後紀弘仁二年七月紀に幣伊村とあるに同じきか陸奥國閉伊郡是なりとの說あれど閉伊郡は延喜式に見えざれば閉伊郡なりとも斷定すべからず紀略には閇を閑に作る閑村ならむには空閑の意にて論議を要せず尚よく考ふべし　(十二月)占部、天平十八年三月紀常陸國鹿嶋郡中臣部二十烟占部五烟賜中臣鹿嶋連之姓と見え萬葉廿常陸國茨城郡占部小龍及那賀郡占部廣方見ゆ

【靈龜二年】授從三位長屋王云々、長以下十字原本なし諸本に據て補ふ

(二月)大隅媛嶋、安閑紀二年九月勅官放牛於難波大隅與媛嶋松原と見ゆ、大隅は今の大阪市東淀川區南北西大道町媛嶋は西淀川區姫島町是なり攝津志に媛嶋は西成郡稗嶋村なりと云るを本居翁は難波古圖を按するに姫嶋九條嶋西に在り今勘助嶋と稱ふ稗嶋とあるは誤なるべしと云

○二年春正月戊寅朔、廢朝、雨也、宴五位已上於朝堂、○辛巳、地震、○壬午、授從三位長屋王正三位、正五位上長田王、佐伯宿禰百足並從四位下、正六位上猪名眞人法麻呂、多治比眞人廣足、大伴宿禰祖父麻呂、小野朝臣牛養、土師宿禰大麻呂、美努連岡麻呂並從五位下、○二月己酉、令攝津國罷大隅媛嶋二牧、聽佰姓佃食之、○丁巳、出雲國國造外正七位上出雲臣果安、齋竟奏神賀事、神祇大副中臣朝臣人足以其詞奏聞、是日、百官齋焉、自果安至祝部一百一十餘人、進位賜祿各有差、
○三月癸卯、割河内國和泉日根兩郡、令供珍努宮、

○奏神賀事、太政官式に凡出雲國造國司依例銓擬言上郎於太政官補任如任諸國郡司云々還國一年齋畢國司率國造入朝奏神壽詞とあり神賀事即ち神壽詞なり其詞は祝詞式に出づ　○一百一十餘人、原本十を千に作る諸本に據て改む　（三月）珍努宮、允恭紀八年宮室を河內茅渟に造り衣通郎姫をして居らしむ九年二月幸茅渟宮とあり天平十六年十月紀には太上天皇行幸珍努離宮と見ゆ和泉志に茅渟宮舊趾在日根郡上鄉中村とあり今泉南郡上之鄉村なり原本宮を官に作る紀略に據て改む

（四月）贈少紫、少は小に通ず小紫は大化五年所定冠位十九階の第六等　○贈大紫星川臣麻呂、原本紫を雲に作る天武紀に九年正月小錦中星川臣麿卒以壬申年功贈大紫位とあるに據て改む　○贈大錦下、大錦下其他の冠位は紀下附錄に見ゆ　○宇佐伎、天武紀兎の一字に作り寶字元年紀亦同じ　○贈大錦下文直成覺、金本閣本等に大の字缺く蓋後人の妄に塡るもの寶字元年紀贈小錦下に作るされば大は小の誤なるべし　○禰麻呂、原本禰を彌に作る宮本に據て改む　○黃文連、原本黃を昔に作る淀本に據て改む　○大鳥、此上に恐くは河內國の三字を脫す　○置和泉監、類史に和泉國を置くとありされど五月充和泉監印、六月置和泉監史生三人とあり天

○夏四月丙午朔癸丑八、詔、壬申年功臣贈少紫村國連小依息從六位下志我麻呂、贈大紫星川臣麻呂息從七位上黑麻呂、贈大錦下坂上直熊毛息正六位下宗大、贈小錦上置始連宇佐伎息正八位下虫麻呂、贈大錦下文直成覺息從七位上古麻呂、贈直大壹文忌寸知德息從七位上鹽麻呂、贈直大壹丸部臣君手息從六位上大石、贈正四位上文忌寸禰麻呂息正七位下馬養、贈正四位下黃文連大伴息從七位上粳麻呂、贈從五位上尾張宿禰大隅息正八位下稻置等一十人、賜田各有差。○戊午十三、雨雹。○甲子十九、割大鳥和泉日根三郡、始置和泉監焉。○乙丑廿、詔曰、凡貢調脚夫入京之日、所司親臨、察其備儲、若有國司勤加勸課、能合上制、則與字育和惠肅清所部之㝡、不存教喩、事有闕乏、則居撫養乖方、境内荒蕪之科、依其功過、必從黜陟、又比年計帳、具言如功、推勘物數、足以

平十三年八月紀に和泉監并河内國とあれば此時未だ國と稱せざること明なり
○勤加、此二字は諸本に據て補ふ
○字育、字書に字は愛也とあり
○肅清、考課令に強濟諸事肅清所部爲國司之最とあり
○撫養乖方、同令に凡國郡司撫育有方戸口增益者各准見戸爲十分論加一分云々若撫養乖方戸口減損者各准增戸法亦減一分降一等云々とあり
○計帳、戸令に凡造計帳毎年六月卅日以前京國官司責所部手實具注家口年紀若全戸不在鄕即依舊籍轉寫并顯不在所由收訖依式造帳連署八月卅日以前申送太政官備は賦役令民部式に見えたり　○以制所委、考證云制疑副字之譌　○從五位上坂本朝臣、原本上を下に作る元年四月紀に據て改む　○大足、養老四年正月紀に人足、十月紀に大足とあれば何れとも定め難し
〈五月〉己丑、原本乙丑に作る五月は丙子朔にて乙丑なし紀略に據て改む
○法藏、法は佛の教法なり藏は含藏の義なり如來藏の中に過恒河沙の法を貯ふ故に法藏と云
○草堂、釋氏要覽に以草苫蓋於中繩經因此名之也とあり
○始闢、原本始關に作る類史藤原家傳に據て改む

掩身、然入京人夫、衣服破弊、菜色猶多、空著公帳、徒延聲譽、務爲欺謾、以邀其課、國郡司如此、朕將何任、自今以去、宜恤民隱、以制所委、仍錄部内豐儉農桑增益言上、○壬申、以從四位下大野王爲彈正尹、從五位上坂本朝臣阿曾麻呂爲參河守、從五位下高向朝臣大足爲下總守、從五位下榎井朝臣廣國爲丹波守、從五位下山上臣憶良爲伯耆守、正五位下船連秦勝爲出雲守、從五位下巨勢朝臣安麻呂爲備後守、從五位下當麻眞人大名爲伊豫守、

○五月己丑、制、諸國軍團大少毅、不得連任、郡領三等以上親也、其先已任訖、轉補他國、○庚寅、詔曰、崇飾法藏、肅敬爲本、營修佛廟、清淨爲先、今聞、諸國寺家、多不如法、或草堂始闢、爭求額題、幢幡僅施、卽訴田畝、或房舍不脩、馬牛群聚、門庭荒廢、荊棘彌生、遂使無上尊像永蒙塵穢、甚深法藏不免風雨、多歷年代、絕無構成、於事斟量、極乖崇敬、今故併兼

○門庭、類史庭を屋に作る
○永蒙塵穢、永蒙の二字は金本閣本及類史に據て補ふ
○併兼數寺、佛寺併合の事養老五年五月紀及天平七年六月紀等に見ゆ
○檀越、祖庭事苑五に檀那此云施者越謂度越彼岸とあり施主と云に同じ
○部內、原本部を郡に作る類史及藤原家傳に據て改む
○附使、原本使を便に作る金本閣本及類史に據て改む
○莫住、原本住を任に作る金本閣本及類史に據て改む
○諠擾、原本諠を誼に作る淀本及類史に據て改む
○不得、三代格得を聽に作る
○部內、原本部を郡に作る類史に據て改む
○壃區、淀本壃を疆に作る疆壃同じ
○匡正、原本匡を目に作る曾本淀本及類史に據て改む
○始置高麗郡、抄國郡部に武藏國郡名高麗古末と

數寺、合成一區、庶幾同力共造、更興頽法、諸國司等、宜明告國師衆僧及檀越等、條錄部內寺家、可合并財物、附使奏聞、又聞、諸國寺家、堂塔雖成、僧尼莫住、禮佛無聞、檀越子孫、惣攝田畝、專養妻子、不供衆僧、因作諍訟、諠擾國郡、自今以後、嚴加禁斷、其所有財物田園、並須國師衆僧及國司檀越等、相對撿挍、分明案記、充用之日、共判出付、不得依舊檀越等專制、近江國守從四位上藤原朝臣武智麻呂言、部內諸寺、多割壃區、無不造脩、虛上名籍、觀其如此、更無異量、所有田園、自欲專利、若不匡正、恐致滅法、臣等商量、人能弘道、先哲格言、闡揚佛法、聖朝上願、方今人情稍薄、釋教陵遲、非獨近江、餘國亦爾、望遍下諸國、革弊還淳、更張弛綱、仰稱聖願、許之、○辛卯、以駿河、甲斐、相摸、上總、下總、常陸、下野七國高麗人千七百九十九人、遷于武藏國、始置高麗郡焉、大宰府言、豐後、伊豫、二國之界、從來置戍、不許往還、但高下尊卑、不須無別、宜五位以上差使往還、不在禁限、又薩摩大隅二國貢隼人、已經八歲、道路遙隔、去來不便、或父母老疾、或妻子單貧、請限六年相

替、並許之。始從建元興寺于左京六條四坊。○丙申、勅、大宰府佰姓、家有藏白鑞、先加禁斷、然不遵奉、隱藏賣買、是以鑄錢惡黨、多肆奸詐、連及之徒、陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白鑞、搜求納於官司。○丁酉、制、大學典藥生等、業未成立、妄求薦擧、如是之徒、自今以去、不得補任國博士及醫師。○癸卯、充僧綱及和泉監印。弓五千三百七十四張充大宰府。○六月辛亥、正七位上馬史伊麻呂等、獻新羅國紫騮馬二疋、高五尺五寸。○甲子、美濃守從四位下笠朝臣麻呂爲兼尾張守。○乙丑、制、王臣五位已上、以散位六位已下、欲充資家者、人別六人已下聽之。○丁卯、始置和泉監史生三人。

（六月）馬史、天平十三年閏三月紀に馬史比奈麻呂あり萬葉廿に散位寮散位馬史國人見ゆ皆同族なるべし　○紫騮馬、抄牛馬部に說文云騮、漢語抄云騮馬白鹿毛也、赤騮馬赤鹿毛也、黄騮（黄馬同上）黄白馬也、新撰字鏡に騮赤久利介とあり　○五尺五寸、五寸の二字は紀略に據て補ふ金本閣本等五丈五尺に作るは非なり　○資家、考證に資人家令なりと云

○秋七月庚子、從四位下阿倍朝臣爾閇卒。○八月壬子、大宰府言、帥以下事力、依和銅二年六月十七日符、各減半給、綿、自此以來、駈使丁乏、凡諸屬官、並爲辛苦、請停綿給丁、欲得存濟。許之。○甲寅、二品志貴親王

あり後入間郡に併せらる始の字は紀略に據て補ふ
○置戍、原本買成に作る淀イ本に據て改む
○隼人、原本隼を進に作る曾本淀本に據て改む
○限六年相替、職員令義解に隼人者分番上下以二一年一爲レ限とあり
○元興寺、崇峻紀推古紀に見ゆ元高市郡飛鳥に在りて飛鳥寺又法興寺と呼びしを平城京に從せしなり大和志に元興寺町に在りと云々と見え今奈良市三條通猿澤池の南四町四方は其舊趾にして興福寺と相對せり
○丙申、原本申を午に作る諸本に據て改む
○遵奉、原本遵を道に作る諸本に據て改む

（七月）阿倍朝臣爾閇、大寶元年十一月紀並に和銅元年三月引田朝臣爾閇とあるも同人なり
（八月）事力、和銅元年三月紀（六六頁）に注す
○十七日符、和銅二年六

薨、遣二從四位下六人部王、正五位下縣犬養宿禰筑紫、監二護喪事一、親王、天智天皇第七之皇子也、寶龜元年、追尊稱二御春日宮天皇一、○癸亥、備中國淺口郡犬養部𩿤手、昔配二飛鳥寺燒鹽戶一、誤入二賤例一、至レ是遂訴二免之一、是日、以二從四位下多治比眞人縣守一爲二遣唐押使一、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲二大使一、正六位下藤原朝臣馬養爲二副使一、大判官一人、少判官二人、大錄事二人、少錄事二人、○己巳、授二正六位下藤原朝臣馬養從五位下一、

○九月丙子、以二從五位下大伴宿禰山守一、代爲二遣唐大使一、○癸巳、正七位上山背甲作客小友等廿一人、訴レ免二雜戶一、除二山背甲作四字一、改賜二客姓一、○乙未、從三位中納言巨勢朝臣萬呂言、建二出羽國一、已經二數年一、吏民少稀、狄徒未レ馴、其地膏腴、田野廣寬、請令下隨近國民一遷二於出羽國一、教二喩狂狄一、兼保中地利上、許レ之、因以二陸奧國置賜、最上二郡、及信濃、上野、越前、越後、四國百

月紀に癸丑勅自二大宰率一以下至二于品官一事力半減さあり癸丑は廿八日なればこと異れり原本符を府に作る諸本に據て改む

○二品志貴親王薨、志貴親王は日本紀及下文に施基或は芝基に作る天智天皇の皇子にして光仁天皇の御父に坐す、考證に大日本史注云光仁紀寶龜二年始設二田原天皇八月九日忌齋一是月甲辰朔九日壬子十一日甲寅蓋九日薨而十一日奏之也さ云り

○遺、山崎校本に據て補ふ　○追尊稱御春日宮天皇、寶龜元年十一月なり　○賤例、例は列の誤なるべし賤列は賤民の列なり　○遂訴、原本訴を許に作る狩谷校本に據て改む　○多治比眞人縣守、大日本史注に新唐書日本傳曰開元初粟田復朝請下從二諸儒一授上經云々據レ史粟田眞人大寶二年如レ唐慶雲元年歸不二再往一唐書所レ載粟田者蓋縣守也養老元年當二唐開元五年一與レ所レ謂開元初一合さ云り　○阿倍朝臣安麻呂、考證に扶桑略記帝王編年記並作二阿倍仲麻呂一唐書亦以二仲麻呂一爲二是時副使一蓋安麻呂仲麻呂同姓名字亦相涉致二此混淆一也按仲麻呂天平十一年十一月紀及寶龜十年四月紀並書二學生一又據二僧顯昭古今集抄引二國史一仲麻呂年十六中レ選爲二遣唐留學一則非二副使一明矣さ云　○大錄事、大の字は金本閣本等に據て補ふ

（（九月））山背甲作、鐙作韓鍛冶等の雜戶を免されて公民とされしこと養老六年三月及天平勝寶四年二月紀等に見ゆ山背甲作は蓋山城國綴喜郡甲作鄕に住居して其業に從事せしなるべし

○客姓、姓氏錄に載せず天平十八年九月紀に客君狛麻呂見え續後紀に嘉祥二年正月山城國愛宕郡人

客公成人見ゆ同姓なるべし

○陸奧國云々、國字は山崎校本に據て補ふ狩谷氏曰和銅五年十月丁酉朔紀云割陸奧國最上置賜二郡隷出羽國焉此又云恐有誤

○信濃云々、又云見養老元年二月紀重複有誤

(十月)內外諸司、諸本外の下に記の字あり恐くは衍

○薄紗朝服、紗は抄布帛部に四聲字苑云紗(俗云射)似絹太輕薄也とあり朝服に之を用ふるを禁ぜられしなり ○羅幞頭、羅は抄布帛部に唐韻云羅(此間云良一名蟬翼)綺羅亦網羅也とあり孝德紀にウスモノ天武紀持統紀にウスハタとあり同裝束部に辨色立成云幞頭(賀宇布利幞音僕今按楊氏漢語抄說同、唐令等亦用之とあり幞頭と稱するは字書に幞は帊也帕也廣韻幞頭周武帝所製裁幅巾出四脚以幞頭乃名焉とあり六位以下羅幞頭を禁ずることは彈正式に凡除禮服幷參議已上半臂五位已上幞頭之外不得著羅とあり、原本幞を幞に作る此字倭名抄其他に見えず山崎校本に據て改む

姓各百戶、隷出羽國焉、以從四位下太朝臣安麻呂爲氏長、○冬十月壬戌、以從四位下長田王爲近江守、重禁內外諸司薄紗朝服、六位以下羅幞頭、其武官人者、朝服之袋、儲而勿著、及幞頭後脚莫過三寸、○十一月乙亥、以正五位下夜氣王爲備前守、○辛卯、大嘗、親王已下及百官人等、賜祿有差、由機遠江、須機但馬國郡司二人進位一階、○閏十一月癸卯朔、日有蝕之、

【養老元年】酒部王、系詳ならず、

○坂合部王、紹運錄境部王とあり天武天皇々子長親王の子

○智努王、同じく長親王の子天平勝寳四年五月文室眞人の姓を賜り後名を淨三と改む

○御原王、紹運錄に御原王(正三中務卿)とあり天武天皇々子舍人親王の息

養老元年(丁巳)春正月乙巳、授從三位阿倍朝臣宿奈麻呂正三位、從四位上安八萬王正四位下、無位酒部王、坂合部王、智努王、御原王、並從四位下、從五位下高安王、門部王、葛木王、並從五位上、從四位下石川朝臣難波麻呂從四位上、正五位上百濟王良虞從四位下、正五位下中臣朝臣人足正五位上、從五位上大伴宿禰宿奈麻呂、穗積朝臣老、多治比眞人廣

成、小野朝臣馬養、紀朝臣男人、並正五位下、從五位下賀茂朝臣堅麻呂從五位上、正六位上佐伯宿禰虫麻呂、大藏忌寸國足、余眞人、從六位上朝來直賀須夜、並從五位下、○戊申、授无位伊部王從五位下、又授從四位上縣犬養橘宿禰三千代從三位、○己未、中納言從三位巨勢朝臣麻呂薨、小治田朝(推古)小德大海之孫、飛鳥朝(天武)京職直大參志丹之子也、

○伊部王、系詳ならず　○縣犬養橘宿禰三千代、和銅元年十一月廿五日橘宿禰の姓を賜はりしこと天平八年十一月紀葛城王等上表に見ゆ　○巨勢朝臣麻呂、慶雲二年四月に民部卿、和銅元年三月に右大弁、靈龜元年五月に中納言となる又公卿補任に見ゆ　○大海、書紀に見えず　○志丹、孝德紀二年三月巨勢臣紫檀に作り天武紀十四年三月辛檀努に作る

○二月壬申朔、遣唐使祠神祇於蓋山之南、○辛巳、賜大宰帥從三位多治比眞人池守、綾一十疋、絹廿疋、絁卅疋、綿三百屯、布一百端、褒善政也、○壬午、天皇幸難波宮、○丙戌、自難波至和泉宮、○己丑、和泉監正七位上堅部使主石前、進位一階、工匠役夫、賜物有差、○庚寅、車駕還至竹原井頓宮、○辛卯、河內攝津二國、幷造行宮司、及專當郡司、大少毅等、賜祿各有差、即日還宮、○甲午、遣唐使等拜朝、○丙申、制曰、除造宮省之外、令外諸司、判官例無大少、官品宜准令員判官一人之例、又依

○高安王、長親王の子川内王の息
○門部王、同上
○葛木王、天武天皇々子高市皇子の子長屋王の息
○大伴宿禰宿奈麻呂、宿奈の二字は金本閣本等に據て補ふ
○大藏忌寸、原本寸の下に伎の字あり衍なれば削る
○余眞人、原本眞一字衍れり故に削る

(二月)神祇、臨時祭式に遣蕃國使時祭云々右擬發使者惣祭天神地祇於郊野とあり
○蓋山、大和志に春日山在南都東一名蓋山とあり舊址は同書に天神祠在南都天滿町東養老元年二月遣唐使祀神祇於蓋山之南
○和泉宮、和泉志に趾在和泉郡府中村とあり今泉北郡國府村大字府中なるべし
○堅部使主、姓氏錄に載せず孝德紀に狛堅部子麻呂稱德紀に堅部使主人主

あり父卑部氏纂異記に見ゆ同氏なるべし細井貞雄は卑部は加多曾部と訓むべし姓氏錄に卑祖氏あり百濟人卑祖爲智之後也とあり卑部は蓋此の部曲なりと云り
○竹原井、寶龜二年二月紀に車駕取龍田道還到竹原井行宮と見ゆ河內志に在大縣郡高井田村とあり今中河內郡堅下村大字高井田あり此地なるべし
○專當郡司、郡の字は紀略に據て補ふ
○判官一人、考證に一人の二字疑衍と云
○依令云々、祿令義解に謂若高官之日少而卑官之日滿者乃從高給也とあり
〔三月〕罷朝、儀制令に在大臣以上者散一位喪皇帝不視事三日とあり
○并贈從一位、并の字は紀略に據て補ふ
○誄、誄のことは大寶元年七月紀に云り　○物部目、雄略紀に物部連目爲大連と見ゆ　○衞部、考證に未考とあり衞は禁衞の衞ならむ、部は金本隣本等此字なく空白とすされば後人の妄に補ひたるにて疑はし　○大華上、大化五年紀に見ゆ　○宇麻乃、[illegible]紀に馬古連公とあり乃は古又は子の誤なるべし水本宇麻子に作り公卿補任宇麻呂に作る　○節刀、大寶元年五月紀(二一一頁)に注す　○才伎別勅、祿令に以別勅才伎長上諸司者云々とあり才伎長上の者を云
〔四月〕從官、隨從の官人なり齋宮式云凡齋內親

令、一人帶數官者、祿從多處給、雖高官无上日、若滿卑官上日者、祿從多處、○丁酉、以信濃、上野、越前、越後四國百姓各一百戶、配出羽柵戶焉、○三月癸卯、左大臣正二位石上朝臣麻呂薨、帝深悼惜焉、爲之罷朝、詔遣式部卿正三位長屋王、左大辨從四位上多治比眞人三宅麻呂、就第弔賻之、并贈從一位、右少辨從五位上上毛野朝臣廣人爲太政官之誄、式部少輔正五位下穗積朝臣老爲五位已上之誄、兵部大丞正六位上當麻眞人東人爲六位已下之誄、百姓追慕、無不痛惜焉、大臣、泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後、難波朝衞部大華上宇麻乃之子也、○己酉、遣唐押使從四位下多治比眞人縣守賜節刀、○乙丑、制、令外諸司史生等、一季賜祿、降當司主典祿一等、是當少初位官祿、自非才伎別勅、一同此例也、

○夏四月乙亥、遣久勢女王侍于伊勢大神宮、從官賜祿各有差、是日發

王臨行預定監送使參議一人或以中納言充之辨一人史一人六位以下官人一人とあり其他に齋宮寮の官人あり
○發入云々、齋王と定められし皇女が野宮の潔齋期を終へて京を出發し伊勢神宮に參入し給ふを云
○丙戌、十七日なり癸未の次に入るべし
○調庸斤兩及云々、賦役令に見えたるを更に改定められしなるべし
○髡鬢、字書に鬢は鬚の俗字也 髡は剔髮也とあり
○道服、僧服を云
○桑門、沙門に同じ釋氏要覽に沙門秦譯云勤行謂勤修善法行趣涅槃也、或云沙門那或云桑門とあり
○姦宄、考證に宄當作究と云
○三綱、上座、寺主、都維那なり
○午前云々、正午以前托鉢することを許し食物以外の衣服等は乞ふを許さずとなり
○行基、天平勝寶元年二月紀及元亨釋書に傳あり
○零疊街衢、字書に零は

入、百官送至京城外而還、以從五位下猪名眞人法麻呂爲齋宮頭。○十七丙戌、祈雨于畿內。○十四癸未、太政官奏、定調庸斤兩及長短之法、語在別式。○廿三壬辰、詔曰、置職任能、所以教導愚民、設法立制、由其禁斷姧非。頃者百姓乖違法律、恣任其情、剪髮髡鬢、輙著道服、貌似桑門、情挾姧盜、詐僞所以生、姦宄自斯起、一也。凡僧尼寂居寺家、受教傳道、准令云、其有乞食者、三綱連署、午前捧鉢告乞、不得因此更乞餘物。方今小僧行基幷弟子等、零疊街衢、妄說罪福、合搆朋黨、焚剝指臂、歷門假說、强乞餘物、詐稱聖道、妖惑百姓、道俗擾亂、四民棄業、進違釋教、退犯法令、二也。僧尼依佛道、持神呪以救病徒、施湯藥而療痼病、於令聽之。方今僧尼輙向病人之家、詐禱幻恠之情、戾執巫術、逆占吉凶、恐脅耄穉、稍致有求、道俗無別、終生姧亂、三也。如有重病應救、請淨行者、經告僧綱、三綱連署、期日令赴、不得因茲逗留延日。實由主司不加嚴斷、致有此弊。自今以後、不得更然、布告村里、勤加禁止。○廿五甲午、天皇御西朝、大隅薩摩二國隼人等奏風俗歌儛、授位賜祿各有差。○廿六乙未、以從五位上上毛野朝臣廣人爲大

倭守、從四位下賀茂朝臣吉備麻呂爲河内守、

○五月辛丑、制、諸國織綾、以六丁成疋、○丁未、令上總信濃二國始貢絁調、○丙辰、詔曰、率土百姓、浮浪四方、規避課役、遂仕王臣、或望資人、或求得度、王臣不經本屬、私自駈使、囑請國郡、遂成其志、因茲流宕天下、不歸鄕里、若有斯輩、輙私容止者、揆狀科罪、並如律令、又依令、僧尼取年十六已下不輸庸調者、聽爲童子、而非經國郡、不得輙取、又少丁已上、不須聽之、○辛酉、以大計帳、四季帳、六年見丁帳、靑苗簿、輸租帳等式、頒下於七道諸國、○乙丑、以從四位下大伴宿禰男人爲長門守、○六月己巳朔、右京職言、素性仁斯一產三女、賜衣粮幷乳母一人、自四月不雨、至于是月、

藩也疊は重也とあり道路に多く重なり出合ひて列次なく前後混亂するを云　○合構朋黨、黨類を招寄せて謀を合するを云原本合を令に作る諸本及紀略に據て改む　○焚剝指臂、僧尼令に凡僧尼不得焚身捨身云々とあり臂を傷け命を滅す事を禁するなり指を焚くは指を燈として身を燒くをいひ臂を剝ぐは臂の皮を剝ぎて經を寫すを云　○歷門假說、同令に凡僧尼等令俗人付其經像歷門教化者百日苦使とあり財物を得むと欲し殊更に俗人に經及佛像を付與し門毎に說廻るを云假說は令に災祥を假說し、語國家に及ぶとあり流言假說して衆を迷はすを云　○詐稱聖道、聖道とは同令義解に謂四果聖人之道也、釋に一、預流果二、一流果三、不還果四、羅漢果也、また集解に聖道謂佛聖之道也とあり聖道に非ることを說きて詐て聖道と稱するを云　○四民、士農工商なり　○持神咒、令集解に持咒謂經之咒也、道術符禁、謂道士法也とあり　○以救病徒、以の字諸本に據て補ふ　○病人之家、原本之を令に作る狩谷校本に令恐之字と云に據て改む　○巫術、巫者の方術なり　○西朝、西の朝集堂を云　○大倭守、原本大を太に作る金本曾本に據て改む　○從四位下、二年正月紀に據るに正五位下の誤

(五月)辛丑、原本丑の下日の字あり類史紀略に據て削る　○織綾以六丁成疋、主計式上に凡諸國輸調二色綾十丁成疋云々並上絲國七丁成疋中絲國六丁成疋麁絲國五丁成疋とありて細別す　○流宕、原本宕を宿に作る諸本に據て改む　○容止、赦し止むるを云　○聽爲童子、僧尼令に凡僧尼聽近親鄕里取信心童子供侍至年十七各還本色とあるを云　○少丁、戶令に十六以下爲少とあり　○大計帳、民部式に凡京職諸國大帳者每至班田之年五歲以下男女顯注年紀とあり其式主計式

に見ゆ大帳卽ち計帳なり　○四季帳、民部式に凡式部治部等入色之徒應徵免課役季帳者四孟月十六日各申官官符幷帳下省省更勘辨每國造符幷後孟月申官行下さあり四季帳さは課役を免ぜらるゝものゝ名を書したる帳なり　○六年見丁帳、戸令に凡戸籍六年一造さあり見丁帳は見在の正丁及中男以上の名を書したる帳を云　○青苗簿、一に苗帳さ云唐六典に凡三公以下每年別據已受田及借荒等具所種頃畝造青苗簿申尙書省さあり其名之に據れり簿式は主稅式に詳なり簿は原本薄に作る淀本に據て改む　○輸租帳、卽ち租帳なり其式主稅式に詳なり　(六月)右京職、紀略に左京職に作る　○素性、詳ならず紀略素姓に類史索姓に作る

(七月)史生、金本閣本等生の字を說す　○辨正、天平元年十月紀に辨靜に作る僧綱補任に弁正三論宗春日氏東大寺造畢之後住さ見ゆ　○神叡、今昔物語元亨釋書に傳あり　○紀朝臣淸人云々、靈龜元年七月紀に已に載す重出なるべし　(八月)他田臣、原本他を池に作る狩谷氏の說に據て改む下同じ、狩谷氏云池田恐他田之誤安倍他田並大彦命之後、池田朝臣豐城入彦命之後、池田首大碓命之後、並見姓氏錄非同族也　(九月)少麻呂、和銅二年七月紀に宿奈麻呂に作る　○河內忌寸、錄河內國諸蕃に見ゆ臺氏さ同族なれば此に引けるなるべし　○岡本姓、倭名抄に河內

○秋七月（戊戌朔）己未（廿二）、加左右京職史生各四員。○庚申（廿三）、以沙門辨正爲少僧都、神叡爲律師。賜從五位下紀朝臣淸人穀一百斛、優學士也。○八月（戊辰朔）庚午、正三位安倍朝臣宿奈麻呂言、正七位上他田臣萬呂、本系同族、實非異姓、追尋親道、理須改正、請賜安倍他田朝臣姓、許之。○甲戌（七）、遣從五位下多治比眞人廣足於美濃國、造行宮。○九月（丁酉朔）癸卯（七）、從五位上臺忌寸少麻呂言、因居命氏、從來恒例、是以河內忌寸因邑被氏、其類不一、請少麻呂率諸子弟、改換臺氏、蒙賜岡本姓、許之。○丁未（十一）、天皇行幸美濃國。○戊申（十二）、行至近江國、觀望淡海、山陰道伯耆以來、山陽道備後以來、南海道讚岐以來、諸國司等詣行在所、奏土風歌舞。○甲寅（十七）、至美濃國、東海道相摸以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等詣行在所、奏風俗之雜伎。○丙辰（廿）、幸當耆郡、覽多度山美泉、賜從駕五位已上

國交野郡岡本郷あり是に因りて講ひしなるべし姓氏錄には載せず　○觀望、舊本流本及紀略觀を親に作る　○淡海、琵琶湖を云　○行在所、後漢書光武紀の注に天子以四海爲家故謂所居爲行在所とあり　○信濃、原本信を倍に作る金本閣本等に據て改む　○當耆郡、民部式及倭名抄多藝に作る今養老郡となれり　○覽多度山美泉、養老瀧なり多度山は養老村大字白石にあり、今養老山と云地誌提要に瀧の高七丈餘幅貳間計とあり覽の字は閣本及類史紀略に據て補ふ今度の行幸につきて十訓抄七、著聞集八等に載する所あり參看すべし　○賜從駕五位以上物、紀略賜は物の字の上にあり　○方縣、今稻葉郡に屬す　○務義、民部式武義に作り倭名抄拾芥抄武藝に作る今武儀郡と云　○志我、民部式滋賀に作り倭名抄亦同じ　○依智、民部式愛智に作り倭名抄亦同じ

（二十一月）本國亂、天智紀に詳なり　○朝廷、原本廷を庭に作る金本閣本等に據て改む　○給復終身、賦役令集解所引の官符に外蕃免課役事高麗百濟敵國投化至于終身課役俱免と見ゆ

物、各有差、○戊午、賜從駕主典已上及美濃國司等物、有差、郡領已下雜色四十一人、進位一階、又免不破當耆二郡今年田租、及方縣、務義二郡、百姓供行宮者租、○癸亥、還至近江國、賜從駕五位已上、及近江國司等物、各有差、郡領已下雜色四十餘人、進位一階、又免志我、依智二郡今年田租、及供行宮百姓之租、○甲子、車駕還宮、○冬十月戊寅、正三位阿倍朝臣宿奈麻呂、正四位下安八萬王、從四位下酒部王、坂合部王、智努王、御原王、百濟王良虞、中臣朝臣人足等、益封各有差、○丁亥、以從四位下藤原朝臣房前、參議朝政、

○十一月丁酉朔、日有蝕之、○甲辰、高麗百濟二國士卒遭本國亂、投於聖化、朝廷憐其絶域、給復終身、又遣唐使水手已上一房、徭役咸免、又九等戸以賤多少勿長、進財爲定矣、○丙午、賜故左大臣從一位石上朝臣麻呂第、絁一百疋、絲四百絇、白綿一千斤、布二百端、○癸丑、天皇臨

○一房徭役咸免、賦役令集解に載する官符に遣大唐國水手已上彼家徭役事正身一房徭役已免不及別房と見ゆ房とは古の戸籍は一戸にて頗る大家族のものあり戸中に數房ありたり故に一房のみを免じ他房に及ばずと云り戸と房との區別は東大寺文書に見ゆる戸籍輸租帳等にて明なり
○九等戸、和銅六年二月紀に出づ上々戸より下々戸に至る九等なり
○以賤多少勿長、考證云賤謂奴婢也一本作賦誤、堀氏曰勿一本作幼、元融按幼字一體作㓜與勿字形相涉而譌也集解載官符云九等戸奴婢事依長幼立平估仍爲正價可證と云るが如く賤卽ち奴婢の人數の多少長幼等を以て財に准じて等級を定むるを云
○從一位、伴信友云三月癸卯紀に依らば從の上疑くは贈字脫せしなるべし
○臨軒、古今類書纂要に臨軒天子坐朝也又曰臨御曰臨朝とあり玉座に卽かせ給ふことなり
○皮膚、原本膚を虜に作

軒、詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除愈、在朕之躬、甚有其驗、又就而飮浴之者、或白髮反黑、或頹髮更生、或闇目如明、自餘痼疾、咸皆平愈、昔聞、後漢光武時、醴泉出、飮之者、痼疾皆愈、符瑞書曰、醴泉者美泉、可以養老、蓋水之精也、寔惟美泉、卽合大瑞、朕雖庸虛、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年、爲養老元年、天下老人年八十已上、授位一階、若至五位、不在授限、百歲已上者、賜絁三疋、綿三屯、布四端、粟二石、九十已上者、絁二疋、綿二屯、布三端、粟一石五斗、八十已上者、絁一疋、綿一屯、布二端、粟一石、僧尼亦准此例、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡惸獨疾病之徒、不能自存者、量加賑恤、仍令長官親自慰問、加給湯藥、亡命山澤、藏禁兵器、百日不首、復罪如初、又美濃國司、及當耆郡司等、加位一階、又復當耆郡來年調庸、餘郡庸、賜百官人物各有差、女官亦同、癸丑、授美濃守從四位下笠朝臣麻呂從四位上、介正六位下藤原朝臣麻呂從五位下、○戊午、詔曰、國輸絹絁、貴賤有差、

ろ金本閣本等に據て改む
○甚有其驗、甚有の二字は金本閣本等に據て補ふ
○白髮反黑、反は變の借字又は省字なること牢を卒、辨を弁に作れるが如し
○光武時云々、後漢書光武紀に中元元年是夏京師醴泉湧出飲之者固疾皆愈惟眇蹇者不瘳と見ゆ
○皆愈、原本皆を不に作る諸本に據て改む
○符瑞書、考證に隋書經籍志、唐書藝文志並不載、宋史藝文志有顧野王符瑞圖十卷疑是也と云
○醴泉、持統紀七年十一月遣沙門法員等試飲近江國益須郡醴泉、又八年三月詔にも見ゆ、治部式に醴泉美泉也其味美甘狀如醴酒とあり大瑞なり
○庸虛、原本庸を痛に作る金本流本及紀略に據て改む
○一石五斗、原本石を斛に作る金本閣本曾本等に據て改む
○癸丑、前に已に出づ衍ならむ
○介、諸本及紀略に據て補ふ
○麻呂、懷風藻に萬里に

長短不等、或輸絹一丈九尺、或輸絁一丈一尺、長者直貴、短者直賤、事須安穩、理應均輸、絲有精麁、賦無貴賤、不可以一槩強貴賤之理、布雖有端、稍有不便、宜隨便用、更定端限、所司宜量一丁輸物、作安穩條例、自今以後、宜蠲百姓副物、及中男正調、其應供官主用料等物、所司宜支度年別用度、並隨鄉土所出付國、役中男進、若中男不足者、卽以折役雜徭於是太政官議奏、精麁絹絁長短廣闊之法、語在格中、○丁巳、車駕幸和泉離宮、免河內國今年調、賜國司祿有差、○十二月（丙寅朔）壬申、太政官處分、始授五位、及從外任遷京官者、會賜祿日、仍入賜例、○丁亥、令美濃國立春曉挹醴泉而貢於京都、爲醴酒也、

作る萬里麻呂古訓相通ず
○戊午、下の丁巳の次に置くべし是月丁酉朔なれば戊午は廿二日なり
○絲有精麁、諸本絲を熊に作る三代格に據て改む
○賦無貴賤、原本賦を賤に作る諸本に據て改む
○更定端限、賦役令集解に此年十二月二日の格を載せて調布長肆丈貳尺闊貳尺肆寸一丁輸二貳丈捌尺一庸布壹丈肆尺幷肆丈貳尺即以爲レ端常陸曝布以二三丁一成二兩端一上總細布長貳丈壹尺以二二丁一成レ端望多布長壹丈肆尺以二三丁一成レ端其輸レ絁郷及上總常陸者以二二丁之庸一成レ段又云庸布輸二一人一丈四尺一以二二丁之庸布一成レ段とあり按に格文は二日に、此詔は廿二日に發せられしなるべし
○宜量、三代格量の上に商字あり
○百姓副物、三代格に百姓の下人身の二字あり副物の事は孝德紀に凡調副物鹽贄亦隨二郷土所一レ出と見え賦役令に其調副物正丁一人紫三兩云々とあり　○中男不足者云々、中男とは戸令に廿以下爲レ中とあり十六歳以上二十歳まで云三代格に若有レ不レ足二中男之功一者即以二折役人夫之雜徭一とあり　○以折役雜徭、原本折を料に作り金本斷に作る格及集解に據て改む　○精麁絹絁、原本絹の下に麁絹の二字あり金本曾本に據て刪る　○丁巳、戊午の上に在るべし　(十二月)立春曉云々、考證に主水式を引て云後世立春供二若水一儀疑權二輿于此一と云り

續日本紀卷第七

【養老二年】廣湍王正四位下、正以下四字は從本及六年正月紀に據て補ふ○正五位下賀茂朝臣、元年五月紀に從四位下とあり何れか誤なるべし○三阿麻呂、狩谷校本云阿一本作河又一作珂

(二月)外散位、位に內位外位の別あり外位にて職掌なきを外散位と云

(三月)並爲中納言、並の字は上文の例に據て補ふ

(四月)佐伯宿禰百足、

續日本紀卷第八

起養老二年正月盡五年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

日本根子高瑞淨足姬天皇　元正天皇中

(戊午)二年春正月庚子、詔授二一品舍人親王一品、從四位上廣湍王正四位下、无位大井王從五位下、從四位下忌部宿禰子人、阿倍朝臣廣庭、並從四位上、正五位下賀茂朝臣吉備麻呂從四位下、正五位下穗積朝臣老、紀朝臣男人、並正五位上、從五位上道君首名正五位下、正六位上坂合部宿禰賀佐麻呂、久米朝臣三阿麻呂、當麻眞人東人、高橋朝臣安麻呂、巨勢朝臣足人、縣犬養宿禰石足、大伴宿禰首、村國連志賀麻呂、王仲文、並從五位下、○二月壬申、行幸美濃國醴泉、○甲申、從駕百寮、至于輿丁、賜絁布錢有差、○己丑、行所經至美濃、尾張、伊賀、伊勢等國郡司、及外散位已上、授位賜祿各有差、○三月戊戌、車駕自美濃至、○乙巳、以正三位長

屋王、安倍朝臣宿奈麻呂、並爲大納言、從三位多治比眞人池守、從四位上巨勢朝臣祖父、大伴宿禰旅人、並爲中納言、○乙卯、以少納言正五位下小野朝臣馬養、爲遣新羅大使、○夏四月乙丑朔、從四位下佐伯宿禰百足卒、○乙亥、筑後守正五位下道君首名卒、首名少治律令、曉習吏職、和銅末、出爲筑後守、兼治肥後國、勸人生業、爲制條教、耕營頃畝樹菓菜、下及雞肫、皆有章程、曲盡事宜、既而時案行、如有不遵教者、隨加勘當、始者老少竊怨罵之、及收其實、莫不悅服、一兩年間、國中化之、又興築陂池、以廣漑灌、肥後味生池、及筑後往々陂池皆是也、由是人蒙其利、于今溫給、皆首名之力焉、故言吏事者、咸以爲稱首、及卒、百姓祠之、○癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任、更從白丁、前勞徒廢、後苦實多、於義商量、其違道理、宜依出身之法、雖解見任、猶上國府、令續其勞、内外散位、仍免雜徭、

大寶二年紀に始見、和銅元年下總守となる　○乙亥、原本丙辰に作る干支を推すに此月丙辰なし丙辰は三月廿一日なり淀本及紀略に據て改む乙亥は十一日なり　○條、原本修に作る、修は條の誤なれば改む　○兼治肥後國、續後紀承和二年正月紀に首名の孫廣道に姓當道朝臣を賜ふこと見え其文中に和銅年中肥後守道君首名治迹有聲永存遺愛とあり　○雞肫、肫は豘に同じ字書に豘本作豚豕子也或作肫とあり　○皆有章程、雞豚の飼育に就ても規程の整頓せるを云　○曲盡事宜、原本曲を典に作る淀本に據て改む　○勘當、律令の正條に勘へ當て、正邪を決するを云孝德紀並に天平寶字七年十月紀及軍防令彈正式等に見ゆ　○味生池、肥後國志に味生池飽田郡池上村池邊寺ノ前ヨリ今ノ池上村新村ノ邊ニ續キタル田地ノ中ニ往古ハ大ナル池アリ是ヲ味生ノ池ト云とあり　○溫給、ゆるやかに足るを云　○稱首、神龜二年九月詔に騰茂飛英爵爲稱首と見ゆ、稱首とは先づ第一に其名を擧ぐるを云　○及卒、懷風藻に年五十六とあり　三代實錄貞觀七年十一月詔贈首名從四位下と見ゆ　○百姓祠之、三才圖會に明神、在所不分明、祭神道君首名とあるは何に據て書けるか肥後國志には國中ニ所々大明神ト稱スル小祠

○五月甲午朔、日有蝕之、○乙未、割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、割上總國之平群、安房、朝夷、長狹四郡、置安房國、割陸奥國之石城、標葉、行方、宇太、亘理、常陸國之菊多六郡、置石城國、割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國、割常陸國多珂郡之鄕二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背國焉、○庚子、土左國言、公私使直指土左、而其道經伊豫國、行程迃遠、山谷險難、但阿波國、境出相接、往還甚易、請就此國、以爲通路、許之、○甲辰、禁三關及大宰陸奥等國司傔仗取白丁、○庚申、定衞士數、國別有差、○癸亥、從四位上石上朝臣豐庭卒、○六月丁卯、令大宰所部之國、輸庸同於諸國、先是減庸、至是復舊焉、始置大炊寮史生四員、

アリ里俗田神ナリト云とあり首名とは別なるべし　○官之判補、選叙令に凡任官云々主政主帳及家令等判任舍人史生使部作部帳內資人等式部判補とあり官は太政官なるを云　○出身灼然、任用の法は令に明かなるを云、身の字は諸本に據て補ふ　○其違道理、狩谷氏云其恐甚誤　○令續其勞、慶雲元年六月紀に出づ　○雜徭、庸役の外に雜事に使役するを云、賦役令に令條外雜徭者每人均使摠不得過六十日とあり義解に徭訓役凡調庸之外國中諸事不論大小摠爲雜徭と見ゆ

（五月）能登國、天平十三年十二月越中國に併せ寶字元年五月又分立す　○安房國、同上　○割陸奥國、原本陸奥を常陸に作る狩谷氏は常陸一本作陸奥令御抄引亦作陸奥可従といひ令抄に陸奥國之石城云々とあるに據て改む　○石城云々、古事記に道奥石城國造見え舊事紀に道奥菊多國造及阿尺、染羽、浮田、信夫、白河、石背、石城等の國造見ゆ後之を廢して郡とし陸奥國に隷けたるを此に至りて石城石背の二國を立てらる然るに後復之を廢して郡となし陸奥國に隷けたるを明治の御代に至て更に磐城岩代國を置かる　○亘理、原本白理に作る諸本に據て改む　○常陸國之菊多、原本に常陸國之の四字なし金本閣本及令抄に據て補ふ　○多珂、原本珂を阿に作る諸本に據て改む　○伊豫國、原本豫を輿に作る諸本に據て改む　○迃遠、字書に迃は迂の本字とあり　○境出、狩谷氏云出一本作里又一作土　○禁三關云々、始て傔仗を給ふこと和銅元年三月紀に見ゆ　○大宰、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ　○石上朝臣豐庭卒、慶雲元年紀に始見、和銅四年九月將軍同十一月右將軍となる

（六月）先是減庸、慶雲三年五月紀に見ゆ

○秋八月甲戌、齋宮寮公文、始用印焉。○乙亥、出羽幷渡嶋蝦夷八十七人來、貢馬千疋、則授位祿。○九月庚戌、以從四位上藤原朝臣武智麻呂、爲式部卿、正五位上穗積朝臣老爲大輔、從五位下中臣朝臣東人爲少輔、從五位下波多眞人與射爲員外少輔。○甲寅、遷法興寺於新京。○冬十月庚午、太政官告僧綱曰、智鑒冠時、衆所推讓、可爲法門之師範者、宜擧其人、顯表高德。又有請益無倦、繼踵於師、材堪後進之領袖者、亦錄名臈、擧而牒之。五宗之學、三藏之敎、論討有異、辯談不同、自能該達宗義、最稱宗師、每宗擧人並錄。次德根有性分、業亦麁細、宜隨性分皆令就學。凡諸僧徒、勿使浮遊。或講論衆理、學習諸義、或唱誦經文、修道禪行、各令分業、皆得其道。表章智德、顯紀行能、所以燕石楚璞、各分明輝、虞韶鄭音、不雜聲曲。將須象德定水、瀾波澄於法襟、龍智惠燭、芳照閒於朝聽。加以、法師非法、還墜佛敎、是金口之所深誡、道人違道、輙輕皇憲、亦玉條之所重禁。僧綱宜廻靜鑒、能叶淸議、其居非精舍、行乖練行、任意入山、輙造菴窟、混濁山河之淸、雜燻煙霧之彩。又經曰、是色告穢雜市里、

（八月）乙亥、類史百九十風俗部蝦夷條に養老二年八月乙亥（十四日）甲申（廿五日）と載せ本文缺く乙亥以下二十二字は扶桑略記に據て補ふ

（九月）九月庚戌、干支を推すに八月庚戌なし九月は壬辰朔にて庚戌は十九日なり故に九月の二字を補ふ

○法興寺、元興寺の一名なり之を遷すこと靈龜二年五月紀に云り

（十月）請益、論語に出づ、己れ敎を受けて更に請ふ所あるを云

○後進之領袖、晉書裴秀傳に出づ字書に衣之提挈必在領袖故以喩人之能提挈其下者とあり

○名臈、臈は臘の俗字なり雜令義解に臘猶年也年終有臘故稱年爲臘言僧尼夏月安居乃得一臘と見え錄名臈とは生年を錄せずして名と臈年即ち法歲を錄するを云

○五宗、華嚴、法相、三論、倶舍、成實を云

○三藏、釋氏要覽に經、律、論謂之三藏又佛藏、菩薩藏、聲聞藏名三藏藏者攝也謂攝人攝法故

情雖逐於和光、形無別于窮乞、如斯之輩、愼加禁喩、○庚辰、大宰府言、遣唐使從四位下多治比眞人縣守來歸、

○十一月壬寅、彗星守月、○癸丑、始差畿內兵士、守衞宮城、○十二月丙寅、詔曰、朕虔承寶位、仰憑胥攜、君臨天下、四年于茲、上則昊穹、下字黎庶、庸愚之民、自挂疎網、有司之法、寘于常憲、每念於此、朕甚愍焉、思欲廣開至道、遐扇淳風、爲惡之徒、感深仁以遷善、有犯之輩、遵令軌以靡風、但自昔及今、雜言大赦、唯該小罪、八虐不霑、朕恭奉爲太上天皇、思降非常之澤、可大赦天下、養老二年十二月七日子時已前、大辟罪已

さあり ○辯談、原本辯を辨に作る金本に據て改む ○該達、金本曾本淀本該を核に作る ○皆得其道、原本道を宗に作る諸本に據て改む ○表章智德、金本閣本曾本章の字なく表の上に崇の字あり ○燕石、荀子に宋之愚人得燕石藏之以爲寶、周客聞而往觀掩口笑曰此燕石也 ○禁環、原本環を擐に作る諸本に據て改む韓非子に楚人和氏得玉璞楚山中とあり燕石に對して優れたる玉を云 ○虞韶、韶は虞舜の樂也とあり舜の時代の美はしき音樂を云 ○鄭音、鄭國之音、謂淫聲也とあり ○不雜聲曲、原本雜を新に作る諸本に據て改む ○將須、金イ本陽イ本淀本導須を使に作る ○象德定水、象德は大德を象に喩へたるなり定水は大藏法數に定者禪定也、金剛經注に禪定即是清淨心也とあり清淨なる水を云 ○渉滑、狩谷氏云渉一作清 ○龍智惠燭、龍智は象德と同じく智識のすぐれたるを龍に喩へたるなり惠燭は神龜四年十二月勅に僧正義淵法師云々啓暗女風於四方照惠炬於三界とある惠炬と同じく惠みの燭の意定水と相對して云り ○芳照、開が朝聽、朝廷に奏聞するを云 ○金口、釋迦の言を云 ○玉條、法律を云 ○能叶清議、原本議を誠に作る金本閣本に據て改む ○練行、僧尼令義解に練者陶練也言陶練情性以求解脱也とあり ○入山、同令に凡僧尼有禪行修道意樂寂靜不交於俗欲求山居服餌者三綱連署在京經玄蕃在外者三綱經國郡勘實並錄申官とあり ○山河之清、原本河を阿に作る淀本に據て改む ○雜熅、考證云按熅即熅字古人或省作昷而猶藴作薀蘊作醞之類 ○煙霧之彩、風色の麗はしきを云 ○是色告、訛誤あるべし意義通ぜず

(十二月)○胥攜、魏書廣陵王羽傳仰憑乾構君臨萬宇とあり胥攜は乾構に同じ字書に胥は天空之境也構は架屋也また廣屋也とあり ○昊穹、昊は文選注に天也とあり穹は爾雅に穹蒼蒼天也注に天形穹隆、其色蒼々、故名とあれば同じく天の意なり ○挂疎網、法令に觸るゝを云 ○寘于常憲、法律を以て處分するを云金本閣本に

常を當に作る
○該小罪、金本閣本に該を諒に作る
○前年大使、大寶元年正月粟田眞人遣唐執節使となり坂合部大分副使となり翌年出發せしを云大寶二年より今年まで十七年に及べり
【養老三年】春正月、春は類史紀略に據て補ふ
○廢朝、原本なし諸本及類史紀略に據て補ふ
○獨底船、詳ならず、考證には蓋獨木船也と云
○贊引皇太子也、贊引は字書に贊は導也、引も同じく導也とありて御先導するを云、類史に也の字なし
○拜見、拜謁に同じ
○從四位上路眞人、原本上を下に作る金本淀本曾本に據て改む
○邑治、原本邑を色に作る前後の例に據て改む
○石川朝臣難波麻呂、原本石を原に作る元年正月紀に據て改む
○吉智首、懷風藻に見ゆ

下、罪无輕重、繫囚見徒、私鑄錢、并盜人、及八虐、常赦所不原、咸赦除之、其廢疾之徒、不能自存、量加賑恤、仍令長官親自慰問、并給湯藥、僧尼亦同、布告天下、知朕意焉、○壬申、多治比眞人縣守等自唐國至、○甲戌、進節刀、此度使人、略無闕亡、前年大使從五位上坂合部宿禰大分、亦隨而來歸、

(己未)三年春正月庚寅朔、廢朝、大風也、以船二艘、獨底船十艘、充大宰府、○辛卯、天皇御大極殿受朝、從四位上藤原朝臣武智麻呂、從四位下多治比眞人縣守二人、贊引皇太子(聖武)也、○己亥、入唐使等拜見、皆著唐國所授朝服、○壬寅、授從四位上路眞人大人、巨勢朝臣邑治、石川朝臣難波麻呂、大伴宿禰旅人、多治比眞人三宅麻呂、藤原朝臣武智麻呂、從四位下多治比眞人縣守、並正四位下、從四位下阿倍朝臣首名、石川朝臣石足、藤原朝臣房前、並從四位上、正五位下小治田朝臣安麻呂、縣犬養宿禰筑紫、大伴宿禰山守、藤原朝臣馬養、並正五位上、從五位上坂合部宿禰大分、阿倍朝臣安麻呂、並正五位下、正六位上三野眞人三嶋、吉智首、

角兄麻呂、正六位下大野朝臣東人、小野朝臣老、酒部連相武、從六位上板持連內麻呂、從六位下石上朝臣堅魚、佐伯宿禰馬養、大宅朝臣小國、笠朝臣御室、並從五位下、○乙巳、正四位下安八萬王卒、

○二月壬戌、初令天下百姓右襟、職事主典已上把笏、其五位以上牙笏、散位亦聽把笏、六位已下木笏、○甲子、正三位粟田朝臣眞人薨、○己巳、遣新羅使正五位下小野朝臣馬養等來歸、○庚午、行幸和泉宮、○丙子、車駕還宮、○三月辛卯、始置造藥師寺司史生二人、○乙卯、地震、

○夏四月丁卯、秦朝元、賜忌寸姓、○乙酉、制、諸大少毅、量其任、與主政同、自今以後、爲判官任、○丙戌、分志摩國塔志郡五鄕、始置佐藝郡、

神龜元年五月吉智首に姓吉田連を賜ふと見え姓氏錄智首に作る卽ち此なり ○角兄麻呂、角は字書に角音祿續通志に漢角山四皓有二角里先生一或作二角里一後漢有二角里若叔一と見え支那にて古くより姓氏に此字を用ひしなり兄麻呂は大寶元年八月紀に勅二僧惠耀一還俗惠耀姓錄名兄麻呂、神龜元年五月紀に從五位下錄兄麻呂に姓羽林連を賜ふと見ゆ ○酒部連、姓氏錄に酒部公と見ゆ景行天皇々子神櫛別命の後なり ○板持連、狩谷氏云按五月癸卯紀云板茂史內麿等賜二連姓一此條云二連一恐誤姓氏錄河內國板茂連伊吉連同祖楊雍之後也とあり ○堅魚、神龜元年十一月紀勝男に三年正月紀勝雄に作る ○馬養、原本馬を鳥に作る諸本に據て改む

(二月)右襟、谷川氏の說に曰く之に據るに左衽の邦たること知るべしといひ藤井高尙氏は推古天皇以來服色制度一に唐樣に倣し是に至りて初めて天下の百姓をして襟を右にせしむ思ふに當時の制は獨官人以上に止まり未だ民庶に及ばざるかと云り歷朝服飾考に天平勝寶四年東大寺大佛開眼の時著用せし衣服の中に左衽の服ありとて其圖を揭げ以て風俗の容易に改まらざることを知るべしと云ろを見れば此後も尙左衽の風は存せしなるべし ○把笏、笏は抄服玩具に笏四聲字苑云笏(音忽俗云尺)手板長一尺六寸闊三寸厚五分也とあり把笏に就ては式部式に凡內外諸司史生云々並把笏と見え衣服令に規定ある人は勿論なれど其以外の人々には特に之を把ることを許さざるなり ○牙笏、衣服令に一品以下五位以上牙笏六位已下木笏とあり此と同じ、彈正式に凡五位以上通二用牙笏白木笏一前詘後直、六位以下官人用二木前挫後方一とありて位階に依て其制を異にす ○粟田朝臣眞人、公卿補任に大寶二年五月參議、慶雲二年四月中納言、八月從三位、和銅元年三月爲二大宰帥一とあり

(四月)秦朝元、原本朝の下に臣の字あり天平二年三月紀並に三年正月紀に據て削る ○大少毅、職員令に軍團

○五月己丑朔、日有蝕之、○乙未、新羅貢調使級飡金長言等四十人來朝、○癸卯、無位紀臣龍麻呂等十八人、從七位上巨勢斐太臣大男等二人、從八位上中臣習宜連笠麻呂等四人、從六位上中臣熊凝連古麻呂等七人、從八位下榎井連挊麻呂、並賜朝臣姓、大初位下若湯坐連家主、正八位下阿刀連人足等三人、並賜宿禰姓、无位文部此人等二人、賜文忌寸姓、從五位下板持史内麻呂等十九人、賜連姓、○辛亥、制定諸國貢調短絹狹絁麁狹絹美濃狹絁之法、各長六丈、濶一尺九寸、○六月丁卯、皇太子始聽朝政焉、○庚午、從四位上平群女王卒、○辛未、初令諸國史生主政主帳大少毅把笏焉、○癸酉、制、穀之爲物、經年不腐、自今以後、稅及雜稻、必爲穀而收之、○丙子、令神祇官宮主、左右大舍人寮、別勅長上、畫工司畫師、雅樂寮諸師、造宮省、主計寮、主稅寮筭師、典藥寮乳長上、左右衛士府醫師、左右馬寮馬醫等、始把笏焉、從四位下但馬女

大毅一人掌下撿二挍兵士一充中備戎具一調二習弓馬一簡二閲陣列一事上少毅二人掌同二大毅一とあり　○爲判官任、考證に疑當レ作レ爲二官判任一と云　○荅志郡、荅志は民部式苔志に作り倭名抄拾芥抄同じ　○佐藝郡、地理志料に佐藝者埼也謂レ斗二出海中一也徵二之本書一荅志領二六郷一英虞領二八郷一而佐藝郡他無レ所レ見除二英虞郡一外無二地可一レ充之者一蓋本州元一郡至レ是始爲二二郡一名曰二佐藝郡一後改二稱英虞郡一也と云

（五月）四十人、紀略卅人に作る
○巨勢斐太臣、錄右京皇別に巨勢楲田朝臣雄柄宿禰四世孫稻茂臣之後とあり次に巨勢斐太臣見え巨勢楲田同氏とあり
○中臣習宜連、錄右京皇別に中臣習宜朝臣神饒速日命孫味瓊杵田命之後也とあり習宜は姓氏錄考證に大和菅原鄕の地名なるべしスゲと訓べしと云り
○中臣熊凝連、姓氏錄中臣習宜朝臣の次に中臣熊凝朝臣同上とあり熊凝は平群郡の地名
○文部、原本二人部に作る狩谷校本に一本作二文部一四年六月紀可レ證とあるに據て改む
○板持史、上に見ゆ
○平群女王、原本群を郡に作る金本淀本に據て改む
○穀、字書に百穀之總名、實也、廣韻に俗の穀字倭名抄に穀和名毛美とあり

○別勅長上、選叙令に以別勅及伎術直諸司長上者考限叙法並同職事とあり　○主税寮、金本 闕本 曾本寮の字なし　○師、原本を竿に作る金本 曾本 淀本に據て改む竿は笄に同じ　○乳長上、三代格弘仁十一年二月廿七日官符に難波長柄豐前宮御宇(孝德)天皇御世大山上和藥使主福常習取乳術始授此職云々、類史淳和天皇天長二年四月改乳長上爲乳師とあり　○但馬女王、原本但を借に作る淀本に據て改む

○(七月)拔出司、考證に仁和三年七月廿六日丁酉御紫宸殿覽相撲、廿七日戊戌云々然後擇拔喚其名令相撲焉、塞拔出節拔鄉後之謂後世廿九日拔出者爲永式、然此云初置拔出司名蓋謂置相撲司恐非廿九日拔出之義也とあり
○賀茂役君、文武天皇己亥年五月紀(九頁)に注す參看すべし
○按察使、三代格七に具に事條を載す
○宇合、靈龜二年六月紀馬養に作る
○臣足、考證に臣一本作巨と云

王卒。

○秋七月辛卯、初置拔出司。○丙申、遷東海、東山、北陸三道民二百戸、配出羽柵焉。○庚子、從六位上賀茂役首石穗、正六位下千羽三千石等一百六十人、賜賀茂役君姓。○始置按察使。令伊勢國守從五位上門部王、管伊賀、志摩二國。遠江國守正五位上大伴宿禰山守、管駿河、伊豆、甲斐三國。常陸國守正五位上藤原朝臣宇合、管安房、上總、下總三國。美濃國守從四位上笠朝臣麻呂、管尾張、參河、信濃三國。武藏國守正四位下多治比眞人縣守、管相摸、上野、下野三國。越前國守正五位下多治比眞人廣成、管能登、越中、越後三國。丹波國守正五位下小野朝臣馬養、管丹後、但馬、因幡三國。出雲國守從五位下息長眞人臣足、管伯耆、石見二國。播磨國守從四位下鴨朝臣吉備麻呂、管備前、美作、備中、淡路四國。伊豫國守從五位上高安王、管阿波、讚岐、土左三國。備後國守正五位下大伴宿

禰宿奈麻呂、管安藝、周防二國、其所管國司、若有非違及侵漁百姓、則按察使親自巡省、量狀黜陟、其徒罪以下斷決、流罪以上錄狀奏上、若有聲敎條修、部內肅淸、具記善最言上、○乙巳、大宰大貳正四位下路眞人大人卒、○丙午、補按察使典、○閏七月丁巳朔癸亥、新羅使人等獻調物并騾馬牡牝各一疋、○丁卯、賜宴於金長言等、賜國王及長言等祿有差、是日、以大外記從六位下白猪史廣成、爲遣新羅使、○辛未、散位從四位上忌部宿禰子人卒、○癸酉、金長言等還蕃、○丁丑、石城國始置驛家一十處、○甲申、賜無位紀臣廣前朝臣姓、○八月丙戌朔己丑、有司處分、別勅才伎長上者、任職事貢與初任同、○癸巳、遣新羅使白猪史廣成等拜辭、○九月丙辰朔癸亥、以正四位下多治比眞人三宅麻呂爲河內國攝官、正四位下巨勢朝臣邑治、爲攝津國攝官、正四位下大伴宿禰旅人爲山背國攝官、○丁丑、詔、給天下民戶、陸田一町以上二十町以下、輸地子段粟三升也、六道諸國遭旱飢荒、開義倉賑恤之、○辛巳、始置衛門府醫師一人、

○侵漁、原本漁を濫に作る諸本に據て改む　○聲敎、尙書に謂天子之聲威文敎也と見ゆ　○路眞人大人卒、文武紀三年に始見、靈龜元年八月大宰大貳となる　(閏七月)騾馬、原本驛馬に作る紀略に據て改む　○賜國王、賜の字は金本閣本及紀略に據て補ふ　○廣成、原本成を氏に作る紀略及下文に據て改む　○忌部宿禰子人卒、天武紀元年に始見、慶雲三年三月出雲守となる　(八月)別勅云々、式部式に凡令稱初任者是无祿任有祿其有祿遷有祿者不入初任之例但別勅才伎長上諸司者任職事官與初任同とあり　○貢與初任同、考證に貢疑當作祿不卽有脫文と云り　○白猪史、原本史の字なし上文に據て補ふ　(九月)攝官、天平三年十一月惣官を置かる卽攝官に同じ蒲生氏職官志に攝官亦猶按察以王畿特立其名也と云り　○陸田、靈龜元年十月詔に諸國百姓趣水澤之種不知陸田之利とあり此意にて給へり　○地子、田令に凡諸國公田皆國司隨鄉土估價賃租其價送太政官以充雜用とあり賃租卽ち地子なり　○段粟三升、田令に段租稻二束二

把、義解に束稲得米五升とあるに比すれば輕し、主税式に凡公田獲稲上田五百束云々地子各依田品令輸五分之一云々とあり此は水田の地子たり　○六道諸國、國の字は金本閣本等に據て補ふ　○醫師云々、職員令に衞門府醫師一人とあり職官志に據紀之令條所載疑所追筆乎と云り

十月、大和、考證云和疑倭字　○腹太、同云未考　○改爲葛、爲の字は金本曾本に據て補ふ考證云葛下猶有脱文　○大少毅、金本閣本淀本少を小に作る　○雖由行、狩谷氏云疑有誤字　○降至、原本至を于に作る諸本に據て改む　○改張、狩谷氏は恐弛張之誤と云　○連改、連は曾本淀本無に作る閣イ本に毎に作るは無の訛なるべし　○年齒猶稚、聖武天皇は文武天皇大寶元年御降誕、此に十九歳に成給ふ　○翼贊之功、原本翊翼之功に作る諸本に據て訂す　○況乃、金本閣本等乃を及に作る　○百世松桂云々、毛詩大雅に本支百世とあるに據れり　○合於昭穆、昭穆は宗廟の制にて禮記祭統篇に昭穆者所以別父子遠近長

○冬十月癸巳、大和國人腹太得麻呂姓改爲葛、○戊戌、減定京畿及七道諸國軍團、并大少毅兵士等數、有差、但志摩、若狹、淡路三國兵士並停、○辛丑、詔曰、開闢已來、法令尚矣、君臣定位、運有所屬、洎于中古、雖由行、未彰綱目、降至近江之世、改張悉備、迄於藤原之朝、頗有增損、由行連改、以爲恒法、由是稽遠祖之正典、考列代之皇綱、承纂洪緒、此皇太子也、然年齒猶稚、未閑政道、但以握鳳曆而登極、御龍圖以臨機者、猶資輔佐之才、乃致太平、必由翼贊之功、始有安運、況乃、舍人新田部親王、百世松桂、本枝合於昭穆、萬雉城石、維磐重乎國家、理須吐納清直、能輔洪胤、資扶仁義、信翼幼齡、然則太平之治可期、隆泰之運應致、可不愼哉、今二親王、宗室年長、在朕既重、實加褒賞、深須旌異、然崇德之道、既有舊貫、貴親之理、豈無於今、其賜一品舍人親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士卅人、益封八百戶、通前二千戶、二品新田部親王、內舍人二

人、大舍人四人、衞士廿人、益封五百戸、通前一千五百戸、其舍人以供左右雜使、衞士以充行路防禦、於戲欽哉、以副朕意焉、凡在卿等、並宜聞知、

幼親疏之序而無亂也とあり大祖より數へて昭ならば昭、穆ならば穆と同じ昭穆の列に祀らるべき順位にあるを含於昭穆と云

○萬雉城石云々、周禮冬官考工記匠人に王宮門阿之制五雉、左傳隱元年に都城過百雉と見え、注に一雉之墻長三丈高一丈とあり萬雉は城の高大なるを云ひ其城の石の大磐石なるが如くにして國家に重ぜらるとなり　金本閣本淀本維磐を維盤に作る　○信翼、狩谷氏云信恐倍字之譌　○可不愼哉、金本曾本愼の下に者の字あり　○舊貫、舊き慣例を云○五百戸、百の字は金本閣本曾本に據て補ふ

○十一月乙卯朔、詔僧綱曰、朕聞、優能崇智、有國者所先、勸善獎學、爲君者所務、於俗既有、於道宜然、神叡法師、幼而卓絕、道性夙成、撫翼法林、濡鱗定水、不踐安遠之講肆、學達三空、未漱澄什之言河、智周二諦、由是服膺請業者已知實歸、函丈挹教者悉成宗匠、道慈法師、遠涉蒼波、覈異聞於絕境、遐遊赤縣、研妙機於秘記、參跡象龍、振英秦漢、並以戒珠如懷滿月、慧水若寫滄溟、儻使天下桑門智行如此者、豈不殖善根之福田、渡苦海之寶筏、朕每嘉歎、不能已也、宜施食封各五十戸、並標揚優賞、用彰有德、○辛酉、少初位上朝妻子手人龍麻呂賜海語連姓、除雜戸、

（十一月）優能、原本能を鈍に作る、類史に據て改む　○撫翼法林、法林は法の林なり定水と對句とす　○濡鱗定水、定水は禪定の水なり上に注す　○安遠、道安と慧遠と二人の高僧なり、共に高僧傳に見ゆ　○三空、一我空、二法空、三俱空と金剛經刊定記に見ゆ　○澄什、伽跋澄と鳩摩羅什と二人の高僧なり　○言河、原本河を阿に作る類史及淀本傍注に據て改む　○二諦、眞俗の二諦なり　○已知實歸、原本知を智に作る諸本及類史に據て

號、○戊寅、少初位下河内手人大足賜不下譯姓、忍海手人廣道賜久米直姓、並除雜戸號。

改む、考證に王巾頭陀寺碑文云道勝之韻虛往實歸、李善注莊子曰常季問於仲尼曰王駘兀者也與夫子中分魯立不教坐不議虛而往實而歸とあり　○函丈、講席を云ふ禮記曲禮に席間函丈、注に函猶容也講問宜相對容丈足以指畫也とあり　○道慈、天平十六年十月紀及元亨釋書に傳あり　○遠涉蒼波、道慈は大寶元年渡唐、養老二年歸朝す　○赤縣、史記孟軻傳に中國名曰赤縣神州とあり支那を云　○秘記、元亨釋書師に作る　○參跡、原本參を泰に作る類史及略記に據て改む　○象龍、高僧を云　○振英秦漢、原本振英を旗莫に作る淀本及類史に據て改む、秦漢は赤縣と對句同じく支那を云　○戚珠、法華經請進修部戚に猶護明珠とあり　○滿月、簡文帝釋迦佛像銘滿月爲面青蓮在眸とあり　○慧水、智慧を説く煩惱の垢を洗ふを以て水に喩ふ　○名實洽漢、原本漢を濱に作る類本に據て改む考證は寘に作るべしと云　○福田、無量壽經淨影疏に生世福善、能田生物、故名福田とあり　○嘉歎、原本歎を歡に作る類史に據て改む　○朝妻手人、手は原本に乎とあり考證に據て改む手は工匠の類を云大和葛上郡朝妻村に住しよりの姓か　○海語連、錄右京神別に天語連あり縣犬養宿禰同祖神魂命七世孫天日鷲命之後とあり同氏なるべし　○雜戸號、金本閣本に號の字なし　○河内手人、四年六月紀（一五〇頁）に河内手人刀子作廣麻呂改賜下村主姓免雜戸號と見ゆ　○不下譯、不の字衍なるべし、持統紀九年（紀下三四二頁）に下譯語諸田見ゆ

○十二月乙酉、充式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内、春宮、印各一面。○戊子、始制定婦女衣服樣。○庚寅、始以外六位内外初位及勳七等子年廿以上、爲位分資人、八年一替、又五位已上家、補事業防閤伏身、自是始矣。○戊戌、停備後國安那郡、茨城、葦田郡、常城。

○十二月、治部、治部の二字は金本閣本淀本に據て補ふ　○位分資人、職分資人に對して云　○八年一替、選叙令に見叙舍人云々帳内資人並以八考爲限とあり　○事業、字書に事は使也奉也とありて資人の家に事へて其業を執る人を云、主計式助大帳注に諸司史生、事業舉生並爲不課また神龜五年三月紀に事業、位分資人者云々と見ゆ考證に山田氏云事業謂事力歟とあれと主計式に事業舉生云々の下に衞士仕丁事力爲見不輸と見えて事力とは別なり　○防閤、諸本閤を閣に作る六年閏四月紀及神龜五年三月紀に據て改む防閤は六衞に見え資人の護衞に備ふる人を云神龜五年三月紀參考すべし　○伏身、文獻通考に唐調露元年九月職事五品以上帶仗給伏身とあり伏身は防閤と同じく隨身の類なり　○安那郡、郡の字は閣本曾本に據て補ふ、安閑紀に婀娜國、國造本紀に吉備穴國造あり　○茨城、詳ならず地理志料に茨城の條に高山寺本作茨原、按茨恐棘字之譌云々葦田模原也疑合音異耳、今備中後月郡有井原町井原村或其地とあり　○常城、

葦田郡都禰鄕あり、常即ち都禰或は是歟

【養老四年】公驗、古へ俗人の初て僧尼となる時に治部省より授けらるゝ證書なり令には之を告牒と云ふ、僧尼令義解に告牒者僧尼得度公驗也とあり
○宿奈麻呂、宿の字は上文に據て補ふ
○牛養、原本牛を午に作る諸本に據て改む
○中臣朝臣東人、東人以下六字は諸本に據て補ふ
○君子、原本若子に作る十月戊子紀に據て改む
○虫麻呂、虫の字は五年正月壬子、同甲戌紀に據て補ふ
○高向朝臣人足、靈龜二年四月壬申紀に大足に作る
○巨勢朝臣眞人、眞人以下五字は金本閣本淀本に據て補ふ
○紀朝臣麻呂　金本曾本淀本麻路に作る
○熒惑、火星の別名なり
○渡嶋、北海道なり齊明紀(紀下ー二一〇頁)に注す持統紀に越渡嶋に作る
○津輕、齊明紀に注す
○諸君鞍男、錄山城皇別に村公大足彥國押人命之

四年（庚申）春正月甲寅朔、大宰府獻白鳩。宴親王及近臣於殿上。極歡而罷、賜物有差。○丁巳、始授僧尼公驗。○甲子、授正五位下大伴宿禰宿奈麻呂、大伴宿禰道足、多治比眞人廣成、並正五位上。從五位上三國眞人人足、阿倍朝臣秋麻呂、佐味朝臣加佐麻呂、上毛野朝臣廣人、大伴宿禰牛養、並正五位下。從五位下民忌寸志比、車持朝臣益、阿倍朝臣駿河、山田史三方、忍海連人成、榎井朝臣廣國、中臣朝臣東人、粟田朝臣人上、鍛冶造大隅、石川朝臣君子、並從五位上。正六位上佐伯宿禰智連、猪名眞人石楯、下毛野朝臣虫麻呂、美乃眞人廣道、高向朝臣人足、石川朝臣夫子、多治比眞人占部、縣犬養宿禰石次、當麻眞人老、阿倍朝臣若足、巨勢朝臣眞人、紀朝臣麻呂、正六位下田中朝臣稻敷、並從五位下。是日、白虹南北竟天。○庚午、熒惑逆行。○丙子、遣渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗。○庚辰、始置授刀舍人寮醫師一人。大納言正三位阿倍朝臣宿奈麻呂薨。後岡本朝筑紫大宰帥大錦上比羅

後也とあり和銅六年七月紀に村君東人見ゆ請近し考ふべし

○靺鞨、多賀城碑に去靺鞨國界三千里、五代史に渤海本號靺鞨、高麗之別種也云々、又曰黑水靺鞨、本號勿吉當後魏時見中國、其國東至海、南界高麗西接突厥北鄰室韋蓋肅愼氏之地也とあり今の朝鮮北部より沿海州にかけて國をなせる種族なり欽明紀五年肅愼(紀下五五頁)を見るべし　○阿倍朝臣宿奈麻呂、持統紀八年に始見、慶雲二年四月中納言養老二年三月大納言となる　○比羅夫、大宰帥大錦たることを書紀に載せず

(二)**二月**、撿挍造器二司、十月丙申の條に始置養民造器及造興福寺佛殿三司と見えたれば追書に係れるか、二司とあれど撿挍司と造器司とにては意通ぜず紀略に二の字なければ二は衍にて撿挍造器司なるべし　○戊戌云々、此條類史に據て補ふ

(三)**三月**、授刀資人、五年三月辛未紀に右大臣長屋王以下に帶刀資人を給ふこと見ゆ授刀資人より採りて大官寵臣に賜ひて之を優待せさせ給ふなり　○例多、例は制の誤か　○數有逋懸、字書に凡欠負官物亡匿不還皆謂之逋とあり官稻を借りて匿れて返納せざるを云ふ原本數を缺に作る類史に據て改む又本條懸を縣に作る縣懸と同じ　○公稻、考證に稻下疑脫出擧二字

夫之子也、

○二月乙酉、令撿挍造器二司、造釋奠器、充大膳職大炊寮、○戊戌、夜地動、○壬子、大宰府奏言、隼人反殺大隅國守陽侯史麻呂、○三月丙辰、以中納言正四位下大伴宿禰旅人、爲征隼人持節大將軍、授刀助從五位下笠朝臣御室、民部少輔從五位下巨勢朝臣眞人、爲副將軍、○癸亥、勅度三百二十人出家、○甲子、有勅、特加右大臣正二位藤原朝臣不比等授刀資人三十人、○己巳、太政官奏、比來百姓例多乏少、至於公私不辨者衆、若不矜量、家道難存、望請、比年之間、令諸國每年春初出税、貸與百姓、繼其產業、至秋熟後、依數徵納、其稻既不息利、令當年納足、不得延引數有逋懸、又除租税外公稻擬充國用、一槩無利、恐其頓絕、望請、令諸國每年出擧十束、取利三束、仍令當年本利俱納、又百姓

之間、貧稻者多、緣無可還、頻經歲月、若致切徵、因卽迸散、望請、限養老二年以前、無論公私、皆從放免、庶使貧乏百姓各存家業、又謹撿和銅四年十一月廿二日勅、出擧私稻者、自今以後、不得過半倍者、比來出擧多不依法、若臨時徵索、無稻可償者、令其子姪易名重擧、依此奸計、取利過本、積習成俗、深非道理、望請、其稻雖經多年、仍不過半倍、又撿養老二年六月四日案內云、庸調運脚者、量路程遠近、運物輕重、均出戶內脚、奬賚行人勞費者、據案、唯言運送庸調脚直、自餘雜物送京、未有處分、但百姓運物入京、事了卽令早還、爲無歸國程粮、在路極難艱辛、望請、在京貯備官物、每因公事送物還、准程給粮、庶免飢弊、早還本土、又無知佰姓不閑條章、規避傜役、多有逃亡、涉歷他鄉、積歲忘歸、其中縱有悔過還本貫者、緣其家業散失、無由存濟、望請、逃經六年以上、能悔過歸者、給復一年、繼其産業、奏可之、改按察使典、號記事、○乙亥、按察使向京、及巡行屬國之日、乘傳給食、因給常陸國十剋、遠江國七剋、伊豆出雲二國鈴各一、

○擬充國用、原本擬を授に作る金本閣本會本に據て改む
○無利、無の字は諸本に據て補ふ
○頓絕、絕は閣本に據て補ふ金本會本淀本純に作るは頓の訛、頓絕とは利子を收めずして出擧すれば漸く本稻を失ひてゆきつまるを云
○取利三束、六年閏四月太政官奏、公私出擧取利十分之三、天平勝寶六年九月勅、正稅之利擧十取三とあり是なり
○廿二日、原本二の字なし諸本及類史に據て補ふ
○不得過半倍者、原本者を而に作る諸本及類史に據て改む
○令其子姪、令は諸本今に作る類史に據て改む
○半倍、類史此下に奏可之の三字あるは末文に奏可之とあるを採て文を成せるなり
○二年六月四日案內、此事前文に載せず
○運脚、賦役令に其運脚均出庸調之家皆國司領送とあり
○奬賚、原本奬を將に作る金本閣本會本等に據て

改む字書に獎は助也資は給也とあり　○脚直、民部式に凡調庸及中男作物、送京差正丁充運脚、餘出脚直以資とあり諸本直を盡に作る恐くは非
○自餘、閣本自を日に作る恐くは非なり　○但百姓云々、和銅五年十月乙丑紀(九〇頁)に云り　○城窮窘辛、窮の字は諸本に據て補ふ　○無知佰姓、
靈龜元年五月紀に引けり金本閣本佰を伯に作る百佰伯相通す　○奏可之、享祿本三代格亦官符を載せて三月十七日とす　○給食、其數具主税式に詳
なり　○十尅、狩谷氏云尅當作刻　○二國、考證に此下亦當言刻數恐脫文と云り

(四月)○蘇芳色、原本色を也に作る狩谷氏の說に據て改む、彈正式に凡蘇芳色者親王以下參議以上非參議三位及嬪妻女子並聽著用とあり此と異れり

(五月)○王孫、考證に孫王即二世疎親即三世以下諸王是也とあり王孫は孫王の顛倒せるなるべし彈正式に衣服色親王者著紫以下孫王准五位諸王准六位とあり
○葛井連、延曆十年正月更に宿禰姓を賜ふ
○白紙、關市令義解に直於白紙錄之不踏朱印故曰錄白也とあり
○年料、民部式載する所の年料春米、租春米、別納租穀、別貢雜物等の類なるべし　○養物、神護二年五月紀に始令七道諸國采女養物不論存亡並全輸采女司と見え三代格延曆廿四年三月二日官符にも見ゆ養物とは資物の謂なり　○尺樣、尺の見本なり　○修日本紀、弘仁私記序に日本紀舍人親王及太朝臣安麻呂等奉勅所撰也、書籍目錄に日本書紀三十卷舍人親王撰從神代至持統凡四十代とあり　○系圖一卷、釋日本紀に收むる帝皇系圖即是なりと云

(六月)○文部、原本文を丈に作る諸本に據て改む

○夏四月庚戌、制、三位已上妻子、及四位五位妻、並聽服蘇芳色、○五月辛酉、制、皇親服制者、以王孫准五位、疎親准六位焉、○壬戌、改白猪史氏、賜葛井連姓、○癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、望請、自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、差逃走衛士仕丁替、及催年料廻殘物、并兵衛采女養物等類事、便以太政官印印之、奏可之、頒尺樣于諸國、先是、一品舍人親王奉勅、修日本紀、至是功成、奏上、紀卅卷系圖一卷、○乙亥、給伊豆駿河伯耆國三尅鈴各一、

○六月壬辰、文部黑麻呂等十一人賜文忌寸姓、○戊戌、詔曰、蠻夷爲害、

自古有之、漢命五將、驕胡臣服、周勞再駕、荒俗來王、今西隅小賊、怙亂逆化、屢害良民、因遣持節將軍正四位下中納言兼中務卿大伴宿禰旅人、誅罰其罪、盡彼巢居、治兵率衆、剪掃兇徒、酋帥面縛、請命下吏、寇黨叩頭、爭靡敦風、然將軍暴露原野、久延旬月、時屬盛熱、豈無艱苦、使使慰問、宜念忠勤、○甲辰、始置神祇官史生四員、○戊申、河內國若江郡人正八位上河內手人刀子作廣麻呂、改賜下村主姓、免雜戶號、○己酉、漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂坐盜司漆、並斷流罪、於是石勝男祖父麻呂年十二、安頭麻呂年九、乙麻呂七、同言曰、父石勝爲養己等、盜用司漆、緣其所犯、配沒遠方、祖父麻呂等爲慰父情、冒死上陳、請兄弟三人沒爲官奴、贖父重罪、詔曰、人稟五常、仁義斯重、士有百行、孝敬爲先、今祖父麻呂等、沒身爲奴、贖父犯罪、欲存骨肉、理在矜愍、宜依所請爲官奴、卽免父石勝罪、但犬麻呂依刑部斷、發遣配處、

文部氏は三年五月紀（一四〇頁）に出づ　○黑麻呂、金本閣本黑を星に作る　○漢命五將云々、漢宣帝本始二年秋御史大夫田廣明以下五人を將軍とし兵十五萬騎を率ゐて匈奴を擊たしめたるを云　○驕胡、匈奴を云、原本驕を嬌に作る山崎校本に據て改む　○周勞再駕云々、左傳襄三十一年に文王伐崇再駕而降爲臣とあるを云　○西隅小賊云々、二月隼人反して大隅國守陽胡史麻呂を殺せしを云、原本小を等に作る紀略に據て改む等の略體小と相似たるより誤れるなるべし　○怙亂、原本怙を怡に作る閣本に據て改む　○手人、原本午人に作る手の誤なること明なれば改む　○下村主、錄左京諸蕃に下村主後漢光武帝七世孫愼近王之後也とあり　○丈部路忌寸、天平寶字八年十月紀に丈部路忌寸並倉見ゆ、金本閣本等丈を大に作るは非なり　○同言曰、原本曰を內に作る考證に據て改む　○配沒遠方、原本配は請の下にあり沒を役に作る金本閣本淀本に據て改訂す　○沒爲官奴、原本沒を役に作る山崎校本に據て改む下同じ又官を宮に作る金本閣本淀本に據て改む　○發遣、遣の字は類史に據て補ふ

爲知五衞及授刀舍人事、○丁亥、詔、諸請内印、自今以後、應作兩本、一本進内、一本施行、

○九月庚戌朔、日有蝕之、○辛未、諸國申官公文、始乘驛言上、○丁丑、陸奧國奏言、蝦夷反亂、殺按察使正五位上上毛野朝臣廣人、○戊寅、以播磨按察使正四位下多治比眞人縣守爲持節征夷將軍、左京亮從五位下下毛野朝臣石代爲副將軍、軍監三人、軍曹二人、以從五位上阿倍朝臣駿河爲持節鎭狄將軍、軍監二人、軍曹二人、卽日授節刀、○冬十月戊子、以從四位上石川朝臣石足爲左大弁、從四位上笠朝臣麻呂爲右大弁、從五位上中臣朝臣東人爲右中弁、從五位下小野朝臣老爲右少弁、從五位下大伴宿禰祖父麻呂爲式部少輔、從五位下巨勢朝臣是人爲員外少輔、從五位上石川朝臣君子爲兵部大輔、正五位上大伴宿

○十一人、狩谷氏云一十人に作るべしと
○奴婢、奴婢には官私の別あり官の奴婢は謀反大逆人の家の奴婢を官に沒したるを云
○壬辰、考證に十二日壬辰當叙丁亥下とあり　○持節將軍、持節以下隼人に至る二十三字原本なし金本晉本淀本に據て補ふ　○留而已屯、已恐くは衍　○濫吹、濫に吹擧するを云　○内大臣、職原抄に孝德天皇御宇以中臣鎌子連始爲内臣天智朝擧爲内大臣此時位在左右大臣上とあり　○諸請内印、原本請の字なし金本閣本に據て補ふ太政官式に凡請内印文作二通一通奏進一通施行とあり

(九月)正五位下、原本下を上に作る正月甲子紀に據て改む
○下毛野、此下疑くは川内の二字を脱す
○從五位上阿倍朝臣、原本上を下に作る正月甲子紀に據て改む
(十月)是人、二年正月紀足人に作る
○君子、原本若子に作る上文及下文に據て改む
○高向朝臣、原本向の字なし靈龜二年四月紀(一一九頁)に據て補ふ
○瓮、原本盜に作る正月甲子紀及和銅三年紀に據て改む
○攝津守、考證云守疑當作亮

○安木守、安木即ち安藝○養民、養民司に天平寶字四年六月紀に見ゆ○造器、二月乙酉（一一四七頁）に始按造器司見ゆ○興福寺、奈良にあり、大和志に興福寺、和銅三年三月藤原不比等建于和州平城梨原廏坂、故名廏坂寺、又名山階寺、初以在山州山階也とあり○右大臣第、原本第を弟に作る金本閣本等に據て改む○贈太政大臣正一位、補任此下に謚曰文忠公食封資人並如全生とあり（十一月）南嶋、上（一一〇頁）に出づ○甲戌、以下四十八字類史八十三に據て補ふ○堅下堅上、狩谷氏按河內國大縣郡有賀美郷安宿郡有資母郷、蓋是堅上堅下乎並見和名抄とさ云ひ今中河內郡に堅上村堅下村あり○大歲、原本大藏に作る上文及天平十九年正月紀に據て改む○池上君、姓氏錄に載せず○河合君、錄左京皇別に川合公上毛野同氏とあれ

禰道足爲民部大輔、從五位下高向朝臣大足爲少輔、從五位上車持朝臣益爲主稅頭、從五位上鍛冶造大隅爲刑部少輔、從五位下阿倍朝臣若足爲大藏少輔、從五位下高橋朝臣安麻呂爲宮內少輔、從五位下當麻眞人老爲造宮少輔、從五位下縣犬養宿禰石次爲彈正弼、從五位下大宅朝臣大國爲攝津守、從五位下高向朝臣人足爲尾張守、從五位上忍海連人成爲安木守、○丙申、始置養民、造器、及造興福寺佛殿三司、○壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、中納言正四位下大伴宿禰旅人、就右大臣第宣詔、贈太政大臣正一位、○十一月丙辰、南嶋人二百卅二人、授位各有差、懷遠人也、○甲戌、勅陸奥、石背、石城三國調庸幷租減□之、唯遠江、常陸、美濃、武藏、越前、出羽六國者、免征卒及廝馬從等調庸幷房戶租、○乙亥、河內國堅下堅上二郡、更號大縣郡、○十二月己亥、詔除春宮坊少屬少初位上朝妻金作大歲、同族河麻呂二人幷男女雜戶籍、賜大歲池上君姓、河麻呂河合君姓、○癸卯、詔曰、釋典之道、敎在甚深、轉經唱禮、先傳恒規、理合遵承、不須輙改、比者或僧尼自出方法、妄作別音、

ご同氏なるか詳ならず
○釋典、紀略釋尊に作る
○理合遵承、三代格合を事に作る
○恐汙法門、原本汙を汗に作る金イ本に據て改む三代格濫に作る
○漢沙門、考證に漢は唐さ云が如しさあり
○道榮、元亨釋書に傳あり
○餘音、類史延暦十二年四月丙子制に自今以後、年分度者、非レ習二漢音一、勿レ令二得度一さあり
【養老五年】致敬、敬禮を致すを云儀制令に凡元日不レ得レ拜二親王以下一唯親戚及家令以下不レ在二禁限一若非二元日一有レ應二致敬一者四位拜二一位一五位拜二三位一六位拜二四位一七位拜二五位一以外任隨二私禮一さ見ゆ
○到人、金本閣本會本到を官に作る
○多治比眞人三宅麻呂、多治比眞人の五字は上文に據て補ふ
○藤原朝臣馬養、原本に上朝馬養さあるは誤脱あるこさ明なり淀本に小野朝臣馬養に作り考證には藤原朝臣馬養さす小野馬

遂使後生之輩、積習成俗、不肯變正、恐汙法門、從是始乎、宜依漢沙門道榮、學問僧勝曉等、轉經唱禮、餘音並停之、

(辛酉)五年春正月戊申朔、武藏、上野二國、並獻赤烏、甲斐國獻白狐、尾張國言、小鳥生大鳥、○己酉制、諸司官人、於本司次官以上、致敬、常所聽許、自今以後、不得更然、若違此旨、一人到卿門者、到人解官、同僚降考、○庚戌、雷、○壬子、授正三位長屋王從二位、正四位下巨勢朝臣祖父、大伴宿禰旅人、藤原朝臣武智麻呂、從四位上藤原朝臣房前、並從三位、從四位下六人部王、從四位上、從五位上高安王、門部王、葛木王、並正五位下、從五位下櫻井王、佐爲王、並從五位上、正四位下多治比眞人縣守、多治比眞人三宅麻呂、正五位上藤原朝臣馬養、並正四位上、從五位下藤原朝臣麻呂從四位上、從五位下下毛野朝臣虫麻呂、吳肅胡明、並從五位上、以大納言從二位長屋王爲右大臣、從三位多治比眞人池守爲大納言、從三位藤原朝臣武智麻呂爲中納言、又授從三位縣犬養橘宿禰三千代正三位、○庚午、詔從五位上佐爲王、從五位下伊部王、正五位

養にては位階合はず故に考證に據て補訂す
○吳肅胡明、神龜元年五月辛未紀に賜‿從五位下吳肅胡明御立連‿と見ゆ
○百村、一本に村は枝に作ると云
○鹽屋連吉麻呂、錄河內皇別に鹽屋連武內宿禰男葛城曾都比古命之後也とあり吉麻呂は考證に或作‿古麻呂‿又作‿土麻呂‿依‿懷風藻及令義解序‿作‿古麻呂‿爲‿正とあれど義解序には見えず懷風藻にも兩樣に書せり故に姑く舊に據る
○退朝之後、後の字は諸本に據て補ふ
○國士、史記刺客傳に見ゆ字書に謂‿一國之內所‿共推爲‿才士‿也とあり
○退食自公、毛詩國風召南に出づ自‿公退食ともあり公務を勤め終て食事をするを云
○康哉之歌、尚書虞書益稷に乃賡載歌曰、元首明哉股肱良哉庶事康哉とあるを云
○斯在、原本斯を期に作る今諸本考證に據て改む
○斯崇、原本斯を期に作る今諸本及紀略に據て改む

上紀朝臣男人、日下部宿禰老、從五位上山田史三方、從五位下山上臣憶良、朝來直賀須夜、紀朝臣清人、正六位上越智直廣江、船連大魚、山口忌寸田主、正六位下樂浪河內、從六位下大宅朝臣兼麻呂、正七位上土師宿禰百村、從七位下鹽屋連吉麻呂、刀利宣令等、退朝之後、令侍東宮焉、○辛未、地震、○壬申亦震、○甲戌、詔曰、至公無私、國士之常風、以忠事君、臣子之恆道焉、當須各勤所職、退食自公、康哉之歌不遠、隆平之基斯在、災異消上、休徵叶下、宜文武庶僚、自今以去、若有風雨雷震之異、各存極言忠正之志、又詔曰、文人武士、國家所重、醫卜方術、古今斯崇、宜擢於百僚之內、優遊學業、堪爲師範者、特加賞賜、勸勵後生、因賜明經第一博士從五位上鍛冶造大隅、正六位上越智直廣江、各絁廿疋、絲廿絇、布卅端、鍬廿口、第二博士正七位上背奈公行文、調忌寸古麻呂、從七位上額田首千足、明法正六位上箭集宿禰虫方呂、從七位下鹽屋連吉麻呂、文章從五位上山田史御方、從五位下紀朝臣清人、下毛野朝臣虫麻呂、正六位下樂浪河內、各絁十五疋、絲十五絇、布卅端、鍬廿口、筭術

正六位上山口忌寸田主、正八位上悉斐連三田次、正八位下私部首石村、陰陽從五位上大津連首、從五位下津守連通、王仲文、角兄麻呂、正六位上余秦勝、志我閇連阿彌陁、醫術從五位上吉宜、從五位下吳肅胡明、從六位下秦朝元、太羊甲許母、解工正六位上恵我宿禰國成、河內忌寸人足、堅部使主石前、正六位下賈受君、正七位下胷形朝臣赤麻呂、各絁十疋、絲十絇、布廿端、鍬廿口、和琴師正七位下文忌寸廣田、唱歌師正七位下大窪史五百足、正八位下記多眞玉、從六位下螺江臣夜氣女、茨田連刀自女、正七位下置始連志祁志女、各絁六疋、絲六絇、布十端、鍬十口、武藝正七位下佐伯宿禰式麻呂、從七位下凡海連興志、板安忌寸犬養、正八位下置始連首麻呂、各絁十疋、絲十絇、布廿端、鍬廿口、○丙子、令天下百姓、以銀錢一當銅錢廿五、以銀一兩當一百錢、行用之、

○明經、選叙令に凡明經取下學通二二經一以上一者上と見え經とは周易尙書周禮儀禮等を云、學令に詳に見ゆ　○博士、博士は學令に凡博士助教、皆取ニ明ㇾ經堪ㇾ爲ㇾ師者一とあり　○越智直廣江、原本直の下に麻呂の二字あり上文に據て削る　○背奈公、天平十九年六月紀に背奈福信等賜ニ背奈王姓一、勝寶二年正月紀賜ニ高麗朝臣姓一と見ゆ　○明法、選叙令に明法取下通ニ達律令一者上と見ゆ　○文章、三代格弘仁十二年二月十七日官符に定ニ文章博士官位ニ事、右依ニ天平二年三月廿七日格一置ニ件官員一とあり　○下毛野朝臣虫麻呂、狩谷氏云虫麻呂是月壬子叙ニ從五位上一此及六月辛丑紀書ニ從五位下一可ㇾ疑と云り　○筭術、筭は算なり算博士は職員令大學寮に見ゆ　○悉斐連、考證に悉疑志字之譌と云り斐は原本悲に作る金本閣本等に據て改む　○私部首、未詳ならず　○大津連首、和銅七年閏二月紀首を意毗登に作る　○余秦勝、考證云秦疑當ㇾ作ㇾ奏　○從五位下吳肅胡明、上文に授從五位上とあり從五位下は誤なるべし　○秦朝元、原本養朝几に作る考證に據て改む　○太羊、考證云疑有ニ譌脫一　○甲許母、同云山川氏曰蓋與ニ神龜元年五月紀所ㇾ載胛巨茂一一人也、或曰天智紀有ニ許率母一疑此未ㇾ知ニ孰是一　○解工、神護景雲三年九月壬申紀に尾張國鵜沼川開掘の爲に解工使を遣し其舊道に復せしめたる事見ゆ考證に解工は之に同じと云　○賈受君、神龜元年五月紀賜ニ姓神前連一　○和琴師、抄音樂部に日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面云々[illegible]而短小有ニ六絃一俗用ニ倭琴二字一夜萬止古止とあり　○唱歌師、唱歌は倭訓栞にサウカ、源氏(乙女卷)に見ゆ唱歌也と云り今シヤウガと呼り[illegible]に

唱歌の師は百濟國の語也、たけちといふ類是也と見えたりと云　○大窪史、嘉祥二年五月紀に大窪益門見え、貞觀六年八月紀に大窪峯雄見ゆ　○記多、狩谷氏云記疑託字之譌、下十七年四月紀作託陁、可證又續紀五年三月紀有答他伊奈麻呂託陁答他蓋一音之轉　○螺江臣、諸氏錄載せず、内藤氏曰、類聚國史職官部螺江臣織人または直江連織人に作る何れなるやを詳にせずと、考證に於螺訓サダ、和名抄螺子和名佐太江古本作佐太江是也と云　○夜氣女、金本陳本女を皆に作る下同じ　○武藏、原本武を我に作り山崎校本に據て改む　○坂安忌寸、姓氏錄載せず、他書にも見えず私記に一坂上に作るとあり　○銀錢、和銅元年五月始て銀錢を行ひ、八月銅錢を行ひ同二年八月に至て銀錢を廢し一に銅錢を行ひ、三年九月又銀錢を行ふことを禁ぜられたり　○銅錢、原本錢を錦に作る山崎校本に據て改む、狩谷氏云銅錢之訛、百錢亦同じ

〔二月〕暈南北有珥、暈は類史暈に作る、珥は字書に日旁氣也とあり

○汝無面從云々、尚書益稷に出づ

○歳在申年、申年を忌むことの出典詳ならざれど陰陽道の説に出で庚申の日を恐るゝと同じ意なるべし

○所致之異乎、原本所を此に乎を于に作る金本閣本谷本等及類史に據て改む

○今汝臣等、原本臣の字なし金本閣本及類史に據て補ふ

○勅詔、類史紀略に勅の

○二月甲申（戊寅朔七）、地震、○壬辰（十五）、大藏省倉、自鳴有聲、○癸巳（十六）、日暈如白虹貫、暈南北有珥、因召見左右大弁及八省卿等於殿前、詔曰、朕德非薄、導民不明、夙興以求、夜寢以思、身居紫宮、心在黔首、無委卿等、何化天下、國家之事、有益萬機、必可奏聞、如有不納、重爲極諫、汝無面從、退有後言、○甲午（十七）、詔曰、世諺云、歳在申年、常有事故、此如所言、去庚申年、咎徵屢見、水旱並臻、平民流沒、秋稼不登、國家騷然、萬姓苦勞、遂則朝庭儀表、藤原大臣奄焉薨逝、朕心哀慟、今亦去年災異之餘、延及今歳、亦猶風雲氣色、有違于常、朕心恐懼、日夜不休、然聞之舊典、王者政令不便事、天地譴責、以示咎徵、或有不善、所致之異乎、今汝臣等位高任大、豈得不罄忠情乎、故有政令不便事、悉陳无諱、直言盡意、无有所隱、朕將親覽、於是

字なし恐くは衍
○意見、公式令に凡有事陳意見欲封進者即任封上とあり
(三月)家々、原本々々に作る類史に據て改む人々亦同じ
○畿内五國、考證に五疑當作四案先是置芳野和泉二監此後往々書四畿内二監或芳野和泉四畿内云々至寶字元年五月和泉又分立爲國其七年正月紀云役使造宮左右京五畿内云々可見和泉分立後始有五畿内之稱矣
○王公、公の字は金本閣本曾本に據て補ふ
○亡限、原本是隈に作る金本曾本淀本に據て改む
○官品之次、原本次を改に作る曾本淀本閣イ本に據て改む
○定畜馬之限、此事天平寶字元年六月紀五條の制にも見ゆ
○十二匹、金本閣本等二駟に作る
○職分資人、上(八一頁)に出づ
(四月)雜太郡、抄國郡部に雜太(佐波太)とあり
○賀母、民部式賀茂に作

公卿等奉勅詔退、各仰屬司令言意見。○三月癸丑、勅曰、朕君臨四海、撫育百姓、思欲家々貯積、人々安樂。何期、頃者旱澇不調、農桑有損、遂使衣食乏短、致有飢寒。言念於茲、良増惻隱。今減課役、用助產業。其左右兩京、及畿內五國、並免今歲之調。自餘七道諸國、亦停當年之役。○乙卯、詔曰、制節謹度、禁防奢淫、爲政所先、百王不易之道也。王公卿士及豪富之民、多畜健馬、競求亡限。非唯損失家財、遂致相爭鬪亂。其爲條例、令限禁焉。有司條奏、依官品之次、定畜馬之限。親王及大臣不得過廿疋。諸王諸臣三位已上十二疋、四位六疋、五位四疋、六位已下至于庶人三疋。一定以後、隨闕充補。若不能騎用者、錄狀申所司、即校馬帳、然後除補。如有犯者、以違勅論。其過品限、皆沒入官。○辛未、以從五位下路眞人麻呂爲散位頭。以從五位下高橋朝臣廣嶋爲刑部少輔。勅給右大臣從二位長屋王帶刀資人十人、中納言從三位巨勢朝臣邑治、大伴宿禰旅人、藤原朝臣武智麻呂、各四人。其考選一准職分資人。○夏四月丙申、分佐渡國雜太郡、始置賀母羽茂二郡。分備前國邑久赤坂二郡、

ゑ、抄亦同じ
○羽茂、地理志料に羽茂郡按當讀云宇母と云
○藤野郡、狩谷校本に野疑原と云神龜三年十一月紀に改備前國藤原郡名爲藤野郡とあればなり、神護景雲三年六月乙丑更に和氣郡と改む
○安那郡、抄國郡部に安那(夜須奈)とあり地理志料に按安那古訓阿奈此注云夜須奈從國音已
○正四位上云々、以下鎭狄に至る十三字乙酉の條に見ゆ恐くは衍なり
○力田、字書に力は勤也とあり荒野開地の開墾に力を盡すを云
○乙酉、九日なり或は乙巳(廿九日)の誤か
○五月、隨便併合、靈龜二年五月紀にも見ゆ
○每至此念、考證云疑當作每念至此
○因歸依、諸本因を思に作る
○六郡、藤以文は六郡恐六部と云ひ、考證には舊謂旁近諸郡也と云り
○萬祀、萬年に同じ、字書に夏曰歲商曰祀周曰年唐虞曰載とあり
○縣犬養橘宿禰、橘の字

之郷、始置藤野郡、分備後國安那郡、置深津郡、分周防國熊毛郡、置玖珂郡、正四位上多治比眞人縣守鎭狄、○癸卯、令天下諸國、擧力田之人、○乙酉、征夷將軍正四位上多治比眞人縣守、鎭狄將軍從五位上阿倍朝臣駿河等還歸、○五月己酉、太上天皇不豫、大赦天下、○辛亥、令七道按察使、及大宰府、巡省諸寺、隨便併合、○壬子、詔曰、太上天皇、聖體不豫、寢膳日損、每至此念、心肝如裂、因歸依三寶、欲令平復、宜簡取淨行男女一百人、入道修道、經年堪爲師者、雖非度色、並聽得度、以絁九千絢、施六郡門徒、勸勵後學、流傳萬祀、○戊午、右大弁從四位上笠朝臣麻呂、請奉爲太上天皇出家入道、勅許之、○乙丑、正三位縣犬養橘宿禰三千代、緣入道辭食封資人、優詔不聽、○六月戊寅、詔曰、沙門法蓮、心住禪枝、行居法梁、尤精醫術、濟治民苦、善哉若人、何不褒賞、其僧三等以上親、賜宇佐君姓、○乙酉、太政官奏言、國郡官人、漁獵黎元、擾亂朝憲、故置按察使、糺彈非違、肅淸姧詐、既定官位、宜有料祿、請以按察使、准正五位官、賜祿并公廨田六町仕丁五人、記事准正七位官、祿并公廨田二

は上下の文に據て補ふ

(三六月)法蓮、上(三七頁)に出づ

○宇佐君、弘仁十二年八月紀以大神宇佐二氏爲八幡大菩薩宮司、國造本紀に宇佐國造檀原朝高魂尊孫宇佐都彥命定賜國造と見ゆ

○太政官奏言、三代格卷五及卷十五に此格文を載す

○擾亂朝憲、格に蠹害政法とす

○置按察使、三年七月紀(一四一頁)に見ゆ

○准正五位云々、格に按察使、令准正五位上階、記事令准正七位上階と見ゆ

○股肱、原本肱股に作る格に據て改む

○寄重云々、格卷五に不可同等宜更加祿一倍仍隨風土所出通融相折、餘依奏自今以後永爲恒式と見ゆ

○數過煙塵、四年二月隼人反して大隅國守陽胡史麻呂を殺し、同九月蝦夷反亂按察使上毛野朝臣廣人を殺す等の事を云ふ、過は遇の譌なるべしと云

○除定額外云々、考證云

町、仕丁二人、並折留調物、便給之、詔曰、朕之股肱、民之父母、獨在按察、寄重務繁、與群臣異、加祿一倍、便以當土物、准度給之、又陸奧筑紫邊塞之民、數過煙塵、疲勞戎役、加以父子死亡、室家離散、言念於此、深以矜懷、宜勿出當年調庸、諸國軍衆、親帥戰兵、殺獲逆賊、乘勝追北者、賜復二年、冒犯矢石、身死去者、父子並復一年、如無子者、昭穆相當鄕里者、議亦聽復之、又京及諸國、因官人月俸、收斂輕稅、自今以去、皆悉停之、隨令給事力、不得遠役他致使艱辛、若有收課、一月三十錢、又除定額外、內外文武散位六位以下、及勳位、并五位以上子孫、並令納資便成番考、此則雖積考年、還乏衣食、宜始今年、不須發資、人々歸田、家々貯穀、若有願稼穡納資成考者、恣聽之、其五位以上子孫、年廿一以上、取蔭出身、並依常例、因結告麻牒公驗、一同分番之法、奏可之、○戊戌、詔曰、沙門行善、負笈遊學、既經七代、備嘗難行、解三五術、方歸本鄕、矜賞良深、如有修行天下諸寺、恭敬供養、一同僧綱之例、又百濟沙門道藏、寔惟法門領袖、釋道棟梁、年逾八十、氣力衰耄、非有束帛之施、豈稱養老之情哉、宜所

司四時施物、絁五疋、綿十屯、布廿端、又老師所生同籍親族、給復終僧身焉、○辛丑、以正四位下阿倍朝臣廣庭爲左大弁、正四位上多治比眞人縣守爲中務卿、從五位上石川朝臣君子爲侍從、從五位下紀朝臣麻路爲式部少輔、從五位下下毛野朝臣虫麻呂爲員外少輔、從四位下坂合部王爲治部卿、從五位下御炊朝臣人麻呂爲兵部少輔、從五位下當麻眞人大名爲刑部大輔、從四位下門部王、從五位下紀朝臣國益、並爲大判事、從五位下布勢朝臣廣道爲大藏少輔、阿倍朝臣若足爲木工頭、從四位下藤原朝臣麻呂爲左右京大夫、從四位上百濟王南典爲播磨按察使、從四位上石川朝臣石足爲大宰大貳、從五位下縣犬養宿禰石次爲右衞士佐、割信濃國始置諏方國、○癸卯、始置左右兵衞府醫師各一人、

按大寶三年八月大宰府請有勳位者作番直軍團考滿之日送於式部一同散位永預選叙又慶雲元年六月令諸國勳七等以下身無官位者聽直軍團續勞上日三年折當兩考滿之年送式部選同散位之例云々則知當時京官亦有此制不唯々大宰諸國也但其散位勳位置爲定額及額外納資前無明文未詳始于何時天平三年十二月定武散位定額員一百人七年五月畿內及七道諸國外散位及勳位始作定額國別有差自餘聽准格納資續勞云々

○納資、隋書百官志に文散官自四品皆番上於吏部不上者歲輸資錢三品以上六百、六品以下一千水旱蟲霜減半資有文藝樂京上者每州七人六十不樂簡選者雖輸勳官亦如之以征鎭功得護軍以上者納資減三之一又云武散官自四品以上皆番上於兵部以遠近爲八番三月以上三千里外者免番輸資如文散官 ○麻牒、考證云狩谷氏曰麻牒蓋謂麻紙牒也一作府牒恐非とあり ○公驗、式部式に凡諸司番上把笏者不與公驗其舍人使部伴部之類皆與公驗其式如左云々とあるな云 ○行善、元亨釋書に傳あり ○遊學云々、靈異記に行善小治田宮御宇天皇之代高麗に學び、遂に大唐に至り養老二年歸朝すとあり、推古天皇より元正天皇までは十一代百餘年を經たり此に七代と書けるは詳ならず ○三五術、三性と五法にて唯識の法相を云、瑜伽解節所說なり ○寧敬、舍本になし ○百濟、原本濟を斉に作る淀本關イ本に據て改む天武紀にも百濟僧道藏と見ゆ ○道藏、元亨釋書に傳あり ○法門領袖、原本袖領に作る曾本淀本に據て改む ○束帛、易賁六五賁于丘園束帛戔々とあり束帛とは字書に五匹爲束とあり五匹の帛を云 ○養老、原本老を孝に作る曾本

淀本に據て改む　〇十屯、曾本淀本十を七に作る　〇終僧身、原本終を給に作る曾本淀本に據て改む　〇紀朝臣麻路、原本朝臣の下に爲臣の二字あり衍なり四年正月紀、天平六年正月紀に據て削る　〇門部王、原本門を內に作る上下の文に據て改む　〇從四位下藤原朝臣　正月壬子紀に下を上に作る　〇左右京大夫、考證云依補任右字疑衍　〇諏方國、舊事紀に須羽國造見ゆ、後信濃に合せたるを此に至て分置せり　天平三年三月廢して復信濃國に併合す　〇始置云々、職員令に左兵衞府醫師一人（右兵衞府准此）とあり、紀文に據れば令條に載する所疑らくは追書せしならむ

（七月）率妻女姉妹、神祇令に凡六月十二月晦日大祓者云々百官男女聚集祓所とあれど此令の女は女官にして妻女姉妹にあらず　〇庚午、類史災異部七に七月庚午大宰府城門災とあり　〇膺靈圖、天下に君たるべき圖讖を受くるを云　〇李釋之敎、李は老子、釋は釋迦なり　〇放鷹司、職員令に主鷹司とあり　〇鷄猪、略記に鷄を鶏に作る　〇品部、職員令主鷹司に鷹戸見え、集解別記を引て鷹養戸十七戸在倭河內津、右經年毎丁役、爲品部免調役とあり、又大膳職に屬する鵜飼江人網引の類皆品部なり　〇公戸、六年三月紀に伊賀國金作部東人云々等合七十一戸雖姓渉雜工而尋要本源元來不預雜戸之色因除其戸並從公戸と見ゆ、公戸とは良民を云　〇大宰府城門災、此の六字類史一七一に據て補ふ　（八月）號爲撿

〇秋七月己酉、始令文武百官、率妻女姉妹、會於六月十二月晦大祓之處。〇壬子、征隼人副將軍從五位下笠朝臣御室、從五位下巨勢朝臣眞人等還歸、斬首獲虜合千四百餘人。〇庚午、詔曰、凡膺靈圖、君臨宇內、仁及動植、恩蒙羽毛、故周孔之風、尤先仁愛、李釋之敎、深禁殺生、宜其放鷹司鷹狗、大膳職鸕鷀、諸國鷄猪、悉放本處、令遂其性、從今而後、如有應須、先奏其狀、待勅、其放鷹司官人、并職長上等且停之、所役品部、並同公戸。〇大宰府城門災。〇八月辛卯、改攝官記事、號爲撿事。〇癸巳、置長門按察使、管周防、石見二國、又以諏方、飛驒、隷美濃按察使、出羽隷陸奥按察、佐渡隷越前按察、隱岐隷出雲按察、備中隷備後按察、紀伊隷大和國守焉。〇九月乙卯、天皇御內安殿、遣使供幣帛於伊勢大神宮、以皇太子女井上王爲齋內親王。

事、四年三月紀に改按察使典號記事に見ゆ　○陸奥按察、紀略には此下に使の字あり下同じ　○大和國、紀略に國の字なし　一九月供幣帛於伊勢大神宮、大日本史注云公事根源以此爲例幣之始云々　○以皇太子女、原本以の上に并の字あり諸本及紀略に據て削る

（十月）唱考、神龜三年二月紀に太政官奏諸選人於官引唱不到者明日引唱云々、とあり、唱考とは考を計て叙位するに就て其名を唱ふるを云　○三位稱卿云々、公式令に凡授位任官之日喚辭三位以上先名後姓四位以下先姓後名以外三位以上直稱姓若右大臣以上稱官名四位先名後姓五位先姓後名六位以下去姓稱名とあり考證に拔此所載與令條所稱於太政官者相似唯三位稱卿稱大夫之異耳　○萬物之生云々、以下不取焉に至る迄は史記漢孝文帝遺詔の文中に見ゆ　○藏寶山北、藏寶山は佐保山なり大和志在添上郡法蓮村北と云北の字は諸本誤て其國其の下郡の上に在りしを此に移す　○雍良岑、大和志に佐保山西北曰雍良岑とあり、上に云る如く藏寶山即ち佐保山にて那羅山の中に屬せり、其北嶺を雍

○冬十月癸未、太政官處分、唱考之日、三位稱卿、四位稱姓、五位先名後姓、自今以去、永爲恒例、○丁亥、太上天皇召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、朕聞、萬物之生、靡不有死、此則天地之理、奚可哀悲、厚葬破業、重服傷生、朕甚不取焉、朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山北雍良岑造竈火葬、莫改他處、謚號稱其國其郡朝庭馭宇天皇、流傳後世、又皇帝攝斷萬機、一同平日、王侯卿相、及文武百官、不得輙離職掌、追從喪車、各守本司視事如恒、其近侍官并五衞府、務加嚴警、周衞伺候、以備不虞、○戊子、令陸奥國分柴田郡二郷、置苅田郡、○庚寅、太上天皇又詔曰、喪事所須、一事以上、准依前勅、勿致闕失、其轜車靈駕之具、不得刻鏤金玉、繪餝丹青、素薄是用、卑謙是順、仍丘體無鑿、就山作竈、芟棘開場、卽爲喪處、又其地者、皆殖常葉之樹、卽立刻字之碑、○戊戌、詔曰、凡家有沈痾、大小不安、卒發事故者、汝卿房前、當

作二内臣一計二會内外一、准レ勅施行、輔二翼帝業一、永寧二國家一、

○十二月癸酉朔戊寅（六）、太上天皇彌留、大二赦天下一、令二都下諸寺轉一レ經焉、○己卯（七）、崩二于平城宮中安殿一、時春秋六十一、遣レ使固二守三關一、○庚辰（八）、從二位長屋王、從三位藤原朝臣武智麻呂等、行二御裝束事一、從三位大伴宿禰旅人供二營陵事一、○乙酉（十三）、太上天皇葬二於大和國添上郡椎山陵一、不レ用二喪儀一、由二遺詔一也、○辛丑（廿九）、地震、太政官奏、授刀寮及五衞府、別設二鉦鼓各一面一、便作二將軍之號令一、以爲二兵士之耳目一、因レ節二進退動靜一、奏可之、薩摩國人希多、隨レ便幷合、是月、新羅貢調使大使一吉飡金乾安、副使薩金飡金弼等來朝、於二筑紫一、緣二太上天皇登遐一、從二大宰一放還、

良岑といひ今の奈良市の北部に當れり　○共國其郡、二の其の字類史に某に作る、某を其に作るの例古書に多し　○各守本司、本の字は諸本及類史に據て補ふ　○務加嚴警、加は原本如に作る類史に據て改む　○周衞、周は諸本固に作る　○令陸奧國分柴田郡二鄕、原本には令陸奧國の四字及二鄕の二字なし紀略に據て補ふ、抄國郡部に陸奧國郡名柴田（之波太）刈田（葛太）とあり今も亦同じ　○一事、宮衞令義解に一事猶二一物一とあり　○轜駕之具、原本轜の下に車の字あり金本閣本淀本に據て削る　○無鑿、鑿は鑿の俗字　○常葉之樹、萬葉六に橘者云々常葉之樹と見ゆ常磐木なり　○刻字之碑、東大寺要錄所載御陵碑文に大倭國御谷郡平城之宮馭岑八側太上天皇之陵是其所也養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉撥十三日乙酉葬とあり、文中御谷は添上、馭岑は馭宇、八側は八洲、撥は朔にて傳寫の誤、古京遺文に刻字碑今在二奈良坂春日神社前一石高三尺濶二尺餘厚一尺文字剝落不レ可レ讀僅存二界行一耳と云　○卒發事故者、者の字は金本閣本及類史に據て補ふ

（（十二月））彌留、尙書に出づ既（一五一頁）に云り　○己卯崩、水鏡扶桑略記帝王編年記一代要記並四日崩とす　○中安殿、此に始て見ゆ中央に位するによりて名づけしなるべし　○六十一、類史十の下に有の字あり　○固守三關、大日本史注に案後世國有二大喪一必固二三關一蓋昉二于此一と云　○行御裝束事、裝束司なり　○供營陵事、山作司なり　○天皇葬、葬の字太上の上にあるべし　○大和、類史大倭に作る　○椎山陵、諸陵式に奈保山東陵平城宮御宇元明天皇在二大和國添上郡一大和

志に在二法華寺村北一呼曰二大奈邊一とあり今奈良市大字奈良坂町なり椎は原本推に作る諸本及類史に據て改む松下見林は式に據に椎は縮字の誤かと云

○不用喪儀、御歷代の御喪儀によらず簡略にせられしを云原本不を右に作る閣イ本曾本及類史紀略に據て改む

○號令、原本令を合に作る淀本に據て改む

○因節進退、因の字は金本閣本等に據て補ふ

○人希多、多の上恐くは地の字を脫す

○是月、原本月を日に作る閣本曾本淀本及紀略に據て改む

○蔭金食、狩谷校本に金字衍さ云り

續日本紀卷第八

【養老六年】不天、左傳宣十二年の注に不天不爲天所祐とあり ○奄丁凶酷、太上天皇の崩御に遭ひ奉るを云 ○蓼莪、毛詩小雅谷風之什に蓼々者莪、匪莪伊蒿、哀哀父母、生我劬勞とあるに據れり ○顧復、同じく谷風之什に父兮生我、母兮鞠我云々、長我育我顧我復我とあるに據れり 鄭氏箋に顧旋視也復反復也とあり父母の子を深く愛するを云 ○誣告謀反、唐の闘訟律に諸誣告謀反及大逆者斬とあり ○指斥乘輿、職制律に指斥乘輿情理切害者斬、注に謂言議乘輿原情及理俱有切害者とあり字書に指斥は指而言之也と注せり ○庚申、壬戌の上に移すべし十八日なり ○廣湍王、天武紀十三年二月廣瀬王に作る和銅元年三月大藏卿となる

（二月）壬申朔、原本朔の字なし例に依り補ふ ○佐渡郡、民部式佐夜に

續日本紀卷第九

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起養老六年正月盡神龜三年十二月

日本根子高瑞淨足姬天皇　元正天皇

六年春正月癸卯朔、天皇不受朝、詔曰、朕以不天、奄丁凶酷、嬰蓼莪之巨痛、懷顧復之深慈、悲慕纏心、不忍賀正、宜朝廷禮儀皆悉停之、○壬戌、正四位上多治比眞人三宅麻呂坐誣告謀反、正五位上穗積朝臣老指斥乘輿、並處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆嶋、老於佐渡嶋、○庚申、西方雷、○庚午、散位正四位下廣湍王卒、

○二月壬申朔、以正四位下安倍朝臣廣庭參議朝政、○丁亥、割遠江國

作り萬葉、倭名抄、拾芥抄並に佐野に作る
○山名郡、抄國郡部遠江國山名郡(也末奈)とあり
○詔曰云々、此詔又亨祿本三代格第十八に載す但二月廿二日に係く、勅兵部卿從四位上阿倍朝臣首名等奏狀偁得左衞士府督正五位下大伴宿禰牛飼右衞士府督正五位下日下部宿禰老等解偁とあり
○廿七日、七の字は金本閣本淀本に據て補ふ
○偶語、漢書張良傳に見ゆ字書に偶は對也とあり相對して語るを云
○白首歸鄕、白首は白髮なり壯年にして役に赴き白髮となりて鄕里に歸るを云
○艱苦、原本艱を報に作る狩谷校本報一作艱とあるに據て改む
○懷土、原本土を士に作る諸本に據て改む
○三周相替、衞士は三年毎に交替せしむるを云
○無忘寢膳、原本忘を忌に作る淀本に據て改む
○向隅、漢書刑法志に滿堂而飮酒有一人鄕隅而悲泣則一堂爲之不樂とあるに取れり　○限三載云々、兵部式に衞士相替三年爲限とあるを云　○與替、原本與を爲に作る諸本に據て改む　○定價、關市令に詳なり　○用二百錢云々、五年正月銀一兩を以て一百錢に當てしが更に二百錢を用て銀一兩に當ることに定め

佐益郡八鄕、始置山名郡。○甲午、詔曰、去養老五年三月廿七日、兵部卿從四位上阿倍朝臣首名等奏言、諸府衞士往々偶語、逃亡難禁、所以然者、壯年赴役、白首歸鄕、艱苦彌深、遂陷踈網、望令三周相替、以慰懷土之心、朕君有天下、八載於今、思濟黎元、無忘寢膳、向隅之怨、在余一人、自今以後、諸衞士仕丁、便減役年之數、以慰人子之懷、其限三載、以爲一番、依式與替、莫令留滯。○戊戌、詔曰、市頭交易、元來定價、比日以後、多不如法、因茲本源欲斷、則有廢業之家、末流無禁、則有奸非之侶、更量用錢之便宜、欲得百姓之潤利、其用二百錢、當一兩銀、仍買物貴賤、價錢多少、隨時平章、永爲恒式、如有違者、職事官主典已上、除却當年考勞、自餘不論蔭贖、決杖六十。賜正六位上矢集宿禰虫麻呂田五町、從六位下陽胡史眞身四町、從七位上大倭忌寸小東人四町、從七位下鹽屋連吉麻呂五町、正八位下百濟人成四町、並以選律令功也。又賜諸有學術者廿三人田各有數。

られしなり　○矢集宿禰云々、天平寳字元年十二月太政官奏曰云々　五人並執刀筆删定科條成功雖多事非匡難比挍下同下毛野朝臣古麻呂依令下功合傳其子とあり　○小東人、寳字元年十二月紀長岡に作る小東人を後に長岡と改めしなるべし　○吉麻呂、原本吉を士に作り閣本淀本等士々に作る前後の例に據て改む類史は古に作る　○並以選律令功也、原本並を始に作る　類史に據て改む弘仁格序に爰逮文武天皇大寳元年贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等奉勅撰律六卷令十一卷養老二年復同大臣不比等奉勅更撰律令各爲十卷今行于世律令是也と見ゆ

（三月）忍海漢人、原本海の字なし下文に據て補ふ大和國忍海郡あり是に由ある氏なり
○飽波漢人、大和國平群郡飽波鄕あり是に由ある氏なり
○韓鍛冶、神護景雲二年二月紀に讃岐國寒川郡人韓鐵師毗登毛人韓鐵師牛養見え、應神記に百濟照古王手人韓鍛冶名卓素を貢すと見ゆ韓鍛冶は歸化人なれば韓と云て倭鍛冶に區別せるなり
○忍海部乎太須、神護景雲三年六月紀に備前國藤野郡人忍海部興志見え錄河内皇別に忍海部見ゆ、乎は諸本に據て補ふ
○弓削部、天平勝寳四年二月紀に見ゆ
○鐙作、即ち甲作なり靈龜一年九月紀に出づ
○公戸、頁民を云
（四月）權補、權は原本攡に作る狩谷校本に據て改む

○三月壬寅朔、日有蝕之、○戊申、以正四位下阿倍朝臣廣庭、知河内和泉事、○辛亥、伊賀國金作部東人、伊勢國金作部牟良、忍海漢人安得、近江國飽波漢人伊太須、韓鍛冶百嶋、忍海部乎太須、丹波國韓鍛冶首法麻呂、弓削部名麻呂、播磨國忍海漢人麻呂、韓鍛冶百依、紀伊國韓鍛冶杭田、鎧作名床等、合七十一戸、雖姓渉雜工、而尋要本源、元來不預雜戸之色、因除其號、並從公戸、○夏四月丙戌、征討陸奥蝦夷大隅薩摩隼人等將軍已下、及有功蝦夷、幷譯語人、授勳位各有差、始制、大宰管内大隅、薩摩、多褹、壹岐、對馬等司有闕、選府官人權補之、○庚寅、詔曰、周防國前守從五位上山田史御方、監臨犯盜、理合除免、先經恩降、赦罪已訖、然依法備贓、家無尺布、朕念、御方負笈遠方、遊學蕃國、歸朝之後、傳授生徒、而文館學士、頗解屬文、誠以不矜若人、蓋墮斯道歟、宜特加恩寵、勿使

○監臨犯盜、己が管理せる物を盜むを云、原本監を覽に作る考證に據て改む　○理合、合は原本令に作る狩谷校本に據て改む　○除免、除名免官なり　○遊學蕃國、持統紀六年新羅に學びしこと見ゆ　○蓋隨斯道歟、蓋の字は金本閣本等に據て補ふ　○特加、原本特を持に作る金本淀本に據て改む

○(閏四月)聖王立制云々、潛夫論に先聖制法亦務實邊蓋以安中國也とあるに取れり實邊は邊郡を充實するを云　○浸免、原本浸を侵に作る金本淀本に據て改む　○更稅、字書に更は戍卒也とあり卒に課する稅の意なるべし　○濶、原本潤に作る曾本に據て改む　○防閤、三年十二月紀に見ゆ　○以六年爲叙、選叙令に叙舍人史生云々並以八

徵贓焉、○辛卯(廿一)、詔曰、朕遐想千載、旁覽九流、詳思布政之方、莫先仁恕之典、故振恤之惠、無隔遐方、撫育之仁、普覃寓內、今者有司奏言、諸國罪人惣四十一人、准法並當流已上者、每聞此奏、朕甚愍之、萬方有辜、在余一人、宜所奏罪人、並從坐者、咸皆放免、勿案撿焉、唐人王元仲始造飛舟進之、天皇嘉歎、授從五位下、辛卯、主稅寮加史生二人、通前六員、

○九流、漢書藝文志に出づ、儒家道家陰陽家法家名家墨家縱橫家雜家農家者流を云、小說家を加へて十家とす　○振恤、漢書文帝紀注に振甚也爲給貸之令其存立也諸振救振贍其義皆同今流俗作字從貝者非也とあり自活することの能ざるものを恤みて其氣力を振ひ起さしむるを云　○萬方云々、尙書湯誥に萬方有罪在予一人とあり　○從坐、閣本曾本淀本從を徒に作る　○飛舟、略記濫觴抄飛車に作る　○辛卯、重出せり削るべし

○閏四月(辛丑朔)乙丑(廿五)、太政官奏曰、廼者、邊郡人民、暴被寇賊、遂適東西、流離分散、若不加矜恤、恐貽後患、是以聖王立制、亦務實邊者、蓋以安中國也、望請、陸奧按察使管內、百姓庸調浸免、勸課農桑、教習射騎、更稅助邊之貲、使擬賜夷之祿、其稅者、每卒一人、輸布長一丈三尺、濶一尺八寸、三丁成端、其國授刀兵衛衛士、及位子帳內資人、幷防閤仕丁采女仕女、如此之類、皆悉放還、各從本色、若有得考者、以六年爲叙、一叙以後、自依外

考二爲一限とあるを今以二六年一爲レ叙とあるは蓋し邊民の爲に此特例を設けて自餘の諸國と同じからざるなるべし
○外考、考にも内外の別ありて外官の考を外考と云
○附後、一本給復に作ると云
○所天、漢書酈食其傳に王者以レ民爲レ天而民以レ食爲レ天とあり
○要政、原本無改に作る要は狩谷校本に、政は諸本に據て改む
○詐作逗留、作は金本旨本淀本に據て補ふ
○收獲、狩谷氏云獲恐穫字之譌
○公私出擧、四年三月紀に出づ
○運輸、天應元年十一月紀に尾張相摸云々等國總十一人以二私力一運二輸軍粮於陸奥一隨二其所レ運多少一加二授位階一と見ゆ
○鎭所、所は原本可に作る狩谷氏說に據て改む鎭所に七年二月紀に陸奥鎭所神龜元年二月紀に獻二私穀於陸奥鎭所一と見ゆ
「五月」津史、天平二年三月紀に津史秋主等卅四

考、卽他境之人、經年居住、准例徵税、以見來占附後一年、而後依例、又食之爲本、是民所天、隨時設策、治國要政、望請、勸農積穀、以備水旱、仍委所司、差發人夫、開墾膏腴之地良田一百萬町、其限役十日、便給粮食、所須調度、官物借之、秋收而後、卽令造備、若有國郡司詐作逗留、不肯開墾、並卽解却、雖經恩赦、不在免限、如部内百姓、荒野閑地、能加功力、收獲雜穀、三千石已上、賜勳六等、一千石以上、終身勿事、見帶八位已上、加勳一轉、卽酬賞之後、稽遲不營、追奪位記、各還本色、又公私出擧、取利十分之三、又言、用兵之要、衣食爲本、鎭無儲粮、何堪固守、募民出穀、運輸鎭所、程道遠近爲差、委輸以遠二千斛、次三千斛、近四千斛、授外從五位下、奏可之、其六位已下、至八位已上、隨程遠近、運穀多少、亦各有差、語具格中、○五月（庚午朔）己卯（十）、以式部大錄正七位下津史主沼麻呂、爲遣新羅使、○己丑（廿）、賜右大臣長屋王、稻十萬束、籾四百斛、○戊戌（廿九）、遣新羅使津史主沼麻呂等拜朝、○六月（庚子朔）壬寅（三）、始置木工寮史生四員、○秋七月壬申、有客星、見閣道邊、凡五日、○丙子（七）、詔曰、陰陽錯謬、灾旱頻臻、由是奉幣名山、奠祭神祇、甘

雨未降、黎元失業、朕之薄德、致于此歟、百姓何罪、燋萎甚矣、宜大赦天下、令國郡司審錄寃獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒、勤加存撫、自養老六年七月七日昧爽已前、流罪以下、繫囚見徒、咸從原免、其八虐、刼賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜、竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、如以贓入死、並降一等、竊盜一度計贓、三端以下者、入赦限、○己卯、太政官奏言、內典外教、道趣雖異、量才授職、理致同歸、比來僧綱等、既罕都座、縱恣橫行、既難平理、彼此往還、空延時日、尺牘案文、未經決斷、一曹細務、極多擁滯、其僧綱者、智德具足、眞俗棟梁、理義該通、戒業精勤、緇侶以之推讓、素衆由是歸仰、然以居處非一、法務不備、雜事荐臻、終違令條、宜以藥師寺常爲住居、又奏言、垂化設教、資章程以方通、導俗訓人、違彝典而即妨、近在京僧尼、以淺識輕智、巧說罪福之因果、不練戒律、詐誘都裏之衆庶、內黷聖教、外虧皇猷、遂令人之妻子、剃髮刻膚、動稱佛法、輙離室家、無懲綱紀、不顧親夫、或負經捧鉢、乞食於街衢之

人言、船、葛井、津本是一祖、別爲三氏、其二氏若蒙連姓、訖唯秋主等未霑改姓、請改史字、於是賜姓津連と見ゆ

○主沼麻呂、原本主を生に作る諸本に據て改む下同じ、又紀略沼を治に作る

○籾、原本粈に作る金本曾本及類史に據て改む

（七月）閣道、北極紫微垣の圖を按ずるに五帝座の西北に當り奎宿の下に見ゆ

○燋萎、釋文に焦字又作燋とあり燒きこがすを云萎はしぼむなり

○大赦、金本閣本曾本及紀略大の字なし

○掩骼埋胔、禮記月令孟春に出づ、鄭注に謂死氣逆生也骨枯曰骼肉腐曰胔とあり

○禁酒、南史齊武帝永明元年以旱故都下二縣朱方姑孰權斷酒とあるに據れり

○斷屠、北齊書武成帝河清元年詔斷屠殺とあり

○枉法受財、職制律に監臨之官受財而枉法者一尺杖八十、二端加一等、卅端絞とあり枉は原本狂

間、或僞誦邪說、寄身於村邑之中、聚宿爲常、妖訛成群、初似脩道、終挾姧亂、永言其弊、特須禁斷、奏可之、太白晝見、○戊子、十九詔曰、朕以庸虛紹承鴻業、尅己自勉、未達天心、是以今夏無雨、苗稼不登、宜令天下國司、勸課百姓、種樹晚禾蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、○丁酉、廿八太白犯歲星、自五月不雨、至是月、

○八月己亥朔壬子、十四詔曰、如聞、今年少雨、禾稻不熟、其京師及天下諸國、當年田租、並宜免之、○丁卯、廿九令諸國司、簡點柵戶一千人、配陸奧鎭所焉、伊勢、志摩、尾張、參河、遠江、美濃、飛驒、若狹、越前、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、備中、淡路、阿波、讚岐等國司、先是奉使入京、不聽乘驛、至是始聽之、但伊賀、

に作る金本曾本淀本に據て改む枉は卽ち枉字なり

○監臨主守自盜、唐の賊盜律に諸監臨主守自盜及盜所監臨財物者加凡盜二等三十匹絞と見ゆ、非違を監視する職にありながら盜みをするを、監視する其ものを盜むとの二者なり

○内典、佛者は佛經を内典と云

○外敎、儒敎を云

○揆職、職は識の訛かと云　○都座、沙門都統の座卽ち僧綱の座を云　○縱恣、原本恣を盜に作る金本閣本に據て改む　○一曹細務、曹は字書に分職治事之官署曰曹とあり僧綱の事務を云　○擁滯、擁字は壅に作るべきなり　○眞俗、狩谷校本に俗恐侶誤と云　○該通、同書に詠一本作該とあるに據て改む　○緇侶、原本緇を緇に作る諸本に據て改む侶は淀本徒に作る　○素衆、俗人を云素は緇素の素なり　○又奏言云々、三代格に奏文を載せたれど異同あり　○彝典、彝は常也常の法典を云　○在京、原本在を右に作る三代格に據て改む　○剃髮刻膚、元年十月紀に云　○無懲、狩谷校本に懲疑徵と云　○寄身、原本身を法に作る淀本に據て改む金本曾本身を落に作る　○庸虛、原本庸を膚に作る考證に據て改む庸虛は平凡にして拙きを云謙遜の辭　○尅己、尅は克の俗字、論語顏淵篇に克己復禮とあるに出づ　○未達天心、未だ天の心に合はざるを云　○晚禾、晚稻なり抄稱穀部に晚稻（於久天）と見ゆ　○蕎麥、承和六年七月廿一日格に蕎麥之爲物也不擇土沃瘠生熟有繁茂孟秋始播季秋乃收稻粱之外能足療飢とあり抄稱穀部に蕎麥和名曾波牟岐一名久呂無木）と見ゆ　○大小麥、養老七年八月廿八日の格に詳なり　○太白、抄天部に長庚、兼名苑云太白星一名長庚暮見於西方爲長庚（此間云由不豆々）とあり俗にいふ夕の明星なり　○歲星、木星なり

（八月）先是奉使入京云々、公式令に凡朝集使云々西海道皆乘驛馬自餘各乘當國馬、義解に謂員乘民間准折雜徭卽以一日馬力折一日人徭也とあり、考證に家雜式凡國司不乘驛馬但由稅入帳朝集使等乘驛馬與此及令所載不同と云り、

近江、丹波、紀伊、四國、不レ在二茲限一、○九月庚寅、令三伊賀、伊勢、尾張、近江、越前、丹波、播磨、紀伊等國、始輸二錢調一、○冬十一月甲戌、始置二女醫博士一、○丙戌、詔曰、朕精誠弗レ感、穆卜罔レ從、降二禍彼蒼一、閔凶遄及、太上天皇、奄弃二普天一、誠冀、北辰合レ度、永庇二生靈一、南山協レ期、常承二定省一、何圖、一旦厭レ宰二萬方一、白雲在レ馭、玄猷遂遠、瞻二奉寶鏡一、痛酷之情纏レ懷、敬事二衣冠一、終身之憂永結、然光陰不レ駐、儵忽及レ期、汎愛之恩、欲レ報無レ由、不レ仰二眞風一、何助二冥路一、故奉三爲太上天皇一、敬寫二花嚴經八十卷、大集經六十卷、涅槃經四十卷、大菩薩藏經廿卷、觀世音經二百卷一、造二灌頂幡八首、道場幡一千首、著レ牙漆几卅六、銅鋺器一百六十八、柳箱八十二一、即從二十二月七日一、於二京幷畿內諸寺一、便屈二請僧尼二千六百三十八人一、設二齋供一也、

乘驛の乘は諸本置に作る　（九月）錢調、主計式に凡左右京五畿內國調一丁輸レ錢隨レ時增減云々と　（十一月）冬、原本なし例に據て補ふ　○女醫博士、醫疾令に女醫取二官戶婢年十五以上廿五以下性識慧了者卅人一別所安置教以二安胎產難及創腫傷折針灸之法一皆案レ文口授每レ月醫博士試年終內藥司試限二七年一成と見ゆ　○穆卜、尙書金縢に出づ周既に商を討て二年成王疾あり太公召公王の爲に穆みて（傳に穆は敬也とあり）卜せむといひしに周公壇を作り璧と珪とを秉りて太王王季文王に告て三龜に卜せしに吉なりと見えたるを云　○罔從、原本囚徙に作るは意通ぜず龜卜從ふことなしとの意なれば狩谷校本の說に據て改む　○彼蒼、毛詩秦風に彼蒼者天、殲二我良人一とあり疏に彼蒼々者是在上之天、今穆公盡殺我善人一也と云り　○閔凶、左傳宣十二年に楚少宰如二晉師一曰寡君少遭二閔凶一不レ能レ文とあるに據れり注に閔は憂也とあり父母の喪を云　○奄弃普天　弃は原本寄に作り諸本寄に作る狩谷校本に寄奇恐弃と云るに據て改む普天は天下と云に同じ　○北辰合度、北辰は論語に出づ　○南山協期、尙書小雅に南山有レ臺云々樂只君子萬年無レ期とあるに據れり　○常承定省、原本遠承常定旨に作り金本閣本等遠常承定旨に作る遠は衍にて旨は省の誤なること狩谷校本の說の如し、之に據て改む定省は曲禮に昏定而晨省とあり朝夕に父母の機嫌を窺ふを云太上天皇南山の壽を保たせ給ひ常に定省せむと思食しゝを云　○一旦、原本且に作る閣本に據て改む　○白雲在馭、白雲は莊子天地篇に乘二彼白雲一遊二于帝鄕一とあるを取れり崩御し給るを云　○終身之憂永結、父母の喪は終身の憂なれば永く結ぶと云　○儵忽及期、原本及を忘に作り諸本忽を及に作る今考證に儵忽及期之譌と云るに據て改む及期は一週

忌に至るを云　○眞風、佛敎を指せり　○冥路、原本冥を實に作る狩谷校本に實一作冥とあるに據て改む　○破寫、破は諸本及紀略に據て補ふ
○花嚴經、開元釋敎錄に大方廣佛華嚴經五十卷云々又八十卷、唐于闐三藏實叉難陀譯とあり　○大集經、釋敎錄に大方等大集經三十卷とあり、こゝの六十卷とあると合はず　○涅槃經、大涅槃經四十卷北凉天竺三藏曇無讖於姑臧譯とあり　○大菩薩藏經、唐三藏玄奘大菩薩藏經二十卷　○觀世音經二百卷、釋敎目錄支派別行錄に觀世音經一卷考證に按此及天武朱鳥元年八月紀云二百卷蓋謂二百部也とあり　○灌頂幡、考證に大安寺流記資財帳に秘錦大灌頂一具右平城宮御宇天皇以養老六年歲次壬戌十二月七日納賜者卽此、又法隆寺資財帳にも見ゆと云　○銅鋺器、和名抄、日本靈異記云其器皆鋺等云賀奈萬利鋺字所出未詳古語謂椀爲鋺利宜用金椀二字也と考證に云　○十二月七日、元明天皇一周の忌辰なり　○並識內原本並を寺に作る紀略に據て改む　○營供、原本供を法に作る紀略に據て改む

（十二月）其本願、本の字は紀略に據て補ふ
○金泥、白孔六帖梁武帝于元光殿坐師子座講金字經とあり金泥とは金粉を膠にて溶かしたるものを云
○主治麻呂、原本主治を生沼に作る主は金本閣本曾本等に據り治は紀略に據て改む
【養老七年】中宮、神龜元年正月及四年二月十月十一月等の紀にも見ゆ、中安殿、中宮安殿、中宮院など皆一つ殿にて後世の中宮とは自ら異なり
○六人部王、五年正月紀に據て六の上に從四位上の四字を補ふべし
○道足、一に道足に作る

○十二月戊戌朔庚戌（十三）、勅奉爲淨御原宮御宇（天武）天皇、造彌勒像、藤原宮御宇太上天皇（持統）釋迦像、其本願緣記、寫以金泥、安置佛殿焉、○庚申（廿三）、遣新羅使津史主治麻呂等還歸、

七年（癸亥）春正月丁卯朔丙子（十）、天皇御中宮、授從三位多治比眞人池守正三位、正四位下阿倍朝臣廣庭正四位上、六人部王正四位下、從四位下大石王從四位上、无位粟栖王、三嶋王、春日王並從四位下、正五位下葛木王正五位上、无位志努太王從五位下、從四位上阿倍朝臣首名、石川朝臣石足、百濟王南典並正四位下、正五位上大伴宿禰通足、紀朝臣男人並從四位下、正五位下阿倍朝臣船守、從五位上調連淡海、並正五位上、從五位上鴨朝臣堅麻呂正五位下、從五位下引田朝臣眞

人、路眞人麻呂、紀朝臣清人、大伴宿禰祖父麻呂、土師宿禰豐麻呂、津守連通、並從五位上、正六位上引田朝臣秋庭、河邊朝臣智麻呂、紀朝臣猪養、波多眞人足嶋、阿曇宿禰坂持、布勢朝臣國足、息長眞人麻呂、角朝臣家主、高橋朝臣嶋主、平群朝臣豐麻呂、石川朝臣樽、中臣朝臣廣見、石川朝臣麻呂、余仁軍、正六位下船連大魚、河內忌寸人足、丸連男事、志我閇連阿彌太、越知直廣江、堅部使主石前、高金藏、高志連惠我麻呂、並從五位下、又授夫人藤原朝臣宮子從二位、日下女王、廣背女王、粟田女王、六人部女王、星河女王、海上女王、智努女王、葛野女王、並從四位下、他田舍人直刀自賣正五位上、大宅朝臣諸姉、薩妙觀、並從五位上、大春日朝臣家主從五位下、○壬午、饗四位已下主典已上於中宮、

○二月丙申朔丁酉、勅、遣僧滿誓俗名從四位上笠朝臣麻呂於筑紫、令造觀世音寺、○戊申、常

○坂持、類史板持に作る　○角朝臣、角或は都努に作る錄左京皇別に角朝臣は紀朝臣同祖、紀角宿禰の後とあり　○平群朝臣、原本群を郡に作る金本閣本等に據て改む　○余仁軍、藤原武智麻呂傳に兒禁有余仁軍韓國連廣足ことと見ゆ　○正六位下船連大魚、大魚以下の人々皆正六位上と書くべきを正六位下とせるは誤なり　○人足、原本足を忌に作る五年正月紀に據て改む　○丸連、天平十八年四月癸卯紀に中臣丸連張弓あり此と同姓か、金本曾本凡連に作る　○志我閇連、詳ならず　○高志連、原本志を忠に作る狩谷校本に據て改む　○藤原朝臣、原本藤原を土左に作る紀略に據て改む　○廣背女王、神護元年十月庚辰紀に從三位廣瀬女王薨二品那我親王之女とあり　○葛野女王、王の字は類史に據て補ふ　○他田舍人、狩谷氏は天平勝寶元年四月紀有他田舍人部常世神護景雲二年六月紀有信濃國伊奈郡人他田舍人千世賣類聚國史天皇遊獵部有他田舍人足主云々と云り錄和泉皇別他田[illegible]臣同祖とあると同姓か詳ならず　○直刀自賣、原本刀を力に作る諸本に據て改む　○薩妙觀、神龜元年五月紀に河上忌寸の姓を賜はる持統紀に薩弘恪見ゆ同姓なるべし

（二月）遣僧滿誓、原本遣を勅に作る曾本淀本及

陸國那賀郡大領外正七位上宇治部直荒山、以私穀三千斛、獻陸奧國鎭所、授外從五位下。○己酉、詔曰、乾坤持施、燾載之德以深、皇王至公、亭毒之仁斯廣、然則居南面者、必代天而闡化、儀北辰者、亦順時以涵育、是以、朕巡京城、遙望郊野、芳春仲月、草木滋榮、東候始啓、丁壯就隴畝之勉、時雨漸澍、蟄蠢有浴灌之悅、何不流寛仁以安黎元、布淳化而濟萬物乎、宜給戶頭百姓種子各二斛、布一常、鍬一口、令農蠶之家、永無失業、宦學之徒、專忘私。○戊午、始築矢田池。○癸亥、但馬國人寺人小君等五人、改賜道守臣姓。

○三月己卯、散位從四位下佐伯宿禰麻呂卒。○戊子、常陸國信太郡人

類聚紀略に據て改む ○注に名云々、此人出家入道のこと五年五月紀に出づ ○宇治部直、宇の字諸本に據て補ふ 錄河内神別に宇治部連饒速日命六世孫伊香我色乎命之後也とあり天平二十年正月紀に常陸國那賀郡大領宇治部全成また萬葉二十に武藏國豐島郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黑女見ゆ皆同姓ならむ ○授外從五位下、六年閏四月募民出穀運輸鎭所云々とあるによりて敍位せられしなり ○乾坤持施、山崎校本に持を特に作るとあり中庸に無不持載とあれば持にて通ず持は地の德、施は天の德なり ○燾載之德、原本燾を壽に作る 淀本に據て改む、燾は幬に同じ中庸に辟如天地之無不持載無不覆幬とあり爾雅に幬謂之帳とあれば幬も覆ふ意にて覆幬は天の德持載は地の德なり ○亭毒之仁、老子に亭之毒之、注に亭謂品其形毒謂成其質言化育之也とあり帝王化育の德を云 ○儀北辰者、北辰は帝位を云、儀は字書に宜也とあり 帝位におりて其宜しきを得しむるを云 ○東候始啓、春の氣候の到來するを云 ○丁壯、原本丁收に作る狩谷校本に當作丁壯とあるに據て改む、丁壯は壯丁と云に同じ ○蟄蠢有浴灌之悅、原本有は浴の上にあり金本閣本にはなし考證に據て移替たり 蟄蠢時雨に浴して悅ふを云 ○淳化、原本涼化に作る狩谷校本に據て改む ○宦學、原本宜學に作る狩谷校本に宜當作宦とあるに據て改む、曲禮上に宦學事師非禮不親と見え字書に宦は仕也宦學は謂出游求學也とあり ○專忘私、考證云專下當係增字金本閣本等忘を忌に作る ○矢田池、大和志に在添上郡矢田村今呼雙池廣三百餘畝とあり今添上郡田原村大字矢田原なるべし ○道守臣、錄右京皇別下に道守臣は豐葉頰別命の後とあり

○三月　佐伯宿禰麻呂卒、文武紀四年五月遣新

羅大使、和銅元年三月備後守となる

○信太連、延暦五年十月紀に常陸國信太郡大領物部志太連大成見ゆ同姓なり

（四月）案故案故事、原大案故々事に作る諸本に據て改む、狩谷校本に云るが如く案故の二字は衍なるべし

○兵役以後云々、老子に師之所處荊棘生焉大軍之後必有凶年とあり

○開闢田疇云々、六年閏四月紀、天平十五年五月紀を併せ見るべし

（五月）酋卒、原本卒を師に作る金本に據て改む卒は率なり

（七月）太朝臣安麻呂、原本安を案に作る金本淀本に據て改む、安麻呂は慶雲元年正月紀に初見、品治の子ならむと云

（八月）違制、原本違を建に作る、建恐違と狩谷氏の云に據て改む

○彩綾著裏、彈正式に凡綾者聽用五位已上朝服六位以下不得服用

○輕羅、同式に凡除禮服幷参議已上半臂五位已上幞頭之外不得著羅

物部國依、改賜信太連姓。○夏四月壬寅、大宰府言、日向、大隅、薩摩三國、士卒、征討隼賊、頻遭軍役、兼年穀不登、交迫飢寒、謹案故事、兵役以後、時有飢疫、望降天恩、給復三年、許之。○辛亥、太政官奏、頃者、百姓漸多、田池窄狹、望請、勸課天下、開闢田疇、其有新造溝池、營開墾者、不限多少、給傳三世、若逐舊溝池、給其一身、奏可之。○五月癸酉、行幸芳野宮。○丁丑、車駕還宮。○己卯、制、神戸當造籍帳、戸无增減、依本爲定、若有增益即減之、死損即加之。○辛巳、大隅薩摩二國隼人等六百二十四人朝貢。○甲申、賜饗於隼人、各奏其風俗歌舞、酋卒三十四人、叙位賜祿、各有差。○六月庚子、隼人歸鄕。○秋七月庚午、民部卿從四位下太朝臣安麻呂卒。○八月甲午、太政官處分、朝廷儀式、衣冠形制、彈正式部摠知糺彈、若其存意督察、自然合禮、頃者、文武官人、雜任以上、衣冠違制、進退緩惰、或彩綾著裏、輕羅致表、或冠纓長垂、過越接領、或領曲細綾、露其脊節、或袴口所括、出其脛踝、如此之徒、其類稍多、臺省二司、明加告示。○庚子、新羅使韓奈麻金貞宿、副使韓奈麻昔楊節等一十五人來貢。○辛丑、宴金

貞宿等於朝堂、賜射幷奏諸方樂。○辛亥、加置因幡國驛四處。○丁巳、新羅使歸蕃。

○九月辛未、熒惑入太微左執法中。○己卯、出羽國司正六位上多治比眞人家主言、蝦夷等惣五十二人、功効已顯、酬賞未霑。仰頭引領、久望天恩。伏惟、芳餌之末、必繫深淵之魚、重祿之下、必致忠節之臣。今夷狄愚闇、始趁奔命。久不撫慰、恐二解散。仍具狀請裁。有勅、隨彼勳績、並加賞爵。○冬十月庚子、勅、按察使所治之國、補博士醫師、自餘國博士並停之。○癸卯、左京人无位紀朝臣家獻白龜。長一寸半、廣一寸、兩眼並赤。○己酉、造危村橋。○乙卯、詔曰、今年九月七日、得左京人紀家所獻白龜。仍下所司、勘撿圖諜、奏偁、孝經援神契曰、天子孝、則天龍降、地龜出。熊氏瑞應圖曰、王者不偏不黨、尊用耆老、不失故舊、德澤流洽、則靈龜出。是知、天地、

こあり ○長垂、原本垂を乘に作る金本閣本曾本に據て改む ○領冊、考證に爵領に作るべしと云 ○露其曾節、和銅五年十二月制經之相尚其夜行趍之時易開知此之服大成無禮云々と見ゆ ○韓奈麻、原本韓を朝に作る紀略に據て改む 天武紀二年(紀下一六七頁)に韓奈末金池山と見ゆる韓奈末に同じ ○金貞宿、原本貞を奥に作る下文及紀略に據て改む ○因幡國驛、兵部式に因幡國驛馬、山埼、佐尉、敷見、柏尾、各八疋と見ゆ四驛なれば加置と云には合はず

(九月)熒惑、火星也、災星と云 ○太微、原本微を徵に作る金本閣本曾本等に據て改む、太微は三才圖會に太微垣十星在翼軫之北天子之宮庭五帝之座十二諸侯之府也と見え左執法は太微垣の南方右執法の左にあり廷尉の象也と云 ○芳餌云々、三略に香餌之下必有懸魚、重賞之下必有勇夫とあるに出づ、原本末を來に作る曾本に據て改む ○恐二、二疑亦字之譌と考證に云り

(十月)博士醫師、神龜五年八月紀を併見るべし ○癸卯、考證に案下文詔曰今年九月七日云々、神龜元年二月宣命亦云去年九月天地貺大瑞物顯來卯

靈貺國家大瑞、寔謂、以朕不德、致此顯貺、宜共親王諸王、公卿大夫、百寮在位同慶斯瑞、仍曲赦出龜郡、免今年租調、親王及京官主典已上、左右大舍人、授刀舍人、左右兵衞、東宮舍人、賜祿有差、紀朝臣家、授從六位上、賜絁二十疋、綿四十屯、布八十端、稻二千束、大倭國造大倭忌寸五百足、絁十疋、綿一百屯、布二十端、○十一月癸亥、令天下諸國奴婢口分田、授十二年已上者、○丁丑、下總國香取郡、常陸國鹿嶋郡、紀伊國名草郡等少領已上、聽連任三等已上親、○戊子、夜、月犯房星、○十二月丁酉、放官婢花、從良賜高市姓、○辛亥、散位從四位下山前王卒、

神龜元年(甲子)春正月壬戌朔、廢朝、雨也、○癸亥、天皇御大極殿受朝、○戊辰、御中宮宴五位已上、賜祿有差、○戊子、出雲國造外從七位下出雲臣廣

云々、並與此不合未詳と云り癸卯は十一日なり　○紀朝臣家、略記家の下に稗の字あり下同じ　○獻白龜、略記に於大和國白髮池得白龜長一寸半廣一寸兩眼並赤貢之と見え編年記にも見ゆ　○廣一寸、原本寸の下に半の字あり紀略及略記に據て削る　○危村橋、倭名抄大和國添上郡山村郷の下に此文を引て危村(ヤマムラ)橋と傍訓せり然らば今の奈良市の南郊帶解村邊なり　○闘諜、諜は字林通作牒、廣韻諜諜也とあり　○孝經援神契、隋書經籍志に孝經援神契七卷宋均注と云　○能氏瑞應圖、唐書藝文志に熊理瑞應圖讃三卷と見えたり　○諸王、王の字は紀略に據て補ふ　○賜絁廿疋、賜の字は略記に據て補ふ　○稻二千束、金本閣本等千を十に作る　(十一月)口分田、田令に凡給口分田者男二段女減三分之一五年以下不給、又云官戸奴婢口分田與良人同　○下總國云々、選敍令集解に是日太政官處分、伊勢國渡相郡、竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑前國宗形郡、常陸國鹿島郡、下總國香取郡、紀伊國名草郡、合八神郡、聽連任三等以上親也とあり、之に據れば伊勢安房出雲等の神郡を脱せり　○房星、二十八宿の一、房一名天厩、天駟、天馬と云、北極の東方に位す　(十二月)高市姓、所在の地名によれる姓なるべし錄右京神別に高市連、和泉神別に高市縣主見え、天津彦根命の後也とは異同詳ならず　○山前王、懷風藻に從四位下刑部卿山前王詩一首を載す

【神龜元年】中宮、上に出づ、考證に或曰南至建禮門北至朔平門以内稱之中宮、宮衞令凡應入宮閤門者云々とあり

嶋奏神賀辭。○己丑、廣嶋及祝神部等、授位賜祿各有差。○二月甲午、天皇禪位於皇太子。

天璽國押開豐櫻彦天皇　勝寶感神聖武皇帝

天璽國押開豐櫻彦天皇、（諱案、勝寶八歲勅曰、太上天皇出家歸佛、更不奉諡、至寶字二年勅追上此號諡。）天之眞宗豐祖父天皇之皇子也。母曰藤原夫人、贈太政大臣不比等之女也。和銅七年六月、立爲皇太子、于時年十四。○二月甲午、受禪卽位於大極殿、大赦天下、詔曰、現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止勅大命乎、諸王、諸臣、百官人等、天下公民、衆聞食宣。高天原爾神留坐皇親神魯岐神魯美命、吾孫將知食國天下止、與佐斯奉志麻爾麻爾、高天原爾事波自米而、四方食國天下乃政乎、彌高彌廣爾、天日嗣止高御座爾坐而、大八嶋國所知倭根子天皇乃大命爾坐詔久、此食國天下者、掛畏岐藤原宮爾天下所知、美麻斯乃父止坐天皇乃、美麻斯爾賜志、天下之業止、詔大命乎、聞食恐美受賜、懼理坐事乎、衆聞食宣。可久賜時爾、美麻斯親王乃齡乃

【聖武天皇紀】

○天璽國押開豐櫻彦天皇、一代要記歷代皇紀並云天皇諱豐櫻彦、皇胤紹運錄云諱首、皇年代略記如是院年代記同、家豐櫻彦天平寶字二年八月所追上諡號歟、以諱首爲正、一代要記皇紀恐誤、内藤氏曰寶龜元年九月紀云去天平勝寶九歲改首史姓並爲毗登、蓋避天皇諱也と考證に云り

○（注）八歲、原本七歲に作る天平勝寶八歲五月紀に據て改む

○藤原夫人、不比等の女宮子娘、文武天皇丁酉年八月立爲夫人と見ゆ、大寶元年紀云是年夫人藤原氏誕皇子也云々とあるは則此天皇を生ませ給へるなり

○年十四、紹運錄に二十四とあり

（二月）諸王、解に親王も雜れり、王臣と云時も

王に親王は籠れり、おほきみと云は天皇を始め奉りて親王諸王にわたれる號なればなりとあり、狩谷氏は恐脫二親王二字一と云り此說穩當なるべし
○皇親神魯岐云々、天皇の遠御祖の神と申す意、ムツは睦にて親しみ深きを云睦び給ふ御祖の男神女神と申す義にて天照大御神と高皇產靈神とを申奉るなり
○吾孫、眞淵翁孫の下に命の字を脫すと云れたり代々の天皇を申奉れり
○與佐斯奉、神代紀に勅任(コトヨザシ)と書ける文字の如く國土人民をしろしめすことを寄せ授け給ふを云
○高天原爾事波自米而、高天原に於て皇孫を天都高御座にまさしめて天下を授奉らせ給ひしを云、原本米を末に誤れるを訂せり
○彌高彌廣爾、天下を彌高に彌廣に知食す意、高は御稜威のいよいよ高く、廣は御恩惠のいよいよ廣き由なり
○倭根子天皇、始めなるは聖武天皇、こゝは元正

弱爾、荷重波不堪自加止、所念坐而、皇祖母坐志志、掛畏岐我皇天皇爾授奉岐、依此而是平城大宮爾、現御神止坐而、大八嶋國所知而、靈龜元年爾、此乃天日嗣高御座之業食國天下之政乎、朕爾授賜讓賜而、教賜詔賜都良久、挂畏淡海大津宮御宇倭根子天皇乃、萬世爾不改常典止、立賜敷賜閇留隨法、後遂者我子爾、佐太加爾牟俱佐加爾、無過事授賜止、負賜詔賜比志爾依弖、今授賜牟止所念坐間爾、去年九月、天地貺大瑞物顯來理、又四方食國乃年實豐爾、牟俱佐加爾、得在止見賜而、隨神母所念行爾、于都斯久母、皇朕賀御世當、顯見留物爾者不在、今將嗣坐御世名乎記而、應來顯來留物爾在良志止所念坐而、今神龜二字御世乃年名止定氐、改養老八年、爲神龜元年而、天日嗣高御座食國天下之業乎、吾子美麻斯王爾、授賜讓賜止詔天皇大命乎、頂受賜恐美持而辭啓者、天皇大命恐、被賜仕奉者、拙久劣而無所知、進母不知、退母不知、天地之心母勞久重、百官之情母辱愧美奈母、隨神所念坐、故親王等始而王臣汝等、清支明支正支直支心以、皇朝乎穴奈比扶奉而、天下公民乎奏賜止詔命、

天皇を申せり
○此食國云々 これより元正天皇の聖武天皇に詔給へる大御詞なり
○藤原宮爾云々、父止坐天皇は文武天皇、美麻斯は汝にて聖武天皇を指して詔給ふなり
○美麻斯爾賜志云々、此事紀には見えざれど文武天皇にては聖武天皇の外御子坐されば此天皇の皇位を繼給ふべきは當然の事なれば斯く詔るなるべし
○詔大命乎云々、元正天皇の詔を聖武天皇の恐み承り坐す由なり
○可久賜時爾云々、こゝは又元正天皇の大命の續きにて上の美麻斯爾賜志とあるを受てかく賜へる時と詔ふなり
○齡乃弱爾云々、弱は幼きにて文武天皇崩御の時未だ七歲に坐せればかくは申せり
○備重波、天下を治め給ふは重大なる事なればかく詔給へり
○所念坐而、文武天皇のなり
○皇祖母、オホミオヤと訓むべし文武天皇の大御母といふ義にて元明天皇

衆聞食宣。辭別詔久、遠皇祖御世始而、中今爾至麻氏、天日嗣止高御座爾坐而、此食國天下乎撫賜慈賜波久波、時時狀狀爾從而、治賜慈賜來業止、隨神所念行須。是以宣天下乎慈賜治賜久、大赦天下。內外文武職事、及五位已上爲父後者、授勳一級。賜高年百歲已上穀一石五斗、九十已上一石、八十已上、幷惸獨不能自存者五斗。孝子順孫、義夫節婦、咸表門閭、終身勿事。天下兵士、減今年調半。京畿悉免之。又官官仕奉韓人部一二人爾、其負而可仕奉姓名賜。又百官官人、及京下僧尼大御手物取賜治賜久止詔天皇御命、衆聞食宣。是日、一品舍人親王益封五百戶。二品新田部親王授一品。從二位長屋王正二位。正三位多治比眞人池守益封五十戶。從三位巨勢朝臣邑治、大伴宿禰多比等、藤原朝臣武智麻呂、藤原朝臣房前並正三位。並益封賜物。又以右大臣正二位長屋王爲左大臣。○丙申、勅尊正一位藤原夫人稱大夫人。授三品田形內親王、吉備內親王並二品。從四位下海上王、智奴王、藤原朝臣長娥子並從三位。正四位下山形王正四位上。○壬子、天皇臨軒。授正四位下六人部王

を申奉る三月辛巳皇太夫人を語には大御祖と稱すとあり亦證とすべし
○我皇天皇爾授奉岐、聖武天皇幼く坐す故に暫く元明天皇に授奉り給へるなり
○依此而、解に行は此の字の誤なるべしと云るに據て改む
○是平城大宮爾、和銅三年に元明天皇藤原宮より平城に都を遷し給へばかく申せり
○朕爾授賜云々、朕は元正天皇を申し文武天皇の御姉宮に坐せり、靈龜元年九月庚辰即位し給ふ
○敎賜詔賜都良久、御讓位の時に元明天皇の元正天皇に詔給なり
○後遂者我子爾、我子とは皇太子聖武天皇を申せり元明天皇よりは御孫なれど皇太子に坐せば我子と申されしなり
○佐太加爾、確かになり
○牟倶佐加爾、茂榮(ムクサカ)にて草木の枝葉の繁り茂れる狀を云る言なるが此は言祝ぎ詔給へるなり
○依旦今授賜牟止所念、此九字詔詞解の說によりて補へり

正四位上從四位下長田王從四位上、无位高田王、膳夫王、正五位上葛木王、並從四位下、正五位下高安王、門部王、並正五位上、從五位上佐爲王、櫻井王、並正五位下、從五位下夜珠王、從五位上、正五位上大伴、宿禰宿奈麻呂、多治比、眞人廣成、日下部、宿禰老、並從四位下、正五位下阿倍、朝臣駿河、阿倍、朝臣安麻呂、從五位上大宅、朝臣大國、並正五位上、從五位上中臣、朝臣東人、榎井、朝臣廣國、粟田、朝臣人上、石川、朝臣君子、並正五位下、從五位下石河、朝臣足人、高橋、朝臣安麻呂、佐伯、宿禰豐人、高向、朝臣大足、當麻眞人老、縣犬養、宿禰石足、大野、朝臣東人、巨勢、朝臣眞人、粟田、朝臣人、佐伯、宿禰馬養、土師、宿禰大麻呂、大藏、忌寸老、並從五位上、正六位上石川、朝臣枚夫、多治比、眞人屋主、波多、朝臣僧麻呂、紀、朝臣和比等、大神、朝臣通守、大春日、朝臣果安、正六位下石上、朝臣乙麻呂、藤原、朝臣豐成、從六位上鴨、朝臣治田、從七位上鴨、朝臣助、並從五位下、從七位下大伴、直南淵麻呂、從八位下錦部、安麻呂、无位烏安麻呂、外從七位上角山、君內麻呂、外從八位下大伴、直國持、外正八位上壬生、直國依、外

正八位下日下部使主荒熊、外從七位上香取連五百嶋、正八位下大生部直三穗麻呂、外從八位上君子部立花、外正八位上史部虫麻呂、外從八位上大伴直宮足等、獻私穀於陸奧國鎭所、並授外從五位下、○乙卯、陸奧國鎭守軍卒等、願除己本籍、便貫此部、率父母妻子共同生業、許之、

○大瑞物、養老七年十月詔に得二京人紀家所ㇾ獻白龜一云々とある是なり ○來理、舊訓キタレリとあるを解にケリと訓べし但しこゝは常に云ケリの辭ならで來而在を古言にケリと云それなりと云り ○年實、解に二字にてトシと訓べし年とは年穀のことなり ○于都斯久母、原本于都の二字なし今は金本曾本に據り、都は狩谷校本に據て補ふ、于都斯は顯にて和銅元年正月詔に顯久出多留寶とある顯久に同じ ○今將嗣坐御世名乎、皇太子の御代を詔給ふなり、御世名は年號なり、原本嗣を副に誤れば訂せり ○記而、年號とすべき瑞物の現れたるを云 ○應來、應には皇太子の御德に應へて出で來つるよしなり ○所念坐、元正天皇のなり ○詔天皇大命、上の食國天下者と云より此處の詔賜ふとあるまでは聖武天皇に元正天皇の詔給へる大命なり ○頂受賜、解にイナダキニウケタマハリと訓べし頂は萬葉十二に伊奈太吉、倭名抄、字鏡にはイタヽキとあり、以下聖武天皇のなり、原本頂を睍に作る諸本に據て改む ○恐美持而、暫く語を切るべし次へ續くべからず ○辭啓者云々、これより所念(オモホシ)めせるやうなり、上の如き天皇の大御命なれば辭み申さむも畏しとなり ○被賜、解に此上に受字脫せしなるべし、うけたまはりとありぬべき所なりと云り ○仕奉者、解にツカヘマツラバと訓べし天皇の天下を治すことを仕奉とはいかゞなるやうなれど前の天皇の御讓を敬ひ尊び謙遜りてかくは申しゝなりと ○劣而、解にヲヂナクテと訓べしと云 ○無所知、解にシレルコトナシと訓べし、かく詔給ふは拙くならなくて知れる事もなき我なれば大命を承はりて天下治め給はむことは畏しとなり ○進母不知退母不知、不知はシラニ、退はシゾクと訓べし、甚く恐みていかにせばよからむとたゆたふ意 ○勞久重、解に重の下にも久の字あらまほしと云り ○王臣汝等、汝王臣等と云ことゝ ○穴奈比、舊訓穴なゝカゝとあるは惡し、アナナヒと訓むべし、原本奈の字を脫す金本に據て補ふ ○天下公民乎奏、天下申すと云意に同じく天下の公民の事を執りて政申すなり ○高御座爾坐而、原本爾坐の二字を脫す前後の宣命の例に據て補ふ ○慈賜波久漉、久の下の波字は金本曾本に據て補ふ ○可、先の誤なるべし、前々の宣命に隨神所念行須是以先立先立天下公民之上云々とあり ○官官仕奉、官職に任命せられて其職を仕奉るを云 ○韓人部、韓及違國より歸化せる部民なり ○一二人、數の一二ならず、これかれの意 ○負而可仕奉姓名、負とは姓を賜はりてそれを己が姓とするを云り ○百官官人、百官人と云とは異にして諸司に屬せる下々の官人を云 ○京下、ミサトと訓べしミヤコは廣くわたれる語なるもミサトは都の中なる簡坊を云 ○大御手物、天皇の大御手づから賜ふよしの名目 ○取賜、大御手に取らし給ひて賜ふよしと聞ゆ、されど物を給ふを取らすとも云に其意にてもあるべし ○邑而、原本邑を色に作る諸本に據て改む ○多比等、旅人なり萬葉には多比等とも書けり ○田形内親王、内の字は慶雲三年紀に據て補ふ ○海上王、並に智努王山形王は何れも女の字あるべきを脫せるか ○六人部王正四位上、原本上を下に作る二年九月紀及天平元年正月紀に據て改む ○從四位下長田王、從四位下の四字は靈龜二年正月紀及十月紀に據て補ふ ○宿奈麻呂、宿の字は上下の例に據て補ふ ○石川朝臣君子、子の字は狩谷校本に據て補ふ ○粟田朝臣人、流本人の上に眞の字あれど和銅三年正月及四年四月紀に人を必登に作れり ○大藏忌寸、村

氏錄に載せず延曆四年六月坂上内藏等と共に姓宿禰を賜はること見えたれば坂上氏と同祖なるべし　○枚夫、原本授夫に作る山崎校本に據て改む
○多治比眞人、比字は狩谷校本に據て補ふ　○僧麻呂、狩谷校本に僧一本作ㇾ增と云　○大伴直、神護景雲三年十一月紀陸奥國牡鹿郡俘囚大伴部押人言傳聞押人等本是紀伊國名草郡片岡里人也昔者先祖大伴部直征ㇾ夷之時到ニ於小田郡嶋田村一而居焉　○南淵、天平十年八月紀南を蜷に作る　○烏安麻呂、天平六年十二月下村主の姓を賜はる　○角山君、古事記孝昭天皇の段に天押帶日子命者都怒山臣云々之祖と見ゆ同姓か詳ならず　○壬生直、神護景雲元年常陸國筑波郡人壬生連小家主見え、天平寶字五年正月紀、神護元年正月紀並に壬生直小家主女に作れり　○日下部使主、姓氏錄皇別に日下部宿禰、同連、同首、神別に日下部、雜姓に日下部首あれど使主は見えず異同詳ならず　○香取連、他に見えず　○正六位下、依ニ前後例一正上疑脫ニ外字一と考證に云　○大生部直、皇極紀三年に大生部多見ゆ狩谷校本に大一作ㇾ壬或作ㇾ犬とあり　○君子部、吉彌侯部なり寶龜元年二月紀に見ゆ　○史部、雄略紀に二年十月置ニ史戸河上舍人部一又云天皇所ニ愛寵一史部身狹村主靑云々等也など見ゆ、錄攝津諸蕃に史戸漢城人韓氏隆德之後也とあり　○此部、原本此を比に作る諸本に據て改む

（三月）二月四日勅、丙申（六日）紀に見ゆ此に四日と書けるは卽位の日を擧げしなるべし
○皇太夫人、公式令の義解に天子母居ニ夫人位一者爲ニ皇太夫人一也とあり
○催造司、大日本史職官志に天平四年催造宮司長官あり蓋催造司と同じとあり造宮の事を督促する官なり
○諸流配處遠近之程、狩谷校本に拾芥抄下本云遣ニ流人一國々伊豆安房云々神龜元年六月三日定、按本文庚申推ニ支干一此月庚申朔、六月戊子朔而三日庚寅也申當ㇾ作ㇾ寅而此條可ㇾ移ニ下六月之下一と云り處の字は類史に據て補ふ
○諏方、刑部式には信濃

○三月庚申朔、天皇幸ニ芳野宮一○甲子、車駕還ㇾ宮○辛巳、左大臣正二位長屋王等言、伏見ニ二月四日勅一、藤原夫人天下皆稱ニ大夫人一者、臣等謹撿ニ公式令一云ニ皇太夫人一、欲ㇾ依ニ勅號一、應ㇾ失ニ皇字一、欲ㇾ須ニ令文一、恐ㇾ作ニ違勅一、不ㇾ知ㇾ所ㇾ定、伏聽ニ進止一、詔曰、宜ㇾ文則皇太夫人、語則大御祖、追ニ收先勅一、頒ニ下後號一○壬午、始置ニ催造司一○庚申、定ニ諸流配處遠近之程一、伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土左六國爲ㇾ遠、諏方伊豫爲ㇾ中、越前安藝爲ㇾ近○甲申、令ニ七道諸國依ニ國大小一、割ニ取稅稻四萬已上二十萬束已下一、每年出擧、取ニ其息利一、以充ニ朝集使在京、及非時差使、除ニ運ニ調庸一外、向ㇾ京擔夫等粮料一、語在ニ格中一、陸奧國言、海道蝦夷反、殺ニ大掾從六位上佐伯宿禰兒屋麻呂一○夏四月庚寅

させり、諏方は天平三年三月信濃國に併せたれば式にかく載せられたるなるべし
○語在格中、延暦交替式云廿日己卯格偁、判正稅稻出擧取利名曰國儲以充朝集使還國之間及非時差使幷諸司寛[illegible]書生幷傔人運調庸外向京擔夫等粮料其出擧法、大國四萬束、上國三萬束、中國二萬束、下國一萬束者とあり
(四月)教坂東、狩谷校本に教一本作敎とあり坂東は公式令義解に謂駿河與相模界坂也とあり箱根山以東なと云
○九國、天平寶字三年十一月及延暦二年四月紀等に坂東八國とあれば九は八の誤なるべし
○縣犬養宿禰筑紫卒、慶雲二年十二月紀に初見す
(五月)重閣中門、朱雀門なり
○兵士已上、兵字は狩谷校本に據て補ふ
○諸如親云々、始親以下は皆外蕃歸化の人なり卽位の詔に所謂[illegible]部一二人[illegible]仕奉姓名賜者とあるに卽

剗、令七道諸國、造軍器幕釜等、有數、○壬辰、陸奧國大掾佐伯宿禰兒屋麻呂贈從五位下、賻絁一十疋、布二十端、田四町、爲其死事也、○丙申、以式部卿正四位上藤原朝臣宇合爲持節大將軍、宮內大輔從五位上高橋朝臣安麻呂爲副將軍、判官八人、主典八人、爲征海道蝦夷也、○癸卯、教坂東九國軍三萬人、教習騎射、試練軍陳、運綵帛二百疋、絁一千疋、綿六千屯、布一萬端、於陸奧鎭所、○丁未、造宮卿從四位下縣犬養宿禰筑紫卒、月犯熒惑、○五月癸亥、天皇御重閣中門、觀獵騎、一品已下至无位、豪富家及左右京、五畿內、近江等國郡司幷子弟兵士庶民勇健堪裝飾者、悉令奉獵騎、事畢、兵士已上普賜祿有差、○辛未、從五位上薩妙觀賜姓河上忌寸、從七位下王吉勝新城連、正八位上高正勝三笠連、從八位上高益信男捄連、從五位上吉宜、從五位下吉智首並吉田連、從五位下能兒麻呂羽林連、正六位下賈受君神前連、正六位下樂浪河內高丘連、正七位上四比忠勇椎野連、正七位上荊軌武香山連、從六位上金宅良、金元吉並國看連、正七位下高昌武殖槻連、從七位上王多寶蓋山連、勳

十二等高祿德清原連、无位狛祁乎理和久古衆連、從五位下吳肅胡明御立連、正六位上物部用善物部射園連、正六位上久米奈保麻呂久米連、正六位下賓難大足長丘連、正六位下胛巨茂城上連、從六位下谷那庚受難波連、正八位上答本陽春麻田連、○壬午、從五位上小野朝臣牛養爲鎭狄將軍、令鎭出羽蝦狄、軍監二人、軍曹二人、○六月庚寅、中納言正三位巨勢朝臣邑治薨、難波朝(孝德)大臣大繡德多之孫、中納言小錦中黑麻呂之子也、

此なり　○河上忌寸、姓氏錄不載　○新城連、錄左京諸蕃に高麗國人高福裕の後とあり　○三笠連、同左京諸蕃に御笠連高麗國人從五位下高莊子の後とあり　○男捄連、同男牀連高麗國人高道士の後とあり拾芥抄に捄を床に作る　○吉田連、同左京皇別吉田連の條に詳なり　○能兄麻呂、養老五年正月甲戌(一五六頁)角兄麻呂あり之に據らば能は角の誤か考ふべし　○羽林連、羽の字は四年十二月丁亥の紀に據て補ふ　○神前連、錄左京諸蕃に見ゆ天智紀四年二月百濟より歸化し近江國神前郡に居住せしより其地名を取りて姓とせり　○高丘連、錄河內諸蕃に高丘宿禰百濟國公族大夫高僕之後廣陵高穆より出づとあり尙景雲二年六月紀高丘宿禰比良麻呂の傳に見ゆ　○椎野連、原本椎を推に作る諸本に據て改む　○香山連、錄左京諸蕃に載す　○金宅良金元吉、天智紀十年に見えたる金羅、金須兩人の後なるべしと云　○國看連、姓氏錄に載せず　○殖槻連、同上　○蓋山連、同上　○清原連、同上　○狛祁、狩谷校本に祁一本作部と云　○古衆連、他に見えず　○御立連、姓氏錄に見えず　○物部射園連、同上、物部とあれば饒速日命の後ならむか　○久米連、物部久米と列擧せるに據れば久米直と同祖なるべきか、同姓の人は索引に出づ　○長丘連、寶龜七年十二月紀に蓋田蓑賜姓長丘連とあるは同姓なるか詳ならず　○胛巨茂、養老五年正月紀甲許母に作る　○城上連、武智麻呂傳に方士城上連直立見ゆ　○谷那、天智紀に達率谷那晉首見ゆ應神紀百濟記を引て阿花王立无禮於貴國奪我枕彌云々谷那東韓之地とあり　○庚受、武智麻呂傳に康受に作る　○難波連、錄右京諸蕃に出づ　○答本、天智紀に達率答炑作見え天平勝寶三年十月紀に答本忠節見ゆ、同姓なり、懷風藻塔本に作る　○麻田連、原本麻呂連に作る萬葉集懷風藻に據て改む錄右京諸蕃には麻田連百濟國朝鮮王淮之後也とあり　(六月)庚寅、原本寅を巳に作る曾本淀本に據て改む紀略癸巳に作る　○邑治、原本邑を色に作る淀本紀略に據て改む　○難波朝、原本朝の下に臣字あり衍なり故に削る　○大繡、大化三年に定めし第三等の冠位なり孝德紀大化五年四月授大紫爲左大臣と見ゆれど大繡に進みしこと見えず贈位なるべし　○黑麻呂、書紀に此人を載せず

○秋七月戊午朔、日有蝕之、○庚午、夫人正三位石川朝臣大蕤比賣薨、

(七月)大蕤比賣、天武紀に夫人蘇我赤兄大臣女

大綬慶雲元年正月紀（二十九頁）に石川夫人と見ゆ、綬は原本緩に作る紀略に據て改む
○監護、原本護を讓に作る山崎校本に據て改む
○葬事、考證に葬當ㇾ作ㇾ喪と云
○丁未、干支を推すに此月丁未なし、丁未は八月廿一日なり然るに紀略にも同じく月を記さず或は干支に誤あるか考ふべし
○遣新羅大使、遣の字は紀略及略記に據て補ふ
○僧尼名籍、雜令に凡僧尼京國官司毎六年造籍三通各顯出家年月夏臈及德業依式印之一通留職國以外申送太政官一通送中務一通送治部云々とあり
○誌黶　漢書高祖紀の注に師古曰今中國通呼爲黶子吳楚之俗謂之誌誌者記也とあり史記正義亦同じ
○白鳳、伴信友氏は水鏡諸書に據るに天武朝朱鳥以前に白鳳朱雀の號あれど日本紀に載せざるは何故なるか詳ならずといひ、狩谷氏は孝德天皇白雉の一名にあらむかと云

遣從三位阿倍朝臣廣庭、正四位下石川朝臣石足等、監護葬事、又遣中納言正三位大伴宿禰旅人等、就第宣詔、贈正二位、賻絁三百疋、絲四百約、布四百端、○丁丑、自六月朔至是日、熒惑逆行、○丁未、以從五位上土師宿禰豐麻呂爲遣新羅大使、○冬十月丁亥朔、治部省奏言、勘檢京及諸國僧尼名籍、或入道元由、披陳不明、或名存綱帳、還落官籍、或形貌誌黶、既不相當、惣一千一百二十二人、准量格式、合給公驗、不知處分、伏聽天裁、詔報曰、白鳳以來、朱雀以前、年代玄遠、尋問難明、亦所司記注、多有粗略、一定見名、仍給公驗、○辛卯、天皇幸紀伊國、○癸巳、行至紀伊國那賀郡玉垣勾頓宮、○甲午、至海部郡玉津嶋頓宮、留十有餘日、○戊戌、造離宮於岡東、是日、從駕百寮、六位已下至于伴部、賜祿各有差、○壬寅、賜造離宮司、及紀伊國國郡司、并行宮側近高年七十已上祿、各有差、百姓今年調庸、名草海部二郡、田租咸免之、又赦罪人死罪已下、名草郡大領外從八位上紀直摩祖爲國造、進位三階、少領正八位下大伴櫟津連子人、海部直土形二階、自餘五十二人各位一階、又詔曰、登山望海、此間

り
○朱雀、略記に天武天皇元年八月幸野上宮立年號爲朱雀元年とあり水鏡、曆代皇記、皇代記、皇年代略記並に同じ朱雀元年は壬申の年なり
○見名、現在の人名を云
○玉垣勾頓宮、南紀名勝志に趾在井田村中古建寺曰玉垣寺とあり今詳ならず
○海部郡、今海部名草二郡を合せて海草郡と稱す
○玉津嶋頓宮、今海草郡和歌浦町の邊なるべし

最好、不勞遠行、足以遊覽、故改弱濱名、爲明光浦、宜置守戸、勿令荒穢、春秋二時、差遣官人、奠祭玉津嶋之神、明光浦之靈、忍海手人大海等兄弟六人、除手人名、從外祖父外從五位上津守連通姓、○丁未、行還至和泉國所石頓宮、郡司少領已上給位一階、監正已下至于百姓、賜祿各有差、○己酉、車駕至自紀伊國、○乙卯、散位從五位下息長眞人臣足任出雲按察使、時贖貨狼籍、惡其景迹、奪位祿焉、

○造離宮於岡東、岡東とは上の頓宮と同所にて今和歌山市を南に距る一里和歌村に妙見山一名伽羅山といふあり、其東にて所謂和歌浦を一望の下に瞰下せらるゝ地なり　○伴部、原本伊部に作る略記に據て改む　○紀直、國造本紀に紀伊國造橿原朝御世神皇産靈命五世孫天道根命定賜國造と見え、錄河内神別には紀直と見ゆ　○大伴櫟津連、大伴氏と同祖なるべし　○海部直、系詳ならず　○土形、原本土形に作る山崎校本に據て改む　○弱濱、歌仙傳濱を浦に作る　○玉津嶋之神、神名式に載せざれど中世より住吉玉津嶋明神と並稱して歌道の神として尊崇す、神祇志に玉津嶋神社在海部郡傳祀稚日女尊配神功皇后此地皇后所屢經歷也とあり今海草郡和歌浦町にあり　○手人、原本手を午に作る金本閣本官本に據て改む下同じ　○津守連通姓、原本津の字なく姓を姫に作る狩谷校本に一本作津守連通姓とあるに據て改む　○所石頓宮、和泉志に古蹟在和泉郡舞村舊屬大鳥郡といひ、狩谷氏は泉州志云取石池在大鳥郡信太鄕按所石與取石和訓相近最可設頓宮勝地也疑此地歟と云り　○監正、靈龜二年四月置和泉監とあれば正は其長官なるべし　○任出雲按察使、養老三年七月紀(一四一頁)に見ゆ　○贖貨、贖は黷の誤なるべし黷貨は字書に黷は媟也狎也とありて貨を濫にして私利を計るを云

(十一月)冬穴夏巣文選の序に出づ
○後世聖人代以宮室、禮記禮運に昔者先王未有宮室冬則居營窟夏則居橧巣云々、後聖有作然後脩火之利范金合

○十一月甲子、太政官奏言、上古淳朴、冬穴夏巣、後世聖人、代以宮室、亦有京師、帝王爲居、萬國所朝、非是壯麗、何以表德、其板屋草舍、中古遺制、難營易破、空殫民財、請仰有司、令五位已上及庶人堪營者、構立瓦舍、塗

十以爲蕃樹宮室隔戸とあり
○非是壯麗云々、史記高祖本紀に蕭何曰夫天子以四海爲家非壯麗無以重威とあり
○瓦舍、武智麻呂家傳に營防京邑及諸國家許人瓦屋赭堊渥飾とあり瓦舍は古くよりありけれしかど盛ならざりしを大に奬勵せられしなり
○遣内舍人、軍防令に凡大將出征云々凱旋之日奏遣使郊勞とあり
○慰勞、紀略慰に作る、慰勞同じ
○内物部、職員令に衞門府物部卅人、義解に此名爲内物部とあり
○立神楯、文武戊戌年十一月紀に出づ
○宗室、諸王を云
○庚申、是月丁巳の朔なれば庚申はこゝに叙すべからず類聚國史此條十一月の下にあり十一月ならば四日なり甲子の上に移すべし
【神龜二年】丙辰朔、朔の字は例に據て補ふ
○備前國、國の上恐くは二の字を脫す
○中臣志斐連、錄左京神

爲赤白、奏可之、○辛未、遣内舍人於近江國、慰勞持節大使藤原朝臣宇合、○己卯、大嘗、備前國爲由機、播磨國爲須機、從五位下石上朝臣勝男、石上朝臣乙麻呂、從六位上石上朝臣諸男、從七位上榎井朝臣大嶋等、率内物部、立神楯於齋宮南北二門、○辛巳、宴五位已上於朝堂、因召内裏、賜御酒幷祿、○壬午、賜饗百寮主典已上於朝堂、又賜无位宗室、諸司、番上、及兩國郡司幷妻子、酒食幷祿、○庚申、召諸司、長官幷秀才及勸公人等、賜宴於中宮、賜絲各十絇、○乙酉、征夷持節大使正四位上藤原朝臣宇合、鎭狄將軍從五位上小野朝臣牛養等來歸、

二年春正月丙辰朔、山背備前國獻白鷁各一、○庚午、大初位下漢人法麻呂、賜姓中臣志斐連、○己卯、有星孛于華蓋、○閏正月己丑、陸奧國俘囚百四十四人配于伊豫國、五百七十八人配于筑紫、十五人配于和泉監焉、○壬寅、請僧六百人於宮中、讀誦大般若經、爲除災異也、○戊子、夜、月犯鎭星、○丁未、天皇臨朝、詔叙征夷將軍已下一千六百九十六人勳位各有差、授正四位上藤原朝臣宇合從三位勳二等、從五位上大野、

朝臣東人從四位下勳四等、從五位上高橋朝臣安麻呂正五位下勳五等、從五位下中臣朝臣廣見從五位上勳五等、從七位下後部王起、正八位上佐伯宿禰首麻呂、五百原君虫麻呂、從七位下君子部龍麻呂、從八位上出部直佩刀、少初位上紀朝臣牟良自、正八位上田邊史難波、從六位下坂下朝臣宇頭麻佐、外從六位上丸子大國、外從八位上國覔忌寸勝麻呂等一十人、並勳六等、賜田二町。○三月庚子、常陸國百姓、被俘賊燒損失財物、九分已上者、給復三年、四分二年、二分一年。○夏五月甲辰、遣新羅使土師宿禰豐麻呂等還歸。

○六月丁巳、和德史龍麻呂等三十八人、賜姓大縣史。○癸酉、太白晝見。

○秋七月丙戌、河內國丹比郡人正八位下川原椋人子虫等四十六人、賜河原史姓。○戊戌、詔七道諸國、除冤祈祥、必憑幽冥、敬神尊佛、清淨爲

別上に天兒屋根命十一世孫雷大臣命男弟子之後也とあり　○華蓋、三才圖會に華蓋七星在九星、在勾陳上、正當大帝所、以覆蔽大帝之坐也とあり北極紫微垣內にある星なり

（閏正月）陸奧國俘囚、陸奧國の三字は紀略に據て補ふ　○戊子、己丑の上に移すべし　○鎭星、原本鎭を塡に作る狩谷校本の說に據て改む鎭星は土星なり　○從五位上勳五等、原本五を六に作る諸本に據て改む　○後部王起、起は原本越に作る天平元年三月、四年十月紀に據て改む　○五百原君、記孝靈天皇段に日子刺肩別命五百原君之祖也とす　○君子部、部の字は狩谷校本に據て補ふ　○出部直、他に所見なし、或曰出疑生字天應元年三月紀有生部直清刀自と考證に云り　○田邊史難波、天平勝寶二年三月己丑上毛野君姓を賜はるとあり錄右京皇別上に田邊史豐城入彦命四世孫大荒田別命之後也とす是なり　○丸子、天平勝寶五年六月紀に陸奧國牡鹿郡人丸子牛麻呂云々等廿四人賜牡鹿連姓と見ゆ、丸子は陸奧國宮城郡の鄕名なり

（六月）和德史、諸史に所見なし　○大縣史、錄右京諸蕃に百濟國人和德の後とあり

（七月）正八位下、原本八を六に作る諸本に據て改む　○川原椋人、神護景雲三

先、今聞、諸國神祇社內、多有穢臭、及放雜畜、敬神之禮、豈如是乎、宜國司長官自執幣帛、愼致淸掃、常爲歲事、又諸寺院、限、勤加掃淨、仍令僧尼讀金光明經、若無此經者、便轉最勝王經、令國家平安也、○壬寅、以伊勢尾張二國田、始班給志摩國百姓口分、○九月壬寅、詔曰、朕聞、古先哲王、君臨寰宇、順兩儀以亭毒、叶四序而齊成、陰陽和而風雨節、災害除以休徵臻、故能騰茂飛英、鬱爲稱首、朕以寡薄、嗣膺景圖、戰々兢々、夕惕若厲、懼一物之失所、睠懷生之便安、教命不明、至誠無感、天示星異、地顯動震、仰惟災眚、責深在予、昔殷宗脩德、消雊雉之宛、宋景行仁、弭熒惑之異、遙瞻前軌、寧忘誠惶、宜令所司、三千人出家入道、幷左右京、及大倭國部內諸寺、始今月廿三日一七日轉經、憑此冥福、冀除災異焉、

年九月丙戌紀に左京人河原毗登堅魚等十人河內國人河原藏人々成等五人並賜姓河原連と見ゆ、考證云按毗登卽史、藏人卽椋人也と
○除災祈祥、原本災を究に作る山崎校本に據て改む三代格には攘災招福とあり
○伊勢尾張云々、民部式に見ゆ
(九月)○兩儀、天地なり
○亭毒、老子に出づ上に注せり
○叶四序而齊成、齊は原本齋に作る淀本に據て改む四序は四時の運候なり
○騰茂飛英、司馬相如封禪文に俾萬世得激淸流揚微波、蜚英聲騰茂實、前聖之所以永保鴻名而常爲稱首者用此とありて史記相如傳索隱に飛揚英聲之榮騰馳茂盛之實也とまた文選注に稱首を爲王者之首と解せり
○戰々兢々、毛詩小雅に出づ、恐れ畏るゝ狀
○夕惕若厲、易乾卦九三爻に出づ惕は愛懼る、厲は勵に同じ
○一物、劉向疏序に孔子謂魯哀公曰一物不應亂之端也とあり
○懷生、文選雜蜀父老檄に懷生之物有不浸潤於澤者賢君耻之、注に懷生之物謂動植之類也とあり
○天示星異、原本示を亦に作る東大寺要錄に據て改む
○地顯動震、顯は或は類の字なるべし
○災眚、尙書舜典に眚災肆赦、傳に眚は過、災は害とあり、災は災と同じ
○責深在予、責の字は金本曾本淀本に據て補ふ
○殷宗脩德云々、尙書高宗肜日に高宗祭成湯有飛雉升鼎耳而雊、祖己訓諸王作高宗肜日高宗之訓とあり宛は次の訛なるべし
○宋景行仁云々、史記宋世家に熒惑守心、心宋之分野也、景公憂之、司星子韋曰可移於相、景公曰相吾之股肱、曰可移於民、景公曰君者待民、曰可移於歲、景公曰歲饑民困、吾誰爲君、韋曰天高聽卑、君有君人之言三、熒惑宜有動、於是候之果徙三度とあり
○廿三日、壬寅は廿二日なれば廿三日とあるは翌日を指せり

○冬十月庚申、天皇幸難波宮、○辛未、詔近宮三郡司、授位賜祿、各有差、○己卯、晝太白與歳星芒角相合、○十一月己丑、天皇御大安殿、受冬至賀辭、親王及侍臣等奉持奇翫珍贄進之、卽引文武百寮五位已上及諸司長官大學博士等、宴飲終日、極樂乃罷、賜祿各有差、是日、大納言正三位多治比眞人池守、賜靈壽杖幷絁綿、中務少丞從六位上佐味朝臣虫麻呂、典鑄正六位上播磨直弟兄、並授從五位下、弟兄初賚甘子、從唐國來、虫麻呂先殖其種結子、故有此授焉、○十二月庚戌朔、日有蝕之、○庚午、詔曰、死者不可生、刑者不可息、此先典之所重也、豈無恤刑之禁、今所奏在京及天下諸國見禁囚徒、死罪宜降從流、流罪宜從徒、徒以下並依刑部奏、

（丙寅）三年春正月辛巳、京職獻白鼠、大倭國獻白龜、○庚子、天皇臨軒、授從四

（十月）掃守連族、錄左京神別中に、掃守連は振魂命四世孫天忍人命の後也とす族とあるは正嫡に非ずして一族の意なり　○除族子、原本族を於に作る諸本に據て改む考證に於子を族の一字に作るべしといひ山田以文は子恐字と云り

（十一月）珍贄、贄一に貨に作ると云　○賜靈壽杖、文武天皇紀（一一頁）に多治比眞人嶋に靈壽杖及輿を賜ふ事見えたり、其處に云り　○典鑄正六位上、典鑄正正六位、或は典鑄正從六位上とあるべきなり脫字あるべし典鑄正は職員令に見ゆ　○播磨直、錄右京皇別佐伯直の條に景行天皇々子稻背入彥命男御諸別命云々男阿良都命（一名伊許自別）譽田天皇爲定國堺車駕巡幸到針間國云々卽賜氏針間別佐伯直姓也と見ゆ是なり　○甘子、正韻に甘果名俗作柑とあり卽ち柑子なり抄果蓏部に馬琬食經云柑子（上音甘、加无之）とあり

（十二月）庚戌朔、朔の字は例に據て補ふ　○不可息、息は屬に作るべし、史記孝文本紀に夫死者不可復生刑者不可復屬の文を取れるなり　○所重也・類史也の字なし　○恤刑之禁、原本恤を恒に作る曾本從本及類史に據て改む　○所奏、原本奏を奉に作る山崎校本に據て改む　○宜降從流、流の字は類史に據て補ふ　○徒以下、徒字類史に據て補ふ

【神龜三年】人成、原本成を咸に作る和銅三年正

月甲子紀（七七頁）に據て改む

○鍛冶、原本冶を治に作る、金本谷本淀本に據て改む

○秋山、金本閣本秋を社に作る

○田口朝臣、臣の字は金本閣本谷本になし據て補ふ

○大唐、天平十六年閏正月紀、寶字六年十月紀並に唐の一字に作る

○多胡吉師手、多胡吉師は姓にて手は名なり、系詳ならず、神功皇后紀（紀上一八三頁）多俠吉師に作る

（二月）○勿收其位田、紀略勿字なし、疑らくは兩字の誤か、位田の事は田令に詳なり

○當時社云々、臨時祭式に[illegible]一百六十八座[illegible]一口鐵一面倭文二端白眼鴾毛馬一疋[illegible]と見ゆ狩谷校本社一本

位下鈴鹿王從四位上、无位石川王從四位下、從四位上藤原朝臣麻呂、正四位上、正五位上阿倍朝臣駿河、正五位下石川朝臣君子、並從四位下、正五位下中臣朝臣東人正五位上、從五位上多治比眞人廣足、巨勢朝臣眞人、大伴宿禰邑治麻呂、忍海連人成、鍛冶造大隅、從五位下佐伯宿禰沙美麻呂、並正五位下、從五位下石上朝臣勝雄、笠朝臣御室、大倭忌寸五百足、置始連秋山、並從五位上、正六位上路眞人虫麻呂、阿倍朝臣粳虫、大宅朝臣廣麻呂、粟田朝臣馬養、田口朝臣家主、紀朝臣宇美、秦忌寸足國、葛井連毛人、從六位上縣犬養宿禰大唐、並從五位下、正六位上多胡吉師手、外從五位下、○二月庚戌朔、制、五位已上、薨卒之後、例限六年、勿收其位田、○辛亥、出雲國造從六位上出雲臣廣嶋齋事畢、獻神社劍鏡并白馬鵠等、廣嶋并祝二人、並進位二階、賜廣嶋絁二十疋、綿五十屯、布六十端、自餘祝部一百九十四人祿、各有差、○庚申、制、內命婦身帶五位、任六位以下官者、自今以後、給正六位官祿、○己巳、太政官奏、諸選人於官引唱、不到者、明日引唱、亦不到者、後日引唱、不到者、不在重引、

之限。當年若與上考、降爲中等、若居中考、減一年勞、卽減勞年、亦居中等、更復減一年勞、兩年考第、頻注中等者、惣除前勞、自今以後、永爲恒例、奏可之。○三月辛巳、宴五位已上於南苑。但六位已下官人、及大舍人、授刀舍人、兵衞等、皆喚御在所、給鹽鍬各有數。○夏五月辛丑、新羅使薩飡金造近等來朝。○六月辛亥、天皇臨軒、新羅使貢調物。○壬子、饗金造近等於朝堂、賜祿有差。○庚申、詔曰、夫百姓或染沉痾病、經年未愈、或亦得重病、晝夜辛苦。朕爲父母、何不憐愍、宜遣醫藥於左右京、四畿及六道諸國、救療此類、咸得安寧、依病輕重、賜穀振恤、所司存懷、勉稱朕心焉。○辛酉、太上天皇不豫、令天下諸國放生焉。○丁卯、奉爲太上天皇、度僧二十八人尼二人等。○秋七月戊子、金奏勳等歸國、賜璽書曰、勅伊飡金順貞、汝卿安撫彼境、忠事我朝、貢調使薩飡金奏勳等奏稱、順貞以去年六月三十日卒、哀哉、賢臣守國、爲朕股肱、今也則亡、殲我吉士、故贈賻物黃絁一百疋、綿百屯、不遺爾績、式奬遊魂。○癸巳、詔曰、太上天皇不豫、稍經二序、宜大赦天下、痾疾之徒、量給湯藥。○甲午、度僧十五人、尼七

作寶と云
○引唱、太政官式に式部兵部二省依導引唱と見ゆ、字書に引は導也とあり共名を唱へて召出すを云
○重引、重れて引唱するを云
○若居中考、若の字は金本淀本に據て補ふ
(五月)金造近、七月戊子紀に金奏勳に作る
(六月)染沉、類史染を深に作る
○懷勉、字書に懷は思念也とあり心を勉勵に存するを云、又按に所司存懷勉は六字の句にて勉の上或は下に一字を脫するか
○令天下、原本令を命に作る紀略に據て改む
○尼二人等、紀略及東大寺要錄等の字なし
(七月)金奏勳、原本金を令に作る淀本及紀略に據て改む又紀略奏勳を造近に作る
○伊飡、新羅第二等の官名
○金順貞、前に見えず
○爾績、原本績を續に作る狩谷校本に據て改む
○稍經二序、夏より秋に至て御病の治せざるを云

人、○乙未、遣使奉幣帛於石成、葛木、住吉、賀茂等神社、

○八月癸丑、奉爲太上天皇、造寫釋迦像并法華經訖、仍於藥師寺設齋焉、○壬戌、定鼓吹戸三百戸、鷹戸十戸、○乙亥、太政官處分、新任國司向任之日、伊賀、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等六國、不給食馬、志摩、尾張、若狹、美濃、參河、越前、丹後、但馬、美作、備前、備中、淡路等十二國、並給食、自外諸國、皆給傳符、但大宰府并部下諸國、五位以上者、宜給傳符、自外隨使駕船、緣路諸國、依例供給、史生亦准此焉、○九月丁丑、令京官史生及坊令、始著朝服把笏、○己卯、停安房國安房郡、出雲國意宇郡采女、令貢兵衞、○丁亥、天皇臨軒、詔曰、今秋大稔、民産豐實、思與天下共茲歡慶、宜免今年田租、○庚寅、內裏生玉來、勅令朝野道俗等作玉來詩賦、○壬寅、文人一百十二人上玉來詩賦、隨其等第賜祿有差、一等絁二十疋、綿三十

二季は二季と云に同じ ○繍幡、原本幡を宣に作るを東大寺要録に據りて改む ○造七人、東大寺要録一に、緣起文に天皇勅請不安穩、奉造藥師佛像挾侍菩薩并四天王像一云々と見えたり ○石成、狩谷氏云石成神[illegible] 後紀承和六年四月[illegible]大和國石成社[illegible]、石成は大和國山邊郡の地名なり、神祇志に所在未詳とあり ○葛木、神名式に大和國葛上郡葛木坐一言主神社とあり、大和志に在森脇村、今南葛城郡吐田郷村大字森脇なり

八月癸丑、原本癸酉に作る、干支を推すに是月癸酉なし、紀略に據りて改む ○鼓吹戸、職員令鼓吹司鼓吹戸の集解に別記を引て并二百十八戸、右每戸[illegible]十二月番、爲品部免調役とあり ○鷹戸、同令主鷹司鷹戸の集解に別記を引て鷹養戸十七戸、[illegible]經年每丁役爲品部免調役とあり ○乙亥、廿日狩谷氏云通證八日爲小九日爲大、與此異 ○新任國司云々、太政官式に見ゆるも大同本[illegible]なり ○食馬、食料と驛馬となり ○傳符、驛傳の符なり ○隨使、[illegible]使の從なるべし ○緣船云々、民部式に凡山陽南海西海道等府國、

屯、布三十端、二等絁十疋、綿二十屯、布二十端、三等絁六疋、綿六屯、布八端、四等絁四疋、綿四屯、布六端、不第絁一疋、綿一屯、布三端、以正四位上六人部王、藤原朝臣麻呂、正五位下巨勢朝臣眞人、從五位下縣犬養宿禰石吹、大神朝臣道守等二十七人、爲裝束司、以從四位下門部王、正五位下多治比眞人廣足、從五位下村國連志我麻呂等一十八人、爲造頓宮司、爲將幸播磨國印南野也、

○冬十月辛亥、行幸播磨國印南野、○甲寅、至印南野邑美頓宮、從駕人及播磨國郡司百姓等、供奉行在所者、授位賜祿、各有差、又行宮側近明石賀古二郡百姓、高年七十已上、賜穀各一斛、曲赦播磨堺内大辟已下罪、○癸亥、還至難波宮、○庚午、以式部卿從三位藤原朝臣宇合、爲知造

新任官人赴任者、皆取海路、仍令緣海國依例給食、但西海道國司到府即乘傳馬、其大貳已上、乃取陸路とあり

（九月）坊令、戶令に凡京毎坊置長一人、四坊置令一人、掌檢校戶口、督察姧非、催駈賦徭とあり

○安房國云々、軍防令に貢采女郡者、不在貢兵衞之例と見ゆ

○玉來、考證に伊藤氏曰事文類聚載、宋宣和間王將明賜第梁生芝草云々

京師無名子云々相公新賜第梁上生芝草爲甚脫玉來膠少則知玉來靈芝一名必出古典云々 故政史亦稱之耳谷川氏曰按薬音來和名之波芝亦訓之波見萬葉集蓋古通用則玉來玉芝也爲靈芝一名說誤矣、伴氏曰玉來疑玉英見治部式來英因字體近似而譌也諸說非是とあり　○不第、若第の意なるべし狩谷校本云一本五等に作る　○石吹、養老四年正月紀、同十月紀、同五年六月紀並に石次に作る　○裝束司、太政官式に凡行幸前數十日定造行宮使任裝束司長官一人次官二人判官三人と見ゆ　○門部王、狩谷氏云疑內部王之譌養老五年六月紀書從四位下內部王是也、門部王當時爲正五位上位階不同自別人也　○印南野、萬葉に或は稻日野、又稻見に作る、播磨國印南（伊奈美）郡にあり

（十月）辛亥、原本亥を酉に作る紀略に據て改む

○行幸播磨、國以下印南野邑美頓宮に至る十六字は紀略に據て補ふ

○邑美頓宮、明石郡邑美（於布美）鄕にあり

○從駕人及、及は紀略に據て補ふ

○還至、原本還の上に行の字あり紀略に據て削る

難波宮事、陪從无位、諸王、六位已上、才藝、長上、并雜色人、難波、宮、官人、郡司已上、賜祿各有差。○癸酉、車駕至自難波宮。○十一月己亥、改備前國藤原郡名、爲藤野郡。○己丑、五位郡司身卒、始賜賻物、又勳九等以下、任長上官者、免課役。

○十二月乙卯、太白犯鎭星。○丁卯、尾張國民、惣二千二百四十二戸、稼傷飢饉、遠江國五郡被水害、並限三年、令加賑貸。○壬申、太政官處分、東文忌寸等、自今以後、令任辨官人、上大祓刀。

續日本紀卷第九

○藤原朝臣、朝臣の二字は例に據て補ふ ○知造難波宮事、難波宮を造ること四年二月紀に見ゆ

（十一月）己亥、廿六日、戌日己疑乙之誤さ、乙亥は二日なり ○改備前國藤原郡名、考證云案藤原氏外戚貴臣世世執國鈞、故避之、天平寶字元年三月改藤原部姓爲久須波良部亦以之 ○藤野郡、神護景雲三年六月更に改めて和氣郡とす ○己丑、干支を推すに己亥の上に敍すべきなり、考證に案長曆是月甲戌朔十六日己丑今依集解所載官符以是十五日長曆蓋誤と云り ○五位郡司云々、治部式に凡外五位賻物者、准内位減半給之、但五位郡司准職事例以正稅給之と見ゆ ○免課役、此官符賦役令の集解に見ゆ

十二月 鎭星、原本鎭を塡に作る山崎校本に據て改む ○四十二戸、類史三十二戸に作る ○東文忌寸云々、西宮記大祓の條に東文忌寸等大祓大刀を上るもの今より以後弁官史生已上の人を任ぜよと見えたり ○令任、原本任を仕に作る狩谷校本西宮記所引に據て改む

續日本紀卷第十

起神龜四年正月盡天平二年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天璽國押開豐櫻彦天皇　聖武天皇

四年春正月甲戌朔、廢朝、雨也、○丙子、天皇御大極殿受朝、是日、左京職獻白雀、河内國獻嘉禾異畝同穗、○庚辰、宴五位已上於朝堂、○壬午、御南苑宴、五位已上賜帛有差、○乙未、夜、月犯心大星、○庚子、授正三位多治比眞人池守從二位、正五位上高安王、正五位下佐爲王、並從四位下、无位池邊王從五位下、正五位下榎井朝臣廣國正五位上、從五位下平群朝臣豐麻呂從五位上、正六位上柿本朝臣建石、阿曇宿禰刀、錦部連吉美、並從五位下、○二月壬子、造難波宮、雇民免課役并房雜徭、○丙辰、夜、雷雨大風、兵部卿正四位下阿倍朝臣首名卒、○辛酉、請僧六百尼三百於中宮、令轉讀金剛般若經、爲鎭灾異也、○甲子、天皇御

【神龜四年】嘉禾異畝同穎、山背本に嘉禾、或異畝同穎、或孳連數穗、或一稃二米也）とあり下略一さす
○心大星、廿八宿の一なる心宿の中星なり
○平群朝臣、原本群を闕に作り、今谷本に據て改む
○阿曇宿禰刀、金本闕に曾本刀を力に作る
（二月）造難波宮、三年十月紀に式部卿從三位藤原朝臣宇合を知造難波宮事となすと見ゆ
○房雜徭、養老元年十一

內安殿、詔召入文武百寮主典已上、左大臣正二位長屋王宣勅曰、比者咎徵荐臻、災氣不止、如聞、時政違乖、民情愁怨、天地告譴、鬼神見異、朕施德不明、仍有懈鈌耶、將百寮官人不勤奉公耶、身隔九重、多未詳委、宜令其諸司長官、精擇當司主典已上、勞心公務、清勤著聞者、心挾姧僞、不供其職者、如此二色、具名奏聞、其善者、量與昇進、其惡者、隨狀貶黜、宜莫隱諱副朕意焉、是日、遣使於七道諸國、巡監國司之治迹勤怠也、○丙寅、詔曰、時臨東作、人赴田疇、膏澤調暢、春事既起、思九農之方茂、冀五稼之有饒、順是令節、仁及黎元、宜賜京邑六位已下、至庶人戸頭、人鹽一顆、穀二斗、○（癸酉朔）三月乙亥、百官奉勅、上官人善惡之狀、○乙酉、天皇御正殿、詔賜善政官人物、㝡上二位絁一百疋、五位已上四十疋、六位已下二十疋、次上五位以上二十疋、六位以下一十疋、其中等不在賜例、下等皆解黜焉、○甲午、天皇御南苑、參議從三位阿倍朝臣廣庭宣勅云、衞府人等、日夜宿衞闕庭、不得輙離其府散使他處、因賜五衞府及授刀寮醫師已下、

月紀（一一九頁）に見ゆ
○阿倍朝臣首名卒、懷風藻に此人の詩一首見え年六十四とあり
○懈鈌、閣本鈌を缺に作る干祿字書に鈌缺上通下正とあり
○詳委、委疑らくは悉の誤
○宜令、閣本淀本金イ本令の字なし
○東作、尙書堯典に出づ、孔傳に歳起於東而始就耕謂之東作とあり春の農事を云
○膏澤調暢、孟子に膏澤下於民とあり猶恩澤也と注せり、春雨の惠に氣候調和してのどやかになるを云
○九農、左傳昭十七年に九扈爲九農正扈民无淫者也、注に扈有九種也以九扈爲九農之號各隨其宜以敎民事止民使不淫放とあり
○五稼之有饒、字書に種穀曰稼とあり五穀を種ゑて秋稼の豐饒ならむことを冀ふなり
（三月）宿衞、宮衞令に凡宿衞人、應當上番而有故不得赴及下番須一日程以上行者皆於本

府ニ申請具状ニ所ニ行之處ニ云々とあり
○東井、廿八宿の井宿な云井一名東井とある是なり
○亭門、門一本闕に作ると云
（四月）上道王卒、和銅五年正月從四位下を授けらる
（五月）南野、從本及紀略南の上に甕原の二字あり甕原の南の野なり
○榭、字書に臺有レ屋曰レ榭、又土高曰レ臺、有レ木曰レ榭とあり、[illegible]にも臺有レ樹曰レ榭（和名字天伝）とあり
○餝騎騎射、餝を後出騎射に、餝定騎射に作り月令所載の文亦同じ
○觀代也、[illegible]に在ニ[illegible]ニ云々一名[illegible]仁天皇三十五年築とあり
（九月）井上内親王、養老五年九月（一六二頁）齋内親王と爲給ふ
○渤海郡王、王の字は紀略及下文に據て補ふ
○高齊德、原本齊を齋に作る紀略に據て改む下同じ

至衛士布人有差。○丁酉、熒惑入東井西亭門。○夏四月乙巳、散位從四位下上道王卒。○五月壬申朔、日有蝕之。○乙亥、幸甕原離宮。○丙子、天皇御南野榭、觀餝騎騎射。○丁丑、車駕至自甕原宮。○辛卯、從稱波池、飄風忽來、吹折南苑樹二株、即化成雉。○秋七月丁酉、筑紫諸國、庚午籍七百七十卷、以官印印之。○八月壬戌、補齋宮寮官人一百二十一人。○九月壬申、遣井上内親王、侍於伊勢大神宮焉。○庚寅、渤海郡王使首領高齊德等八人、來著出羽國。遣使存問、兼賜時服。○閏九月丁卯、皇子誕生焉。○冬十月庚午、安房國言、大風拔木發屋、損破秋稼。上總國言、山崩壓死百姓七十人、並加賑恤。○癸酉、天皇御中宮、爲皇子誕生、赦天下大辟罪已下。又賜百官人等物、及天下與皇子同日產者、布一端、綿二屯、稻二十束。○甲戌、王臣以下、至左右大舍人、兵衛、授刀舍人、中宮舍人、雜工舍人、太政大臣家資人、女孺、賜祿各有差。以從三位阿倍朝臣廣庭爲中納言。

○時服、[illegible]云（閏九月丁卯）、皇子誕生、紹運録に諱基王とあり、基王編年記に某親王とす、大日本史[illegible]

字訛さあり　（十月）左右大舍人、原本大の下に臣の字あり狩谷校本に臣字疑衍と云り左右大臣の舍人ならむには中宮舍人太政大臣家資人の上にあるべからず故に删る　○太政大臣家、此時太政大臣なし蓋故太政大臣不比等を云るか

（十一月）宗廟之靈、上文に宗廟と云るは何れも國家の意に用ひたるなここは神祇と相對して祖宗の靈を申せり

○太政大臣第、不比等の第を云

○藤原夫人、不比等の女光明子なり天平八年八月立て皇后と爲すと見ゆ

（十二月）惠炬、金本皆本惠を慧に作る

○三界、欲界、色界、無色界を云

○市往氏、錄右京諸蕃に市往公、百濟國明王之後

○十一月戊戌朔己亥、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、并獻玩好物、是日、賜宴文武百寮已下至使部於朝堂、五位已上賜綿有差、累世之家嫡子、身帶五位已上者、別加絁十疋、但正五位上調連淡海、從五位上大倭忌寸五百足、二人年齒居高、得入此例焉、詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、○庚子、僧綱及僧尼九十人上表、奉賀皇子誕生、施物各有差、○乙巳、南嶋人百三十二人來朝、叙位有差、○辛亥、大納言從二位多治比眞人池守、引百官史生已上、拜皇太子於太政大臣第、○丙辰、賜宴於五位已上、并无位諸王、祿各有差、○戊午、賜從三位藤原夫人食封一千戸、○十二月戊辰朔丁丑、勅曰、僧正義淵法師、俗姓市往氏也禪枝早茂、法梁惟隆、扇玄風於四方、照惠炬於三界、加以、自先帝御世、迄于朕代、供奉內裏、無一咎愆、念斯若人、年德共隆、宜改市往氏、賜岡連姓、傳其兄弟、正三位縣犬養橘宿禰

○後一也とあり
○岡連、岡宗岡連市杵公同祖
○先是遣使云々、二月紀（二〇二頁）に見ゆ
○除名、名例律に凡除名者官位勲位悉除課役從本色、六載之後聽叙とあり
○背奈公、萬葉十六に誇佞人歌一首博士消奈（公）行文大夫作之と記し、懐風藻に從五位下大學助背奈王行文二首年六十二と見ゆ
○渤海、唐書北狄傳及東國通鑑に見ゆ
○唐將李勣、天智紀七年十月大唐大將軍英公打滅高麗、唐書高宗紀云總章元年李勣拔不壤降其王高藏云々と見ゆ
○寧遠將軍、唐書百官志に武散官四十有五階五品下を寧遠將軍とす、臨時さいふと見ゆ
【神龜五年】武藝、渤海の王なり、唐書北狄傳及東國通鑑に見ゆ
○國王、王を上に作る本に據て改む
○異域、域は道の義なるべし
○傾仰、心を傾けて欽仰

三千代言、縣犬養連五百依、安麻呂、小山守、大麻呂等、是一祖子孫、骨肉孔親、請共沐天恩、同給宿禰姓、詔許之、○丁亥、先是遣使七道、巡撿國司之狀迹、使等至、是復命、詔依使奏狀、上等者進位二階、中等者一階、下等者破選、其犯法尤甚者、丹後守從五位下羽林連兄麻呂處流、周防日川原史石庭等除名焉、授正六位上背奈公行文從五位下、○渤海郡王使高齊德等八人入京、○丙申、遣使賜高齊德等衣服冠履、渤海郡者舊高麗國也、淡海朝廷七年冬十月、唐將李勣伐滅高麗、其後朝貢久絶矣、至是渤海郡王遣寧遠將軍高仁義等二十四人朝聘、而著蝦夷境、仁義以下十六人並被殺害、首領齊德等八人僅免死而來、

五年春正月戊戌朔、廢朝、雨也、○庚子、天皇御大極殿、王臣百寮及渤海使等朝賀、○甲辰、天皇御南苑、宴五位已上、賜祿有差、○甲寅、天皇御中宮、高齊德等上其王書幷方物、其詞曰、武藝啓、山河異域、國土不同、延聽風猷、但增傾仰、伏惟大王天朝受命、日本開基、奕葉重光、本枝百世、武藝忝當列國、濫惣諸蕃、復高麗之舊居、有扶餘之遺俗、但以天崖路阻、

○するを云 ○奕葉、原本葉を業に作る天平十一年十二月啓文に據て改む ○扶餘、文獻通考に夫餘國在玄菟北千里南與高勾驪東與挹婁西與鮮卑接北有弱水云々とあり扶餘は今朝鮮忠淸南道扶餘郡なり百濟を云 ○海漢悠々、海河の遙に距てるを云 ○音耗、字書に猶言消息耗本消耗因消而爲消息とあり ○結援、狩谷氏云可疑

○果毅都尉、唐書百官志に折衝都府左右果毅都尉各一人とあり ○舍航等、原本舍那婁に作る 會本金イ本に據て改む ○貂、字苑に貂似鼠黄色者とあり一本豹に作る ○土宜、其地に產せし物を云 ○獻芹、列子の楊朱篇に出づ、物を贈る謙辭なり ○皮幣、原本幣を弊に作る淀本に據て改む ○主理、一本主を生に作ると云 ○披膳、考證に膳疑贍字と云り ○音徽、文選陸機擬古詩に思君徽與音音徽日夜離、注に徽美也言思君美德及音信也とあり音問の意なり ○雅樂寮之樂、雅樂式に凡賜蕃客宴日官人率雜樂人供事所須樂色臨時聽官處分とあり

(二月)守部連、錄河內神別守部連振魂命之後とあり

(三月)鳥池塘、所在詳ならず ○曲水之詩、池邊の細流にて曲水の宴を催し詩を賦せしめられしなるべし ○田形內親王、內の字は紀略に據て補ふ天武紀二年に次夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘生一男二女云

海漢悠々、音耗未通、吉凶絕問、親仁結援、庶叶前經、通使聘隣、始乎今日、謹遣寧遠將軍郎將高仁義、游將軍果毅都尉德周、別將舍航等二十四人、齎狀、幷附貂皮三百張奉送、土宜雖賤、用表獻芹之誠、皮幣非珍、還慚掩口之誚、主理有限、披膳未期、時嗣音徽、永敦隣好、於是高齊德等八人並授正六位上、賜當色服、仍宴五位已上及高齊德等、賜大射及雅樂寮之樂、宴訖賜祿有差、

○二月丁卯朔壬午十六、以從六位下引田朝臣虫麻呂、爲送渤海客使、○癸未十七、勑、正五位下鍛冶造大隅、賜守部連姓、○三月丁酉朔己亥三、天皇御鳥池塘、宴五位已上、賜祿有差、又召文人、令賦曲水之詩、各賚絁十疋布十端、內親王以下、百官使部已上、祿亦有差、○辛丑五、二品田形內親王薨、遣正四位下石川朝臣石足等、監護喪事、天渟中原瀛眞人天皇(天武)之皇女也、○丁未十一、制、選敍

之日、宣命以前、諸宰相等、出立廳前、宣竟就座、自今以後、永爲恒例、○甲子、勅、定外五位位祿蔭階等科、又勅、補事業位分資人者、依養老三年十二月七日格、更無改張、雖然資人考選者、廻聽待滿八考、始還當色、外位資人十考成選、並任主情願、通取散位勳位位子及庶人、簡試後請、請後犯罪者、披陳所司、推問得實、決杖一百、追奪位記、却還本色、其三關、筑紫、飛驒、陸奧、出羽國人、不得補充、餘依令、勅、京官文武職事、五位以上、給防閤者、人疲道路、身逃差課、公私同費、彼此共損、自今以後、不須更然、其有官人、重名特給馬料、給式有差、事並在格、

○夏四月丁卯朔、日有蝕之、○丁丑、陸奧國請新置白河軍團、又改丹取軍團爲玉作軍團、並許之、○辛巳、太政官奏曰、美作國言、部內大庭眞

々其三日。田形皇女。○宣命以前云々、式部式に凡於朝廷宣命者群官降座立堂前とあり ○諸々相等、大臣より參議までを云 ○勅定外五位云々、三代格卷五に神龜五年三月廿八日格文に太政官謹奏內外五位不合同等事右謹按官位令外名之興者自正五位上階訖從五位下階於內位相當惣是四階又據選敍令云々准祿令云々則知內外之目舊來殊號祿料之色未有區分稱數等級豈合同科自今以後隨名異秩以外則別姓高下以內則擇家門地其五位以上子孫歷代相襲冠蓋相望並明經秀才堪爲國家大儒俊生領袖者即選內位餘選外位但得外位後積其功効應入內位者便敍當位當階不得連延日時但其別勅特授不拘此式とさいひ外五位の位祿、位田、賻物、位分資人、蔭其子事、父妻の待遇等に就て一々規定せり ○七日格、養老三年十二月紀（一四五頁）に見ゆ ○位人の選、選敍令に見ゆ ○外位資人云々、令集解卷十七に神龜五年三月廿六日格云位分資人內位資人以八考爲限外位資人以十考爲限、續後紀承和六年九月紀に外五位資人滿限者宜又依令行之とさ見ゆ ○勳位々子、原本位一字なし閣本曾本淀本に據て補ふ ○三關、前に出づ ○防閤、養老三年十二月紀（一四五頁）に出づ ○馬料、太政官式に凡諸司馬料起正月盡六月計上日一百廿五以上給春夏料云々とあり ○給式有差云々、式部式兵部式及中務式に見ゆ

〔四月〕○白河、和名抄國郡部に陸奧國郡名白河之良加波）今磐城國東西白川の二郡となる ○丹取、名取なり和銅六

年十二月に此郡を建てしこと見ゆ
○玉作軍團、抄國郡部に陸奧國郡名玉造（太萬豆久里）今陸前國玉造郡なり軍の字は山崎校本に據て補ふ
○大庭眞嶋、抄國郡部に美作國大庭（於保無波）眞嶋（萬志萬）とあり
○庸米、孝德紀に一戸庸米五斗、主計式に凡諸國輸庸一丁三斗と見ゆ
○外位位祿云々、太政官式に凡給外位祿者云々其身在外國及國司者以當國正税給之とあり、亦式部式に見ゆ
○恢復舊壤、舊の領土を恢復するを云原本壤を懷に作る閣本淀本に據て改む
○相撲、大日本史注云公事根源神龜三年始召諸國相撲蓋五年誤爲三年歟とあり
○如此、類史此を是に作る
（五月）遭澇、字書に澇は淹（ヒタス）也、また潦と通じ潦は雨水大貌とあり水の久しく滯りて滅ぜるを云

嶋二郡、一年之內、所輸庸米八百六十餘斛、山川遼遠、運輸大難、人馬並疲、損費極多、望請、輸米之重、換綿鐵之輕、又諸國司言、運調行程遙遠、百姓勞弊極多、望請、外位位祿、割留入京之物、便給當土者、臣等商量、並依所請、伏聽天裁、奏可之、是時、諸國郡司及隼人等授外五位、並以位祿便給當土也、○壬午（十六）、齊德等八人、各賜綵帛綾綿有差、仍賜其王璽書曰、天皇敬問渤海郡王、省啓具知、恢復舊壤、聿修曩好、朕以嘉之、宜佩義懷仁、監撫有境、滄波雖隔、不斷往來、便因首領高齊德等還次、付書并信物綵帛一十疋、綾一十疋、絁二十疋、絲一百絇、綿二百屯、仍差送使、發遣歸鄉、漸熱、想平安好、○辛卯（廿五）、勑曰、如聞、諸國郡司等、部下有騎射相撲及膂力者、輙給王公卿相之宅、有詔搜索、無人可進、自今以後、不得更然、若有違者、國司追奪位記、仍解見任、郡司先加決罸、准勑解却、其誂求者、以違勅罪罪之、但先充帳內資人者、不在此限、凡如此色人等、國郡預知、存意簡點、臨勑至日、即時貢進、宜告內外咸使知聞、○五月（丙申朔）辛亥（十六）、左右京百姓、遭澇被損、七百餘烟、賜布穀鹽、各有差、○乙卯（廿）、太白晝見、○丙辰（廿一）、授

○鹽、原本監に作る閣本從本に據て改む

○少麻呂、天平元年二月紀(一二二頁)宿奈麻呂に作る
○雜物、同紀に佐比物に作る
○三助、閣本王助に作る
○若湯坐宿禰、原本湯を陽に作る狩谷校本に據て改む
○始授外五位、外五位を授くることは前に數々見えたるを此に始授とあるは三月廿八日の勅に依りて內官にも外五位を授くるに至りしを云るなるべし
〔六月〕拜辭、暇乞するを云
〔七月〕河內王卒、紹運錄に高市皇子曾孫に川內王見え、萬葉三に河內王を豊前國鏡山に葬りし時手持女王作歌三首を收す
○三品、大日本史注に新田部親王元年既叙一品此云三品誤と云り ○大將軍、考證に案和銅四年八月詔新田部親王爲知五衞及授刀舍人事親王稱大將軍蓋以此と云 ○授明一品、紀略明字なし、考證云案天武朝時位淨位爲諸王已上之位追大寶定制改官名位號無復此稱且新田部親王元年既叙一品此云授明一品者未詳と

正五位上門部王、從四位下、正四位下石川朝臣石足、正四位上、正五位上大宅朝臣大國、阿倍朝臣安麻呂、並從四位下、從五位上小野朝臣牛養、正五位下、從五位下多治比眞人占部、從五位上、正七位上阿倍朝臣帶麻呂、正六位下巨勢朝臣少麻呂、從六位下中臣朝臣名代、正六位上高橋朝臣首名、大伴宿禰首麻呂、正六位下紀朝臣雜物、正六位上坂本朝臣宇頭麻佐、田口朝臣年足、正七位下笠朝臣三助、下毛野朝臣帶足、外正六位上津嶋朝臣家道、從六位上上毛野朝臣宿奈麻呂、正六位上若湯坐宿禰小月、葛野臣廣麻呂、丸部臣大石、葛井連大成、並外從五位下。是日、始授外五位、仍勅曰、今授外五位人等、不可滯此階、隨其供奉、將叙內位、宜悉茲努力莫怠。○六月庚午、遣渤海使使等拜辭。○壬申、水手已上惣六十二人、賜位有差。○秋七月癸丑、從四位下河內王卒。○乙卯、勅三品大將軍新田部親王授明一品。

（八月）甲午、此月甲子朔にて甲午なし、午恐くは子の誤なるべし
○置內匠寮、職員令集解に格文を載せて七月廿一日とす
○史生八人、格文に此下に直丁二人駈使丁二十人右令外增置以補闕少其使部以上考選祿料一同木工寮宜付所司以爲中恒寮卽入於中務省管內之員とあり
○置中衞府、帝王編年記は七月廿一日に係け集解所引の格文內匠寮を置ける月日と合へり
○（注）曰東舍人、原本曰東を日來に作る諸本に據て改む
○周衞、狩谷氏は周恐固といへど前にも周とあり輙く從ひ難し
○事並在格、此格文三代格に見えず
○上表、狩谷校本に上之下當有表字と云るに據て補ふ
○行道、法會に衆僧讀經しつゝ佛座の周圍を繞りあるくを云
○壬申、九日なり甲申の上に叙すべし
○改定諸國史生云々、天

○八月（甲子朔）甲午、詔曰、朕有所思、比日之間、不欲養鷹、天下之人、亦宜勿養、其待後勅、乃須養之、如有違者、科違勅之罪、布告天下、咸令聞知、是日、勅、始置內匠寮、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、史生八人、使部已下雜色匠手、各有數、又置中衞府、大將一人、從四位上少將一人、正五位上將監四人、從六位上將曹四人、從七位上府生六人、番長六人、中衞三百人、號曰東舍人、使部已下亦有數、其職掌常在大內、以備周衞、事並在格、正五位下守部連大隅上表、乞骸骨、優詔不許、仍賜絹一十疋、絁一十疋、綿一百屯、布四十端、○甲申、勅、皇太子寢病、經日不愈、自非三寶威力、何能解脫患苦、因茲敬造觀世音菩薩像一百七十七軀、幷經一百七十七卷、禮佛轉經、一日行道、緣此功德、欲得平復、又勅、可大赦天下、以救所患、其犯八虐、及官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜得財、常赦所不免者、並不在赦限、○壬申、太政官議奏、改定諸國史生博士醫師員幷考選叙限、史生大國四人、上國三人、中下國二人、以六考成選、滿即與替、博

平神護二年五月乙卅及寶龜十年閏五月紀を合せ見るべし、舊制は國別に史生二人博士醫師一人（職員令）史生は八考を以て博士醫師は十考を以て成選す（選敍令）
○諸並在格、此格三代格に見えず
○丁卯、四日なり壬申の上に叙すべし
○九月、那富山、卽奈保山なり大和志に那富山墓在添上郡佐保山西陵之西とあり
○年二、東大寺要錄二の下に歲の字あり
○十月、義淵法師卒、元亨釋書に傳あり、法相宗の僧
○賻絁云々、喪葬令集解に大寶元年七月四日の勅を引て云僧綱賻物者僧正准正五位大少僧都律師並准從五位給之、治部式に凡僧綱賻物者僧正准四位大少僧都各准正五位云々とあり後に改められしなり
○布二百端、略記二を三に作る
○十一月、智努王、原本智を知に作る諸本に據て改む

士醫師以八考成選、但補博士者、惣三四國而一人、醫師每國補焉、還滿與替、同於史生、語並在格、○丙戌、天皇御東宮、緣皇太子病、遣使奉幣帛於諸陵、○丁卯、太白經天、○九月丙午、皇太子薨、○壬子、葬於那富山、時年二、天皇甚悼惜焉、爲之廢朝三日、爲太子幼弱、不具喪禮、但在京官人以下、及畿內百姓素服三日、諸國郡司、各於當郡擧哀三日、○壬戌、夜流星、長可二丈餘、光照赤四斷、散隕宮中、○冬十月壬午、僧正義淵法師卒、遣治部官人、監護喪事、又詔賻絁一百疋、絲二百絇、綿三百屯、布二百端、○十一月癸巳朔、雷、○乙未、以從四位下智努王、爲造山房司長官、○壬寅、制、衞府府生者、兵部省補焉、○乙巳、冬至、御南苑、宴親王已下五位已上、賜絁有差、○庚申、擇智行僧九人、令住山房焉、○十二月己丑、金光明經六十四帙六百四十卷、頒於諸國、國別十卷、先是、諸國所有金光明經、或國八卷、或國四卷、至是寫備頒下、隨經到日、卽令轉讀、爲令國家平安也、

〔己巳〕天平元年春正月壬辰朔、宴群臣及內外命婦於中宮、賜絁有差、○戊戌、

【天平元年】六人部王卒、養老五年正月紀に從四位上を賜はり神龜三年九月紀印南野行幸に際し裝束司となれり
○幷餔、考證に餔當作酺史記孝文本紀云文帝酺位酺五日云々案淸寧天皇紀云四年五月大餔五日亦酺誤作餔
○七十、原本十を寸に作る諸本に據て改む
(二月)長屋王云々、大日本史注に今昔物語曰天平元年二月設大法會於元興寺長屋王奉敕供養諸僧有一沙彌濫行乞飯王撻碎其頭人皆譏王後有嫉王者讒之帝曰王欲傾國家法會之日行不善帝大怒遣兵圍王第王仰藥而死今考往生傳其殺沙彌蓋下胥所爲而嫉王者釀成讒說也と云り
○衞門佐、衞の上略記左の字あり
○虫麻呂、原本虫を忠に作る曾本淀本に據て改む
○津嶋朝臣、以下外從五位下まで十六字金本閣本になし
○外從五位下紀朝臣、原本位一字衍れり故に削る

饗五位以上於朝堂。○壬寅、正四位上六人部王卒。○丁未、勅、孟春正月、萬物和悅、宜給京及畿內官人已下酒食價直幷餔一日。○壬子、詔、五位以上高年、不堪朝者、遣使就第慰問、兼賜物。八十已上者、絁十疋、綿二十屯、布三十端、七十已上者、絁六疋、綿十屯、布二十端。○二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等告密、稱左大臣正二位長屋王私學左道、欲傾國家。其夜、遣使固守三關。因遣式部卿從三位藤原朝臣宇合、衞門佐從五位下佐味朝臣虫麻呂、左衞士佐外從五位下津嶋朝臣家道、右衞士佐外從五位下紀朝臣佐比物等、將六衞兵、圍長屋王宅。○壬申、以大宰大貳正四位上多治比眞人縣守、左大辨正四位上石川朝臣石足、彈正尹從四位下大伴宿禰道足、權爲參議。巳時、遣一品舍人親王、新田部親王、大納言從二位多治比眞人池守、中納言正三位藤原朝臣武智麻呂、右中辨正五位下小野朝臣牛養、少納言外從五位下巨勢朝臣宿奈麻呂等、就長屋王宅、窮問其罪。○癸酉、令王自盡。其室二品吉備內親王、男從四位下膳夫王、无位桑田王、葛木王、鉤取

○佐比物、神龜五年五月紀雜物に作る
○六衛、左右兵衛、左右衛士、衛門、中衛なり
○壬申、公卿補任に九日を壬申とせり
○正四位上石川朝臣、原本位一字衍れり故に刪る
○擬爲參議、是時は未だ參議たりて正官とせざるなり大寶二年五月丁亥紀（二一九頁）に云り
○癸酉、公卿補任は十日とせり
○王自盡、山崎校本引一本王の上に長屋の二字あり獄令に五位以上及皇親犯非惡逆以上聽自盡於家とあり略記に自念无罪被囚必爲他刑不如自害一郎服毒藥忽以頓死、時年四十六、懷風藻に左大臣正二位長屋王三首年五十四、補任に年五十六、或四十六とあり萬葉三に神龜六年己巳左大臣長屋王死之後倉橋部女王作歌一首を載す
○膳夫王、長屋王の長子なり萬葉膳部王に作る
○鉤取王、原本鉤を釣に作る紀略略記及寶字七年十月紀に據て改む
○自經、原本經を縊に作

王等同亦自經。乃悉捉家內人等、禁著於左右衞士兵衞等府。○甲戌、遣使葬長屋王吉備內親王屍於生馬山。仍勅曰、吉備內親王者無罪、宜准例送葬。唯停鼓吹。其家令帳內等並從放免。長屋王者依犯伏誅、雖准罪人、莫醜其葬矣。長屋王、天武天皇之孫、高市親王之子、吉備內親王、日並知皇子尊之皇女也。○丙子、勅曰、左大臣正二位長屋王忍戾昏凶、觸途則著、盡慝窮姧、頓陷疎網。苅夷姧黨、除滅賊惡、宜國司莫令有衆。仍以二月十二日依常施行。○戊寅、外從五位下上毛野朝臣宿奈麻呂等七人、坐與長屋王交通、並處流。自餘九十人悉從原免。○己卯、遣左大辨正四位上石川朝臣石足等、就長屋王弟從四位上鈴鹿王宅、宣勅曰、長屋王昆弟姊妹子孫及妾等合緣坐者、不問男女、咸皆赦除。是日、百官大祓。○壬午、曲赦左右京大辟罪已下、幷免緣長屋王事徵發百姓雜徭。又告人漆部造君足、中臣宮處連東人、並授外從五位下、賜封三十戶、田十町。漆部駒長從七位下、並賜物有差。○丁亥、長屋王弟姊妹幷男女等見

ろ天平寶字七年十月藤原朝臣弟貞傳に天平元年長屋王有レ罪自盡其男從四位下膳夫王無位桑田王葛木王鉤取王皆經時安宿王黄文王山背王并女敎瞬復合ニ從坐一以ニ藤原太政大臣之女所レ生特賜ニ不死一と見ゆ　○生馬山、生駒山なり大和志に雙墓在ニ平群郡梨本村一稱ニ長墓一左大臣正二位長屋王一稱ニ宇司墓一二品吉備内親王とあり梨本村は今生駒郡平群村の大字となれり　○皷吹、天武紀十二年六月（紀下二九五頁）大伴連望多薨云々發ニ皷吹一葬之とある是なり　○天武天皇之孫、原本天武の二字なし諸本及紀略に據て補ふ　○日並知、原本知を智に作る紀略に據て改む　○昏凶、原本昏を民に作る諸本に據て改む　○踈綱、原本綱を網に作る淀本に據て改む　○十二日、癸酉にて王の忌日なり　○上毛野朝臣、原本上を下に作る曾本淀本及紀略に據て改む神龜五年五月丙辰紀亦上に作る　○百官大祓、長屋王の穢に因れる臨時の大祓なり　○左右京、京の字は曾本淀本及紀略に據て補ふ　○賜封、紀略封の上に食字あり

存者、預給祿之例。

○三月癸巳（辛卯朔　三）、天皇御松林苑、宴群臣、引諸司并朝集使主典以上于御在所、賜物有差。○甲午（四）、天皇御大極殿、授正四位上石川朝臣石足、多治比眞人縣守、藤原朝臣麻呂並從三位、從四位上鈴鹿王正四位上、從四位上長田王、從四位下葛城王並正四位下、從四位下智努王、三原王並從四位上、正五位下櫻井王正五位上、无位阿紀王從五位下、從四位下大伴宿禰道足正四位下、正五位下粟田朝臣人上正五位上、從五位上車持朝臣益、佐伯宿禰豐人並正五位下、從五位下息長眞人麻呂、伊吉連古麻呂、縣犬養宿禰石次、小野朝臣老、布勢朝臣國足並從五位上、外從五位下中臣朝臣名代、巨勢朝臣少麻呂、阿倍朝臣帶麻呂、坂本朝臣宇

（三月）松林苑、五月甲午紀（二一六頁）に松林苑、二年三月丁亥紀に松林宮と見ゆ、同所なり

○阿紀王、十七年正月乙丑紀阿貴王に、萬葉安貴王に作る

○豐人並、並の字は曾本淀本に據て補ふ

○國足、原本足を之に作る三年五月辛酉紀及養老七年正月紀（一七六頁）に據て改む

○紀朝臣飯麻呂、此六字は金本皆本注本に據て補ふ　○垣津連、他に見えず　○太政官、原本官を大臣の二字に作る類史に據て改む　○四丈廣絁、孝徳紀大化二年（紀下一七九頁）に田一町絹一丈四町成匹長四丈廣二尺半絁二丈二町成匹長廣同絹とあり　○六丈狹絁、養老三年五月紀（一四〇頁）に見ゆ　○班口分田云々、口分田收授の事戸令に詳なり事に於て不便とは何を指せるか令制との異同詳ならず

（四月）幻術、原本幻を葯に作る注本に據て改む　○壓魅、字書に壓は[illegible]　○左道、[illegible]左道一以致人於死也と云　○呪咀、字書に呪は詛也とあり咀は詛の異文なり詛は請神加殃也とあり賊盗律に凡有所憎惡而造厭魅及造符書呪詛欲以殺人者各以謀殺論減二等と見ゆ　○詐道、詐は僞に通ず　○教化、原本化を他に作る今注本に據て改む

頭麻佐、並從五位下、正六位上巨勢朝臣奈氐麻呂、紀朝臣飯麻呂、大神朝臣乙麻呂、三國眞人大浦、正六位下小治田朝臣諸人、坂上忌寸大國、正六位上後部王起、垣津連比奈、並外從五位下、以中納言正三位藤原朝臣武智麻呂爲大納言、○癸丑、太政官奏曰、令諸國停四丈廣絁、皆成六丈狹絁、又班口分田、依令收授、於事不便、請悉收更班、並許之、○丁巳、以正八位上紀直豐嶋爲紀伊國造、○夏四月壬戌、播磨國賀茂郡加主政主帳各一人、○癸亥、勅、內外文武百官及天下百姓、有學習異端、蓄積幻術、壓魅呪咀、害傷百物者、首斬從流、如有停住山林、詳道佛法、自作教化、傳習授業、封印書符、合藥造毒、萬方作恠、違犯勅禁者、罪亦如此、其妖訛書者、勅出以後、五十日內首訖、若有限內不首、後被糺告者、不問首從、皆咸配流、其糺告人、賞絹三十疋、便徵罪家、又勅、每年割取伊勢神調絁三百疋、賜任神祇官中臣朝臣等、太政官處分、舍人親王參入朝廳之時、諸司莫爲之下座、爲造山陽道諸國驛家、充驛起稻五萬束、○乙丑、筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣鳥麻呂奏、可供奉神

○書符、原本符を符に作る閣本淀本に據て改む賊盜律には符書とあり字書に衞士驅役鬼神以朱墨作書篆繞成文者謂之符とあり
○合藥造毒、賊盜律に凡以毒藥々人及賣者絞、又凡造畜蠱毒及敎令者絞とあり
○妖訛書、賊盜律に凡造妖書及妖言者遠流とあり

齋之狀、授外從五位下、賜物有數、○庚午、諸國兵衞資物、令當郡見在郡司節級輸之、仍附貢調使送所司、其輸法、以上絁一疋充銀二兩、以上絲小二斤、庸綿小八斤、庸布四段、米一石、並充銀一兩、卽依當土所出、准銀廿兩、

○神調、調は諸本及類史に據て補ふ　○諸司、諸の字は諸本に據て補ふ親王に對する敬禮の事持統四年七月詔に見え式部式に凡在朝堂座見親王及太政大臣者磬折而立若見左右大臣云々見親王及太政大臣者並起座また彈正式にも見ゆれど此に載する所と異同あり　○驛起稻、大寶二年二月紀(二七頁)に見ゆ　○宗形朝臣鳥麻呂、十年二月紀に筑紫宗形朝臣鳥麻呂とあり郡領を以て世々宗形神主を兼帶す延曆十九年十二月之を停めらる　○兵衞資物、養老四年五月紀に太政官奏兵衞采女養物等類事便以太政官印印之とみゆ此文に見ゆる養物は卽資物なり兵衞等に給與する品を云　○其輸法、法の字は諸本に據て補ふ　○小二斤、雜令に權衡廿四銖爲兩(三兩爲大兩一兩)十六兩爲斤とあり　○並充、金本閣本並の字なし

(五月)松林苑、諸本及紀略苑の字なし
○准令、選叙令に見ゆ
○關司勘過、關市令に凡行人賫過所及乘驛傳馬出入關者關司勘過錄白案記とあり
○交名、諸本交を挟に作る交名とは補任せられたる人の氏名を注したるものを云
(六月)講仁王經、玄蕃式に凡天皇卽位則講說仁王般若經(一代一講)とあり

○五月甲午、天皇御松林苑、宴王臣五位已上、賜祿有差、亦奉騎人等、不問位品、給錢一千文、○庚戌、太政官處分、准令、諸國史生及傔仗等、式部判補、赴任之日、例下省符、符內仍偁關司勘過、自非辨官不合此語、自今以後、補任已訖、具注交名、申送辨官、更造符乃下諸國、○六月庚申朔、講仁王經於朝堂及畿內七道諸國、○辛酉、廢營廚司、○己卯、左京職獻龜、長五寸三分、闊四寸五分、其背有文云、天王貴平知百年、○庚辰、薩摩

に同じく御德のいや高きを云り
○百官、官は姓の誤ならむ百官にては穩當ならず
○安久爲而之、爲は輕き意の「して」なり之(シ)は強める意の助辭、以上此段の大意は凡そ天地の大瑞顯はるゝは神代以來上に聖君まし〳〵臣下亦賢にして天下太平百姓安穩なる御世にこそあれと思食すとなり、かく詔給ふは次に御自身の事を謙遜して專ら太上天皇の聖德によれるよしを詔給はむとてなり
○大命坐、第三の宣命に云り
○聞持流事云々、實地に見聞せることの少きを云少美は少なさになり
○一二乎漏落事毋在牟加止、多くの中には稀に過失のある事もあらむかとなり
○太上天皇、元正天皇なり解に此尊號は持統天皇に始まりて其以前に例まさゞれば諸書に其訓見えざれど宣命などに字音にて申さむもいかゞなれば今新にオホキスメラミコトと訓み奉りつと云り

行賜敷賜乍供奉賜間爾、京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等伊、負圖龜一頭獻止奏賜不爾所聞行、驚賜怪賜所見行歡賜嘉賜氏、所思行久者、于都斯久母皇朕政乃所致物爾在米耶、此者太上天皇厚支廣支德乎蒙而高支貴支行爾依而顯來大瑞物曾止詔命乎衆聞宣、辭別詔久、此大瑞物者、天坐神地坐神乃相宇豆奈比奉福奉事爾依而顯久出多留瑞爾在羅之止奈母神隨所思行須、是以天地之神乃顯奉留貴瑞以而御世年號改賜換賜、是以改二神龜六年一爲二天平元年一而、大赦天下、百官主典已上人等、冠位一階上賜事乎始、一二乃慶命詔賜惠賜行賜止詔天皇命乎、衆聞食宣、其賜レ物、親王絁一百疋、大納言七十疋、三位四十疋、四位一十五疋、五位一十疋、正六位上絁四疋、綿一十屯、定額散位、及左右大舍人、六衞府舍人、中宮職舍人、諸司長上、及史生各布二端、使部伴部門部主帥各布一端、其女孺釆女准二大舍人一、宮人准二使部一、又天下百姓高年八十已上、及孝子順孫、義夫節婦、鰥寡惸獨、疹疾不レ能二自存一者、依二和銅元年一、又左右兩京今年田租、在京僧尼之父今年所レ出租賦、及到二大

○恐古士物、士物に萬葉に舅子自物、鵜自物などある自物と同じくそれがやうにといふ意なり
○進退、シヽマヒと讀みてためらふ意
○獨賀、難を理につけて遁ふみ云
○愚拙羸、モトホキと讀みて弱る意の古言、進退よりここまでは畏しく恐れ畏みいかにすべきかと慈び給へる詞を云
○自勝光宇移賜久者、文なる事共を問ひ申し其御答を申し給ふなり
○朕等乃、これより答詞まで問ひ奉らせ給ふ御言なり
○問食政乎者、云々の事はいかに仕奉るべきかと天皇にうかゞひ問ひ奉り給ふなり
○如久聞不爲云々、二つ重ねたるはかくや答へ給はむはたかくや答へ給はむかと輾転に思ひ煩ひ給ふにして問ひ奉り給ひしさなり、臣下の問ひ奉る政なれば國家一體は天皇に問ひ奉り給ふ義、下の御氣の如くは舍本諸下國本になし
○台鐵坂、鐵に從三字な

宰府路次驛戶租調、自神龜三年已前、官物未納者、皆免、又陸奧鎭守兵、及三關兵士、簡定三等、具錄進退如法、臨敵振威、向冐万死、不顧一生之狀、幷姓名年紀居貫軍役之年、使差專使上奏、其諸衞府、內武藝可稱者、亦以名奏聞、又諸大陵、差使奉幣、其改諸陵司爲寮、增員加秩、又諸國天神地祇者、宜令長官致祭、若有限外應祭山川者、聽祭、卽免祝部今年田租、又在近江國紫郷山寺者、入官寺之例、又五世王嫡子已上、娶孫王生男女者、入皇親之限、自餘依慶雲三年格、其獲龜人河內國古市郡人无位賀茂子虫、授從六位上、賜物絁廿疋、綿卌屯、布八十端、大稅二百束、又勅、唐僧道榮、身生本鄕、心向皇化、遠涉滄波、作我法師、加以訓導子虫、令獻大瑞、宜從五位下階、仍施緋色袈裟幷物、其位祿料一依令條、既而授正五位下小野朝臣牛養、正五位上榎井朝臣廣國、並從四位下、正五位下大伴宿禰祖父麻呂、佐伯宿禰豐人、並正五位上、從五位上中臣朝臣廣見正五位下、從五位下大伴宿禰首、田口朝臣家主、並從五位上、外從五位下高橋朝臣首名、紀朝臣飯麻呂、正六位上多治比眞人多

くては上の答賜止の止字を受る言なくて語整はず故今補ふと云り

夫勢、藤原朝臣鳥養、並從五位下、

○白賜官爾耶云々、所司の某を某官に任じ某を某職に補せむと白すをいかにすべきかと太上天皇に問奉り給ふよしなり　○白賜倍婆、天皇の太上天皇に問ひ申し給へばなり　○敎賜云々、其事はかくし給へ此事はしか爲給へと太上天皇の天皇に敎へ給ふなり、於毛夫氣は令レ趣（オモブカセ）にて其導く方へ趣かしむる意なり　○答賜、原本答を益に誤れり淀本金イ本に據て改む　○供奉賜、天皇と坐して天下を治め給ふを供奉と詔ふはそれをも太上天皇に仕奉るわざとして詔ふなり　○藤原朝臣麻呂等伊、麻呂は不比等の四男にして左右京大夫たり萬葉四にも京職大夫とあり等は宍、進などをも籠めて云へるものと見るべし伊は人名の下に附て云助辭にて例多し　○負圖龜云々、上に左京職獻レ龜云々其背有レ文とある是なり萬葉一に圖負留神龜毛新代登泉乃河爾持越流云々と見ゆ　○驚賜怪賜、不德なる朕が代にさるめでたき祥瑞の出べきにあらずと怪み給ふとなり　○歡賜嘉賜、聞召しては怪み給ひ、見そなはしては歡び嘉（メ）で給ふとなり　○所致、大瑞を至らしむるを云　○依而、其御蔭に賴る意にて上の蒙りもこゝの依りも天皇の蒙り給ひ依り給ふよしなり　○辭別詔久、詔久の二字は解に辭別とのみ云る例なければさて補へるに據る　○顯久出多留云々、諸本共に顯久以下顯までの廿六字なき故に上の此大瑞者と云るを承けたる言なく語とゝのはずして聞えがたし故考ふるに此段和銅改元の詔中に此物者天坐神地坐祇乃相于豆奈比奉福波倍奉事爾依而顯久出多留寶爾在羅之止奈母神隨所念行須是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而御世年號改賜とあると全く同じ趣なればば今彼詔に依て廿六字を補ふべしと解に云へるに據て補ふ　○貴瑞以而、解に以の字は依の誤ならむと云ど本のまゝにても聞ゆ　○主典、諸官に長官、次官、判官、主典あり神祇官の主典は大史少史、太政官にては左右大少史、諸省にては大錄少錄、職寮にては大屬少屬是なり　○一二乃慶命詔賜、解に命の下諸本詔賜の二字なしかくては命惠賜といふつゞき穩ならず前詔にも慶命詔久とあれば補ひつとあるに據て補ふ　○定額散位、前に見ゆ　○中宮職、職員令義解に中宮謂二皇后宮一其太皇大后皇大后宮亦自二中宮一也考證云案此時未レ置二皇后一中宮乃謂二皇太夫人宮子孃所一レ居也宜レ合レ考九年十二月及天慶元年五月考證二と云　○使部、神祇太政二官を始め諸省寮職等にあり官省の雜事に駈使す　○伴部、藏部吹部掃部漆部膳部殿部の類を云　○門部、衞門府にあり　○主帥、衞士府にあり　○女孺、內侍司等にあり　○采女、膳司水司等にあり　○宮人、原本宮を官に作る諸本に據て改む宮人は義解に婦人仕官者之惣號也とありこゝは使部に準ずる身分卑しきものを云　○依和銅元年又、又當レ作レ文屬二上句一と狩谷校本に云、また年の下或は格字を脫せるか　○僧尼之父、原本父を文に作る類史に據て改む考證に案無二課役一故廻免二其父祖賦一也と云　○今年所出、年の字は諸本及類史に據て補ふ　○租賦、原本租を利に作る諸本及類史に據て改む　○三關兵士、軍防令に凡置レ關應二守固一者並置二配兵士一分番上下とあり　○諸陵司爲寮、爲の字は諸本及類史に據て補ふ、令制諸陵司と稱し治部省に屬せしを進めて寮となせるなり　○紫鄉山寺者、狩谷校本に紫下一本有レ樂字一と云者は原本々に作る會本及類史に據て改む紫樂ならば甲賀郡なり考證に卽志賀山寺とあり志賀山寺趾志賀郡見世村にあり崇福寺と云延喜式十五大寺の一なり今廢す　○官寺、私寺に對して云官社官戶官田等の官に同じ　○五世王、慶雲三年二月庚寅紀に准レ令五世之王雖レ得二王名一不レ在二皇親之限一云々自今以後五世之王在二皇親之限一其承レ嫡者相承爲レ王と　○娶孫、令集解に引けるには女字あり　○賜物絁、物字衍なるべし　○二百束、闕本會本淀本百を千に作る　○滄波、類史波を海に作る　○宜擬從五位下、考證云石原氏曰僧擬二俗位一者蓋爲レ賜二位祿一也と云　○飯麻呂、麻の字は闕本會本に據て補ふ　○石川朝臣石足薨、懷風藻に年六十三とあり

○丁卯、左大辨從三位石川朝臣石足薨、淡海朝大臣大紫連子之孫、少

○淡海朝大臣大紫連子、寶字六年九月年足傳に後岡本朝(齊明)大臣大紫蘇我臣牟羅志に作る
○安麻呂、天武紀下二四七頁)に遣蘇我臣安麻侶召東宮とある即此人
○藤原夫人、光明子なり、不比等の子
○語賜幣止、語字脱本詔に作るは誤なり、下文にも細事乃状語賜布止詔とあり
○天都位、皇國風の訓ならず漢文訓なり
○皇太子、神龜四年閏九月誕生、同年十一月立太子、同五年九月薨じ給ふ
○侍豆、坐豆とあるべきをかく書しゝは天皇に對へ奉りてなり
○藤原夫人、反正紀に皇夫人また夫人とあるを共にキサキと訓り
○皇后、オホキサキと訓む例なり、かく訓めば、皇太后のごとく聞ゆれど古くは天皇の妃、夫人をキサキと申し、其中なる第一のキサキを大后(オホキサキ)と申してこれ即ち皇后なりしなり
○年緒長久、年緒はたゞ年のことにて緒は添へ辭

納言小花下安麻呂之子也。○戊辰、詔立正三位藤原夫人爲皇后。○壬午、喚入五位及諸司長官于内裏、而知太政官事一品舍人親王宣勅曰、天皇大命良麻止親王等又汝王臣等語賜幣止勅久、皇朕高御座爾坐初由利今年爾至麻氐六年爾成奴。此乃間爾天都位爾嗣坐倍伎次止爲氐皇太子侍豆。由是其婆婆止在須藤原夫人乎皇后止定賜。加久定賜者、皇朕御身毛年月積奴。天下君坐而、年緒長久皇后不坐事母、一豆乃善有良努行爾在。又於天下政置而獨知倍伎物不有。必母斯理幣能政有倍之。此者事立爾不有。天爾日月在如、地爾山川有如、並坐而可有止言事者、汝等王臣等明見所知在。然此位乎遲定米豆良久波、刀比止麻爾母己我夜氣授留人乎波、一日二日止擇比、十日二十日止試定止斯伊波婆、許貴太斯意保伎天下乃事乎夜多夜須久行無止所念坐而、此乃六年乃内乎擇賜試賜而、今日今時眼當衆乎喚賜而、細事乃状語賜布止詔　勅聞宣。賀久詔者、挂畏支於此宮坐氐、現神大八洲國所知倭根子天皇我王祖母天皇乃始斯皇后乎朕賜日爾勅豆良久、女止云波等美夜、我加久云其父侍大臣

乃、皇我朝平助奉輔奉氏、頂伎恐美供奉乍、夜半曉時止休息事無久、淨伎明心平持氏、波波刀比供奉平所見賜者、其人乃宇武何志伎事欵事平、迯不得忘、我兒我王過无罪無有者捨麻須奈、忘麻須奈止負賜宣賜志大命依而、加爾加久爾年乃六年平試賜使賜氏、此皇后位平授賜、然毛朕時乃未爾波不有、難波高津宮御宇大鷦鷯天皇、葛城曾豆比古女子伊波乃比賣命皇后止御相坐而、食國天下之政治賜行賜家利、今米豆良可爾新伎政者不有、本由理行來迹事會止詔勅聞宣、既而中納言從三位阿倍朝臣廣庭更宣勅曰、天皇詔旨今勅御事法者、常事爾波不有、武都事止思坐故、猶在倍伎物爾有禮夜止思行之氏、大御物賜久止宣、賜親王絁三百疋、大納言二百疋、中納言一百疋、三位八十疋、四位卅疋、五位廿疋、六位五疋、內親王一百疋、內命婦三位六十疋、四位一十五疋、五位一十疋、

なり原本緒を諸に誤れば改む　○於天下政置而、原本置た冝に作る閣本曾本淀本に據て改む於字は常にオイテとよめど、こゝは古書の例にて於字を爾と云助辭に用ひて別に置(オキ)て)と書けるなり　○獨知、知るは行ふなり　○斯理幣能政、後方の政にて後宮のことなり　○事立、前に出づ　○山川、川は淸(ス)みて訓むべし、山と川となり　○有知、有は諸本在に作る　○並坐、天皇と皇后となり　○此位、皇后の位なり　○遲定米豆良久波、遲く定めつる故はの意なり、原本には定字なし曾本淀本金イ本に據て補ふ　○刀比止麻爾母、解に下のつゞきの語によりて考ふるに、かりそめにもなどいふ意の古言なるか又は誤字脱字などの有るか又思ふに賤き官職の名にもやあらむ然もあらば久良比止賣なるを久を刀に誤り良を落し賣を麻に誤れるか古事記仁德天皇段に倉人女、後宮職員令十二司の中なる藏司に藏人女見ゆ、こゝは皇后を立給ふことにつきて詔給ふなれば女官の賤しきものを詔給はむも由あるなり、又は加刀比止部なるを加を落し部を麻に誤れるか、職員令衛門府の下に門部二百人とある是を語には門人部といひしか、猶よく考ふべしと云り　○己我、天皇の聖躬ら詔給ふことなり　○夜氣、

解に夜は安を誤れるにて上げなりと云、又麻の說にて任ヶけ授くるなりとも云　○十月二十日止、これも上の一日二日と云ると同意にて何日月を云、次の六年乃内予と對へて心得べし　○試定止斯伊波婆、解に伊波婆の下に說語あるべし、そは容易く輕々しかるべしなどやうの語の有るべきなり刀比止麻留毋と云よりこれまでの大意は、いかに賤き官職にても己が心もて上げ授くる人たゞ僅に一二日十日廿日ばかりの間試み得て定めなば輕々しきしわざなるべしと云るにてまして皇后を定めむことはと次に云なりと云り　○牟貴太斯伎、解にコヽバク、コヽダクさもいひ物の數の多きをいひ又いかばかりかとの意にも用ひ又甚しき意、重き意、大なる意にもなれり、こゝは重く大きなる意なり　○意保伎、大きなり　○天下乃事乎夜云々、皇后を立て給ふ事は天下の政治の中に重き大なる事なれば輕くやは行ふべきの意にて乎夜の夜を多夜須久の下に移して解すべし　○六年乃内予、解に内の字は間ヶナ゙の誤かと云　○試賜而、原本而の字なし曾本淀本金イ本に據て補ふ　○詔賜布止、原本此四字脫せり閣本曾本淀本に據て補ふ　○此宮、平城宮なり　○祖母天皇、排畏支よりこゝまでは一つゞきにて祖母と云は御母の義、元正天皇を申奉れり　○斯皇后、斯は原本小字なりしを大字に改む　○賜賜、光明子の聖武天皇の妃となられしは元正天皇の御世なればかく詔給ひしなり賜の下留字あらまほし　○女止云波滋云々、女といはゞ何れも等しきものと思ひて賤がかく此女を汝命の妃と詔給へとはいはむや尋常の女にあらればこそかくいへとなり、かくいへとは汝命の妃と詔給へとの意　○其父侍大臣、不比等なり、當時は未だ在世中なりき　○皇我朝、我字大字なりしを小字に改む、スメラガミカドと訓みて助辭のガなり　○助奉、他の詔に輔奉と連ねていへる時は皆阿奈々比奉ると訓ればこゝの助もアナ、ヒと訓べし　○曉時、後世にはアカツキと訓めど萬葉には何れもアカトキとあれば然訓むべし　○休息事無久、事の字は諸本に據て補ふ　○波々刀比、解に古言なるか誤字なるかさだかならず、誤字ならば伊夜麻比などを誤れるかと云り、波々の々は金本曾本淀本婆に作れり　○所見賜者、所見はミシと訓むべし、萬葉一に見之賜者六に見之賜而などの例多し　○其人、不比等なり　○字武何志伎、すムガシとも通ひてうれしく欣ばしき意なり　○欲事、前に出づ　○逆不得忘、解に逆は遂を誤れるなるべしと云、山崎校本には賤の誤なりとす　○我兒我王、天皇をさして詔給ふなり、こゝにかく詔給ふは殊更に呼出せる御言にて此詔給ふ事を懇切にし給ふなり　○過无云々、皇后の御上を云　○忘麻須奈、父大臣の功勞を忘れ給ふなとにて其やがて此皇后をなほざりに思ほし給ふなとなり　○負賜、負ひ持たせ給ふにて仰せと同じ意の語なり　○加久留加久留、後に此ににて後のトニカクニと云に同じ　○然毛、シカルモと訓むべし、上を承けて後を起す語なりそは皇親にあらずして臣下の女を皇后とし給ふこと今に始まるにあらずと次の例を出さむが爲なり　○高津宮、原本津の字なし金イ本に據て補ふ　○大鷦鷯、金本閣本淀本共に鷦を焦に作り鷯字なし、こは鷦を焦に誤れるなるべし、古事記には大雀とのみ書けり、されにこゝにも大鷦鷯とあるは後人の書紀に依て改めしなるべし　○葛城曾豆比古、建内宿禰の第八子　○伊波乃比賣命皇后、此御名の下に皇后と添へたるは此に此事を樂給ふは皇后に坐しゝことを詔給ふが主なる故にそを確めむ爲なりと解に云、原本乃を及に誤れるを改む　○御相坐而、御遊ァひましてなり　○行賜家利、行賜の二字は諸本に據て補ふ　○新伎政者不有、臣下の女を皇后と定め給ふことは今新しきことにはあらずとなり政はたゞ事と云と同じかれど天皇の行ひ給ふことなれば政と云るなり新の字の訓につき解に荒木田久老が說を擧げて古へに新をあらたしと云ることなし、あらたしなり、そを後にあたらしと云に誤りアタラシと謬りたるなりと云え、さることなれば此もアラタシと訓みつと云り　○本由理、本よくよりなり　○食事曾止、賴くよりありし例によれる事ぞとなり、さて皇后を立て給ふことは常のことなるをこゝに仁德天皇皇后の例を引きてこと／＼しく詔給へるは臣下の女を皇后と爲給ふことはめづらかなる新政にはあらずとあれど實は新政なればなるべしと解にも論じき詔す　○御事法、上件の詔のことなり、事法と申せるは借字にて御言宣の意　○常事留渡不有、尋常の詔とは異なりとなり　○武都事加、時に此なれ今皇后を立給ふにつきてかく詳細に宣聞かせ給ふは尋常にはあらず殊に汝等を親しみて語り聞せ給ふぞとなり　○有時夜止、原本夜止を止夜に作る金本閣本淀本等に據て改む　○大御物、祿を云

(九月)仰、考證に孔氏雜說今公家文字用仰字北史時已有此語北齊孝昭皇帝紀詔云々亦仰議之品字箋以上詔下曰仰欲其仰以聽命也と云
○調綿、萬葉三に白縫筑紫の綿は身著けて未は著ねど云々と見ゆるは此綿を詠めるなり
○布十常、原本給常布に作る諸本に據て改む
(十月)日有蝕、原本蝕を餘に作る閣本淀本に據て改む
○辨淨、二年十月紀に淨を靜に作る
○道慈、大安寺緣起に是年更勅改造此寺即以道慈補律師兼賜食封一百戶とあり
(十一月)班田司、持統紀六年九月遣班田大夫等於四畿內云々と見ゆ
○位田功田、上に出づ
○賜田、田令に凡別勅賜人田者名賜田、民部式に凡位田功田賜田及神寺等田者各據本地不須輙改とあり
○不合與理、類史に理不合與に作る
○爲民要須者、田令に凡授田云々先無後少先貧

○九月庚寅、仰大宰府、令進調綿一十万屯。○辛丑、陸奥鎮守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎮兵人勤功可錄、請授官位勸其後人。勅、宜一列三十人各進二級、二列七十四人各一級、三列九十六人各布十常。○乙卯、正四位下葛城王爲左大弁。正四位下大伴宿禰道足爲右大弁。正三位藤原朝臣房前爲中務卿。從四位下小野朝臣牛養爲皇后宮大夫。正四位下長田王爲衞門督。○冬十月戊午朔、日有蝕之。○甲子、以辨淨法師爲大僧都、神叡法師爲少僧都、道慈法師爲律師。○十一月癸巳、任京及畿內班田司。太政官奏、親王及五位已上諸王臣等位田功田賜田、幷寺家神家地者、不須改易、便給本地。其位田者、如有情願以上易上者、計本田數任聽給之。以中換上者不合與理。縱有聽許爲民要須者、先給貧家。其賜田人、先入賜例、見無實地者、所司即與處分。位田亦同。餘依令條。其職田者、民部預計、令給田數、隨地寬狹取中上田。一分畿內、一分外國。隨闕收授、勿使爭求膏腴之地。又諸國司等、前任之日、開墾水田者、從養老七年以來、不論本加功人、轉買得家、皆咸還收、便給土人。若

後宮とあり要頭に字書に要は求也頭は當也用也與需通とあり要求して用ひむとする歟云

○墾開の授、民部式に凡畿外諸國墾、土職田者、每有其國、式部移送主稅寮、納其地子、混合正稅

○諸國司等云々、田令に官人於部內有空閑地、願佃者任聽營種、替解之日還公、解に官人者國司以上人、百姓爲墾司幷郡司、及百姓等墾種者即永爲私田とあり

○阿波國山背國陸田、民部式に凡山城阿波兩國陸田者隔年相交授之と見ゆ

○開荒爲熟、荒廢の地を開墾して熟田とするを云

【天平二年】令採擇廣、短籍に書す籍は短册にヒネリフミとあり書を識に籍文の義なり今俗所謂採鬮(モミクジ)也とあり採は原本探に作る類史紀略に據て改む

○布也、紀略布を帛に作る

○段、原本假に作る閣本に據て改む下同じ

○田夷村、所在詳ならず九年四月紀に田夷遠田郡

有其身未得遷替者、依常聽佃、自餘開墾者、一依養老七年格、又阿波國山背國陸田者、不問高下、皆悉還公、卽給當土百姓、但在山背國三位已上陸田者、具錄町段、附使上奏、以外盡收、開荒爲熟、兩國並聽、其勅賜及功者、不入還收之限、並許之、

二年春正月丙戌朔、廢朝、雨也、○丁亥、天皇御大極殿受朝、○壬辰、宴五位已上於中朝、賜祿有差、○辛丑、天皇御大安殿宴五位已上、晚頭、移幸皇后宮、百官主典已上陪從踏歌、且奏且行、引入宮裏、以賜酒食、因令探短籍、書以仁義禮智信五字、隨其字而賜物、得仁者絁也、義者絲也、禮者綿也、智者布也、信者段常布也、○辛亥、陸奧國言、部下田夷村蝦夷等、永悛賊心、既從敎喩、請建郡家于田夷村、同爲百姓者、許之、○二月丁巳、釋奠、詔遣右中辨正五位下中臣朝臣廣見、就大學寮宣勅、慰勞博士學生等勸勉其業、仍賜物有差、○三月丁亥、天皇御松林宮宴五位以上、引文章生等、令賦曲水、賜絁布有差、○辛卯、大宰府言、大隅薩摩兩國百姓、建國以來、未曾班田、其所有田、悉是墾田、相承爲佃、不願改動、若從

班授、恐多喧訴、於是隨舊不動、各令自佃焉、○丁酉、周防國熊毛郡牛嶋西汀、吉敷郡達理山所出銅、試加冶練、並堪為用、便令當國採冶、以充長門鑄錢、○庚子、熒惑晝見、○辛亥、太政官奏偁、大學生徒、既經歲月、習業庸淺、猶難博達、實是家道困窮、無物資給、雖有好學、不堪遂志、望請選性識聰慧、藝業優長者、十人以下五人以上、專精學問、以加善誘、仍賜夏冬服幷食料、又陰陽醫術及七曜頒曆等類、國家要道、不得廢闕、但見諸博士、年齒衰老、若不教授、恐致絶業、望仰吉田連宜、大津連首、御立連清道、難波連吉成、山口忌寸田主、私部首石村、志斐連三田次等七人、各取弟子、將令習業、其時服食料亦准大學生、其生徒、陰陽醫術各三人、曜曆各二人、又諸蕃異域、風俗不同、若無譯語、難以通事、仍仰粟田朝臣馬養、播磨直乙安、陽胡史眞身、秦朝元、文元貞等五人、各取弟子二人、令習漢語者、詔並許之、○夏四月甲子、太政官處分、畿內七道諸國主典已上、雖各職掌、至於行事、必應共知、或國司等、私造稅帳、竟後取署、不肯署名、因此上下觸事相違、又大稅收納、不得輕忽、進稅帳日、不問穎穀、

領遠田君雄人見ゆされば此田夷の住めりし地を田夷村と名けしなるべし(二月)勸勉、原本勸を觀に作る曾本淀本金イ本及紀略に據て改む(三月)熊毛、原本能野に作る閣本曾本淀本に據て改む○牛嶋、室積の東南三海里半なる孤島なり○吉敷郡達理山、詳ならず一說に大道村大字切畑に舊銅坑存す達理山は達理山の謬にて切畑なりと云へどいかゞあらむ○長門鑄錢、周防長門の鑄錢のこと類史續後紀三代實錄及三代格に見ゆ近藤淸石の說豐浦郡逢坂村時出二和銅開珍型子一蓋長門鑄錢司之阯也と云、又同郡修禪寺は鑄錢司の舊址かと云○聰慧、原本慧を惠に作る閣本曾本淀本及紀略に據て改む○夏冬服幷食料、大學式及大炊式に詳なり○七曜、日月及木火土金水の五星を合せて七曜と云其運行を推測して吉凶を知るなり○頒曆、曆を制して之を

頒布するを頒曆さ云　○奏朔元、奏原本秦に作る狩谷校本に據て改む　〔四月〕私造税帳、元昔式所載の官符に於て私造税帳さあり、税帳のことは延式に詳なり　○大税納、原本大の字なし閣本曾本及類史に據て補ふ　○輕忽、原本忽を惡に作る淀本に據て改む　○國内所出云々、賦役令に凡諸國貢獻物者皆盡當土所出云々さあり　○口味、美味なる物を云　○聖人太寶曰位、及び理財正辭曰義の二句は並に易の繫辭傳に出づ　○重明、易離卦彖傳に重明以麗乎正乃化成天下さあり　○齊時俗、原本齊を齋に作る諸本に據て改む　○懸允所職、狩谷校本に懸允恐倒、原本懸を戀に職を畫に作る金本閣本曾本に據て改む　○施藥院、病貧の徒を療養する所なり令京職に凡京中路邊病者孤子仰九箇條令其所見所遇隨便必令取送施藥院及東西悲田院　○大臣家、不比等の家を云　○充價、充字類史に據補ふ　〔六月〕神祇官曹司、神祇官廳を云　○災、霹靂するを

倉別署主當官人名、又國内所出珍奇口味等物、國郡司蔽匿不進、亦有因乏少而不進、自今以後、物雖乏少、不限驛傳、任便貢進、國内施行雜事、主典已上共知、其史生預事有失、科罪亦同也、○庚午、詔曰、聖人太寶曰位、因茲繼重明以聽民風、理財正辭曰義、所以裁衣裳而齊時俗、安不之事、在予一人、自今以後、天下婦女、改舊衣服、施用新樣、永言念茲、懸允所職、公卿百寮豈不愼歟、○辛未、始置皇后宮職施藥院、令諸國以職封幷大臣家封戸庸物充價、買取草藥、毎年進之、○六月甲寅朔、太政官處分、自今以後、史生已上上日數、毎月讀申長官、如長官不參、讀申大納言、○庚辰、緣旱令撿挍四畿内水田陸田、○神祇官曹司災、○壬午、雷雨、神祇官屋災、往々人畜震死、○閏六月甲午、制、奉幣伊勢大神宮者、卜食五位已上充使、不須六位已下、○庚子、緣去月霹靂、勅新田部親王率神祇官卜之、乃遣使奉幣於畿内七道諸社、以禮謝焉、○庚戌、勅、比者亢陽稍盛、思量年穀不登、宜遣使者四畿内、令撿百姓産業矣、

云(閏六月)卜食云々、神祇令に凡常祀之外須向諸社供幣帛者皆取五位以上卜食者充、唯伊勢神宮常祀亦同とあり原本卜を下に作る　閣本會本淀本及類史紀略に據て改む　○卒、原本卒に作る山崎校本に據て改む　○亢陽、旱を云字書に陽太甚也故天旱曰亢陽とあり

(七月)年料、齋宮式に詳なり　○禰宜二人云々、大神宮式に凡二所大神宮禰宜大小内人物忌、諸別宮内人物忌等並任度會郡人とあり　(八月)大微、太微宮なり北極紫微宮の東南に在り　○來歸、虫麻呂は神龜五年二月壬午紀に渤海客使となれり　(九月)多治比眞人池守薨、左大臣嶋の子和銅元年民部卿、靈龜元年大宰帥、養老二年二月中納言、同五年正月大納言となる　○催造司、神龜元年正月紀(一八〇頁)に見ゆ　○防人、九年九月癸巳紀に停筑紫防人歸于本郷差筑紫人令戍壹岐對馬とと見ゆるが如く諸國より差せるを停めて九州の人を用ふることゝせられしなるべし　○捉人家、捉一本作抵或是捉字と狩谷氏云り　○周防、原本防を芳に作る金本會本淀本に據て改

○秋七月癸亥、詔曰、供給齋宮年料、自今以後、皆用官物、不得依舊充用神戸庸調等物、其大神宮禰宜二人進位二階、内人六人一階、莫問年之長幼、○八月己丑、太白入大微中、○辛亥、遣渤海使正六位上引田朝臣虫麻呂等來歸、○九月壬子朔、日有蝕之、○癸丑、天皇御中宮、虫麻呂等獻渤海郡王信物、○己未、從二位大納言多治比眞人池守薨、左大臣正二位嶋之第一子也、○丙子、遣使以渤海郡信物、令獻山陵六所、并祭故太政大臣藤原朝臣(不比等)墓、○戊寅、正四位下葛城王、從四位下小野朝臣牛養、任催造司監、本官如故、○己卯、停諸國防人、○庚辰、詔曰、京及諸國多有盜賊、或捉人家劫掠、或在海中侵奪、蠹害百姓、莫甚於此、宜令所在官司、嚴加捉搦、必使擒獲、又安藝周防國人等、妄說禍福、多集人衆、妖祠死魂、云有所祈、又近京左側山原、聚集多人、妖言惑衆、多則萬人、少乃數千、如此之徒、深違憲法、若更因循、爲害滋甚、自今以後、勿使更然、又造陸

む
○因循、原本循を脩に作る考證に脩即循字古人書脩循多混驗漸錄云脩音遂正作循是也と云り
○亦然、更字諸本に據て補ふ
○造法、原本陸を法に作る閣本曾本淀本に據て改む下同し漢書揚雄傳上に李奇曰法遮禽獸之圍陣也とあり
○多捕、多の字は閣本曾本淀本に據て補ふ
○先朝禁斷、天武紀(下二七一頁)に四年四月詔諸漁獵者莫造檻穽及施機槍等之類とと見えたり
(十月)辨靜、元年十月紀(二二四頁)辨淨に作る
○酒部王卒、養老元年正月紀に從四位下を授けられ十月紀給封せらる
十一月 卷首に天平二年十二月とありて十二月の記事なきは本よりなかりしにや或は後に書寫の際に省略せるか考ふべし
○發屋、原本發を廢に作る諸本に據て改む

多捕禽獸者、先朝禁斷、擅發兵馬人衆者、當今不聽、而諸國仍作陸羅、擅發人兵、殺害猪鹿、計無頭數、非直多害生命、實亦違犯章程、宜頒諸道、並須禁斷、○冬十月乙酉、大僧都辨靜法師爲僧正、○丙午、彈正尹從四位下酒部王卒、○庚戌、遣使奉渤海信物於諸國名神社、○十一月丁巳、雷雨大風、折木發屋、

續日本紀卷第十

【天平三年】庭火、四時祭式に毎月晦日忌火庭火祭、宮主於内膳司行事とあり、神祇志に内膳司御竈神三座日、野日齋火竈神、竈神日庭火、以鑄爲「神號」庭火皇神」とあり鑄とは字書に有足曰鑄無足曰釜とあり
○常例、和略常を恒に作る
○門部王、恐くは内部王の誤
○平群朝臣豐麻呂、豐は本年四月紀及神龜四年正月紀に據て補ふ
○繼乎、閣本乎を守に作り考證に乎一本作手と云
○志我麻呂、皆本從本我を賀に作る

續日本紀卷第十一

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平三年正月盡六年十二月

天璽國押開豐櫻彦天皇　聖武天皇

(辛未)三年春正月庚戌朔、天皇御中宮宴群臣、美作國獻木連理。○乙亥、神祇官奏、庭火御竈四時祭祀、永爲常例。○丙子、授正三位大伴宿禰旅人從二位、從四位下門部王、春日王、佐爲王並從四位上、正五位上櫻井王從四位下、從五位下大井王從五位上、從四位下多治比眞人廣成、紀朝臣男人、大野朝臣東人並從四位上、正五位上大伴宿禰祖父麻呂從四位下、正五位下中臣朝臣廣見正五位上、從五位上石上朝臣勝雄、平群朝臣豐麻呂、小野朝臣老、從五位下石川朝臣比良夫並正五位下、從五位下波多眞人繼乎、久米朝臣麻呂、石川朝臣夫子、高橋朝臣嶋主、村國連志我麻呂並從五位上、外從五位下巨勢朝臣奈弖麻呂、津嶋朝臣家道、

○又兄、考證に又一本作文と云

○物部韓國連、文武紀物部の二字なし金本には缺く

（三月）周髀、學令に凡算經孫子、五曹、九章、海嶋、六章、綴術、三開重差、周髀、九司各爲一經式部式に得業生不解周髀者雖得及第不須敍位但聽留省とあり周髀は尙書集傳に蓋古言天體者凡三家一曰周髀二曰宣夜三曰渾天周髀之術以爲天似覆盆中高而四邊下卽所謂蓋天之說也とあり

○許留省焉、原本焉を爲に作る曾本淀本金イ本に據て改む

○諏方國、養老五年六月紀に出づ

（五月）從五位上布勢朝臣、原本上を下に作る金本及元年三月紀に據て改む

正六位上石川朝臣加美、大伴宿禰兄麿、並從五位下、正六位上息長眞人名代、當麻眞人廣人、巨曾倍朝臣足人、紀朝臣多麻呂、引田朝臣虫麻呂、巨勢朝臣又兄、大伴宿禰御助、佐伯宿禰人足、佐味朝臣足人、佐伯宿禰伊益、土師宿禰千村、箭集宿禰虫麻呂、物部韓國連廣足、船連薬、難波連吉成、田邊史廣足、葛井連廣成、高丘連河内、秦忌寸朝元、並外從五位下。○二月庚辰朔、日有蝕之。○三月（己酉朔）乙卯（七）、制、自今已後、習筭出身、不解周髀者、只許留省焉。癈諏方國、幷信濃國。○夏四月（己卯朔）乙巳（廿七）、正五位下平群朝臣豐麻呂爲讃岐守。○五月（戊申朔）辛酉（十四）、外從五位下巨勢朝臣又兄爲信濃守、從五位上布勢朝臣國足爲武藏守、從五位下大伴宿禰兄麻呂爲尾張守、外從五位下紀朝臣多麻呂爲上總守。○六月（戊寅朔）庚寅（十三）、以從五位下石川朝臣麻呂爲左少弁、從五位下阿倍朝臣粳虫爲圖書頭、外從五位下土師宿禰千村爲諸陵頭、外從五位下許曾倍朝臣足人爲大藏少輔、外從五位下引田朝臣虫麻呂爲主殿頭、外從五位下佐味朝臣足人爲中衛少將、外從五位下佐伯宿禰人足爲右衛士督、正五位下巨勢朝臣眞

二六月」許曾部、金イ本許の上に土師の二字あり　○外從五位下佐伯宿禰、外の字は正月丙子紀に據て補ふ　○阿氐郡、在田郡なり日本後紀大同元年七月戊戌紀に改紀伊國安諦郡爲在田郡とみゆ

七月」大伴宿禰旅人薨、懷風藻に年六十七とあり詩一首を載す　○度羅樂、寶字七年正月紀に御閤門、饗五位已上幷朝堂、作唐、吐羅、林邑、東國、隼人等樂、類聚國史職官部大同四年三月定雅樂寮雜樂師云々度羅樂師一人鼓儛等師也とあり繼體紀二年十二月南海中耽羅人初通百濟國とみえ通證に耽羅即度羅也とあり今の濟州島なるが此に見ゆる度羅は吐火羅國（都貨邏又吐羅）なり唐吐羅林邑と叙し此にも度羅樂六十二人とあるにて濟州島にあらざることを知るべし、吐火羅は大日本史諸蕃傳に見え隋國の西、舍衞古への波斯國と隣す大月氏の別種也とあり　○諸縣舞、及び筑紫舞は職員令集解に載する大同四年三月廿八日官符中に筑紫諸縣舞師一人云々とあり諸縣郡の風俗歌舞なり　○夏蕃、夏は皇國蕃は唐國を云　○度羅樂、原本樂の字なし曾本金イ本及類史に據て補ふ　○樂戶、職員令雅樂寮に見ゆ雅樂式に樂戶郷云々在大和國城下郡杜屋村とあり

八月」優婆塞優婆夷、並に梵語なり唐譯して近事男、近事女といひ又清信士、清信女ともいふ、五戒を受くる者なり涅槃經及釋氏要覽に見ゆ　○持鉢行路、養老元年四月紀に云り

人爲大宰少貳。紀伊國阿氐郡海水變如血色、經五日乃復。○秋七月丁未朔辛未廿五、大納言從二位大伴宿禰旅人薨。難波朝右大臣大紫長德之孫、大納言贈從二位安麻呂之第一子也。○乙亥廿九、定雅樂寮雜樂生員。大唐樂卅九人、百濟樂廿六人、高麗樂八人、新羅樂四人、度羅樂六十二人、諸縣舞八人、筑紫舞廿人。其大唐樂生、不言夏蕃、取堪教習者。百濟高麗新羅等樂生、並取當蕃堪學者。但度羅樂、諸縣筑紫舞生、並取樂戶。

○八月丁丑朔辛巳五、引入諸司主典已上於內裏、一品舍人親王宣勅云、執事卿等、或薨逝、或老病、不堪理務。宜各擧所知可堪濟務者。○癸未、主典已上三百九十六人、詣闕上表、擧名以聞。詔曰、比年隨逐行基法師優婆塞優婆夷等、如法修行者、男年六十一已上、女年五十五以上、咸聽入道。自餘持鉢行路者、仰所由司、嚴加捉搦。其有遇父母夫喪、期年以内修行

勿論。○丁亥、詔、依諸司擧、擢式部卿從三位藤原朝臣宇合、民部卿從三位多治比眞人縣守、兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、大藏卿正四位上鈴鹿王、左大辨正四位下葛城王、右大辨正四位下大伴宿禰道足等六人、並爲參議。○辛丑、詔曰、如聞、天地所貺、豐年寂好、今歳登穀、朕甚嘉之、思與天下共受斯慶、宜免京及諸國今年田租之半、但淡路、阿波、讃岐、隱岐等國租、并天平元年以往、公私未納稻者、咸免除之。○九月戊申、左右京職言、三位已上宅門、建於大路、先已聽許、未審、身薨、宅門若爲處分、勅、亡者宅門、不在建例。○癸酉、外從五位下高丘連河内爲右京亮、正三位大納言藤原朝臣武智麻呂爲兼大宰帥。○冬十一月丁未、太政官處分、武官醫師使部、及左右馬監馬醫帶仗者考選、及武官解任者、先例並屬式部、於事不便、自今以後、令兵部掌焉、但正身依舊在寮上下。○庚戌、冬至、天皇御南樹苑、宴五位已上、賜錢、親王三百貫、大納言二百五十貫、正三位二百貫、自外各有差。○辛酉、先是、車駕巡幸京中、道經獄邊、聞囚等悲吟叫呼之聲、天皇憐愍、遣使覆審犯狀輕重、於是降恩咸免。

○仰所由司、東大寺要錄所引には由の字なし
○共有遇父母夫喪、有の字は金本晉本淀本に據て補ふ
○爲參議、參議を正官となす始なり
○隱岐、晉本淀本岐を伎に作る
（九月）宅門云々、貞觀十二年十二月廿五日制三位已上及四位參議家門聽建大路、薨卒之後子孫居住者亦聽之と見え左右京式及彈正式にも見ゆ
○正三位大納言、例に依て大納言正三位とすべきなり
（十一月）武官云々、神龜五年十一月紀を併せ見るべし
○帶仗者、公式令に五衞府軍團及諸帶仗者爲武、義解に馬寮兵庫等是也とあり
○庚戌冬至、大日本史注に今推曆法十五日庚申冬至、庚戌五日也戊當作申、然難輙改、姑從本

書とあり
○惣管、唐六典に凡親王總戎則曰元帥、文武官總統者則曰總管、文獻通考魏黃初始置都督諸州軍事、後周改爲總管、武帝時以王濬爲益州總管、總管之名始此と見ゆ
○正四位下大伴宿禰、下の字は金本閣本等に據て補ふ
○與大惣管同、原本同の下に嘗同の二字あり金本皆本淀本に據て削る
○判史、皆本金イ本史を吏に作る
○主典一人、主の字は閣本淀本に據て補ふ
○隨身、始めて見ゆ、神護景雲二年十二月紀に基信賜姓物部淨志朝臣拜法參議隨身兵八人亦此と考證に云り
○臧否、原本臧を減に作る閣本淀本金イ本に據て改む
(十二月)白髦尾、治部式に神馬青馬白髦と見ゆ髦は釋名に髦冒也覆冒頭頸也とありタテガミなる云諸本髦を髮に作る

死罪已下、幷賜衣服、令其自新、○丁卯、始置畿內惣管、諸道鎭撫使、以一品新田部親王、爲大惣管、從三位藤原朝臣宇合、爲副惣管、從三位多治比眞人縣守、爲山陽道鎭撫使、從三位藤原朝臣麻呂、爲山陰道鎭撫使、正四位下大伴宿禰道足、爲南海道鎭撫使、○癸酉、制、大惣管者、帶劍待勅、副惣管者、與大惣管同、判官二人、主事四人、鎭撫使、掌與惣管同、判官一人、主典一人、其抽內外文武官六位已下解兵術文筆者充、仍給大惣管傔仗十人、副惣管六人、鎭撫使三位隨身四人、四位二人、並負持弓箭、朝夕祗承、隨主願充、令得入考、惣管如有緣事入部者、聽從騎兵卅疋、其職掌者、差發京及畿內兵馬、搜捕結徒集衆、樹黨假勢、劫奪老少、壓略貧賤、是非時政、臧否人物、耶曲寃枉之事、又斷盜賊妖言、自非衞府執持兵及之類、取時巡察國郡司等治績、如得善惡、卽時奏聞、不須連延日時、令會恩赦、其有犯罪者、先決杖一百已下、然後奏聞、但鎭撫使不得差發兵馬、○十二月丙子、甲斐國獻神馬、黑身白髦尾、○乙酉、令大宰府始補壹伎對馬醫師、○庚寅、定武散位定額員二百人、○乙未、詔曰、朕

考證に據て改む下同じ　○壹伎、閣本壹岐に作る　○定武散位云々、養老五年六月紀を併見るべし　○君臨九州、九州は尚書禹貢に見え古へ天下を分ちて九州とす之に據れり　○字養、字書に字は愛也とあり　○日仄、以文氏云仄音側或是昃字之省と、日中を過ぐる迄の意なり　○符瑞圖、唐書藝文志に顧野王符瑞圖十卷とあり　○援神契、養老七年十月紀に云り　○出神馬、狩谷氏云出上疑脫澤字王融曲水詩序李善注及神護景雲二年九月紀僧仙覺萬葉集注釋引孝經援神契皆作澤出神馬　○宗廟、前に出づ　○社稷、字書に社は土地神主也禮記祭義に建國之神位右社稷而左宗廟毛詩小雅甫田の疏に社、五土之神能生萬物者以古之有大功者配之とあり書紀に見えたるは宗廟も社稷も國家の意に用ひたるが此は宗廟と相對して神祇の意に用ひたり　○其獲馬、金本付本淀本其字なし

君臨九州、字養萬姓、日仄忘膳、夜寐失席、粤得治部卿從四位上門部王等奏、稱甲斐國守外從五位下田邊史廣足等所進神馬、黑身白髦尾、謹撿符瑞圖曰、神馬者、河之精也、援神契曰、德至山陵、則出神馬、實合大瑞者、斯則宗廟所輸、社稷所貺、朕以不德、何堪獨受、天下共悅、理允恒典、宜大赦天下、賑給孝子順孫、高年鰥寡、惸獨不能自存者、其獲馬人、進位三階、免甲斐國今年庸、及出馬郡庸調、其國司史生以上并獲瑞人、賜物有差、

【天平四年】冕服、卽ち支那の禮服なり冕は抄裝束部冠帽類に續漢書輿服志云冕(音免玉乃冠)冠之前後垂旒者也とあり服は衣服なり　○從三位、從の字は閣本晉本に據て補ふ

(二月)養戶、別勅して賜ひしものなるべし

(壬申)四年春正月乙巳朔、御大極殿受朝、天皇始服冕服、左京職獻白雀、○甲子、正四位上鈴鹿王、正四位下葛城王、並授從三位、无位小治田王從五位下、從四位下榎井朝臣廣國從四位上、從五位下石上朝臣乙麻呂、藤原朝臣豐成、並從五位上、以從三位多治比眞人縣守爲中納言、以從五位下角朝臣家主爲遣新羅使、○丙寅、新羅使來朝、○二月甲戌朔、日有

○催造宮長官、神龜元年三月催造司を置けること見え、又二年九月紀に催造司監見ゆ
○阿倍朝臣廣庭薨、懷風藻に詩二首見え年七十四とあり
〔三月〕日下部宿禰老卒、和銅元年紀に初見、養老五年正月紀に詔して東宮に侍せしめらる
○知造難波宮事、神龜三年十月紀に出づ
〔五月〕物部依羅連、錄河內神別に物部依羅連神饒速日命の後とあり攝津國住吉郡大羅八戸保興佐美郷に因れる姓なり
○鴝鵒、字書に鴝鵒即八哥とあり八哥に白頭翁錢謙益改鸜鵒爲二八哥一と見え人語を眞似るものなりと云ふ圖に鵒を欲に作る
○蜀狗、蜀の地に產する犬なるべし
○獵狗、專ら獵に使用する犬なるべし
○四畿內、原本四を五に作る七月丙午の條に據て改む、養老五年三月紀に出す　○年粮、主稅式に凡筑前筑後肥前肥後豐前豐後等國每年穀二千石漕二送對馬嶋一以充二嶋司及防

蝕之、○戊子、故太政大臣職田、位田、幷養戸、並收於官、○乙未、中納言從三位兼催造宮長官知河內和泉等國事阿倍朝臣廣庭薨、右大臣從二位御主人之子也、○庚子、遣新羅使等拜朝、○三月戊申、召新羅使韓奈麻金長孫等於大宰府、○乙丑、散位從四位下日下部宿禰老卒、○己巳、知造難波宮事從三位藤原朝臣宇合等已下、仕丁已上、賜物各有差、○夏五月壬寅朔、正六位下物部依羅連人會賜朝臣姓、○壬子、新羅使金長孫等四十人入京、○庚申、金長孫等拜朝、進種々財物、幷鸚鵡一口、鴝鵒一口、蜀狗一口、獵狗一口、驢二頭、騾二頭、仍奏請來朝年期、○壬戌、饗金長孫等於朝堂、詔、來朝之期、許以三年一度、宴訖、賜新羅王幷使人等祿各有差、○甲子、遣使者于四畿內、祈雨焉、○乙丑、對馬嶋司例給年粮、秩滿之日、頓停常粮、比還本貫、食粮交絶、又薩摩國司、停止季祿、衣服乏少、並依請給之、○六月丁酉、新羅使還蕃、○己亥、此夏陽旱、百姓不佃、雖數雩祭、遂不得雨、

人等粮こさあり、年粮とは對馬嶋は田少く租税を以て公廨を給はることを能はざる故に筑前以下六國より毎年穀を輸して嶋司及防人の粮に充つるを云年中の食糧の意なり

(七月)二監、芳野監和泉監を云
○內典法、佛敎の法式を云
○亢旱、亢は原本兀に作る閣本淀本に據て改む
○稍彫、彫は凋に通ず
○如以贓入死云々、以下廿二字原本細注とす養老六年七月紀に據て本文とす
○和買、所有者の同意を得て買得するを云
○私畜猪、私字は金本曾本淀本に據て補ふ
(八月)副使、使の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ
○判官、懷風藻釋弁正の傳に子朝元天平年中拜入唐判官到大唐見天子云々とあれば此判官

○秋七月丙午、令兩京四畿內及二監、依內典法、以請雨焉、詔曰、從春亢旱、至夏不雨、百川減水、五穀稍彫、實以朕之不德所致也、百姓何罪、燋萎之甚矣、宜令京及諸國、天神地祇名山大川、自致幣帛、又審錄冤獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒、及鰥寡惸獨不能自存者、仍加賑給、其可赦天下、自天平四年七月五日昧爽已前流罪已下、繫囚見徒、咸從原免、其八虐劫賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、強盜竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、如以贓入死、降一等、竊盜一度計贓三端以下者、入赦限、○丁未、詔和買畿內百姓私畜猪四十頭、放於山野、令遂性命、○丙辰、地震、○八月甲戌、始大風雨、○辛巳、遣新羅使從五位下角朝臣家主等還歸、○丁亥、以從四位上多治比眞人廣成、爲遣唐大使、從五位下中臣朝臣名代爲副使、判官四人、錄事四人、正三位藤原朝臣房前爲東海東山二道節度使、從三位多治比眞人縣守爲山

四人の内なり
○東山、東の字は曾本從本金イ本に據て補ふ
○節度使、考證に文獻通考唐制分天下州縣爲諸道、每道置使治所部、其方有寇戎之地、則加以旌節、謂之節度使、皇朝因置是官、案六年四月諸道節度使事訖令國司主典已上掌其事、寶字五年十二月復置と云、萬葉六に「大夫のゆくてふ道ぞおほろかに念ひて行な大夫のとも」とあるは詔書に天皇賜酒節度使卿等御歌とあり此時の御製なり
○東山、山の字は閣本曾本金イ本に據て補ふ
○山陰道等國、國の字は諸本に據て補ふ
○牛馬云々、弘仁六年三月廿日及貞觀三年三月廿五日官符に見ゆ
○幕釜、軍防令に見ゆ
○四道、東海東山山陰西海を云
○滿四分之一、持統紀三年閏八月詔に兵士者每於一國四分而點其一、令習武事とみゆる是なり、然れど軍防令に應點入軍者同戶之內每三丁取一丁、義解に謂一國之丁總爲三分取其一分とあるは此條及持統紀と同じからず　○修理、理の字は曾本從本金イ本に據て補ふ　○造籾、山崎校本云造一に逆に作る　○筑紫兵士課役並免、此事寶字三年、月吉備眞備の論に見ゆ　○傔人、從者なり繼體紀に見ゆ　○三色、博士及兵士に上中下の區別を立てゝ、奬勵の法を設けしを云るなるべし

陰道、節度使、從三位藤原朝臣宇合、爲西海道節度使、道別判官四人、主典四人、醫師一人、陰陽師一人、○壬辰、勅、東海東山二道及山陰道等國兵器牛馬、並不得賣與他處、一切禁斷、勿令出界、其常進公牧繋飼牛馬者、不在禁限、但西海道依恒法、又節度使所管諸國軍團幕釜有欠者、割取今年應入京官物、充價速令塡備、又四道兵士者、依令差點滿四分之一、其兵器者、修理舊物、仍造勝載百石已上船、又量便宜、造籾燒鹽、又筑紫兵士課役並免、其白丁者、免調輸庸、年限遠近、聽勅處分、又使已下傔人已上、並令佩劍、其國人習得入三色博士者、以生徒多少、爲三等、上等給田一町五段、中等一町、下等五段、兵士者每月一試、得上等人、賜庸綿二屯、中等一屯、○丁酉、大風雨、壞百姓廬舍及處々佛寺堂塔、是夏、少雨、秋稼不稔、山陰道節度使判官巨曾倍朝臣津嶋、西海道判官佐伯宿禰東人、並授外從五位下、

(九月)佰姓、原本佰を伯に作る靈龜元年十月紀に據て改む佰卽百の字なり
○舶四艘、大使以下乘る所の舶にて所謂四の舶なり
○造難波宮、曾本淀本波を破に作る
○伊益、金本益を荅に作る
○土師宿禰、原本土を士に作る諸本に據て改む
(十月)外從五位上多治比眞人占部、閣本外の字なし、神龜五年五月紀に據るに衍なり

○九月辛丑朔、賑給和泉監佰姓。○甲辰、遣使于近江、丹波、播磨、備中等國、爲遣唐使造舶四艘。○乙巳、以正五位上中臣朝臣廣見爲神祇伯、正五位下高橋朝臣安麻呂爲右中弁、從五位上縣犬養宿禰石次爲少弁、外從五位下箭集宿禰虫麻呂爲大判事、正五位上佐伯宿禰豊人爲左京亮、正五位下石川朝臣枚夫爲造難波宮長官、從四位上榎井朝臣廣國爲大倭守、外從五位下佐伯宿禰伊益爲三河守、外從五位下田口朝臣年足爲越中守、從五位上石上朝臣乙麻呂爲丹波守、外從五位下土師宿禰千村爲備前守、從五位上石川朝臣夫子爲備後守、兼知安藝守事。○丁卯、依諸道節度使請、充驛鈴各二口。○冬十月癸酉、始置造客館司。○辛巳、給節度使白銅印、道別一面。○丁亥、以外從五位下箭集宿禰虫麻呂爲大學頭、外從五位下大神朝臣乙麻呂爲散位頭、從五位上久米朝臣麻呂爲主稅頭、正五位上中臣朝臣東人爲兵部大輔、外從五位下當麻眞人廣人爲大藏少輔、外從五位上多治比眞人占部爲宮內少輔、外從五位下物部韓國連廣足爲典藥頭、從五位上紀朝臣清人、

〇右兵衞率、原本率を卒に作る金本曾本淀本に據て改む

十二月 狹山下池、河内志に曰、池在丹南郡南野田村、云々狹山下池卽此とあり

〔天平五年〕白鳥、原本鳥を烏に作る金本曾本淀本及紀略に據て改む

〇軒轅、廿八宿の星宿の北にあり黃帝之神黃龍之體也と云

〇縣犬養橘宿禰三千代薨、八年十一月從三位葛城王從四位上佐爲王等上表に臣葛城親母贈從一位縣犬養橘宿禰云々、錄左京皇別橘朝臣の條に美努王

爲右京亮、正四位下長田王爲攝津大夫、正五位上粟田朝臣人上爲造藥師寺大夫、從四位下高安王爲衞門督、外從五位下後部王起爲右衞士佐、外從五位下大伴宿禰御助爲右兵衞率、外從五位下大伴直南淵麻呂爲左兵庫頭、從五位上伊吉連古麻呂爲下野守、〇十一月丙寅、冬至、天皇御南苑宴群臣、賜親王已下絁及高年者綿有差、又曲赦京及畿內二監、天平四年十一月廿七日昧爽已前、徒罪已下、其八虐劫賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、其京及倭國百姓年七十以上、鰥寡惸獨、不能自存者、給綿有差、〇十二月丙戌、築河內國丹比郡狹山下池、〇辛卯、地震、

五年春正月庚子朔、天皇御中宮宴侍臣、自餘五位已上者、賜饗於朝堂、越前國獻白鳥、〇丙午、雷風、〇戊申、熒惑入軒轅、〇庚戌、內命婦正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、遣從四位下高安王等監護喪事、賜葬儀准散一位、命婦皇后之母也、〇丙寅、芳野監讃岐淡路等國、去年不登、百姓飢饉、勅賑貸之、〇二月乙亥、紀伊國旱損、賑給之、太政官奏、遷替國司

等赴任之日、官給傳驛、入京之時、何乘來歸、望請、給四位守馬六疋、五位五疋、六位已下守四疋、介掾各三疋、目史生各二疋放去、若歷國之人者、依多給、不給兩所、緣犯解却、不入給例者、勅許之、○甲申、大倭、河內、五穀不登、百姓飢饉、並加賑給、○三月辛亥、授无位鹽燒王正五位上、中臣朝臣東人並從四位下、正五位下小野朝臣老正五位上、從五位下中臣朝臣名代、坂本朝臣宇頭麻佐、紀朝臣飯麻呂、巨勢朝臣少麻呂、外從五位下大神朝臣乙麻呂並從五位上、外從五位下息長眞人名代、當麻眞人廣人並從五位下、正六位上大伴宿禰小室、小治田朝臣廣千、高向朝臣諸足、河內藏人首麻呂並外從五位下、○癸丑、遠江、淡路、飢、賑恤之、○戊午、遣唐大使從四位上多治比眞人廣成等拜朝、○閏三月己巳、勅、和泉監、紀伊、淡路、阿波等國、遭旱殊甚、五穀不登、宜今年之間借貸大稅、令續百姓產業、○戊子、諸生飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米鹽、詔責其懶惰、令治生業、○壬辰、勅、以調布一万端、商布三万一千九百二十九段、充西海道造雜器仗之料、○癸巳、遣唐大使多治比眞人廣成

娶從四位下縣犬養宿禰東人女從一位縣犬養橘宿禰三千代大夫人生左大臣諸兄中宮大夫佐爲宿禰贈從二位牟漏女王とあれば三千代初め美努王に適ぎて葛城王佐爲王等を生み後不比等に嫁して光明子を生めるなるべし

○芳野監、創置年月詳ならず

（二月）官給傳驛、神龜三年八月紀に云り

○四位守馬六疋云々、和銅五年五月紀に出づ

○緣犯解却、原本緣を掾に作る曾本淀本金イ本に據て改む

（三月）大神朝臣、朝は閣本曾本淀本に據て改む

○廣千、萬葉に廣耳に作る草體相似たり故に誤れり

○河內藏人、狩谷校本に內恐原字、錄河內諸蕃に有河原藏人神龜二年七月紀有川原椋人子生神護景雲三年九月紀有河原藏人人成と云り

（閏三月）諸生飢乏、狩谷校本に王疑生歟と云るに據て改む、二年三月太政官奏備大學生徒云々無物資給雖有好學不

「阻遣」志云々と見ゆ併考ふべし

四月 自難波津進發、萬葉八に天平五年春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌、又同九に天平五年癸酉遣唐使舶發難波入海之時親母贈子歌を載す

○解由、凡官人遷替の際前官其任中の事狀をしるして新官に付するに公事の闕怠なく、又公物の欠負なければ新官より其由を記して與ふるを解由といふ　○去天平三年云々、三年紀に載せず　○遵行、原本遵を導に作る諸本及類史に據て改む　○空延日月、寶字二年九月紀に明法曹司言遷任國司向京期限依倉庫令倉藏及文案孔目專當官人交代之日並相分付然後放還而今令條雖立分付之文律内無科淹滯之罪因茲新任國司不勤受領得替官人必延歲月遂使踰年隔考還到居官於事商量甚乖道理云々と見ゆ、併考ふべし　○遷替、金イ本交替に作る

五月 辛卯、閣本及紀略此下に大赦天下の四字あり

六月 熊毛郡、大隅國なり倭名抄に天長元年停多褹島隷大隅國とあり能毛郡は當時多褹島に屬す故に多褹島熊毛郡とかけり

○安志託、閣本託を記に作る

○多褹後國造、諸史に見

辭見、授節刀。○夏四月己亥、遣唐四船自難波津進發。○辛丑、制、諸國司等相代向京、或替人未到以前上道、或雖交替訖、不付解由、因茲、去天平三年、告知朝集使等已訖。然國司寛縱、不肯遵行、仍遷任之人、不得居官、無職之徒、不許直寮、空延日月、豈合道理。國宜知狀、遷替之人、必付解由、申送於官。今日以後、永爲恒例。

○五月辛卯、勅、皇后枕席不安、已經年月、百方療治、未見其可。思斯煩苦、忘寢與飡。可大赦天下、救濟此病。自天平五年五月廿六日昧爽以前、大辟已下、常赦所不免、皆悉原放。其反逆幷緣坐流之類者、便隨輕重降、但強竊二盗、不在免例。○六月丁酉、多褹嶋熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人、賜多褹後國造姓。益救郡大領外從六位下加理伽等一百卅六人、多褹直。能滿郡少領外從八位上粟麻呂等九百六十九人、因居賜直姓。武藏國埼玉郡新羅人德師等、男女五十三人、依請爲金姓。

○甲辰、太白入東井、

○秋七月乙丑朔、日有蝕之、○庚午、始令大膳備盂蘭盆供養、○八月辛亥、天皇臨朝、始聽庶政、○九月丁亥、遠江國蓁原郡人君子部眞鹽女、一産三男、賜大税二百束、乳母一人、○冬十月丙申、外從五位下大伴宿禰小室爲攝津亮、正五位下多治比眞人廣足爲上總守、○十二月己未、出羽柵遷置於秋田村高清水岡、又於雄勝村建郡居民焉、○庚申、以從五位上縣犬養宿禰石次爲少納言、從五位上吉田連宜爲圖書頭、從五位下路眞人虫麻呂爲內藏頭、從五位下阿倍朝臣粳虫爲縫殿頭、從四位下栗栖王爲雅樂頭、從五位下角朝臣家主爲諸陵頭、○辛酉、遣一品舍人親王、大納言正三位藤原朝臣武智麻呂、式部卿從三位藤原朝臣宇合、大藏卿從三位鈴鹿王、右大辨正四位下大伴宿禰道足、就縣犬

えず下の多褹直も同じ
○益救郡、勝寶六年正月紀益久に作る卽ち夜久嶋なり　○能滿郡、三代格天長元年九月格に停多褹嶋隷大隅國事、右參議大宰大貳從四位下小野朝臣岑守等解偁云々能滿合於馭謨益救合於熊毛四郡爲二とあり之に據れば今の馭謨郡の內なるが地理志料に益救を馭謨に能滿を熊毛に合すとあるべきなりといひ熊毛郡野間村を其地なりとす　○因居、原本因を目に作る曾本從本金イ本に據て改む　○武藏國埼玉郡云々、持統紀元年四月、筑紫大宰獻投化新羅僧尼及百姓男女廿二人居于武藏國、また四年二月壬申以歸化新羅韓奈末許滿等十二人居于武藏國、又寶字二年八月癸亥紀に歸化新羅僧卅二人尼二人男十九人女廿一人を武藏國の閑地に移す是に於て始て新羅郡を置くと見えたり　○東井、二十八宿の一、星一名東井とある是なり

（七月）大膳、類史此下に職の字あり
○盂蘭盆、大日本史注に按日本紀齊明帝三年七月設盂蘭盆會於飛鳥寺其後無所見公事根源濫觴抄以是年爲原始とあり、盂蘭盆とは釋氏要覽（雜紀）に此釋子申孝報恩救苦之要以目連救母爲始也梵語盂蘭此云救倒懸也盆則此方器也とあり
（十二月）出羽柵遷置云々、職官志に蓋當時有議未從至寶字三四年而從焉と云此柵はもと今の羽前國西田川郡助川の邊にありしを皇化の北進につれて羽後國秋田郡に從し進めしなり
○秋田村、齊明紀鬱田に作る羽後國秋田郡是なり
○高清水岡、秋田郡高泉

郷爲此地なり今南秋田郡寺内村に高清水岡あり古城山は其遺址なりと云
○雄勝村、或は男勝又小勝に作る寶字三年九月始めて出羽國に雄勝平鹿二郡を置けり地理名部に出羽國雄勝平加知と注せり
○從五位上を下に作る元年三月紀及四年九月紀に據て改む
○橘宿禰第、原本第を弟に作る諸本及紀略に據て改む
○賑貸、金本皆本及類史振貸に作る
【天平六年】貸官稻云々、主税式上に諸國出擧正税公廨雜稻の數を列擧す其正税とあるは即ち官稻なり當時此制より超過するもの多きは後漸次に増加せしなるべし
○大市王、王は女王とあるべきなり神社王、播磨王、新家王亦同じされど上にもかゝる例あれば舊に據て改めず
○勅令諸國、原本令を命に作る金本從本に據て改む

養橘宿禰第、宜詔贈從一位、別勅莫收食封資人、是年、左右京及諸國飢疫者衆、並加賑貸、

六年春正月癸亥朔、天皇御中宮、宴侍臣、饗五位已上於朝堂、但馬、安藝、長門等三國各獻木連理、○丁丑、聽諸國司每年貸官稻、大國十四萬以下、上國十二萬以下、中國十萬以下、下國八萬已下、如過茲數、依法科罪、○己卯、授正三位藤原朝臣武智麿從二位、從三位多治比眞人縣守、藤原朝臣宇合並正三位、无位小田王、野中王並從五位下、正五位上小野朝臣老從四位下、從五位下紀朝臣麻路從五位上、正六位上石川朝臣乙麻呂、正六位下藤原朝臣仲麻呂並從五位下、從六位下三國眞人廣庭、正六位下當麻眞人鏡麻呂、正六位上大伴宿禰麻呂、大伴宿禰老人、小野朝臣鎌麻呂、波多朝臣安麻呂、從六位下田中朝臣淨足並外從五位下、內命婦无位大市王、神社王並從四位下、正五位下播磨王正五位上、從五位上新家王正五位下、從七位上秦忌寸大宅外從五位下、以從二位藤原朝臣武智麻呂爲右大臣、○庚辰、勅令諸國雜色官稻、除

驛起稻以外悉混合正稅、○二月癸巳朔、天皇御朱雀門覽歌垣、男女二百卌餘人、五品已上有風流者、皆交雜其中、正四位下長田王、從四位下栗栖王、門部王、從五位下野中王等爲頭、以本末唱和、爲難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀨曲八裳刺曲之音、令都中士女縱覽、極歡而罷、賜奉歌垣男女等祿有差、○庚子、二品泉内親王薨、天智天皇之皇女也、○三月（壬戌朔）辛未、行幸難波宮、○壬申、散位從四位下百濟王遠寶卒、○丙子、施入四天王寺食封二百戶、限以三年、并施僧等絁布、攝津職奏吉師部樂、○丁丑、陪從百官衞士已上、并造難波宮司國郡司樂人等、賜祿有差、免供奉難波宮東西二郡今年田租調、自餘十郡調、○戊寅、車駕發自難波、宿竹原井頓宮、○庚辰、車駕還宮、

○夏四月（壬辰朔）甲午、免河内國安宿大縣志紀三郡今年田租、以供竹原井

○驛起稻、文武紀（二七頁）に見ゆ

（二月）歌垣、寶龜元年三月紀に葛井船津文武生藏六氏男女二百三十人供奉歌垣、其服並著青摺細布衣、垂紅長紐、男女相並分行徐進、歌云々、每歌曲折擧袂爲節云々と見ゆ、此事武烈即位前紀（紀下一頁）には歌場に作りウタカキと訓り

○五品、五位なり撰者唐樣に倣ひて書けるなり

○難波曲云々、曲名なり歌詞によりて各曲節を異にす故に難波曲倭部曲等の名あるなり書紀神代下夷曲の條（紀上六〇頁）を參考すべし

○泉内親王薨、天智帝七年二月紀に有忍海造小龍女曰色夫古娘、生一男二女云々其三曰泉皇女と見ゆ

（三月）行幸難波宮、萬葉六に天平六年甲戌春三月幸于難波宮之時歌六首云々と見ゆ　○百濟王遠寶卒、文武四年十月紀に常陸守、和銅元年三月紀に左衞士督となる　○絁布、原本絁を施に作る金イ本に據て改む　○吉師部樂、神護元年閏十月紀に企師部儛貞觀元年十一月紀に吉志舞とある即是なり吉志舞に昔安倍氏の祖新羅を伐ちて功あり凱旋の時偶々大嘗會の日に當れり因て此舞を奏す因て相傳て大嘗會の舞とすと北山抄大嘗會條の頭書に引ける吏部王記に見ゆ錄攝津皇別に吉志、難波忌寸同祖大彦命の後とあり安倍氏亦大彦命の後にして吉志氏と同祖なり攝津國島下郡吉志部村あり吉志氏は此地に住みしなるべし攝津職より之を奏せしめたるは蓋是に因れり　○東西二郡、攝津國東生（比牟我之奈里）西生（邇之奈里）の二郡なり

○竹原井頓宮、河内國大縣郡（今中河内郡に入る）堅下村高井田是なりと云龜瀨越の西口にして景勝の地なり

（四月）川堆、原本堆を擁に作る考證に案甕俗作

頓宮也、○戊戌、地大震、壞天下百姓廬舍、壓死者多、山崩川壅、地往々拆裂、不可勝數、○癸卯、遣使畿內七道諸國、撿看破地震神社、○戊申、詔曰、今月七日、地震殊常、恐動山陵、宜遣諸王眞人、副土師宿禰一人、撿看諱所八處、及有功王之墓、又詔曰、地震之災、恐由政事有闕、凡厥庶寮、勉理職事、自今以後、若不改勵、隨其狀迹、必將貶黜焉、○壬子、遣使於京及畿內、問百姓所疾苦、詔曰、比日天地之災、有異於常、思朕撫育之化、於汝百姓有所闕失歟、今故發遣使者、問其疾苦、宜知朕意焉、諸道節度使事既訖、於是令國司主典已上掌知其事、○甲寅、許東海東山山陰道諸國賣買牛馬出堺、又免諸道健兒儲士選士田租并雜徭之半、○丁巳、禁斷以年七十已上人新擬郡司、

壅與擁字形相涉致譌也さあるが如く字形頗る相似たるより譌れり故に今訂す類史には壅に作る
○拆裂、原本拆を折に作る類史に據て改む閣本曾本及紀略拆に作るは坼の誤なるべし字書に拆恥格切裂又毀也又作坼さあり
○破地震、閣本曾本淀本破を被に作る
○諱所八處、諱所さは山陵を云、八處は詳にせず
○有功王之墓、諸陵式所載の彥五瀨命竈山墓、日本武尊能褒野墓の類なり
○有所闕失、有の字は閣本曾本淀本に據て補ふ
○許東海云々、四年八月紀を參看すべし
○健兒、倭訓栞に「こんでい　健兒の轉音也日本紀には「ちからびさ」さ訓せり平家物語に「こんでいわらば」さいへり今時武家の足輕の類也さぞ、考證に案唐六典天下諸軍有健兒、皆定其籍之多少與其番之上下、毎季上中書門下、兵部因之諸道置健兒未詳其始さ云り、寶字六年二月紀に爲點伊勢近江美濃越前等四國郡司子弟及百姓年四十已下二十已上練習弓馬者以爲健兒さあるにて其大略を知るべく諸國に置る人數は兵部式に詳なり皇極紀元年の條を參考すべし　○儲士、健兒の候備に設けたるものなるべし東大寺正倉院文書天平六年出雲國計會帳に儲士歷名帳一卷また儲士歷名簿一卷さら見ゆ　○選士、兵士は有名無實さなりしより富饒の家の兒を擇びて西海の防備に當らしむ之を選士さ云天長三年十一月の條に詳に見ゆ貞觀十一年十二月五日戊子紀に先是大宰府言上往者新羅海賊侵掠之日差遣統領選士等擬令追討、同十二年六月七日戊子勅大宰府置對馬嶋選士五十人さ見ゆ但其創置の年月は詳ならず　○年七十已上人云々、式部式に凡年七十已上廿四已下云々不得銓擬郡司、さ見ゆ

○五月戊子、太政官奏偁、左右京百姓夏輸徭錢、甚不堪辨、宜其正丁次丁自九月始令輸之、少丁勿輸、又天平四年亢旱以來、百姓貧乏、宜限一年借貸左右京芳野和泉四畿内百姓大税、又大倭國十四郡公私擧稻、毎郡有之、愚民競貸、至于責徵、不能盡備、資財既罄、遂償田宅、而毎年廻擧、取利過本、及父負物徵不知情妻子、子負物徵不知情父母者、自今以後、皆悉禁斷之、奏可之、○六月癸卯、大倭國葛下郡人白丁花口宮麻呂散己私稻、救養貧乏、仍賜少初位上、○秋七月丙寅、天皇觀相撲戲、是夕徙御南苑、命文人賦七夕之詩、賜祿有差、○辛未、詔曰、朕撫育黎元、稍歴年歳、風化尚壅、囹圄未空、通旦忘寐、憂勞在玆、頃者天頻見異、地數震動、良由朕訓導不明、民多入罪、責在一人、非關兆庶、宜令存寛宥而登仁壽、蕩瑕穢而許自新、可大赦天下、其犯八虐故殺人謀殺殺訖、別勅長禁、劫賊傷人、官人史生枉法受財、盜所監臨、造僞至死、掠良人爲奴婢、強盜竊盜及常赦所不免、並不在赦例、○九月戊辰、唐人陳懷玉賜千代連姓、○辛未、班給難波京宅地、三位以上一町以下、五位以上半町

（五月）夏輸徭錢、徭錢とは徭役の代に錢を納むるを云ふ九年十月壬寅紀に令左右京職停收徭錢と見ゆ
○九月、原本九の上に十の字あり曾本淀本に據て削る
○亢旱、原本亢を冗に作る淀本及類史に據て改む
○十四郡、民部式に大和國管郡十五とあり、こゝに十四とあるは吉野未だ監たるが故なり
○擧稻、出擧して利を收むる稻なり
○父負物、負は受貸不償也とあり負債するを云ふ
（六月）花口、大和志に葛下郡北花内村あり内舊は口に作れり此地に因れる氏なり
（七月）徙御、原本徙を徒に作る淀本及紀略に據て改む
○七夕、大日本史注に七夕宴至此始見後世乞巧奠即此也、公事根源以爲勝寶七年始修乞巧奠然本書所不載故不取とあり
○風化尚壅、風化壅塞して十分に行はれざるを云ふ原本壅を擁に作れるを改

む

○闇囹、牢獄なり原本囹を圄に作る閣本曾本淀本に據て改む

○憂勞、原本憂を夏に作る閣本淀本に據て改む

○貴在一人、金本在の下に乎の字あり

○盗所監臨、臨の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ

（九月）陳懷玉、原本玉を王に作る閣本に據て改む

○千代連、神護元年正月己亥紀に千代連三足見ゆ録には見えす

○大竹河、藝備國郡志に在安藝國佐西郡國界到今從之とあり

（十二月）級伐飡、新羅第九等の官名

○下村主、養老四年六月戊申紀に注す

以下、六位以下四分一町之一以下、○甲戌、制安藝周防二國以大竹河爲國堺也、○壬午、地大震、○冬十月辛卯、曲赦京中死罪、○十一月丁丑、入唐大使從四位上多治比眞人廣成等來著多禰嶋、○戊寅、太政官奏、佛教流傳、必在僧尼、度人才行、實簡所司、比來出家、不審學業、多由囑請、甚乖法意、自今以後、不論道俗、所擧度人、唯取闇誦法華經一部、或最勝王經一部、兼解禮佛、淨行三年以上者、令得度者、學問彌長、囑請自休、其取僧尼兒詐作男女、得出家者、准法科罪、所司知而不正者與同罪、得度者還俗、奏可之、○十二月戊子朔、日有蝕之、○癸巳、大宰府奏、新羅貢調使級伐飡金相貞等來泊、○丙申、外從五位下烏安麻呂賜下村主姓、

續日本紀卷第十二

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平七年正月盡九年十二月

天璽國押開豐櫻彦天皇　聖武天皇

七年春正月戊午朔、天皇御中宮宴侍臣、又饗五位已上於朝堂。○二月癸卯、新羅使金相貞等入京。○癸丑、遣中納言正三位多治比眞人縣守於兵部曹司、問新羅使入朝之旨、而新羅國輙改本號曰王城國、因茲返却其使。○三月丙寅、入唐大使從四位上多治比眞人廣成等、自唐國至進節刀。○辛巳、朝拜。○夏四月戊申、授无位長田王、池田王並從四位下、正四位下百濟王南典從四位上、多治比眞人廣成並正四位上、正五位上粟田朝臣人上從四位下、從五位下阿倍朝臣粳虫從五位上、正六位上石川朝臣年足、多治比眞人伯、百濟王慈敬、阿倍朝臣繼麻呂並從五位下、外從五位下秦忌寸朝元外從五位上、外正六位上上毛野朝臣今

○聖武天皇、閣本天皇の二字なし

【天平七年】

(二月)金相貞等、等の字は紀略に據て補ふ

○兵部曹司、兵部省の廳を云太政官廳を太政官曹司と云に同じ

○王城國、三國史記東國通鑑等に國號を改めし事見えず他に徴すべきものなし

(三月)多治比眞人、以下辛巳まで金本になし

(四月)无位長田王、和銅四年四月紀に從五位下長田王見え同三年二月紀に正四位下長田王とあるは同名にして別人なるべし

○石川朝臣、原本川を河に作る今諸本に據る

○下道朝臣、原本下を上に作る諸本及類史紀略に

具麻呂、正六位上土師宿禰五百村、城上連眞立、陽侯史眞身、並外從五位下、○辛亥、入唐留學生從八位下下道朝臣眞備獻唐禮一百卅卷、太衍曆經一卷、太衍曆立成十二卷、測影鐵尺一枚、銅律管一部、鐵如方響、寫律管聲十二條、樂書要錄十卷、絃纏漆角弓一張、馬上飮水漆角弓一張、露面漆四節角弓一張、射甲箭廿隻、平射箭十隻、

○五月己未、夜、天衆星交錯亂行、无常所、○庚申、天皇御北松林覽騎射、入唐廻使及唐人奏唐國新羅樂、挊槍、五位已上、賜祿有差、○壬戌、入唐使獻請益秦大麻呂問答六卷、○乙亥、畿內及七道諸國外散位及勳位始作定額、國別有差、自餘聽准格納資續勞、○丙子、制、畿內七道諸國、宜除國擬外、別簡難波朝廷以還譜第重大四五人副之、如有雖无譜第、

據て改む十八年十月姓を改て吉備朝臣を賜ふ、記孝靈天皇の段に若日子建吉備津日子命者吉備下道臣祖、錄左京皇別に下道朝臣吉備朝臣同祖稚武彦命之孫吉備武彦命之後也とあり

○眞備、記略眞吉備に作る本居翁云入唐せし時眞備とせしなるべしと

○唐禮、唐書藝文志に大唐儀禮一百卷、永徽五禮一百三十卷、開元禮一百五十卷あり此に唐禮と云は永徽五禮なるべし　○太衍曆經、及太衍曆立成は同志に僧一行大衍曆一卷、大衍曆立成十二卷とあり　○鐵尺、文獻通考に開皇官尺卽鐵尺一尺五寸とあり　○方響、考證に事物紀原通典曰梁有銅磬則今方響也方響以鐵爲之以代磬云々和名抄唐令云玉磬方響各一架今按磬與方響似而非也と云り　○樂書要錄、唐書藝文志に武后樂書要錄十卷とあり　○馬上飮水漆角弓、其製作詳ならず角弓は唐六典に弓之制有四二曰角弓以筋角騎兵用之とあり　○露面漆四節角弓、同上　○射甲箭、唐六典に箭之制有四三曰兵箭、注に兵箭剛鏃而長用之射甲とあり　○廿隻、原本隻を侯に作る淀本金イ本及類史に據て改む下同じ　○平射箭、抄征戰具に平題箭、楊雄方言云鏃不鋭者謂之平題(和名以太都伎)郭璞曰題猶頭也今之戲射箭也とあり

(五月)挊槍、文獻通考に弄槍伎、蓋工裸帶數環攙一工立數十步外連擲十餘槍以度之既畢乃以一攙受其槍也、抄雜藝類に弄槍楊氏漢語抄云弄槍(和名保古斗利)、康熙字典所引五音類聚に挊俗弄字とあり

○請益、大藏式に入唐請益生見ゆ、請益とは師の說を聽き疑はしきをば押返して問ひて益を請くる

而身才絶倫、并勞効聞衆者、別狀亦副、並附朝集使、申送其身、限十二月一日、集式部省、○戊寅、勅、朕以寡德、臨馭萬姓、自暗治機、未克寧濟、廼者災異頻興、咎徵仍見、戰々兢々、責在予矣、思緩死愍窮、以存寛恤、可大赦天下、自天平七年五月廿日昧爽已前大辟罪已下、咸赦除之、其犯八虐故殺人、謀殺殺訖、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜、及常赦所不免、並不在赦限、但私鑄錢人、罪入死者降一等、其京及畿內二監、高年鰥寡、惸獨篤疾等、不能自存者、量加賑恤、百歲已上穀一石、八十已上穀六斗、自餘穀四斗、諸國所貢力婦、自今以後、准仕丁例、免其房徭、并給田二町、以充養物、○己卯、於宮中、及大安、藥師、元興、興福四寺、轉讀大般若經、爲消除災害、安寧國家也、○六月己丑、勅曰、先令并寺者、自今以後、更不須并、宜令寺々務加修造、若有懈怠不肯造成者、准前并之、其既并造訖、不煩分析、

意 ○始作定額云々、養老五年六月紀（一一六〇頁）參照 ○七道諸國、考證に國下疑脫郡司二字とて云 ○難波朝廷云々、三代格弘仁二年二月廿日官符に夫郡領者難波朝廷始置其職、有勞之人世々序其官、又類史神祇部延曆十七年三月詔に見ゆ ○譜第云々、勝寶元年二月紀に勅頃年之間補任郡領、國司先檢譜第優劣、身才能不、舅甥之列長幼之序、擬申於省、式部更問口狀、比校勝否、然後選任、或譜第雖輕以勞薦之、或家門雖重以拙却之云々、自今已後宜改前例、簡定立郡以來譜第重大之家嫡々相承、莫用傍親とあり ○勞効、原本効を勤に作る、曾本淀本金イ本に據て改む ○並附朝集使云々、式部式を參考すべし ○未克寧濟、寧は安也、濟は益也救也、爲民を安堵せしむることを能はざるを云 ○以存寛恤、存は諸本に據て補ふ ○廿日、廿の下恐くは三の字を脫す、廿日にては干支合はず ○謀殺殺訖、曾本淀本下の殺を人に作る ○諸國所貢云々、民部式に見ゆ ○力婦、民部式脊力婦女に作る其意なり ○房徭、一戶の內にて房を同じくするものゝ徭なり 養老元年十一月紀（一一九頁）に註す ○田二町、原本町を野に作る、諸本に據て改む、主稅式に脊力婦女田爲不輸租田とあり ○養物、民部式貢物

○秋七月己卯、大隅薩摩二國隼人二百九十六人、入朝貢調物、○庚辰、依忌部宿禰虫名、鳥麻呂等訴申、撿時々記、聽差忌部等爲幣帛使、○八月乙酉、太白與辰星相犯、○辛卯、天皇御大極殿、大隅薩摩二國隼人等奏方樂、○壬辰、賜二國隼人三百八十二人爵幷祿、各有差、○乙未、勅曰、如聞、比日大宰府疫死者多、思欲救療疫氣、以濟民命、是以奉幣彼部神祇、爲民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺、讀金剛般若經、仍遣使賑給疫民、并加湯藥、又其長門以還諸國、守若介專齋戒、道饗祭祀、○丙午、大宰府言、管內諸國疫瘡大發、百姓悉臥、今年之間、欲停貢調、許之、○九月庚辰、先是美作守從五位下阿倍朝臣帶麻呂等故殺四人、其族人詣官申訴、而右大辨正四位下大伴宿禰道足、中辨正五位下高橋朝臣安麻呂、少辨從五位上縣犬養宿禰石次、大史正六位下葛井連諸會、從六位下板茂連安麻呂、少史正七位下志貴連廣田等六人、坐不理訴人事、於是下所司科斷、承伏既訖、有詔並宥之、○壬午、一品新田部親王薨、遣從

に作る　(六月)先令并寺者云々、靈龜二年五月紀を參看すべし　○分析、原本析を折に作る曾本淀本に據て改む析は分也

(七月)聽差忌部等爲幣帛使、藤原氏の盛なるに隨ひ中臣氏も亦專横なるより忌部氏が訴申して此裁定ありしなり寶字元年六月紀、後紀大同元年八月庚午の條をも參考すべし

(八月)辰星、五星の一にて水星なり

○奏方樂、金本奏方の文字明ならず方の上恐くは諸の字を脫せしなるべし

○比日、原本此日に作る金本及類史紀略に據て改む

○禱祈、類史祈禱に作る

○齋戒、原本戒を或に作る曾本淀本に據て改む

○道饗　神祇令に季夏道饗祭季冬同之、義解に卜部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於道而饗遏之也とあり但しこゝは臨時の道饗祭なり

○族人、原本族を旅に作る諸本に據て改む

○中辨、辨の字は諸本に據て補ふ

○志貴連、錄大和神別に

志貴連神饒速日命孫日子湯支命之後也とあり
○新田部親王墓、大和志に墓在添下郡伏見東陵北六十歩許、冢上有小祠村民祭焉、今生駒郡伏見村大字平松なり
（十月）七七、曾本淀本金イ本此下に日の字あり
（十一月）賀茂朝臣比賣卒、原本賣を貴に作る金本曾本淀本に據て改む比賣は天皇の御母皇太后宮子の母なり
○散一位葬儀、一の字は金本に據て補ふ五年正月紀にも縣犬養橘宿禰三千代薨云々賜以葬儀准散一位と見ゆ
○舍人親王薨、補任に年六十とあり御子淳仁天皇御位の後崇道盡敬皇帝と追尊し給ふ
○命王親、曾本金イ本命を令に作る
○第三皇子也、天武紀に第六子、續日本紀に第五子とあり通證舍人親王薨に按天武紀所序王子后妃之次、一面不問皇子少長是蓋據其母之分也然則當從續紀と云り
（閏十一月）高田王、神龜元年二月壬子紀に見ゆ

四位下高安王等、監護葬事、又詔、遣一品舍人親王、就第弔之、親王、天渟中原瀛眞人天皇之第七皇子也、○冬十月丁亥、詔、親王薨者、每七日供齋、以僧一百人為限、七七齋訖者停之、自今以後為例行之、○十一月己未、正四位上賀茂朝臣比賣卒、勅以散一位葬儀送之、天皇之外祖母也、○乙丑、知太政官事一品舍人親王薨、遣從三位鈴鹿王等監護葬事、其儀准太政大臣、命王親男女、悉會葬處、遣中納言正三位多治比眞人縣守等、就第宣詔、贈太政大臣、親王、天渟中原瀛眞人天皇之第三皇子也、○閏十一月壬午朔、日有蝕之、○己丑、宮內卿從四位下高田王卒、○戊戌、詔、以災變數見、疫癘不已、大赦天下、自天平七年閏十一月十七日昧爽以前、大辟罪以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、及犯八虐、常赦所不免、咸赦除之、其私鑄錢、并強盜竊盜、並不在赦限、但鑄盜之徒、應入死罪、各降一等、高年百歲以上、賜穀三石、九十以上穀二石、八十以上穀一石、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡惸獨、篤疾之徒、不能自存者、所在官司量加賑恤、○庚子、更置鑄錢司、○壬寅、天皇臨

朝、召諸國朝集使等、中納言多治比眞人縣守宣勅曰、朕選卿等、任爲國司、奉遵條章、僅有一兩人、而或人以虛事求聲譽、或人背公家向私業、因此比年國內弊損、百姓困乏、理不合然、自今以後、勤恪奉法者褒賞之、懈怠無狀者貶黜之、宜知斯意各自努力、是歲、年頗不稔、自夏至冬、天下患豌豆瘡、俗曰裳瘡、夭死者多、

○疫癘、類史癘を瘡に作る

○大辟罪以下、罪以下の三字は諸本及類史に據て補ふ

○豌豆瘡、卽ち皰瘡なり抄疾病部に皰瘡、面瘡也類聚國史云仁壽二年皰瘡流行人民疫死(皰瘡此間云毛加佐)とあり之を豌豆瘡と云は病源候論時氣皰瘡候に夫表虛裏實熱毒內盛則多發皰瘡重者周匝遍身其狀如火瘡若根赤頭白者毒輕若色紫黑則毒重其瘡形如豌豆亦名豌豆瘡とあり延曆以前は之を豌豆瘡或は疫瘡といひ未だ皰瘡の名あらず、倭名抄時代には之を皰瘡といひて豌豆瘡の名廢れたり故に仁壽の例を引て天平延曆の紀を引かず以て其變遷を知るべし　○(注)裳瘡、忌瘡の略なるべし此瘡に罹るもの飮食の外に禁忌多く齋居する人の如し故に云り、今の俗疱瘡をイモといふも忌瘡を略せるなり

八年(丙子)春正月丁酉(辛巳朔十七)、天皇宴群臣於南殿、賜祿有差、○戊申(廿八)、授正六位上坂上忌寸犬養外從五位下、○辛丑(廿一)、天皇臨朝、授從四位上紀朝臣男人正四位下、從五位上石川朝臣夫子、正五位下石上朝臣勝雄、並正五位上、從五位下巨勢朝臣奈氐麻呂、從五位上石上朝臣乙麻呂、並正五位下、從五位下加茂朝臣助、從五位上、外從五位下三國眞人廣庭、當麻眞人鏡麻呂、下毛野朝臣帶足、正六位上石川朝臣東人、多治比眞人國人、百

【天平八年】南殿、金本曾本及紀略殿を樓に作る或は是ならむ狩谷校本の頭注に南殿、天平廿年正月戊寅紀亦見、本居氏曰此紫宸殿之別名乎將後世改南殿名紫宸乎、除大極殿朱雀之外至奈良朝未有漢樣殿名如大安殿小安殿內安殿外安殿是也漢樣諸殿名蓋至平安宮就之後所名也とあり

○戊申、廿八日なれば次の辛丑の次に叙すべきなり

○從五位下加茂朝臣助、從五位下の四字は閣本皆本谷本に據て補ふ、又皆本谷本金イ本加を賀に作る
○車借、狩谷校本云借イ持に作る
（二月）學問、類聚國史下僧の字あり
○玄昉、元亨釋書に傳あり
○扶翼童子六人、原本六を八に作る皆本谷本及紀略に據て改む
（三月）辛巳朔、朔の字は例に據て補ふ
○諸國公田云々、又田令に見ゆ、義解に公田者乘田也凡乘田限二一年一賃春時取、直者爲賃也與人令佃至秋時、[illegible]租さあり
○公廨、田令に雜用に作る[illegible]公田の賃租を用ふるに在り[illegible]其一を稱するなり
（四月）遣新羅使、萬葉十五に此一行の作歌并に當時の誦詠せる古歌一百四十五首を載す
（五月）常陸、[illegible]調布の條に望陁上總國郡名也其體與他國調布頗別與故以所出國郡名

濟、王孝忠、並從五位下、正六位上波多朝臣古麻呂、田口朝臣三田次、紀朝臣必登、田中朝臣三上、巨勢朝臣首名、阿倍朝臣車借、佐伯宿禰淨麻呂、土師宿禰祖麻呂、丹比宿禰人足、正六位下下道朝臣眞備、正六位上大藏忌寸廣足、並外從五位下。○二月丁巳、入唐學問僧玄昉法師、施封一百戶、田一十町、扶翼童子八人。律師道慈法師、扶翼童子六人。○戊寅、以從五位下阿倍朝臣繼麻呂、爲遣新羅大使。○三月辛巳朔、行幸甕原離宮。○乙酉、車駕還宮。○庚子、太政官奏、諸國公田、國司隨鄕土沽價賃租、以其價送太政官、以供公廨。奏可之。○夏四月丙寅、遣新羅使阿倍朝臣繼麻呂等拜朝。○戊寅、賜陸奧出羽二國有功郡司及俘囚廿七人爵、各有差。○五月庚辰朔、日有蝕之。○辛卯、諸國調布、長二丈八尺、闊一尺九寸、庸布長一丈四尺、闊一尺九寸、爲端貢之。常陸曝布、上總望陁細貫、安房細布、及出絁鄕庸布、依舊貢之。○丙申、先是有勅、諸國司等除公廨田事力借貸之外、不得運送者。大宰管內諸國已蒙處分訖。但府官人者、任在邊要、祿同京官。因此別給仕丁公廨稻、亦漕送之物、色數立限、又

一任之內、不得交關所部、但買衣食者聽之、○六月(己酉朔)乙亥(廿七)、行幸芳野離宮、

○秋七月(戊寅朔)丁亥(十)、詔賜芳野監及側近百姓物、○庚寅(十三)、車駕還宮、○辛卯(十四)、詔曰、比來、太上天皇寢膳不安、朕甚惻隱、思欲平復、宜奉爲度一百人、都下四大寺七日行道、又京畿內及七道諸國百姓、幷僧尼有病者、給湯藥食粮、高年百歲以上穀人四石、九十以上三石、八十以上二石、七十以上一石、鰥寡惸獨、癈疾篤病、不能自存者、所司量加賑恤、○庚午、入唐副使從五位上中臣朝臣名代等、率唐人三人波斯人一人拜朝、○冬十月(丁未朔)戊申(二)、施唐僧道璿、波羅門僧菩提等時服、○戊辰(廿二)、詔曰、如聞、比年大宰所管諸國、公事稍繁、勞役不少、加以、去冬疫瘡、男女惣困、農事有廢、五穀不饒、宜免今年田租、令續民命、○癸酉(廿七)、夜、太白入月、星有光、

爲名也とあり ○細貲、抄同上に貲布唐韻云帯、布名也唐式云貲布(楊氏漢語抄云佐與美乃沼能今按貲布宜作帯布)乎とありサヨミを略してサミとも云り政事要略に細美之布とある是なりサは狭、ヨミは絲の數なり經絲の數少く幅狹き布の意 ○細布、和銅七年二月紀に注す ○出絁郷、原本絁を絶に作る諸本に據て改む ○先是有勅云々、前に見えず史に逸せしならむ考證曰案雜式云凡國司一任之內不得交關所部但聽買衣食其私物運京者除公廨外不得更加若有違犯依法科罪卽是也とあり ○邊要、民部式に陸奥出羽佐渡隱岐壹岐對馬嶋四國二島邊要と爲とあり ○公廨稻、原本廨を庸に作る金本淀本に據て改む後紀に弘仁二年二月大宰府官并所管國司聽公廨四分之一年漕于京遙授之官半分焉とあり ○色數立限、原本色を也に作る狩谷校本に據て改む ○一任云々、勝寶六年九月丁未紀にも國司等所部交關、運物無限者、禁斷既訖云々と見ゆ (六月)行幸芳野離宮、萬葉六に山邊宿禰赤人應詔作歌見ゆ

(七月)給湯藥、原本湯を復に作る東大寺要錄に據て改む ○癈疾、原本疾を疫に作る金本曾本淀本に據て改む ○篤病、原本病を疾に作る要錄に據て改む ○庚午、狩谷校本には午を子に作り廿三日と注す七月は戊寅朔なれば庚午なし庚午は八月廿三日に當れば或は月闕けたるにや考ふべし ○中臣朝臣名代、此人歸朝の時玄宗の勅書あり文苑英華及曲江集に見ゆれど文長ければ略す ○波斯人、唐書西域傳に波斯居達遏水西距京師萬五千里而羸とあり人の字は下文に據て補ふ

○道璿、元亨釋書に傳あり古本僧綱補任に諸を藏に作る　○波羅門、波一本婆に作るさ云、翻譯名義集に慧法師云具云婆羅賀磨拏義云承習梵天法者、其人種類自云從梵天口生、四姓中勝、獨取梵名、唯五天竺有、餘國即無云々正翻淨裔、稱是梵天苗裔也また象曰其種別有經書世相承以道學爲業或在家或出家云々さあり天竺四姓の一なり　○菩提、今年林邑國の僧佛哲さ共に來朝せり、傳記は婆羅門僧正傳及元亨釋書に見ゆ閣本菩提の下に尼字あり

○（十一月）田口朝臣養年富、考證に養年富さ訓り唐國にて卒せしなるべし　○紀朝臣馬主、此人も同じく唐にて卒せしなるべし　○皇甫東朝、神護二年十月紀に皇甫昇女あり　○李密翳、原本翳を醫に作る閣本官本に據て改む　○八氏、古事記に建內宿禰の子男七人にして後分れて廿八姓さなるさあれば此に八氏さあるは大凡の數を擧げたるなり　○源始王家、原本始を姓に作る諸本に據て改む　○御宇大八洲、宇の字は金本曾本谷本に據て補ふ、州は洲に通ず　○欽明文思、尙書堯典に曰若稽古帝堯曰放勳欽明文思安々、注に威儀表備謂之欽、照臨四方謂之明、經緯天地謂之文、道德純備謂之思、さあり　○經天緯地、國語に經之以天、緯之以地、經緯

○十一月戊寅、天皇臨朝、詔、授入唐副使從五位上中臣朝臣名代從四位下、故判官正六位上田口朝臣養年富、紀朝臣馬主、並贈從五位下、准判官從七位下大伴宿禰首名、唐人皇甫東朝、波斯人李密翳等、授位有差、○丙戌、從三位葛城王、從四位上佐爲王等上表曰、臣葛城等言、去天平五年、故知太政官事一品舍人親王、大將軍一品新田部親王、宣勅曰、聞道、諸王等願賜臣連姓供奉朝廷、是故召王等令問其狀者、臣葛城等、本懷此情、無由上達、幸遇恩勅、昧死以聞、昔者、輕堺原大宮御宇天皇曾孫建內宿禰、盡事君之忠、致人臣之節、創爲八氏之祖、永遺萬代之基、自此以來、賜姓命氏、或眞人、或朝臣、源始王家、流終臣氏、飛鳥淨御原大宮御宇大八州天皇、德覆四海、威震八荒、欽明文思、經天緯地、太上天皇、內脩四德、外撫萬民、化及翼鱗、澤被草木、後太上天皇、無改先軌、守而不違、率土清靜、民以寧一、于時也、葛城親母、贈從一位縣犬養橘宿禰、上歷

淨御原朝庭、下逮藤原大宮、事君致命、移孝爲忠、夙夜忘勞、累代竭力、和銅元年十一月廿一日、供奉擧國大嘗、廿五日御宴、天皇譽忠誠之至、賜浮杯之橘、勅曰、橘者果子之長上、人所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑而不彫、與珠玉共競光、交金銀以逾美、是以汝姓者賜橘宿禰也、而今无繼嗣者、恐失明詔、伏惟皇帝陛下、光宅天下、充塞八埏、化被海路之所通、德蓋陸道之所極、方船之貢、府无空時、河圖之靈、史不絶記、四民安業、萬姓謳衢、臣葛城、幸蒙遭時之恩、濫接九卿之末、進以可否、志在盡忠、身隆絳闕、妻子康家、夫王賜姓定氏、由來遠矣、是以臣葛城等、願賜橘宿禰之姓、戴先帝之厚命、流橘氏之殊名、萬歲無窮、千葉相傳、○壬辰、詔曰、省從三位葛城王等表、具知意趣、王等情深謙讓、志在顯親、辭皇族之高名、請外家之橘姓、尋思所執、誠得時宜、一依來乞、賜橘宿禰、千秋萬歲、相繼無窮、○甲午、詔免京四畿內及二監國今年田租、以秋稼頗損也、

不爽文之象也とあり經緯の才の大なるを稱贊せるなり
○太上天皇、考證に蓋謂持統天皇也とあり
○內脩四德、四德は易文言傳には元亨利貞を四德とし禮記昏義には婦德婦言婦容婦功を四德とす
○後太上天皇、後は原本復に作る淀本に據て改む考證に復疑當作後後太上天皇蓋謂元明天皇也と云り
○卒土淸靜、原本卒立淸淨に作る金本曾本淀本に據て改む
○葛城親母、三千代初め美努王に適して葛城王佐爲王等を生みし事五年正月紀に云り
○浮杯之橘、金本此四字明ならず曾本淀本杯を坏に作る
○果子之長上云々、狩谷校本に一本無上字人字下有之字と云
○繼嗣、原本嗣を副に作る諸本に據て改む
○陛下、原本陛を階に作る閣本曾本淀本に據て改む　○光宅天下、尙書堯典に見ゆ、既に神武紀（紀上八一頁）に云り　○八埏、原本埏を挺に作る諸本に據て改む司馬相如封禪に上暢九垓下泝八埏注に埏若云埏地之八際也とあり義は土地の限なり　○化被、原本化を紀に作る諸本に據て改む　○方船之貢、考證に卽幷舟之義見慶雲三年十一月攷證とあり新年祭祝詞に船滿ちつゞけてとあると同じ意なり化被海路之所通云々より方船之貢府无空までは新年祭詞の天

能登立乎云々舟嶋能至留極云々自陸往道者云々馬爪至留限云々とあると相似たる文辭なり　○九卿、九人の大臣を云ふ時代に據て名稱を異にす周にて少師少保少傳(以上三孤)冢宰司徒宗伯司馬司寇司空(以上六卿)を九卿と云ふ　○身降絲綸、山崎校本に如綸降與絲綸、玄宮は絳綱入丁門也とあり身降絲綸とは大官となり朝廷より優遇せらるゝを云　○厚命、原本厚を原に作る閣本に據て改む　○且坦、原本且を門に作る金本曾本淀本に據て改む　○一依來乞、原本來乞を壽令に作る金本曾本淀イ本に據て改む　○賜橘宿禰、勝寶二年正月改めて朝臣の姓を賜ふ錄右京皇別に橘朝臣甘南備眞人同祖云々天平八年十一月詔參議從三位行左大辨葛城王賜橘宿禰諸兄とあり月日違へり　萬葉六に葛城王等賜姓の時の御製一首、橘花は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹と見ゆ

【天平九年】辛酉、是月乙亥朔なれば辛酉なし或は辛巳の譌か辛巳ならば七日なり　○車持君、和銅三年正月紀(七七頁)に出づ　○道經男勝云々、男勝は五年十二月紀に雄勝とし出づ出羽國雄勝郡雄勝郷にて今羽後國に屬す金本には程迂の二字、征の字及以通直路の四字も亦不明なるが道經男勝云々とありては文脈通ぜず道は或は不の譌ならむか　○宇頭麻佐、原本麻の下に呂の字あり曾本淀本金イ本に據て削る　○壬生使主、壬生氏には直、連、宿禰、朝臣、臣、公等あれど使主とあるは此に始て見えたり　○津嶋、對馬國なり　【二月】戊午、金本曾本淀本午を子に作るは非なり此月戊子なし

九年春正月辛酉、正八位下車持君長谷賜朝臣姓。○丙申、先是陸奥按察使大野朝臣東人等言、從陸奥國達出羽柵、道經男勝、行程迂遠、請征男勝村、以通直路。於是詔持節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿禰豐人、常陸守從五位上勳六等坂本朝臣宇頭麻佐等、發遣陸奥國、判官四人、主典四人。○辛丑、遣新羅使大判官從六位上壬生使主宇太麻呂、少判官正七位上大藏忌寸麻呂等入京、大使從五位下阿倍朝臣繼麻呂泊津嶋卒、副使從六位下大伴宿禰三中染病不得入京。○二月戊午、天皇臨朝、授從四位下栗林王從四位上、无位三使王、八釣王、並從五位下、從四位上橘宿禰佐爲正四位下、從五位上藤原朝臣豐成正五位上、正六位上多治比眞人家主、外從五位下佐伯宿禰淨麻呂、阿倍朝臣豐繼、下道朝臣眞備、並從五位下、正六位上三使、

連人麻呂ニ外從五位下ヲ、四品水主內親王、長谷部內親王、多紀內親王並ニ授三品ヲ、夫人无位藤原朝臣二人名闕並正三位、正五位下縣犬養宿禰廣刀自、无位橘宿禰古那可智並從三位、從四位上多伎王正四位下、從四位下檜前王從四位上、无位矢代王正五位下、從五位下佳吉王從五位上、无位忍海王從五位下、從四位下大神朝臣豐嶋從四位上、從五位上河上忌寸妙觀、大宅朝臣諸姉並正五位下、從五位下曾禰連五十日虫、大春日朝臣家主並從五位上、无位藤原朝臣吉日從五位下、正六位上大田部君若子、從六位上黃文連許志、從七位上丈部直刀自、正七位上朝倉君時、從七位下尾張宿禰小倉、正八位下小槻山君廣虫、无位廬郡君並外從五位下。○己未、遣新羅使奏新羅國失常禮不受使旨、於是召五位已上并六位已下官人惣四十五人于內裏、令陳意見。○丙寅、諸司奏意見表、或言遣使問其由、或發兵加征伐、

○栗林王、五年十二月紀六年二月紀並に栗栖王に作る狩谷氏は林恐栖といへど神功紀に狹々浪栗林、履中紀に攪食栗林とあり栗林は栗栖に同じ必ず誤なりと云ふべからず
○八釣王、閣本釣を鉤に作る
○左爲正四位下、原本下を上に作る八月壬寅紀に據て改む
○多治比眞人家主、神龜元年正月紀に從五位下に叙せり此に亦從五位下とあるは誤なり
○三使連、錄左京皇別に御使朝臣出自諡景行天皇々子氣入彥命之後也とあり三使は御使に同じ
○藤原朝臣二人、大日本史に據るに一は武智麻呂女廿年六月薨、一は房前の女寶字四年正月薨とせり
○(注)闕名、金本曾本淀本並に本文とせり
○多伎王、十年正月紀には多伎女王に作り勝寶三年正月紀には多藝女王に作る　○矢代王、寶字二年十二月紀に矢代女王に作り萬葉四に八代女王に作れり又王の下正五位下の下を金本閣本曾本上に作る　○五十日虫、寶字五年九月紀に伊賀牟志に作れり　○大田部君、後紀延曆十六年正月の條に陸奥國安積郡人大田部山前見え萬葉二十に常陸國防人火長大田部荒耳等見ゆれど姓氏錄には載せず　○丈部直、天平十年駿河正稅帳に下總國印波郡釆女丈部直廣成見ゆ、直姓は後漢靈帝の後なる丈部谷直と同族にて丈部造

とは別なり　○朝倉君、孝德紀に朝倉公、延暦六年十二月紀朝倉公家長見ゆ未詳ならず　○小槻山君、古事記垂仁天皇の段に落別王は小月之山君之祖也とあり　○廬郡君、詳ならず閣本郡を那に作る　○或言遣使問其由、此十字閣本曾本淀本及紀略に據て補ふ紀略には由を旨に作る　○或發兵、閣本或の下に言の字あり

（三月）一軀、金本曾本淀本及紀略軀を體に作る　○挾侍、脇立なり用明紀（紀下九九頁）に見ゆ諸書に脇侍亦は脇士に作る　○遣新羅使、此下恐くは大使の官位姓名を脱す　（四月）乙巳朔、原本朔の字を脱す山崎校本に據て補ふ　○大神社、大和國城上郡大神大物主神社なり今磯城郡三輪町官幣大社大神神社是なり　○住吉、神名式に筑前國那珂郡住吉神社三座とあり今筑紫郡住吉町鎭座官幣小社住吉神社是なり　○八幡、神名式に同那珂郡八幡大菩薩筥前宮とあり今糟屋郡箱崎町鎭座官幣大社筥崎宮是なり　○香椎宮、筑前國糟屋郡香椎村にあり神名式に載せず今官幣大社香椎宮是なり　○住此大安寺、寛平大安寺緣起に天平元年己巳更勅道慈改造此寺即以

○三月丁丑、詔曰、每國令造釋迦佛像一軀、挾侍菩薩二軀、兼寫大般若經一部、○壬寅、遣新羅使、副使正六位上大伴宿禰三中等四十人拜朝、○夏四月乙巳朔、遣使於伊勢神宮、大神社、筑紫住吉八幡二社、及香椎宮、奉幣、以告新羅无禮之狀、○壬子、律師道慈言、道慈奉天勅、住此大安寺、修造以來、於此伽藍、恐有災事、私請淨行僧等、每年令轉大般若經一部六百卷、因此雖有雷聲、無所災害、請自今以後、撮取諸國進調庸各三段物、以充布施、請僧百五十人、令轉此經、伏願、護寺鎭國、平安聖朝、以此功德、永爲恒例、勅許之、○戊午、遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言、以去二月十九日、到陸奥國多賀柵、與鎭守將軍從四位上大野朝臣東人共平章、且追常陸、上總、下總、武藏、上野、下野等六國騎兵惣一千人、開山海兩道、夷狄等咸懷疑懼、仍差田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人、遣海道、差歸服狄和我君計安壘、遣山道、並以使旨、慰喩鎭撫

道慈補律師こと見ゆ、大寶元年六月紀（一二頁）を參考すべし
○撮取、紀略に取の字なし
○三段物、紀略物の字なし
○陸奧國、國の字は金本曾本淀本に據て補ふ
○多賀柵、陸奧國宮城郡多賀鄕にあり柵趾今陸前國宮城郡多賀城村大字市川に存す
○平章、尙書堯典に出づ公平明白に治むるを云
○田夷、二年正月紀に見ゆ、山夷に對し農耕に習ひて田畠を耕作る夷を云
○遠田郡、今陸前國に屬す
○遠田君、勝寶四年六月紀に遠田君小捄及遠田君金夜、延曆九年五月紀に遠田君押人見ゆ皆同族なるべし
○和我君、諸史に此氏人見えず後紀に弘仁二年正月於陸奧國置和我薭縫斯波三郡とあり此地に因て命ぜられし氏なるべし和賀は今陸中國和賀郡是なり
○新田柵、陸奧國新田郡にあり觀蹟聞老志に新田

之、仍抽勇健一百九十六人委將軍東人、四百五十九人分配玉造等五柵、麻呂等帥所餘三百四十五人鎭多賀柵、遣副使從五位上坂本朝臣宇頭麻佐鎭玉造柵、判官正五位上大伴宿禰美濃麻呂鎭新田柵、國大掾正七位下日下部宿禰大麻呂鎭牡鹿柵、自餘諸柵依舊鎭守、廿五日、將軍東人從多賀柵發、四月一日、帥使下判官從七位上紀朝臣武良士等、及所委騎兵一百九十六人、鎭兵四百九十九人、當國兵五千人、歸服狄俘二百四十九人、從部內色麻柵發、即日到出羽國大室驛、出羽國守正六位下田邊史難破將部內兵五百人、歸服狄一百四十人、在此驛相待、以三日與將軍東人共入賊地、且開道而行、但賊地雪深、馬芻難得、所以雪消草生、方始發遣、同月十一日、將軍東人廻至多賀柵、自導新開通道惣一百六十里、或剋石伐樹、或塡澗疏峯、從賀美郡至出羽國最上郡玉野八十里、雖惣是山野形勢險阻、而人馬往還無大艱難、從玉野至賊地比羅保許山八十里、地勢平坦、無有危嶮、狄俘等曰、從比羅保許山至雄勝村五十餘里、其間亦平、唯有兩河、每至水漲、並用船渡、四月四日、軍

郡方驛加美郡有二上新田中新田下新田三邑一と云加美郡は今陸前國に屬す

○四月一日、大日本史注に考二前後文一四宜レ作レ三と云り

○使下、使の部下の意なり慶雲二年八月紀(四四頁)に見ゆ

○色麻柵、陸奥國色麻郡にあり觀蹟聞老志に色麻郡方驛加美郡有二色麻四竈一と云り今加美郡色麻村是なり

○大室驛、兵部式に載せず、寶龜十一年十二月紀に出羽國大室塞見ゆ此地なり

○難破、金本曾本淀本破を波に作る

○馬芻、毛詩大雅の疏に芻者飼二牛馬一之草とあり

○剗石、剗は刻に通ず刻は鐵也又割也とあり石を割るを云

○跡峯、原本峯を亭に作る金本曾本淀本に據て改む跡は[illegible]也又分也とあり

○玉野、寶字三年九月紀に見ゆ此に最上郡とあれど今羽前國北村山郡玉野村にあり、同郡尾花澤町の東にて銀山越と云山路を越えて陸前國加美郡軒

屯賊地比羅保許山、先是田邊難波狀偁、雄勝村俘長等三人來降、拜首云、承聞、官軍欲入我村、不勝危懼、故來請降者、東人曰、夫狄俘者甚多奸謀、其言無恆、不可輒信、而重有歸順之語、仍共平章、難破議曰、發軍入賊地者、爲教喩俘狄、築城居民、非必窮兵殘害順服者、不許其請、淩壓直進者、俘等懼怨、遁走山野、勞多功少、恐非上策、不如示官軍之威、從此地而返、然後難破訓以福順、懷以寬恩、然則城郭易守、人民永安者也、東人以爲然矣、又東人本計、早入賊地、耕種貯穀、省運糧費、而今春大雪倍於常年、由是不得早入耕種、天時如此、已違元意、其唯營造城郭、一朝可成、而守城以人、存人以食、耕種失候、將何取給、且夫兵者、見利則爲、無利則止、所以引軍而旋、方待後年、始作城郭、但爲東人自入賊地、奏請將軍鎭多賀柵、今新道既通、地形親視、至於後年、雖不自入、可以成事、者、臣麻呂等愚昧、不明事機、但東人久將邊要、尠謀不中、加以、親臨賊境、察其形勢、深思遠慮、量定如此、謹錄事狀、伏聽勅裁、但今間無事、時屬農作、所發軍士、且放且奏、○辛酉、參議民部卿正三位藤原朝臣房前薨、送

以大臣葬儀、其家固辭不受、房前贈太政大臣正一位不比等之第二子也、○癸亥、大宰管內諸國疫瘡時行、百姓多死、詔奉幣於部內諸社以祈禱焉、又賑恤貧疫之家、幷給湯藥療之、

○五月甲戌朔、日有蝕之、請僧六百人于宮中、令讀大般若經焉、○壬辰、詔曰、四月以來、疫旱並行、田苗燋萎、由是祈禱山川、奠祭神祇、未得効驗、至今猶苦、朕以不德實致茲災、思布寬仁以救民患、宜令國郡審錄寃獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒、鰥寡惸獨、及京內僧尼男女臥疾不能自存者、量加賑給、又普賜文武職事以上物、大赦天下、自天平九年五月十九日昧爽以前、死罪以下、咸從原免、其八虐劫賊、官人受財枉法、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦例、○六月甲辰朔、廢朝、以百官官人患疫也、○癸丑、散位從四位下大宅朝臣

井澤に至る東西約二里南北一里半に亙る廣原なり　○無大艱難、鴨本大を有に作ると云　○比羅保許山、寶字三年九月紀に始置出羽國雄勝、平鹿二郡玉野避翼平戈云々等驛家とあり平戈は後の金山驛にて平戈山は有屋峠なるべしと云　○平坦、原本坦を垣に作る閣本曾本淀本に據て改む　○亦平、亦の字は諸本に據て補ふ　○兩河、小國川泉川なるべしと云　○田邊難波、邊の下一本に史字ありと云　○從此地、地の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ　○運糧、金本曾本淀本糧を粮に作る　○常年、原本常を舊に作る閣本曾本淀本に據て改む　○勘謀不中、不の字は金本曾本淀本に據て補ふ　○加以、加の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ　○今問、原本問を聞に作る閣本曾本淀本に據て改む　○藤原朝臣房前薨、懷風藻に總前の詩三首を載せ年五十七とあり十月丁未正一位左大臣を贈り寶字四年八月太政大臣を贈らる

（五月）猶苦、原本猶を獨に作る諸本に據て改む

（六月）大宅朝臣大國卒、和銅七年紀に始見、

同年十月紀に上野守、養老四年十月紀に攝津守となる
○小野朝臣老卒、臣の字は曾本從本金イ本に據て補ふ
○長田王卒、和銅四年紀に始見、天平元年九月衛門督、同四年十月攝津大夫となる
○正三位、原本三を二に作る曾本及紀略に據て改む
○多治比眞人縣守薨、補任に年七十とあり
○七月 藤原朝臣麻呂薨、懷風藻に年四十三とあり大日本史註に案麻呂歸京無所見疑薨于軍也今無所考とあり
○百濟王郎虞卒、百濟王昌成の子なり天平神護二年六月壬子紀敬福の傳中に見ゆ
○猶未得可、原本猶を獨に作る金本曾本に據て改む
○右大臣、武智麻呂なり
○橘宿禰諸兄、元の名葛城王、八年十一月橘宿禰の姓を賜はり、共に名をも賜はりしなるべし
○即日薨、武智麻呂傳に廿四日叙正一位從爲左

大國卒。○甲寅、大宰大貳從四位下小野朝臣老卒。○辛酉、散位正四位下長田王卒。○丙寅、中納言正三位多治比眞人縣守薨。左大臣正二位嶋之子也。○秋七月丁丑、賑給大倭伊豆若狹三國飢疫百姓。散位從四位下大野王卒。○壬午、賑給伊賀駿河長門三國疫飢之民。○乙酉、參議兵部卿從三位藤原朝臣麻呂薨。贈太政大臣不比等之第四子也。○己丑、散位從四位下百濟王郎虞卒。○乙未、大赦天下。詔曰、比來緣有疫氣多發、祈祭神祇、猶未得可。而今右大臣身體有勞、寢膳不穩。朕以惻隱、可大赦天下、救此病苦。自天平九年七月廿二日昧爽以前大辟罪已下、咸赦除之。其犯八虐、私鑄錢、及强竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限。○丁酉、勅遣左大弁從三位橘宿禰諸兄、右大弁正四位下紀朝臣男人、就右大臣第、授正一位、拜左大臣。即日薨。遣從四位下中臣朝臣名代等監護葬事。所須官給。武智麻呂、贈太政大臣不比等之第一子也。○八月壬寅朔、中宮大夫兼右兵衛率正四位下橘宿禰佐爲卒。○癸卯、命四畿內二監及七道諸國、僧尼淸淨沐浴、一月之內二三度、令讀最勝王經。又月

六齋日、禁斷殺生、○丙午、參議式部卿兼大宰帥正三位藤原朝臣宇合薨、贈太政大臣不比等之第三子也、○甲寅、詔曰、朕君臨宇內、稍歷多年、而風化尙壅、黎庶未安、通旦忘寐、憂勞在茲、又自春已來、災氣遽發、天下百姓、死亡實多、百官人等、闕卒不少、良由朕之不德、致此災殃、仰天慚惶、不敢寧處、故可優復百姓、使得存濟、免天下今年租賦、及百姓宿負公私稻、公稻限八年以前、私稻七年以前、其在諸國、能起風雨、爲國家有驗神、未預幣帛者、悉入供幣之例、給大宮主、御巫、坐摩御巫、生嶋御巫、及諸神祝部等爵、○丙辰、爲天下太平國土安寧、於宮中一十五處、請僧七百人、令轉大般若經、最勝王經、度四百人、四畿內七道諸國五百七十八人、○庚申、以正四位上多治比眞人廣成爲參議、○辛酉、三品水主內親王薨、天智天皇之皇女也、○甲子、正五位下巨勢朝臣奈氏麻呂爲造佛像司長官、○丁卯、以玄昉法師爲僧正、良敏法師爲大僧都、

大臣ニ翌日薨とあり一日の差あり　(八月)壬寅朔、朔字は例に據て補ふ　○右兵衛率、原本率を卒に作る曾本淀本金イ本に據て改む　○橘宿禰佐爲卒、美努王の子にして諸兄の弟なり　○命四畿內、曾本金イ本命を令に作る　○又月六齋日、雜令に凡六齋日公私皆斷ニ殺生一、義解に六齋八日十四日十五日廿三日廿九日卅日とあり紀略父を毎に作る　○藤原朝臣宇合薨、懷風藻に宇合の詩六首を載せて年三十四とあり一に四十四に作る補任は一本に同じ　○尙壅、原本壅を擁に作る前例に據て改む　○通旦、金本曾本淀本適旦に作る　○宿負、古くより負債せるを云　○大宮主、慶雲元年二月神祇官大宮主入ニ長上例一とある是なり考證に祝詞考に據て大宮主の御巫とするは非なり　○御巫、神祇官の八神に奉仕する巫なり　○坐摩御巫、神名式に座摩巫祭神五座とある五神に奉仕する御巫なり臨時祭式に座摩巫取ニ都下國造氏童女七歲已上者一充レ之とす　○生嶋御巫、神名式に生島巫祭神二座生嶋神足嶋神とあり此二神に奉仕する巫なり臨時祭式に生島巫一人取ニ庶女堪レ事充レ之とあり　○奈氏麻呂、原本麻呂を麿に作る今金本曾本に據る　○良敏、古本僧綱補任に興福寺義淵僧正の弟

子なりと云

(二)九月 詔曰、此詔三代格に見え九月廿一日とす
○臣家之稻、天平勝寶三年九月四日格に此文を引て私稻貸論百姓とあり土豪の家の私稻なり
○貯蓄、原本蓄を畜に作る類史及格に據て改む
○乞食、類史乞を衣に作り格には貸に作る
○農務、格に務農に作る
○賖、原本賖を賒に作る閣本曾本淀本及類史に據て改む
○以違勅論、寶字五年三月紀に越前國加賀郡少領道公勝石私稻を出擧して違勅を以て利稻三萬束を沒せられしこと見ゆ
○停筑紫防人云々、二年五月諸國の防人を停めしこと見えたれど其後暫くは實行せられざりしを此に至て各其本國に歸らしめしなり
○壹伎、谷本淀本伎を岐に作る
○无位諱、光仁天皇に坐します
○巨勢朝臣、朝の字は曾我本淀本に據て補ふ
○石川朝臣、原本川を河

○九月癸巳、詔曰、如聞、臣家之稻、貯蓄諸國、出擧百姓、求利交關、無知愚民不顧後害、迷安乞食、忘此農務、遂逼乏困、逃亡他所、父子流離、夫婦相失、百姓弊窮、因斯彌甚、實是國司教喩、乖方之所致也、朕甚愍焉、濟民之道、豈合如此、自今以後、悉皆禁斷、催課百姓、一赴產業、必使不失地宜、人阜家贍、如有違者、以違勅論、其物沒官、國郡官人、郎解見任、○是日、停筑紫防人、歸于本鄕、差筑紫人、令戍壹伎對馬、○己亥、以從三位鈴鹿王、爲知太政官事、從三位橘宿禰諸兄爲大納言、正四位上多治比眞人廣成爲中納言、廣成及百濟王南典並授從三位、從四位下高安王從四位上、无位諱(天宗高紹天皇也)、道祖王並從四位下、无位倉橋王、明石王、宇治王、神前王、久勢王、河內王、尾張王、古市王、大井王、安宿王並從五位下、正五位下巨勢朝臣奈氐麻呂正五位上、藤原朝臣豐成並從四位下、正五位下大伴宿禰牛養、高橋朝臣安麻呂、石上朝臣乙麻呂並正五位上、從五位上縣犬養宿禰石次、吉田連宜並正五位下、從五位下石川朝臣膽從五位

上、正六位上阿倍朝臣吾人、石川朝臣牛養、多治比眞人牛養、阿倍朝臣佐美麻呂、從六位下巨勢朝臣淨成、從六位上藤原朝臣乙麻呂、藤原朝臣永手、藤原朝臣廣嗣、並從五位下、正六位上爲奈眞人馬養、紀朝臣鹿人、賀茂朝臣高麻呂、路眞人宮守、波多朝臣孫足、從六位下佐伯宿禰常人、正六位上平群朝臣廣成、（在唐未歸）大宅朝臣君子、穗積朝臣老人、從六位上大伴宿禰祜信備、正六位上柿本朝臣濱名、太朝臣國吉、正六位下巨勢斐太朝臣嶋村、菅生朝臣古麻呂、正六位上小野朝臣東人、正六位下中臣熊凝朝臣五百嶋、正七位上阿倍朝臣虫麻呂、從七位上縣犬養宿禰大國、正六位上土師宿禰御目、高麥大、民忌寸大梶、於忌寸人主、文忌寸馬養、大津連船人、並外從五位下、因施兩京四畿二監、僧正以下沙彌已上、惣二千三百七十六人綿幷鹽、各有差、○冬十月（辛丑朔）壬寅、令左右京職停收徭錢、○丁未、停額外散位輸續勞錢、贈民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣、幷賜食封二千戸於其家、限以二十年、○己未、地震、○庚申、天皇御南苑、授從五位下安宿王從四位下、无位黄文王從五

に作る金本淀本に據る
○鹿人、淀本庶人に作る下文には牛鹿人とあり
○路眞人宮守、路の字は金イ本に據て補ふ
○(注)在唐未歸、平群朝臣廣成は五年大使多治比眞人廣成と入唐し十一年十月歸朝せり
○祜信備、原本祜を祐に作る勝寶元年十一月己未に古慈悲とあるに據て改む
○正六位下中臣熊凝、金本曾本六を五に作る恐くは非なり
○高麥大、大は原本太に作る金本曾本淀本及下文に據て改む
○大梶、原本大を丈に作る閣本曾本淀本に據て改む十三年四月紀に從五位下民忌寸大梶に作る
○於忌寸、姓氏錄に載せず延暦六年六月坂上氏の同族と共に忌寸を改めて宿禰を賜ふこと見ゆれば坂上氏と同祖なるべし
○沙彌已上、曾本淀本金イ本彌の下に尼の字あり
(十月)令左右京職云々、六年五月戊子紀を參考すべし
○額外散位、額外散位と

后宮亮、外從五位下中臣熊凝朝臣五百嶋爲員外亮、從五位下池邊王爲內匠頭、外從五位上秦忌寸朝元爲圖書頭、從五位下宇治王爲內藏頭、外從五位下高麥大爲陰陽頭兼陰陽師、外從五位下小治田朝臣諸人爲散位頭、從五位下神前王爲治部大輔、外從五位下大倭宿禰清國爲玄蕃頭、外從五位下土師宿禰三目爲諸陵頭、從五位下阿倍朝臣吾人爲主計頭、從五位下大伴宿禰兄麻呂爲主稅頭、從五位下石川朝臣牛養爲大藏少輔、外從五位下紀朝臣鹿人爲主殿頭、從四位上御原王爲彈正尹、外從五位下穗積朝臣老人爲左京亮、從四位下門部王爲右京大夫、外從五位下太朝臣國吉爲亮。○丙寅、改大倭國爲大養德國。是日、皇太夫人藤原氏（宮子娘）就皇后宮見僧正玄昉法師。天皇亦幸皇后宮。皇太夫人爲沈幽憂久廢人事。自誕天皇未曾相見。法師一看惠然開晤。至是適與天皇相見。天下莫不慶賀。卽施法師絁一千疋、綿一千屯、絲一千絇、布一千端。又賜中宮職官人六人位各有差。亮從五位下下道朝臣眞備授從五位上。少進外從五位下阿倍朝臣虫麻呂從五位下。外從五

國魂神社の神宜なるべし考證にもしか云り
○小東人水守、原本水の上に忌寸の二字あり衍なり類史に據て削る
（十二月）高麥大、閣本曾本淀本大を太に作る
○治部大輔、原本大を太に作る曾本淀本に據て改む
○三目、上文に御目こ見えたり
○紀朝臣鹿人、金本曾本淀本鹿の上に牟の字あり
○大養德國、ヤマトに養德の二字を充てしなり十九年三月辛卯更に大倭國に復す
○皇太夫人藤原氏、天皇の母宮子娘なり大日本史注に皇后見玄昉舊史文義不明元亨釋書或曰釋善珠藤太后宮子孽子也さあり、考證に興福寺僧侶口碑亦傳善珠者宮子通玄昉而所生也又興福寺所藏略年代記載光明皇后崩云玄昉僧正通之據舊史玄昉榮寵日盛稍乖沙門之行蓋有所指而諱不明書爾とあり
○自誕天皇云々、聖武天皇は大寶元年の降誕にて此に至るまで三十七年な

り
○虫麻呂從五位下、原本下を上に作る諸本に據て改む
○疫瘡、原本疫を役に作る諸本及類史に據て改む 疫瘡卽ち皰瘡なり七年閏十一月紀豌豆瘡の注及文德仁壽三年二月紀を參考すべし
○沒死、類史沒を疫に作る

位下文忌寸馬養外從五位上、○是年春、疫瘡大發、初自筑紫來、經夏涉秋、公卿以下天下百姓、相繼沒死、不可勝計、近代以來未之有也、

續日本紀卷第十二

○聖武天皇、金本此四字なし

【天平十年】庚午朔、金本暫本蓬本午を子に作るは非なり

○白髦、原本髦を髮に作る下文十一年三月紀（二八一頁）に據て改む

○阿倍內親王、天皇の第二皇女にして後の謚孝謙天皇に坐す

○松林、天平元年三月紀（二二四頁）に松林苑、同二年三月紀（二二五頁）には松林宮と見ゆ

續日本紀卷第十三

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平十年正月盡十二年十二月

天璽國押開豐櫻彥天皇　聖武天皇

十年春正月庚午朔、天皇御中宮、宴侍臣、饗五位已上於朝堂、信濃國獻神馬、黑身白髦尾、○壬午、立阿倍內親王爲皇太子、大赦天下、但謀殺殺訖、私鑄錢、强竊二盜、不在赦限、若罪至死降一等、其六位已下進位一階、高年窮乏、孝義人等、量加賑恤、又貢瑞人、賜爵及物、并免出瑞郡當年之庸、是日、授大納言從三位橘宿禰諸兄正三位、拜右大臣、從三位鈴鹿王授正三位、正五位上大伴宿禰牛養、高橋朝臣安麻呂、石上朝臣乙麻呂並從四位下、○丙戌、皇帝幸松林、賜宴於文武官主典已上、賚祿有差、○乙未、以從四位下石上朝臣乙麻呂爲左大辨、中納言從三位多治比眞人廣成爲兼式部卿、從四位下巨勢朝臣奈氐麿爲民部卿、是月、大

宰府奏新羅使級飡金想純等一百四十七人來朝、○二月丁巳、筑紫宗形神主外從五位下宗形朝臣鳥麻呂授外從五位上、出雲國造外正六位上出雲臣廣嶋外從五位下、○三月辛未、從六位上背奈公福信授外從五位下、○丙申、施山階寺食封一千戸、鵤寺食封二百戸、隅院食封一百戸、又限五年施觀世音寺食封一百戸、

○夏四月乙卯、詔、爲令國家隆平宜令京畿內七道諸國三日內轉讀最勝王經、○庚申、從五位下佐伯宿禰淨麻呂爲左衞士督、從五位下藤原朝臣廣嗣爲大養德守、式部少輔如故、從五位下百濟王孝忠爲遠江守、外從五位下佐伯宿禰常人爲丹波守、從五位下大伴宿禰兄麻呂爲美作守、外從五位下柿本朝臣濱名爲備前守、外從五位下大宅朝臣君子爲筑前守、外從五位下田中朝臣三上爲肥後守、外從五位下陽侯史眞身爲豐後守、○五月庚午、停東海、東山、山陰、山陽、西海等道、諸國健兒、○

○金想純、原本想を相に作る曾本淀本及紀略に據て改む

(二月)筑紫宗形神主、元年四月紀(二一五頁)に云り

○宗形朝臣鳥麻呂、天平元年四月乙丑紀に見ゆ

○山階寺、興福寺の一名

○鵤寺、原本鵤を鸙に作る曾本淀本金イ本及紀略に據て改む鵤寺は卽ち法隆寺なり拾芥抄に法隆寺號伊香留香寺とあり、同寺資財帳に食封貳佰戸永年者在四國播磨國揖保郡林田鄕五十戸但馬國朝來郡牧田鄕五十戸相摸國足下郡倭戸鄕五十戸上野國多胡郡山宗鄕五十戸右天平十年歲次戊寅四月十二日納賜平城宮御宇天皇とある卽是なり　○隅院、大和志に海龍王寺在添上郡法華寺村一名隅寺とあり今佐保村大字となる當時宮城の東北隅にありしが故に隅の院と呼びしなるべし

(四月)三日內、內の字は曾本淀本及東大寺要錄に據て補ふ

(五月)健兒、六年四月紀(二四七頁)に注す

○宇美、原本宇を字に作る谷本金イ本及類史に據て改む下同じ
○高麥太、類史麥を表に作る
○伊勢大神宮、原本大を太に作る金イ本及紀略に據て改む下同じ
(六月)戊戌朔、朔の字は例に據て補ふ
○粟田朝臣人上卒、和銅七年正月紀(一〇〇頁)に始見、天平四年十月丁亥紀に造藥師寺大夫となる
○大宰、原本大を太に作る諸本及紀略に據て改む下同じ
○便即、原本使を便に作る谷本宣本及紀略に據て改む
(七月)轉御西池宮、轉は谷本宣本金イ本及類史紀略に據て補ふ西池宮は西池の邊にあるによりて名づく萬葉集八に御在西池邊肆宴歌一首を載す
○匹、原本疋に作る諸本及紀略に據て改む
○比寮、原本比を此に作る閣本金イ本及紀略に據て改む比寮とは左右相並べるを云ふ
○誣告長屋王事、元年二月紀(一二一頁)に見ゆ

辛卯、使右大臣正三位橘宿禰諸兄、神祇伯從四位下中臣朝臣名代、右少弁從五位下紀朝臣宇美、陰陽頭外從五位下高麥太、齎神寶奉于伊勢大神宮。○六月戊戌朔、武藏守從四位下粟田朝臣人上卒。○辛酉、遣使大宰賜饗於新羅使金想純等、便即放還。○秋七月癸酉、天皇御大藏省覽相撲、晩頭轉御西池宮、因指殿前梅樹、勅右衛士督下道朝臣眞備及諸才子曰、人皆有志、所好不同、朕去春欲翫此樹、而未及賞翫、花葉遽落、意甚惜焉、宜各賦春意詠此梅樹、文人卅人奉詔賦之、因賜五位已上絁廿匹、六位已下各六匹、○丙子、左兵庫少屬從八位下大伴宿禰子虫、以刀斫殺右兵庫頭外從五位下中臣宮處連東人、初子虫事長屋王、頗蒙恩遇、至是適與東人任於比寮、政事之隙、相共圍碁、語及長屋王、憤發而罵、遂引劍斫而殺之、東人即誣告長屋王事之人也、○閏七月癸卯、以從五位下阿倍朝臣沙彌麻呂爲少納言、從五位下紀朝臣宇美爲右中弁、從五位下多治比眞人牛養爲少辨、從五位下石川朝臣加美爲中務大輔、從五位下阿倍朝臣虫麻呂爲少輔、從五位下大井王爲左大舍

（閏七月）從五位下大井王、以下人頭までの十三字閣本に闕く
○外從五位上文忌寸馬養、原本上を下に作る九年十二月丙寅の條に據て改む
○行達云々、古本僧綱補任に之を七月三日の事とす
○行信、古本僧綱補任云、行信法相宗元興寺或本云爲諸寺撿挍又兼法務天平年中任大僧都而任日不見勝寶二年入滅
○左兵衛佐、金本佐を率に作る
（八月）豐後守、原本豐を備に作る曾本金イ本に據て改む
○造國郡圖、大化二年及

人頭、從五位下久世王爲內藏頭、從四位下道祖王爲散位頭、從五位下阿倍朝臣吾人爲治部少輔、從四位下安宿王爲玄蕃頭、從五位下多治比眞人國人爲民部少輔、從五位下石川朝臣牛養爲主計頭、外從五位上文忌寸馬養爲主稅頭、從五位上石川朝臣麻呂爲兵部大輔、外從五位下大伴宿禰百世爲少輔、從五位下宇治王爲刑部大輔、外從五位下大養德宿禰小東人爲少輔、從五位下小田王爲大藏大輔、從五位下路眞人虫麻呂爲少輔、正五位下吉田連宜爲典藥頭、外從五位下大伴宿禰麻呂爲右京亮、從四位下大伴宿禰牛養爲攝津大夫、外從五位下中臣熊凝朝臣五百嶋爲亮。○乙巳、以行達法師、榮弁法師爲少僧都、行信法師爲律師。○丁巳、外從五位下引田朝臣虫麻呂爲齋宮長官、外從五位下小野朝臣東人爲左兵衛佐。○八月（丙寅朔）乙亥、外從五位下中臣熊凝朝臣五百嶋爲皇后宮亮、外從五位下於忌寸人主爲攝津亮、正五位下多治比眞人廣足爲武藏守、從五位下當麻眞人鏡麻呂爲因幡守、從五位下息長眞人名代爲備中守、外從五位下大伴直蜷淵麻呂爲伊豫守、外

延暦十五年八月亦此事あり天平五年には出雲風土記を作りて進れり諸國にも此事ありしなるべし是に至て地圖を作進せしめられしは蓋相關する所あるを知るべし

(二九月)伊勢直族、十九年十月紀に伊勢國人伊勢直大津等七人賜中臣伊勢連姓、神護二年十二月紀に中臣伊勢連大津賜姓伊勢朝臣と見え錄左京神別に伊勢朝臣天底立命孫天日別命之後也とあり

(三十月)芳野、原本野の下に山の字あるは衍なり曾本從本及紀略に據て削る

○紀朝臣男人卒、懷風藻に年五十七とあり同目錄に雄人とす大納言麻呂の子なり

(三十二月)程粮、道中の糧食なり民部式に凡諸國匠丁還鄕者本司錄移送省省申官給路粮一人日米一升鹽一勺(仕丁准此)とあり

【天平十一年】大市王、天平寶字四年七月に文室眞人の姓を賜はりて臣籍に降りぬ

從五位下小治田朝臣諸人、爲豐後守。○甲申、停山陽道諸國借[illegible]、大稅、出擧如舊。○辛卯、令天下諸國造國郡圖進。○九月丙申朔、日有蝕之、○庚子、內禮司主禮六人、始令把笏。○辛丑、地震。○甲寅、伊勢國飯高郡人无位伊勢直族大江、授外從五位下。○冬十月丁卯、免京畿內芳野和泉監今年田租。○己丑、遣巡察使於七道諸國、採訪國宰政迹黎民勞逸。○甲午、大宰大貳正四位下紀朝臣男人卒。○十二月丁卯、從五位下宇治王爲中務大輔、從四位下高橋朝臣安麻呂爲大宰大貳、從五位下藤原朝臣廣嗣爲少貳。○戊寅、仕丁役畢還鄕、始給程粮。

十一年春正月甲午朔、出雲國獻赤烏、越中國獻白烏。○丙午、天皇御中宮、授正三位橘宿禰諸兄從二位、從四位上大石王正四位下、從五位下黃文王、无位大市王、並從四位下、无位茨田王從五位下、從四位下藤原朝臣豐成正四位下、正五位下縣犬養宿禰石次從四位下、從五位上賀茂朝臣助正五位上、從五位上多治比眞人占部正五位下、從五位下石川朝臣加美、紀朝臣宇美、藤原朝臣仲麻呂並從五位上、外從五位下小

○多治比眞人、原本眞を直に作り人の字なし金本曾本淀本に據て補訂す
○仲麻呂並從五位上外、原本從以下の五字缺く淀本には之を空白とす金本に據て補ふ
○小治田朝臣廣千、考證に千疑耳字と云
○祜信備、原本祜を祐に作る金本に據て改む
○倭武助、錄攝津神別に大和宿禰、蕃別に和朝臣和連等あり此の倭氏は何れか詳ならず
○麻田連、原本麻の下に呂の字あり衍なり金本に據て削る麻田連は錄右京諸蕃に百濟國朝鮮王淮之後也とあり
○鹽屋連吉麻呂、吉は古に作るべしとの說あれど此人の名續紀に見えたるは六處なるが養老六年二月戊戌を除くの外は何れも吉とあり懷風藻にも本文には古とあれど目錄には吉とありされば輙く改め難し
○大野女王、原本大の下に和の字あり衍なり曾本淀本金イ本に據て削る
○采女朝臣若、考證云若下疑有脫文

治田朝臣廣千、大伴宿禰祜信備、佐伯宿禰常人、並從五位下、外從五位下坂上伊美伎犬養外從五位上、正六位上倭武助、麻田連陽春、鹽屋連吉麻呂、物部依羅朝臣人會、紀朝臣豐川、村國連子虫、並外從五位下、正四位下竹野女王從四位下無漏女王、並從三位、正四位下多伎女王正四位上、從四位下大野女王、廣湍女王、日置女王、粟田女王、河內女王、丹生女王、並從四位上、從五位下春日女王、无位小長谷女王、坂合部女王、高橋女王、茨田女王、陽胡女王、從五位下藤原朝臣吉日、正五位下大宅朝臣諸姉、並從四位下、從五位下宇遲女王、无位中臣殖栗連豐日、並從五位上、无位紀朝臣意美奈、采女朝臣首名、采女朝臣若、岡連若子、並從五位下、〇二月戊子、詔曰、皇后寢膳不安、彌益疲勞、朕見此苦情甚惻隱、宜大赦天下救濟病患自天平十一年二月廿六日戌時以前大辟罪以下及八虐、常赦所不免者、咸赦除之、其癈疾之徒、不能自存者、量加賑恤、仍令長官親自慰問量給湯藥、僧尼亦同、〇壬辰、勅、二月廿六日赦書云、敢以赦前事告言者、以其罪罪之、宜暫可停、若百姓心懷私愁、欲披陳者、

恣聽之、巡察使宜隨事問知、具狀錄奏、勿依赦書罪告人、○三月甲午、天皇行幸甕原離宮、○丁酉、車駕還宮、○癸丑、詔曰、朕恭膺寶命、君臨區宇、未明求衣、日昃忘膳、卽得從四位上治部卿茅野王等奏、偁、得大宰少貳從五位下多治比眞人伯等解、偁、對馬嶋目正八位上養德馬飼連乙麻呂所獲神馬、青身白髦尾、謹撿符瑞圖曰、青馬白髦尾者神馬也、聖人爲政、資服有制、則神馬出、又曰、王者事百姓、德至丘陵、則澤出神馬、實合大瑞者、斯乃宗廟所祐、社稷所貺、朕以不德、何堪獨受、天下共悅、理允恒典、宜賑給孝子順孫高年鰥寡惸獨、及不能自存者、其進馬人賜爵五級幷物、免出馬郡今年庸調、自餘郡之庸、國司史生以上、亦各賜物、宜體此懷、津遵朕志焉、○乙卯、天皇及太上天皇行幸甕原離宮、授外從五位上坂上伊美吉犬養從五位下、○戊午、車駕還宮、○庚申、石上朝臣乙麻呂坐奸久米連若賣、配流土左國、若賣配下總國焉、

○岡連若[illegible]、金本若を官に作る岡連は録右京諸蕃に市往公同祖、岡[illegible]男安貴之後也とあり

二月 敢以教喩事、原本敢の字なく教の下に以の字あり今曾本淀本金イ本に據て補訂す

○巡察使、十年十月紀に巡察使を七道に遣はしたること見えたり

三月 恭膺寶命、原本膺を應に作る曾本淀本金イ本に據て改む寶命は尙書金縢に無墜天之降寶命と見えて、貴き命令なる[illegible]寶は當也又受也天神の勅を受給ふなり云

○未明求衣、原本求衣を未日に作る金本曾本淀本に據て改む未だ夜の明けざる時刻より衣を求て起出るなり云

○日昃忘膳、原本日昃を盛興に作る金本曾本淀本に據て改む昃は昃の俗字、昃は日西に傾也とあり日のたくるまで食事を忘るゝなり云

○養德、原本德を待に作る金本曾本淀本に據て改む閣本には德を得に作る養德は倭なり、九年十二月大倭國を改めて大養德國とせられしより此氏の文字をも改めしなるべし ○白髦、原本髦を髮に作る金本曾本淀本に據て改む下同じ ○聖人爲政云々、三年十二月紀及神護景雲二年九月紀符瑞圖を引くも並に此二句なし資服有制とは衣服法の如くなるなり云 ○所貺、原本貺を護に作る曾本淀本金イ本に據て改む ○理允恒典、原本允を久に作る曾本淀本金イ本に據

て改む　○聿遵朕志、原本遵を道に作る金本淀本に據て改む　○坐姧、萬葉六に石上乙麻呂土佐國に配せらるゝ時の歌三首並に短歌を載せ懷風藻にも嘗有朝譴飄寓南荒臨淵吟澤寫心文藻遂有御悲藻兩卷今傳于世云々と見え詩四首を載せたるが何れも土佐にての吟なり

(四月)廿九日、原本九を五に作る諸本に據て改む　○謙沖、原本沖を仲に作る曾本淀本金イ本に據て改む字書に沖は沖に同じく沖は和也とあり謙沖は謙遜と云に同じ　○厚存慇懃、原本存を在に作る曾本淀本金イ本に據て改む　○大原眞人、紹運錄に長親王の孫川内王の子高安王大原眞人を賜ふと見ゆ　○多治比眞人廣成薨、懷風藻に從三位中納言丹墀眞人廣成の詩三首を載す　○駄馬、紀略駄馬に作る玉篇に馱は馬の負ふ貟とあり駄又は䭾に作るは共に譌字なり　○大二百斤、穗井田忠友氏の說に東大寺藏天平神護三年所造銀壺及他銅器所彫斤兩以今秤校之大一斤當今百八十錢小一斤六十錢以此推之大二百斤今卅六貫匁百五十斤則廿七貫匁也と云り主稅式上に凡一駄荷率銅

○夏四月壬戌朔甲子、詔曰、省從四位上高安王等去年十月廿九日表、具知意趣、王等謙沖之情、深懷辭族、忠誠之至、厚存慇懃、顧思所執、志不可奪、今依所請賜大原眞人之姓、子々相承、歷萬代而無絕、孫々永繼、冠千秋以不窮、○戊辰、中納言從三位多治比眞人廣成薨、左大臣正二位嶋之第五子也、○乙亥、令天下諸國改駄馬一疋所負之重大二百斤、以百五十斤爲限、○戊寅、正六位上百濟王敬福授從五位下、正六位上田邊史難波外從五位下、○壬午、陸奧國按察使兼守鎭守府將軍大養德守從四位上勳四等大野朝臣東人、民部卿兼春宮大夫從四位下巨勢朝臣奈氐麻呂、攝津大夫從四位下大伴宿禰牛養、式部大輔從四位下縣犬養宿禰石次爲參議、○五月壬辰朔甲寅、詔曰、諸國郡司、徒多員數、無益任用、侵損百姓、爲蠹實深、仍省舊員改定、大郡大領少領主政各一人、主帳二人、上郡大領少領主政主帳各一人、中郡大領少領主帳各一人、下郡亦同、

小郡領主帳各一人、○辛酉、詔曰、天下諸國、今年出擧正稅之利、皆免之、諸家封戶之租、依令二分、一分入官、一分給主者、自今以後、全賜其主、運送傭食、割取其租、

一百斤錢貫延曆七十日とあるは令制より更に減ぜられしなるべし ○十年、此日の任官を補任には十九日の事とせり

五月、少領、原本少を小に作る閣本・淀本に據て改む ○上郡大領少領、原本上を小に作り少領の二字なし金本・曾本・淀本に據て補訂す ○中郡云々各一人、原本一を二に作る金本に據て改む ○一分入官、一分の二字は金本・淀本及類史に據て改む賦役令及び令集解卷十三に格文を引けるも亦同じ ○全賜其主、和銅七年正月紀に長親王以下に益封の事見え封租全給其食封田租全給封主自此始矣と記されしは特例にて一般には及ぼされざりしが此に至りて一般の制とせられしなり ○運送傭食云々、民部式に凡神寺諸家封租交易輕貨幷春米送之其春運功賃亦用租內とあり然るに賦役令集解に天平二十年格云運送封戶租米脚夫幷傭者准運官物之人以正稅稻給粮自今以後永爲恒制と見ゆるは此文及式と合はず

○六月戊寅、令諸國驛起稻減悉混合正稅、○癸未、停兵士、國府兵庫、點白丁作番令守之、○甲申、賜出雲守從五位下石川朝臣年足、絁卅疋、布六十端、正稅三萬束、賞善政也、○秋七月乙未、授外從五位下背奈公福信從五位下、正六位上新城連吉足外從五位下、○癸卯、渤海使副使雲麾將軍己珎蒙等來朝、○甲辰、詔曰、方今孟秋、苗子盛秀、欲令風雨調和年穀成熟、宜令天下諸寺轉讀五穀成熟經、幷悔過七日七夜焉、

六月、綠停兵士云々、養老　年十月減定京畿及七道諸國兵士□數、但志摩若狹淡路□士皆停云々と見え諸國兵數を減じ或は全く停止せしものありしに依て此制を設けられしなるべし ○賞善政、賞字二年九月紀年足傳に天平七年任出雲守、視事數年百姓安之とあり

七月、背奈公、原本背を宵に作る十年三月紀に據て改む下同じ ○外從五位下、下の字は金本・曾本・淀本に據て補ふ ○渤海使、使は闕或は闕の誤なるべし ○雲麾將軍、唐書百官志に武散官四十有五從五位曰雲麾將軍とあり ○欲令風雨調和、令の字は金本及類史に據て補ふ ○宜令天下諸寺、令の字は曾本淀本金イ本及類史に據て補ふ ○五穀成熟經、東大寺要錄熟を就に作る

（八月）蔭子孫幷位子、和銅元年四月紀（六六頁）に注す
（十月）小野朝臣牛養卒、靈龜二年正月紀に始見、神龜元年五月鎭狄將軍、天平元年九月皇后宮大夫、同二年九月催造司監となる
○平群朝臣、原本群を郡に作る諸本に據て改む
（十一月）廣成等、閣本及紀略に等の字なし
○多治比眞人廣成、七年三月歸朝せり
○蘇州、唐書地理志に江南道蘇州吳郡とあり今江蘇省吳縣の地なり
○廣成之船、平群廣成の乘れる船なり
○一百一十五人、曾本淀本に五の字なし
○崑崙國、舊唐書南蠻傳に自林邑已南皆卷髮黑身通號爲崑崙、又文苑英華に玄宗の勅書を載せて朝臣廣城等漂至林邑國とあり
○或迸散、散の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ迸は玉篇に散也とあり
○著瘴、瘴は字書に癘也熱病也中山川癘氣成疾也とあり　○升糧、僅少なる糧食の意か曾本淀本及略記糧を粮に作る　○安置惡處、狩谷校本に惡恐要と云　○欽州、唐書

○八月辛酉朔丙子十六、太政官處分、式部省蔭子孫幷位子等、不限年之高下、皆下大學、一向學問焉、○九月庚寅朔、日有蝕之、○冬十月庚申朔甲子五、從四位下小野朝臣牛養卒、○丙子十七、少僧都行達爲大僧都、○丙戌、入唐使判官外從五位下平群朝臣廣成、幷渤海客等入京、○十一月己丑朔辛卯三、平群朝臣廣成等拜朝、初廣成、天平五年隨大使多治比眞人廣成入唐、六年十月事畢却歸、四船同發從蘇州入海、惡風忽起、彼此相失、廣成之船一百一十五人漂著崑崙國、有賊兵來圍、遂被拘執、船人或被殺、或迸散、自餘九十余人著瘴死亡、廣成等四人、僅免死、得見崑崙王、仍給升糧、安置惡處、至七年、有唐國欽州熟崑崙到彼、便被偸載、出來既歸唐國、逢本朝學生阿倍仲滿、便奏、將入朝、請取渤海路歸朝、天子許之、給船粮發遣、十年三月、從登州入海、五月到渤海界、適遇其王大欽茂差使欲聘我朝、卽時同發、及渡沸海、渤海一船、遇浪傾覆、大使胥要德等四十人沒死、廣成等率遺衆到著出羽國、

地理志に嶺南道欽州寧越郡とあり　〇熟崑崙、崑崙に生熟の兩種あり熟崑崙は唐の風化にやゝ服せしものならむ　〇到着使[illegible]、原本使を使に作る從本金イ本に據て改む　〇仲滿、金本曾本從本仲を中に作る類聚古今集抄に唐史を引て仲滿靈龜二年の遣唐留學生年十六入唐學問讀書日本傳云仲滿慕華不肯去易姓名曰朝衡と見えたり　〇便奏將入朝云々、此句下闕に至る十字原本得朝の二字に作る金本從本に據て補訂す　〇登州、文武天皇庚子年三月紀〔一二頁〕に出づ　〇及沸渤海、沸の字は曾本從本金イ本に據て補ふ沸海は海波の沸騰するを云るか或は海の名なるべし四字の句なれば此字なくては通ぜず　〇出羽國、原本羽を州に作る曾本從本に據て改む

十二月　〇欽武、上文武を茂に作る大日本史注に據唐書作茂當從之とあり　〇佇望、原本佇を仰に作る金本閣本曾本等に據て改む仰にても通ずれど次句に傾仰とあれば佇とある方勝れり　〇叡、原本叡を殿に作る金本に據て改む　〇奕葉、奕葉は世々相繼て絶えざるを云曾本金イ本に[illegible]に作る[illegible]は奕の俗字　〇若忽、神龜五年正月紀渤海王の書に[illegible]　〇彼國、渤海王皇朝を指して云り　〇朝臣廣業、考證に中島氏曰時上使多治比廣成[illegible]人歸[illegible]成判官平群廣成一人聞名今據此渤海書判判官名廣業亦未可知也[illegible]以成與業形相似而誤耳　〇優賞、金本賞を當に作る　〇貪、[illegible]　〇乃年、閣本曾本從本乃を及に作る　〇[illegible]、[illegible]　〇若忽州都督、[illegible]　〇大虫皮、[illegible]　〇[illegible]、[illegible]

〇十二月戊辰、渤海使己珍蒙等拜朝、上其王啓幷方物、其詞曰、欽武啓、山河杳絶、國土夐遙、佇望風猷、唯増傾仰、伏惟天皇聖叡、至德遐暢、奕葉重光、澤流萬姓、欽武忝繼祖業、濫惣如始、義洽情深、毎修隣好、今彼國使朝臣廣業等、風潮失便、漂落投此、毎加優賞、欲待來春放廻、使等貪前苦請、乃年歸去、訴詞至重、隣義非輕、因備行資、卽爲發遣、仍差若忽州都督胥要德等充使、領廣業等、令送彼國、幷附大虫皮羆皮各七張、豹皮六張、人參三十斤、蜜三斛、進上、至彼請撿領、〇己卯、外從五位下平群朝臣廣成授正五位上、自餘水手已上、亦各有級、正六位上巋仁傑授外從五位下、

作ムト按古人从レ斗字或从レ升（節略）と云　○各有級、等級あるを云　○禰仁傑、原本に禰仁の二字なし曾本金イ本に據て補ふ淀本禰を稱に作る

【天平十二年】新羅學語、新羅國人にして我國の言語を學べるものを云寶字四年九月紀にも新羅國級飡貞發朝貢云々無レ知二聖朝風俗言語一仍進二學語二人一云々と見ゆ　○奉翳美人、翳は抄服玩具に翳本朝式齊王行具翳二枚（翳音於計反波）とあり翳を執る女官を云　○更著袍袴、著の字は金本曾本淀本及類史に據て補ふ　○絁卅疋絹卅疋、原本卅を十に匹を疋に作る金本閣本淀本に據て改む　○守部王、原本部を郡に作る金本曾本淀本に據て改む　○仲麻呂、此下並の字あるべきかと思へど金本淀本には下文の並字もなし　○從五位下石川朝臣、從五位下の四字は金本曾本淀本に據て補ふ　○土作、原本土を士に作る淀本金イ本に據て改む下同じ神護景雲二年二月紀に土佐に作る　○南苑、苑の字は淀本及紀略に據る菀苑通用すれ

（庚辰）十二年春正月戊子朔、天皇御大極殿受朝賀、渤海郡使新羅學語等同亦在列、但奉翳美人更著袍袴、飛騨國獻白狐白雉、○甲午、渤海郡副使雲麾將軍己珍蒙等、授位各有差、卽賜宴於朝堂、賜渤海郡王美濃絁卅疋、絹卅疋、絲一百五十絇、調綿三百屯、己珍蒙美濃絁廿疋、絹十疋、絲五十絇、調綿二百屯、自餘各有差、○庚子、天皇御中宮、授從四位下鹽燒王從四位上、无位奈良王、守部王從四位下、正五位下多治比眞人廣足正五位上、從五位上紀朝臣麻路、石川朝臣加美、藤原朝臣仲麻呂、正五位下、從五位下石川朝臣年足、佐伯宿禰淨麻呂、並從五位上、正六位上藤原朝臣巨勢麻呂、藤原朝臣八束、安倍朝臣嶋麻呂、多治比眞人土作、並從五位下、正六位上大伴宿禰三中、宗形朝臣赤麻呂、紀朝臣可比佐、大伴宿禰犬養、車持朝臣國人、外從五位下、又以外從五位下大伴宿禰犬養爲遣渤海大使、○癸卯、天皇御南苑宴侍臣、饗百官及渤海客於朝堂、五位已上賜摺衣、○甲辰、天皇御大極殿南門觀大射、五位已上射了、

ご說文に苑囿などの時には必ず苑字を用ふと云
○揩衣、諸本及紀略揩衣に作る揩は字書に摩拭なりとありスルと訓す摺に其意なければ古來スリコロモに摺衣揩衣並に用ひたれば姑く舊に據る
○忠武將軍、唐書百官志に武散階四十有五、正四品下曰忠武將軍とあり
○幷賻、原本賻を賜に作る曾本從本金イ本に據て改む
〔二月〕右大臣、橘諸兄なり
〔五月〕相樂別業、山城志に一名玉井山莊在井手村云々本相樂郡今入綴喜郡とあり
〔六月〕履薄、毛詩小雅小旻篇に戰々兢々如臨深淵如履薄氷とあるに出づ懼れ愼むに云ふ
○馭朽、尙書五子之歌に予臨兆民懍乎若朽索之馭六馬傳に腐索馭六馬言危懼甚とあり

乃命渤海使已珍蒙等射焉、○丙辰、遣使就客館、贈渤海大使忠武將軍胥要德從二位、首領无位已閼棄蒙從五位下、幷賻調布一百十五端、庸布六十段、○丁巳、天皇御中宮閤門、已珍蒙等奏本國樂、賜帛綿各有差、○二月己未、已珍蒙等還國、○甲子、行幸難波宮、以知太政官事正三位鈴鹿王、正四位下兵部卿藤原朝臣豐成、爲留守、○庚午、給攝津國百姓稻籾各有差、○丙子、百濟王等奏風俗樂、授從五位下百濟王慈敬從五位上、正六位上百濟王全福從五位下、是日車駕還宮、○辛巳、賜陪從右大臣已下五位已上祿、各有差、○三月辛丑、以外從五位下紀朝臣必登爲遣新羅大使、○夏四月戊午、遣新羅使等拜辭、○丙子、遣渤海使等辭見、○五月乙未、天皇幸右大臣相樂別業、宴飲酣暢、授大臣男无位奈良麻呂從五位下、○丁酉、車駕還宮、○六月庚午、勅曰、朕君臨八荒、奄有萬姓、履薄馭朽、情深覆育、求衣忘寢、思切納隍、恒念、何答上玄、人民有休平之樂、能稱明命、國家致寧泰之榮、者、信是被於寬仁、推網之徒、保身命、而得壽、布於鴻恩、窮乏之類、脫乞徵、而有息、宜大赦天下、自天平十二年

○求衣忘寢、十一年三月の詔に出づ　○思切納隍、原本思の字なく隍を理に作る金本曾本淀本に據て改補ふ、納隍は文選東京賦に人或不レ得二其所一若三已納二之於隍一とあるに據れり隍は城池なり池隍に陷れて苦しましめむかと恐るゝを云　○上玄、上天と云に同じ　○能稱明命、明命は尙書太甲篇に出づ天の命令にかなふを云　○挂網、原本牲納に作る牲は曾本淀本金イ本に據て改む納は網の誤なり狩谷校本に據て改む後漢書袁紹傳に擧レ手挂二網羅一とあり法網にかゝるを云　○窮乏之類、之の字は金本曾本淀本に據て補ふ　○乞徵、原本徵を微に作る狩谷校本に微恐徵とあるに據て改む乞徵とは租税を責徵らるゝを云　○主帥、諸國の軍團には大毅少毅校尉旅帥隊正あり主帥とは隊正以上校尉以下を云　○使部等、狩谷校本云仲部等下恐脫文　○不在赦限、在の字は淀本金イ本に據て補ふ　○穗積朝臣老、養老六年正月佐渡國に流さる　○多治比眞人祖人、配流の地年月並に闕けり　○名負、多治比眞人名負なり寶龜二年正月癸未、閏三月及五年三月甲辰紀等に見ゆ　○久米連、十一年三月下總國に配せらる　○五人、疑くは四人の誤か　○勝部、原本勝を謄に作る金本曾本に據て改む出雲風土記に大原郡大領勝部君虫麻呂あり同族なり　○日奉弟日女、原本日を曰に作るは誤なれば改む錄左京神別に日奉連及佐伯日奉連あり　○石上乙麻呂、十一年三月土佐國に配せらる　○牟禮、原本牟の下に々字あり淀本閣イ本に據て削る神名式に伊勢國多氣郡牟禮神社あり拾芥抄に牟禮公見ゆ徵とすべし　○中臣宅守、萬葉十五に流罪に依り越前國に配せらるゝ夫婦贈答歌六十三首を載す　○飽海古良比、史に此氏見えず出羽國に飽海郡あり由あるか　○寫法華經、寫の字は金本曾本淀本及紀略に據て補ふ

（八月）秋八月、秋の字は例に據て補ふ　○廣嗣上表、表文は松浦社本緣起に載せたり長け

六月十五日戊時以前、大辟以下、咸赦除之、雖天平十一年以前、公私所負之稲、悉皆原免、其監臨主守自盜、盜所監臨、故殺人、謀殺人殺訖、私鑄錢、作具既備、强盜竊盜、姧他妻、及中衛舍人、左右兵衛、左右衛士、衛門府衛士、門部、主帥、使部等、不在赦限、其流人穗積朝臣老、多治比眞人祖人、名負、東人、久米連若女等五人、召令入京、大原采女勝部鳥女還本鄕、小野王、日奉弟日女、石上乙麻呂、牟禮大野、中臣宅守、飽海古良比、不在赦限、○甲戌、令天下諸國毎國寫法華經十部、幷建七重塔焉、

○秋八月乙卯朔甲戌、和泉監幷河內國焉、○癸未、大宰少貳從五位下藤原朝臣廣嗣上表、指時政之得失、陳天地之災異、因以除僧正玄昉法師、右

れば引かず大日本史に是時吉備眞備所ニ嚴ニ數ニ好捜ニ人情ニ見ニ廣嗣ニ謂ニ人曰此人必爲ニ世患ニ玄昉法師爲ニ僧正ニ居ニ内道場ニ寵辛日隆領張ニ沙門業ニ時人惡ニ之ニ廣嗣稱ニ說法ニ近ニ侍藤原皇后ニ覩有ニ醜聲ニ聞ニ于外ニ廣嗣請ニ除之ニ帝不ニ納詳見ニ本縁起及今昔物語源平盛衰記等ニとあり

○從五位上下道朝臣、原本上を下に作る金イ本皆イ本に據て改む

○從五位上佐伯宿禰、紀略上を下に作る

○甘南備眞人、勝寶三年正月紀に又成王に甘南備眞人姓を賜ひ同年十月紀に伊香王男高城王无位池上王に甘南備眞人の姓を賜はることを見ゆ錄左京皇別に甘南備眞人出自諡敏達皇子難波王也、續日本紀合さあり

○大神宮、原本大を太に作る金本閣本流本に據て改む下同じ

○觀世音菩薩、世の字は金本流本及紀略に據て補ふ東大寺要錄亦同じ

○觀世音經、紀略に世の字なし

○長門國、國の字は菅本

衛士督從五位上下道朝臣眞備、爲言、○九月丁亥、廣嗣遂起兵反、勅以從四位上大野朝臣東人爲大將軍、從五位上紀朝臣飯麻呂爲副將軍、軍監軍曹各四人、徴發東海、東山、山陰、山陽、南海五道軍一萬七千人、委東人等、持節討之、○戊子、召隼人二十四人、於御在所、右大臣橘宿禰諸兄宣勅、授位各有差、幷賜當色服發遣、○己丑、勅從五位上佐伯宿禰常人、從五位下阿倍朝臣虫麻呂等、亦發遣任用軍事、從五位下神前王、賜姓甘南備眞人、補攝津亮、○乙未、遣治部卿從四位上三原王等、奉幣帛于伊勢大神宮、○己亥、勅四畿內七道諸國曰、比來緣筑紫境有不軌之臣、命軍討伐、願依聖祐欲安百姓、故今國別造觀世音菩薩像壹軀高七尺、幷寫觀世音經一十卷、○乙巳、勅大將軍大野朝臣東人等曰、得奏狀、知遣新羅使船來泊長門國、其船上物者、便藏當國、使中有人可採用者、將軍宜任用之、○戊申、大將軍東人等言、殺獲賊徒豐前國京都郡鎭長大宰史生從八位上小長谷常人、企救郡板櫃鎭小長凡河內田道、但大長三田鹽籠者、著箭二隻、逃竄野裏、生虜登美、板櫃、京都三處營兵一

千七百六十七人、器仗十七事、仍差長門國豐浦郡少領外正八位上額田部廣麻呂、將精兵四十人、以今月廿一日發渡、又差勅使從五位下佐伯宿禰常人、從五位下安倍朝臣虫麻呂等、將隼人廿四人并軍士四千人、以今月廿二日發渡、令鎭板櫃營、東人等將後到兵、尋應發渡、又間諜申云、廣嗣於遠珂郡家、造軍營儲兵弩、而擧烽火、徵發國內兵矣、○己酉、大將軍東人等言、豐前國京都郡大領外從七位上楉田勢麻呂、將兵五百騎、仲津郡擬少領无位膳東人兵八十人、下毛郡擬少領无位勇山伎美麻呂、築城郡擬領外大初位上佐伯豐石兵七十人、來歸官軍、又豐前國百姓豐國秋山等殺逆賊三田鹽籠、又上毛郡擬大領紀宇麻呂等三人、共謀斬賊徒首四級、○癸丑、勅筑紫府管內諸國官人百姓等曰、逆人廣嗣小來凶惡、長益詐奸、其父故(宇合)式部卿常欲除棄、朕不能許、掩藏至今、比在京中讒亂親族、故令遷遠、冀其改心、今聞、擅爲狂逆、擾亂人民、不孝不忠、違天背地、神明所棄、滅在朝夕、前已遣勅符、報知彼國、又聞、或有逆人、捉害送人、不令遍見、故更遣勅符數千條、散擲諸國、百姓見者、早宜承

淀本金イ本及紀略に據て補ふ
○可採用者、可の字は金本曾本淀本に據て補ふ
○京都郡、抄國郡部に豐前國郡名京都美夜古とあり
○鎭長、閣本鎭を領に作る考證に鎭蓋軍團之類長其官長下文大長小長卽此按唐外官有上鎭中鎭下鎭見六典云云
○企救郡、抄に豐前國郡名企救岐久とあり今も同じ
○板櫃、今小倉市の西に板櫃町あり是なり
○大長、原本大を犬に作る金本曾本淀本に據て改む
○鹽籠者、原本者を等に作る諸本に據て改む
○登美、企救郡足立村大字富野是なり
○板櫃營、原本板を坂に作る金本曾本に據て改む
○間諜、原本諜を講に作る淀本に據て改む
○遠珂郡、原本珂を河に作る曾本淀本金イ本及紀略に據て改む筑前國遠賀郡是なり
○仲津郡、倭名抄亦同じ
○下毛郡、原本郡を野に

作る諸本に據て改む抄國郡部に下毛二字あり郡さあり今も同じ　○勇山、錄河内神別に勇山連あり下毛郡に諫山郷あれば氏名は是によれるなるべし　○築城郡、抄に築城（豆伊岐）郡さあり　○薩領、狩谷校本に領の上にイ本に據り少の字を補へり　○豐國秋山、國の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ豐後風土記に豐國直見ゆ　○紀宇麻呂、宇は金本平に作り曾本淀本平に作る　○小來凶惡、原本小來を等本に作る淀本金イ本に據て改む小來は少年の頃よりの意　○長益詐詔、矢野は道設云偽詔誤さ、之に據て句讀を改む　○故式部卿、藤原宇合なり　○不忠、此二字は曾本淀本金イ本に據て補ふ　○數千餘、考證に内藤氏曰干疑十字之譌さあれざ諸國に散擲せしむさあれば十の譌さも云べからず

知、如有人雖本與廣嗣同心起謀、今能改心悔過斬殺廣嗣、而息百姓者、白丁賜五位已上、官人隨等加給、若身被殺者、賜其子孫、忠臣義士、宜速施行、大軍續須發入、宜知此狀、

○**十月**、東人、原本東を束に作る諸本及紀略に據て改む　○東人等言、等の字は曾本淀本金イ本及紀略に據て補ふ　○板櫃河、今の論生川なりさ云校補宮崎把板倉橋河に作る　○列於河西、原本於の字なく到を到に作る金本曾本及紀略に據て補訂す　○陣于河東、諸本陣を陳に作る紀略に據て改む　○佐伯大夫、大夫は五位の人を云此時常人は從五

○冬十月戊午、〔甲寅朔五〕遣渤海郡使外從五位下大伴宿禰犬養等來歸、○壬戌、〔九〕詔大將軍東人令祈請八幡神焉、大將軍東人等言、逆賊藤原廣嗣率衆一万許騎、到板櫃河、廣嗣親自率隼人軍爲前鋒、卽編木爲船、將渡河、于時佐伯宿禰常人、安倍朝臣虫麻呂、發弩射之、廣嗣衆却列於河西、常人等率軍士六千餘人陣于河東、卽令隼人等呼云、隨逆人廣嗣拒捍官軍者、非直滅其身、罪及妻子親族者、則廣嗣所率隼人幷兵等、不敢發箭、于時常人等呼廣嗣十度、而猶不答、良久廣嗣乘馬出來云、承勅使到來、其勅使者爲誰、常人等答云、勅使衛門督佐伯大夫、式部少輔安倍大夫、

位上にて安倍虫麻呂は從五位下なり故に二人共に大夫と云
○兩段再拜、再拜は二度拜するを云兩段再拜は再拜を兩度するなり
○押來、原本押を捍に作る曾本淀本金イ本及紀略に據て補ふ
○獲虜器械如別、如の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ曾本淀本虜を處に作る
○贈唹君、曾本淀本唹を於に作る和銅三年正月庚辰に日向隼人曾君とあり
○合五千許人、許人は原本人許に作る金本に據て改む
○從鞍手道往、以下五千許人までの二十字原本になし金本曾本淀本に據て補ふたゞ綱手の下率の字は狩谷校本に據て補ふ鞍手路は筑前國鞍手郡にて左翼なり
○從豐後國往、筑後肥前等の軍を合せ豐後國より筑前國朝倉郡を經て後詰として進軍せしなり
○從田河道往、田河道は豐前國田河郡にて豐前の軍を率ゐて右翼より進軍せしなり

今在此間者、廣嗣云、而今知勅使、即下馬、兩段再拜、申云、廣嗣不敢捍朝命、但請朝廷亂人二人耳、廣嗣敢捍朝廷者、天神地祇罸殺、常人等云、爲賜勅符、喚大宰典已上、何故發兵押來、廣嗣不能辨答、乘馬却還、時隼人三人直從河中泳來降服、則朝廷所遣隼人等、扶救遂得著岸、仍降服、隼人二十人、廣嗣之衆十許騎來歸官軍、獲虜器械如別、又降服隼人贈唹君多理志佐申云、逆賊廣嗣謀云、從三道往、即廣嗣自率大隅、薩摩、筑前、豐後等國軍合五千許人、從鞍手道往、綱手率筑後肥前等國軍合五千許人、從豐後國往、多胡古麻呂、不知所率軍數、從田河道往、但廣嗣之衆到來鎭所、綱手多胡古麻呂未到、○戊辰、遣新羅國使外從五位下紀朝臣必登等還歸、○壬申、任造伊勢國行宮司、○丙子、任次第司、以從四位上鹽燒王爲御前長官、從四位下石川王爲御後長官、正五位下藤原朝臣仲麻呂爲前騎兵大將軍、正五位下紀朝臣麻路爲後騎兵大將軍、徵發騎兵、東西史部、秦忌寸等惣四百人、○己卯、勅大將軍大野朝臣東人等曰、朕緣有所意、今月之末、暫往關東、雖非其時、事不能已、將軍知之、不須驚恠、

○壬午、行幸伊勢國、以知太政官事兼式部卿正三位鈴鹿王、兵部卿兼中衞大將正四位下藤原朝臣豐成、爲留守、是日到山邊郡竹谿村堀越頓宿、○癸未、車駕到伊賀國名張郡、

○十一月甲申朔、到伊賀郡安保頓宮宿、大雨、途泥人馬疲煩、○乙酉、到伊勢國壹志郡河口頓宮、謂之關宮也、○丙戌、遣少納言從五位下大井王、幷中臣忌部等、奉幣帛於大神宮、車駕停御關宮十箇日、是日、大將軍東人等言、進士无位安倍朝臣黑麿、以今月廿三日丙子、捕獲逆賊廣嗣、於肥前國松浦郡値嘉嶋長野村、詔報曰、今覽十月廿九日奏、知捕得逆賊廣嗣、其罪顯露、不在可疑、宜依法處決、然後奏聞、○丁亥、遊獵于和遲野、免當國今年租、○戊子、大將軍東人等言、以今月一日、於肥前國松浦郡、斬廣嗣綱手已訖、菅成以下、從人已上、及僧二人者、禁正身、置大宰

○多胡古麻呂未到、未の字は金本曾本淀本に據て補ふ
○遣伊勢國行宮司、太政官式に凡行幸前數十日定遣行宮使一使人官品臨時隨事處分とあり
○次第司、太政官式に任前後次第司御前長官一人三位次官一人五位云々とあり　○前騎兵、金本曾本前を後に作り下文の後騎兵を前騎兵とす　○關東、伊勢國鈴鹿關以東なるを云　○騎催、原本催を傭に作る金本曾本淀本に據て改む　○行幸伊勢國、萬葉六に此時の御製及大伴家持等の歌を載す　○正三位鈴鹿王、原本三を二に作る金本曾本及紀略に據て改む　○竹谿村、山邊郡都介郷なり　○堀越頓宿、大和志に址在山邊郡向淵村とあれど今詳ならず宿は原本宮に作る諸本及紀略に據て改む頓宿は頓宮と自ら別なり頓宮は造行宮司を任じて造營せしめられしをいひ、頓宿は他の屋舍を以て一時御宿に充てらるゝを云、下文に徵して其區別あるを知るべし

（十一月）○安保、伊賀國伊賀郡安保郷あり今同國那賀郡阿保町大字阿保に頓宮趾と稱する所ありと云
○河口、伊勢國壹志郡川口村にして昔は此處に關塞ありて伊勢大和の通路なれば關宮といひしなるべしと伊勢名勝志に河口頓宮趾は今土佐と字する所とも又醫王寺境なりとも云と云ひ此河口宮につきては萬葉集氏古今六帖等に和歌多く見えたり
○進士、上に出づ
○安倍朝臣、金本曾本及紀略安を阿に作る

○逆賊廣嗣、逆の字は金本曾本淀本及紀略に據て補ふ今昔物語十一に廣繼龍馬に乘て海に浮て高麗に行なむと爲るに、龍馬前々の如く翔る事能はず其時に廣繼早う我運盡にけりと知て馬と共に海に入て死ぬ其時に東人責寄て見るに廣繼海に入にければ家に不見而る間沖の方より風吹て廣繼が死たる身を濱際に吹寄せつ然れば東人其頸を切て王城に持上て公に奉りつと

○肥前國松浦郡、肥前國の三字は金本曾本淀本及紀略に據て補ふ

○値嘉嶋、古事記知訶嶋に作り敏達紀天武紀並に血鹿嶋に作る今の五嶋列嶋なり

○長野村、今詳ならず

○詔報曰、曰の字は金本曾本淀本に據て補ふ

○和遲野、伊勢名勝志に川口村より井生村に亘る地なりと云

○菅成以下、姓を闕けり

○禁正身、原本正を止に作る金本淀本に據て改む

○廣嗣之從、淀本從を徒に作る

○知駕嶋、上の値嘉嶋な

府、其歷名如別、又以今月三日、差軍曹海犬養五百依發遣、令迎逆人廣嗣之從三田兄人等二十餘人、申云、廣嗣之船從知駕嶋發、得東風往四箇日、行見嶋、船上人云、是耽羅嶋也、于時東風猶扇、船留海中、不肯進行、漂蕩已經一日一夜、而西風卒起、更吹還船、於是廣嗣自捧驛鈴一口云、我是大忠臣也、神靈弃我哉、乞賴神力、風波暫靜、以鈴投海、然猶風波彌甚、遂著等保知駕嶋色都嶋矣、廣嗣式部卿馬養之第一子也、○乙未、從河口發、到壹志郡宿、○丁酉、進至鈴鹿郡赤坂頓宮、○甲辰、詔陪從文武官、幷騎兵及子弟等、賜爵人一級、但騎兵父者、雖不在陪從、賜爵二級、授從二位橘宿禰諸兄正二位、從四位上智努王、鹽燒王、並正四位下、從四位下石川王、長田王、守部王、道祖王、安宿王、黃文王、並從四位上、无位山背王從四位下、從五位下矢釣王、大井王、茨田王、並從五位上、從四位上大原眞人高安正四位下、正五位下紀朝臣麻呂、藤原朝臣仲麻呂、並正五位上、從五位上下道朝臣眞備、佐伯宿禰淸麻呂、佐伯宿禰常人、並正五位下、從五位下多治比眞人家主、阿倍朝臣吾人、多治比眞人牛養、

大伴宿禰祜信備、百濟王全福、阿倍朝臣佐美麻呂、阿倍朝臣虫麻呂、藤原朝臣八束、橘宿禰奈良麻呂、並從五位上、正六位上多治比眞人木人、藤原朝臣清河、外從五位下民忌寸大楫、並從五位下、外從五位下菅生朝臣古麻呂、紀朝臣鹿人、宗形朝臣赤麻呂、引田朝臣虫麻呂、物部依羅朝臣人會、高麥太、大藏忌寸廣足、倭武助、村國連子虫、並外從五位上、正六位上當麻眞人廣名、紀朝臣廣名、笠朝臣蓑麻呂、小野朝臣綱手、枚田忌寸安麻呂、秦前大魚、文忌寸黑麻呂、日根造大田、守部連牛養、酒波人麻呂、外少初位上壹師君族古麻呂、並外從五位下、○乙巳、賜五位已上絁各有差、○丙午、從赤坂發、到朝明郡、○戊申、至桑名郡石占頓宮、○己酉、到美濃國當伎郡、○庚戌、賜伊勢國高年百姓、百歲已下七十歲已上者大稅各有差、

り金本曾本淀本鋸を賀に作る
○耽羅嶋、齊明紀（紀上一四頁）に始めて見ゆ今の朝鮮全羅南道濟州嶋なり
○等保知賀嶋、考證に等保賀當作遠一字後紀延暦廿四年七月條及陰陽式儺祭文作遠値嘉嶋、本縁起作小値嘉嶋、遠小相訓通と云は非なり、値嘉には大近、小近、遠値嘉の別あり大近は今の中通嶋、遠値嘉は福江嶋にして小近は後の宇久嶋なり
○伊吉嶋、詳ならず、考證に案孝徳紀神島旁訓シトチシマ狩谷同谷川氏引此及三代實録肥前國神島神爾之と云ひ或は延暦廿三年紀に入唐使の歸著したる松浦郡鹿島と語近ければ是かとも云
○馬養、閣本宇合なり
○鈴鹿王、鹿の字は金本曾本淀本及紀略に據て補ふ
○赤坂頓宮、五畿遺響に宮址は鈴鹿郡赤崎瑞光寺の後にありと云 ○文武官、武の字は金本曾本淀本に據て補ふ ○騎兵父者、原本父を文に作る曾本淀本金イ本に據て改む又原本には父の下に官字あり衍なり諸本に據て削る父は上句の子弟と相對す文官にては通ぜず ○少宿主、原本此二字を安倍宿禰の四字に作る閣本曾本金イ本等に據て改む ○山背王從四位下、從四位下の四字は金本曾本に據て補ふ淀本に從五位下とあるは五は四の誤なり ○大福、原本福を指に作る九年九月紀十三年四月紀に據て改む ○鹿人、曾本淀本金イ本鹿を麻に作る ○武助、此下當有麻呂二字と私記に云り ○鎧麻呂、金本曾本淀本に據る原本鎧を賛に作る或は鎧の俗字 ○枚田忌寸、原本枚を牧に作る閣本に據て改む金本曾本牧に作るは枚の誤なり枚田氏は坂上氏の同族 ○秦前、狩谷棭斎本に前恐忌寸とあり十八年九月紀に外從五位下秦忌寸大魚とあるを證とすべし 考證には東大寺文書有秦

前繼麻呂奏前秋主と云　○日根造、錄和泉諸蕃に新羅國人億斯富使主之後とあり　○守部連、守の字は金本に據て補ふ　○酒波、系詳ならず　○壹師君、古事記孝昭天皇の段に天押帶日子命者云々壹師君之祖とあり　○石占頓宿、所在詳ならず或は桑名郡桑名の別名なりと云宿は原本宮に作る金本曾本淀本及紀略に據て改む　○七十、原本七を八に作る金本曾本淀本及紀略に據て改む

(十二月)宮處寺、不破郡宮代村なるべしと云

○曳常泉、常陸風土記に三野國引津根之丘とあり國內神名帳に從五位上引常明神見ゆれば不破郡なること明かなれど其地今詳ならず

○國城、城は恐くは域の誤なるべし

○飛驒樂、原本驒を騎に作る金本曾本淀本に據て改む飛驒樂は同國の風俗樂なり

○橫川、今の醒井なり

○頓宿、原本宿を臣に作る諸本に據て改む

○犬上頓宿、原本宿を宮に作る淀本及紀略に據て改む野州頓宿亦同じ

○丙寅、此月癸丑の朔にて十四日丙寅なれば辛酉の上に叙すべきにあらず而して下に亦丙寅あり此丙寅は庚申(八日)の誤か然らざれば下の丙寅の條に合すべきなり

○十二月癸丑朔、到不破郡不破頓宮、○甲寅、幸宮處寺及曳常泉、○丙辰、解騎兵司、令還入京、皇帝巡觀國城、晚頭奏新羅樂飛驒樂、○丁巳、賜美濃國郡司及百姓有勞勤者位一級、正五位上賀茂朝臣助授從四位下、○戊午、從不破發、至坂田郡橫川頓宿、是日、右大臣橘宿禰諸兄在前而發、經略山背國相樂郡恭仁鄕、以擬遷都故也、○己未、從橫川發、到犬上頓宿、○丙寅、外從六位上調連馬養授外從五位下、○辛酉、從犬上發、到蒲生郡宿、○壬戌、從蒲生郡宿發、到野洲頓宿、○癸亥、從野洲發、到志賀郡禾津頓宿、○乙丑、幸志賀山寺禮佛、○丙寅、賜近江國郡司位一級、從禾津發、到山背國相樂郡玉井頓宿、○丁卯、皇帝在前、幸恭仁宮、始作京都矣、太上天皇皇后在後而至、

續日本紀卷第十三

○禾津頓宿、原本禾を木に作る閣本淀本及紀略に據て改む禾津は粟津なり宿は原本宮に作る紀略に據て改む諸本に此字缺く　○玉井頓宿、山城志に玉井頓宮未詳或云相樂郡石垣村卽此接ニ隣郡玉水邑ニといふ

續日本紀卷第十四

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平十三年正月盡十四年十二月

天璽國押開豐櫻彥天皇　聖武天皇

（辛巳）十三年春正月癸未朔、天皇始御恭仁宮受朝、宮垣未就、繞以帷帳、是日、宴五位已上於內裏、賜祿有差、○癸巳、遣使於伊勢大神宮及七道諸社、奉幣、以告遷新京之狀也、○丁酉、故太政大臣藤原朝臣家返上食封五千戶、二千戶依舊返賜其家、三千戶施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料、○停大射、○戊戌、御大極殿賜宴百官主典已上、賜祿有差、○甲辰、逆人廣嗣與黨且所捉獲、死罪廿六人、沒官五人、流罪四十七人、徒罪卅二人、杖罪一百七十七人、下之所司、據法處焉、徵從四位下中臣朝臣名代、外從五位下鹽屋連吉麻呂、大養德宿禰小東人等卅四人於配處、

○二月戊午、詔曰、馬牛代人、勤勞養人、因茲先有明制、不許屠殺、今聞、

○行民部大輔、金本閣本谷本薩本行の字なし

【天平十三年】恭仁宮、山城國相樂郡恭仁鄕にあり十二年十二月戊午の條に注す萬葉六に讃久邇新京歌二首并短歌を載せたり

○帷帳、抄屏障具に帷釋名云帷〔音維、加太比良〕圍也以自障圍也、また帳釋名云帳〔知亮反俗音長〕張也施張於床上とあり

○伊勢大神宮、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ

○返上食封五千戶、慶雲四年四月の詔に食封五千戶賜云々辭而不受減二三千戶賜二千戶とも見ゆ此と合はず

○沒官、賊盜律に凡謀反及大逆者皆斬、父子若家人資財田宅並沒官云々、

職員令に贓贖司正一人掌下簿斂配没、義解に謂領下取没官之物上、更分中配於諸司上、假令云々逆人父子者配中官奴司上之類也と見え官に没して奴婢とするを云

○中臣朝臣名代、配流の地名年月並に闕けり次の二人も同じ

○大養德、原本大を犬に作る淀本に據て改む

（二月）先有明制、天武紀四年四月莫レ食ニ牛馬猿雞之宍ニ云々の詔ありしを云

○田獵、字書に田は獵也與ニ畋佃一通俗作レ猟取レ禽也とあり金本獵を獦に作る獦は獵の俗字

（三月）外從五位下、金本曾本淀本下を上に作る下文に據るに下の方可なるべし

○小野朝臣東人、獄に下されし理由詳ならず

○今月十四日、月の字は金本曾本淀本及紀略に據て補ふ

○鸛、抄羽族部に鸛本草云鸛、（音舘和名於保止利）水鳥似レ鵠巣レ樹者也とあり淀本には鶴に作る

○樓閣、金本閣を闕に作

國郡未能禁止、百姓猶有屠殺、宜其有犯者、不問蔭贖、先決杖一百、然後科罪、又聞、國郡司等非緣公事、聚人田獵、妨民産業、損害實多、自今以後、宜令禁斷、更有犯者、必擬重科、○三月壬午朔、日有蝕之、○己丑、禁外從五位下小野朝臣東人下平城獄、○庚寅、東西兩市決杖各五十、配流伊豆三嶋、○辛丑、攝津職言、自今月十四日始至十八日、有鸛一百八、來集宮內殿上、或集樓閣之上、或止太政官之庭、毎日辰時始來、未時散去、仍遣使鎭謝焉、○乙巳、詔曰、朕以薄德、忝承重任、未弘政化、寤寐多慚、古之明主、皆能先業、國泰人樂、災除福至、修何政化、能臻此道、頃者年穀不豐、疫癘頻至、慙懼交集、唯勞罪己、是以廣爲蒼生、遍求景福、故前年馳驛、增飾天下神宮、去歲普令天下造釋迦牟尼佛尊像高一丈六尺者各一鋪、并寫大般若經各一部、自今春已來、至于秋稼、風雨順序、五穀豐穰、此乃徵誠啓願、靈貺如答、載惶載懼、無以自寧、案經云、若有國土講宣讀誦、恭敬供養、流通此經王者、我等四王、常來擁護、一切災障、皆使消殄、憂愁疾疫、亦令除差、所願遂心、恒生歡喜者、宜令天下諸國各敬造七重

塔一區、并寫金光明最勝王經、妙法蓮華經各十部、朕又別擬寫金字金光明最勝王經、每塔各令置一部、所冀、聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、其造塔之寺、兼爲國華、必擇好處、實可長久、近人則不欲薰臭所及、遠人則不欲勞衆歸集、國司等各宜務存嚴飾、兼盡潔淸、近感諸天、庶幾臨護、布告遐邇、令知朕意、又每國僧寺、施封五十戶、水田一十町、尼寺水田十町、僧寺必令有廿僧、其寺名爲金光明四天王護國之寺、尼寺一十尼、其寺名爲法華滅罪之寺、兩寺相共宜受敎戒、若有闕者、卽須補滿、其僧尼每月八日、必應轉讀最勝王經、每至月半、誦戒羯磨、每月六齋日、公私不得漁獵殺生、國司等宜恒加檢校、○己酉、三品長谷部內親王薨、天武天皇之皇女也、

る　○詔曰云々、十九年十一月詔に朕以去天平十三年二月十四日至心發願欲使國家永固聖法恒修遍詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺云々とありて月日合はず東大寺銅板詔書三代格政事要略亦二月十四日に係け扶桑略記朝野群載は三月十四日とし此と合へり　○悉承、金本曾本悉を恭に作り東大寺要錄亦同じ　○先業、曾本金イ本乃格先を光に作る　○修何致化、格に修を務に作る　○能臻、格に臻を致に作る　○前年馳驛、金本曾本驛を使に作る要錄亦同じ九年十一月紀に遣使于畿內及七道令造諸社と見えたるを云　○去歳云々、九年三月詔に見ゆ、格には歳を年に作る　○釋迦牟尼佛尊像、原本尊の下金の字あり金本及紀略に據て削る淀本には金の字ありて尊の字なし　○高一丈六尺者、者の字は金本曾本淀本に據て補ふ格及要錄亦同じ　○一鋪、原本鋪を舖に作る金本淀本及紀略に據て改む　○順序、々粹は序を節に作る　○織幡、原本幡を恐に作る諸本及格に據て改む　○無以自寧、無の字は金本曾本淀本及要錄に據て補ふ淀本及格には自寧を安寧に作る　○四王、四天王なり　○消殄、要錄殄を除に作る　○除差、格には差を去に作る　○各敬造、閣本曾本淀本及紀略要錄各の下合の字あり　○各十部、金本及紀略には各の字なく十を一に作る要錄亦同じ　○國華、原本華を花に作る今諸本に據る格亦同じ　○長久、金本曾本淀本及要錄久長に作る　○務存嚴飾、原本存を在に作る金本及格に據て改む　○臨護、淀本臨を監に作る　○僧寺、所謂國分寺なり　○封五十戶、金本曾本淀本十を千に作る　○水田一十町、一の字は諸本及紀略要錄に據て補ふ扶桑略記四十町に作る　○尼寺、國分尼寺を云　○尼寺一十尼、尼寺の二字は原本

になし金本曾本及三代格要錄に據て補ふ　○其寺名、寺の字は諸本及紀略になし　○相共、原本共を去に作る要錄及格に據て改む　○戒羯磨、原本磨を麿に作る金本閣本淀本に據て改む紀略には摩に作る開元釋敎錄に菩薩戒羯磨文一卷唐三藏玄奘譯とあり戒羯磨は卽ち菩薩戒羯磨文なり　○六齋日、持統紀及雜令に見ゆ義解に六齋は八日十四日十五日廿三日廿九日三十日とあり　○恒加擁護、格文には此下に天神地祇共相和順恒將福慶永護國家以下の五條を載せたり　○長谷部内親王薨、天武紀に宍人臣大麻呂女櫰媛娘生二男二女云々其三曰泊瀬部皇女とも見ゆ

（閏三月）正五位上藤原朝臣仲麻呂、正以下の四字は曾本淀本金イ本に據て補ふ
○馬史比奈麻呂、寶字三年五月紀及四年正月紀に比奈を夷の一字に作る
○曾乃君、十二年十一月紀には贈唹君に、和銅三年正月紀には曾君に作る
○不得任意、得の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ

○閏三月（辛亥朔）乙卯（五）、天皇臨朝、授從四位上大野朝臣東人從三位、從五位上大井王正五位下、從四位下巨勢朝臣奈氐麻呂從四位上、正五位上藤原朝臣仲麻呂、從五位上紀朝臣飯麿、並從四位下、正五位下佐伯宿禰常人正五位上、從五位下大伴宿禰兄麻呂、從五位上阿倍朝臣虫麻呂、並正五位下、正六位上多治比眞人犢養、阿倍朝臣子嶋、並從五位下、正六位上馬史比奈麻呂、外正六位上曾乃君多理志佐、外從七位上楉田勝麻呂、外正八位上額田部直廣麻呂、並外從五位下、○己未（九）、遣使運平城宮兵器於甕原宮、○乙丑（十五）、詔留守從三位大養德國守大野朝臣東人、兵部卿正四位下藤原朝臣豐成等曰、自今以後、五位以上、不得任意、住於平城、如有事故、應須退歸、被賜官符、然後聽之、其見在平城者、限今日內悉皆催發、自餘散在他所者、亦宜急追、○己巳（十九）、難波宮鎭佐、庭中有

○十八人、閣本及類史紀略要錄に八の字なし是なるに似たり
○宿禱、十二年十月詔ニ大將軍東人令ㇾ祈ニ請八幡神一と見ゆ是なり
（四月）○攝津、金本津の下に國の字あり
○河堤、原本堤を提に作る金本曾本從本に據て改む
（五月）○河南、天武紀（紀下二六二頁）に見ゆ通證云河南爲守治河之南
○挍獵、原本挍を狩に作る曾本從本及類史に據て改む挍獵は漢書成帝紀に見え字書に遮ㇾ木以闌ㇾ禽獸一曰挍とあり古來校挍互に通用するが故に挍を亦校に作る義異ならず
○常額、常は定に作るべきか
○和順、原本和を加に作る金本曾本從本に據て改む
（七月）○藤原朝臣清河、朝臣の二字は曾本從本金イ本に據て補ふ
○東宮學士、寶龜六年十月吉備眞備傳に天平七年授ニ正六位上一拜ニ大學助一

狐、頭斷絕、而無其身、但毛屎等散落頭傍、○甲戌、奉八幡神宮秘錦冠一頭、金字最勝王經、法華經各一部、度者十八人、封戶馬五疋、又令造三重塔一區、賽宿禱也、○乙亥、勅賜百官主典已上、幷中衛兵衛等錢、各有差、○夏四月辛丑、遣從四位上巨勢朝臣奈氏麻呂、從四位下藤原朝臣仲麻呂、從五位下民忌寸大楫、外從五位下陽侯史眞身等、撿挍河內與攝津相爭河堤所、○五月乙卯、天皇幸河南觀挍獵、○庚申、令諸國常額之外差加左右衛士各四百人、衛門衛士二百人、貢之、○丙子、讚岐國介正六位上村國連子老、越後國掾正七位下錦部連男笠等、與官長失禮、不相和順、仍解却見任、○秋七月辛亥、從四位上勳十二等巨勢朝臣奈氏麻呂、爲左大弁兼神祇伯、春宮大夫、從四位下紀朝臣飯麻呂爲右大弁、從五位下藤原朝臣清河爲中務少輔、從五位上橘宿禰奈良麻呂爲大學頭、從四位上黃文王爲散位頭、從五位上紀朝臣淨人爲治部大輔兼文章博士、外從五位下猪名眞人馬養爲雅樂頭、從四位下藤原朝臣仲麻呂爲民部卿、外從五位下文忌寸黑麻呂爲主稅頭、正五位下下道朝

高野天皇師之受禮記及漢書とこ見ゆ
○奈麻呂、原本麿に作る曾本及類史に據て改む
○斑竹御杖、斑竹は抄草木部に兼名苑云斑竹一名淚竹（此間斑竹音篇知久）と見え斑竹にて作れる御杖なり金牙餝とは金と象牙とにて裝飾せるを云
（八月）多治比眞人木人、木人の二字は曾本淀本金イ本に據て補ふ
○大作宿禰御中爲少輔兼大判事、宿以下判までの十字は曾本淀本金イ本に據て補ふ
○智努王、原本智を知に作る金本曾本淀本に據て改む
○從五位上多治比眞人、原本上を下に作る金本曾本及十二年十一月紀に據て改む
○廣千、萬葉千を耳に作る
○尾張守、原本張を破に作る曾本淀本金イ本に據て改む
○孝忠、此人遠江守となりしこと十年四月紀に見ゆ誤あるべし
○平城二市、東西の二市なり

臣眞備爲東宮學士。○戊午、太上天皇移御新宮、天皇奉迎河頭。○辛酉、宴群臣于新宮、奏女樂高麗樂。五位已上賜祿有差。是日授左大弁從四位上巨勢朝臣奈氏麻呂正四位上、弁賜以金牙餝斑竹御杖。○辛未、正五位上紀朝臣麻路爲式部大輔。○八月丁亥、從五位下多治比眞人木人爲兵部少輔、從四位上長田王爲刑部卿、外從五位下大伴宿禰御中爲少輔兼大判事、從五位上百濟王慈敬爲宮內大輔、正四位下智努王、爲木工頭、外從五位上紀朝臣鹿人爲大炊頭、外從五位下車持朝臣國人爲主殿頭、從五位上多治比眞人家主爲鑄錢長官、從五位下小治田朝臣廣千爲尾張守、從五位下百濟王孝忠爲遠江守、外從五位下陽侯史眞身爲但馬守、正五位下阿倍朝臣虫麻呂爲播磨守、外從五位下大伴宿禰百世爲美作守。○癸巳、佐渡國自去六月至今月霖雨不止、有傷民産、免當年田租調庸。○丙午、遷平城二市於恭仁京。○九月辛亥、免左右京百姓調租、四畿內田租、緣遷都也。○乙卯、勅、以京都新遷大赦天下、天平十三年九月八日午時以前天下罪人、大辟已下、已發覺未發覺、已

（九月）亦不限、原本亦を前に作る金本閣本曾本等に據て改む

○賀世山、山城志に在相樂郡鹿背山村とあり今相樂郡木津町大字に鹿背山あり其山は一の丘陵にして木津町と加茂村との間に在りて泉河に臨めり恭仁の新京は此賀世山の麓にて泉河に近きことは萬葉六に見ゆる大伴家持の歌と續紀の此文にて明なり

○西道、金本曾本淀本は道を路に作る

○宇治及山科、宇治は山城國宇治郡山科は同郡山科郷是なり

十月　禮服冠、其制衣服令に見ゆ

○官作、原本作を依に作る金本に據て改む

○賀世山東河造橋、原、賀を駕に作る曾本淀本金本及紀略に據て改む東河とは泉河をいふ山城志に所造橋即今法華寺野渡

結正、未結正、無問輕重咸釋放却、其流人未達前所、已達前所、及年滿已編付爲百姓、亦咸釋放還、其在流所生子孫、父母已亡、無可隨還者、亦不限年之遠近、情願還、皆錄名奏聞、但不願還者恣聽之、又緣逆人廣繼入罪者咸從原免、又大養德、伊賀、伊勢、美濃、近江、山背等國供奉行宮之郡、勿收今年之調、以正四位下智努王、正四位上巨勢朝臣奈氐麻呂二人、爲造宮卿、○丙辰、爲供造宮、差發大養德、河內、攝津、山背、四國役夫五千五百人、○己未、遣木工頭正四位下智努王、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂、散位外從五位下高岳連河內、主稅頭外從五位下文忌寸黑麻呂四人、班給京都百姓宅地、從賀世山西道以東、爲左京、以西、爲右京、○丁丑、行幸宇治及山科、五位已上皆悉從駕、追奈良留守兵部卿正四位下藤原朝臣豐成、爲留守、○冬十月（庚寅朔）己卯、車駕還宮、○辛卯、勅、五位已上禮服冠者、元來官作賜之、自今以後、令私作備、內命婦亦同、○癸巳、賀世山東河造橋、始自七月、至今月乃成、召畿內及諸國優婆塞等役之、隨成令得度、惣七百五十人、○戊戌、制、令內外五位已上、自今以

在二相樂郡法華寺野村一さあり
○內外五位已上、原本五の上に從の字あり金本に據て削る
○橘宿禰、原本橘を橋に作る諸本に據て改む
○赤幡、宮內式に凡供奉雜物送二大膳大炊造酒等司一者皆駄擔上竪二小緋幡一以爲二標幟一さあり倘ほ內膳式に詳なり
(十二月)秦前、原本秦を奏に作る十二年十一月紀に據て改む
○紀朝臣廣名、以下從五位下までの十四字は金本曾淀本に據て補ふ
○下野守、金本曾本下總守に作る
○安房國云々、寶字元年五月安房能登又舊に依て分立して國さなれり
○外從五位下引田朝臣、曾本淀本には外の字なし十二年十一月紀に據るに下は上の誤なるべし
○攝津介、考證に介當レ作レ亮さ云
【天平十四年】大極殿未成、十五年十二月紀に初壞二平城大極殿幷歩廊一遷二造於恭仁宮一云々さ見ゆされば此時には大極殿は

後、侍中供奉。○十一月戊辰、右大臣橘宿禰諸兄奏、此間朝廷以何名號傳於萬代。天皇勅曰、號爲大養德恭仁大宮也。○庚午、始以赤幡班給大藏、內藏、大膳、大炊、造酒、主醬等司、供御物前建以爲標。○十二月丙戌、外從五位下秦前大魚爲參河守。外從五位下馬史比奈麻呂爲甲斐守。外從五位下紀朝臣廣名爲上總守。外從五位下守部連牛養爲下野守。從五位下阿倍朝臣子嶋爲肥後守。安房國幷上總國。能登國幷越中國。○己亥、外從五位下引田朝臣虫麻呂爲攝津介。從五位下甘南備眞人神前爲近江守。從五位下大伴宿禰稻君爲因幡守。從五位上藤原朝臣八束爲右衞士督。

(壬午)十四年春正月丁未朔、百官朝賀。爲大極殿未成、權造四阿殿、於此受朝焉。石上榎井兩氏始樹大楯槍。○辛亥、廢大宰府。遣右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂等四人、以廢府官物付筑前國司。○癸丑、天皇幸城北苑。宴五位已上、賜祿有差。特賚造宮卿正四位下智努王東絁六十疋、綿三百屯、以勤造宮殿也。外從五位下巨勢朝臣堺麻呂、上毛野朝臣今具麻

呂、並授從五位下、○丙辰、賜武官酒食、仍賚五位已上被、主典已上支子袍、帛袴、府生已下衞士已上絁綿、各有差、○壬戌、天皇御大安殿、宴群臣、酒酣、奏五節田舞、訖更令少年童女踏歌、又賜宴天下有位人并諸司史生、於是六位以下人等鼓琴、歌曰、新年始邇何久志社、供奉良米、萬代摩提丹、宴訖賜祿有差、又賜家入大宮百姓廿人爵一級、入都内者、无問男女並賚物、○己巳、陸奧國言、部下黑川郡以北十一郡、雨赤雪、平地二寸、

○二月丙子朔、幸皇后宮、宴群臣、天皇歡甚、授正四位上巨勢朝臣奈氐麻呂從三位、從五位上坂上忌寸犬養正五位下、正八位上縣犬養宿禰八重外從五位下、宴訖賜祿有差、○戊寅、免中宮職奴廣庭、賜大養德忌

なかりしなり ○四阿殿、抄居處部屋宅類に四阿唐令云宮殿皆四阿（和名阿都末夜）とあり四方へ屋を葺きおろし四柱にて壁なき家作りを今あづまやと云此殿もさる形狀なりしなるべし ○廢大宰府、廣嗣の事件ありしに由り廢せられしなるべし翌十五年十二月鎭西府を置き十七年六月大宰府を復せられたり ○東遊、四時祭式春日祭條に見ゆ ○支子袍、原本支を友に作る金本淀本及類史に據て改む抄調度部染色具に梔子木實可染黃色者也（和名久知奈之）とあり支子袍とは支子にて黄に染めたる袍を云 ○各有差、類史各の字なし ○群臣、原本群を郡に作る金本及類史紀略に據て改む ○五節、政事要略に五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天矚他人無見擧袖五變故謂之五節とあり十五年五月官命を參考すべし ○田舞、天智紀（紀下二四二頁）に見ゆ ○踏歌、持統紀七年正月紀（紀下三三七頁）に見ゆ字類抄、太部人倫には之を以て女踏歌の始とす ○新年始邇云々、新年の始にかくしの如く歌ひつ舞ひつ樂みつゝ萬代までも大君に仕へ奉らむとの壽歌なり又催馬樂に見ゆ古今集廿大直歌には「新しき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ」とあり ○賜家入大宮百姓云々、慶雲元年十一月紀に宅入宮中云々とあるに同じく新京御造營の爲に百姓の家の宮城に入るものには云々との意なり ○黑川郡以北、格に大同五年二月廿三日官符陸奧國黑川郡以北稱奧郡」と見えたり

二月、大養德忌寸、十年閏七月紀に見ゆる大養德宿禰（初めは大倭忌寸と稱す）と同族なるや其異同詳ならず ○大宰府言、正月大宰府を廢せしに此に大宰府云

云とあるは疑はしけれど事實は未全く廢せられざりしなるべし
○金欽英、閣本淀本欽を飲に作る
○草創、草の字は金本曾本淀本に據て補ふ
（四月）飯高君、古事記孝昭天皇の段に天押帶日子命者伊勢飯高君之祖とあり後宿禰の姓を賜はりし人多し
○縣造、寶龜三年四月紀に志摩守縣造久太良見ゆ同氏なるべきか
○外從五位下、金本曾本五を七に作る
○日下部直、原本直を眞に作る金本曾本淀本に據て改む
○伊豆國造伊豆直、寶龜二年三月紀に伊豆國造伊豆直乎奈美見ゆ舊事紀に伊豆國造神功皇后御代物部連祖天蕤桙命八世孫若建命定賜國造と見ゆ
○祜志備、原本祜を祐に作る上文に據て改む
○大原眞人門部、部の字は曾本淀本金イ本に據て補ふ
（五月）越智山陵、齊明天皇の御陵なり
○修緝、類史緝の字なし

寸姓。大宰府言、新羅使沙飡金欽英等一百八十七人來朝。○庚辰、詔以新京草創宮室未成、便令右大弁紀朝臣飯麻呂等饗金欽英等於大宰、自彼放還。是日、始開恭仁京東北道、通近江國甲賀郡。○三月（丙午朔）己巳（廿四）、地震。○夏四月（乙亥朔）甲申（十）、伊勢國飯高郡采女正八位下飯高君笠目之親族縣造等、皆賜飯高君姓。賜外從五位下日下部直益人伊豆國造伊豆直姓。○甲午（廿）、天皇御皇后宮宴五位以上。賜祿有差。授河內守從五位上大伴宿禰祜志備正五位下、皇后宮亮外從五位下中臣熊凝朝臣五百嶋從五位下。○戊戌（廿四）、授從四位下大原眞人門部從四位上。○五月（甲辰朔）丙午（三）、遣使畿內、撿挍遭澇百姓產業。○癸丑（十）、越智山陵崩壞。長一十一丈、廣五丈二尺。○丙辰（十三）、遣知太政官事正三位鈴鹿王等十人、率雜工修緝之。又遣采女女孺等供奉其事。○庚申（十七）、遣內藏頭外從五位下路眞人宮守等、賚種種獻物奉山陵。○庚午（廿七）、制、凡擬郡司少領已上者、國司史生已上共知簡定、必取當郡推服、比郡知聞者、每司依員貢擧。如有顧囘濫擧者、當時國司隨事科決。又采女者、自今以後、每郡一人貢進之。○六月（甲戌朔）丁丑（四）、上毛

○每司、考證に司疑國字之誤と云り
○雖同、原本同を司に作る金本に據て改む
(六月)上毛野朝臣奈良麻呂、元年二月長屋王と交通するに坐して流されし人なり
○夜京中往々、濫觴抄に日夜京中條々に作り十三年六月とす
(八月)力田人、人の字は曾本金イ本及類史に據て補ふ
○秦下、考證に內藤氏曰案和名抄攝津國豐嶋郡有秦下鄕、秦下氏蓋出于此と云
○太秦公之姓、原本姓を名に作る金本曾本に據て改む太秦のこと雄略紀十五年に詳なり
○河內、原本河を何に作る閣本淀本金イ本に據て改む
○石原宮、山城國紀伊郡石原鄕にあり石原鄕は今同郡吉祥院村なり山城志に跡在相樂郡河原村とあるは何に據て云るにや
○甕原宮以東、以の字は金本曾本淀本に據て補ふ
○正四位下鹽燒王、原本下を上に作る十二年十一

野朝臣宿奈麻呂復本位外從五位下、○戊寅夜、京中往々雨飯、○秋七月癸卯朔、日有蝕之、○八月甲戌、令左右京四畿內七道諸國司等上孝子順孫義夫節婦力田人之名、○丁丑、詔授造宮錄正八位下秦下嶋麻呂從四位下、賜太秦公之姓、幷錢一百貫、絁一百疋、布二百端、綿二百屯、以築大宮垣也、○癸未、詔曰、朕將行幸近江國甲賀郡紫香樂村、卽以造宮卿正四位下智努王、輔外從五位下高岡連河內等四人、爲造離宮司、○甲申、車駕幸石原宮、○乙酉、宮城以南大路西頭、與甕原宮以東之間、令造大橋、令諸國司隨國大小輸錢十貫以下一貫以上、以充造橋用度、○癸巳、以民部大輔從五位上多治比眞人牛養等、爲裝束司、是日賜陪從人等祿、各有差、○甲午、以中務卿正四位下鹽燒王、左中弁從五位上阿倍朝臣沙彌麻呂等六人、爲前次第司、宮內卿從四位上石川王、民部大輔從五位上多治比眞人牛養等六人、爲後次第司、○丁酉、制、大隅、薩摩、壹岐、對馬、多褹等國官人祿者、令筑前國司以廢府物給、公廨又以便國稻依常給之、其三嶋擬郡司幷成選人等、身留當嶋、名附筑前國、

申上。仕丁國別點三人、皆悉進京。○己亥、行幸紫香樂宮。以知太政官事正三位鈴鹿王、左大弁從三位巨勢朝臣奈氐麻呂、右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂、爲留守。攝津大夫從四位下大伴宿禰牛養、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂、爲平城留守。卽日、車駕至紫香樂宮。○九月壬寅朔、幸刺松原。○乙巳、車駕還恭仁京。○癸丑、大風雨、壞宮中屋墻及百姓盧舍。○戊午、遣巡察使於七道諸國。又任左右京畿內班田使。○己巳、授正五位上紀朝臣麻路從四位下。○冬十月癸未、禁正四位下鹽燒王幷女孺四人、下平城獄。○乙酉、參議左京大夫從四位下縣犬養宿禰石次卒。○戊子、鹽燒王配流於伊豆國三嶋、子部宿禰小宅女於上總國、下村主白女於常陸國、川邊朝臣東女於佐渡國、名草直高根女於隱伎國、春日朝臣家繼女於土左國。

○十一月癸卯、參議從三位大野朝臣東人薨。飛鳥朝廷糺職大夫直廣

月紀に據て改む　○壹岐、曾本淀本金イ本岐を伎に作る　○便國稻、便國は便宜なる國を云　○擬郡司、郡司に擬任のものあり十二年九月紀に擬大領擬少領出雲風土記に擬主政見ゆ　○紫香樂宮、足代弘訓氏紫香樂宮考證に甲賀郡牧村字きのせと云所にありと云淡海志にも或說甲賀郡信樂屬邑黃瀨村有大內舊趾土人謂內裏野と見ゆ

（九月）刺松原、紫香樂宮の邊ならむ今詳ならず

（十月）正四位下鹽燒王、原本正を從に作る上文に據て改む此王の下獄は何故なるか詳ならず　○四人、下文に據るに五人と改むべし　○縣犬養宿禰石次卒、養老四年正月始見、同年十月彈正弼、天平四年九月少辨、同十一年四月參議となる　○配流於伊豆國三嶋、於の字は金本曾本淀本及類史紀略に據て補ふ　○子部宿禰、錄右京神別に子部火明命三世孫建刀米命之後とあり　○名草直、姓氏錄になし寶龜八年三月紀に此氏見え承和六年九月紀に名草直豐成見ゆ同姓なるべし　○隱伎、國原本伎を岐に作る金本曾本及類史に據て改む　○土左國、金本左を佐に作る

（十一月）大野朝臣東人薨、公卿補任に十一月十

一日党とす
○紀職大夫、唐制御史大夫に相當し後の彈正尹
○直廣肆、原本直を眞に作る金本に據て改む
○杲安、此人紀職大夫たりしこと天武紀に載せず
○大隅國司云々、寶字八年十二月紀に是月西方有聲似雷非雷時當大隅薩摩兩國之堺烟雲晦冥奔電去來七日之後乃天晴於麑嶋信爾村之海沙石自聚化成三嶋云々、又神護二年六月紀に大隅國神造新島震動不息云々延曆七年七月紀に當大隅國贈於郡曾乃峯上火炎大熾云々などあり
○今月廿三日、大隅國司言上の文なれば九月を指て言るか
(十二月)貪鐵穴、原本貪を食に作る曾本淀本金イ本に據て改む近江國の鐵穴は大寶三年九月辛卯紀に見ゆ參考すべし
○大原眞人高安卒、初め高安王と稱す和銅六年正月丁亥紀に始見、養老三年七月庚子紀に按察使、天平四年十月丁亥に衞門督、同十一年四月甲子に賜大原眞人之姓こと見ゆ

肆杲安之子也、○丙午、免左右京畿內今年田租、○壬子、大隅國司言、從今月廿三日未時、至廿八日、空中有聲、如大鼓、野雉相驚、地大震動、○丙寅、遣使於大隅國撿問、并請聞神命、○十二月丁亥、地震、○戊子、令近江國司禁斷有勢之家專貪鐵穴、貧賤之民不得採用、○庚寅、正四位下大原眞人高安卒、○庚子、行幸紫香樂宮、知太政官事正三位鈴鹿王、左大辨從三位巨勢朝臣奈氐麻呂、右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂等四人爲留守、

續日本紀卷第十四

【天平十五年】在前、玄道翁曰恐くは行在所の訛ならむと
○石原宮樓、山城國相樂郡河原村にあり、十四年八月甲申紀に詳なり
○(注)在城東北、原本城東倒置す金本會本に據て改む
○賜琴、原本賜を鼓に作る金本淀本會本に據て改む閣本には賜の字なし
○金光明寺、東大寺要錄に本名金鐘寺、大和志に東大寺一名、華嚴寺又名城大寺又總國分寺又金光明四天王護國之寺とあり皆東大寺の舊名なり
○四十九座、勝寶三年十月壬申詔に七々日間屈請四十九賢僧於新藥師寺云々六年十一月戊辰

續日本紀卷第十五

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平十五年正月盡十六年十二月

天璽國押開豐櫻彥天皇　聖武天皇

十五年(癸未)春正月辛丑朔、遣右大臣橘宿禰諸兄在前還恭仁宮、○壬寅、車駕自紫香樂至、○癸卯、天皇御大極殿、百官朝賀、○丁未、天皇御大安殿、宴五位已上、賜祿有差、○壬子、御石原宮樓(在城東北)、賜饗於百官及有位人等、有勅賜琴、任其彈歌、五位已上賜摺衣、六位已下祿各有差、○癸丑、爲讀金光明最勝王經、請衆僧於金光明寺、其詞曰、天皇敬諮四十九座諸大德等、弟子階緣宿殖、嗣膺寶命、思欲宣揚正法、導御蒸民、故以今年正月十四日、勸請海內出家之衆於所住處、限七々日轉讀大乘金光明最勝王經、又令天下限七々日禁斷殺生及斷雜食、別於大養德國金光明寺、奉設殊勝之會、欲爲天下之摸、諸德等或一時名輩、或萬里嘉

勅にも一七之間屈二四十九僧一云々と見ゆ　○弟子、天皇御親ら佛陀の弟子と稱し給ふなり　○階緣、原本緣を級に作る金本及要錄に據て改む階緣宿殖とは宿緣に依りての意　○嗣膺寶命、天位を繼がせ給ふを云　○正法、佛法を云涅槃經に有二誹謗佛正法一者上云々とある是なり　○御蒸民、金本閣本曾本淀本及要錄蒸を烝に作る　○令天下、閣本令を命に作る　○殊勝之會、殊勝は殊に勝れたるを云　○天下之摸、原本摸を招に作る諸本及要錄に據て改む　○萬里嘉賓、外國より來れるものもあり故にいふ　○稱國寶、此に集れる僧侶は何れも國家の寶なりとの意　○高明、學德の高きを云　○延請、延は進也請は求也乞也とあり招待するを云　○暢慈悲之音云々、佛の功德を形容せし語　○梵宇、寺院を云　○廣及群方云々、佛の功德を廣く長く萬物に及ぼすを云　○庶類、原本庶を廣に作る金イ本に據て改む　○菩薩之乘、乘は乘物を云　○如來之座、原本座を坐に作る金本に據改む　○像法、佛法を三時に分ち正法像法末法といひ佛の滅後五百年を正法時其以後一千年間を像法時、其後の一萬年を末法時と云此は像法時の意か、狩谷校本には像恐佛と云り此方穩當なるべきか　○可不愼哉、原本愼を思に作る金本閣本には闕け淀本勤に作るされば思も勤も蠹蝕せしを推して充當せしなるべし今要錄に據て改む

（二月）佐渡國、勝寶四年十一月乙巳紀舊に依て復置せり

（三月）外從五位下葛井連廣成、金本淀本外の字なし　○供客、原本客を宮に作る金本淀イ本及紀略に據て改む

（四月）宮內少輔、考證に內藤氏曰宮內疑兵部之

賓、僉曰人師、咸稱國寶、所冀屈彼高明、隨茲延請、始暢慈悲之音、終諧微妙之力、仰願梵宇增威、皇家累慶、國土嚴淨、人民康樂、廣及群方、綿該庶類、同乘菩薩之乘、並坐如來之座、像法中興、實在今日、凡厥知見、可不愼哉、

○二月（辛未朔）辛巳（十一）、以佐渡國幷越後國、○乙未（廿五）、夜、月掩熒惑、○丁酉（廿七）、夜、月掩太白、○三月（庚子朔）癸卯（四）、金光明寺讀經竟、詔遣右大臣橘宿禰諸兄等、就寺慰勞衆僧、○乙巳（六）、筑前國司言、新羅使薩飡金序貞等來朝、於是遣從五位下多治比眞人土作、外從五位下葛井連廣成於筑前、檢校供客之事、○夏四月（庚午朔）壬申（三）、行幸紫香樂、以右大臣正二位橘宿禰諸兄、左大弁從三位巨

詔十三年八月紀可詔さ引す
○調改土毛、土毛とは字書に土地所生桑麻五穀之屬也とあり貢調の文字を忌みて土毛と改めしなり金本閣本稱を僞に作る
○書直注物數、目錄を添へずして物品の數を書中に直に書入るゝを云此も略式にて勞を省くなり直は原本吏に作る紀略に據て改む諸本臭に作るも直の訛なり
(三)五月(二)今月、原本月を日に作る金本淀本に據て改む
○畿內、金本此下に諸內の二字あり諸國の謁なるべし
○皇太子、孝謙天皇に坐す
○大命爾坐西、原本西を而に作る金本閣本に據て改む
○奏賜久、太上天皇に申給ふなり
○挂母畏伎、挂は原本掛に作る金本閣本に據て改む掛は挂の俗字
○淨御原宮、天武天皇の坐しゝ宮なり原本淨の下に見字あるは衍なり金本淀本に據て刪る

勢朝臣奈氐麻呂、右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂爲留守、遣宮內少輔從五位下多治比眞人木人爲平城宮留守、○乙酉、車駕還宮、○辛卯、賜陪從五位已上廿八人、六位已下二千三百七十人祿有差、○甲午、撿挍新羅客使多治比眞人土作等言、新羅使調改稱土毛、書直注物數、稽之舊例、大失常禮、太政官處分、宜召水手已上、告以失禮之狀、便卽放却、○五月辛丑、自三月至今月不雨、奉幣帛于畿內諸神社祈雨焉、○癸卯、宴群臣於內裏、皇太子親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉詔、奏太上天皇曰、天皇大命爾坐西奏賜久、挂母畏伎飛鳥淨御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命、天下乎治賜比平賜比氐所思坐久、上下乎齊倍和氣氐无動久靜加爾令有爾波、禮等樂等二都並氐志、平久長久可有等、隨神母所思坐氐、此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食氐、與天地共爾絕事無久、彌繼爾受賜波利行牟物等之氐、皇太子斯王爾學志頂令荷氐、我皇天皇大前爾貢事乎奏、於是太上天皇詔報曰、現神御大八洲我子天皇乃、掛母畏伎天皇朝廷乃始賜比

○上下、君臣なり
○齊倍、原本齊を齋に作る金本閣本曾本に據て改む
○和氣氏、氏は諸本弖に作る弖は氏の俗字なれど、古くは一般に弖の字を用ひ、諸本概ねかく書習はせり
○令有爾波、原本波を八に作る金本曾本淀本に據て改む
○禮等樂等、禮樂の二字は字音によむべし禮記樂記に先王之制禮樂也云々、禮節民心樂和民聲政以行之刑以防之禮樂刑政四達而不悖則王道備矣、また樂至則無怨禮至則不爭揖讓而治天下者禮樂之謂也などあるを云り
○可有等、原本等を登に作る諸本に據て改む
○聞食弖、聖武天皇のなり
○與天地共爾云々、此五節舞をなり
○受賜波利行牟物等之氏、天武天皇の造り給へる五節舞を御世々々永く傳へ行かむ物さしてさなり牟は原本宇に作れるを金本曾本に據て改む物等

造賜幣留寶國寶等之氏、此王乎令供奉賜波、天下爾立賜比行賜部流法波、可絕伎事波無久有家利止、見聞喜侍止奏賜等詔大命乎奏、又今日行賜布態乎見行波、直遊止乃味爾波不在之氏、天下人爾、君臣祖子乃理乎、教賜比趣賜布止爾有良志止奈母所思須、是以教賜比趣賜比奈何良、受被賜持氏、不忘不失可有伎表等之氏、一二人乎治賜波奈止那毛所思行須等、奏賜等詔大命乎奏賜波久止奏、因御製歌曰、蘇良美都、夜麻止乃久爾波、可未可良斯、多布度久安流羅之、許能末比美例波、又歌曰、阿麻豆可未、美麻乃彌己止乃、登理母知氏、許能等與美岐遠、伊可多氏末都流、又歌曰、夜須美斯志、和己於保支美波、多比良氣久、那何久伊末之氏、等與美岐麻都流、右大臣橘宿禰諸兄宣、詔曰、天皇大命良麻等勅久、今日行賜比供奉賜態爾依而、御世御世當氏、供奉禮留親王等、大臣等乃子等乎始而、可治賜伎一二人等選給比治給布、是以汝等母、今日詔大命乃期等、君臣祖子乃理遠忘事無久、繼坐牟天皇御世御世爾、明淨心乎以而、祖名乎戴持而、天地與共爾、

之氏は原本に物等氏之とあるを諸本に據て改む下文有良志止那止毋し此と同じ書きざまにて必ずしも誤とはいふべからず注意して見るべし
○斯王、皇太子を指申せり天皇の大前にて舞び給へに直にかく申し、なり
○學志、古きよみざまにテラハシと訓むべし
○頂令荷氏、イタヽキモタシメテと訓べし學び取りて負ひ持す意
○我皇天皇、太上天皇を申給ふなり
○大前、原本大を太に作る今本皆本淀本に據て改む
○貢事乎、皇太子なして大前にて舞はしめて御覽に入れ給ふを云
○我子天皇、聖武天皇を申給ふなり
○天皇御延、天武天皇を申給ふなり
○寶國寶、淀本には上の寶の字なしそれにても通ず解には上の寶は舞の誤なるべしといひマヒフと訓り今姑く之に據れり
○天下御立賜比云々、立賜比行賜部流天下乃法波の意なり

長久遠久仕奉禮等之氏、冠位上賜比治賜布等勅大命、衆聞食宣、又皇太子宮乃官人爾、冠一階上賜布、此中博士等任賜部留下道朝臣眞備爾冠二階上賜比治賜波久等勅天皇大命、衆聞食宣、授右大臣正二位橘宿禰諸兄從一位、正三位鈴鹿王從二位、正四位下藤原朝臣豐成從三位、從四位上栗栖王、春日王、並正四位下、從四位下船王從四位上、无位阿刀王、御室王、並從四位下、從五位上矢釣王正五位下、无位高丘王、林王、市原王、並從五位下、從四位下大伴宿禰牛養、石上朝臣乙麻呂、藤原朝臣仲麻呂、並從四位上、正五位上多治比眞人廣足、佐伯宿禰常人、正五位下下道朝臣眞備、並從四位下、正五位下多治比眞人占部、石川朝臣加美、從五位上藤原朝臣八束、橘宿禰奈良麻呂、正五位下阿倍朝臣虫麻呂、佐伯宿禰清麻呂、坂上忌寸犬養、並正五位上、從五位上阿倍朝臣佐美麻呂、從五位下藤原朝臣清河、從五位上紀朝臣清人、石川朝臣年足、背奈王福信、並正五位下、從五位下大伴宿禰稻君、百濟王孝忠、佐味朝臣虫麻呂、巨勢朝臣堺麻呂、佐伯宿禰稻麻呂、並從五位上、外從

五位下縣犬養宿禰大國、正六位上大伴宿禰駿河麻呂、從六位上大原眞人麻呂、正六位上中臣朝臣清麻呂、佐伯宿禰毛人、並從五位下、從六位上下毛野朝臣稻麻呂、正六位上高橋朝臣國足、鴨朝臣角足、秦井手乙麻呂、紀朝臣小楫、若犬養宿禰東人、井上忌寸麻呂、並外從五位下、既而以右大臣從一位橘宿禰諸兄拜左大臣、兵部卿從三位藤原朝臣豐成、左大辨從三位巨勢朝臣奈氐麻呂爲中納言、從四位上藤原朝臣仲麻呂、從四位下紀朝臣麻路爲參議、

○可絶伎事波無久有家利止、天武天皇の上下を齊へ和けて長く平かにあるべしと思召て造り給へる此舞を今皇太子に舞はしめ給ふを見れば總べて立給ひ行給ふ天下の法は永く絶ゆることなく行はるべしと思ほしめす由なり　○見聞喜侍止、舞を見其歌を聞き給ひて喜申すとなり侍は天皇に對し奉りての敬語の意　○奏賜等、太上天皇の天皇に申し給ふとなり　○詔大命平奏、傳ふる人の詞にて太上天皇の云々と申し給ふ大命を天皇に奏すとなり　○又今日行賜布、是より又太上天皇の詔なり　○見行波、太上天皇の御自ら詔ふなり　○直遊止乃味爾波不在之氐、古へは樂を遊びといひしをもてかくは詔へるなり今日此五節舞を見ればたゞの遊びわざと思ひ給はずとなり原本遊を迹に作る金本閣本曾本に據て改む　○君臣祖子乃理乎云々、君臣はキミヤツコと訓むべし君臣と相對する時の臣は總てヤツコと訓むが例なり祖子はオヤコと訓むべし親を祖と書くは古への常なり趣賜布は其方に心を向けしむるを云禮樂は君臣父子の義理を敎ふるものなりなど云は支那の思想なれどこゝは其言葉のみを取りてかくは申しゝなり　○趣賜比奈何良、趣け給ふまゝにとなり　○受被賜持氐云々、王臣百官が君臣父子の義理をなり二人を治め給へかしとの義にて天皇に太上天皇の思召を告げ申給ふなり　○御製歌、三首共に太上天皇の御製なり　○治賜波奈止、奈はネと同じく希求の意なり　○蘇良美都云々、空見つに倭の枕詞、此舞を見れば皇國のかく貴きは神からにてありけらしとなり神からとは古への代々の天皇の御德の高く貴くましましゝを申せり　○阿麻豆可末云々、原本伊可の可を寸に作る金本淀本に據て改む、此御製は解し難し、本居翁は解に三説を擧けて(一)に初二の御句は天津神の御係命にて天皇を指申給ひ二の御句の下の乃は爾の誤、結句の可の字は末の誤にて今歟或は伊字は阿の誤にて朕(アガ)歟なるべし一首の意は此豐御酒を朕が執持て天皇に獻るとよみ給へるにや(二)はたてまつるとは聞食すを宣給へるにて天皇の今此豐御酒を執持たしてきこしめすとよみ給へるか、(三)には古事記神功皇后の大御歌には此御酒は我御酒ならず云々とよみ給へると同意にて天神及昔の御世〳〵の天皇の此御酒をさりもちて今天皇に獻り給ふなりと壽祝申給へるかと云り　○夜須美斯志云々、夜須美斯志は大君に係る枕詞　原本志を留に作る諸本に據て改む和己於保支美は聖武天皇を申し奉る等與美岐麻都流は豐御酒を聞食すを云解に結句の流は禮にてあらまほしと云り　○今日行賜比、今日の二字は金本閣本曾本淀本に據て補ふ　○御世御世當氏仕奉禮留云々、御歷代其の御世〳〵に奉仕せる親王等大臣等の子なり子等は直の子のみならず末裔までに係れり　○汝等、今日の宴に陪侍・

○乙丑廿七、詔曰、如聞、墾田依養老七年格、限滿之後、依例收授、由是農夫怠倦、開地復荒、自今以後、任爲私財、無論三世一身、咸悉永年莫取、其親王一品及一位五百町、二品及二位四百町、三品四品及三位三百町、四位二百町、五位百町、六位已下八位已上五十町、初位已下、至于庶人十町、但郡司者、大領少領三十町、主政主帳十町、若有先給地過多茲限、便即還公、姧作隱欺、科罪如法、國司在任之日、墾田一依前格、○丙寅廿八、禁斷諸國司等不往舊館更作新舍、又到任一度須給鋪設、而雖經年序、吏亦給之、又各置養郡、勿令煩資養、備前國言、邑久郡新羅邑久浦漂著大魚五十二隻、長二丈三尺已下、一丈二尺已上、皮薄如紙、眼似米粒、聲如鹿鳴、

る人々を指て詔ふなり　○今日詔大命乃期等、上なる太上天皇の詔なり　○祖子乃挮遠、原本小字とすべき乃と遠を大字にす金本曾本淀本に據て改む　○繼坐牟云々、未來に云り今より往先なり　○明淨、平、平の字金本なし　○祖名、解に氏々の各先祖より仕奉來たる職業なり家の職業を名と云なりと云り　○戴持而、祖先より承繼ぎ來し職業を戴き負持つをいふ原本戴を載に作る金本に據て改む金本に持を侍に作る　○天地與共爾云々、子孫の末々に至まで祖の名を斷絶せしめず遠永く仕奉れとなり　○皇太子宮乃官人、東宮職員の官名は職員令に見ゆ金本には宮字なし　○博士、ハカセと訓るは音讀なり、下道朝臣眞備は天平十三年七月爲東宮學士とあるを此に博士と書けるは多くの物識り人を云るにて官名にはあらず　○阿刀王、原本刀を力に作る金本閣本に據て改む曾本には倍に作る　○矢釣王、原本釣を鈎に作る金本閣本等に據て改む　○清河、原本河清に作る金本曾本淀本に據て改む考證に依紀略本名清河入唐改河清今案入唐在勝寶四年則此作清河爲正と　○背奈王、考證に十九年六月背奈福信云々等賜背奈王姓此云王追書也下傚之と云り　○中臣朝臣清麻呂、此人の敍位を本系帳に正月七日とす　○從六位上下毛野朝臣、金本曾本上を下に作る、金イ本宮本下毛を上毛に作る恐くは非なり　○秦井手、景雲三年五月己丑紀に攝津國豐嶋郡人云々井手小足等十五人賜姓秦井手忌寸と見ゆるは同姓の人々なり　○拜左大臣、紀略拜を任に作る

○詔曰云々、此格文三代格十五及田令集解に出づ　○養老七年格、此事養老七年四月紀に出づ三代格には見えず　○復荒、原本復を後に作る格に據て改む　○三世一身、養老七年四月紀に有新造溝池營開墾者不限多少給傳三世若逐舊溝池給其一身とあるを云上文に限滿之後とは此期限に滿つるを云り　○永年莫取、格に此下に其國司在任之日墾田一依前格但人爲開田占地者先就國司申請然後開之不得因玆占請百姓有妨之地若受地之後至于三年本主不開者聽他人開墾とあり

○共親王一品云々、以下の文集解所引格文には見ゆれど三代格には無し
○三品四品及三位、原本三位の二字なく及の字は三品の下にあり金本閣本淀本及令集解に據て改む　○舒作、作は詐の誤なるべし　○前格、元年十一月紀に見ゆ　○鋪設、民部式に凡新任國司到任者皆給鋪設以儲備云々とあり鋪設とは席薦几案の類を云　○雖經年序、序の字は金本閣本等に據て補ふ　○更亦給之、疑らくは給の上に不の字を脱するか然らざれば意通ぜず　○養郡　雜式に凡國司等各不得置資養郡とある是なり　○新羅邑久浦、備陽國志に牛窓浦に師樂といふ地名あり是即新羅浦なるべしと云邑久は倭名抄に邑久(於保久)郷あり今大伯村是なるべし　○米粒、原本朱泣に作る金本閣本曾本淀本に據て改む

故老皆云、未嘗聞也、

(六月)山背國司、司の字は金本曾本及紀略に據て補ふ
○宇治河、山城志宇治郡の條に在郡南源自江州流爲久世郡界至六地藏入紀伊郡とあり琵琶湖より出で八幡山崎の邊にて木津川と合し後淀川となる
○掲渉、毛詩邶風匏有苦葉章に深則厲淺則掲、毛傳に褰衣而渉曰掲とあり
○男楫、上文に小楫に作る

○六月(戊辰朔)癸巳(廿六)、山背國司言、今月二十四日、自酉至戌、宇治河水涸竭、行人掲渉、○丁酉(三十)、以從五位下中臣朝臣清麻呂爲神祇大副、從五位下當麻眞人鏡麻呂爲少納言、從五位下多治比眞人木人爲中務少輔、從五位下藤原朝臣許勢麻呂爲中宮亮、從五位下高丘王爲右大舍人頭、從五位下林王爲圖書頭、外從五位下小野朝臣綱手爲內藏頭、從五位下大原眞人麻呂爲式部少輔、外從五位下大伴宿禰三中爲兵部少輔、從四位下大市王爲刑部卿、正五位上平群朝臣廣成爲大輔、外從五位上倭武助爲典藥頭、外從五位下紀朝臣男楫爲彈正弼、從四位上藤原朝臣仲麻呂爲左京大夫、外從五位下鴨朝臣角足爲右京亮、從五位下多治比眞人土作爲攝津介、從四位下下道朝臣眞備爲春宮大夫、皇太子

○背奈王、原本背を肯に作る山崎校本に據て改む

(七月)多利志佐外正五位上、閣本上を下に作る

○前君、詳ならず勝寶元年八月癸未紀にも見ゆ

○乎佐外從五位下の五字原本なし諸本に據て補ふ

○佐須岐君夜麻等久々賣、天平元年七月辛亥紀に見ゆ

○庚寅、此月戊戌の朔なれば庚寅なし干支に誤あるべし

(八月)鴨川、山城志相樂郡の條に木津川至木屋口曰泉川流加茂瓶原間曰鴨川聖武天皇改名宮川とあり本名輪韓川古くは山城河一名泉川後世專ら木津川と云り

○上總國司言、司の字は金本曾本從本及紀略に據

學上如故、正五位下背奈王福信爲亮、正五位下藤原朝臣清河爲大養德守、從五位下佐伯宿禰毛人爲尾張守、外從五位下秦井手乙麻呂爲相摸守、從五位下百濟王敬福爲陸奥守、外從五位下葛井連廣成爲備後守、從五位下小治田朝臣廣千爲讃岐守、外從五位上引田朝臣虫麻呂爲上佐守、○秋七月戊戌朔、日有蝕之、○庚子、天皇御石原宮、賜饗於隼人等、授正五位上佐伯宿禰清麻呂從四位下、外從五位下葛井連廣成從五位下、外從五位下曾乃君多利志佐外正五位上、外正六位上前君乎佐外從五位下、外從五位上佐須岐君夜麻等久々賣外正五位下、○壬寅、出雲國司言、楯縫出雲二郡、雷雨異常、山岳頽崩、壞廬舍、埋田畝、○庚寅、地震、○癸亥、行幸紫香樂宮、以左大臣橘宿禰諸兄、知太政官事鈴鹿王、中納言巨勢朝臣奈弖麻呂爲留守、○八月丁卯朔、幸鴨川、改名爲宮川也、○乙亥、上總國司言、去七月大風雨數箇日、雜木長三四丈已下、二三尺已上、一万五千許株漂著部內海濱也、○九月壬寅、正五位上石川朝臣加美授從四位下、○己酉、免官奴斐太、從良、賜大友史姓、斐太

始以大坂沙治玉石之人也、○丁巳、甲賀郡調庸准畿內收之、又免當年田租、

○冬十月(丙寅朔)辛巳(十五)、詔曰、朕以薄德恭承大位、志存兼濟、勤撫人物、雖率土之濱已霑仁恕、而普天之下未洽法恩、誠欲賴三寶之威靈乾坤相泰、修萬代之福業動植咸榮、粤以天平十五年歲次癸未十月十五日、發菩薩大願奉造盧舍那佛金銅像一軀、盡國銅而鎔象、削大山以構堂、廣及法界、爲朕知識、遂使同蒙利益共致菩提、夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也、以此富勢造此尊像、事也易成、心也難至、但恐徒有勞人、無能感聖、或生誹謗、反墮罪辜、是故預知識者、懇發至誠、各招介福、宜每日三拜盧舍那佛、自當存念、各造盧舍那佛也、如更有人情願持一枝草一把土助造像者、恣聽之、國郡等司、莫因此事侵擾百姓、强令收斂、布

て補ふ
(九月)石川朝臣加美、原本加を賀に作る金本曾本淀本に據て改む
○官奴、原本官を宮に作る諸本に據て改む
○大友史、錄河内未定雜姓に百濟國人白猪奈世之後と見ゆ此同氏なるべし　○大坂沙、大和志葛下郡土產の部に金剛鑽逢坂村上方及穴蟲村出天平五年(十五年の誤なるべし)九月以大坂沙治玉石即此とあり今北葛城郡下田村の大字となれり其西に關屋(二上村の大字)あり是より河內へ踰ゆるを大坂といひ穴虫越とも稱す今尙金剛砂を產すといへば此處なるべし
(十月)詔曰、此造佛の詔は朝野群載十六及要錄等に載す
○恭承、群載要錄忝承に作る
○志存兼濟、兼濟とは總てを併せ救ふことにて萬民を救ひ給はむと思召すを云
○未洽法恩、原本洽を給に作る金本曾本淀本及要錄に據て改む洽或は浴の譌なるべきか
○粤以云々、群載に以天平十五年歲次癸未十月十五日於近江國信樂京奉鑄佛像其功已止更以天平十七年歲次乙酉八月廿三日於大倭國添上郡奉鑄同像云々と見え最初信樂京にて此事を創め給ひしなり
○盧舍那佛、名義集に淨

告暹邇、知朕意矣、○壬午、東海東山北陸三道廿五國、今年調庸等物、皆令貢於紫香樂宮、○乙酉、皇帝御紫香樂宮、爲奉造盧舍那佛像、始開寺地、於是行基法師率弟子等勸誘衆庶、

○十一月丁酉、天皇還恭仁宮、車駕留連紫香樂、凡四月焉、○戊申、宴群臣於內裏、外從五位上倭武助授從五位下、五位已上賜祿有差、○十二月己丑、始運平城器仗、收置於恭仁宮、○辛卯、始置筑紫鎭西府、以從四位下石川朝臣加美爲將軍、外從五位下大伴宿禰百世爲副將軍、判官二人、主典二人、○初壞平城大極殿幷步廊、遷造於恭仁宮四年於茲、其功纔畢矣、用度所費、不可勝計、至是更造紫香樂宮、仍停恭仁宮造作焉、

覺雜書云盧舍那、寶梁經翻爲淨滿、以諸惡都盡故云淨、衆德悉圓故云滿、此多從自受用報得名、或翻光明徧照、此多從他受用報爲目、若論色心皆得淨滿、身智俱有光明、則二名亦通自他受用也とあり　○鎔象、群裁に鎔像に作る扶桑略記亦同じ要錄には鎔像に作る　○知識、金本曾本及紀略智識に作る、靈異記考證に引ける知識を建七重塔とある注に引ける知識明謂結社也知識猶今俗講中と云　○菩提、梵語にて智また道また佛道と譯す　又覺と譯、道の極なるを菩提と謂ふと云無量義經の注に菩提、正覺佛果異稱、開法爲種發心爲芽と見ゆ　○天下之富、字書に富は豐於財とあり　○天下之勢、字書に勢は盛權力也とあり　○事也易成心也の難至、二つの也の字は原本之に作る金本曾本及群裁略記に據て改む　○無能感聖、徒に人力をのみ勞して佛の眞の有難さを感ずるものなしとの義　○預知識者、群裁預を諸に作る略記同じ、佛の導に預からむとする人々なり　○懇發至誠、此下に金本及群裁略記心の字ありまた略記には懇の字なし　○介福、介は大也善也　○自當存念、各自が銘々眞摯になるを云　○遣盧舍那佛、閑本及略記群裁此下に像の字あり要錄は原本に同じ　○一把土、略記群裁把を合に作る　○恣聽之、以下結尾に至る群裁及略記異同あり參看すべし　○知朕意矣、要錄矣を焉に作る　○今年、此二字金本曾本及紀略に據て補ふ　○始開寺地、即ち甲賀寺なり十六年十一月壬申の條に見ゆ

(十一月)外從五位上倭武助、原本上を下に作る金本曾本に據て改む

(十二月)始運平城器仗云々、十三年閏三月己未紀に遣使運平城宮兵器於甕原宮とあり此に又かくあるは甕原に運ぶを止めて恭仁宮に收められしなるべし

○鎭西府、蒲生氏職官志に十四年正月勅廢大宰府云々然邊要豈得全無是雖鎭設乃以十五年十二月留鎭西府爲筑紫

(甲申)十六年春正月丙申朔、廢朝、饗五位已上於朝堂。○庚戌、任裝束次第司、爲幸難波宮也。○戊午、太政官奏、鎭西府將軍准從五位官、判官准從六位官、主典准從七位官、倍給二季祿及月料、並留應入京調庸物相折、通融隨時便給、又特賜公廨田、將軍十町、副將八町、判官六町、主典四町、奏可之。○辛酉、給鎭西府印一面。○閏正月乙丑朔、詔喚會百官於朝堂、問曰、恭仁難波二京何定爲都、各言其志、於是陳恭仁京便宜者、五位已上廿四人、六位已下百五十七人、陳難波京便宜者、五位已上廿三人、六位已下一百三十人。○戊辰、遣從三位巨勢朝臣奈氐麻呂、從四位上藤原朝臣仲麻呂、就市問定京之事、市人皆願以恭仁京爲都、但有願難波者一人、願平城者一人。○癸酉、更仰京職令諸寺百姓皆作舍宅。○乙亥、天皇行幸難波宮、以知太政官事從二位鈴鹿王、民部卿從四位上藤原朝臣仲麻呂爲留守、是日、安積親王緣脚病從櫻井頓宮還、丁丑、薨、時年十七、遣從四位下大市王、紀朝臣飯麻呂等、監護葬事、親王、天皇之皇子也、母夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自、從五位下唐之女也。○二

由是稱鎭西蓋其因其舊府改名爾と云り
【天平十六年】朝堂、恭仁宮の朝堂なり
○月料、太政官式に見ゆ
○副將、此下に軍の字を脫せしか或は四字の句とせむが爲に軍字を略せしにもあるべし
【閏正月】喚會、閣本會を命に作る
○廿四人、原本四を三に作る金本閣本曾本等に據て改む
○安積親王、大日本史注に紹運錄別載淺香皇子按安積淺香音訓相同爲二人者誤と云り
○脚疾、抄疾病部に脚氣醫家書有脚氣論(脚氣一云脚病俗云阿之乃介)とあり又空穗藏開下樓上源氏若菜上に見ゆ
○櫻井、河内國河内郡に櫻井鄕あり河内志に櫻井鄕已廢存六萬寺村とあり今中河内郡枚岡南村大字に六萬寺あり
○從五位下唐、下の字は金本曾本淀本に據て補ふ唐は神龜三年正月庚子に大唐の二字に作る
(二月)乙未、二日なり

私記云通暦以乙未爲朔、前大今小或曰拔今月大甲午朔ト丙午十三日合
○追諸司云々、原本追を遣に作る今本及紀略に據て改む考證にも拔是時天皇在難波宮不當書遣某等於難波宮とあり
○從五位下小田王、原本下を上に作る十八年四月癸卯の條に據て改む
○和泉宮、和泉志に在和泉郡府中村元正天皇養老元年二月及十一月再幸和泉宮と見ゆ
○免天下馬飼雜戸、雜戸を免じて良民とせられしなり
○手伎云々、改姓せしめらるゝとも手伎は子孫に傳習せしめよとなり勝寶四年二月己巳紀に京畿諸國鐵工銅工金作等改姓の條を參考すべし
○高御座、大極殿高御座なり内匠式に詳に見ゆ
○安曇江、攝津志に安曇寺西生郡大坂安曇寺町地藏石像尚存とあり江家次第十二に舊例三日有三所禊近代同日行之云々安曇口禊とあるも此地なり今大阪市南區東横堀の邊なりと云

月乙未、遣少納言從五位上茨田王于恭仁宮、取驛鈴内外印、又追諸司及朝集使等於難波宮、○丙申、中納言從三位巨勢朝臣奈氐麻呂持留守官所給鈴印、詣難波宮、以知太政官事從二位鈴鹿王、木工頭從五位下小田王、兵部卿從四位上大伴宿禰牛養、大藏卿從四位下大原眞人櫻井、大輔正五位上穗積朝臣老五人、爲恭仁宮留守、治部大輔正五位下紀朝臣清人、左京亮外從五位下巨勢朝臣嶋村二人、爲平城宮留守、○甲辰、幸和泉宮、○丙午、免天下馬飼雜戸人等、因勅曰、汝等今負姓人之所恥也、所以原免、同於平民、但既免之後、汝等手伎如不傳習子孫、子孫彌降前姓、欲從卑品、又放官奴婢六十人從良、○丁未、車駕自和泉宮至、○甲寅、運恭仁宮高御座幷大楯於難波宮、又遣使、取水路運漕兵庫器仗、○乙卯、恭仁京百姓情願遷難波宮者恣聽之、○丙辰、幸安曇江遊覽松林、百濟王等奏百濟樂、詔授无位百濟王女天從四位下、從五位上百濟王慈敬從五位下孝忠全福並正五位下、○戊午、取三嶋路、行幸紫香樂宮、太上天皇及左大臣橘宿禰諸兄留在難波宮焉、○庚申、左大

臣宣勅云、今以難波宮定爲皇都、宜知此狀、京戶百姓任意往來、〇三（甲子朔）月甲戌、石上榎井二氏樹大楯槍於難波宮中外門、〇丁丑（十四）、運金光明寺大般若經致紫香樂宮、比至朱雀門、雜樂迎奏、官人迎禮、引導入宮中、奉置安殿、請僧二百、轉讀一日、〇戊寅（十五）、難波宮東西樓殿、請僧三百人、令讀大般若經、〇夏四月（甲午朔）丙午（十三）、紫香樂宮西北山火、城下男女數千餘人、皆趣伐山、然後火滅、天皇嘉之、賜布人一端、〇甲寅（廿一）、廢造兵鍛冶二司、〇丙辰（廿三）、以始營紫香樂宮、百官未成、司別給公廨錢惣一千貫、交關取息、永充公用、不得損失、其本、每年限十一月、細錄本利用狀、令申太政官、〇五（癸亥朔）月庚戌、肥後國雷雨地震、八代、天草、葦北三郡官舍、幷田二百九十餘町、民家四百七十餘區、人千五百廿餘口被水漂沒、山崩二百八十餘所、壓死人四十餘人、並加賑恤、〇六月（壬辰朔）壬子（廿一）、雨氷、

〇百濟王女天、女子名は天か
〇從五位下孝忠、十五年五月辛丑の條に據るに從五位下の四字恐くは衍
〇全福、原本全を金に作る金本に據て改む
〇三嶋路、難波より近江國紫香樂に至るには攝津の三嶋路より往くものと河内を經るものとあり今回は三嶋路を取らせ給ひしなり
〇此狀、原本狀を城に作る金本淀イ本及紀略に據て改む
（三月）大楯槍云々、難波宮を皇都と定められし故に石上榎井二氏楯槍をたて、宮門警衛の任に當るなり
〇官人、原本官を宮に作る金本淀本及要錄に據て改む
（四月）皆趣、狩谷校本に趣恐赴と云
〇賜布人一端、布を賜ふこと人毎に一端の意　〇廢造兵鍛冶二司、此後景雲元年五月癸酉鍛冶正を任じ天長十年六月紀に造兵司雜工云々と見ゆれば二司を更に置かれしなりかくて大同三年鍛冶司を廢して木工寮に併せ寛平八年造兵司を廢して之を兵庫寮に併せられたり　（五月）庚戌、干支を推すに是月庚戌なし庚辰の誤か、庚辰は十八日なり　〇肥後國、狩谷校本云國下恐脫言字　〇廿餘口、類史に廿の字なし　（六月）雨氷、原本氷を水に作る金本閣本淀本に據て改む

（七月）戊戌、此月壬戌の朔なれば戊戌なし戊辰の誤なるべし戊辰は七日なり
○仁岐河、閣本岐を伎に作る仁岐河は今詳ならず考證に黒川氏曰仁疑由字之誤由岐即弓削萬葉集第七弓削河原河内志云若江郡長瀬川自志紀郡流經弓削書此とあり之に從へば今の中河内郡八尾町の邊なり
○割取正稅云々、諸國國分寺料は主稅式上に見ゆ
○僧尼兩寺、三代格此上に國分の二字あり
○永支造寺用、狩谷校本云支恐充
（八月）足人、天平神護元年正月紀に人足に作る
（九月）平群朝臣、原本群を郡に作る金本閣本官本に據て改む
○全福、原本全を金に作る金本に據て改む

○秋七月癸亥、太上天皇幸智努離宮、○丁卯、故正四位下紀朝臣男人、與故從五位下紀朝臣國益相訴奴婢、依刑部判、賜國益男正五位下清人、既而清人上表、悉從良焉、○戊戌、太上天皇幸仁岐河、陪從衛士已上、無問男女、賜祿各有差、○己巳、車駕還難波宮、○甲申、詔曰、四畿內七道、諸國、々別割取正稅四万束、以入僧尼兩寺、各二万束、每年出擧、以其息利、永支造寺用、○八月乙未、詔授蒲生郡大領正八位上佐々貴山君親人從五位下、幷賜食封五十戶、絁一百疋、布二百端、綿二百屯、錢一百貫、神前郡大領正八位下佐佐貴山君足人正六位上、幷絁四十疋、布八十端、綿八十屯、錢四十貫、斯二人、並伐除紫香樂宮邊山木、故有此賞焉、○九月甲戌、遣巡察使於畿內七道、以從四位下紀朝臣飯麻呂、爲畿內使、正五位下石川朝臣年足、爲東海道使、正五位上平群朝臣廣成、爲東山道使、從五位下石川朝臣東人、爲北陸道使、正五位下百濟王全福、爲山陰道使、外從五位下大伴宿禰三中、爲山陽道使、外從五位下巨勢朝臣嶋村、爲南海道使、從四位上石上朝臣乙麻呂、爲西海道使、外從五位下大

養徳宿禰小東人爲次官、道別判官一人、主典一人、〇乙酉、勅八道巡察使等曰、是行使等、撿問事條、國郡官司依實報答者、縱當死罪、咸原勿論、若有經問不臣、被使勘獲者、事雖細小、依法不容、使宜慇懃告示、一事以上准勅施行、〇丙戌、勅頒三十二條於巡察使、事具別勅、因勅曰、凡頃聞、諸國郡官人等、不行法令、空置卷中、無畏憲章、擅求利潤、公民蔵弊、私門日增、朕之股肱、豈合如此、自今以後、宜依頒條、每四考終、必加訪察奏聞、卽隨善惡、黜陟其人、遂令涇渭殊流、賢愚得所、若有巡察使諂曲爲心、昇降失理、當寘法律、以明勸沮、無偏無黨、淸風肅俗、拔自常班、處以榮秩、宜告所司知朕意焉、又口勅十三條、具在別勅、又勅曰、爲撿天下諸國政績治不、今差巡察使、分道發遣、但比年以來、所任使人、訪察不精、黜陟有濫、吏民由是未肅、風化所以尚壅、故今具定事條、仰令巡撿、唯恐官人不練明科、多犯罪愆、還陷法網、仍垂非常之恩、特開自新之路、其國郡官司、雖犯謀反大逆、常赦所不免、咸悉除免、一切勿論、但情懷奸僞、不肯吐實、使人存意、再三喩示、若是固執、猶不首伏者、依法科罪、普天

〇八道、京畿七道なり
〇勿論、原本勿を而に作る金本淀本に據て改む
〇勘獲、原本獲を權に作る金本閣本等に據て改む勘獲は勘は鞠囚也とありて取調べらるゝをいひ獲は捕はるゝを云
〇三十二條、三代格に載せず他に所見なし
〇空置卷中、空しく卷帙の中に置て實施せざる意なるべし又字書に官文書之存檔以備撿査者亦曰卷とあればその意にもあるべきか
〇每四考終、寶字四年國司交替の年限を六年と改められしが當時は四年なりし故に四考終る每に云々と云り
〇涇渭殊流、毛詩邶風谷風章に涇以渭濁、毛傳に涇渭相入而淸濁異とあり之に據れり
〇以明勸沮、原本沮を但に作る金本皆本淀本に據て改む勸は進むる也沮は止むる也善良なるは昇進せしめ濁惡なるは沮止するを云
〇無偏無黨、尙書洪範に

無偏無黨王道蕩々と見ゆ　〇淸風肅俗、風俗を肅淸ならしむるを云　〇拔自常班、普通の位地より拔擢するを云　〇口勅十三條、今詳ならず　〇倘塡、塡は諸本㙒に作る考證の説に據て改む塡は塡塞して通ぜざるを云　〇故今、原本改令に作る金本閣本曾本淀本に據て改む　〇不練刑科、法律に練達せざるを云　〇非常之恩、原本恩を思に作る金本閣本曾本淀本に據て改む　〇開自新之路、原本新を訴に作る、自新とは罪に問はずして自ら心を改め、正に赴かしむるを云　〇罔執、原本罔を因に作る金本に據て改む　〇口勅五條、是も詳ならず

（十月）道慈法師卒、僧綱補任に道慈者三論宗義淵僧正弟子也とあり傳は懷風藻及元亨釋書にも見ゆ　〇（註）天平元年云々、疑くは後人の傍書なり　〇額田氏、姓氏錄に皇別に額田首あり神別に額田部湯坐連、額田部宿禰等あれば其何れなるか明ならず　〇三論、三部論を以て本據とす故に三論宗と名く三部とは龍樹の作中論四卷提婆の作百論二卷龍樹の作十二門論一卷是なり宗祖は文殊を高祖とし馬鳴を次祖とし次は龍樹なり支那にては嘉祥最も弘く之を流布せしむ嘉祥は

率土宜知於懷焉、又口勅五條、語具別記、〇己丑、詔曰、今聞、僧綱任意用印、不依制度、宜令進其印置大臣所、自今以後、一依前例、僧綱之政、亦申官待報、給鎭西府驛鈴二口、

〇冬十月庚寅朔辛卯、律師道慈法師卒、天平元年爲律師、法師、俗姓額田氏、添下郡人也、性聰悟、爲衆所推、大寶元年、隨使入唐、涉覽經典、尤精三論、養老二年歸朝、是時釋門之秀者、唯法師及神叡法師二人而已、著述愚志一卷、論僧尼之事、其略曰、今察日本素緇行佛法軌模、全異大唐道俗傳聖教法則、若順經典、能護國土、如違憲章、不利人民、一國佛法、万家修善、何用虛設、豈不愼乎、弟子傳業者、于今不絶、屬遷造大安寺於平城、勅法師勾當其事、法師尤妙工巧、構作形製、皆稟其規摹、所有匠手、莫不歎服焉、卒時年七十有餘、〇乙未、左大臣家令正六位上余義仁授外從五位下、〇庚

子、太上天皇行幸珍努及竹原井離宮。○辛丑、賜郡司十四人爵一級、高年一人六級、三人九級、行所經大鳥和泉日根三郡百姓年八十以上男女穀人有差。○壬寅、太上天皇還難波宮。○十一月庚申朔壬申、甲賀寺始建盧舍那佛像體骨柱。天皇親臨、手引其繩。于時種々樂共作、四大寺衆僧僉集。襯施各有差。○癸酉、太上天皇幸甲賀宮。○丙子、太上天皇自難波至。○庚辰、授正五位上藤原朝臣八束正五位下、紀朝臣清人並從四位下、外從五位下大宅朝臣君子、田邊史難波並從五位下。○十二月己丑朔庚寅、有星孛於將軍。○壬辰、令天下諸國藥師悔過七日。○丙申、度一百人、此夜於金鍾寺及朱雀路燃燈一万坏。

續日本紀卷第十五

高麗の惠灌に三論を授け惠灌我國に來て此宗を傳ふ惠灌より福亮に亮より智藏に、藏より道慈に傳ふ ○愚志、諸書目に見えず ○大唐、原本唐を道に作る金本督本淀本に據て改む ○遷造大安寺、此事緣起に詳なり ○規摹、原本規模に作る閣本淀本に據る ○珍努、和泉志に茅渟宮在日根郡上鄉中村云々天平十六年帝幸珍努離宮卽此とあり ○竹原井離宮、河內國大縣郡(今の中河內郡)にあり養老元年二月紀に見ゆ (十一月)甲賀寺、近江國甲賀郡に在り上に出づ ○始建、要錄建を造に作る ○僉集、金本督本淀本僉を會に作る ○襯施、金本襯を儭に作る釋氏要覽に梵語達襯拏此云財施今略達拏但云襯五分律云食後施衣物名達襯と見え布施を云るを云 ○甲賀宮、紫香樂宮なり (十二月)孛於將軍、將軍は二十八宿の婁宿の北に天大將軍あり之を云るか孛は星の光の熾なるを云 ○藥師悔過、類史に據れば藥師悔過此に始まれり ○金鍾寺、要錄に天平五年癸酉公家爲良弁創立羂索院號古金鍾寺と見ゆ大和志に東大寺法華堂俗呼三月堂舊名金鍾寺と見え、其他和漢三才圖會、靈異記、三國佛法傳通緣起等に詳に記す

【天平十七年】乍遷新京、新京は紫香樂宮なり去年二月難波宮を以て皇都と爲すと勅し給ひしが更に又紫香樂宮を都とせられし故に忽ち遷ると記せるなるべし
○伐山開地云々、十六年八月紀を參照すべし
○牆、牆金本閣本及紀略墻に作る墻は牆の俗字
○樹大楯槍、楯槍を樹つるは上古より物部氏の職掌にて大伴氏の掌る所にあらずされど其人無きを以て假に大伴、佐伯をして之を行はしめられしなり
○阿貴王、天平元年三月甲午紀に阿紀王に作る
○屋主、十二年十一月甲辰既に從五位上に叙す

續日本紀卷第十六

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平十七年正月盡天平十八年十二月

天璽國押開豐櫻彥天皇　聖武天皇

十七年春正月己未朔、廢朝、乍遷新京、伐山開地、以造宮室、垣牆未成、繞以帷帳、令兵部卿從四位上大伴宿禰牛養、衞門督從四位下佐伯宿禰常人、樹大楯槍、〔石上榎井二氏倉卒不及追集、故令二人爲之、〕是日、宴五位已上於御在所、賜祿有差、○乙丑、天皇御大安殿、宴五位已上、詔授從四位上大伴宿禰牛養從三位、從五位下阿貴王從五位上、无位依羅王從五位下、從四位上藤原朝臣仲麻呂正四位上、正五位下阿倍朝臣沙彌麻呂、藤原朝臣清河、並正五位上、從五位上石川朝臣麻呂、紀朝臣宇美、並正五位下、從五位下三國眞人廣庭、多治比眞人屋主、藤原朝臣許勢麻呂、並從五位上、外從五位下紀朝臣廣名、紀朝臣男楫、正六位上石川朝臣名人、縣犬養宿

○須奈保、東大寺文書に天平十七年四月廿一日大藏省移文に從五位下行少丞縣犬養宿禰須奈保と見ゆ之と合へり
○古麻呂、萬葉胡麻呂に作る
○德足、萬葉德太理に作る
○難、姓氏錄に見えず寶龜八年三月紀百濟箪篌師正六位上難金信見ゆ同姓なるべきも出自詳ならず
○楢原造、勝寶二年三月戊戌勤君の姓を賜はる
○中臣小殿連、諸史に見えず
○槻本連、天武紀朱鳥元年六月己巳朔槻本村主勝麻呂賜姓曰連と見ゆ玄道翁曰天平八年七月廿九日内侍司牒云從八位上志我采女槻本連若子見ゆ
○熊野直、國造本紀に熊野國造志賀高穴穗朝御世饒速日命五世孫大阿斗足尼定賜國造とあり錄山城神別熊野連石上朝臣同祖とあるは同族なり
○粟凡直、神護景雲元年三月紀及延曆二年十二月甲辰並に阿波國人粟凡直見ゆ
○氣太、十九年十月紀に

爾須奈保、大伴宿爾古麻呂、大伴宿爾家持、並從五位下、外從五位上宗形朝臣赤麻呂外正五位上、外從五位下巨勢斐多朝臣嶋村、高丘連河內、並外從五位上、正六位上路眞人野上、粟田朝臣堅石、大伴宿爾名負、太朝臣德足、鴨朝臣石角、布勢朝臣多爾、難福子、田邊史高額、楢原造東人、並外從五位下、又授无位衣縫女王、石川女王、秦女王、並從四位下、无位久米女王、氷上女王、岡田女王、巨勢女王、並從五位下、外從五位上佐味朝臣稻敷、外從五位下縣犬養宿爾八重、无位中臣朝臣眞敷、並從五位下、外從五位上尾張宿爾小倉、黃文連許志、朝倉君時、小槻山君廣虫、並外正五位下、无位中臣小殿連眞庭、外從五位下箭集宿爾堅石、並外從五位上、正六位上槻本連若子、正六位下熊野直廣濱、粟凡直若湯坐宿爾繼女、氣太十千代、飯高君笠目、无位大石村主廣嶋、古仁染思、上部眞善、忍海連伊賀虫、古仁虫名、粟栖史多爾女、茨田宿爾弓束、並外從五位下、宴訖賜祿有差、百官主典已上、於朝堂賜饗祿、亦有差、○己卯（廿一）、詔以行基法師爲大僧正、○二月己丑朔壬子（廿四）、以從五位下佐伯宿爾毛人爲伊

外從五位下氣太十千代等八人賜氣太君姓と見ゆ ○大石村主、錄左京諸蕃に大石高丘宿禰同祖廣陵高穆之後也とあり勝寶二年正月紀に大石村主眞人見え萬葉には生石村主眞人に作る ○古仁、考證に東國通鑑有百濟人古尒萬年、注云古尒複姓と云り ○上部、天智紀に高麗人上部大相可婁見ゆれば高麗人の裔なるべし ○伊賀虫、金本賀を加に作る ○栗栖史、錄右京諸蕃に栗栖首文宿禰同祖王仁之後也又和泉諸蕃に栗栖直後漢靈帝三世孫阿智王之後也とあり栗栖史は何れの同族なるか詳ならず ○茨田宿禰弓束、十九年六月辛亥紀に賜茨田弓束宿禰姓と見ゆれば追書せるなり ○大僧正、略記一代要記等に據れば大僧正の職此に昉れり元亨釋書にも此任始于行基と云々と見ゆ

(四月)寺東山、曾本從本に寺の字なし狩谷氏は寺疑市と云 ○三室王卒、天平十五年五月紀に御室王敍位の事見ゆるのみ ○伊賀國、原本賀を勢に作る金本閣本等及類史に據て改む ○眞木山、伊賀國阿拜郡に在り神名式に眞木山神社見え眞木山村にあり此地なるべし ○大丘野、考證に黑河氏曰近江國甲賀郡水口舊名大岡瀨光行海道記作大岳今有大岡寺云々郎此と云り ○徵鹽燒王、十四年九月伊豆國三嶋に配流せられしを召還されしなり ○大原眞人門部卒、天平三年正月紀敍位の事見ゆるのみ

勢守、正五位下大伴宿禰兄麻呂爲美濃守、

○夏四月戊子朔、市西山火、○庚寅、寺東山火、○甲午、散位從四位下三室王卒、○乙未、伊賀國眞木山火、三四日不滅、延燒數百餘町、卽仰山背伊賀近江等國、撲滅之、○戊戌、宮城東山火、連日不滅、於是都下男女競往臨川埋物焉、天皇備駕欲幸大丘野、○庚子、夜微雨、火乃滅止、○壬寅、徵鹽燒王令入京、○庚戌、大藏卿從四位上大原眞人門部卒、○壬子、正六位上託陁眞玉、養德畫師楯戸弁麻呂、葛井連諸會、茨田宿禰枚麻呂、丹比間人宿禰和珥麻呂、正七位下國君麻呂、並授外從五位下、○甲寅、詔、依巡察使上奏、原免天下諸國去年田租、又緣有所念、大赦天下、其自天平十七年四月廿七日昧爽以前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸悉赦除、但犯八虐入罪死者、免死長禁、私

鑄錢及從者、著鈦長役鑄錢司、强盜竊盜、常赦所不免、不在赦限、其流人到配所者、准此簡擇、特令會恩、是日、通夜地震三日三夜、美濃國櫓館正倉、佛寺堂塔、百姓廬舍觸處崩壞、○乙卯、散位正四位下春日王卒、

○五月戊午朔、地震、○己未、地震、令京師諸寺、限一七日、轉讀最勝王經、筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向七國、无姓人等、賜所願姓、是日、太政官召諸司官人等、問以何處爲京、皆言、可都平城、○庚申、地震、遣造宮輔從四位下秦公嶋麻呂、令掃除恭仁宮、○辛酉、地震、遣大膳大夫正四位下栗栖王於平城藥師寺、請集四大寺衆僧、問以何處爲京、僉曰、可以平城爲都、○壬戌、地震、日夜不止、是日、車駕還恭仁宮、以參議從四位下紀朝臣麻路爲甲賀宮留守、○癸亥、地震、車駕到恭仁京、泉橋、于時、百姓遙

○養德畫師、倭畫師なり私記に師ト脱名字、靈龜元年五月改畫師忍海勝姓、爲倭畫師、恐忍勝乎と云り　○枚麻呂、原本枚を牧に作る金本に據て改むべし　○國君麻呂、寶字五年六月紀に國中連公麻呂に作れり百濟歸化人なり　○大赦、金本閣本曾本及紀略に大の字なし　○廿七日、原本七を四に作る金本曾本淀本に據て改む此月戊子朔なれば廿七日は甲寅なり　○見徒、原本徒を從に作る金本閣本淀本に據て改む　○入罪死、原本入の字なし金本淀本に據て補ふ閣本曾本等八に作るは入の訛なり　○從者、原本徒者に作る諸本に據て改む　○著鈦、獄令に凡流徒罪居作者皆著鈦若盤枷、有病聽脫とあり鈦は刑具なり倭名抄刑罰具に漢書注云鉗（和名加奈岐）以鐵束頸也野王按鈦（和名同上）脛沓也類聚名義抄に鈦カナキ、クビカシ鈦カナキ鈦カナキとあり又字書に鉗也在頸曰鉗在足曰鈦と見え鈦は足かせなり原本鈦を駄に作る諸本に據て改む　○櫓館、字書に櫓はヤグラ城上守禦望樓、館は客舍也とあり　○春日王卒、紹運錄に施基皇子男光仁帝弟と見ゆ

（（五月））戊午朔、玄道翁曰按斯年四月十七日中宮職解云來五月廿九箇日料粮米爲小盡可知　○秦公、十四年八月紀に太秦公の姓とあり秦の上太の字あるべきなり　○爲都、閣本都を京に作る　○泉橋、十四年八月紀に宮城以南大路西頭與甕原宮東之間令造大橋とある是なり山城國相樂郡水泉（以豆美）鄕にあるに由りて泉橋と名く山城志に木津渡舊名泉橋在相樂郡木津莊と云

○共稱萬歲、原本稱を請に作る金本曾本淀本に據て改む萬歲は皇極紀元年八月紀にはヨロコビテと訓り此も天顏のうるはしきを拜して祝ひ奉るなり
○淨人、釋氏要覽に毗奈耶云由作淨業故名淨人或云使人とあり寺に仕して未だ出家せず衆僧に給仕する人
○大集經、三藏聖教目錄に大方等大集經三十卷北涼天竺三藏曇無讖譯とあり
○充斥、原本斥を片に作る淀本及類史に據て改む左傳襄三十一年に寇盜充斥、杜注に充滿斥見言其多とあり
○松林倉廩、松林は元年十二月紀に見ゆ考證に按神護二年二月紀云募運近江國近郡稻穀五萬斛貯納於松倉蓋此と云り
○給春秋服、此事祿令に見えたり
○給乳母王、祿令に凡皇親年十三以上皆給時服料春云々秋云々、其給乳母王者云々と見え義解に謂二世王とあり親王の子にして關係殊に深きを以て他の皇親に比し

望車駕、拜謁道左、共稱万歲、是日、到恭仁宮、○甲子、地震、遣右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂、掃除平城宮、時諸寺衆僧率淨人童子等、爭來會集、百姓亦盡出、里無居人、以時當農要、慰勞而還、○乙丑、地震、於大安、藥師、元興、興福四寺、限三七日、令讀大集經、自四月不雨、不得種藝、因以奉幣諸國神社、祈雨焉、○丙寅、地震、發近江國民一千人、令滅甲賀宮邊山火、○丁卯、地震、讀大般若經於平城宮、是日、恭仁京市人徙於平城、曉夜爭行、相接無絕、○戊辰、奉幣帛於諸陵、是時甲賀宮空而無人、盜賊充斥、火亦未滅、仍遣諸司及衛門衛士等、令收官物、是日、行幸平城、以中宮院、爲御在所、舊皇后宮爲宮寺也、諸司百官各歸本曹、○癸酉、地震、○乙亥、地震、天皇親臨松林倉廩、賜陪從人等穀有差、○壬午、制、无位皇親給春秋服者、自今已後、上日不滿一百四十、不在給例、計上日七十給春夏服秋冬亦如之但給乳母王、不在此限、又據格、承嫡王者、直得王名、不在給服之限、是月地震異常、往往坼裂、水泉涌出、○六月庚寅、遣左衛士督從四位下佐伯宿禰淨麻呂、奉幣帛于伊勢大神宮、○辛卯、復置大宰府、以從四位下石川朝臣加

て優遇せらるゝなり
○據格、慶雲三年二月格にて文武紀に見ゆ
(六月)大神宮、原本大を太に作る金本及類史に據て改む下同じ
○復置大宰府、十四年正月辛亥廢して此に至りて復置く原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ
○加美、金本加を賀に作る
○樹宮門之大楯、是乃ち平城を以て皇都と定めたるによれり
(七月)大宅朝臣諸姉卒、天平九年二月叙位のこと見ゆるのみ
(八月)五百嶋、五の字は金本淀本に據て補ふ
○無遮大會、持統天皇卽位前紀(紀下三一六頁)に見ゆ
○山形女王薨、他に所見なし
(九月)鈴鹿王薨、紹運錄に長屋王の弟とあり和銅三年正月甲子紀に始見天平三年八月丁亥參議天平九年九月己亥知太政官事となる
○爲美作守、爲の字は金本閣本等に據て補ふ

美爲大貳、從五位上多治比眞人牛養、外從五位下大伴宿禰三中並爲少貳。○庚子、筑前國宗形郡大領外從八位上宗形朝臣與呂志授外從五位下。是日、樹宮門之大楯。○秋七月庚申、遣使祈雨焉。○壬申、地震。○癸酉、地震。○戊寅、典侍從四位上大宅朝臣諸姉卒。○八月己丑、給大宰府管內諸司印十二面。○甲午、從五位下中臣熊凝朝臣五百嶋除中臣爲熊凝朝臣。○庚子、設無遮大會於大安殿焉。○己酉、地震。○壬子、正三位山形女王薨。淨廣壹高市皇子之女也。○癸丑、行幸難波宮。以中納言從三位巨勢朝臣奈氏麻呂、藤原朝臣豐成爲留守。○甲寅、地震。○九月丙辰、地震。○戊午、知太政官事兼式部卿從二位鈴鹿王薨。高市皇子之子也。以正五位上橘宿禰奈良麻呂爲攝津大夫。正五位下百濟王全福爲尾張守。外從五位下田邊史高額爲參河守。民部卿正四位上藤原朝臣仲麻呂爲兼近江守。從五位下縣犬養宿禰須奈保爲丹後守。從五位下大原眞人麻呂爲美作守。外從五位下井上忌寸麻呂爲紀伊守。正五位下紀朝臣宇美爲讃岐守。外從五位下車持朝臣國人爲伊豫守。外

○殺一切宍、以文曰殺疑當レ作レ食さ逆本傍書にイ无さあり宍の字は金本逆本に據る
○罹罪、原本罹を羅に作る金本逆本に據て改む集韻に罹羅通さあれば羅にてもよし
○疹疾、原本疹を瘵に作る金本曾本逆本に據て改む閣本は疢に作る字書に疹は疢の俗字さあり疢は病也疢に久病さあればいづれにても通ず
○中臣朝臣名代卒、神龜五年五月丙辰始見、天平四年八月丁亥遣唐副使、後神祇伯となる
○藥師悔過、原本過を遇に作る諸本及紀略に據て改む
○松尾、神名式に山城國葛野郡松尾神社二座、今葛野郡松尾村にあり
○合一百部、要錄合を名に作る
○藥師佛像、佛の字は金本曾本逆本及紀略要錄に據て補ふ
○七卷、紀略卷を局に作る

從五位上文忌寸馬養為筑後守。○丁卯、以從五位上巨勢朝臣堺麻呂為式部少輔。○己巳、禁斷三年之內天下殺一切宍。○辛未、勅、朕頃者枕席不安、稍延旬日。以為、治道有失、民多罹罪。宜可大赦天下。常赦所不免、咸赦除之。其年八十以上、及鰥寡惸獨、幷疹疾之徒、不能自存者、量加賑恤。○壬申、從五位下藤原朝臣乙麻呂為兵部少輔、從五位上佐味朝臣虫麻呂為越前守。○癸酉、散位從四位下中臣朝臣名代卒。天皇不豫。勅平城恭仁留守、固守宮中。悉追孫王等、詣難波宮。遣使取平城宮鈴印。又令京師畿內諸寺及諸名山淨處、行藥師悔過之法。奉幣祈賀茂松尾等神社。令諸國所有鷹鵜、並以放去。度三千八百人出家。○甲戌、令播磨守正五位上阿倍朝臣虫麻呂奉幣帛於八幡神社。令京師及諸國寫大般若經合一百部。又造藥師佛像七軀高六尺三寸、幷寫經七卷。○丙子、中納言從三位巨勢朝臣奈氐麻呂等言、巨勢朝臣等久時所訴奴婢二百三人、今既停訴、請欲從良。許之。○丁丑、平城中宮請僧六百人、令讀大般若經。○己卯、車駕還平城。是夕宿宮池驛。○庚辰、至平城宮。○冬十月

○今既停訴、停は金本曾本淀本に據て補ふ　○請欲從頁、原本從を徙に作り欲の字なし金本曾本淀本に據て補訂す　○宮池驛、難波と平城の中間にあること明かなれど其地今詳ならず吉田氏地名辭書高安郡三宅鄕の條に此鄕今詳ならず蓋南高安村恩智にあたるごとし宮池驛亦是歟と云り　(十月)論定、狩谷校本に論疑當作詔と云り　○並不入限、此限にあらずの意、考證に限上疑脫此字といひ或は入の上に在の字ありと云ろ說あれど此まゝにて通ず　○古市郡、抄國郡部に河內國古市(不留知)郡古市鄕あり今南河內郡古市村是なり　(十一月)遣玄昉法師云々、大日本史に遣玄昉造觀世音寺實竄之也とあり十八年六月己亥紀に徙所に死するとあるにて配流せられしこと明なり　○隱岐、金本曾本淀本岐を伎に作る次の壹岐も亦同じ　○官物欠負、寶字元年十月乙卯紀に凡國司處分公廨式者惣計當年所出公廨先塡官物之欠負未納と見ゆ官物欠負とは官物を欠失し辨償すべくして未だ辨償せざるを云　○停止仕丁之廝、十八年五月丙子紀に令諸國依舊進仕丁之廝と見え賦役令に凡仕丁者每五十戶二人、以一人充廝丁、義解に廝丁給使於汲炊也とあり今の小者を云　【天平十八年】栗隈王、原本栗を粟に作る金本閣本曾本に據て改む栗隈王は紹運錄に敏達天皇曾孫難波皇子之孫大保王之子

戊子、論定諸國出擧正稅、每國有數、但多褹對馬兩嶋者、並不入限、○辛亥、河內國司言、右京人尾張王、於部內古市郡古市里田家庭中、得白龜一頭、長九分、闊七分、兩目並赤、○十一月乙卯、遣玄昉法師造筑紫觀世音寺、○己巳、宴五位已上於內裏、賜祿有差、但年七十以上、別加賜被、○庚午、收僧玄昉封物、○庚辰、制、諸國公廨、大國四十万束、上國三十万束、中國二十万束、就中、大隅薩摩兩國各四万束、下國十万束、就中、飛驒、隱岐、淡路三國、各三万束、志摩國、壹岐嶋、各一万束、若有正稅數少、及民不肯擧者、不必滿限、其官物欠負未納之類、以玆令塡、不許更申、又令諸國停止仕丁之廝、○十二月戊戌、運恭仁宮兵器於平城、

十八年春正月癸丑朔、廢朝、○丙寅、地震、○己卯、正三位牟漏女王薨、贈從二位栗隈王之孫、從四位下美努王之女也、○庚辰、右京人上部乙麻

也さあり
○美努王之女、錄左京皇別橘朝臣の條に美努王娶縣犬養橘宿禰三千代大夫人生左大臣云々贈從二位牟漏女王とあり、橘諸兄の妹なり
○大辛、錄右京未定雜姓に大辛天押立命四世孫劍根命之後とあり
○一產三女、紀略三女の上に三男の二字あり
（二月）騎舍人、蒲生氏職官志に騎舍人未詳置何世、蓋今改其職入名爲授刀舍人而授刀舍人不復言其綠則奪已廢以其舍人隸之諸衞府猶如衞士分隸三府歟と云り
（三月）古慈斐、原本慈を惑に作る今本闕本會本註本に據て改む
○瑞圖、瑞の下恐くは應字を脫す熊氏瑞應圖養老七年十月乙卯紀に見ゆ
○德澤洽、養老七年十月紀に孝經援神契曰天子孝則天龍降地龜出、熊氏瑞應圖曰王者不偏不黨尊用耆老不失故舊德澤流洽則靈龜出とあり、原本洽を治に作る今本會本註本に據て改む

呂之妻大辛刀自賣一產三女、給正稅四百束。○辛巳、地震、夜亦震。○壬午、地震。○二月己丑、改騎舍人爲授刀舍人。○三月丁巳、以正四位上藤原朝臣仲麻呂爲式部卿、從四位下紀朝臣麻呂爲民部卿、外從五位上秦忌寸朝元爲主計頭。○己未、外從七位下出雲臣弟山授外從六位下、爲出雲國造。○勅曰、朕君臨四海、憂勞兆民、未致隆平、稍有慙德、專得治部卿從四位上石上朝臣乙麻呂等奏偁、正五位下河內國守大伴宿禰古慈斐解偁、於所部古市郡內、右京人尾張王獲白龜一頭、長闊短小、形象異常者、謹撿瑞圖及援神契云、王者德澤洽則神龜來、孝道行則地龜出、實合大瑞者、斯蓋乾坤垂福、宗社降靈、河洛呈祥、幽明協度、祇對天貺、喜懼交懷、孤以薄德、何堪忝受、百官共悅、良當朕意、宜天下六位以下皆加一級、孝子順孫、義夫節婦、及力田者二級、唯正六位上免當戶今年租、其進龜人、特叙從五位下、賜物准例、出龜郡者、免今年租調。○壬戌、以正五位上平群朝臣廣成爲式部大輔、正五位上橘宿禰奈良麻呂爲民部大輔、正五位下石川朝臣麻呂爲宮內大輔、從五位下大伴宿禰家持爲

○河洛呈祥、伏犧氏の天下に王たりし時龍馬圖を負て河より出で禹の水を治めし時背に文を負へる龜洛水より出でしを云
○幽明協度、神と人と協和して謀を合するを云原本協を揚に作る金本閣本に據て改む
○奈良麻呂、原本良を郎に作る金本閣本曾本に據て改む
○福田、福德の生ずること田に物の生ずるが如くなるを云、佛法を隆盛にすれば國家の康福大に生來すべしとなり
○茂典、盛典と云に同じ
○情感寛仁、心に寛仁ならしめむと感ずるを云
○事深隱惻、惻は愴也痛也とあり事實に於て深く痛ましと思ふ心に堪へ兼ぬるを云
○寺家買地、五月庚申の條を參看すべし
○占買、原本買を賣に作る金本及類史に據て改む
○中臣鹿嶋連、鹿嶋大宮司系圖に天兒屋根命十世孫臣狹山命□狹山彥中臣鹿嶋連初祖也とあり
（四月）乙酉、原本己酉に作る此月壬午朔なれば

少輔。○丁卯。勅曰。興隆三寶。國家之福田。撫育万民。先王之茂典。是以爲令皇基永固。寶胤長承。天下安寧。黎元利益。仍講仁王般若經。於是伏聞其教。以慈爲先。情感寛仁。事深隱惻。宜天平十八年三月十五日昧爽以前。大辟以下。罪無輕重。未發覺。已發覺。未結正。已結正。繫囚見徒。咸赦除之。但八虐。故殺人。謀殺殺訖。私鑄錢。強竊二盜。常赦所不免者。不在赦限。○戊辰。太政官處分。凡寺家買地。律令所禁。比年之間。占買繁多。於理商量。深乖憲法。宜令京及畿內嚴加禁制。以從四位上三原王爲大藏卿。○丙子。常陸國鹿嶋郡中臣部二十烟。占部五烟。賜中臣鹿嶋連之姓。○夏四月乙酉。以從五位下甘南備眞人神前爲刑部大輔。外從五位下大養德宿禰小東人爲攝津亮。從五位下百濟王敬福爲上總守。從四位上石上朝臣乙麻呂爲常陸守。正五位下石川朝臣年足爲陸奥守。○丙戌。以左大臣從一位橘宿禰諸兄爲兼大宰帥。中納言從三位藤原朝臣豐成爲兼東海道鎭撫使。參議式部卿正四位上藤原朝臣仲麻呂爲兼東山道鎭撫使。中納言從三位巨勢朝臣奈氐麻呂爲兼北陸山陰兩

己酉なし類史に據て改む乙酉は四日なり
○爲兼東山道鎭撫使、爲の字は金本閣本習本に據て補ふ
○兼山陽道、狩谷校本に山陽下一有西海兩三字と云り
○刑部卿、原本刑を形に作る金本淀本に據て改む
○小野朝臣綱手、原本綱を網に作る金本習本淀本に據て改む下同じ網は綱の俗字なり
○諱、光仁天皇を申す
○伊香王、勝寶三年十月丙辰甘南備眞人の姓を賜はり寶字三年閏六月乙巳に甘南備眞人伊香と稱し越中守と爲る
○紀朝臣麻路、原本紀を糺に作る金本閣本淀本に據て改む閣本淀本路を呂に作る

道、鎭撫使、參議從三位大伴宿禰牛養、爲兼山陽道、鎭撫使、參議從四位下紀朝臣麻呂、爲兼南海道、鎭撫使、○壬辰、以正五位下百濟王孝忠爲左中弁、從四位下大市王、爲內匠頭、從五位下紀朝臣廣名、爲大學頭、從四位上安宿王、爲治部卿、從五位下多治比眞人土作、爲民部少輔、從四位下多治比眞人廣足、爲刑部卿、從四位上船王、爲彈正尹、外從五位下大伴宿禰三中、爲長門守、從五位下紀朝臣男梶、爲大宰少貳、○庚子、以從五位下小田王、爲因幡守、○壬寅、以從五位下依羅王、爲大炊頭、外從五位下鴨朝臣石角、爲主殿頭、外從五位下小野朝臣綱手、爲上野守、○癸卯、授正四位上藤原朝臣仲麻呂從三位、正四位下智努王正四位上、從四位上三原王正四位下、從四位下諱從四位上、從五位下小田王從五位上、无位額田部王、伊香王、山村王、並從五位下、從四位上石上朝臣乙麻呂正四位下、從四位下紀朝臣麻路從四位上、正五位上多治比眞人占部、阿倍朝臣沙彌麻呂、藤原朝臣淸河、正五位下大伴宿禰兄麻呂、並從四位下、正五位下石川朝臣年足正五位上、從五位上多治比眞人

○藤原朝臣宿奈麻呂、良繼の初名なり補任に見ゆ
○大鳥連、錄和泉神別大鳥連大中臣朝臣同祖天兒屋根命之後とあり
○壬生使主、原本壬を王に作る閣本淀本に據て改む
○中臣丸連、神護二年四月乙酉姓朝臣を賜はる延曆七年五月庚午紀には中臣丸連淨兄見ゆ
○出雲臣屋麻呂、十九年六月辛亥紀に此人臣姓を賜はれること見ゆされば此に臣とあるは追書なり
○清原連清道、下の清の字は諸本に據て補ふ勝寶五年四月癸巳淨道に作る

國人正五位下、從五位下粟田朝臣馬養從五位上、外從五位下大伴宿禰麻呂、田口朝臣三田次、爲奈眞人馬養、粟田朝臣堅石、當麻眞人廣名、紀朝臣可比佐、大伴宿禰三中、大伴宿禰名負、大伴宿禰百世、路眞人宮守、引田朝臣虫麻呂、下毛野朝臣稻麻呂、太朝臣德足、路眞人野上、車持朝臣國人、高橋朝臣國足、鴨朝臣石角、穗積朝臣老人、布勢朝臣多禰、大伴宿禰犬養、笠朝臣蓑麻呂、小野朝臣東人、小野朝臣綱手、紀朝臣必登、鴨朝臣角足、正六位下藤原朝臣宿奈麻呂、正六位上阿倍朝臣毛人、波多朝臣足人、佐伯宿禰濱足、坂合部宿禰金綱、采女朝臣人、阿曇宿禰大足、中臣朝臣益人、縣犬養宿禰古麻呂、正六位下巨勢朝臣君成、正六位上大神朝臣麻呂、佐伯宿禰全成、大養德忌寸佐留、並從五位下、正六位上津史馬人、大鳥連大麻呂、船連吉麻呂、土師宿禰牛勝、壬生使主宇太麻呂、中臣丸連張弓、出雲臣屋麻呂、清原連清道、並外從五位下、○己酉、勅、一位以下、初位以上、馬從多數甚無制度、其一位十二人、二位十人、三位八人、四位六人、五位四人、六位以下二人、自今已後、永爲恒式、但職事

○馬從、車馬從者を云ふ、天武紀八年十月勅制二馬從者併・乘輿之状一と見ゆ
○其一位云々、彈正式に見ゆ
（五月）戊午、金本會本從本午を子に作るは非なり
○菅生朝臣、朝臣の二字は諸本に據て補ふ
○河内、原本河を阿に作る諸本に據て改む
○禁爲寺地、三月戊辰に寺家の土地を買占むることを禁ぜられしが更に此制ありしなり
○進仕丁之廝、十七年十一月庚辰停止せしを是に至て舊に服せるなり
（六月）僧玄昉死、原本昉を肪に作る諸本に據て改む下同じ玄昉が傳は元亨釋書十六に出づ
○阿刀氏、鎌山城神別に阿刀宿禰石上朝臣同祖とあり又阿刀連もあり
○靈龜二年入唐學問、佛祖統紀に玄宗開元四年日本國遣二沙門玄昉一入二中國一求法と見ゆ開元四年は當に靈龜二年なり
○紫袈裟、事物紀原に則天朝僧法朗云々皆賜二紫袈裟一則僧之賜紫自二天

一位二位、不在此例、○五月癸丑、從四位下紀朝臣清人爲武藏守、○戊午、外從五位上菅生朝臣古麻呂、巨勢斐太朝臣嶋村、物部依羅朝臣人會、高丘連河内、外從五位下楢原造東人、小治田朝臣諸人、民忌寸眞楫、並授從五位下、○庚申、禁諸寺競買百姓墾田及園地永爲寺地、○丙子、令諸國依舊進仕丁之廝、○六月丙戌、地震、○壬辰、從五位下高丘王授從四位下、无位大養徳宿禰麻呂女從五位下、○己亥、僧玄昉死、玄昉、俗姓阿刀氏、靈龜二年、入唐學問、唐天子尊昉、准三品令著紫袈裟、天平七年、隨大使多治比眞人廣成還歸、齎經論五千餘卷及諸佛像來皇朝、亦施紫袈裟著之、尊爲僧正、安置内道場、自是之後、榮寵日盛、稍乖沙門之行、時人惡之、至是死於徒所、世相傳云、爲藤原廣嗣靈所害、○壬寅、以從五位下石川朝臣名人爲内藏頭、從五位下引田朝臣虫麻呂爲木工頭、從五位下物部依羅朝臣人會爲信濃守、從五位下藤原朝臣宿奈麻呂爲越前守、從五位下大伴宿禰家持爲越中守、○秋七月辛亥朔、遣使於畿内祈雨焉、

○八月（庚辰朔）丁亥（八）、以從五位下伊香王爲雅樂頭、外從五位下土師宿禰牛勝爲諸陵頭、從五位下中臣朝臣益人爲主稅頭、外從五位下壬生使主宇太麻呂爲右京亮、○壬寅（廿三）、置齋宮寮、以從五位下路眞人野上爲長官、○九月庚戌朔、外從五位下秦忌寸大魚爲下野守、外從五位下客君狛麻呂爲土左守、○壬子（三）、先是縣女王爲齋王、至是發入、大臣已下送出門外、諸司亦送至京外而還、○壬戌（十三）、地震、○癸亥（十四）、以從五位下藤原朝臣宿奈麻呂爲上總守、從五位下百濟王敬福爲陸奧守、從五位下大伴宿禰駿河麻呂爲越前守、○戊辰（十九）、以從五位下紀朝臣廣名爲少納言、正五位下石川朝臣麻呂爲中務大輔、從四位下山背王爲右大舍人頭、從五位下穗積朝臣老人爲內藏頭、從五位下久勢王爲大學頭、從五位上茨田王、爲宮內大輔、從五位下多治比眞人木人爲下總守、○己巳（二十）、以正四位下

后始也とあり　○天平七年云々、多治比眞人廣成は天平七年三月丙寅歸朝す　○內道場、宮中に於て佛道を修行する所なり支那にては梁武帝天監十六年（繼體天皇十一年）始て建立す唐玄宗開元中（開元元年は和銅六年）改て眞言の道場とす我國內道場の起源は明かならず其名此に始て見えたるが或は玄昉の爲に設けられしが始めなるべきか　○徒所、徒疑くは徙字の譌か　○廣嗣靈所害、扶桑略記に玄昉法師爲大宰少貳藤原廣繼之亡靈被奪其命流俗相傳云玄昉法師大宰府觀世音寺供養之日爲其導師乘於腰輿供養之間俄自大虛捉捕其身忽然失亡後日其首落興福寺唐院と見え亦今昔物語東大寺要錄等にも見ゆ　○家持爲越中守、萬葉十七に大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中國守卽七月赴任所と見え關係の歌を多く載す

（八月）置齋宮寮、大寶元年八月紀（二四頁）を參看すべし

（九月）秦忌寸大魚、十二年十一月甲辰紀、十三年十二月丙戌紀並に秦前大魚に作る

○客君、靈龜二年九月紀（一二三頁）に出づ

○大臣已下云々、養老元年四月紀（一一六頁）を參考すべし

○從五位下百濟王云々、敬福の陸奧守たること十五年六月丁酉紀に出づ或は重任せられしか考ふべし

○麻路、閣本路を呂に作る

○大極殿、原本極を拯に作る諸本及紀略に據て改む

○施入國分寺、十五年十二月平城の大極殿を恭仁宮に移し今復都を平城に定めらるゝ故に之を毀て國分寺に施入せられしなり國分寺は東大寺を謂か或は山城の國分寺なるか詳ならず

（閏九月）鹽燒王、十四

石上朝臣乙麻呂爲右大弁、從四位下佐伯宿禰淸麻呂爲皇后宮大夫、從五位下縣犬養宿禰古麻呂爲治部少輔、從五位下藤原朝臣乙麻呂爲兵部大輔、從五位下阿倍朝臣子嶋爲少輔、從五位下巨勢妻太朝臣嶋村爲刑部少輔、從五位下紀朝臣可比佐爲大藏少輔、從五位下波多朝臣足人爲宮內少輔、從五位下多治比眞人犢養爲左京亮、正五位上平群朝臣廣成爲攝津大夫、正五位上石川朝臣年足爲春宮員外亮、從四位下紀朝臣飯麻呂爲常陸守、從五位下高丘連河內爲伯耆守、從五位上多治比眞人屋主爲備前守、從五位上粟田朝臣馬養爲筑前守、從五位下大伴宿禰百世爲豐前守、○甲戌、民部卿從四位上紀朝臣麻路、爲兼右衛士督、○戊寅、恭仁宮大極殿、施入國分寺、○閏九月乙酉、无位鹽燒王、授本位正四位下、從五位下百濟王敬福從五位上、○戊子、正六位上依羅我孫忍麻呂授外從五位下、從五位下高橋朝臣國足爲越後守、○辛卯、地震、○冬十月癸丑、日向國風雨共發、養蠶損傷、仍免調庸、○甲寅、天皇、太上天皇、皇后行幸金鍾寺、燃燈供養盧舍那佛、佛前後燈一

万五千七百餘坏、夜至一更、使數千僧令擎脂燭、贊歎供養、繞佛三匝、至三更而還宮。○丁巳、令安藝國造舶二艘。○丁卯、從四位下下道朝臣眞備賜姓吉備朝臣。○癸酉、正五位下百濟王孝忠爲大宰大貳。

○十一月壬午、以春宮員外亮正五位上石川朝臣年足爲兼左中弁、從五位下笠朝臣蓑麻呂爲中務少輔、從五位上巨勢朝臣堺麻呂爲式部大輔、從五位下大伴宿禰犬養爲少輔、從四位下石川朝臣加美爲兵部卿。○十二月丁巳、停七道鎭撫使。又京畿內及諸國兵士依舊點差。是年、渤海人及鐵利惣一千一百餘人慕化來朝、安置出羽國、給衣粮放還。

續日本紀卷第十六

年十月戊子伊豆國三嶋に配流せられ十七年四月壬寅免されて入京す　○依羅我孫、古事記開化天皇段に建豐波豆羅和氣王者依網之阿毘古之祖也とあり攝津國住吉郡大羅（於保與佐美）鄕に住みしに依て姓を命ぜしなり　（十月）金鍾寺、原本鍾を鐘に作る金本淀本及類史略記に據て改む、考證に案大佛記史前言紫香樂創佛像不載造之於東大寺疑逸文也　○佛前後燈、金本淀本佛字なし　○脂燭、抄燈火部に紙燭俗音之曾久とあり脂燭と同じ物なるべし　○贊歎、類史贊を讃に作る智度論に美其功德爲讃讃之不足又稱揚之爲歎とあり　○繞佛三匝、考證に釋氏要覽遶佛又云旋遶、此方稱行道、西域記云西天隨所宗事禮後皆須旋遶蓋歸敬之至也と云り　○安藝國造舶、推古紀廿六年にも見ゆ同國沼田郡安藝郡並に船木鄕あり蓋世々舶材を採る森林を造成せられしなるべし　○吉備朝臣、錄左京皇別に吉備朝臣太日本根子彦太瓊天皇皇子稚武彦命之後とあり

（十一月）從五位上巨勢朝臣、金本淀本上を下に作るは非なり

（十二月）諸國兵士、十一年六月癸未紀と照合すべし　○鐵利、寶龜十年九月紀に渤海及鐵利三百五十九人慕化入朝と見ゆ　續文獻通考に鐵驪亦不知其所始遼太祖天顯元年鐵驪來貢興宗重熙時授之官爲右監門衛大將軍自太祖至道宗無歳不貢至天祚始絕とあり鐵利は之に同じきか

續日本紀卷第十七

起天平十九年正月盡天平勝寶元年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天璽國押開豐櫻彥天皇

十九年春正月丁丑朔、廢朝、天皇御南苑宴侍臣、勅曰、朕寢膳違和、延經歲月、顧已推物、尙可於慈、宜大赦天下救濟憂苦、其自天平十九年正月一日昧爽已前、流罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸悉赦之、但死罪者降一等、鑄錢人首及强竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、○壬辰、國見眞人眞城、改賜大宅眞人姓、○丙申、御南苑宴、五位已上諸司主典已上賜酒肴、授正四位上智努王從三位、正四位下三原王正四位上、從四位下多治比眞人廣足從四位上、正五位上石川朝臣年足、平群朝臣廣成、正五位下大伴宿禰古慈備、正五位上橘宿禰奈良麻呂、並從四位下、正五位下石川朝臣麻呂、百濟王孝忠、紀朝臣宇

【天平十九年】鑄錢人首及、現鑄錢の首犯者を云、考證に及の下に疑脱字ありと云へど、こゝは首犯者のみにて從は赦限に入れられしか然らば無き方宜し
○所不免者、者の字は金本曾本從本に據て補ふ
○國見眞人、寶字八年十月紀に國見眞人阿曇見ゆ
○大宅眞人、續左京皇別に見ゆ敏達皇子難波王の後なり
○五位已上、考證に上一本作下と云

○黃文、此下連の字を脫せるなるべし
○葛木連、原本葛を萬に作る諸本に據て改む、錄大和神別に葛木忌寸高御魂命五世孫劒根命之後と見ゆ
○无位井上內親王、考證に位當レ作レ品と云
○難波王、以下池上王まで何れも女王なれば女の字を脫せるか
○盧郡君、考證に郡一作レ那と云
(二月)才□長上、原本才長上に作る類史才長の間に一字缺く恐くは伎字ならむ
○稅布、稅として納めたる布を云
○大倭、三月大養德國を改めて大倭國としたるをこゝに大倭とあるは追書なり
○志摩、金本淀本摩を麻に作る
(三月)小倉、原本倉を舍に作る金本會本淀本に

美、並正五位上、從五位下大伴宿禰百世、從五位上巨勢朝臣堺麻呂、並正五位下、從五位下當麻眞人鏡麻呂、阿倍朝臣嶋麻呂、藤原朝臣乙麻呂、並從五位上、外從五位下大養德宿禰小東人、正六位上縣犬養宿禰小山守、布勢朝臣宅主、大野朝臣横刀、小野朝臣田守、並從五位下、正六位上黃文伊加麻呂、池上君大歲、葛木連戶主、並外從五位下、无位井上內親王二品、无位難波王、飛鳥田王、並從四位下、无位長柄王、久勢王、池上王、並從五位下、无位藤原朝臣殿刀自授正四位上、外從五位上盧郡君從四位下、无位穗積朝臣多理從五位下、○癸卯(廿七)、制令七道諸國、沙彌尼等、於當國寺受戒、不須更入京、○二月(丁未朔)丁卯(廿一)、以去年亢旱年穀不稔、詔爲治産業、賜大臣已下諸司才□長上已上稅布幷鹽各有差、○戊辰(廿二)、大倭、河內、攝津、近江、伊勢、志摩、丹波、出雲、播磨、美作、備前、備中、紀伊、淡路、讃岐、一十五國飢饉、因加賑恤、○三月(丙子朔)戊寅(三)、命婦從五位下尾張宿禰小倉授從四位下、爲尾張國々造、○乙酉(十)、以從四位下藤原朝臣八束爲治部卿、從五位下阿倍朝臣毛人爲玄蕃頭、從五位下大伴宿禰三中爲刑

據て改む
○椅原造、伊蘇志臣同祖天道根命の後
○從五位下秦忌寸嶋麻呂、原本五を四に作る、金本に據て改む、秦忌寸は十四年八月太秦公の姓を賜ふ、舊姓のまゝなるは疑ふべし
○石川朝臣加美卒、天平三年正月紀に始見、十年閏七月中務大輔、十五年十二月鎮西府將軍、十七年六月大宰大貳、十八年十一月兵部卿となる
○改大養德國、九年十二月大倭國を改て大養德國とす、是に至て舊に復す、依舊の二字閣本金イ本にはなし
〔四月〕大神神主、狩谷校本に一本作大神神主とあるに據て補ふ、大神は神名式大和國城上郡大神大物主神社是なり
○大倭神主、大倭は神名式山邊郡大和坐大國魂神社、今磯城郡官幣大社大和神社是なり
〔五月〕丙子朔、金本丙午に作るは非なり
○太政官奏曰、賦役令集解に格の文を載せて六月一日とす、字句亦異同あり

部、大判事、從五位下額田部王、爲大藏大輔、從五位下布勢朝臣宅主、爲右京亮、從五位下椅原造東人、爲駿河守、從五位下秦忌寸嶋麻呂、爲長門守、○丙戌、以從四位下石川朝臣年足、爲春宮大夫、從四位下石川朝臣加美卒、○辛卯、改大養德國、依舊爲大倭國、○夏四月丙午朔己未、紀伊國疫旱、賑給、○丁卯、天皇御南苑、大神神主從六位上大神朝臣伊可保、大倭神主正六位上大倭宿禰水守、並授從五位下、以外從五位下葛井連諸會、爲相摸守、○五月丙子朔、以從五位下中臣朝臣益人、爲神祇大副、從五位下石川朝臣名人、爲少納言、外從五位下文忌寸黑麻呂、爲主稅頭、從五位下中臣朝臣清麻呂、爲尾張守、○戊寅、太政官奏曰、封戶人數緣有多少、所輸雜物、其數不等、是以官位同等、所給殊差、於法准量、理實不愜、請每一戶、以正丁五六人中男一人爲率、則用鄉別課口二百八十、中男五十、擬爲定數、其田租者、每一戶以卌束爲限、不合加減、奏可之、○庚辰、天皇御南苑觀騎射走馬、是日、太上天皇詔曰、昔者五日之節、常用菖蒲爲縵、比來已停此事、從今而後、非菖蒲縵者勿入宮中、

〇丁亥、地震、〇庚寅、於南苑講說仁王經、令天下諸國亦同講焉、〇辛卯、力田外正六位下前部寶公授外從五位下、其妻久米舍人妹女外少初位上、〇癸巳、近江讃岐二國飢、賑恤、

〇六月戊申、長門國守從四位下秦忌寸嶋麻呂卒、〇辛亥、正五位下背奈福信、外正七位下背奈大山、從八位上背奈廣山等八人、賜背奈王姓、外從五位下茨田弓束、從八位上茨田枚野宿禰姓、外從五位下出雲屋麻呂臣姓、〇己未、於羅城門雩、〇丁卯、從五位上多治比眞人牛養爲備後守、

參看すべし
〇不愜、原本愜を堪に作る閣本に據て改む
〇則用、考證に用字有誤集解作國一本作庸或曰用疑衍文とあり用は則と字形相似たるより起れる衍文か
〇鄉別課口、原本課を諜に作る金本晉本淀本に據て改む鄉は戸令に以五十戸爲里とある里卽是なり課口は調庸を課し得べき正丁中男を云二百八十口は一戸につき五人六分中男五十は一戸一人當りなり民部式には正丁四人中男一人を以て一戸の率とし是より減少せり　〇不合、金本晉本淀本合を令に作る　〇背者、紀略此二字なし　〇菖蒲、紀略本朝月令菖を昌に作る本草和名に昌蒲一名昌陽和名阿也女久佐とあり　〇爲縵、太政官式に五月五日是日内外群官皆著昌蒲縵とあり　〇南苑、原本苑を菀に作る諸本及類史に據て改む　〇力田、原本力を刀に作る金本閣本淀本に據て改む　〇外正六位下、原本正六を從五に作る金本に據て改む　〇前部寶公、前部は天智紀に高麗人前部能婁見ゆ之に同じ　〇久米舍人、姓氏錄に見えず天武紀十二年九月來目舍人造賜姓曰連とあり

〔六月〕秦忌寸嶋麻呂卒、天平十四年八月忌寸姓を賜ひ今年三月長門守となる
〇背奈王、養老五年正月紀（一五五頁）に出づ
〇茨田弓束、天平勝寶元年冬十月庚午茨田宿禰弓束女の宅を行宮とすと見ゆ
〇茨田枚野、原本枚を牧に作る山崎校本に據て改む
〇屋麻呂、天平九年四月六日皇后宮職牒に從八位下守少屬出雲屋麻呂と見ゆ　〇羅城門、大和志添上郡古蹟に在郡山東嘗耕田者見其礎石云々とあり　〇丁卯、原本卯を亥に作る金本晉本淀本に據て改む此月戊申朔なれば丁亥なし丁卯は廿三日なり　〇牛養、原本牛を中に作る閣イ本に據て改む　〇備後守、原本豐後に作る諸本に據て改む

〇秋七月辛巳、詔曰、自去六月、京師亢旱、由是奉幣帛名山、祈雨諸社、至誠無驗、苗稼燋凋、此蓋朕之政教、不德於民乎、宜免左右京今年田租、〇八月丙寅、賜正六位上赤染造廣足、赤染高麻呂等九人、常世連姓、〇九月乙亥、河內國人大初位下河俣連人麻呂錢一千貫、越中國人无位礪波臣志留志米三千碩、奉盧舍那佛知識、並授外從五位下、〇丙申、以從五位下縣犬養宿禰古麻呂爲少納言、從五位下路眞人野上爲大監物、從五位上佐味朝臣虫麻呂爲治部大輔、從五位下小野朝臣東人爲少輔、〇冬十月癸卯朔、日有蝕之、〇乙巳、勅曰、春宮少屬從八位上御方大野所願之姓、思欲許賜、然大野之父、於淨御原朝庭在皇子之列、而緣微過遂被廢退、朕甚哀憐、所以不賜其姓也、〇辛亥、正六位上市往泉麻呂賜岡連姓、〇乙卯、外從五位下氣太十千代等八人賜氣太君姓、〇丙辰、伊勢國人從六位上伊勢直大津等七人、賜中臣伊勢連姓、

(七月)燋凋、金本及類史凋を彫に作る凋彫通用す

(八月)赤染造、天武紀に赤染造德足見ゆ　〇常世連姓、錄左京諸蕃に常世連燕國公孫淵之後とあり、賜正六位上以下二十二字勝寶二年九月紀に重出す恐くは誤あらむ

(九月)河俣連、原本河俣を阿保に作る金本曾本河邊本に據て改む錄河內神別に川跨連津速魂命九世孫梨富命之後とある是なり　〇礪波臣、古事記孝靈天皇の段に日子刺肩別命者高志之利波臣之祖とあり越中國に礪波郡あり氏名は此地名に因れり　〇碩、字書に與石通とあり　〇盧舍那佛、原本盧を廬に作る金本曾本淀本に據て改む　〇知識、考證に狩谷氏曰[illegible]知識とあり、原本知を智に作る閣本に據て改む

(十月)御方大野、父は天武天皇皇子とあれど其名詳ならず寶字五年十月紀に內舍人御方廣名等三人賜姓御方宿禰とある廣名は大野の子ならむ　〇市往、錄右京諸蕃に市往公百濟國明王之後也　〇岡連、同云岡連市往公同祖目圖王男安貴之後也　〇氣太、十七年正月紀(三三〇頁)に見ゆ　〇中臣伊勢連、天平神護二年十二月癸卯の條に外從五位下中臣伊勢連大津賜姓伊勢朝臣と見えて後更に伊勢朝臣と改む

〇十一月[癸酉朔]丙子、以外從五位下中臣丸連張弓爲皇后宮亮、從四位上多治比眞人廣足爲兵部卿、從四位下多治比眞人占部爲刑部卿、春宮大夫兼學士從四位下吉備朝臣眞備爲右京大夫、從五位下坂合部宿禰金綱爲信濃守、從五位上茨田王爲越前守、正五位下大井王爲丹波守、從五位上粟田朝臣馬養爲備中守、〇己卯、詔曰、朕以去天平十三年二月十四日、至心發願、欲使國家永固、聖法恒修、遍詔天下諸國、國別令造金光明寺、法華寺、其金光明寺各造七重塔一區、幷寫金字金光明經一部、安置塔裏、而諸國司等、怠緩不行、或處寺不便、或猶未開基、以爲、天地災異一二顯來、蓋由茲乎、朕之股肱、豈合如此、是以差從四位下石川朝臣年足、從五位下阿倍朝臣小嶋、布勢朝臣宅主等、分道發遣、檢定寺地、幷察作狀、國司宜與使及國師、簡定勝地、勤加營繕、又任郡司、勇幹堪濟諸事、專令主當、限來三年以前、造塔金堂僧房悉皆令了、若能契勅、如理修造之、子孫無絕、任郡領司、其僧寺尼寺、水田者、除前入數已外、更加田地、僧寺九十町、尼寺四十町、便仰所司、墾開應施、普告國郡、

(十一月)刑部卿、卿の字は金本嘗本淀本に據て補ふ
〇春宮大夫兼學士、狩谷氏云七字疑衍蓋後人傍記誤孱入本文者、春宮大夫は三月丙戌石川年足任ぜらる恐くは誤あらむ
〇越前守、原本前を中に作る金本嘗本淀本に據て改む
〇二月十四日、十三年紀三月乙巳に見ゆ乙巳は廿四日なれば二月十四日は蓋三月廿四日の誤ならむ
〇金光明寺法華寺、金光明寺は國分寺、法華寺は國分尼寺なり十三年三月紀(三〇〇頁)を見るべし
〇國師、大寶二年二月紀に見ゆ諸國に分置して敎化を掌らしむる僧職なり
〇勤加、原本勤を勒に作る金本閣本淀本に據て改む
〇金堂、寺院の本堂を云
〇僧房、金本閣本淀本房を坊に作る
〇前入數、十三年三月詔に每國僧寺施封五十戸水田十町尼寺水田十町とさ見ゆ
〇墾開、原本墾を懇に作る山崎校本に據て改む

○佐保眞人、姓氏錄に載せず狩谷氏曰按紹運錄光仁皇子有高橋王是歟さあれど高橋王は光仁皇子稗田親王の子なり年代合はず

（十二月）稍經弦朔、弦は上弦下弦の弦にて此は月末ないし朔は月朔なれば日數を經たる意

【天平廿年】大倭連、姓氏錄に見えず

○南殿、紀略に南高殿、類史壞本版本に南安殿さあり

○津史、原本津を律に作る金本從本及類史に據て改む

（二月）奈氐麻呂正三位、原本三を二に作る諸本に據て改む

知朕意焉、○己亥、賜无位高橋王佐保眞人姓、○十二月乙巳、以從五位下大伴宿禰犬養爲少納言、從五位上當麻眞人鏡麻呂爲民部大輔、○乙卯、勅、頃者、太上天皇、枕席不安、稍經弦朔、醫藥療治、未見効驗、宜大赦天下、自天平十九年十二月十四日昧爽以前、大辟罪以下、咸赦除之、但八虐、故殺人、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、勅、天下諸國、或有百姓情願造塔者、悉聽之、其造地者、必立伽藍院內、不得濫作山野路邊、若備儲畢、先申其狀、

廿年春正月壬申朔、廢朝、宴五位已上於內裏、賜祿有差、其餘於朝堂賜饗焉、○甲戌、大倭連深田、魚名、並賜宿禰姓、○戊寅、天皇御南殿、宴五位以上、授正五位上坂上忌寸犬養從四位下、正六位上角朝臣道守從五位下、正六位上津史秋主外從五位下、宴訖賜祿有差、○二月己未、授從三位巨勢朝臣奈氐麻呂正三位、正四位上三原王、正四位下石上朝臣乙麻呂、並從三位、從四位上紀朝臣麻路正四位上、從四位上多治比眞人廣足、從四位下大伴宿禰兄麻呂、並正四位下、從四位下佐伯宿禰

○民忌寸眞楫、原本楫を捉に作る金本曾本に據て改む
○國君麻呂、原本君を若に作る閣本及十七年四月紀に據て改む
○津嶋朝臣家虫、二所大神宮例文大宮司次第に家虫是年五月給五位とあり此と合はず
○建部公、錄右京皇別に建部公犬上朝臣同祖日本武尊之後とあり
○高市連、連姓を賜ふこと八月辛丑の條に見ゆ此に連とあるは蓋追書せるなり
○田可臣、近江國犬上郡田可鄕あり之に因れる氏か、或は田は甲の訛なるべし
○漆部伊波、景雲二年二月紀に漆部直伊波賜姓相摸宿禰とあり寶字四年十二月紀にも直字あり此に無きは恐くは脫文ならむ
○授外從五位下、諸本に授の字なし
（三月）宣勅、金本宣の字なし恐くは衍ならむ

淨麻呂、佐伯宿禰常人、並從四位上、正五位上石川朝臣麻呂、百濟王孝忠、紀朝臣宇美、並從四位下、正五位下巨勢朝臣堺麻呂、背奈王福信、並正五位上、從五位上多治比眞人屋主、藤原朝臣巨勢麻呂、並正五位下、從五位下石川朝臣名人、鴨朝臣角足、民忌寸眞楫、並從五位上、外從五位下若犬養宿禰東人、國君麻呂、正六位上百濟王元忠、藤原朝臣魚名、多治比眞人石足、佐伯宿禰乙首名、久米朝臣湯守、柹本朝臣市守、粟田朝臣奈勢麻呂、石川朝臣豐人、平群朝臣人足、田中朝臣少麻呂、大伴宿禰御依、阿倍朝臣鷹養、津嶋朝臣家虫、佐味朝臣廣麻呂、建部公豐足、日下部宿禰大麻呂、並從五位下、外從五位下陽侯史眞身外從五位上、正六位上高市連大國外從五位下、○辛酉、從五位上佐伯宿禰稻麻呂贈從四位上、○壬戌、進知識物人等、外大初位下物部連族子嶋、外從六位下田可臣眞東、外少初位上大友國麻呂、從七位上漆部伊波、並授外從五位下、○乙丑、授從五位上佐味朝臣虫麻呂正五位下、從五位下葛井連廣成從五位上、外從五位上陽侯史眞身從五位下、○三月戊寅、宣

○未洽、原本洽を治に作る金本曾本淀本に據て改む
○愆咎、原本咎を各に作る金本曾本淀本に據て改む
○萬方有罪云々、此二句は尚書湯誥に出づ
○葛城忌寸、十九年正月紀葛木連の下を見るべし
○藤原朝臣豐成、朝臣の二字は原本旁書に據て補ふ
○粟田女王、王の字は金本曾本淀本に據て補ふ
(四月)太上天皇崩、東大寺要錄に廿年戊子飯高太上天皇崩年六十九天平十三年降綸旨於七道諸國建金光明護國法花滅罪二伽藍云々とあり
○六十有九、紹運錄には六十八とあり
○麻路、金本曾本淀本路を呂に作る
○山科寺、興福寺を云ふ
○飛鳥寺、靈龜二年八月紀(一二二頁)に見ゆ
○佐保山陵、大和志に在添上郡法蓮寺北とあり諸陵式に佐保山西陵平城宮御宇淨足姬天皇在大和國添上郡とあるは勝寶二年十月癸酉に改葬

勅、朕以薄德、君臨四海、夙興夜寐、憂勞兆民、然猶風化未洽、犯禁者多、是訓導之不明、非黎首之愆咎、方方有罪、在予一人、咸洗瑕穢、更令自新、宜大赦天下、自天平廿年三月八日昧爽已前、大辟已下、咸悉赦除、○己卯、正六位上葛城忌寸豐人授外從五位下、○壬午、以從五位下巨勢朝臣君成、爲下野守、○壬辰、從三位藤原朝臣豐成授從二位、拜大納言、從三位藤原朝臣仲麻呂正三位、正四位下大野廣瀨粟田女王並正四位上、從四位上河內女王正四位下、○夏四月庚申、太上天皇崩於寢殿、春秋六十有九、○辛酉、以從三位智努王、石上朝臣乙麻呂從四位上黃文王、從四位下大市王、正四位上紀朝臣麻路、從四位下藤原朝臣八束、爲御裝束司、六位已上八人、從三位三原王、從四位上石川王、道祖王、從四位下紀朝臣飯麻呂、吉備朝臣眞備、爲山作司、六位已下八人、從五位上阿倍朝臣嶋麻呂、外從五位下丹比間人宿禰若麻呂、爲養役夫司、六位已下十人、勅令左右京、四畿內、及七道諸國舉哀三日、○壬戌、於大安寺誦經、○甲子、於山科寺誦經、○丙寅、當初七、於飛鳥寺誦經、自是之

後、毎至七日、於京下寺誦經焉、○丁卯、勅天下悉素服、是日火葬太上天皇於佐保山陵、○五月〔庚午朔〕丁丑、勅令天下諸國奉爲太上天皇、毎至七日、國司自親潔齋、皆請諸寺僧尼、聚集於一寺、敬禮讀經、○己丑、右大史正六位上秦老等一千二百餘烟、賜伊美吉姓、○六月〔己亥朔〕壬寅、正三位藤原夫人薨、贈太政大臣武智麻呂之女也、○癸卯、令百官及諸國釋服、○秋七月〔己巳朔〕戊寅、正六位下中臣部干稻麻呂賜中臣葛野連姓、正八位下山代直大山等三人並賜忌寸姓、○丙戌、從五位下大倭御手代連麻呂女、賜宿禰姓、奉爲太上天皇、奉寫法華經一千部、○戊戌、河内出雲二國飢、賑恤之、○八月〔己亥朔〕辛丑、近江播磨飢、賑給之、賜外從五位下高市大國連姓、○癸卯、改定釋奠服器及儀式、○乙卯、八幡大神祝部從八位上大神宅女、從八位上大神社女並授外從五位下、○己未、車駕幸散位從五位上葛井連廣成之宅、延群臣宴飲、日暮留宿、明日、授廣成及其室從五位下縣犬養宿禰八重並正五位上、是日還宮、

せるものなり

(五月)賜伊美吉姓、秦忌寸は姓氏錄左京右京山城大和攝津河内和泉等の諸蕃に見ゆ山城諸蕃秦忌寸の下に太秦公宿禰同祖秦始皇帝之後也云々天平二十年在京畿者咸改賜伊美吉姓也と見ゆれば京及畿内にあるもの悉く忌寸を賜はりしなり

(六月)藤原夫人、名闕く

(七月)中臣葛野連、錄山城神別に中臣葛野連饒速日命九世孫伊久比足尼之後也とあり　○山代直、錄攝津神別に山代直天御影命十一世孫山代根子之後也とあり、原本直を眞に作る今本會本淀本に據て改む　○大倭御手代連、錄大和神別に御手代首、天御中主命十世孫天諸神命之後也と見ゆるは此御手代連と同族なるか異同詳ならす

○奉寫、奉の字は諸本及紀略に據て補ふ

(八月)高市大國、高市連は錄右京神別に額田部同祖、天津彦根命三世孫彦伊賀都命之後とあり　○改定釋奠服器及儀式、考證に寶龜六年十月吉備眞備公傳云、先是大學釋奠其儀未備大臣依稽禮典器物始備禮容可觀按眞修公靈龜二年入唐留學勝寶四年爲遣唐副使再往此所云々其出於公建議與否未詳　○八幡大

神、神名式に豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮（名神大）とあり　○大神宅女、臨時祭式に凡八幡神宮司以大神宇佐二氏補之不得雜補他氏とあり　○社女、考證に社當作杜神護二年十月紀作毛理賣三字とあれどモリに社の字を充ること古書に例多し誤にはあらず大神比義以來相繼ぎて大神氏奉仕す

（十月）京畿、紀略畿の下に内の字あり　○丁亥、狩谷校本に丁亥不審丁卯歟脱日也と云り　○廣幡牛養、山城未定雜姓に廣幡公百濟國津王之後者と見ゆれど秦姓を賜ふとあれば別なるべし
（十一月）乙吉備眞事廣三人、眞は原本直に作る景雲元年二月丁未、寶龜二年七月丁未紀に據て改む三人は乙吉備・眞事・廣是なり流イ本三を二に作り考證に廣字疑衍と云り
（十二月）鎭祭、類史祭の字なし
【天平勝寶元年】勝寶、類史紀略勝を感に作る　○七日、諸本及紀略七七に作る　○諸家司、家司は親王及職事の三位以上の家の家職の人を云
（二月）大僧正、閣本此三字なし　○行基和尚遷化、寶巖記に行基菩薩隨機感錄以天平廿一年己丑春二月二

○冬十月乙丑、詔免京畿七道諸國田租、○丁亥、正七位下廣幡牛養賜秦姓、○十一月己丑、下道朝臣乙吉備、眞事、廣三人、並賜吉備朝臣姓、○十二月甲寅、遣使鎭祭佐保山陵、度僧尼各一千、

天平勝寶元年春正月丙寅朔、廢朝、始從元日、七日之内、令天下諸寺悔過、轉讀金光明經、又禁斷天下殺生、○己巳、比年頻遭亢陽、五穀不登、官人妻子多有飢乏、於是文武官及諸家司給米、人別月六斗、○乙亥、上總國飢、賑給之、○二月丁酉、大僧正行基和尚遷化、和尚藥師寺僧、俗姓高志氏、和泉國人也、和尚眞粹天挺、德範夙彰、初出家、讀瑜伽唯識論、即了其意、既而周遊都鄙、教化衆生、道俗慕化、追從者動以千數、所行之處、聞和尚來、巷无居人、爭來禮拜、隨器誘導、咸趣于善、又親率弟子等、於諸要害處、造橋築陂、聞見所及、咸來加功、不日而成、百姓至今、蒙其利焉、豐櫻彥天皇甚敬重焉、詔授大僧正之位、幷施四百人出家、和尚

日丁酉時法儀捨生馬山慈神遷彼金宮扶桑略記に於菅原寺東南院右脇而臥身心安穩如入禪定遷化とあり
○俗姓高志氏云々、靈異記には俗姓越史越後國頸城郡人也母和泉國大鳥郡人蜂田藥師也とあり此に和泉國人とあるは母の出生地に因て云るか高志氏は神護二年十二月和泉國人高志比登に高志連を賜ふと見え錄河內諸蕃に古志連王仁之後也、西大寺資財帳に高志公船長見え其孰れなるか詳ならず
○眞粹天挺、晉書范喬傳に喬稟德眞粹と見え眞粹は性質の眞に純粹なるを云ひ天挺は天然に傑出せるを云
○瑜伽唯識論、瑜伽は開元釋教錄に瑜伽師地論一百卷彌勒菩薩說唐三藏玄奘譯、唯識は釋教錄に大乘唯識論一卷元魏婆羅門瞿曇般若流支譯、又唯識二十論唯識三十論成唯識論等あり
○所行之處、原本所を而に作る金本に據て改む
○巷无居人、毛詩鄭風に叔于田巷無居人とある

靈異神驗、觸類而多、時人號曰行基菩薩、留止之處、皆建道場、其畿內凡卌九處、諸道亦往々而在、弟子相繼、皆守遺法、至今住持焉、薨時年八十、○庚子、下總國旱蝗飢饉、賑給之、○丙午、石見國疫、賑給之、○丙辰、以朝庭路頭、屢投匿名書、下詔、教誡百官及大學生徒、以禁將來、○天平廿一年二月丁巳、陸奧國始貢黃金、於是奉幣以告畿內七道諸社、○壬戌、勅曰、頃年之間、補任郡領、國司先檢譜第優劣、身才能不、舅甥之列、長幼之序、擬申於省、式部更問口狀、比校勝否、然後選任、或譜第雖輕、以勞薦之、或家門雖重、以拙却之、是以其緒非一、其族多門、苗裔尙繁、濫訴無次、各迷所欲、不顧禮義、孝悌之道既衰、風俗之化漸薄、朕竊思量、理不可然、自今已後、宜改前例、簡定立郡以來譜第重大之家、嫡々相繼、莫用傍親、終絕爭訟之源、永息窺窬之望、若嫡子有罪疾及不堪時務者、立替如令、以從五位下大倭宿禰小東人爲攝津亮、從四位下紀朝臣飯麻呂爲大倭守、○三月乙丑朔、日有蝕之、○丁卯、左大舍人頭從四位下高丘王卒、

に據る　○見聞所及、原本及を乃に作る諸本に據て改む　○道場、釋氏要覽に閑寶修道之處謂之道場隋煬帝勅遍改僧居名道場とあり　○往々面在、類史在を存に作る　○年八十、元亨釋書に八十二といへど天智七年生とあれば八十を正しとす　○投匿名書、類史刑法部に延曆十二年二月散位從六位上櫟嶋部石守除名以投匿名書也と見ゆ又唐闘訟律に諸投匿名書告人罪者流二千里とあり　○天平廿一年二月、此七字紀略になし、傍書の攙入なること明なれど金本以下諸本に存するを以て姑く之に從ふ　○始貢黃金、萬葉十八に大伴家持賀陸奧國出金詔書歌見ゆ　○先捻黑萃、原本捻を於に作る金本曾本淀本に據て改む　○擬申於省、省は式部省なり　○更問口狀、口述試問なり　○立郡以來云々、延曆十七年三月詔に昔難波朝庭始置諸郡仍擇有勞補於郡領とあるを云　○絕爭訟之源、原本絕を塞に作る金本曾本淀本に據て改む　○竊惑、原本竊を窃に作る曾本淀本金イ本に據て改む　○從四位下紀朝臣、原本四を五に作る金本曾本淀本に據て改む七月甲午の條を參看すべし　（三月）左大舍人頭、十五年六月爲右大舍人頭とあり左大舍人頭に轉ぜしこと見えざれば右の誤か　○高丘王卒、天平十五年五月紀に始見、同年六月右大舍人頭と爲る事上に注せるか如し

（四月）東大寺、前紀孰れも金光明寺と稱す東大寺の名此に始て見ゆ　○御盧舍那佛像前殿、東大寺大佛記に以勝寶元年歲次己丑十月廿四日奉鑄已畢とあれば此時には大略成りしも未だ完成せざりしなり　○三寶、佛法僧の三を云へど此勅及推古紀其他にもホトケとのみ訓めに通して佛の意と見るべし　○奴止仕奉流、詔詞解に此天皇の殊に佛法を深く信し尊み給ひし御事は申すも更なる中に是等の御言は天神の御子の尊のかけても詔ふべきことゝはおぼえず餘りに淺ましく悲しくて讀み上ぐるもいさゆゝしく畏ければ今は訓をかきぬ心あらむ人は

○夏四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、皇后太子並侍焉、群臣百寮、及士庶分頭、行列殿後、勅遣左大臣橘宿禰諸兄、白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命、盧舍那佛能大前仁奏賜部止奏久、此大倭國者、天地開闢以來爾、黃金波人國用理獻言波有登毛、斯地者無物止念部流仁、聞看食國中能、東方陸奧國守從五位上百濟王敬福伊、部內小田郡仁黃金出在奏氐獻、此遠聞食驚伎悅備貴備念久波、盧舍那佛乃慈賜比福波閇賜物爾有止念閇、受賜里、恐理、戴持、百官乃人等率天禮拜仕奉事遠、挂畏三寶乃大前爾、恐美恐美毛奏賜波久止奏、從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、現神御宇倭根子天皇詔旨宣

大命、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食宣、高天原爾天降坐之天皇御世乎始天、中今爾至麻氐爾、天皇御世御世、天日嗣高御座爾坐氐、治賜比惠賜來流食國天下乃業止奈母、神奈我良母所念行久止宣大命、衆聞食宣、加久治賜比惠賜來流天日嗣乃業止、今皇朕御世爾當氐坐者、天地乃心遠勞彌重彌辱美恐美坐爾、聞食食國乃東方陸奧國乃小田郡爾、金出在止奏氐進禮利、此遠所念波、種種法中爾波、佛大御言之、國家護我多仁波、勝在止聞召、食國天下乃諸國爾、最勝王經乎坐、盧舍那佛仕奉止爲氐、天坐神地坐祇乎祈禱奉、挂畏遠天皇御世始氐、拜仕奉利、衆人乎伊謝奈比率氐仕奉心波、禍息氐善成、危變氐全平牟等念氐仕奉間爾、衆人波不成知登疑、朕波金少牟止念憂都々在爾、三寶乃勝神枳大御言驗乎蒙利、天坐神地坐神乃相宇豆奈比奉、佐枳波倍奉利、又天皇御靈多知乃、惠賜比撫賜夫事依氐、顯自示給夫物在自等念召波、受賜利歡、受賜利貴、進母不知、退母不知、夜日畏恐麻利所念波、天下遠撫賜備賜事理爾坐

此始の八字をば目をふたぎて過すべくなむと云り

○天皇羅我命、要錄命を命に作る

○盧舍那佛能、原本佛を像に作る金本淀本及要錄に據て改む

○大前仁云々、原本大を太に作る金本曾本淀本に據て改む下同じ天皇の詔給ふを奏賜ふと詔給ふは佛を尊み給ひてなり

○大倭國、皇國全體の大名なり曾本倭を和に作る

○黃金、抄珍寶部に金爾雅云黃金曰璗其美者曰鏐卽紫磨金也說文云銑(古加禰)金之最有光澤也とあり名義抄字類抄にもコガネとあれば之に據るべし

○人國、他國なり

○獻言、言は借字にて事の意

○小田郡、原本小を少に作る要錄及下文に據て改む延喜式倭名抄にも小田とあり

○黃金出在奏、出の字諸本脫せるを解に下文に依て補へると在るに從て改む大伴家持賀陸奧國出金詔書歌に鷄鳴東國能美知能久乃小田在山爾金

君乃御代爾當氐可在物乎、拙久多豆何奈伎、朕時爾顯自示賜禮波、辱美愧美奈母念須、是以朕一人夜波貴大瑞乎受賜牟、天下共頂受賜利、歡流自理可在等、神奈我良母念坐氐奈母、衆乎惠賜比治賜比、御代年號爾字加賜久止宣天皇大命、衆聞食宣、

辭別氐宣久、大神宮乎始氐、諸神多知爾、御戸代奉利、諸祝部治賜夫、又寺々爾墾田地許奉利、僧綱乎始氐、衆僧尼敬問比治賜比、新造寺乃、

有等麻宇之多麻敝醜云々とある是なり　〇賜物爾有止、物に有は後世ならば物なりと云べきをかく記せるにてなりは爾有の約なることを知るべし　〇金門、金門婆と云べき婆を省きたるなり　〇受賜里、盧舍那佛の授け賜へる黄金を受賜はりてなり　〇禮拜仕奉、今日かく參詣せしことをとなり　〇恐美恐毛、原本恐毛无久に作る金本閣本淀本及要錄に據て訂正す　恐美の美は諸本毛とあれど出雲神賀詞、齋內親王奉入時祝詞に據て改む　〇石上朝臣乙麻呂宣、以下は諸人に詔給ふなり　〇高天原爾云々、皇孫彥火瓊々杵尊を申奉る、高天原爾の爾は由父余の誤にて下に利字などありしが脫ちたるなるべし　〇高御座爾坐氐、諸本爾を止に作る前例に據て改む　〇天日嗣乃業止、止はとしての意　〇此遠所念波、此事を思召すにと云意にて下文の示給夫物在自等念召波の句まで係る　〇種々法中爾波云々、諸道の中にて國家を護る爲には佛法最も勝れたりとなり　〇佛大御言之、大の字は金本閣本等に據て補ひ之は原本久に作れるを閣本金イ本及要錄に據て改む　〇多仁波、後世用ひねど當時爲にはの意に用ひたり萬葉五に奈良乃美夜古遍許牟比等乃多仁とある是なり　〇最勝王經乎坐、坐は令坐マサセの約にて置くを云り　〇仕奉止、原本仕を化に作る要錄に據て改む仕奉は作るを云　〇遠天皇御世始氐、原本遠の下に我皇の二字ありて始を治に作る要錄に據て訂す下文と對照するに此下に御世御世天皇御靈多知乎拜とありしが脫ちしなるべし　〇仕奉心波、こゝも仕奉は作るを云　〇不成智豈疑、大事業なれば成難からむかと疑ふなり　〇念憂都々、都々は金本門々に閣本及要錄川々に作る　〇大御言驗乎蒙利、佛說に國家を護り福を與ふることを說きたる其驗を蒙れる由なり　〇撫賜夫、原本夫を天に作る諸本及要錄に據て改む　〇事依氐、原本依を從に作る金本曾本淀本及要錄に據て改む　〇顯自示給夫、原本夫を天に作る山崎校本に據て改む　〇念召波、原本波字を脫せり諸本及要錄に據て補ふ　〇受賜利貴、原本貴を遺に作る諸本に依て改む　〇所念波、オモホセバと訓み上の恐麻利にて語を切り恐まりて此事を思召すにの意なり　〇理爾坐君、賢君を云、かゝる貴き寶の始て出ることは賢君の御代にあるべきことなりとなり　〇多豆何奈伎、此以外に見えず手束無きにて締りなき意か　〇歡流自、上に合の字ありしが脫たるなるべし然らざれば流字讀み難く又理も合むとあるべきなりと解に云り自は强むる助辭なり或は曾の誤かとも云　〇字加賜、改天平廿一年爲天平勝寶元年とある是なり

〇御戸代、神田を云　〇祝部、神職を云　〇墾田地許奉利、私に新田を開發して己が所得とするは許さざる規定なる

官寺止可成波、官寺止成賜夫、大御陵守仕奉人等、一二治賜夫、又御世御世爾當天、天下奏賜比、國家護仕奉流事乃、勝在臣多知乃侍所爾波、置表氏、與天地共、人爾不令侮不令穢、治賜部止宣　大命、衆　聞食　宣、又天日嗣高御座乃業止坐事波、進氏波挂　畏　天皇大御名乎受賜利、退氏波婆婆大御祖乃御名乎蒙氏之、食國天下乎婆撫賜惠賜夫止奈母、神奈我良母念坐須、是以王多知大臣乃子等治賜伊自、天皇朝爾仕奉利、婆婆爾仕奉爾波可在、加以挂　畏　近江大津宮大八嶋國所知之天皇大命止之氏、奈良宮大八洲國所知自我皇　天皇止、御世重氏朕宣　自久、大臣乃御世重天明淨心以氏仕奉事爾依氏奈母、天日繼波平　安久聞召來流、此辭忘給奈棄給奈止宣比之大命乎、受賜利恐麻利、汝多知乎惠賜比治賜久止宣　大命、衆　聞食　宣、又三國眞人、石川朝臣、鴨朝臣、伊勢大鹿首部波、可治賜人止自氏奈母、簡賜比治賜夫、又縣　犬養橘　夫人乃天皇御世重氏明淨心以氏仕奉利、皇朕御世當氏毛、無怠緩事久助仕奉利、加以祖父大臣乃

を今回特に許し給へるなり
○僧綱、僧尼令義解に謂僧綱者僧正、僧都、律師也とあり
○官寺止可成、官の字は解に據て補ふ
○官寺、原本官を宮に作る金本曾本淀本に據て改む
○大御陵守、原本大を天に作る諸本及要錄に據て改む
○治賜夫、原本夫を天に作る諸本に據て改む
○當天、原本天を久に作る要錄に據て改む
○天下奏賜比、天下の政を執り申すなり原本奏を奉に誤れるを山崎校本に據て改む
○置表氏、原本置を量に作る金本及要錄に據て改む
○挂畏天皇、主として大御父文武天皇又元正天皇を指して申給ふなり
○大御名、名は職業といへば此は天皇の天下を治め給ふ天職を申せるなり
○婆婆大御祖、天皇の大御母にて皇太夫人宮子媛なり
○御名乎蒙氏之、子を養

育することは母の職業なれば其を蒙り給へる由なり
○乘賜夫止奈母、原本夫を天に作る、諸本に據て改む
○念坐須、原本須を流に作る、今本に據て改む
○王多知大臣乃子等、王は諸王の王ならで親王と見るべし、大臣は今大臣となれる人等は更なり、大臣たりし人達をも云、子等は王及大臣の子孫なり
○赤賜伊自、伊は多く名詞の下に置く助辭なれど、動詞の下にも置けり、自はその意に用ひし助辭なり
○婆婆、原本婆婆に作る、今本に據て改む
○仕奉爾可在、總ての意は朕が御父は天下の大御業を朕に授け給ひ御母は朕を育て給へば朕も同御世の親王又大臣の子孫を治め惠むことが御父母の大御心に報い奉るにてあるべしとなり
○大命止之氏、こゝにて語を切るべし、此言は下の朕宣自久へ係る
○奈良宮云々、元正天皇を申奉る、大八洲の洲は原本州に作る、皆本流本に據

殿門荒穢須事无久、守川在自之事、伊蘇之美宇牟賀斯美忘不給止自氏奈母、孫等一二治賜夫、又爲大臣氏仕奉部留臣多知乃子等、男波隨仕奉狀氏、種種治賜比川禮等母、女不治賜、是以所念波、男能未父名負氏、女波伊婆禮奴物爾阿禮夜、立雙仕奉自、理在止奈母念須、父我加久斯麻爾在止念氏於母夫氣教部牟事、不過不失、家門不荒自氏、天皇朝爾仕奉止自氏奈母、汝多知乎治賜夫、又大伴佐伯宿禰波、常母云如久、天皇朝守仕奉事、顧奈伎人等爾阿禮波、汝多知乃祖止母乃云來久、海行波美豆久屍、山行波草牟須屍、王乃幣爾去曾死米能杼爾波不死止云來流人等止奈母聞召須、是以遠天皇御世始氏、今朕御世爾當氏母、內兵止心中古止波奈母遣須、故是以、子波祖乃心成伊自、子爾波可在、此心不失自氏、明淨心以氏仕奉止自氏奈母、男女幷氏一二治賜夫、又五位已上子等治賜夫、六位已下爾冠一階上給比、東大寺造人等、二階加賜比、正六位上爾波、子一人治賜夫、又五位已上、及皇親年十三已上、无位大舍人等至于諸司仕丁麻氏爾、大御手物賜夫、又高

年人等治賜比、困乏人惠賜比、孝義有人其事免賜比、力田治賜夫、罪人赦賜夫、又壬生治賜比、知物人等治賜夫、又見出金人、及陸奥國國司郡司百姓至麻氏爾治賜比、天下乃百姓衆乎、撫賜比惠賜久止宣、天皇大命、衆聞食宣」

て改む　○御世重氏、天智天皇より元正天皇まで次々になり　○朕宣自久、朕の下に爾字あらまほしアレニノリタマヒシクと訓べし總ての意は天智天皇の大命を天武持統文武元明元正天皇と次々に傳へまして元正天皇の朕に詔給ひしと云意　○大臣乃御世重天、世々の大臣が明き淸き心もて仕奉るによりての意　○忘給奈、原本忘を忌に作る淀本閣イ本に據て改む　○宣比之大命、元正天皇の大命なり　○三國眞人、繼體天皇々子椀子王の後　○石川朝臣、孝元天皇々子彦太忍信命の後　○鴨朝臣、大國主神の後なり　○伊勢大鹿首、津速魂命三世孫天兒屋根命の後　○治賜夫、原本夫を天に作る金本曾本淀本に據て改む　○縣犬養橘夫人、三千代なり　○御世重氏、天武天皇より元正天皇まで五世なり　○助仕奉利、原本仕の下に天字あり金本に據て削る　○祖父大臣、天皇の御外祖父不比等なり　○殿門、家門と云に同じ　○守川川在自之、川川の二字は金本閣本淀本に據て補ふ自之はアラシ、と訓てアリを延べて云るなり是は養老四年不比等の薨後三千代夫人の其家を能く守れるを申されしなり　○伊蘇之美、勤しみなり　○宇牟賀斯美、前に云り　○孫等、此に孫と云るは夫人の前夫美努王の孫なるべしそは次の叙位の中に橘奈良麻呂見えたればなり　○所念波、思ほすにの意　○父我加久斯麻爾云々、其父の子をかくの如きさまにあれかしと思ひ然か敎へ趣けたる掟を過たずと云意、加久斯麻は「かくのさま」なり原本麻を細字にして鹿に作る諸本に據て改む　○敎祁牟、原本祁を部に作る解に據て改む諸本牟を于に作り淀本にシと訓り敎ヘシにても通ずれど解の説穩當なるべし　○不失、原本失を告に作る金本曾本淀本に據て改む　○治賜夫、原本夫を天に作る諸本に據て改む　○大伴佐伯宿禰、大伴氏は天忍日命の後にて佐伯宿禰も其同族なり雄略天皇の御代大伴室屋大連の時に別れて兩氏となれり　○常母云如久、如の字は解に據て補ふ　○顧奈伎人等、已が身命を顧ずして仕奉るを云原本伎を波に作る金本曾本淀本に據て改む　○云來久、イヒクラクと訓み先祖より世々言ひ傳へけるはなり　○海行波云々、萬葉廿に海行者美都久屍山行者草牟須屍大皇乃敝爾許曾死米可敝里見波勢自云々とあり美豆久の豆は原本内に作る解に從て改むミツクは水漬くなり　○草牟須屍、屍の上に草の生ふるを云海にも山にも死なむと云ことをかく云るはめでたき古言なり　○王乃幣爾去曾死米、天皇の御側去らず死なむとの意なり　○能杼爾波不死、徒らに事なくは死なじ大君の御爲に命を捨てむとなり能杼は長閑(ノドカ)にのノドに同じ　○御世始氏、原本始を治に作る解に從て改む　○内兵、内と云は親しみていへるにて內物部などの内に同じ　○心中云々、解に無下に聞えず誤字なりと云る如く誤脫あるべし念召弖奈母遺須の誤かといへどいかゞあらむ後考を俟つべし　○子波祖乃心成伊自、成伊の伊は助辭自も助辭なれどこゝはそなどの意にて父の欲する心の如く成し遂ぐるを云　○子爾波可在、眞の人の子と云べしとなり　○男女幷氏、幷せては男女幷せてなり　○一二治賜夫、是までは大伴佐伯氏の上なり　○五位已上子等、是より諸氏に係れり此子等は父に對する子にて子孫にあらず　○治賜夫、原本夫を天に作る金本曾本淀本に據て改む　○六位已下爾云々、六位已下は位一階上げ給ふに五位以上の然らざるは稍貴く且位田も增すべければ位を進めず物を給ふが多し　○東大寺造人等、造の字は解に據て補ふ　○子一人治賜夫、五位已上は子等總てな

授正三位巨勢朝臣奈氐麻呂從二位、從三位大伴宿禰牛養正三位、從五位上百濟王敬福從三位、從四位上佐伯宿禰淨麻呂、佐伯宿禰常人、並正四位下、從四位下阿倍朝臣沙彌麻呂、橘宿禰奈良麻呂、多治比眞人占部、並從四位上、從五位下藤原朝臣永手從四位下、從五位上大伴宿禰稻君正五位下、從五位下大伴宿禰家持、佐伯宿禰毛人、並從五位上、正六位上藤原朝臣千尋、藤原朝臣繩麻呂、佐伯宿禰靺鞨、正六位下藤原朝臣眞從、並從五位下、進知識物人外從八位下他田舍人部常世、外從八位上小田臣根成二人、並外從五位下、正三位橘夫人從二位、從四位上藤原朝臣吉日從三位、從五位上藤原朝臣袁比良女、藤原朝臣駿河古、並正五位下、无位多治比眞人乎婆賣、多治比眞人若日賣、石上朝臣國守、藤原朝臣百能、藤原朝臣弟兄子、藤原朝臣家子、大伴宿禰三

るを是はたゞ一人つゝなり其は上に云る如く五位は貴くて之を陞叙すれば影響あるが如く正六位上も亦一階進むれば五位となる故に其身には階叙せずして子一人を上げ給ふなり　○皇親、この訓古書に見えず解にミウガラと訓むべしと云るに據れり　○无位大舍人、有位の大舍人等には位を進め給ふも無位は其恩典に預からぬ故に賜物あるなり　○諸司仕丁、賦役令に見仕丁者毎五十戸二人以一人充廝丁三年一替と見ゆ　○大御手物、即ち賜物なり　○高年人、八十歳以上を云　○其事、課役を云　○力田、上に出づ　○壬生、詳ならず壬は書の誤寫にて書生即ち大學寮の學生なりフムヤワラハと訓むべしとも云　○知物人等、世の中のことを多く知れる人にて大學寮の諸博士等を云なるべし　○見出金人云々、次の文を參看すべし

○阿倍朝臣、原本倍を陪に作る今は閣本傍本從本に據て改む

○他田舍人部、原本他を池に作る閣本に據て改む　他田舍人は養老七年正月紀、七六頁に見ゆ　○小田臣、五年二月紀に小田臣枚床、類聚符宣抄第七天平八年七月式部省解に備中國小田郡小田臣豐郷見ゆ根成も或は備中の人歟　○袁比良女、原本袁を表に作る今は閣本傍本に據

原、佐伯宿禰美努麻女、久米朝臣比良女、並從五位下。以從二位巨勢朝臣奈氐麻呂爲大納言、正三位大伴宿禰牛養爲中納言。○乙未、大赦天下。自天平廿一年四月廿一日昧爽以前、大辟罪已下、咸悉赦除。○戊戌、詔授從五位下中臣朝臣益人從五位上、正六位上忌部宿禰鳥麻呂從五位下、伊勢大神宮禰宜從七位下神主首名外從五位下。因遣民部卿正四位上紀朝臣麻路、神祇大副從五位上中臣朝臣益人、少副從五位下忌部宿禰鳥麻呂等、奉幣帛於伊勢大神宮。○丁未、天皇幸東大寺、御大盧舍那佛前殿、大臣以下、百官及士庶、皆以次行列。詔授左大臣從一位橘宿禰諸兄正一位、以大納言從二位藤原朝臣豐成拜右大臣、授從五位下市原王從五位上、无位三使王、岸野王、三形王、倭王、額田部王、多治比王、厚見王、葛木王、大坂王、出雲王、三河王、長嶋王、高嶋王、並從五位下、從五位下國君麻呂從五位上、无位別君廣麻呂從五位下、外從五位下高市連大國外從五位上、正六位上蓋高麻呂、吉田連兄人、並外從五位下。又授二品多紀內親王一品、從三位竹野王正三位、无位橘宿禰

て改む
○平婆賣、原本平を手に作る諸本に據て改む
○家子、寶字五年十二月紀に家兒に作る
○從二位巨勢朝臣、原本二を三に作る金本嘗本淀本に據て改む
○廿一日、閣本廿の字なし大赦の勅ありしは東大寺行幸の日卽ち朔日なれば閣本に無きに從ふべし
○大盧舍那佛、紀略に大の字なく舍を遮に作る
○國君麻呂、天平廿年二月紀(三五二頁)に見ゆ
○別君、錄右京皇別に別公建部公同祖日本武尊之後、山城皇別に別公彥坐命之後とあり何れの系なるか詳ならず

○益高麻呂、天應元年九月紀に益麻呂等三人賜姓吉水連とあるは同族なるべし
○天平感寶、上文の宣命に御代年號爾字加賜久止宣とある如く、陸奥國に黄金を出したるにより天平の下に感寶の二字を加へしなり
○大臣以下云々、上文の宣命に大御手物賜ふとある是なり
○貢黄金九百兩、神護二年六月百濟王敬福傳にも此事見ゆ參考すべし
〔五月〕合壒、原本壒を珍に作る今本閣本曾本に據て改む
○碓氷郡、原本氷を水に作る諸本に據て改む
○石上部君、仁賢紀三年に石上部舍人を置くとあるは石上部君とは同じからず勝寶五年七月紀に石上部君嶋君等上毛野坂本君姓を賜ふとあり坂本君は豐城入彦命の後なり諸弟も此同族なるべし
○生江臣、姓氏錄左京皇別に生江臣石川朝臣同祖武内宿禰之後とあり
○安久多、原本久を人に作る今本曾本流本に據て改む

通何能正四位上、改天平廿一年爲天平感寶元年、○戊申、大臣以下、諸司仕丁以上、賜祿各有差、京畿内僧尼等施物、亦各有差、○辛亥、正六位上丹羽臣眞咋授外從五位下、○乙卯、陸奥守從三位百濟王敬福貢黄金九百兩、○五月戊辰、无位御浦王授從四位下、正六位上中臣伊勢連大津外從五位下、又從七位上陽侯史令珍、正八位下陽侯史令珪、從八位上陽侯史令璆、從八位下陽侯史人麻呂、並授外從五位下、四人、並是眞身之男、各貢錢千貫也、○戊寅、上野國碓氷郡人外從七位上石上部君諸弟、尾張國山田郡人外從七位下生江臣安久多、伊豫國宇和郡人外大初位下凡直鎌足等、各獻當國國分寺知識物、並授外從五位下、○庚寅、鰥寡孤獨、及疾疹之徒、不能自存者給穀五斗、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、力田人者、无位敘位一階、陸奥國者免三年調庸、小田郡者永免、其年限者待後勅、自餘諸國者、國別一年免、二郡調庸、毎年相替、周盡諸郡、又咸免天下今年田租、○閏五月甲午朔、從四位上橘宿禰奈良麻呂從五位上阿倍朝臣嶋麻呂、並爲侍從、正五位下多治

改む

○凡直、原本直を眞に作る金本曾本淀本に據て改む姓氏錄に見えず延暦十年九月紀に讃岐國寒川郡人凡直千繼等の請に依て讃岐公の姓を賜ふとあり景行天皇々子神櫛別命の後なり

（閏五月）從五位下紀朝臣男楫、從五位以下十四字金本曾本淀本に據て補ふ

○累二儀之覆載、二儀は天地を云天は覆ひ地は載す其覆載の恩澤に係累を及ぼすを云

○兆庶之具瞻、毛詩小雅節南山章に赫々師尹民具爾瞻と見え上位に居る者は衆庶の倶に瞻仰する所となるを云

○煌灼、原本煌を惶に作る金本に據て改む、煌灼は照りかゞやき燒くが如く熱きを云

○勤劬、劬は勞也勤め苦しむを云原本勤を勸に作る金本曾本に據て改む

○渙汗、原本渙を漁に作る金本閣本曾本に據て改む易渙卦に渙汗其大號と見え注に汗出於膚一出不反喩王者令出唯行

比眞人屋主爲左大舍人頭、從五位下紀朝臣男楫爲兵部少輔、從五位下柿本朝臣市守爲丹後守、從五位下小野朝臣田守爲大宰少貳、○壬寅、於宮中度一千人、○癸卯、詔、朕以寡薄恭承寶祚、恒恐累二儀之覆載、虧兆庶之具瞻、徒積憂勞、政事如闕、神之貽咎、實由朕躬、此者、時屬炎蒸、寢膳乖豫、百寮煌灼、左右勤劬、今欲克順天心消除灾氣、乃求改往之術、深謝在予之愆、則宜流渙汗之恩、施蕩滌之政、可大赦天下、自天平感寶元年閏五月十日昧爽已前、大辟已下咸赦除之、但殺其父母、及毀佛尊像者、不在此例、○甲辰、陸奥國介從五位下佐伯宿禰全成、鎭守判官從五位下大野朝臣横刀、並授從五位上、大掾正六位上余足人、獲金人上總國人丈部大麻呂、並從五位下、左京人无位朱牟須賣外從五位下、私度沙彌小田郡人丸子連宮麻呂授法名應寶入師位、冶金人左京人戸淨山大初位上、出金山神主小田郡日下部深淵外少初位下、是日、伊勢齋王爲遭親喪、自齋宮退出、○癸丑、詔捨大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各絁五百疋、綿一千屯、布一千端、稻一十万束、墾田地一百町、法

隆寺絁四百疋、綿一千屯、布八百端、稻一十万束、墾田地一百町、弘福、四天王二寺、各絁三百疋、綿一千屯、布六百端、稻一十万束、墾田地一百町、崇福、香山藥師、建興、法華四寺、各絁二百疋、布四百端、綿一千屯、稻一十万束、墾田地一百町、因發御願曰、以花嚴經爲本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必爲轉讀講說、悉令盡竟、遠限日月、窮未來際、今故以茲資物、敬捨諸寺、所冀太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道、飛驒國大野郡大領外正七位下飛驒國造高市麻呂、上野國勢多郡小領外從七位下上毛野朝臣足人、各獻當國國分寺知識物、並授外從五位下、○丙辰、天皇遷御藥師寺宮、爲御在所、○壬戌、中納言正三位大伴宿禰牛養薨、大德咋子連孫、贈大錦中小吹負之男、

一發不可復收也とあり　○蕩滌之政、原本滌を條に作る閣本に據て改む文選東京賦に因造化之蕩滌體元立制繼天而作、李善注に殷湯改制易正蕩滌故俗とあり蕩は滌除也滌は洗濯して穢を去るを曰ふと字書に見え大政を行ひて罪人を滌除する意　○丈部、原本丈を大に作る諸本に據て改む　○朱忠實、朱は延曆六年四月紀に唐人朱政等賜榮山忌寸とあると同姓なり　○入師位、僧尼令集解所引養老四年二月四日格に凡僧尼給公驗其數有三初度給一、受戒給二、入師位給三、とあり私に度せるものは律に依て科斷すべきを之を免じ公驗を給て師位に入れられしなり　○日淨山、五年三月紀に百濟人日淨道等四人賜姓係年連と見ゆ淨山は其一族なるべし　○出金山神主、神名式陸奥國小田郡黄金山神社の神主なり今遠田郡涌谷村に黄金迫と云地あり即是なりと云　○伊勢齋王、一代要記に是年九月六日從三位三原王女小宅女王を齋宮と爲すとある是なり　○弘福四天王二寺云々、以下墾田地一百町まで三十一字金本谷本淀本に據て補ふ　○崇福、志賀山寺　○香山藥師、三代實錄元慶四年十一月紀に見ゆ大和志に十市郡興善寺在戒下村一名香山寺　○建興、元慶六年八月紀に宗岡朝臣木村言す興寺是先祖大臣宗我稻目宿禰所建也とあり狩谷氏曰欽明十三年紀云稻目宿禰云々淨捨向原家爲寺者是也　○法華、大和國法華寺、即ち國分尼寺なり、華は原本花に作る諸本に據て改む　○花嚴經、聖教目錄に華嚴經六十卷東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯と云　○窮未來際、祖庭事苑に三際、過去未來見在とあり未來際を窮むるまで永遠にの意　○法藥薰質、金本閣本谷本淀本薰を重に作る　○快樂、

原本快を快に作る淀本に據て改む　○法界有情、法界は四法界卽宇宙有情は衆生なり　○飛驒國造、國造本紀に斐陀國造志賀高穴穗朝御世尾張連祖瀛津世襲命孫大八埼命定賜國造とあり　○小領、卽ち少領なり　○藥師寺宮、二年二月紀にも見ゆ　○大伴宿禰牛養薨、和銅元年正月始見遠江守攝津大夫參議兵部卿等を歷任、公卿補任に見ゆ　○咋子連、原本咋を昨に作る金本曾本淀本に據て改む推古紀に大伴咋連とあり　○小吹負、原本負を貟に作るは誤れり天武紀十二年八月に大伴連男吹負卒以壬申年之功贈大錦中とあり大日本史注に云るが如く小吹負卽ち男吹負なり

(七月)神魯伎、原本魯下美字あるは衍なり諸本に據て削る金本閣本曾本淀本伎を棄に作る
○命乃、原本乃を天に作る諸本に據て改む
○奉乃隨、奉は用言なれば其下に乃字あるはいかゞなれど次々の詔にも立乃後仁、敎賜乃末仁等例あり
○天日嗣、閣本天の下に川字あり
○所念行佐久止、原本佐を波に作り久止の位地違へり金本に據て改む
○平城乃宮爾云々、元正天皇
○詔之久、聖武天皇に詔給ひしなり
○不改自、自の下に伎の字脫せるなるべし
○定賜都流、前詔の例に據れば都は部の誤なるべし解には部に作れり
○御命爾坐世、原本世を止に作れるは誤なれば改む

○秋七月癸巳朔甲午、皇太子受禪卽位於大極殿、詔曰、現神止御宇倭根子天皇可御命良麻止宣御命乎、衆聞食宣、高天原神積坐皇親神魯伎神魯美命以、吾孫乃命乃將知食國天下止、言依奉乃隨、遠皇祖御世始而、天皇御世御世聞看來食國天日嗣高御座乃業止奈母、隨神所念行佐久止勅天皇我御命乎、衆聞食勅、平城乃宮爾御宇之天皇乃詔之久、挂畏近江大津乃宮爾御宇之天皇乃、不改自常典等初賜比定賜都流法隨、斯天日嗣高御座乃業者、御命爾坐世、伊夜嗣爾奈賀御命聞看止、勅夫御命乎畏自物受賜理坐天、食國天下乎惠賜比治賜布間爾、萬機密久多久志天、御身不敢賜有禮、隨法天日嗣高御座乃業者、朕子王爾授賜止勅天皇御命乎、親王等王臣等百官人等、天下乃公民衆聞食宣、又天皇御命良末止勅命乎、衆聞食宣、挂畏我皇天皇、斯

○伊夜嗣嗣、原本嗣を詞に作る金本舊本從本に據て改む
○奈賀御命、汝命にて聖武天皇を指して申せり
○萬機、用明紀にヨロヅノマツリゴトと訓り
○不敢爲有禮、不敢は不堪に同じ、禮、原本日に作れるを金本舊本從本に據て改む、あれはじの意なるたゞ嫌なきしなり
○朕子王、孝謙天皇
○天皇大命、始めより是迄は聖武天皇の詔なり
○又天皇御命、以下孝謙天皇の詔なり上とは別なるを引付けて宣れるなり又とは上の聖武天皇の詔に對して新天皇の大命と云るなり
○我皇天皇、聖武天皇なり
○受賜理云々、孝謙天皇に承りて仕奉れさて斯業を負せ賜へりとなり
○負賜閇、負せ賜へばの意
○天皇朝廷、こゝも天皇をさして直に朝廷と申せるなり原本廷を庭に作る今本舊本に據て改む
○戴持、恐まりて持つ意、原本戴を載に作る今

天日嗣高御座乃業乎受賜弖仕奉止負賜閇、頂爾受賜理恐美進毛不知退毛不知爾恐美坐久止宣天皇御命乎衆聞食勅、故是以御命坐勅久、朕者拙劣雖在親王等乎始而王等臣等諸、天皇朝廷立賜留食國乃政乎戴持而明淨心以、誤落言無助仕奉爾依弖之天下者平久安久治賜比惠賜布閇支物爾有止奈毛、神隨所念坐久止勅天皇御命乎衆聞食宣、既而授正四位上紀朝臣麻路從三位、從五位下久世王、伊香王、並從五位上、正四位下多治比眞人廣足正四位上、從四位下石川朝臣年足、紀朝臣飯麻呂、吉備朝臣眞備、並從四位上、正五位上巨勢朝臣堺麻呂、背奈王福信、並從四位下、正五位下多治比眞人國人正五位上、從五位上佐伯宿禰毛人、鴨朝臣角足、并正五位下、從五位下大伴宿禰犬養、藤原朝臣千尋、並從五位上、正六位上御方大野、鴨朝臣虫麻呂、並從五位下、以正三位藤原朝臣仲麻呂爲大納言、從三位石上朝臣乙麻呂、紀朝臣麻呂、正四位上多治比眞人廣足、並爲中納言、正四位下大伴宿禰兄

麻呂、從四位上橘宿禰奈良麻呂、從四位下藤原朝臣清河、並爲參議。是日、改感寶元年、爲勝寶元年。○乙未、從六位上阿倍朝臣石井、正六位上山田史日女嶋、正六位下竹首乙女、並授從五位下、並天皇之乳母也。○乙巳、定諸寺墾田地限、大安、藥師、興福、大倭國法華寺、諸國分金光明寺、寺別一千町、大倭國國分金光明寺四千町、元興寺二千町、弘福、法隆、四天王、崇福、新藥師、建興、下野藥師寺、筑紫觀世音寺、寺別五百町、諸國法華寺、寺別四百町、自餘定額寺、寺別一百町。○八月癸亥、正六位上阿倍朝臣綱麻呂授從五位下、外正五位下小槻山君廣虫正五位下、外從五位下出雲臣屋麻呂外從五位上、從六位上田邊史廣濱外從五位下、○辛未、以從五位下大原眞人麻呂、石川朝臣豐人、並爲少納言、從五位下大伴宿禰古麻呂爲左少弁、大納言正三位藤原朝臣仲麻呂爲兼紫微令、參議正四位下大伴宿禰兄麻呂、式部卿從四位上石川朝臣年足、並爲兼大弼、從四位下百濟王孝忠、式部大輔從四位下巨勢朝臣堺麻呂、中衞少將從四位下背奈王福信、並爲兼少弼、正五位上阿倍朝臣虫

本曾本淀本に據て改む
○依氏之、之は金本曾本淀本に據て補ふ強むる意の助辭
○御命乎、乎は諸本に據て補ふ
○鴨朝臣、鴨字は勝寶八年五月乙亥紀に據て補ふ
○竹首乙女、寶字五年六月紀多氣宿禰弟女、神護三年正月紀竹宿禰乙女に作る
○定諸寺墾田地限、閏五月詔して墾田地を喜捨す是に至て其地限を定むるなり
○法華寺、原本華を花に作る諸本に據て改む
○新藥師、十五大寺の一、大和志に添上郡條に在奈良清水町一名香藥寺
○定額寺、定數の官寺を云
○(八月)外正五位下、原本正を從に作る天平十七年正月紀に據て改む
○出雲臣屋麻呂、屋の字は天平十九年六月紀に據て補ふ
○廣濱、原本濱を瀨に作る金本曾本淀本に據て改む
○紫微令、寶字四年六月

後紀高仁皇后傳に高野天皇受禪改皇后宮職曰紫微中臺とあり紫微中臺は皇后宮職を改稱せるものにて紫微令は其長官なり蓋此時仲麿の爲により唐制を摸して之を設けたるなり唐書百官志を按ずるに開元元年(和銅六年)中書省を改て紫微省とし中書令を紫微令とせり今皇后職を改て紫微中臺と稱するは其名を假用ひしのみにて職掌は同じからず考證に據此下疑脫中衞大將四字、寶字八年九月仲麻呂傳云勝寶元年至正三位大納言兼紫微令中衞大將、但行年無月補任(公卿補任を云)係是月、則是時爲之也闕矣とあり
○正五位下佐伯宿禰毛人、原本下を上に作る七月紀及三年正月紀に據て改む
○兵衞率、原本率を卒に作る諸本に據て改む
○土作、閣本土を士に作る
○戸主、原本主を王に作る諸本に據て改む
○繩麻呂、原本繩を綱に作る金本谷本淀本に據て改む

麻呂、伊豫守、正五位下佐伯宿禰毛人、左兵衛率、正五位下鴨朝臣角足、從五位下多治比眞人土作、爲兼大忠、外從五位上出雲臣屋麻呂、衛門員外佐、外從五位下中臣丸連張弓、吉田連兄人、葛木連戸主、並爲少忠、從五位下藤原朝臣繩麻呂、爲侍從、從五位下御方大野、爲圖書頭、從五位下別公廣麻呂、爲陰陽頭、從三位三原王、爲中務卿、從四位上安宿王、爲大輔、正五位上葛井連廣成、從五位下藤原朝臣眞從、並爲少輔、中納言從三位紀朝臣麻路、爲兼式部卿、從五位下多治比眞人犢養、爲少輔、神祇大副從五位上中臣朝臣益人、爲兼民部大輔、從五位下阿倍朝臣鷹養、爲主計頭、從五位下紀朝臣廣名、爲主稅頭、正五位下大伴宿禰稻君、爲兵部大輔、從五位上大伴宿禰犬養、爲山背守、從五位上石川朝臣名人、爲上總守、外從五位下茨田宿禰枚麻呂、爲美作守、○乙亥、從四位下尾張宿禰小倉卒、○壬午、大隅薩摩兩國隼人等貢御調、并奏土風歌儛、○癸未、詔授外正五位上曾乃君多利志佐從五位下、外從五位下前君乎佐外從五位上、外正六位上曾縣主岐直志自羽志、加禰保佐々、並

○茨田宿禰枚麻呂、原本枚を杪に作る天平十七年四月紀に據て改む　○尾張宿禰小倉卒、天平九年二月紀に始見、同十九年三月尾張國國造となる　○曾縣主、曾は曾乃君の曾に同じく大隅贈於郡是なり　○岐直志自羽志加禰保佐々、金本曾本淀本には自を目に作り佐一字なし孰れか是なるを知らず又語意詳ならざれば三人なるか四人なるかも明かならず

（九月）制紫微中臺官位、八月辛未令以下を任命せられしが是に至て官位の相當及職員の人數を定めらるゝ之を職員令と比較するに大宰帥は從三位、中務卿は正四位上、七省卿は正四位下にていつれも紫微令より低し其員數も諸省共に大輔少輔大丞各一人小丞二人なるを大弼二人少弼三人大忠四人少忠四人とし他省に凌駕せり　（十月）智識寺、河內志に智識廢寺在大縣郡大平寺村　○石川、同に石川郡石川、西條東條二水合、女村經一須賀、曰石川とあり下流は大和川に入る　○志紀、今河內國南河內郡に入る　○大縣、今同中河內郡に入る原本縣を懸に作る金本曾本淀本及類史に據て改む　○安宿、今河內國中河內郡に入る　○年百、金本閣本淀本百年に作る　○賜絁綿、金本曾本淀本賜字なし　○大郡宮、攝津志に高津宮一名難波宮、又大宮、又大郡宮、夕忍照宮在大坂安國寺坂北有小祠此其古蹤とあり　○石津王、寶字元年正月藤原朝臣を賜ひて大納言仲麿の子とす　○倉首、寶字五年六月紀藏毗登に作る

（十一月）南藥園新宮、大和志に在添下郡郡山

外從五位下。○九月戊戌、制紫微中臺官位、令一人正三位官、大弼二人正四位下官、少弼三人從四位下官、大忠四人正五位下官、少忠四人從五位下官、大疏四人從六位上官、少疏四人正七位上官。○甲辰、正五位下藤原朝臣袁比良女授從四位下。○冬十月庚午、行幸河內國智識寺、以外從五位下茨田宿禰弓束女之宅爲行宮。○乙亥、幸石川之上、志紀、大縣、安宿三郡百姓、年百以下、小兒已上、賜綿有差、又免三郡百姓所負正稅本利、自餘諸郡免利收本、陪從諸司、賜綿亦各有差。○丙子、河內國寺六十六區、見住僧尼及沙彌沙彌尼、賜絁綿各有差、外從五位下茨田宿禰弓束女授正五位上。是日車駕還大郡宮。○丙戌、无位石津王授從五位下、正七位上倉首於須美外從五位下。

○十一月辛卯朔、八幡大神禰宜外從五位下大神社女、主神司從八位

○[illegible]八幡宮[illegible]此とあり

○秋篠王、天平勝寶六年閏十月丘基眞人の姓を賜ひし[illegible]眞人の[illegible]ふ

○古慈悲、金本曾本淀本悲を裴に作る

○軍毅、諸國軍團の大毅少毅を云

○又國司及軍毅、又の字は金本曾本淀本に據て補ふ

○己酉、十九日なり[illegible]甲寅の條と共に乙卯の上にあるべし

○八幡大神託宣、[illegible]に六年十一月紀に藥師寺僧行信及八幡神宮大神社女を指[illegible]大神朝臣多麻呂等に倣て厭魅せるを之に當るに大神の託宣ありて京に向はまほしきを宣揚へりて然るも社女田麻呂等の遺言なるべしと解に云り

○(十二月)丁亥、廿七日なり下文又丁亥あり恐く

下大神田麻呂二人賜大神朝臣之姓。○乙卯、於南藥園新宮大嘗、以因幡爲由機國、美濃爲須岐國。○丙辰、宴五位已上、授從三位三原王正三位、從五位上藤原朝臣乙麻呂正五位上、正六位上高橋朝臣男河、高橋朝臣三綱、並從五位下、從五位上中臣朝臣益人正五位下、无位秋篠王、正七位下當麻眞人子老、並從五位下。○丁巳、宴五位已上、賜祿有差。○戊午、賜饗諸司主典已上、賚祿有差、番上人等亦在祿例。○己未、由機須岐國司、從五位上小田王授正五位下、正四位下大伴宿禰兄麻呂正四位上、從四位下大伴宿禰古慈悲、背奈王福信、並從四位上、正六位上津嶋朝臣雄子從五位下、軍毅已上敍位一級、又國司及軍毅百姓賜饗并祿。○庚申、正五位下小田王授正五位上。是日、還御大郡宮。○己酉、八幡大神託宣向京。○甲寅、遣參議從四位上石川朝臣年足、侍從從五位下藤原朝臣魚名等、以爲迎神使、路次諸國差發兵士一百人以上、前後駈除、又所歷之國、禁斷殺生、其從人供給、不用酒宍、道路淸掃、不令汚穢。○十二月丁亥、外從五位上高市連大國正六位上內藏伊美吉黑

は乙亥の誤ならむか乙亥は十五日なり
○並授、授字は下文外從五位下の上に在りしを例に據て此に移す
○平群郡、河内路より平群郡を經て入京せらる故に此に奉迎せしめらる
○梨原宮、江家次第春日祭途中次第に申日著梨子原とある地にて今の奈良市内侍原なるべしとの説あれど宮南とあれば内侍原にはあらざるべし
○八幡大神禰宜、八幡の二字は諸本に據て補ふ
○尼大神朝臣社女、原本尼大を左太に作り神の字なし諸本及類史に據て改め補ふ
○渤海、渤海樂は卽高麗樂なり
○呉樂、職員令雅樂寮義解に伎樂謂呉樂とあり伎樂は推古紀二十年及天武紀朱鳥元年四月紀に見ゆ
○田儛、天平十四年正月紀に見ゆ
○久米儛、神武紀に戊午年十二月長髓彦を撃ちし時の御製にみづ〳〵し久米の子等が云々とあり此時の狀を摸して製れる舞

人、佐伯宿禰今毛人、並授從五位下、正六位上柿本小玉、從六位上高市連眞麻呂、並外從五位下、○戊寅、遣五位十人、散位廿人、六衛府舍人各廿人、迎八幡神於平群郡、是日入京、卽於宮南梨原宮、造新殿以爲神宮、請僧四十口、悔過七日、○丁亥、八幡大神禰宜尼大神朝臣社女、其輿紫色、一同乘輿、拜東大寺、天皇、太上天皇、太后、同亦行幸、是日、百官及諸氏人等咸會於寺、請僧五千、禮佛讀經、作大唐渤海呉樂、五節田儛、久米儛、因奉大神一品、比咩神二品、左大臣橘宿禰諸兄奉詔白神曰、天皇我御命爾坐、申賜止申久、去辰年、河内國大縣郡乃智識寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天、則朕毛欲奉造止思登毛、得不爲之間爾、豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閇止勅久、神我天神地祇乎率伊左奈比天、必成奉无、事立不有、銅湯乎水止成、我身遠草木土爾交天、障事無久奈佐牟止勅賜奈我良成奴禮波、歡美貴美奈毛念食須、然猶止事不得爲天、恐家禮登毛御冠獻事乎恐美恐美毛申賜久止申、尼社女授從四位下、主神大神朝臣田麻呂外從

なり貞觀元年十一月大嘗會に大伴佐伯兩氏久米舞を舞ひし事見え儀式大嘗祭儀にも見ゆ此舞久しく絶えたるを文政大嘗會に再興明治十一年より毎年紀元節毎に行はせらる
○奉大神一品、神祇に位階を授け奉る事これを始とす二年二月戊子の條と併せ考ふるに舍親王諸王及諸臣と同じく封戶位田を充奉りて祭資を豐にせむとするより起れるなるべし下文戊子の條を參看すべし
○比咩神、神名式に豐前國宇佐郡比賣神社名神大とある是なり
○奉詔白神、解に神上疑くは大字を脫すとあれど四字の句にて元より無かりしなるべし類史にもなし
○申賜止申久、總て神に白し給ふ詔は尊みて申すと詔給ふ例なり但し此詔は太上天皇のなり
○去辰年、天平十二年なり此年行幸の事紀に見えざれど同年二月難波に行幸の事見えたれば其途次幸し給ひしなるべし
○智識寺、其後天平勝寶

五位下、施東大寺封四千戶、奴百人、婢百人、又預造東大寺人、隨勞敍位有差、

元年十月、同八歳二月兩度行幸の事見えたり　○禮奉天、禮字こゝはヰロカミと訓べし佛書に禮拜、頂禮などいへばこゝに此字を用ひたるなるべし　○則朕毛、則は其時に遠に造奉らむと思召しゝ意　○思登毛、思ひしかどもと云べきが如くなれども次の不給之の之までつゞけて思ひしかどもの意となるなり　○廣幡乃八幡大神、神名式に豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮（名神大）とある是なり廣幡は八幡の冠辭なり白波乃彌奈阿和命神社鮑玉白珠比咩命神社などの類なり八幡と稱ふる起源は託宣集に八流の幡天より降ることあるによれるか確なる據なし此神名は後に廢れて專ら八幡大菩薩と音讀するに至れりされど地名には多くヤハタと稱せり　○爾申賜閇止、解に此五字此處には更にかなはず、かくありては上よりの續きも聞えず次の神我にもかなはず之を除くべしと云りされど諸本何れも同じければ輙く改め難し按に豐前國以下障事無久奈佐牟までは神勅を述べたるにて八幡大神爾申賜閇は八幡大神に祈請し給へと宣給ひ其神勅に神我云々と仰せられかくて其勅の如く成給へりとの意なるべきか　○神我、天皇の皇朕と詔給ふに同じ神御自らの事をかく宣給ふなり　○銅湯乎云々、銅湯は銅を熱し溶かし湯なり其熱湯を冷水となすを得べければ難き事なりとも成さば成るものぞとなり　○我身遠云々、いかなる艱難をなしてもの意、交は草木泥土と等しくなすを云　○障事無久云々、無事に成就せしめむとなり　○勑賜奈我良、勑し給へるまゝにとなり　○成奴禮波、佛像の成就したるを云　○念食須、原本須を流に誤れるを改む　○然、サテと訓むべしサテは然してなり　○猶、借字にて猷（ナホ）なり、猶止事はたゞに止むことはの意なり　○恐家禮登毛、此大神は一般の神社とは異にして天皇御祖先の御裔に坐すが故に殊に崇め給ふなり　○恐美。原本美を毛に作る上文の例に據て改む

續日本紀卷第十七

○孝謙皇帝、御諱は阿倍、聖武天皇の御女、御母は光明皇后、[illegible]第二女なり、天平十[illegible]皇太子と爲り天平勝寶元年七月受禪即位したまふ、[illegible]寶字二年八月勅に百官[illegible]云々上尊號、伏乞奉稱上臺寶字稱德孝謙皇帝、[illegible]淳仁天皇に御讓位の時に百官より上りしなり

【天平勝寶二年】[illegible]饗于此、未詳と云ふは非なり供奉の五位以上は大郡宮に於て[illegible]、自餘の五位は平城藥園宮に於て饗を給はりしなり何等疑ふべきことなし

○左降、理由を書さゞれ

續日本紀卷第十八

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平勝寶二年正月盡四年十二月

寶字稱德孝謙皇帝　出家歸佛、更不奉諡、因取寶字二年百官所上尊號稱之、

二年春正月庚寅朔、天皇御大安殿受朝、是日、車駕還大郡宮、宴五位以上、賜祿有差、自餘五位已上者、於藥園宮給饗焉、○己亥、左降從四位上吉備朝臣眞備爲筑前守、○乙巳、授正三位藤原朝臣仲麻呂從二位、正四位上多治比眞人廣足從三位、從四位上多治比眞人占部正四位下、從四位下平群朝臣廣成、藤原朝臣永手、並從四位上、正五位下藤原朝臣巨勢麻呂正五位上、從五位下大倭宿禰小東人從五位上、外從五位下大藏忌寸廣足、調連馬養、正六位上下毛野朝臣多具比、並從五位下、正六位上秦忌寸首麻呂、大石村主眞人、大原史遊麻呂、並外從五位下、左大臣正一位橘宿禰諸兄賜朝臣姓、○丙辰、從四位上背奈王福信等

六人賜高麗朝臣姓、造東大寺官人已下、優婆塞已上、一等卅三人叙位三階、二等二百四人二階、三等四百卅四人一階、○二月庚申朔癸亥四、天皇御大安殿、出雲國造外正六位上出雲臣弟山奏神齋賀事、授弟山外從五位下、自餘祝部叙位有差、並賜絁綿亦各有差、○戊辰九、天皇從大郡宮移御藥師寺宮、○乙亥十六、幸春日酒殿、唐人正六位上李元環授外從五位下、○壬午廿三、益大倭金光明寺封三千五百戸、通前五千戸、○戊子廿九、奉充一品八幡大神封八百戸、前四百廿戸、今加三百八十戸、位田八十町、前五十町、今加卅町、二品比賣神封六百戸、位田六十町、

○三月己丑朔戊戌十、駿河國守從五位下楢原造東人等、於部内盧原郡多胡浦濱、獲黄金獻之、練金一分、沙金一分、於是東人等賜勤臣姓、又賜中衛員外少將從五位下田邊史難波等上毛野君姓、○庚子十二、以正四位下多治比眞人占部

と寶龜六年十月壬戌眞備傳に據れば藤原廣嗣の逆魂息まざるに因れり　○巨勢麻呂、會本淀本廣成に作る　○大藏忌寸廣足、天平十二年十一月甲辰外從五位上に叙せらる此に下とあるは上の誤歟　○大石村主、萬葉三に生石村主眞人に作る　○大原史、錄左京諸蕃に大原史漢人西姓令貴之後とあり　○福信、原本信の下守の字あり金本に據て削る　○高麗朝臣、紀略朝臣を連に作る錄左京諸蕃高麗朝臣高句麗王好台七世孫延興王之後とあり

（二月）弟山、原本弟を等に作る閣本及下文に據て改む下同じ金本第に作るも弟の訛なり　○神齋賀事、前後三年の神齋をして壽詞を奏す故に神齋賀事と云　○藥師寺宮、元年閏五月丙辰紀に見ゆ　○春日酒殿、梁塵愚按抄に酒殿神酒ツクル所也大和志に春日社酒殿神祠二前卽此とあり　○李元環、寶字五年十二月紀に賜姓李忌寸錄左京諸蕃に淸宗宿禰唐人正五位下李元環之後とあり　○奉充一品云々、祿令に凡食封者一品八百戸二品六百戸、田令に凡位田一品八十町二品六十町とあり之に據るに親王の一品又は二品と同額の封戸位田を寄奉らる凡そ神祇に品位を授奉らるゝは最初此意に出でしなるべし、然るに後漸次に諸神に之を授奉らるゝに至り實際行はれ難きより位記をのみ授奉らるゝに至りしなるべし

（三月）楢原造、姓氏錄に見えず　○盧原郡、抄國郡部駿河國盧原（伊保波良）郡とあり　○多胡浦濱、萬葉三山部赤人の歌に田兒之浦從打

爲攝津大夫、從五位下紀朝臣小楫爲山背守、從四位下百濟王孝忠爲出雲守、從五位下内藏忌寸黑人爲長門守、從五位上大伴宿禰犬養爲播磨守、正五位上多治比眞人國人、藤原朝臣乙麻呂、並爲大宰少貳、○夏四月戊午朔、正六位上佐味朝臣乙麻呂贈從五位下、正六位上高向村主老授外從五位下、○辛酉、勅、比來之間、緣有所思、歸藥師經、行道懺悔、冀施恩恕、兼欲濟人、盡洗瑕穢、更令自新、仍可大赦天下、并免今年四畿内調、其私鑄錢、及犯八虐、故殺人、強盜竊盜、常赦所不免者、不在赦限、但入死者降一等、又中臣卜部紀奥平麻呂、減配中流、

○五月乙未、於中宮安殿、請僧一百、講仁王經、并令左右京、四畿内、七道諸國講說焉、○辛丑、以從三位百濟王敬福爲宮内卿、從五位上藤原朝臣千尋爲美濃守、外從五位下壬生使主宇太麻呂爲但馬守、○丙午、伊

一而見者云々と見ゆ類聚國史に胡を故に作り浦の字なし紀略には胡を古に作る
○(注)錬金、孝謙紀にコナカネと訓り熟金の意錬は錬の誤なりと云
○沙金、金に山金沙金の二種あり山金は鑛山より採掘し沙金は流水の沙中に混りて産す又之を生金とも云大なる者を狗頭華小なるを麩麥金糖金と稱す(本草綱目譯義)
○大宰、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ
○勤臣、錄大和神別に伊蘇志臣は滋野宿禰同祖天道根命之後とあり
(四月)佐味朝臣、錄右京皇別に上毛野朝臣同祖豐城入彦命之後とあり乙麻呂贈位の理由未詳　○高向村主、錄右京諸蕃に高向村主魏武帝太子文帝之後とあり　○藥師經、諸譯あれど此に見ゆるは唐の玄奘譯藥師瑠璃光如來本願功德經一卷を云るか　○恩恕、原本恩を思に作る金本皆本淀本に據て改む　○中臣云々、事實を載せざれば考ふる所なし文字も誤脱あるべきか此まゝにて意通ぜず　○卜部、原本卜を占に作る諸本及類史に據て改む　○紀奥平麻呂、奥は直の誤かといふ平は金本皆本にイ本乎に作る　○減中流、遠流近流の對稱、流罪の遠近を定むること神龜元年三月庚申に定諸流配遠近之程云々諏方伊豫爲中と見ゆ

(五月)[illegible]ごある是なり
○中山寺、拾芥抄仲山寺

蘇志臣東人之親族卅四人、賜姓伊蘇志臣族。○辛亥（廿四）、震中山寺塔幷步廊盡燒。京中驟雨、水潦汎溢。又伎人、茨田等堤往往決壞。○六月（丁巳朔）癸亥（廿七）、備前國飢、賑給之。○秋七月（丁亥朔）甲辰（十八）、攝津國王廣玉大魚賣、參河國海直玉依賣一產三男、並給正稅三百束、乳母一人。○八月（丙辰朔）庚申（五）、正六位上大伴宿禰伯麻呂、外從五位下葛木連戶主、並授從五位下。正四位下日置女王、從四位上丹生女王、從四位下春日女王、並正四位上。從四位下難波女王從四位上。无位山代女王從五位下。從五位下藤原朝臣家子正五位上。无位當麻眞人比禮從五位下。○辛未（十六）、攝津國住吉郡人外從五位下依羅我孫忍麻呂等五人、賜依羅宿禰姓。神奴意支奈、祝長月等五十三人、依羅物忌姓。○九月丙戌朔、中納言從三位兼中務卿石上朝臣乙麻呂薨。左大臣贈從一位麻呂之子也。正六位上赤染造廣足、赤染高麻呂等廿四人、賜常世連姓。○己酉（廿四）、任遣唐使。以從四位下藤原朝臣清河爲大使、從五位下大伴宿禰古麻呂爲副使、判官主典各四人。

に作る攝津志に在二河邊郡中山寺村一と見ゆ今同國川邊郡長尾村大字に中山寺あり

○伎人、攝津志住吉郡古蹟に伎人隄喜連村に在りといひ喜連村上古屬二河州一とあり

○茨田、河內志茨田郡古蹟に茨田故堤自二伊加賀一歷二大間一至二池田村一故堤僅殘とあり此堤は上古より屢々史に出づ同郡枚方町より今の大阪市に至るまでの堤なり

（七月）王廣玉、金本王を玉に作り金イ本類史にはなし是なるに似たり廣玉の玉は原本王に作る金イ本に據て改む錄右京神別に額田部廣玉額田部宿禰同祖明日名門命十一世孫御支宿禰之後とあり廣玉は之に由あるか

○海直、原本直を眞に作る類史に據て改む神護景雲三年六月癸卯に海直溝長見ゆ證とすべし

○三男、原本男を見に作る金本從本に據て改む

（八月）依羅宿禰、錄攝津皇別に依羅宿禰日下部宿禰同祖彦坐命之後とあり依羅我孫は天平十八年閏九月戊子に見ゆ　○神奴、依羅神の奴の意ならむ　○依羅物忌、諸書に見えず物忌の職に奉仕せ

しに閉れる姓なり　(二)九月(三)石上朝臣乙麻呂薨、懷風藻に石上中納言者左大臣第三子也天平年中詔簡入唐使、選拜大使、然遂不往其後授從三位中納言(簡略)と見ゆ　○亦從云々、天平十九年八月丙寅紀に見ゆ但し上文には廿四人を十九人に作る二者何れか誤なるべし　○大使、紀略大の上に遣唐の二字あるも無きを可とす

(十月)(三)改葬於奈保山陵、天平二十年四月崩御丁卯佐保山陵に火葬し奉りしを改葬せられたり陵は諸陵式に奈保山西陵平城宮御宇淨足姫天皇在大和國添上郡、大和志に在法華寺村元明帝陵西、呼曰小奈邊と見ゆ今奈良市奈良坂なり

(十一月)(三)佐伯宿禰淨麻呂卒、天平八年正月辛丑紀に始見、同十八年九月己巳皇后宮大夫と爲る

(十二月)(二)四十疋、原本四十を二十に作る金本曾本に據て改む流本は三十に作る　○四十屯、金本曾本三十に作る　○今毛人、原本今を念に作る金本及元年十二月丁亥紀に據て改む　○柿本、原本本を奈に作る金本曾本流本に據て改む

【天平勝寶三年】(一)磯部、詳ならず和銅四年三月紀に伊勢國人磯部祖父

○冬十月丙辰朔、詔授正五位上藤原朝臣乙麻呂從三位、任大宰帥、以八幡大神教也、○癸酉、太上天皇改葬於奈保山陵、天下素服擧哀、○十一月己丑、左衞士督正四位下佐伯宿禰淨麻呂卒、○十二月癸亥、授駿河國守從五位下勤臣東人從五位上、獲金人无位三使連淨足從六位下、賜絁四十疋、綿四十屯、正稅二千束、出金郡免今年田租、郡司主帳已上進位有差、又遣大納言藤原朝臣仲麻呂就東大寺、授從五位上市原王正五位下、從五位下佐伯宿禰今毛人正五位上、從五位下高市連大國正五位下、外從五位下柿本小玉、高市連眞麻呂並外從五位上、

三年春正月戊戌、天皇幸東大寺、授木工寮長上正六位上神磯部國麻呂外從五位下、○庚子、天皇御大極殿南院宴百官主典已上、賜祿有差、踏歌歌頭女孺忍海伊太須、錦部河內並授外從五位下、○己酉、授正四位上大伴宿禰兄麻呂從三位、從四位上安宿王正四位下、從四位下大

市王從四位上、无位道守王從五位下、正五位上阿倍朝臣虫麻呂、多治比眞人國人並從四位下、正五位下佐伯宿禰毛人正五位上、從五位上多治比眞人家主、大倭宿禰小東人並正五位下、從五位下高丘連河內、百濟王元忠、大伴宿禰古麻呂、縣犬養宿禰古麻呂、中臣朝臣清麻呂並從五位上、外從五位下余義仁、土師宿禰牛勝、正六位上三國眞人千國、石川朝臣人成、爲奈眞人東麻呂、藤原朝臣濱足、正六位下石上朝臣宅嗣、並從五位下、正六位上甘味神寶、文忌寸上麻呂、河內忌寸廣足並外從五位下、正三位竹野女王從二位、從三位多藝女王正三位、從五位下置始女王正五位下、无位吳原女王從五位下、從五位下佐味朝臣稻敷從五位上。是日、一品多紀內親王薨、天武天皇之皇女也。○辛亥、賜正五位下大井王奈良眞人姓、无位垂水王、男三室王、甥三影王、日根王、名邊王、无位廬原王、男安曇王、三笠王、對馬王、物部王、牧野王、孫奈羅王、小倉王、无位猪名部王、男大湯坐王、堤王、菟原王、三上王、野原王、礪波王等三嶋眞人、无位御船王、淡海眞人、无位等美王、內眞人、无位壬生王、岡屋王

及高志あり
○大極殿南院、紀略此四字を南苑の二字に作る
○踏歌歌頭、歌手の長なるべし
○忍海伊太須、原本太を左に作る金本曾本及類史に據て改む寶字五年六月己卯紀忍海連致に作る
○百濟王元忠、原本元を允に作る金本曾本淀本に據て改む
○濱足、後濱成と改名す
○多紀內親王薨、天武紀に宍人臣大麻呂女擬媛娘生二二男二女二云々共四曰二託基皇女一とあり
○天武天皇、原本天を文に作る金本淀本に據て改む
○奈良眞人、姓氏錄に載せず世系詳ならず
○垂水王、原本乘氷に作る金本に據て改む
○三室王、原本室を寶に作る諸本に據て改む
○名邊王、恐くは誤脫あるべし
○廬原王、原本廬を盧に作る金本に據て改む
○牧野王、閣本牧を枚に作る
○大湯坐王、原本湯を陽に作り坐王倒置す金本淀

美和眞人、无位淸水王、男三狩王、海上眞人、田部王、春日眞人、文成王、甘南備眞人、平群王、常陸王、志紀眞人、

○二月庚午、遣唐使雜色人一百一十三人叙位有差。○乙亥、出雲國造出雲臣弟山奏神賀事、進位賜物。○己卯、典膳正六位下雀部朝臣眞人等言、磐余玉穗宮、勾金椅宮御宇天皇御世、雀部朝臣男人爲大臣供奉、而誤記巨勢男人大臣、眞人等先祖巨勢男柄宿禰之男有三人、星川建日子者、雀部朝臣等祖也、伊刀宿禰者、輕部朝臣等祖也、乎利宿禰者、巨勢朝臣等祖也、淨御原朝廷定八姓之時、被賜雀部朝臣姓、然則巨勢雀部、雖元同祖、而別姓之後、被任大臣、當今聖運、不得改正、遂絕高名之緒、永爲無源之氏、望請、改巨勢大臣、爲雀部大臣、流名長代、示榮後胤、大納言從二位巨勢朝臣奈氐麻呂、亦證明其事、於是下知治部、依請改正、

本等に據て改む　○三嶋眞人、錄左京皇別に三嶋眞人出自諡舒明皇子賀陽王也とあり　○御船王、延暦僧錄に淡海居士卽三船也幼而出家名元開勝寶三年勅令還俗賜姓とあり　○淡海眞人、錄左京皇別に淡海眞人出自諡天智皇子大友皇子也　○內眞人、姓氏錄に載せず世系詳ならず　○美和眞人、姓氏錄に載せず世系詳ならず　○海上眞人、錄左京皇別に出自諡敏達孫百濟王　○春日眞人、錄右京皇別に敏達天皇皇子春日王之後　○文成王、考證に或日佐爲王之子按佐爲王天平九年賜姓橘宿禰其子稱王可疑とあり　○甘南備眞人、錄左京皇別に出自諡敏達皇子難波王也　○志紀眞人、姓氏錄に載せず世系詳ならず

(二月)一十三人、一の字は金本曾本淀本に據て補ふ　○弟山、原本弟を等に作る金本閣本及紀略に據て改む　○雀部朝臣、錄左京皇別に雀部朝臣巨勢朝臣同祖建內宿禰之後也　○勾金椅宮、原本椅を崎に作る金本曾本淀本に據て改む　○譏記、原本記を紀に作る金本曾本淀本に據て改む　○朝廷、原本廷を庭に作る金本曾本淀本に據て改む　○定八姓、天武十三年十月紀(下二九九頁)に見ゆ　○高名、原本高を骨に作る金本曾本淀本に據て改

之、○夏四月（癸丑朔）丙辰（四）、遣參議左大弁從四位上石川朝臣年足等、奉幣帛於伊勢大神宮、又遣使奉幣帛於畿內七道諸社、爲令遣唐使等平安也、○甲戌（廿二）、詔以菩提法師爲僧正、良弁法師爲少僧都、道璿法師、隆尊法師、爲律師、○秋七月（辛巳朔）丁亥（七）、天皇御南院、賜宴大臣已下諸司主典已上、授正六位上紀朝臣伊保從五位下、女孺无位刑部勝麻呂外從五位下、○八月辛亥朔、日有蝕之、○冬十月（庚戌朔）丙辰（七）、從五位上伊香王、男高城王、无位池上王、賜甘南備眞人姓、○丁巳（八）、大倭國城下郡人大倭連田長、古人等八人、賜宿禰姓、○戊辰（十九）、布勢眞虫賜君姓、佐伯諸魚連姓、○壬申（廿三）、詔曰、頃者、太上天皇（聖武）枕席不穩、由是七々日間、屈請四十九賢僧於新藥師寺、依續命之法、設齋行道、仰願、聖體平復、寶壽長久、經云、救濟受苦雜類衆生、者、免病延年、是以依教大赦天下、但犯八虐、故殺人、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、○丁丑（廿八）、外從五位下吉田連兄人授從五位下、正六位上答本忠節外從五位下、○十一月（庚辰朔）丙戌（七）、以從四位上吉備朝臣眞備爲入唐副使、○己丑（十）、勅、自天平勝寶元年已前、公私債負、未納者、悉從

む晋名は卽ち姓名にて意通ずれど金本等是なり故に之に從ふ○流名長代、原本流を陳に作る金本曾本淀本に據て改む○治部、職員令治部省に卿一人掌本姓繼嗣云々事とさ見ゆ
（四月）左大弁、天平十八年十一月紀及寶字六年九月紀年足傳に據るに左中弁に作るべし○菩提、南天竺婆羅門種、元亨釋書十五に傳見ゆ○道璿、元亨釋書十六に傳見ゆ○隆尊、延曆僧錄に傳見ゆ
（七月）刑部、原本刑を形に作る金本閣本曾本淀本に據て改む
（十月）甘南備眞人、上に出づ○大倭連、宿禰姓は錄大和神別に見ゆ○布勢眞虫、錄山城皇別に布勢公仲哀天皇皇子忍稚命之後とあり○續命之法、藥師瑠璃光如來本願經に詳に續命の法を述べ其文中續命旛燈禮拜行道雜類衆生を放つ

べき事等見ゆ
○行道、原本道なきに作る閣本金イ本に據て改む
○釋云、考證に釋便他曰「念藥師經並不載此文」蓋取經大意」云附とあり
○衆生者、原本者を各に作る金本曾本淀本に據て改む
（十一月）巳前、曾本淀本巳の下に丑の字あり
【天平勝寶四年】不悆、不豫に同じ天子の疾病を云
（二月）金作、冶工なり神代紀に見ゆ養老六年三月紀には伊賀國金作部東人伊勢國金作部牟良見ゆ
○甲作、前に出づ
○弓削、弓を作る工なり職員令集解造兵司雜工戸の條に弓削三十二戸と見ゆ
○矢作、同集解に矢作二十二戸
○桙削、弓と同じく桙も削りて作る故に桙削と云集解に桙刊三十戸
○鞍作、推古紀に鞍作鳥、皇極紀に鞍作得志など見ゆ曾本淀本には鞍を鞁に作る
○鞆張、鞆は張りて作る故に鞆張と云集解に鞆張

原免、其借貸者、不在此例、但身亡者准前、

四年（壬辰）春正月己卯朔、大宰府獻白龜、○辛巳、禁斷始從正月三日迄于十二月、晦日天下殺生、但緣海百姓、以漁爲業、不得生存者、隨其人數、日別給籾二升、又鰥寡孤獨貧窮老疾、不能自存者、量加賑恤、○己丑、地動、是日、度僧九百五十人、尼五十人、爲太上天皇不悆也、○癸卯、以正七位下山口忌寸人麻呂爲遣新羅使、○戊申、從六位下山田史君足授外從五位下、○二月（己酉朔）丙寅、陸奧國調庸者、多賀以北諸郡令輸黃金、其法、正丁四人一兩、以南諸郡依舊輸布、○己巳、京畿諸國鐵工、銅工、金作、甲作、弓削、矢作、桙削、鞍作、鞆張等之雜戸、依天平十六年二月十三日詔旨、雖蒙改姓、不免本業、仍下本貫、尋撿天平十五年以前籍帳、每色差發、依舊役使、○三月（戊寅朔）庚辰、遣唐使等拜朝、○甲午、中務大輔從四位下安倍朝臣虫麻呂卒、○閏三月（戊申朔）丙辰、召遣唐使副使已上於內裏、詔給節刀、仍授大使從四位上藤原朝臣清河正四位下、副使從五位上大伴宿禰古麻呂從四位上、留學生无位藤原朝臣刷雄從五位下、○己巳、大宰府奏、新

羅王子韓阿飡金泰廉、貢調使大使金暄及送王子使金弼言等七百餘人、乘船七艘來泊。○乙亥、遣使於大內、山科、惠我、直山等陵、以告新羅王子來朝之狀。

二十四戸
○二月十三日、十六年二月紀に丙午とあり丙午は十二日なり三は二の誤か
○改姓、金本曾本淀本改の下に正の字あり改正にて姓或は衍か
（三月）安倍朝臣虫麻呂卒、天平九年九月紀に始見、皇后宮亮、中務少輔、播磨守、紫微大忠に歴任す
（閏三月）藤原朝臣刷雄、閣本金イ本藤原を土左に作る刷雄は寶字元年四月紀に薩雄に作る　○金泰廉、原本泰を忝に作る閣本に據て改む　○大內、天武天皇持統天皇山陵大和國高市郡にあり　○山科、天智天皇山陵山城國宇治郡にあり　○惠我、應神天皇山陵河內國南河內郡にあり　○直山、奈保山なり元明天皇元正天皇の山陵奈良市大字奈良坂にあり元明天皇の御陵を奈保山東陵、元正天皇の御陵を同西陵と稱す

○夏四月乙酉（丁丑朔九）、盧舍那大佛像成、始開眼。是日、行幸東大寺。天皇親率文武百官、設齋大會。其儀一同元日。五位已上者著禮服、六位已下者當色。請僧一萬。既而雅樂寮及諸寺種々音樂並咸來集。復有王臣諸氏五節、久米儛、楯伏、踏歌、袍袴等歌儛。東西發聲、分庭而奏。所作奇偉、不可勝記。佛法東歸、齋會之儀、未嘗有如此之盛也。是夕、天皇還御大納言藤原朝臣仲麻呂田村第、以爲御在所。○辛卯（十五）、以從四位下藤原朝臣八束爲攝津大夫、

（四月）盧舍那大佛像成、天平十五年聖武天皇の發願せられし大佛像は九年を經て完成し此に開眼の式を行はせられたり　東大寺要錄所載大佛殿碑文に以天平十五年十月十五日於近江國信樂京奉創佛像其處已止更以天平十七年八月廿三日於大和國添上郡奉創同像以天平十九年九月廿九日始奉鑄鎔以勝寶元年十月廿四日奉鑄已了三箇年八箇度奉鑄御體以天平勝寶四年三月十四日始奉塗金未畢之間以同年四月九日儲於大會奉開眼也金銅盧舍那像佛一體結跏趺坐高五丈三尺五寸（節略）とあり　○禮服、衣服令に所謂禮服　○當色、禮服に對して位階に相當せる色の朝服を云　○久米舞、要錄開眼供養會の條に大歌久米頭々舞大伴宿禰伯麻呂佐伯宿禰文成久米儛大伴廿人佐伯

廿人　○楯伏、同上に猎（楯の誤下同じ）伏儛頭文忌寸齋士師宿禰牛勝猎伏儛檜前忌寸廿人士師宿禰廿人、靈紀に今之吉士舞也手以楯爲節度故名さあり　○踏歌、同上に女漢躍歌百二十人　○袍袴等歌儛、同上に唐か儛、一儛、施袴廿人さあり是等を云ふか　○齋會、原本齋を濟に作る諸本に據て改む　○田村第、大和志に田村第趾在添上郡田中村さあり今詳ならず原本第を弟に作る弟は第の誤れるなれば改むべし

（二五月）女孺、原本孺字なし山崎校本に據て補ふ下同じ　○兒從、原本從を授に作る寶字三年六月庚戌、五年八月甲子條に據て改む　○子鯽、寶字四年正月紀に賀茂朝臣小鮒に作る　○己丑、五月己丑なし乙丑の誤なるべし一に己未に作るさも云己未は十四日なり　○中臣殿來連、錄和泉神別に殿來連大中臣朝臣同祖天兒屋根命之後とあり　○從五位上佐伯宿禰、原本上を下に作る九年閏五月甲辰紀に據て改む

（二六月）朝廷、原本廷を庭に作る金本聞本淀本に據て改む下同じ　○國政弛亂、原本弛を絕に作り金本聞本淀本施に作るは弛の誤なり故に改む　○使下、慶雲二年八月戊午紀に出づ

○五月庚戌、正六位上小野朝臣小贄授從五位下、女孺无位藤原朝臣兒授從五位下、○壬子、女孺從六位下鴨朝臣子鯽授從五位下、○己丑、外從五位下大鳥連大麻呂授從五位下、○庚申、无位中臣殿來連竹田賣授外從五位下、○丙寅、免官奴鎌取、根足、鎌取賜巫部宿禰、根足賀茂朝臣、○辛未、以從五位下多治比眞人犢養爲遠江守、從五位下巨勢朝臣淨成、爲下總守、從三位百濟王敬福爲常陸守、從五位下笠朝臣嚢麻呂爲上野守、從四位上平群朝臣廣成爲武藏守、從五位上佐伯宿禰全成爲陸奧守、從五位下粟田朝臣奈勢麻呂爲越前守、從五位上阿倍朝臣嶋麻呂爲伊豫守、○六月己丑、新羅王子金泰廉等拜朝、幷貢調、因奏曰、新羅國王、言日本照臨天皇朝廷、新羅國者、始自遠朝、世々不絶、舟檝並連、來奉國家、今欲國王親來朝貢進御調、而顧念、一日无主、國政弛亂、是以、遣王子韓阿飡泰廉、代王爲首、率使下三百七十餘人入朝、兼令

貢種々御調、謹以申聞、詔報曰、新羅國始自遠朝、世世不絶、供奉國家、今復遣王子泰廉入朝、兼貢御調、王之勤誠、朕有嘉焉、自今長遠、當加撫存、泰廉又奏言、普天之下無匪王土、率土之濱無匪王臣、泰廉幸逢聖世、來朝供奉、不勝歡慶、私自所備國土微物、謹以奉進、詔報、泰廉所奏聞之、○壬辰、外正六位下君子部和氣、遠田君小捄、遠田君金夜、並授外從五位下、是日、饗新羅使於朝堂、詔曰、新羅國來奉朝廷者、始自氣長足媛(神功)皇太后平定彼國、以至于今、爲我蕃屛、而前王承慶、大夫思恭等、言行怠慢、闕失恒禮、由欲遣使問罪之間、今彼王軒英、改悔前過、冀親來庭、而爲顧國政、因遣王子泰廉等、代而入朝、兼貢御調、朕所以嘉歡勤欵、進位賜物也、又詔、自今以後、國王親來、宜以辭奏、如遣餘人入朝、必須令齎表文、○丁酉、泰廉等就大安寺東大寺禮佛、○秋七月(乙巳朔)甲寅、中務卿正三位三原王薨、一品贈太政大臣舍人親王之子也、○庚申、正四位下栗栖王授從三位、○甲子、下總國穴太部阿古賣一產二男二女、賜粮幷乳母、○戊辰、泰廉等還在難波館、勅遣使賜絁布幷酒肴、○八月(甲戌朔)庚寅、捉京

○遣王子泰廉入朝、原本朝を調に作る金本に據て改む
○所奏聞之、原本奏を奉に、聞を内に作る奏は金本閣本に據て聞は金本曾本淀本に據て改む
○小捄、捄は閣本林に、曾本捄に、淀本束に作る
○金夜、閣本金花に作る
○承慶、金本曾本淀本承を永に作るは非なり東國通鑑に新羅孝成王名承慶、聖德王第二子
○軒英、東國通鑑に景德王名憲英、孝成王母弟とあり軒英卽ち憲英なり唐天寶元年卽位す
(七月)中務卿、閣本曾本中宮卿に作る
○三原王薨、天平勝寶元年十一月丙辰紀に始見
○穴太部、雄略紀に十九年三月詔置穴穗部とあり其部民たりしなり系詳ならず
○酒肴、原本肴を希に作る金本閣本淀本に據て改

○む
○捉京師巫覡、蓋妖言衆を惑はせしに由れり
○十七人、紀略十一人に作る
○配于伊豆、紀略配の下に流い字あり
○隱伎　原本伎を岐に作る淀本及類史に據て改む
（九月）九月庚戌、原本九月の二字下文丁卯の上にありたり、八月は甲戌朔にて庚戌乙丑なし九月は甲辰朔七日庚戌廿二日乙丑なり故に九月の二字を此に移せり
○文室眞人、錄右京皇別に天武天皇々子二品長王之後とあり
○輔國大將軍、唐書百官志兵部の條に武散階四十有五云々正二品曰二輔國大將軍一
（十月）問渤海客等、原本問を聞に作る金本曾本淀本に據て改む
○秦部、姓氏錄に見えず秦氏の部民なるべし續後紀承和二年十一月丁酉條に讃岐國人秦部福依、弟福益又德實錄齊衡元年三月癸巳條に下野國節婦秦部總成女見ゆ
（十一月）復置佐渡國、

師、巫覡十七人、配于伊豆、隱伎、土左等遠國。○九月庚戌、中納言從三位紀朝臣麻路爲兼大宰帥。○乙丑、從三位智努王等賜文室眞人姓。○丁卯、渤海使輔國大將軍慕施蒙等、著于越後國佐渡嶋。○冬十月甲戌朔、地震。○乙亥、亦震。○戊寅、以常陸守從三位百濟王敬福、爲檢習西海道兵使。判官二人、錄事二人。○庚辰、遣左大史正六位上坂上忌寸老人等、於越後國、問渤海客等消息。○辛巳、伊世國飯野郡人飯麻呂等十七人賜秦部姓。○十一月乙巳、正六位上佐伯宿禰美濃麻呂授從五位下。復置佐渡國。守一人、目一人。以從四位上藤原朝臣永手、爲大倭守。從五位下藤原朝臣宿奈麻呂爲相摸守。從五位下大伴宿禰伯麻呂爲上野守。從五位下小野朝臣小贄爲下野守。從五位下佐伯宿禰美濃麻呂爲大宰少貳。又以參議從四位上橘朝臣奈良麻呂、爲但馬因幡按察使。兼令檢校伯耆、出雲、石見等國非違事。○己酉、勅、諸國司等、欠失官物、雖依法處分、而至於郡司、未嘗科斷。自今已後、郡司亦解見任、依法科罪。雖有重大譜第、不得任用子孫。○壬子、制、諸司無故不上者、令放還本貫。其

天平十五年二月越後國に併せたるを此に至て分置す閣本佐渡を左度に作る
○藤原朝臣宿奈麻呂、原本藤原を土左に作る金本曾本に據て改む
○欠失官物、官物を缺損せしむるを云其處分法は法曹至要抄に倉庫令を引て凡欠失官物勾徵者並依本物徵塡其物不可備及鄕土無者聽準價直徵送、卽身死及配流者並免徵とあり
○壬子制、三代格には十六日とす
○諸司無故不上者云々、理由なくして出勤せざる者の處分法を更に設けられしなり令放還本貫さは本籍地に追還するを云
○有位者云々、內位の者は外位とし無位の者は本の身分に還すを云諸司に仕ふるものには有位者の子弟もあり庶人もあり種々身分の異れるものあり故に本色に從はしむと云

有位者爲外散位、无位者還從本色、○十二月癸酉朔、日有蝕之、

續日本紀卷第十八

續日本紀卷第十九

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平勝寶五年正月盡八歲十二月

寶字稱德孝謙皇帝

五年春正月癸卯朔、廢朝、天皇御中務南院、宴五位已上、賜祿各有差、○丁未、伊勢大神宮神主外從五位下神主首名授外從五位上、內人、物忌、男四十五人、女十六人、授位各有差、○庚午、從四位上平群朝臣廣成卒、

○二月辛巳、以從五位下小野朝臣田守爲遣新羅大使、○辛卯、正六位上小田臣枚床授外從五位下、○甲午、齋宮大神司正七位下津嶋朝臣

【天平勝寶五年】中務南院、中務省の南院なり當時の用語すべきものなく南院は詳なることを知べからす ○大神宮神主、原本大を太に作る閣本皆本淀本に據て改む下同じ、神主は禰宜なり儀式帳に兩宮共に禰宜一人とあり後漸く增して十人と爲る ○內人、大小の別あり儀式帳に大內人は兩宮各三人小內人は大神宮に十三人豐受宮に五人あり大內人は禰宜の下につき物忌小內人等を率ゐて宿直し或は神饌に奉仕す ○物忌、同じく儀式帳に大神宮物忌(童男三人童女十人)同父各十三人豐受宮は物忌(童女のみ)同父各六人あり祭祀に奉仕す以上大內人以下の人數を數ふるに大內人六人小內人十八人物忌十九人同父十九人合計六十二人にて此に男四十五人女十六人とあるより一人多きは勝寶五年より延曆二十三年までの間に一人增加せしか又女十六人と云ふは大神宮物忌女十人豐受宮物忌女六人なるべきか ○平群朝臣廣成卒、天平九年九月己亥紀に始見、同十五年六月丁酉刑部大輔と爲り式部大輔攝津大夫武藏守を歷任す

(二月)田守、紀略多守に作る

○齋宮大神司、後の主神司に同じきか主神司に宮祿本三代格四に主神司中

臣一人從七位官忌部一人宮主一人已上從八位官とあり齋宮の神事を掌る職なり

（三月）百高座、抄伽藍具に高座、仁王經云建百高座、とあり經文中にあるによりて所說の如くこれを設くるなり玄蕃式に凡天皇卽位則講說仁王般若經一代一講一日朝晡二座講畢宮中諸殿省寮等廳隨便莊嚴設百高座云々とあり齊明紀六年五月に見ゆ

○仁王經、仁王護國般若波羅蜜經二卷姚秦鳩摩羅什譯

○於是、閣本曾本淀本於後に作る

○大雲、大紫の訛なるべし前に出づ

（四月）皇太后、原本太を大に作る閣本曾本淀本及紀略に據て改む

○毀佛尊像、佛說寶積經に據て訓す

○從五位下大伴宿禰、元年七月甲午紀及二年三月庚子紀に據るに下は上の誤なるべし

（五月）篠原王、寶字元年閏八月癸亥姓を豐野眞人と賜ふ

小松授從五位下。○三月壬寅朔庚午、於東大寺設百高座、講仁王經。是日飄風起、說經不竟。於是、以四月九日講說。飄風亦發。○辛未、大納言從二位兼神祇伯造宮卿巨勢朝臣奈氐麻呂薨。小治田朝小德大海之孫、淡海朝中納言大雲比登之子也。○夏四月壬申朔丙戌、詔曰、頃者皇太后、寢膳不安、稍延旬月。雖醫藥療治、而猶未平復。以爲、政治失宜、罹罪有徒、天遣此罰警戒朕身。其母子之慈、貴賤皆同。犯罪之徒、豈獨無親。庶悉洗滌、欲救憂苦。宜大赦天下。常赦所不免者、咸悉赦除。但殺其父母、毀佛尊像、及强盜竊盜、不在此例。若有入死、減一等。○癸巳、以正五位下大倭宿禰小東人爲參河守。從五位下阿倍朝臣小嶋爲駿河守。從五位下大伴宿禰犬養爲美濃守。從五位下平群朝臣人足爲越後守。從四位下巨勢朝臣堺麻呂爲丹波守。正四位下安宿王爲播磨守。從五位下安曇宿禰大足爲安藝守。從五位下石津王爲紀伊守。外從五位下清原連淨道爲筑後守。○己亥、從五位下葛木連戶主授從五位上。○五月辛丑朔庚戌、无位篠原王、伊刀王、並授從五位下。○乙丑、渤海使輔國大將軍慕施蒙等拜朝、并貢信物。

○渤海王、蓋第二代の欽茂なるべし唐書渤海傳に肅宗寶應元年（淳仁帝寶字六年）詔以渤海爲國とあり唐にては此時未だ國と稱せず郡王と稱す

○(六月)亭毒、老子に出で、萬民を化育し給ふを云ふ上に注せり

○八極、淮南子墬形訓に天地之間九州八極と見え字書に言八方極遠之地也とあり

○尋高麗舊記云々、渤海即粟末靺鞨はもと高麗に附屬せり故に其舊記を引て之を責むるなり

○族惟兄弟、族恐くは親の誤ならむ寶龜三年二月己卯渤海王に賜ふ書には昔高麗全盛時其王高武祖宗奕世介居瀛表親如兄弟義若君臣云々また高氏之世兵亂無休爲假朝威彼稱兄弟とあり此語彼國よりの上表文に見えしならむ

○何假一二言也、何ぞ僅に一二の言を假りて述ぶる必要あらむやの意

○牛麻呂、紀略手麻呂に作る

○正七位上、閣本上を下に作る

奏、佩渤海王言、日本照臨聖天皇朝、不賜使命、已經十餘歲、是以遣慕施蒙等七十五人、齎國信物、奉獻闕庭。○丁卯、饗慕施蒙等於朝堂、授位賜祿各有差。○六月丁丑、慕施蒙等還國、賜璽書曰、天皇敬問渤海國王、朕以寡德、虔奉寶圖、亭毒黎民、照臨八極、王僻居海外、遠使入朝、丹心至明、深可嘉尙、但省來啓、無稱臣名、仍尋高麗舊記、國平之日、上表文云、族惟兄弟、義則君臣、或乞援兵、或賀踐祚、修朝聘之恒式、効忠欵之懇誠、故先朝善其貞節、待以殊恩、榮命之隆、日新無絕、想所知之、何假一二言也、由是先廻之後、既賜勅書、何其今歲之朝、重無上表、以禮進退、彼此共同、王熟思之、季夏甚熱、比無恙也、使人今還、指宣往意、并賜物如別。陸奧國牡鹿郡人外正六位下丸子牛麻呂、正七位上丸子豊嶋等、廿四人賜牡鹿連姓。○秋七月庚戌、散位從四位下紀朝臣清人卒。○戊午、左京人正八位上石上部君男嶋等四十七人言、己親父登與、以去大寶元年、賜上毛野坂本君姓、而子孫等、籍帳猶注石上部君、於理不安、望請、隨父姓欲改正之、許焉。○八月癸巳、陸奧國人大初位下丸子嶋足、賜牡鹿

連姓。○九月戊戌朔、无位板持連眞鉤獻錢百萬、授外從五位下。○壬寅、攝津國御津村南風大吹、潮水暴溢、壞損廬舍一百十餘區、漂沒百姓五百六十餘人。並加賑恤。仍追海濱居民、遷置於京中空地。○乙丑、從四位上石川朝臣年足授從三位、爲大宰帥。從四位上紀朝臣飯麻呂爲大貳。○冬十月壬申、散位從四位下紀朝臣宇美卒。○甲戌、中務卿從三位栗栖王薨。二品長親王之子也。○十一月己亥、尾張國獻白龜。○十二月丁丑、免攝津國遭潮諸郡今年田租。○己卯、西海道諸國、秋稼多損、仍免今年田租。

○牡鹿連、八月癸巳紀にも陸奥國人丸子嶋足賜牡鹿連姓と見ゆ　地名に因りて賜はりしなり
(七月)紀朝臣清人卒、和銅七年二月戊戌詔して國史を撰せしめられる、後右京亮治部大輔兼文章博士等に歷任す
○石上部君、元年五月戊寅に見ゆ姓氏錄は載せず
○上毛野坂本君、錄左京皇別に見ゆ豐城入彦命の後なり
(九月)板持連、錄河內諸蕃に板茂連伊吉連同祖楊羅之後とあり
○眞鉤、閣本曾本淀本鉤を鈞に作る
○御津村、原本津を律に作る閣本曾本及紀略に據て改む齊明紀五年三津に萬葉廿美津に作る攝津志に西成郡島內三津寺町あり今大阪市南區の町名となる　○南風大吹云々、紀略の文異同あり　○大宰帥、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ　(十月)紀朝臣宇美卒、神龜三年正月紀に始見、天平十年閏七月に右中辨、同十七年九月戊午讃岐守と爲る　○栗栖王薨、養老七年正月紀に始見、天平五年十二月庚申雅樂頭となる　(十二月)仍免、仍の字は紀略に據て補ふ

【天平勝寶六年】朝賀、此二字紀略に據て補ふ
○是日、紀略に據て補ふ
○上野國獻白烏、原本此六字宴五位已上云々の上にあり紀略に據て改換ふ　紀略白烏を白馬に作る

(甲午)六年春正月丁酉朔、朝賀。是日、宴五位已上於內裏、賜祿有差。上野國獻白烏。○辛丑、行幸東大寺、燃燈二萬。○勅曰、初元啓曆、獻歲登春、天地行仁、動植霑惠、古昔明主、應此良辰、必布時和、廣施慈令。朕雖薄德、何不由

○初元啓暦、年の始を云
○獻歳登春、考證に登疑當作發、楚辭招魂篇獻歳發春兮とあり
○天地行仁、陽春に至れば草悉く芽を發し人心亦自ら長閑なるを云
○慈令、字書に令は善也とあり慈善と云に同じ閣本曾本淀本令を命に作る
○私鑄錢、閣本曾本淀本私字なし
○東院、考證に按萬葉第廿載是年正月七日天皇太上天皇皇太后於東常宮南大殿肆宴歌一首、所謂東常宮卽東院歟とあり
○大安殿、紀略大極殿南院の五字に作る
○從四位上橘朝臣、從四位上の四字は金本に據て補ふ
○土師宿禰、原本土を上に作る金本閣本に據て改む
○難波、金本難破に作る
○中臣酒人宿禰、錄左京神別に大中臣朝臣同祖天兒屋根命十世孫臣狹山命之後とあり
○日置造、錄左京諸蕃日置造高麗國人伊利須意彌之後とあり
○入唐、紀略遣唐に作る

玆、可大赦天下、其八虐、故殺人、私鑄錢、强盜竊盜、常赦所不原者、不在赦例、但入死者、皆減一等、○癸卯、天皇御東院宴五位已上、有勅、召正五位下多治比眞人家主、從五位下大伴宿禰麻呂二人於御前、特賜四位當色、令在四位之列、卽授從四位下、○壬子、天皇御大安殿、詔授從四位上藤原朝臣永手從三位、從四位下池田王從四位上、從四位上橘朝臣奈良麻呂正四位下、從四位下石川朝臣麻呂、藤原朝臣八束、並從四位上、正五位上藤原朝臣巨勢麻呂從四位下、從五位上高丘連河內正五位下、從五位下多治比眞人犢養、小治田朝臣諸人、波多朝臣足人、大藏忌寸廣足、土師宿禰牛勝、上毛野君難波、並從五位上、正六位上佐伯宿禰大成、小野朝臣竹良、石川朝臣豐成、粟田朝臣人成、藤原朝臣武良士、後部王吉、並從五位下、正六位上林連久麻、物部山背、中臣酒人宿禰虫麻呂、高福子、日置造眞卯、黃文連水分、大藏忌寸麻呂、並外從五位下、○入唐副使從四位上大伴宿禰古麻呂來歸、唐僧鑒眞、法進等八人隨而歸朝、○癸丑、大宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船、以去年十二

月七日、來著益久嶋、自是之後、自益久嶋進發、漂蕩著紀伊國牟漏埼、○丙寅（三十）、副使大伴宿禰古麻呂自唐國至、古麻呂奏曰、大唐天寶十二載、歲在癸巳正月朔癸卯、百官諸蕃朝賀、天子於蓬萊宮含元殿受朝、是日、以我次西畔第二吐蕃下、以新羅使次東畔第一大食國上、古麻呂論曰、自古至今、新羅之朝貢日本國久矣、而今列東畔上、我反在其下、義不合得、時將軍吳懷實見知古麻呂不肯色、卽引新羅使次西畔第二吐蕃下、以日本使次東畔第一大食國上、

○二月（丁卯朔）己卯（十三）、正六位上百濟王理伯授從五位下、○丙戌（二十）、勅大宰府、去天平七年、故大貳從四位下小野朝臣老、遣高橋連牛養於南嶋樹牌、而其牌經年、今既朽壞、宜依舊修樹、每牌顯著嶋名、并泊船處、有水處、及去就國行程、遙見嶋名、令漂著之船知所歸向、○三月（丁酉朔）丙午（十）、遣使奉唐國、

下亦同じ ○從四位上、紀略上を下に作る ○鑒眞、寶字七年五月戊申紀に傳あり ○法進、元亨釋書十三に傳あり ○益久嶋、文武紀三年七月辛未に見ゆ ○牟漏埼、紀略室崎に作る紀伊國牟婁郡にあり ○天寶、原本天を大に作る金本及紀略に據て改む ○歲在、紀略在を次に作る ○蓬萊宮、通鑑の注に長安東內本曰大明宮龍朔三年曰蓬萊宮咸亨元年曰含元宮武后長安元年十一月復舊名とあり ○含元殿、唐六典に大明宮在禁苑之東南云々正殿曰含元殿注に今元正冬至於此聽朝也とあり ○西畔、字書に邊側皆曰畔とあり ○吐蕃、卽今の西藏なり、杜氏通典に吐蕃在吐谷渾西南云々とあり ○大食國、卽當時のサラセン國にて今のペルシア・アラビア地方なり、新唐書に本波斯地永徽二年始遣使朝貢と見ゆ

（二月）勅大宰府、紀略此下に曰字あり ○從四位下小野朝臣老、原本下を上に作る天平九年六月甲寅紀に據て改む ○樹牌、雜式に凡大宰於兩嶋樹牌具顯著島名及泊船處有水處幷去就國行程遙見島名仍令漂著船人必知有所

歸同じとあり

（三月）信物、使者の齎せる物を云

○奄美島、文武紀三年七月辛未に出づ

○去、紀略去の上發字あり

○未知著處、紀略著の上に其字あり

（四月）中臣朝臣清麻呂、天平十五年六月丁酉神祇大副となり同十九年五月丙子朔尾張守に遷り是に至て復元の官に任ぜられしなり

○入唐廻使、遣唐使となり命を全うして歸れる使など云

○巨萬朝臣、卽ち高麗朝臣なり二年正月丙辰紀に

信物於山科陵、○癸丑、大宰府言、遣使尋訪入唐第一船、其消息云、第一船擧帆指奄美嶋、去、未知著處、○夏四月庚午、以從五位上中臣朝臣清麻呂爲神祇大副、從五位下秋篠王、栗田朝臣人成、並爲少納言、從四位上大伴宿禰古麻呂爲左大弁、從五位下石川朝臣豐成爲右少弁、外從五位下日置造眞卯爲紫微中臺少忠、從五位下當麻眞人子老爲雅樂頭、從五位上石川朝臣名人爲民部大輔、從五位下石川朝臣豐人爲主稅頭、從五位上大伴宿禰家持爲兵部少輔、從四位上紀朝臣飯麻呂爲大藏卿、正五位下中臣朝臣益人爲造宮少輔、從五位下藤原朝臣武良志爲左京亮、外從五位下文忌寸上麻呂爲右京亮、從三位文室眞人珍努爲攝津大夫、從五位下百濟王理伯爲亮、從五位下多治比眞人土作爲尾張守、正五位下大伴宿禰稻君爲上總守、從四位上吉備朝臣眞備爲大宰大貳、從五位下小野朝臣田守爲少貳、外從五位下黃文連水分爲肥前守、○壬申、入唐廻使從四位上大伴宿禰古麻呂、吉備朝臣眞備、並授正四位下、判官正六位上大伴宿禰御笠、巨萬朝臣大山、並從五位

見ゆ
○石籬浦、地理纂考に據るに薩摩國頴娃郡（今揖宿郡に編入）頴娃村大字御領の海岸なり
（七月）太皇太后、紀略太皇を大皇に作る
○罔極、原本罔を岡に作る諸本に據て改む
○皇天輔徳、尚書蔡仲之命に皇天無親惟徳是輔とあるに據れり
○徳勝不祥、後漢書に仁勝凶邪、徳除不祥とあるに據れり
○不在赦限、金本限を例に作り閣本曾本淀本限の下に例の字あり
○丙午、重複す然るに紀略も亦同じ或は干支に誤あるか考ふべし
○太皇太后崩、諱宮子、藤原不比等の女聖武天皇

下、自餘使下二百廿二人、亦各有差、○癸未、大宰府言、入唐第四船、判官正六位上布勢朝臣人主等、來泊薩摩國石籬浦、○五月己酉、從五位下石川朝臣豐人爲越中守、○六月乙丑朔、正五位下中臣朝臣益人爲神祇大副、○秋七月丙午、詔曰、頃者太皇太后（宮子娘）、枕席不安、稍延旬月、百方救療、猶未平復、感愴之懷、良深罔極、朕聞、皇天輔徳、徳勝不祥、庶施慈令、奉資寶體、欲使寢膳如常、起居穩便、可大赦天下、但八虐、故殺人、鑄錢、強盜竊盜、常赦所不免者、不在赦限、此日度僧一百人、尼七人、○丙午、授入唐判官正六位上布勢朝臣人主從五位下、以從五位上中臣朝臣清麻呂爲左中弁、從五位下阿倍朝臣小嶋爲式部少輔、外從五位下壬生使主宇陁麻呂爲玄蕃頭、從五位下大伴宿禰御依爲主税頭、從五位下紀朝臣伊保爲大炊頭、從五位下忌部宿禰鳥麻呂爲典藥頭、從五位下布勢朝臣人主爲駿河守、從五位下阿倍朝臣綱麻呂爲出雲守、從五位下小野朝臣東人爲備前守、從五位上波多朝臣足人爲備後守、○壬子、太皇太后崩於中宮、○癸丑、以正一位橘朝臣諸兄、從三位文室眞人

の御卌冊なり
○從四位下安宿王、五年四月癸巳及下文八月丁卯條に據るに從は正に作るべし
○男楫、原本男惰に作る金本に據て改む
○紀朝臣廣名、天平十七年正月紀に據るに上に從五位下とあるべきなり次に見ゆる人成も同じく從五位下にて上にあらず
〔八月〕率誄人、原本率を卒に作る金本及紀略に據て改む
○千尋葛藤云々、千尋葛藤は藤原氏なるに因れり高知は天宮と云るより冠らせ天宮姫は宮子と申せるよりの稱への名なり
○佐保山陵、諸陵式に佐保山西陵平城朝太皇太后藤原氏在大和國添上郡、大和志に在眉間寺西北と見え今佐保村大字法蓮寺にありと云ふ續紀二寶字四年十二月紀に皇太后宮皇太后御墓者自今以後並稱山陵とあれば當時はまだ山陵と稱せず追書せるなり
〔九月〕文室眞人大市、

珍努、紀朝臣麻路、從四位下安宿王、從五位下厚見王、從四位下多治比、眞人國人、從五位下多治比眞人木人、紀朝臣男楫、阿倍朝臣毛人、石川、朝臣豐成、外從五位下文忌寸上麻呂、爲御裝束司、六位已下十二人、從二位藤原朝臣豐成、從三位多治比眞人廣足、藤原朝臣永手、從四位上池田王、正四位下大伴宿禰古麻呂、從四位上文室眞人大市、正五位上佐伯宿禰今毛人、從五位上縣犬養宿禰古麻呂、紀朝臣廣名、粟田朝臣人成、爲造山司、六位已下廿一人、○八月丁卯、正四位下安宿王率誄人、奉誄、謚曰千尋葛藤高知天宮姫之尊、是日、火葬於佐保山陵、○九月丙申、以正四位下安宿王、爲兼內匠頭、從四位上文室眞人大市、爲大藏卿、從四位上紀朝臣飯麻呂、爲右京大夫、從四位上石川朝臣麻呂、爲武藏守、從五位下佐伯宿禰大成、爲丹後守、外從五位下中臣丸連張弓、爲因幡守、○丁未、勅、如聞、諸國司等、貪求利潤、輸租不實、舉稅多欺、由是百姓漸勞、正倉頗空、宜令京及諸國田租、不論得不、悉皆全輸、正稅之利、舉十取三、但田不熟、至免調庸限者、准令處分、又覽去天平七年格、國司等

所部交關、運物無限者、禁斷既訖、然猶不肯承行、貪濁成俗、朕之股肱、豈合如此、自今以後、更有違犯、依法科罪、不須矜宥、〇冬十月乙亥、勅、官人百姓、不畏憲法、私聚徒衆、任意雙六、至於淫迷、子無順父、終亡家業、亦虧孝道、因斯遍仰京畿七道諸國、固令禁斷、其六位已下、無論男女、決杖一百、不須蔭贖、但五位者、即解見任、及奪位祿位田、四位已上、停給封戸職田、國郡司阿容不禁、亦皆解任、若有糺告廿人已上者、无位叙位三階、有位賜絁十疋、布十端、〇己卯、仰畿內七道諸國、令置射田、〇閏十月庚戌、從五位下秋篠王、男繼成王、姪濱名王、船城王、愛智王五人賜丘基眞人姓、外從五位上額田部湯坐連息長授從五位下、〇辛亥、令大宰府鎭祭管內諸國山岡崩壞之處、

〇十一月辛酉朔、任巡察使、以從四位上池田王爲畿內使、從五位下紀

四年八月乙丑に兄智努王と共に姓を賜ふ

〇擧稅、正稅を出擧するを云

〇正倉、諸國にありて正稅の穎穀等を收むる倉を云

〇正稅之利擧十取三、正稅を出擧したる時は其利子は十分の三を限りて徵收すべしとなり養老四年三月己巳條を參看すべし

〇天平七年格、七年は八年の誤なり八年五月丙申の條に見ゆ

(十月)官人百姓云々、三代格法曹至要抄並に官符を載せ文に多少の異同あり

〇雙六、抄術藝部雜藝類に兼名苑云雙六一名六采(今按簙弈是也簙音博俗云須久呂久)とあり雙六を禁ずる事持統紀三年十二月及彈正式に見ゆ

〇蔭贖、名例律に蔭は凡七位勳六等以上及官位勳位得請者之祖父母妻子孫犯流罪以下各從減一等之例とあり、上述の官位勳等ある者の妻子等の罪一等を減ぜらるゝを云、贖は同じく凡應議請減及八位勳十二等以上若官位勳位得減者之父母妻子犯流罪以下聽贖とあり議請減すべき者の親類流罪以下の罪を犯せば財物を以て罪をあがなふを得るを云　〇封戸職田、田字は法曹至要抄に據て補ふ　〇射田、弓射ることを敎習する用に充る爲に置るゝ田を云寶字元年八月辛丑に六衞置射騎田每年季冬宜試優劣以給越群令與武藝とあるは騎射を獎勵する爲に設けられしなり主稅式兵衞式近衞式衞門式等を參考すべし　(閏十月)丘基眞人、姓氏錄に見えず考證に丘基卽岡本在大和國高市郡蓋因此地命姓也とあり

(十一月)任巡察使、紀略任を定に作る

○池田王、田の字は諸本に據て補ふ
○小楫、原本楫を楫に作る紀略に據て改む
○二尊、聖武天皇光明皇后なるべし
○琉璃光佛、原に琉を流に作る金本に據て改む
○其經、開元釋教錄に藥師瑠璃光如來本願功德經一卷とある是なり
○續命幡、同經に造五色綵幡長四十九搩手とあり五色の綵糸を以て造れる幡なり
○雜類衆生、種々の生き物を云經に應放雜類衆生至四十九とあり
○大唐、金本大字なし
○厭魅、名例律八虐の條に五曰不道、謂云々造畜蠱毒厭魅註に厭魅者其事多端不可具述皆謂邪俗陰行不軌、欲令前人疾苦及死者也とあり
○配下野藥師寺、僧尼令に凡僧尼有犯百日苦使經三度改配外國寺とあるに據て處分す

朝臣小楫爲東海道使、從五位下石川朝臣豐成爲東山道使、從五位下藤原朝臣武良志爲北陸道使、從五位上大伴宿禰家持爲山陰道使、從五位下阿倍朝臣毛人爲山陽道使、從五位下多治比眞人木人爲南海道使、從四位上紀朝臣飯麻呂爲西海道使、道別錄事一人。○戊辰、勅、朕以至欽奉爲二尊御體平安、寶壽增長、一七之間、屈四十九僧、歸依藥師琉璃光佛、恭敬供養、其經云、懸續命幡、燃四十九燈、應放雜類衆生、竊以、放生之中、莫若救人、宜依玆教可大赦天下、但犯八虐、故殺人、鑄錢、强盜竊盜、及常赦所不免者、不在赦限、若入死罪、並減一等。○辛未、大唐學問生无位船連夫子授外從五位下、辭而不受、以出家故也。○甲申、藥師寺僧行信、與八幡神宮主神大神多麻呂等、同意厭魅、下所司推勘、罪合遠流、於是遣中納言多治比眞人廣足、就藥師寺宣詔、以行信配下野藥師寺。○丁亥、從四位下大神朝臣社女、外從五位下大神朝臣多麻呂、並除名、從本姓、社女配於日向國、多麻呂於多褹嶋、因更擇他人補神宮禰宜祝、其封戶位田、幷雜物一事已上、令大宰檢知焉。○十二月乙卯、

○從本姓、元年十一月社女田麻呂に大神朝臣の姓を賜はりしを奪て其本姓に復せられしを云　○多褹嶋、神護二年十月紀には社女と共に日向に遷すとあり　○多米王、紀略田米に作る　(十二月)高額眞人、錄左京皇別に敏達皇子春日王之後とあり　○一十、紀略此二字なし　【天平勝寶七年】爲天平勝寶七歲、唐書玄宗紀天寶三載(我天平十六年)の條に正月丙申改レ年爲レ載云々とあり唐土の此例に據て年を歲と改められしなり　○從五位下比賣嶋女、原本下を上に作る今本に據て改む寶字元年八月紀亦證とすべし　○山田御井宿禰、寶字元年八月紀に勅故從五位下山田三井宿禰比賣嶋緣レ有二阿嬭之勞一宜レ賜二宿禰之姓一とあり　○丸子大國、史に載せざれど軍事に死せるに由れるか　○六人部、錄右京神別に六人部火明命五世孫武礪目命之後とあり山城神別にも亦載す　○藥、寶字元年八月紀久須利に作る

(三月)廣野連、姓氏錄に載せず他に所見なし　○一百四十町、原本四を三に作る金本閣本及類史に據て改む　(四月)豐國眞人、錄左京皇別に豐國眞人出レ自二謚敏達孫百濟王一也とあり前年閏十月丘基眞人の姓を賜たりしが更に改め賜はりしなり　(五月)菱苅村、抄國郡

左大舍人无位多米王賜高額眞人姓、○是年八月、風水、畿內及諸國一十、百姓產業損傷、並加賑恤、

七年(乙未)春正月辛酉朔、廢朝、以諒闇故也、○甲子(四)、勅、爲有所思、宜改天平勝寶七年、爲天平勝寶七歲、從七位上山田史廣人從五位下比賣嶋女等七人、賜山田御井宿禰姓、○甲戌(十四)、外正六位上丸子大國、贈從五位下、外正六位下六人部藥授外從五位下、

○三月庚申朔、外從五位下山田史君足賜廣野連姓、○丁亥(廿八)、八幡大神託宣曰、神吾不願矯託神命、請取封一千四百戶、田一百四十町、徒无所用、如捨山野、宜奉返朝廷、唯留常神田耳、依神宣行之、○夏四月丁未(十八)(戊寅朔)、從五位下丘基眞人秋篠等廿一人、更賜豐國眞人姓、○五月丁丑(十九)(己未朔)、大隅國菱苅村浮浪九百卅餘人言、欲建郡家、許之、○六月癸卯(十五)(己丑朔)、安藝國獻白

部に大隅國菱刈郡菱刈（比志加里）郷あり是なり
○浮浪、原本浪浮に作る金本閣本淀本に據て改換ふ
〔六月〕和氣王、紹運錄に舎人親王の孫御原王の子とあり
○細川王、和氣王の弟
○岡眞人、錄右京皇別に岡眞人出自諡天武皇子一品贈太政大臣舎人親王
〔八月〕秋八月、秋の字は例に據て補ふ
○食朝臣、姓氏錄に見えず、元年五月紀に食朝臣三田次見ゆ同姓なるべし
〔十月〕冬十月、冬の字は紀略に據て補ふ
○其犯八虐、諸本犯の字なし
○安古、原本古を占に作る金本に據て改む
○眞弓、諸陵式に眞弓丘陵岡宮御宇天皇在大和國高市郡とあり草壁皇子（天武皇子文武の御父）の山陵
○奈保山東西、東陵は元明天皇、西陵は元正天皇の山陵
〔天平勝寶八歲〕橘朝臣諸兄致仕、在官十九年歲

烏、○壬子、大宰府管內諸國、國別貢兵衞一人、采女一人、和氣王、細川王、賜岡眞人姓、○秋八月庚子、正六位上日下部宿禰子麻呂、食朝臣息人、並授從五位下、○冬十月丙午、勅曰、比日之間、太上天皇枕席不安、寢膳乖宜、朕竊念茲、情深惻隱、其救病之方、唯在施惠、延命之要、莫若濟苦、宜大赦天下、其犯八虐、故殺人、鑄錢、強盜竊盜、常赦所不免者、不在赦例、但入死罪者減一等、鰥寡惸獨、貧窮老疾、不能自存者、量加賑恤、兼給湯藥、又始自今日、至來十二月晦日、禁斷殺生、遣使於山科、大內東西、安古、眞弓、奈保山東西等山陵、及太政大臣墓、奉幣以祈請焉、○十一月丁巳、遣少納言從五位下厚見王、奉幣帛于伊勢大神宮、○十二月丁未、以從五位下佐伯宿禰美濃麻呂爲越前守、

八歲春二月丙戌、左大臣正一位橘朝臣諸兄致仕、勅依請許之、○戊申、行幸難波、是日、至河內國、御智識寺南行宮、○己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七寺禮佛、○庚戌、遣內舍人於六寺、誦經、𡜌施有差、○壬子、大雨、賜河內國諸社祝禰宜等一百十八人正稅、各有差、是日、行

至難波宮、御東南新宮。

○三月甲寅朔、太上天皇幸堀江上。○乙卯、詔免河內攝津二國田租。○戊午（五）、遣使攝津國諸寺誦經、嚫施有差。○夏四月丁酉（甲申朔廿四）、勅曰、頃者、太上天皇、聖體不豫、漸延旬日、猶未平復、如聞、銷災致福、莫如仁風、救病延年、實資德政、可大赦天下。但犯八虐、故殺人、鑄錢、强盜竊盜、常赦所不免者、不在赦例。若以贓入死、減一等、鰥寡惸獨、貧窮老疾、不能自存者、量加賑恤。○戊戌（十五）、車駕取澁河路、還至智識寺行宮。○庚子（十七）、還宮。○乙巳（廿二）、遣使奉幣帛于伊勢大神宮。○壬子（廿九）、遣醫師、禪師、官人、各一人於左右京四畿內、救療疢疾之徒。遣從五位下日下部宿禰古麻呂、奉幣帛于八幡大神宮。○五月乙卯（甲寅朔）、遣左大弁正四位下大伴宿禰古麻呂、幷中臣忌部等、奉幣帛

七十三寶字元年六月紀に先是去勝寶七歲冬十一月太上天皇不豫時左大臣橘諸兄祇承人佐味宮守告云大臣飲酒之庭言辭无禮稍有反狀云々太上天皇優容不咎大臣知之後歲致仕とあり此理由によりて致仕す　○智識寺、河內國大縣郡、元年十月紀に注す　○山下、考證に未詳狩谷氏云恐有譌字按和名抄河內國讃良郡有山家郡交野郡有山田郷丹比郡有八下丹下等郷と云　○大里、同云未詳和名抄河內國郷名大縣郡大里河內志に大里方廢大縣村存　○三宅、河內志に三宅廢寺在丹北郡三宅村今有觀音堂一宇　○家原、同云家原廢寺在志紀郡老原村老原舊名家原　○鳥坂、河內國大縣郡鳥坂郷にあり河內志に鳥坂巳廢存高井田村また普光廢寺在高井田村名井上寺又名鳥坂寺　○七寺、此に揭る所は六寺にして下文にも內舍人を六寺に遣すとあれば七は六の誤なるべし　○六寺、紀略六大寺に作る　○嚫施、金本曾本淀本は儭に作り閣本は嚫に作る下同じ齊書張融傳に殷淑妃薨建齋灌佛僚佐儭者至一萬融獨注儭百錢とあり佛事の布施を云字書に儭與襯通また嚫俗作襯とあり世俗には襯の字を用るなり　○襯、金本になし

（三月）幸堀江上、紀略堀の上に難波の二字あり類史には上の字なし

（四月）旬日、金本旬月に作る　○銷災、紀略銷を消に作る字書に銷は除去也とあり　○贓、原本贓を賊に作る金本に據て改む　○戊戌、原本戌を辰に作る金本及類史に據て改む是月甲申朔にして戊辰なし戊戌は十五日なり　○澁河路、河內國澁河郡澁川郷是なり今も地名存す難波より智識寺に至る通路に當る　○疢疾之徒、之の字は金本閣本曾本に據て補ふ

（五月）道祖王爲皇太

於伊勢大神宮、免天下諸國今年田租、是日、太上天皇崩於寢殿、遺詔、以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、○丙辰、遣使固守三關、以從二位藤原朝臣豐成、從三位文室眞人珍努、藤原朝臣永手、正四位下安宿王、從四位上黃文王、正四位下橘朝臣奈良麻呂、從四位下多治比眞人國人、從五位下石川朝臣豐成、爲御裝束司、六位已下十人、從三位多治比眞人廣足、百濟王敬福、正四位下鹽燒王、從四位下山背王、正四位下大伴宿禰古麻呂、從四位上高麗朝臣福信、正五位上佐伯宿禰今毛人、從五位下小野朝臣田守、大伴宿禰伯麻呂、爲山作司、六位已下廿人、外從五位下大藏忌寸麻呂、爲造方相司、六位已下二人、從五位下佐味朝臣廣麻呂、佐々貴山君親人、爲養役夫司、六位已下六人、○丁巳、於七大寺誦經焉、○己未、文武百官始素服、於內院南門外、朝夕擧哀、正四位上春日女王卒、○辛酉、太上天皇初七、於七大寺誦經焉、○癸亥、出雲國守從四位上大伴宿禰古慈斐、內竪淡海眞人三船、坐誹謗朝廷、无人臣之禮、禁於左右衞士府、○丙寅、詔並放免、○戊辰、二七、於七大寺誦經焉、○壬

子、此遺詔の事纂異記に詳に見ゆ道祖王は紹運録に天武天皇の孫、新田部親王の子とあり太上天皇即ち聖武天皇は文武天皇の皇子にまし〱其關係左の如し

天武─┬草壁─文武
　　　├舍人─大炊
　　　└新田部─道祖

○三關、鈴鹿、不破、愛發の關を云

○造方相司、方相は周禮夏官に出づ喪葬令に凡親王一品方相轜車各一具、義解に方相者蒙熊皮黄金四目玄衣朱裳執戈揚楯而導轜車也とあり

○養役夫司、役夫に給する食事を掌る

○丁巳、紀略丁未に作るは非なり此月丁未なし

○七大寺、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆の七寺

○春日女王卒、原本幾に作る狩谷校本に據て改む

○大伴宿禰古慈斐云々、萬葉集二十に緣淡海眞人三船讒言出雲守大伴古慈斐宿禰解任とあり此文と合はず

○內竪、字書に豎は俗竪

申、奉葬太上天皇於佐保山陵、御葬之儀如奉佛、供具有師子座香爐、天子座、金輪幢、大小寶幢、香幢、花縵、蓋繖之類、在路令笛人奏行道之曲、是日、勅曰、太上天皇、出家歸佛、更不奉諡、所司宜知、○乙亥、三七、於左右京諸寺誦經焉、勅曰、左衞士督從四位下坂上忌寸犬養、右兵衞率從五位上鴨朝臣虫麻呂、久侍禁掖、深承恩渥、悲情難抑、伏乞奉陵、朕嘉乃誠、仍許所請、先代寵臣、未見如此也、宜表褒賞以勸事君、犬養叙正四位上、虫麻呂從四位下、其所從授刀舍人廿人增位四等、○丙子、勅、禪師法榮、立性清潔、持戒第一、甚能看病、由此、請於邊地、令侍醫藥、太上天皇得驗多數、信重過人、不用他醫、爾其閣水難留、鸞輿晏駕、禪師卽誓、永絶人間、侍於山陵、轉讀大乘、奉資冥路、朕依所請、敬思報德、厭俗歸眞、財物何富、出家慕道、冠蓋何榮、莫若名流萬代、以爲後生准則、宜復禪師所生一郡、遠年勿役、○丁丑、勅、奉爲先帝陛下、屈請看病禪師一百廿六人者、宜免當戶課役、但良弁、慈訓、安寛三法師者、並及父母兩戶、然其限者終僧身、又和上鑒眞、小僧都良弁、華嚴講師慈訓、大唐僧法進、法華寺

字とあり正字は豎なれど俗には竪の字を用ふ抄職官部に內豎俗云知比佐和良波とあり未冠の童を殿上の駈使に候せしむるを云、弘仁二年正月內舍人一百二十人復舊名爲內豎とあれば此後內舍人と改め弘仁に至て更に舊名に復せられしなり

○佐保山陵、諸陵式に佐保山南陵平城宮御宇勝寶感神聖武天皇在大和國添上郡とし見え今同郡佐保村大字法蓮字北畑にあり

○師子座、佛の坐する床座をいひ轉じて高僧の座席を云釋氏要覽に佛爲人中師子凡佛所坐若牀若地皆名師子座とあり

○香爐、爐は狩谷校本に據て補ふ

○天子座、考證に未考疑有譌脫と云

○金輪幢、金輪は轉輪王の天より感得せし輪寶に金銀銅鐵の四種あり其金輪寶に象りて作れる幢を云

○寶幢、寶珠を以て飾れる幢、大日經疏五に上置如意珠故曰寶幢とあり

○香幢、其制詳ならず

鎮慶俊、或學業優富、或戒律清淨、堪聖代之鎮護、爲玄徒之領袖、加以、良弁、慈訓、二大德者、當于先帝不豫之日、自盡心力、勞勤晝夜、欲報之德、朕懷罔極、宜和上小僧都拜大僧都、華嚴講師拜小僧都、法進、慶俊、並任律師、

○六月乙酉、勅遣使於七道諸國、催撿所造國分丈六佛像、○丙戌、五七、於大安寺設齋焉、僧沙彌合一千餘人、○庚寅、詔曰、居喪之禮、臣子猶一、天下之民、誰不行孝、宜告天下諸國、自今日始迄來年五月三十日、禁斷殺生、○辛卯、太政官處分、太上天皇供御米鹽之類、宜充唐和上鑒眞禪師、法榮二人、永令供養焉、○壬辰、詔曰、頃者、分遣使工撿催諸國佛像、宜

○花縵、慧琳音義に花鬘西國人飾身之具也梵語云俱蘇摩羅此譯爲花鬘　○蓋幡、蓋は供佛具に涅槃經云幡蓋香華　和名岐沼加散一高座上具也とあり繖もキヌガサと訓み同じ物なり　○行道之出、行道の時に奏する音樂を云　○東不奉誄、寶字二年八月に予て尊號を追上し謚を稱す　○宜知、原本知之に作る諸本に據て改む　○右兵衞率、原本率を卒に作る金本及類史に據て改む　○授刀舍人、考證に蒲生氏曰授刀舍人寂慶雲四年七月置天平十八年二月改騎舍人爲授刀舍人而授刀舍人不復言其寮則寮已廢只其舍人隷之諸衞府猶如衞士分隷三府是亦謂所從者蓋是知也　○法榮、本朝高僧傳に見ゆ、戒壇院の律僧　○清潔、清の字は金本淀本に據て補ふ　○不用他醫、閣本醫を藥に作る　○觀水顯道、文選陸機歎逝賦に川閲水而成川水滔々而日度、註に閲[illegible]也揔衆水而成其川、終日流去而後水相續とあり、滔々として流去る水は留め難きを云　○轉讀、眞讀に對す、經典の紙を飜して讀誦に擬するなり　○冠蓋、字書に仕宦之服乘也とあり宮仕へするを云　○准則、准は準なり　○階下、金本淀本階下に作る　○慈訓、元亨釋書に傳あり　○安寛、古本僧綱補任神護景雲元年の下に大律師安寛任日不見とあり　○和上、和尚に同じ上に出づ　○小僧都、小少通ず下同じ　○法華寺鎮、寶龜十年正月詔に諸國國師諸寺鎭、太政官式に諸寺別當鎭三綱并定額僧等依官符補任之と見ゆ　○慶俊、元亨釋書に傳あり　○玄徒、原本玄を去に作る諸本に據て改む玄徒は僧侶を云

○六月催撿云々、諸國々分寺に於て造佛の事天平九年三月、同十三年正月、同年三月紀を參考すべし　○丙戌五七、考證に是月なき[illegible]七日己丑九七此云丙戌誤と云　○鑒眞、原本鑒を監に作る諸本に據て改む　○令供養焉、閣本令を合に作る

○怡土城、筑前國怡土郡にあり寶龜六年十月眞備の傳に拜大宰大貳建議創作怡土城云々とあり

（七月）授刀舍人、蒲生氏職官志に授刀舍人已無寮別無其長官可適從故姑屬中衛仍名授刀以別於中衛とあり

○刀自賣、原本賣を買に作る金本に據て改む

○山背忌寸、錄左京蕃別に山代忌寸出自魯國白龍王也とある是なり

○道原寺、原本寺を等に作る金本及類史に據て改む土左幽考に道原寺今亡とあり所在詳ならず

○拘忌、原本拘を狗に作る閣本及類史に據て改む

（八月）近江國朝書法、考證に未詳按大安寺資財帳有書法一卷疑此類と云

○崇福寺、拾芥抄に崇福寺近江國、天智天皇御願

來年忌日必令造了、其佛殿兼使造備、如有佛像幷殿已造畢者、亦造塔、令會忌日、夫佛法者、以慈爲先、不須因此辛苦百姓、國司幷使工等、若有稱朕意者、特加褒賞、○丙申、六七、於藥師寺設齋焉、○癸卯、七々、於興福寺設齋焉、僧幷沙彌一千一百餘人、○甲辰、始築怡土城、令大宰大貳吉備朝臣眞備專當其事焉、勅、明年國忌御齋、應設東大寺、其大佛殿步廊者、宜令六道諸國營造、必會忌日、不可怠緩、○秋七月己巳、勅、授刀舍人考選賜祿名籍者、悉屬中衛府、其人數以四百爲限、闕卽簡補、但名授刀舍人、勿爲中衛舍人、其中衛舍人、亦以四百爲限、○庚午、河內國石川郡人漢人廣橋、漢人刀自賣等十三人、賜山背忌寸姓、○癸酉、土左國道原寺僧專住、誹謗僧綱、无所拘忌、配伊豆島、○八月乙酉、以近江國朝書法一百卷、施入崇福寺、○冬十月辛巳朔、日有蝕之、○丁亥、太政官處分、山陽南海諸國舂米、自今以後、取海路漕送、若有漂損、依天平八年五月符、以五分論、三分徵綱、二分徵運夫、但美作紀伊二國、不在此限、○丙申、有白氣貫日、○癸卯、大納言藤原朝臣仲麻呂、獻東大寺米一千斛、雜菜一

とあり　(十月)太政官、紀略此下に發の字あり　○諸國舂米、舂き精げたる米を云大炊寮に送り諸司年中の常食に充るなり　田令に凡田租准國土收穫早晩九月中旬起輸十一月以前納畢其舂米運京者正月起運、八月卅日以前納とあり

千箇。○十一月丁巳、勅、如聞、出納官物諸司人等、苟貪前分、巧作逗留、稍延旬日、不肯收納、由此擔脚辛苦、競爲逃歸、非直敗治、實亦虧化、宜令彈正臺巡撿、自今以後、勿使更然。○丁卯、廢新嘗會、以諒闇故也、撿神祇官記、是年於神祇官曹司行新嘗之事矣、

○若有漂損云々、民部式に凡官物運京應差綱領者米三百石已上差國司史生已上勝任者充云々若有損失官物者科處如法其物以五分論三分徵綱二分徵脚とあり綱は綱領なり　○旬日、金本日を月に作る　○千箇、箇は金本及類史に據て補ふ　(十一月)貪前分　分配を貪るを云　○逗留、字書に留而不進也とあり停滯せしむるを云　○擔脚、運夫を云　○彈正臺巡撿、彈正式に凡諸司勘收諸國貢物不令留難若有作逗留百姓辛苦者宜即巡察糺彈とあり　○(注)神祇官曹司、神祇官廳を云

(十二月)○甲寅、考證に寅字衍是月庚辰朔無甲寅とあり　甲申は五日なりされど紀略には甲寅とありて申の字なし故に疑を存して後考を俟つ　○收集京中孤兒、延曆十八年二月紀和氣清麻呂傳に姉廣虫、嫁從五位下葛木宿禰戸主云々寶字八年大保惠美忍勝叛逆伏誅云々亂後民苦飢疫棄子草間遣人收養得八十三兒同名養子賜葛木首とあり　○紫微少忠、原本微を徵に作る閣本注本等に據て、

○十二月庚辰朔、自去月雷六日。○甲寅、請僧一百、於東大寺轉讀仁王經焉。○乙未、先是、有恩勅、收集京中孤兒、而給衣糧養之、至是男九人、女一人成人、因賜葛木連姓、編附紫微少忠從五位上葛木連戸主之戶、以成親子之道矣。○己亥、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、阿波、讃岐、伊豫、土左、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後、日向等二十六國、國別頒下灌頂幡一具、道場幡四十九首、緋綱二條、以充周忌御齋莊餝、用了收置金光明寺、永爲寺物、隨事出用之、

○改む○筑後、原本築後に作る金本晉本淀本に據て改む○豐前、原本なし諸本に據て補ふ○灌頂幡、灌頂に用ふる幡○道場幡、道場に用ふる幡○山背王、紀略背を代に作る○從二位藤原朝臣仲麻呂、金本二を三に作る○外嶋坊、狩谷校本に西大寺有島院、神護景雲元年九月帝幸西大寺島院、蓋卽此とあり○梵網經、聖教目錄に姚秦鳩摩羅什譯とす但し此は梵網經中の菩薩心地戒品第十を譯せしのみなり故に之を菩薩戒經と云○閔凶、左傳宣十二年に出づ字書に閔は弔者在門也病也、凶は吉之反凡不吉之事曰凶とあり父母の喪を云○荼毒、毛詩大雅桑柔章に出づ疏に荼苦葉毒者螫蟲とあり苦痛の意○宮車漸遠、史記范雎傳に宮車一日晏駕とあり宮車は靈柩の意に用ひたり○菩薩戒、梵網經所說の

○庚子、太上天皇御輿丁一人叙四階、一人二階、五十七人外二階、一百廿六人外一階。○己酉、勅、遣皇太子及右大弁從四位下巨勢朝臣堺麻呂於東大寺、右大臣從二位藤原朝臣豐成、出雲國守從四位下山背王於大安寺、大納言從二位藤原朝臣仲麻呂、中衛少將正五位上佐伯宿禰毛人於外嶋坊、中納言從三位紀朝臣麻路、少納言從五位上石川朝臣名人於藥師寺、大宰帥從三位石川朝臣年足、彈正尹從四位上池田王於元興寺、讚岐守正四位下安宿王、左大弁正四位下大伴宿禰古麻呂於山階寺、講梵網經、講師六十二人、其詞曰、皇帝敬白、朕自遭閔凶、情深荼毒、宮車漸遠、號慕無追、萬痛纏心、千哀貫骨、恒思報德、日夜無停、聞道、有菩薩戒、本梵網經、功德巍々、能資逝者、仍寫六十二部、將說六十二國、始自四月十五日、令終于五月二日、是以差使、敬遣請屈、願衆大德、勿辭攝受、欲使以此妙福无上威力、翼冥路之鸞輿、向華藏之寶刹、臨紙哀塞、書不多云、

十重禁四十八輕戒にて所謂五戒十戒皆此の中に在り

○六十二國、延喜の制五畿七道を分ちて六十六國となせど當時和泉は監と稱し安房は上總に加賀は越前に能登は越中に屬せり故に六十二國たり

○攝受、收め受くるを云原本受を愛に作る金本に據て改む

○以此妙福、原本以を收に作る金本に據て改む

○華藏、蓮華藏界の略にて極樂淨土を云

續日本紀卷第十九

○起天平寶字云々、金本此十四字なし

【天平寶字元年】至五月二日、金本至の下に于の字あり
○梵網經、勝寶八年十二月紀（四一〇頁）に出づ
○安居、天武天皇十二年紀に始て見ゆ安居とも結夏ともいひて僧侶の毎年四月十五日より七月十五日まで所謂一夏九旬の間家に禁足して道を修するを云
○仕君、原本仕を任に作る谷本從イ本に據て改む
○移孝之忠、孝經に君子之親孝故忠可移於君とあるに據れり
○以外、外の字は諸本に據て補ふ
○省選、原本選有に作り閣本曾本從本有選に作る

續日本紀卷第二十

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

起天平寶字元年正月盡二年七月

寶字稱德孝謙皇帝

天平寶字元年春正月庚戌朔、廢朝、以諒闇故也、勅、度八百人出家、○甲寅、勅、始自來四月十五日、至五月二日、毎國令講梵網經、其今年安居者、宜以五月三日爲始、又詔曰、比者、郡領軍毅、任用白丁、由此民習居家、求官、未識仕君、得祿、移孝之忠漸衰、勸人之道實難、自今已後、宜令所司、除有位人以外不得入、簡試例、其軍毅者、省選六衞府中器量辨了、身才勇健者擬任之、他色之徒、勿使濫訴、自餘諸事、猶如格令、○乙卯、前左大臣正一位橘朝臣諸兄薨、遣從四位上紀朝臣飯麻呂、從五位下石川朝臣豐人等、監護葬事、所須官給、大臣贈從二位栗隈王之孫、從四位下美努王之子也、○戊午、從五位下石津王、賜姓藤原朝臣、爲大納

言從二位仲麻呂之子、

今金本に據て訂す省は兵部省を云　○辨了、事物をよく識別して處置するを云ふ　○橘朝臣諸兄薨、補任に年七十四とあり　○飯麻呂、原本飯を餘に作る諸本に據て改む　○栗隈王、敏達天皇皇子難波王の子　○美努王、此王縣犬養宿禰東人の女三千代を娶りて諸兄を生めり　○石津王賜姓藤原朝臣、狩谷校本に賜姓下疑脱文、當作從五位下石津王賜姓○○○中納言從三位紀朝臣麻路薨大納言從二(疑三)位麻呂之子(父子同名亦可疑、公卿補任云天平勝寶八年月日薨歟或本天平寶字元年薨)と云從五位下石津王賜姓藤原朝臣爲大納言從二位仲麻呂之子と訓まば此まゝにても聞ゆ故に姑くかく訓めり　○仲麻呂之子、仲の字は金本に據て補ふ

○三月己酉朔戊辰二十、天皇寢殿承塵之裏、天下太平四字自生焉、○庚午廿二、勅召親王及群臣、令見瑞字、○乙亥廿七、勅、自今以後、改藤原部姓、爲久須波良部、君子部爲吉美侯部、○丁丑廿九、皇太子道祖王、身居諒闇、志在淫縱、雖加教勅、曾无改悔、於是勅召群臣、以示先帝遺詔、因問廢不之事、右大臣已下同奏云、不敢乖違顧命之旨、是日、廢皇太子、以王歸第、

(三月)承塵、抄屏障具に釋名云承塵(此間名如字)施於上承塵土也とあり東雅六に仰塵とも仰陽仰板とも又天花板とも云て天井板なり長押と云ものにあらずと云　○太平、原本大平に作る閣本及紀略に據て改む　○令見瑞字、東大寺文書に此時の宣命見ゆるを史に載せざるは意あるか　○改藤原部姓、藤原部は允恭天皇十一年衣通姫の爲に置かれし部氏にてそれより起れる氏なるが藤原氏の權勢盛なるより之を諱み憚りて改めしめたるなり　○久須波良部、錄和泉皇別に葛原部佐代公同祖豐城入彦命三世孫大御諸別命之後也と見え神護元年正月紀には久須原部連淨日見ゆ　○君子部、靈龜元年三月紀に注すこゝはたゞ君子と云文字を避けて吉美侯としたるのみ　○丁丑、廿九日なり廢帝紀の卷首に辛丑とせるは誤なり　○道祖王、金本祖道王に作る　○顧命、尙書に顧命篇あり天子の遺詔を云

○夏四月戊寅朔辛巳四、天皇召群臣、問曰、當立誰王、以爲皇嗣、右大臣藤原朝臣豐成、中務卿藤原朝臣永手等言曰、道祖王兄鹽燒王可立也、攝津大夫文室眞人珍努、左大弁大伴宿禰古麻呂等言曰、池田王可立也、大納言

(四月)辛巳、是月戊寅朔にて辛巳は四日なれば廢帝紀卷首に四月四日乙巳に作るは誤なり　○池田王　舍人親王の子　○知臣者云々、此句韓非子十過篇に出づ雄略天

二十三年紀にも此語あり
○因茲、原本茲を慈に作る金本閣本曾本に據て改む
○閨房不修、事實詳ならず大日本史注に是時藤原仲麻呂嬖孝謙帝、事出愛憎、其責池田王無知、曰孝行有闕、亦此類、而虛實殆不可知と云へり
○先是云々、廢帝紀卷首に先是仲麻呂妻大炊王以亡男眞從婦粟田諸姉居私第云々と見ゆ其奸黠思ふべし
○田村第、勝寶四年四月紀に出づ仲麻呂の邸宅にて添上郡田村にあり
○以儲爲固、儲君確定すれば人心安定して動搖せざるを云
○皇太子、金本閣本曾本皇太字なし
○敎勅、金本勅敎に作る
○佷戾、原本佷を狠に作る金本閣本に據て改む從本には狠に作る字書に佷は戾也一本作狠とあり敎誨すれども戾りて聽從せざるを云
○廢此、原本廢を癈に作る諸本に據て改む
○顯示徵驗、原本示を亦に作る金本に據て改む

藤原朝臣仲麻呂言曰、知臣者莫若君、知子者莫若父、唯奉天意所擇者耳、勅曰、宗室中、舍人新田部兩親王、是尤長也、因茲前者立道祖王、而不順勅教、遂縱淫志、然則可擇舍人親王子中、然船王者閨房不修、池田王者孝行有闕、鹽燒王者、太上天皇責以無禮、唯大炊王、雖未長壯、不聞過惡、欲立此王、於諸卿意如何、於是右大臣已下奏曰、唯勅命是聽、先是大納言仲麻呂招大炊王、居於田村第、是日、遣內舍人藤原朝臣薩雄、中衛廿人、迎大炊王、立爲皇太子、勅曰、國以君爲主、以儲爲固、是以先帝遺詔立道祖王、昇爲皇太子、而王諒闇未終、陵草未乾、私通侍童、無恭先帝、居喪之禮、曾不合憂、機密之事、皆漏民間、雖屢教勅、猶無悔情、好用婦言、稍多佷戾、忽出春宮、夜獨歸舍、云臣爲人拙愚、不堪承重、故朕竊計廢此、立大炊王、躬自乞三寶、禱神明、政之善惡、願示徵驗、於是三月廿日戊辰、朕之住屋承塵帳裏、現天下太平之字、灼然昭著、斯乃上天所祐、神明所標、遠覽上古、歷撿往事、書籍所未載、前代所未聞、方知、佛法僧寶、先記國家太平、天地諸神、預示宗社永固、戴此休符、誠嘉誠躍、

○佛法僧寶、佛法僧を三寶と云故に佛法僧の寶と云り
○宗社、宗廟社稷を云こゝは國家の意
○戴此休符、原本戴を載に作る金本閣本淀本に據て改む休符はよき瑞祥なり
○誠嘉誠躍、誠嘉の二字は諸本に據て補ふ按に嘉は喜に作るべく躍は懼の誤なるべし
○不孝之子云々、曹植求自試表に慈父不能愛無益之子、仁君不能蓄無用之臣とあるより出づ
○難矜、原本難務に作る金本に據て改む
○發却、金本淀本發を教に作れど廢の誤なるべし
○洗滌舊瑕、舊罪を洗ひ去るを云
○成童之歲云々、十五歲以上を云禮記內則に成童舞象學射御、鄭注に成童十五以上とあり入輕徭とは戶令に廿以下爲中とあり十七歲以上二十歲までの者は中男と稱し中男四人にて正丁一人の調庸を納むるを云
○既冠之年、廿一歲を云

其不孝之子、慈父難矜、無禮之臣、聖主猶棄、宜從天發却還本色、亦由王公等盡忠匡弼、感此貴瑞、豈朕一人所應能致、宜與王公士庶共奉天貺、以答上玄、洗滌舊瑕、遍蒙新福、可大赦天下、其自天平勝寶九歲四月四日昧爽已前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸悉赦除、但犯八虐、故殺人、私鑄錢、强盜竊盜者、不在此例、其天下百姓成童之歲、則入輕徭、既冠之年便當正役、愍其勞苦、用軫于懷、昔者、先帝亦有此趣、猶未施行、自今已後、宜以十八爲中男、廿二已上成正丁、古者、治民安國、必以孝理、百行之本莫先於玆、宜令天下家藏孝經一本、精勤誦習、倍加教授、百姓間有孝行通人、鄕閭欽仰者、宜令所由長官、具以名薦、其有不孝不恭不友不順者、宜配陸奧國桃生、出羽國小勝、以淸風俗、亦捍邊防、別有高臥穎川、遁跡箕山者、宜爲朕代之巢許、以禮巡問、放令養性、其僧綱、及京內僧尼、復位已上、施物有差、內供奉竪子、授刀舍人、及預周忌御齋種々作物而奉造諸司、男女等、夙夜不怠、各竭乃誠、宜令加位一級、幷賜綿帛、仕官踈緩、並減一等、自餘內外諸

禮記曲禮に二十日弱冠とあり二十歲にて冠するなり ○軫于懷、原本軫を軫に作る閣本に據て改む字書に軫動也俗軫字とあり ○此趣、趣け諸本に據て補ふ ○以十八爲中男、十七歲以上二十一歲までを中男とせられしなり、唐書玄宗紀に天寶三載十二月百姓十八已上爲中男二十二已上成丁とあり此と合へり ○百行之本、孝經正義に鄭玄の論語の注を引きて孝爲百行之本と云り ○家藏孝經、唐書玄宗紀に天寶三載十二月詔天下家藏孝經とあり

司主典已上、及天下高年八十已上、中衛兵衛舍人、門部主帥雜工、幷衞士仕丁、歷仕卅年已上、加位一級、但正六位上以上、及不仕者、不在此例、其在京文武官職事正六位上已上、及月齋社、祝等、賜物有差、天下鰥寡孤獨、篤疾癈疾、不能自存者、量加賑恤、其高麗、百濟、新羅人等、久慕聖化、來附我俗、志願給姓、悉聽許之、其戶籍記、无姓及族字、於理不穩、宜爲改正、又東大寺匠丁、造山陵司役夫、及左右京、四畿內、伊賀、尾張、近江、丹波、丹後、但馬、播磨、美作、備前、紀伊等國兵士、幷防人、鎭兵、衞士、火頭、仕丁、皷吹戶人、輪車戶頭、並免今年田租、百官詣朝堂、上表以賀瑞字、

○倍加教授、原本敎授の二字を發の一字に作る金本淀本に據て改む ○桃生、抄國郡部に陸奧國桃生(毛奈乃不)郡とありモヽをモムと云るは方言に從へるなり今はモヽフと云桃生城址は今陸前國本吉郡麻崎村柳津に在りと傳ふ ○小勝、抄國郡部に出羽國雄勝(乎加知)郡とあり今羽後國に屬す雄城址詳ならず ○潁川、高士傳に許由字仲武陽城槐里人堯讓天下於許由不受而逃去遁耕於中岳潁水之陽箕山之下とあるに據れり ○巢由、巢父と許由となり、巢父も高士傳に堯之讓許由也由以告巢父巢父曰汝何不隱汝形云々と見ゆ ○放令養性、原本放を於に作る金本淀本に據て改む ○復位、法隆寺資財帳の末に署名して可信復位僧賢廣、可信復位僧乘稱などと見ゆ狩谷校本頭書に天平寶字二年所寫增一阿含經跋云復位藥師寺沙門善牢勘本經復位元興寺沙門善覺對讀皆復位僧職位耶然未詳何義とあり ○內供奉、禁近に奉仕する人を云事物紀原に唐則天實錄云如意元年置內供奉とありこれに倣ひて置けるものなるべし ○豎子、內豎なり七日戊申詔及萬呂等に見ゆ豎は豎の俗字にてワラハと訓む ○冬隅乃歲、原本乃を力に作る金本に據て改む ○什資、原本什宮に作る金本に據て改む ○并減、原本減を成に作る諸本に據て改む ○月齋社祝、考證に月次祭に預かる神社を月齋社と云るかとあれど詳ならず ○姓及族字、御野國味蜂間郡春部里大寶二年戶籍に國造族戶主石足、母國造族麻△賣、妻國造赤麻多女また春部角麻呂などこれを書したると族を書したるとあるを云 ○火頭、賦役令義解に火頭者廝丁也執炊爨之事故曰火頭とあり ○皷吹戶、神龜三年八月壬戌紀に出づ ○輪車戶頭、輪車戶は車を運轉せしむる事を職とする戶を云

○五月(丁未朔)己酉、太上天皇周忌也、請僧千五百餘人於東大寺設齋焉、○辛亥、天皇移御田村宮、爲改修大宮也、○乙卯、勅曰、頃者、上下諸使、惣附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今已後、宜爲依令、其能登、安房、和泉等國、依舊分立、但馬肥前加介一人、出雲讃岐加目一人、○丁卯、以大納言從二位藤原朝臣仲麻呂爲紫微内相、從三位藤原朝臣永手爲中納言、詔曰、朕覽周禮、將相殊道、政有文武、理亦宜然、是以新令之外、別置紫微内相一人、令掌内外諸兵事、其官位、祿賜、職分、雜物者、皆准大臣、又勅曰、頃年選人、依格結階、人々位高、不便任官、自今以後、宜依新令、去養老年中、朕外祖故太政大臣(不比等)、奉勅刊修律令、宜告所司早使施行、授從二位藤原朝臣豐成正二位、正四位下鹽燒王從四位上池田王並正四位上、從四位上諱(光仁)從四位上船王並正四位下山背王從四位上、從五位上久勢王正五位下、從五位下厚見王、山村王、並從五位上、无位船井王、掃守王、尾張王、奈賀王、並從五位下、從四位上文室眞人大市、阿倍朝臣沙彌麻呂、高麗朝臣福信、並正四位下、從四位下巨勢朝臣堺

(五月)周忌、紀略周の上に之の字あり
○千五百餘人、原本餘人倒置す金本に據て改む
○田村宮、狩谷氏の說に勝寶四年四月紀に見ゆる藤原朝臣仲麻呂田村第を以て御在所とせられしがて宮とせられしなるべしと云り
○驛子、公式令に凡給驛傳馬皆依鈴傳符尅數云々皆數外別給驛子一人、義解に謂驛子騎馬爲先行者とあり
○能登安房和泉等分立、天平十二年八月及十三年十二月紀を參看すべし
○將相殊道、將は武將、相は宰相なり文武道を異にするを云
○理亦宜然、亦は諸本に據て補ふ諸本理を臣に作るは恐くは非なり
○別置、原本別を則に作り其下に亦の字あり別は金本に據て亦は諸本に據て削る
○依格結階、格文前に載せす結階法は選叙令義解及式部式に詳なり
○位高、三代格高位に作る文粹亦同じ
○新令、次に所謂養老令

麻呂從四位上、正五位上佐伯宿禰毛人、佐伯宿禰今毛人、正五位下佐味朝臣虫麻呂、並從四位下、正五位下大伴宿禰稻公、大倭宿禰小東人、賀茂朝臣角足、並正五位上、從五位上藤原朝臣千尋、百濟王元忠、阿倍朝臣嶋麻呂、粟田朝臣奈勢麻呂、大伴宿禰犬養、中臣朝臣清麻呂、石川朝臣名人、勤臣東人、葛木宿禰戸主、並正五位下、從五位下日下部宿禰子麻呂、下毛野朝臣稻麻呂、縣犬養宿禰小山守、小野朝臣東人、多治比眞人土作、藤原朝臣宿奈麻呂、藤原朝臣魚名、石上朝臣宅嗣、大倭忌寸東人、百濟朝臣足人、播美朝臣奥人、並從五位上、外從五位下葛井連諸會、日置造眞卯、中臣丸連張弓、上毛野君廣濱、廣野連君足、正六位上忌部宿禰呰麻呂、三國眞人百足、多治比眞人犬養、紀朝臣僧麻呂、大宅朝臣人成、中臣朝臣麻呂、高橋朝臣子老、阿倍朝臣御縣、榎井朝臣小祖父、賀茂朝臣鹽管、大原眞人今木、巨勢朝臣度守、石川朝臣君成、田口朝臣御直、賀茂朝臣淨名、藤原朝臣執弓、池田朝臣足繼、田中朝臣多太麻呂、大伴宿禰不破麻呂、石川朝臣人公、无位文室眞人波多麻呂、並從五位

なと云
○去養老年中云々、養老二年爾れて藤原不比等に勅して律令各十卷を修めしことを令集解弘仁格序及水鏡等に見ゆ
○任修、原本刊を削に作る金本閣本及類史に據て改む
○正四位上、上の字閣本谷本なし上の下曾本諱の字あり
○諱、白壁王卽ち光仁天皇
○尾張王、天平九年九月續紀に无位尾張王授從五位下とあるは別人なるべし
○藤原朝臣千尋、朝臣の二字は金本に據て補ふ
○葛木宿禰、前には連に作る宿禰を賜ひしことを載せず逸せしなるべし
○日下部、金本早部に作る下同じ
○魚名、原本魚を鱻に作る金本淀本に據て改む
○東人、原本人の字なし諸本に據て補ふ
○播美朝臣、古事記孝元天皇の段に波多八代宿禰者波美臣之祖、天武紀に十二年十一月波彌臣賜姓曰朝臣と見ゆ

下、正六位上食朝臣三田次、川原連凡、益田繩手、大藏忌寸家主、土師宿禰犬養、土師宿禰弟勝、河内畫師祖父麻呂、白鳥村主頭麻呂、上毛野君眞人、並外從五位下、

○六月（丁丑朔）乙酉（九）、制勅五條、諸氏長等、或不顧公事、恣集己族、自今以後、不得更然、（其一）、王臣馬數、依格有限、過此以外、不得蓄馬、（其二）、依令、隨身之兵、各有儲法、過此以外、亦不得蓄、（其三）、除武官以外、不得京裏持兵、前已禁斷、然猶不止、宜告所司固嚴加禁斷、（其四）、京裏二十騎已上、不得集行、（其五）、宜告所司嚴加禁斷、若有違犯者、科違勅罪、○壬辰（十六）、以從三位石川朝臣年足爲神祇伯、正四位下橘朝臣奈良麻呂爲右大弁、正五位下粟田朝臣奈勢麻呂爲兼左中弁、越前守如故、正五位上大倭宿禰小東人爲紫微大忠、從五位下田口朝臣御直爲大監物、從三位文屋眞人智努爲治

○上毛野君廣濱、勝寶元年八月紀に田邊史廣濱に作る按に勝寶二年三月賜田邊史難波等上毛野君姓とあれば其時より改めしなり　○呰麻呂、原本呰を些に作る金本に據て改む　○川原連、河内諸蕃に河原連廣階同祖陳思王植之後とあり　○益田繩手、神護元年三月紀に越前國足羽郡人益田繩手賜姓益田連と見ゆ　○弟勝、原本弟を第に作る閣本淀本に據て改む弘仁五年十月紀僧常樓傳には乙勝に作る　○河内畫師、錄河内諸蕃に河内畫師陳思王植之後とあり　○白鳥村主、原本鳥を烏に作る金本に據て改む神護景雲三年六月紀に右京人白鳥村主馬人白鳥椋人廣等廿三人賜姓白鳥連と見ゆ續後紀承和三年十月紀に民首氏主賜姓長岑宿禰焉與白鳥村主同祖出自魯公伯禽とあり民首と同祖なり

（六月）不顧公事、原本顧を預に作る會本淀本及三代格に據て改む　○王臣馬數云々、養老五年三月紀及彈正式に見ゆ　○隨身之兵云々、持統紀七年十月の詔及彈正式に見ゆ　○除武官以外云々、兵は兵器を云法曹至要抄に私有蓄兵器者徒一年と見え彈正式に刀子長五寸以上不得輙帶但衞府聽之と見ゆ　○固嚴加禁斷、嚴は紀略に據て補ふ　○若有違犯者、違は紀略に據て補ふ　○奈良麻呂爲右大弁、原本右を左に作る下文に據

て改む

○子麻呂、子は諸本に據て補ふ

○多具比、原本具を治に作る今本に據て改む

○外從五位上文忌寸、外の字は諸本に據て補ふ

部卿、從五位下大原眞人今城、爲少輔、從五位上藤原朝臣宿奈麻呂、爲民部少輔、從五位下石川朝臣君成、爲主稅頭、從三位石川朝臣年足、爲兵部卿、神祇伯如故、從五位上大伴宿禰家持、爲大輔、從五位下藤原朝臣繩麻呂、爲少輔、正四位上池田王、爲刑部卿、從五位下大伴宿禰御笠、爲大判事、正四位上鹽燒王、爲大藏卿、從五位下藤原朝臣濱足、爲少輔、從五位下巨勢朝臣淨成、爲宮內少輔、從五位下多治比眞人犬養、爲大膳亮、正四位下文室眞人大市、爲彈正尹、從四位上紀朝臣飯麻呂、爲右京大夫、從五位下田中朝臣多太麻呂、爲中衞員外少將、從五位下大伴宿禰不破麻呂、爲衞門佐、從五位下池田朝臣足繼、爲左衞士佐、從五位上日下部宿禰子麻呂、爲左兵衞督、從五位下石川朝臣人公、爲右兵衞督、從五位下下毛野朝臣多具比、爲右馬頭、從五位下大宅朝臣人成、爲左兵庫頭、左大弁正四位下大伴宿禰古麻呂、爲兼陸奧鎭守將軍、陸奧守從五位上佐伯宿禰全成、爲兼副將軍、從四位下多治比眞人國人、爲攝津大夫、外從五位上文忌寸馬養、爲鑄錢長官、從五位下大伴宿禰御

○參河守、原本河を川に作る金本閣本に據て改む
○從四位上巨勢朝臣、金本四を五に作るは非なり此年五月丁卯從四位上に進みし事上文に見ゆ
○市守、金本守市に作る
○伊勢大神宮云々、是より先大神宮奉幣使は卜食の五位以上を使に充てし事天平二年六月紀及神祇令等に見えたるをかく改められしなり是も藤原氏の專横に因れり
○不豫、金本不悆に作る豫と同じ
○祗承人、左右に仕ふる人なり原本祗を祇に作る曾本に據て改む
○反狀、大日本史注に是時惠美仲麻呂被孝謙嬖寵、醜聲頗聞、諸兄憤嘆之、偶見於言辭耳、實非有反志、後奈良麻呂圖除仲

依爲參河守、正五位上賀茂朝臣角足爲遠江守、從五位上石上朝臣宅嗣爲相摸守、紫微少弼從四位上巨勢朝臣堺麻呂爲兼下總守、正四位下大伴宿禰古麻呂爲陸奧按察使、從四位上山背王爲但馬守、從五位下藤原朝臣武良志爲伯耆守、從三位百濟王敬福爲出雲守、從三位藤原朝臣乙麻呂爲美作守、從五位下調連馬養爲備前守、從五位下柿本朝臣市守爲安藝守、正五位下阿倍朝臣嶋麻呂爲伊豫守、從五位下榎井朝臣子祖父爲豐後守。○癸巳、以兵部少輔從五位下藤原朝臣繩麻呂爲兼侍從。○乙未、始制、伊勢大神宮幣帛使、自今以後、差中臣朝臣、不得用他姓人。○甲辰、先是去勝寶七歲冬十一月、太上天皇不豫、時左大臣橘朝臣諸兄祗承人佐味宮守告云、大臣飲酒之庭、言辭无禮、稍有反狀云云、太上天皇優容不咎、大臣知之、後歲致仕、既而勅召越前守從五位下佐伯宿禰美濃麻呂、問識此語耶、美濃麻呂言曰、臣未曾聞、但慮佐伯全成應知、於是將勘問全成、大后慇懃固請、由是事遂寢焉、語具田村記、至是從四位上山背王復告、橘奈良麻呂備兵器、謀圖田村宮、正

○麻呂一名禦其志也と云り
○致仕、勝寶八歲二月紀〔四一〕頁に見ゆ
○田村記、田村は仲麻呂の第にして廢帝嘗て留まり給ひしことあれば田村記とは其時の記錄なるべきも廢帝紀に此文なければ今知り難し
○橘奈良麻呂云々、奈良麻呂は諸兄の一男にて母は藤原氏不比等の女なり
金本呂の下に反道の二字あり

七月 計家良久、原本家を奈に作る次々の詔に謀家良久とあるに據て改む
○大宮乎將閉止、大宮は當時の御在所仲麻呂の田村第を云金本止を土に作る下同じ
○誰奴加、朝廷に背き奉るものなどあるまじきに誰がしかするぞと強く詔り給へるにてシは強め辭なり
○一事乎云々、前には佐味宮守之に次ぎて山背王に密告ありしと云
○可問賜、解に問字は闕の誤にてサシオキと訓べしと云り
○慈政者行布閇、原本慈

四位下大伴宿禰古麻呂亦知其情。○秋七月戊申、詔曰、今宣久、頃者王等臣等乃中爾、無禮久逆在流人止母在而、計家良久、大宮乎將閉止云而、私兵備布止聞看而、加遍須加遍須所念止母、誰奴加朕朝乎背而、然爲流人乃一人母將在止所念波、隨法不治賜、雖然一事乎數人重奏賜倍波、可問賜物爾夜波將在止所念止母、慈政者行布閇安爲氐、此事者天下難事爾在者、狂迷遍流頑奈留奴心乎波、慈悟志正賜倍伎物在止所念看波奈母、如此宣布、此狀悟而、人乃見可咎事和射奈世曾、如此宣大命爾不從將在人波、朕一人極而慈賜止毋、國法不得已成奈牟、己家家己門門祖名不失、勤仕奉禮止宣、天皇大命乎、衆聞食止宣。詔畢更召入右大臣以下群臣、皇太后詔曰、汝多知諸者、吾近姪奈利、又竪子卿等者、天皇大命以、汝多知乎召而屢詔志久、朕後爾太后爾能仕奉利助奉禮止詔伎、又大伴佐伯宿禰等波、自遠天皇御世、內乃兵止爲而仕奉來、又大伴宿禰等波、吾族爾毋在、諸同心爾爲而、皇朝乎助仕奉牟時爾、如是醜事者聞曳自、

を茲に作る金本に據て改む
○此事者、謀反の人を罰ふことなり
○難事、上の安爲氏の反にて國家の大事と云むが如し
○慈悟、原本慈を茲に作る金本閣本淀本に據て改む
○所念看、金本看を者に作る
○人乃見可告事和射奈世曾、コトもワザも一つにて人の見て告むべき事をなすなとなり
○皇太后、光明皇后を申奉る太は原本大に作る閣本に據て改む
○近姪、眞の姪ならずとも姪に擬らふ人々までを云るなるべし
○豎子卿、周禮に内豎の官あり我國にても童子にて宮仕へするを豎子といひてワラハと訓めり抄職官部に内豎三百人俗云知比佐和良波とあり、大御許に仕奉るものなり卿とはこの豎子を詔給へるにて豎子には良家の子弟ども あればなり此豎子必ずしも未冠のものとも限られねば成人のなほ童の形

汝多知乃不能爾依氏志、如是在良志、諸以明清心、皇朝乎助仕奉禮止宣。是日夕、中衞舍人從八位上上道臣斐太都、告內相云、今日未時、備前國前守小野東人、喚斐太都謂云、有王臣謀殺皇子及內相、汝能從乎、斐太都問云、王臣者爲誰等耶、東人答云、黃文王、安宿王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂等、徒衆甚多、斐太都又問云、衆所謀者、將若爲耶、東人答云、所謀有二、一者、駈率精兵四百、將圍田村宮、二者、陸奧將軍大伴古麻呂、今向任所、行至美濃關、詐稱病、請欲相見一二親情、蒙官聽許、仍卽塞關、斐太都良久答云、不敢違命、先是去六月、右大弁巨勢朝臣堺麻呂密奏、爲問藥方、詣答本忠節宅、忠節因語云、大伴古麻呂告小野東人云、有人欲劫內相、汝從乎、東人答云、從命、忠節聞斯語、以告右大臣、(豐成)大臣答云、大納言(仲麻呂)年少也、吾加教誨、宜莫殺之、是日、內相藤原朝臣仲麻呂、具奏其狀、警衞內外諸門、乃遣高麗朝臣福信等、率兵追捕小野東人、答本忠節等、並皆捉獲、禁著左衞士府、又遣兵圍道祖王於右京宅、○己酉、勅右大臣藤原朝臣豐成、中納言藤原朝臣永手等八人、就左衞

にて仕奉るものもあれば御前近く仕奉る人々た豎子に擬へて豎子媚さ云にもあるべし
○天皇、聖武天皇を申給ふ
○汝多知乎、原本乎を手に作る諸本に據て改む
○賊後爾、崩御し給はむ後はさなり
○大后爾、皇后の御上なり
○詔伎、これまで聖武天皇の御言葉なり
○昔然爾母在、大伴氏は藤原氏の一族にはあられご古然悲は不比等の女な娶りたればかく詔はせ給へるなるべし
○諸同心爾在而、大伴佐伯の氏人諸心を合せてなり
○助仕奉牟時爾、諸同じ心にて助仕奉らむ時にはの意
○如是醜事者聞曳自、醜事に謀反を云、聞えじの下に然えにかゝる醜事の聞ゆるはさ云語含めり
○備前國前守、金本前の字なし
○皇子、皇太子大炊王を申す
○安宿王、史徵云長屋王

士府、勘問東人等、東人確導無之、即日夕、內相仲麻呂侍御在所、召鹽燒王、安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂五人、傳太后詔宣曰、鹽燒等五人乎、人告謀反、汝等爲吾近人、一毛吾乎可怨事者不所念、汝等乎皇朝者己己太久高治賜乎、何乎怨志岐所止志旦加然將爲、不有加止奈母所念、是以汝等罪者免賜、今往前然莫爲止宣、詔訖、五人退出南門外、稽首謝恩、○庚戌、詔、更遣中納言藤原朝臣永手等、窮問東人等、欵云、每事實也、無異斐太都語、去六月中、期會謀事三度、始於奈良麻呂家、次於圖書藏邊庭、後於太政官院庭、其衆者安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂、多治比犢養、多治比禮麻呂、大伴池主、多治比鷹主、大伴兄人、自餘衆者闇裏不見其面、庭中禮拜天地四方、共歃鹽汁、誓曰、將以七月二日、闇頭發兵圍內相宅、殺劫即圍大殿、退皇太子、次傾皇太后宮而取鈴璽、即召右大臣將使號令、然後廢帝、簡四王中、立以爲君、於是追被告人等、隨來悉禁著、各置別處、一一勘問、始問安宿、欵云、去六月二十九日、黃昏黃文來云、奈良麻呂欲得語言云爾、安宿即從往、至太政官院內、

先有二十許人、一人迎來禮揖、近著看顏、是奈良麻呂也、又有素服者一人、熟看此小野東人也、登時衆人共云、時既應過、宜須立拜、安宿問云、未知何拜耶、答云、拜天地而已云爾、安宿雖不知情、隨人立拜、被欺往耳、又問黃文、奈良麻呂、古麻呂、多治比犢養等、辭雖頗異、略皆大同、勅使又問奈良麻呂云、逆謀緣何而起、欵云、內相行政甚多無道、故先發兵、請得其人、後將陳狀、又問、政稱無道、謂何等事、欵云、造東大寺、人民苦辛、氏々人等、亦是爲憂、又置剗奈羅爲己大憂、問、所稱氏々指何等氏、又造寺元起自汝父時、今噵人憂、其言不似、於是奈良麻呂辭屈而服、又問佐伯古比奈、欵云、賀茂角足請高麗福信、奈貴王、坂上苅田麻呂、巨勢苗麻呂、牡鹿嶋足、於額田部宅飲酒、其意者爲令此等人莫會發逆之期也、又角足與逆賊謀、造田村宮圖指授入道、於是一皆下獄、又分遣諸衞、掩捕逆黨、更遣出雲守從三位百濟王敬福、大宰帥正四位下船王等五人、率諸衞人等、防衞獄囚、拷掠窮問、黃文改名多夫禮、道祖改名麻度比、大伴古麻呂、多治比犢養、小野東人、賀茂角足改姓乃呂志、等、並杖下死、安宿王及妻子

の子高市皇子の孫
○驅率、原本率を卒に作る金本に據て改む下同じ
○塞闕、原本闕を闕に作る金本に據て改む
○回語、原本回を目に作る金本淀本に據て改む回は因の俗字
○大臣答云、金本大臣の二字なし
○礭噵、類史礭を確に作る礭は確に同じ噵は原本導に作る金本に據て改む噵は字書に通作道とあり道は言也正確に言明するを云
○謀反、原本謀を謀に作る諸本及類史に據て改む
○吾近人、吾が近き族の人なりとの意鹽燒王の室は不破內親王にて聖武天皇の皇女、安宿王黃文王の母は不比等の女なれば御甥なり、奈良麻呂亦同じ古麻呂のみは親族姻戚の緣なきが如しされどこゝは五人の大方は吾が近き緣りの人々なりとの意
○已々太久、許貴太斯伎とあるに同じ其處に云るが如く「いかばかりか」と云むが如し原本此四字を細字とす今大字に改む
○然將爲、然る醜事はせ

○むとなり
○不有加止奈毋、謀反すなどゝ人は告ぐれどもよもや然ることはあるべきにあらず然にはあらじかと思召すとなり
○共歃血汁、原本歃を飲に作る閣本淀本に據て改む漢土にては盟のしるしに歃血と云ことありこゝもそれと同じやうの事せしなるべし武烈紀前紀に眞鳥大臣恨事不濟云々廣指鹽詛遂被誅戮と見えたるは此と違へるか詳ならず
○皇太后宮、金本太の字なし
○鈴璽、乙卯の宣命に皇太后朝乎傾鈴印契乎取而云々と見ゆれば鈴印を云なるべし
○四王、道祖王鹽燒王安宿王黄文王を云
○置劉、職員令國司の條義解に關者撿判之處劉者斬擽之所とあり
○大磯、考證に和名抄相模國淘綾郡礒長郷蓋是とあり
○勘問、金本問を間に作る
○奈貴王、下文に奈賀王に作る

配流佐度、信濃國守佐伯大成、土左國守大伴古慈斐二人、並便流任國、其與黨人等、或死獄中、自外悉依法配流、又遣使追召遠江守多治比國人勘問、所欵亦同、配流於伊豆國、又勅陸奧國守、令勘問守佐伯全成、欵云、去天平十七年、先帝陛下行幸難波、寢膳乖宜、于時奈良麻呂謂全成曰、陛下枕席不安、殆至大漸、然猶無立皇嗣、恐有變乎、願率多治比國人、多治比犢養、小野東人、立黄文而爲君、以答百姓之望、大伴佐伯之族、隨於此擧、前將無敵、方今天下憂苦、居宅無定、乘路哭叫、怨歎實多、緣是議謀、事可必成、相隨以否、全成答曰、全成先祖、清明佐時、全成雖愚、何失先迹、實雖事成、不欲相從、奈良麻呂云、見天下愁、而述所思耳、莫導他人言畢辭去、厥後、大嘗之歲、奈良麻呂云、前歲所語之事、今時欲發、如何、全成答曰、朝廷賜全成高爵重祿、何敢違天、發惡逆事、是言前歲已忌、何更發耶、奈良麻呂云、汝與吾同心之友也、由此談說、願莫導他、又去年四月、全成賷金入京、于時奈良麻呂語全成曰、相見大伴古麻呂以否、全成答云、未得相見、是時、奈良麻呂云、願與汝欲相見古麻

呂、共至辨官曹司、相見語話、良久奈良麻呂云、聖體乖宜、多經歲序、闚看消息、不過一日、今天下亂、人心無定、若有他氏立王者、吾族徒將滅亡、願率大伴佐伯宿禰、立黃文而爲君、以先他氏、爲萬世基、古麻呂曰、右大臣大納言、是兩箇人、乘勢握權、汝雖立君、人豈合從、願勿言之、全成曰、此事無道、實雖事成、豈得明名、言畢歸去、奈良麻呂古麻呂便留彼曹、不聞後語、勘問畢而自經、○辛亥、授從四位上山背王、巨勢朝臣堺麻呂、並從三位、從八位上上道臣斐太都從四位下、正七位下縣犬養宿禰佐美麻呂、從八位上佐味朝臣宮守、並從五位下、並是告密人也、又上道臣斐太都賜姓朝臣、○甲寅、授正六位上藤原朝臣朝獵從五位下、以從五位下忌部宿禰鳥麻呂爲信濃守、從五位下藤原朝臣朝獵爲陸奧守、勅曰、比者頑奴潜圖反逆、皇天不遠、羅令伏誅、民間或有假託亡魂、浮言紛紜、擾亂鄉邑者、不論輕重、皆與同罪、普告遐邇、宜絕妖源、又勅曰、百姓之間、若有逆人之輩、京畿十日內、遠處卅日內首訖、若限內能首、並寬其罪、限內不首、被人告言、必科本罪、其首人等、並首本部官司、官

○坂上苅田麻呂、原本坂を城に作る諸本に據て改む
○苗麻呂、麻呂は原本麿の一字に作る閣本淀本に據て二字とす
○額田部宅、大和國平群郡額田鄉あり大和志に額田鄉方廢額田部村存とあり今生駒郡平端村の大字なれり
○率諸衛人、原本率を卒に作る金本に據て改む
○(注)多夫禮、狂態の意
○(注)麻度比、惑ひの意二王の謀反に與かりしを惡みてかゝる醜名に改めさせ給へることは後に清麻呂を穢麻呂と改めしめたる類なり
○(注)乃呂志、愚癡の意なるべし姓の字恐くは名の誤
○佐度、金本度を渡に作る
○或死獄中、此時の首謀者と見做されし奈良麻呂斷罪のこと見えざるは疑はし大日本史注には按公卿補任奈良麻呂伏誅一說配流本書無流殺奈良麻呂明文據下御南院宣詔奈良麻呂蓋處遠流乎とあり考證に按八年九月

押勝傳云寶字元年云々反爲籔依此奈良麻呂蓋所殺歟未詳、又仁明天皇紀に承和十年八月辛未九位橘朝臣奈良麻呂云々可贈從三位、又贈太政大臣正一位のこと同十四年十月丁酉紀に見ゆ
○追召、金本に追の字なし
○勘問、原本劾問に作る金本閣本曾本淀本に據て改む
○陸奧國守、守の字は曾本淀本に據て補ふ
○多治比犢養、比の字は金本閣本曾本淀本に據て補ふ
○以答百姓之望、原本答を畣に作る金本閣本曾本淀本に據て改む
○隨於此擧、隨於の二字は金本閣本曾本淀本に據て補ふ
○清明、清の字は金本閣本曾本淀本に據て補ふ
○大嘗、勝寶元年十一月乙卯なり
○多繆歳序、原本繆を作に作る金本に據て改む
○天下亂、金本亂の上に亂の字あり
○奈良麻呂古麻呂、金本古麻呂の三字なし

司知訖、抄其姓名奏上。○乙卯、遣中納言藤原朝臣永手、左衞士督坂上忌寸犬養等、就右大臣藤原朝臣豐成第、宣勅曰、汝男乙繩關兇逆之事、宜禁進者、卽加肱禁、寄勅使進、以紫微少弼從三位巨勢朝臣堺麻呂爲兼左大弁、從四位上紀朝臣飯麻呂爲右大弁、春宮大夫從四位下佐伯宿禰毛人爲兼右京大夫、從四位下上道朝臣斐太都爲中衞少將、○戊午、以從五位下小野朝臣田守爲刑部少輔、正六位上藤原朝臣乙繩爲日向員外掾、從五位下奈賀王爲讃岐守。勅曰、右大臣豐成者、事君不忠、爲臣不義、私附賊黨、潛忌內相、知搆大亂、無敢奏上、及事發覺、亦不肯究、若怠延日、殆滅天宗、嗚呼宰輔之任、豈合如此、宜停右大臣、左降任大宰員外帥。是日、御南院、追集諸司幷京畿內百姓村長以上、而詔曰、明神大八洲所知倭根子天皇大命良麻止宣大命乎親王王臣百官人等、天下公民衆聞宣、高天原神積坐須皇親神魯岐神魯彌命乃、定賜來流天日嗣高御座次乎、加蘇毘奪將盜止爲而、惡逆在奴久奈多夫禮、麻度比、奈良麻呂、古麻呂等伊、逆黨乎伊射奈比率而、

先內相家乎圍而、其乎殺而、即大殿乎圍而、皇太子乎退而、次者皇太后朝乎傾、鈴印契乎取而、召右大臣而、天下爾號令使爲牟、然後廢帝、四王之中乎簡而爲君牟止謀而、六月廿九日乃夜、入太政官坊而、飲鹽汁而誓禮天地四方而、七月二日發兵牟止謀定而、二日未時、小野東人喚中衞舍人備前國上道郡人上道朝臣斐太都而誂云久、此事俱仁西牟止伊射奈布爾依而、俱仁西牟止事者許而、其日亥時具奏賜都、由此勘問賜爾、每事實止申而、皆罪爾伏、是以勘法爾、皆當死罪、如此雖在慈賜止爲而、一等輕賜而、姓名易而遠流罪爾治賜都、此誠天地神乃慈賜比護賜比、挂畏開闢已來御宇天皇大御靈多知乃、穢奴等乎伎良比賜弃賜布爾依氐、又盧舍那如來、觀世音菩薩、護法梵王帝釋四大天王乃不可思議威神之力爾依氐志、此逆在惡奴等者顯出而、悉罪爾伏奴良志止奈毋、神奈賀良毋、所念行須止宣天皇大命乎、衆聞食宣、事別宣久、久奈多夫禮良爾所詿誤百姓波、京土履牟

○朝獵、金本閣本曾本淀本獵を獦に作る
○假託、原本託を說に作る諸本に據て改む
○三十日內、內の字は金本に據て補ふ
○豐成第、原本第を弟に作る諸本及紀略に據て改む
○乙繩云々、神護元年十一月の豐成傳に云弟大納言仲滿執レ政專レ權勢傾ニ大臣一大臣天資弘厚時望攸レ歸仲滿毎欲ニ中傷一未レ得ニ其隙一大臣第三子乙繩平生與ニ橘奈良麻呂相善由レ是奈良麻呂等事覺之日仲滿誣以ニ黨逆一左ニ遷日向掾一云々と見えたり乙繩或は弟繩に作る
○肱禁、獄令に凡應レ議請減一者犯ニ流以上若除免官當一者並肱禁とあり肱禁とは兩肱に索をかけて禁するを云
○右大弁、飯麻呂爲ニ右大辨一已見ニ天平十三年七月紀蓋既罷復任歟と考證に云り
○天宗、皇統を云
○嗚呼、原本呼を乎に作る金本及紀略に據て改む
○左降云々、八年九月紀及神護元年十一月豐成傳

事磯嶋、出羽國小勝村乃柵戸爾移賜久止宣。天皇大命乎衆聞食宣。○壬戌、勅曰、凶逆之徒、潜謀不軌、其言發覺、流配邊軍、但所支兵仗、藏隱民間、未首官司、原情可責、職宜知委、勅出之後、限十日内、悉令首盡、若限滿不首、被人言告、一與逆人同科。○庚午、於宮中設齋、講仁王經焉。○癸酉、詔曰、鹽燒王者、唯預四王之列、然不會謀庭、亦不被告、而緣道祖王者、應配遠流罪、然　其父新田部親王以清明心仕奉親王也、可絕其家門夜止爲奈母、此般罪免給、自今往前者、以明直心仕奉朝廷止詔。

を姿行すべし任の字は原本右降の上にあり紀略に據て移替ふ　○宣賜來流、天照大御神高御產巣日命の命以て吾御孫命を天津日嗣と定めて豐葦原中津國に君臨せしめ給ひしとなり　○無作提、掠むと同じ原本提を大字にして眦に作れるを皆本流本に據て改む　○久奈多夫禮麻度比、久奈はカタクナにて頑の意、多夫禮は狂なり、頑に狂れたる人道理に惑へる人と云意なり　○古麻呂等伊、伊は原本伴に作る閣本に據て改む　○大殿、皇太子の坐す宮なり　○皇太后、此皇太后は天皇の御母后光明子を申し奉れるならむも狩谷氏は按皇太后謂孝謙帝也と云り　○鈴印契、鈴は驛鈴なり印は字の如し天武紀にオシテと訓り押手の意なり公式令に内印方三寸五位以上位記及下諸國公文則印外印方二寸半六位以下位記及太政官文案則印云々など見え鈴印のことは職員令に見ゆ契は孝德紀にシルシと訓り公式令に三關國各給關契二枚云々と見ゆ　○取而、奪取ることなり　○右大臣、藤原豐成なり　○四王之中乎、四王は鹽燒王道祖王安宿王黃文王なり鹽燒王は天武の御孫にして新田部親王の御子なり道祖王の兄君聖武天皇の御女不破内親王を妃とせられたり、安宿王は天武天皇の御曾孫高市皇子の御孫、左大臣從二位長屋王の子なり、黃文王は安宿王同母弟なり此事神皇正統記光仁天皇の段にいはれたり　○太政官坊、上文に太政官院庭とあり　○中衞舍人、中衞は神龜五年八月勅始置中衞府大將一人云々中衞三百人云々と見ゆ　○上道朝臣斐太都、斐太都が次々に官職位階を陞せられしは此度の事を密告せしに酬いられしなり　○但仁西奈止、原本には仁を倍に、閣本流本には位に作り金本には仁とありて西以下三字缺く解に但は伊に作るべく倍は一本に佐に作れば伊佐西にてイザセと訓べし下も同じイザセは人を誘ふ詞なりとすれど倍又位或は仁に作るは何れも仁の訛れるにて西以下は流本に西奈止とあるが正しければ本文の如く改めつ　○依而但仁西奈止、原本仁を倍に作り皆本流本位に作る金本に據て改む　○其日亥時、午後十時なり上文には是日夕とあり　○事者許而、表面には其事を許諾してなり、解には言葉には諾ひ許してなるべしと云り　○罪爾伏奴、伏はフシヌと訓べしと解にいへどシタガヒヌとし訓べきなりとすれば漢文訓にはあらず　○勘法、此法は律を云　○死罪、コロスツミと訓べし允恭紀に死刑をコロスツミと訓り罪の下に金本閣本皆本有字あれど原本のまゝなるがよし　○遠

流罪、罪ありて流すことは古事記允恭段に輕太子者流於伊余湯とありて流字をハナツと云が古言なるべきも奈良朝の程は漢國の名目のまゝに流罪はナガスと訓みけむと解に見えたれど字書にも流は放也とありハナツとも訓めばハナツミと訓むが穩當なるべし流罪に遠近中の三ありて其國々も定められしこと刑部式に見ゆ　○梵王帝釋、釋の字は金本曾本淀本に據て補ふ　○四大天王、北多聞天、東持國天、南增長天、西廣目天の四天王なり　○神奈賀良母、此の五字は閣本曾本淀本に據て補ふ　○所詿誤、字書に詿は誤也欺也誤は失也又惑也とありアザムカエタルと訓べし持統紀に爲皇子大津所詿誤とあるに由る　○穢瀰、キタナミと訓べし瀰は原本禰に作る閣本曾本に據て改む　○小勝村、原本小字を脫し勝を滕に作る小は諸本に據て補ひ勝は金本淀本に據て改む、小勝村は出羽國雄勝郡にあり　○柵戸、柵は城にて未だ城郭など云るまで完備せぬを云戸は柵に屬したる民戸なり　○所支、原本支を友に作る金本閣本に據て改む　○知委、考證に委疑當作悉と云り　○言告、同云疑當倒作告言　○唯預、狩谷校本云唯恐雖　○不會謀庭、漢文風の書樣なれば字のまゝには訓べからずコトハカレルトコロニマジラズと訓べし　○道祖王、鹽燒王の御弟　○緣、カゝルと訓べし緣坐にて俗に云かゝりあひの罪なり　○配、ヲサムと訓べし前詔に遠流罪爾治賜都とあり　○新田部親王、天武天皇の第七皇子

（八月）阿妳、新撰字鏡に阿嬭は乳母、又女乃止、玉篇、嬭乳也母也妳同上或作妳とあり山田史日女嶋は天皇の御乳母なり　○賜宿禰之姓、勝寶七年正月紀（四〇二頁）に見ゆ　○竪寒毛、唐書李訓傳贊に寒心竪毛とあり俗に所謂身の毛よだつなり　○凶痛已深、字書に痛は傷也とあり哀傷の意深きを云原本痛を痟に作る金本淀本に據て改む　○御母、萬葉廿左大臣橘卿宴于山田御母之宅とある是なり解に御母はミオモと訓みて乳母を謂ふとあり　○秦等、姓氏錄に見ゆる秦氏なり秦氏の事は前に見えれど此事に關係せし

○八月（丁丑朔）戊寅、勅、故從五位下山田三井宿禰比賣嶋、緣有阿妳之勞、褒賜宿禰之姓、恩波枉激、餘及傍親、而聽人悖語、不奏丹誠、同惡相招、故爲蔽匿、今聞此事、爲竪寒毛、凶痛已深、理宜追責、可除御母之名、奪宿禰之姓、依舊從山田史、○庚辰、詔曰、今宣久、奈良麻呂我兵起爾被雇多利志秦等乎婆遠流賜都、今遺秦等者惡心無而淸明心乎持而仕奉止宣、又詔曰、此遍乃政、明淨久仕奉禮留爾依而治賜人母在、又愛盛爾一二人等爾冠位上賜治賜久止宣、授正四位下船王正四位上、從四位上紀朝臣飯麻呂、藤原朝臣八束、並正四位下、正五位上大伴宿禰稻公從四位下、正五位下藤原朝臣千尋正五位上、從五位下佐伯宿禰美濃麻呂從五

人もありしなるべし其は已に遠流に處したれば其他の奈氏は忠誠を盡して仕奉れさ宣給へるなり
○此逼乃政、奈良麻呂等の謀反の事につきての取計ひを云
○蜚盛、メテノサカリさ訓むべし萬葉五に神奈我良愛能盛爾云々さあるに同じ
○正四位下船王、正四位下以下正四位上に至る十字は金本閣本曾本從本に據て補ふ
○石川朝臣年足、原本川を河に作る金本曾本從本に據て改む
○班列、中納言さして其職に列するを云論語季氏篇に陳力就列不能者止さあるに出づ
○諸姪、蓋し多治比犢養及奈良麻呂黨の國人等を指せり
○益頭郡、抄國郡部に益頭（末之豆）さあれど通行紀に所謂燒津にてヤイツさ訓べきなり今も燒津さ書きてヤイヅさ訓り
○金刺舍人、延曆十年四月紀に駿河國駿河郡大領金刺舍人廣名あり貞觀五年九月紀には信濃國諏方

位上、无位奈紀王、正六位上巨曾倍朝臣難波麻呂、當麻眞人淨成、高橋朝臣人足、阿倍朝臣繼人、釆女朝臣淨庭、小野朝臣石根、石川朝臣豐麻呂、並從五位下、以從三位石川朝臣年足、爲中納言、兵部卿神祇伯如故、從三位巨勢朝臣堺麻呂、正四位下阿倍朝臣沙彌麻呂、紀朝臣飯麻呂、並爲參議、勅、中納言多治比眞人廣足、年臨將耄、力弱就列、不敎諸姪、悉爲賊徒、如此之人、何居宰輔、宜辭中納言、以散位歸第焉、○己丑、駿河國益頭郡人金刺舍人麻自、獻蠶產成字、○甲午、勅曰、朕以寡薄、忝繼洪基、君臨八方、于茲九載、曾無善政、日夜憂思、危若臨淵、愼如履冰、於是去三月二十日、皇天賜我以天下太平四字、表區宇之安寧、示歷數之永固、爾乃賊臣廢皇子道祖及安宿黃文、橘奈良麻呂、大伴古麻呂、大伴古慈斐、多治比國人、鴨角足、多治比犢養、佐伯全成、小野東人、大伴駿河麻呂、荅本忠節等、稟性凶頑、昏心轉虐、不顧君臣之道、不畏幽顯之責、潛結逆徒、謀傾宗社、悉受天嘖、咸伏罪辜、是以、二叔流言、遂戮蕭墻、四凶群類、遠放邊裔、京師肅々、已無擬民、朝堂寥廓、更有賢輔、竊恐德

郡人金刺舍人貞長姓大朝臣を賜はること見ゆ
○麻自、類史(八十三)及紀略麻の下に呂の字あり下同じ
○若臨淵云々、詩小雅小旻章に戰々兢々如臨深淵如履薄氷とあるに據れり
○爾乃、原本爾を細字とす曾本及紀略に據て大字とす
○廢皇子、狩谷校本云皇下大字脫乎
○大伴駿河麻呂、大の字は諸本に據て補ふ
○不畏幽顯之貴、幽顯は神人を云へど此は鬼神を主とす鬼神の助を畏れざるを云
○天嘖、嘖は卽ち責字正字通に嘖或作責とあり應神紀嘖讓其无禮狀とさ見ゆ
○罪釁、釁は釁に同じ釁は字書に瑕隙也とあり罪過と云に同じ
○二叔流言云々、尙書金縢篇に出づ二叔は管叔蔡叔なり周武王死せし後周公が幼主成王に不利なる計畫ありと管叔蔡叔等流言せしかど公の至誠あらはれて外部に及ばさず內

非虞舜、運屬時艱、武拙殷湯、任當撥亂、晝思夜想、廢寢與食、登民仁壽、致化興平、爰得駿河國益頭郡人金刺舍人麻自獻蠶兒成字、其文云、五月八日開下帝釋標知天皇命百年息、因國內頂戴茲祥、踊躍歡喜、不知進退、悚息交懷、卽下群臣議、便奏云、維天平勝寶九歲、次丁酉夏五月八日者、是陛下奉爲太上天皇周忌、設齋悔過之終日也、於是帝釋感皇帝皇后之至誠、開通天門、下鑒勝業、標陛下之御宇、授百年之遠期、日月所臨、咸看聖胤繁息、乾坤所載、悉知寶祚延長、仁化滂流、寓內安息、慈風遠俗、國家全平之驗也、謹案、蠶之爲物、虎文而有時蛻、馬吻而不相爭、生長室中、衣被天下、錦繡之麗、於是出焉、朝祭之服、於是生矣、故令神虫作字、用表神異、而今蕃息之間、自呈靈字、止戈之日、已奏丹墀、實是自天祐之、吉無不利、五八雙數、應寶壽之不惑、日月共明、象紫宮之永配、朕祇承嘉符、還恐寡德、豈朕力之所致、是賢佐之成功、宜與王公共辱斯貺、但景命爰集、隆慶伊始、思俾惠澤被於天下、宜改天平勝寶九歲八月十八日、以爲天平寶字元年、其依先勅、天下諸國調

部にて其事止みしさなり
○蕭牆、論語季氏篇に吾恐季孫之憂不在顓臾而在蕭牆之内とさ見え注に蕭之言肅也牆謂屏也君臣相見之禮至屏而加肅敬焉是以謂之蕭牆とさあり
○至近の地を云
○四凶群類云々、四凶は共工、驩兜、三苗、鯀の四人なり舜が此四人を邊裔の地に放逐せしかば天下悉く服したるを云、此事尚書舜典に見ゆ奈良麻呂以下を流罪にして京師の靜まれるに譬へたり
○登民仁壽、漢書禮樂志に驅一世之民、躋之仁壽之域とあるに出づ
○帝釋標、原本標を摽に作る金本曾本淀本及紀略に據て改む下同じ
○百年息、原本息を因に作る諸本及紀略に據て改む下文聖胤繁息及寓内安息の句あれば此字こゝにあるべきなり
○踊躍、原本躍踊に作る金本曾本淀本に據て改む
○悚息交懷、不德にして此瑞符あり故に一は以て喜び一は以て懼れ給ふなり
○開通大門、天の字は金

浦、毎年免一郡者、宜令所遣諸郡今年俱免、其所掠取賊徒資財、宜與士庶共遍均分、又准令、雜徭六十日者頃年之間、國郡司等不存法意、必滿役使、平民之苦略由於此、自今已後、皆可減半、其負公私物未備償者、是由家道貧乏、實非奸欺所爲、古人有言、損有餘補不足、天之道也、宜自天平勝寶八年已前、擧物之利、悉應除免、又今年晩稻稍逢亢旱、宜免天下諸國田租之半、寺神之封不在此例、其獻瑞人白丁金刺舍人麻自、宜叙從六位上、賜絁二十疋、調綿四十屯、調布八十端、正稅二千束、執持參上驛使中衞舍人少初位上賀茂君繼手、應叙從八位下、賜絁十疋、調綿廿屯、調布廿端、其不奏上國郡司等、不在恩限、但當郡百姓賜復一年、○己亥、勅曰、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善於樂、禮樂所興、惟在二寮、門徒所苦、但衣與食、亦是天文、陰陽、曆筭、醫針等學、國家所要、並置公廨之田、應用諸生供給、其大學寮卅町、雅樂寮十町、陰陽寮十町、內藥司八町、典藥寮十町、○辛丑、勅曰、治國大綱、在文與武、廢一不可、言著前經、向來旌勅、爲勸文才、隨職閑要、量置公田、但至備武、未

有處分、今故六衞置射騎田、每年季冬、宜試優劣、以給超群、令興武藝、其中衞府卅町、衞門府、左右衞士府、左右兵衞府各十町、

本淀本に據て補ふ　○勝業、勝妙の行業なり　○慈風遠俗、原本慈を玆に作る金本に據て改む諸本俗を治に作る恐くは非狩谷校本に恐當慈風遠洽とさるに從ふべし　○丹墀、詳ならず按に字書に丹は赤色也墀は階上地也以丹漆之曰丹墀とあり帝釋の標を云るか　○自天祐之云々、周易大有の卦に上九自天祐之吉无不利とあるに出づ　○五八、五月八日の五と八となり　○寶壽、原本寶を實に作る金本曾本に據て改む　○不惑、論語爲政篇に四十而不惑とあり、按に五八を四十とす天皇養老二年に降誕せさせ給へば本年は聖算四十歳なり　○日月、五月の月と八日の日を云　○紫宮之永配、天皇皇后の永く並び給ふ意、配は配偶の配なり天皇を日に皇后を月に象りしなるべし　○景命、景は大也大命と云に同じ景命爰集とは天の大命の集まり來れる由にて次の句と共に奇しき文字の顯れたるを云　○降慶伊始、降慶は降なる慶びにて其意は前に述べたるが如し　○先勅、前に見えず逸せしならむ　○今年俱免、原本今を合に作る金本淀本及紀略に據て改む　○均分、原本均を物に作る金本に據て改む　○雜徭六十日、賦役令に見ゆ　○家道貧乏、乏の字は淀本に據て補ふ金本閣本曾本之に作るは乏の譌なり　○損有餘云々、老子天之道章に天之道損有餘而補不足とあるに據れり　○勝寶八年、年は歲に改むべし　○調綿四十屯、此五字は金本閣本淀本曾本に據て補ふ　○調布廿端、原本廿を一十に作る金本閣本淀本に據て改む　○安上云々、此四句孝經廣要道章より出づ　○禮樂所興、樂の字は金本閣本淀本及類史に據て補ふ　○二寮、大學寮、雅樂寮を云　○三十町、金本閣本淀本同じ、類史二十に作り三代格卅町に作る、狩谷氏曰卅町當作廿町類聚國史卷百七職官部大學寮延曆十三年十一月丙子條可併考と云　○內藥司云々、內藥師以下十町に至る十字は金本閣本曾本及類史に據て補ふ　○在文與武云々、帝範崇文篇に文武二途捨一不可とあり　○向來旌勅、從來より詔勅にあらはれたりとの意金本閣本淀本旌を放に作る　○隨職閑要、職務の繁閑に隨ひてなり　○量置公田、量の字は曾本淀本に據て補ふ　○備武、閣本曾本備を修に作り金本循に作る　○射騎田、原本射を職に作る金本淀イ本及格に據て改む射騎田とは騎射の練習の費用に充つる田なり　○超群、原本超を越に作る諸本及格に據て改む　○各十町、格には衞門府の下に八町九段一百步、左右衞士府の下に各十町七段二百五十六步と細注す

○閏八月丙午朔癸丑八、以從四位上上道朝臣斐太都爲吉備國造。○壬戌十七、紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言、臣聞、旌功不朽、有國之通規、思孝無窮、承家之大業、緬尋古記、淡海大津宮御宇皇帝天智、天縱聖君、聰明睿主、考正制度、創立章程、于時功田一百町賜臣曾祖藤原內大臣鎌足、褒勵壹匡

（閏八月）吉備國造、神護景雲元年九月紀備前國造に作る　○不朽、原本朽を杇に作る今金本曾本淀本に據る　○功田一百町、大日本史注に十二月壬子太政官奏大織冠藤原內大臣乙巳年功田一百町大功世々不絕云々とあり考證に按乙

已年者卽孝德大化元年也、此仲麻呂爲天智所賜者、々雖異、而事則一、今無所考ふ
○臣曾祖、原本臣を巨に作る、諸本及類史に據て改む
○褒勳、褒は褒の字、褒は褒賞、勳は功勳なり
○宇臣宇內之績、宇臣は論語憲問篇に管仲相桓公霸諸侯一匡天下とあり、金本會本淀本績を緖に作る、緖績通
○因籍、金本淀本因を困に作る、籍に通す
○冠蓋連門、冠位貴き家の多きなり
○安不忘危、易繫辭傳に君子安而不忘危、存而不忘亡とあり
○夕惕如厲、易乾卦九三に君子終日乾乾、夕惕若厲とあり
○芝蘭幾敗、芝蘭は芝草と蘭草となり、共に良香ある草なり、子弟の譬に用ふ、晉書謝安傳に安嘗戒約子姪、因曰子弟亦何預人事、々玄なり、答曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於庭階耳と見ゆ
○山階寺、卽ち奈良の興福寺なり

宇內之績、世々不絶、傳至于今、爾來臣等因籍祖勳、冠蓋連門、公卿奕世、方恐富貴難久、榮華易凋、是以安不忘危、夕惕如厲、忽有不慮之間、兇徒作逆、殆傾皇室、將滅臣宗、未報先恩、芝蘭幾敗、冀修冥福、長保顯榮、今有山階寺維摩會者、是內大臣之所起也、願主垂化、三十年間、無人紹興、此會中廢、乃至藤原朝廷、胤子太政大臣、傷構堂之將墜、歎爲山之未成、更發弘誓、追繼先行、則以每年冬十月十日、始闢勝筵、至於內大臣忌辰、終爲講了、此是奉翼皇宗、住持佛法、引導尊靈、催勸學徒者也、伏願、以此功田、永施其寺、助維摩會、彌令興隆、遂使內大臣之洪業、與天地而長傳、皇太后之英聲、俱日月而遠照、天恩曲垂、儻允臣見、請下主者、早令施行、不任微願、輕煩聖聽、戰々兢々、臨深履薄、勅報曰、備省來表、報德惟深、勸學津梁、崇法師範、朕與卿等、共植茲因、宜告所司、令施行、○癸亥、夫人正二位橘朝臣古那可智、无位橘朝臣宮子、橘朝臣麻都賀、又正六位上橘朝臣綿裳、橘朝臣眞姪、改本姓、賜廣岡朝臣、從五位下出雲王、篠原王、尾張王、无位奄智王、猪名部王、賜姓豐野眞人、○丙寅、勅曰、如

聞護持佛法無尙木叉勸導尸羅實在施禮是以官大寺別永置戒本師田十町自今已後每爲布薩恒以此物量用布施庶使怠慢之徒日厲其志精勤之士彌進其行宜告僧綱知朕意焉〇壬申勅曰大宰府防人頃年差坂東諸國兵士發遣由是路次之國皆苦供給防人產業亦難辨濟自今已後宜差西海道七國兵士合一千人充防人司依式鎭戍其集府之日便習五教事具別式

〇維摩會、拾芥抄に齊明天皇四年戊午大織冠於山階陶原家始立精舍乃設齋會維摩會之始也とあり　〇垂化、原本垂を乘に作る諸本に據て改む　〇至藤原朝廷云々、緣起に中間已絕此會不行慶雲二年歲次乙巳秋七月後太政大臣臥病不豫是日誓願劣臣怠緩不繼先志自今以後躬爲膳夫施敬三寶供養衆僧轉維摩於萬代傳正敎於千年云々と見えたるを云　〇傷構堂之將墜、之の字は金本曾本淀本に據て補ふ類史墜を隨に作る構堂は尙書大誥に若考作室既底法厥子乃弗肯堂矧肯構とあるを取れり　〇歎爲山之未成、尙書旅獒に爲山九仞功虧一簣とあるを取れり　〇十月十日、玄蕃式に興福寺維摩會十月十日始十月六日終と見ゆ　〇忌辰、十月十六日、鎌足の忌辰なり　〇與天地、原本與を興に作る山崎校本に據て改む　〇儻允臣見、原本允を元に作る金本淀本に據て改む　〇主者、奉行の人を云　〇微願、原本微を徵に作る諸本に據て改む　〇輕煩聖聽、輕煩の二字は諸本に據て補ふ　〇茲因、要略茲因に作る　〇又正六位上、又は闇本父に作る恐くは衍か　〇廣岡朝臣、考證に古世可智以下諸人蓋坐奈良麻呂事改賜此姓也と云　〇尾張王、五年十月紀に從五位下尾張王爲大監物とあるは自ら別人なり　〇猪名部王、勝寶三年二月紀に猪名部王男云々とあるは別人なり　〇豐野眞人、錄左京皇別に豐野眞人天武天皇子淨廣壹高市王之後也とあり　〇勅曰如聞云々、三代格十五に官符を載す　〇無尙木叉、木叉は原本木又に作る闇イ本淀イ本及略記に據て改む釋氏要覽上戒法に波羅提木叉華言別別解脫言解脫者即戒所感果也云々毗尼母云波羅提木叉者最勝義諸善之本以戒爲根諸善得生故とあり波羅提木叉の略にて漢語に別々解脫の義佛法を獲得するには別々解脫より貴きものはなしとなり　〇尸羅、釋氏要覽（上戒法）に戒、智度論云梵語尸羅秦言性善古師云尸羅此云戒以止過防非爲義、菩薩資糧論云尸羅者清凉義とあり戒の梵語なり　〇戒本師田、原本戒を惑に作る曾本淀本に據て改む金本戒を烕に作れるより訛れり戒本師田は主稅式に布薩戒本田とあり戒本は經の名にて聖敎目錄三に菩薩戒本經曇無讖譯菩薩戒本一卷唐玄奘譯とある是なり　〇布薩、要覽（下住持）に布薩、此律居常式也此云共住又云淨住、毗尼母論云何名布薩答斷名布薩謂能斷所作能斷煩惱斷一切不善法故、又云淸淨名布薩とあり　〇量用、原本量を置に作る金本曾本淀本及格に據て改む　〇防人云々、天平十年九月諸國の防人を停められしも未だ全く停廢せざれば今亦此勅ありしなり　〇其集府之日、其の字は闇本曾本淀本に據て補ふ　〇五教、管子兵法篇に五教一曰敎其目以形色之旗二曰敎其耳以號令之數三曰敎其足以進退之度四曰敎其手以長短之利五曰敎其心以賞罰之誠とあるを云

(九月)後部高、録左京未定雑姓に後部高高麗國人正六位上後部高千金之後さあり
(十月)勅曰如聞云々、和銅五年十月紀（九〇頁）を參看すべし
○量給粮食、原本粮を罷に作り食の字なし金本皆な淀本に據て補訂す
○其法者、交替式には法の上に差の字あり
○長官六分云々、主税式にも見ゆ
○其博士、交替式博の上に國の字あり主税式亦同じ
○論定數、考證に論疑恃字下脱有脱文さ云ひ諸國より京都に輸送すべきものは國の大小に隨ひて各定數ありさなり
○大少、淀イ本及紀略少を小に作る
(十一月)勅曰云々、三代格此勅を載す
○其口誦、三代格講を誦に作る淀本には書に同じ
○三經、大經一、中經一、小經一なり學令に詳なり
○三史、大唐にては史記班固漢書東觀漢記の三書を三史さ稱せしが唐以

○九月辛巳、授正六位上後部高笠麻呂外從五位下、○癸卯、授外從五位下六人部久須利外從五位上、○冬十月庚戌、勅曰、如聞、諸國庸調脚夫、事畢歸鄕、路遠粮絶、又行旅病人無親恤養、欲免飢死、餬口假生、並辛苦途中、遂致橫斃、朕念乎此、深增憫矜、宜仰京國官司、量給粮食醫藥、勤加撿按、令達本鄕、若有官人怠緩不行者、科違勅罪、○乙卯、太政官處分、比年諸國司等交替之日、各貪公廨、競起爭論、自失上下之序、既虧淸廉之風、於理商量、不合如此、今故立式、凡國司處分公廨式者、惣計當年所出公廨、先塡官物之欠負未納、次割國內之儲物、後以見殘作差、處分、其法者、長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、其博士醫師准史生例、員外官者、各准當色、○丁卯、始制、諸國論定數、隨國大少各有差、事具別式、○十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國、博士醫師、多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講經生者三經、傳生者三史、醫生者大素、甲乙、脉經、本草、針生者素問、針經、明堂、脉決、天文生者天官書、漢晉天文志、三色簿讚、韓楊要集、陰陽生者周易、

新撰陰陽書、黄帝金匱、五行大義、曆筭生者漢晋律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論、並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、教資之業永繼、國家良政莫要於茲、○壬寅、勅、以備前國墾田一百町、永施東大寺唐禪院十方衆僧供養料、伏願、先帝陛下薫此芳因、恒蔭禪林之定影、翼茲妙福、速乘智海之慧舟、終生蓮華之寶刹、自契等覺之眞如、皇帝皇太后、如日月之照臨、並治萬國、若天地之覆載長育兆民、遂使爲出世之良因、成菩提之妙果、

後史記漢書後漢書を三史とす
○醫生云々、醫疾令に醫生習二甲乙脉經本草一兼習二小品集驗等方一義解に謂甲乙經十二卷脉經二卷新修本草廿卷とあり
○大素、唐書藝文志に黄帝内經大素三十卷
○本草、式部式に凡醫生皆讀二蘇敬新修本草一とあり
○針生云々、醫疾令に針生習二素問黄帝針經明堂脉決一義解に謂素問三卷黄帝針經三卷明堂三卷脉決二卷とあり
○天官書、史記の天官書
○漢晋文志、漢書及晋書の天文志
○三色簿讃、三代格三家簿讃に作る考證に按現在書目錄簿讃三卷上卷魏石甲□卷耳文卿、下卷晋石咸所謂三色簿讃蓋是也　○韓楊要集、唐志に韓楊天文要集四十卷　○新撰陰陽書、同に王璨新撰陰陽書三十卷　○黄帝金匱、同に曹士蔿黄帝金匱經三卷　○五行大義、同に蕭吉五行記五卷あり是ならむ林述齋の佚存叢書には五行大義五卷と見ゆ　○漢晋律曆志大衍曆、志以下四字は金本會本淀本に據て補ふ律曆志は漢書晋書の律曆志、大衍曆は唐志に僧一行開元大衍曆一卷曆議十卷あり　○九章、學令に算經孫子五曹九章海嶋六章綴術三開重差周髀九司各爲二一經一と見え唐志に劉向九章重差一卷其他數部見ゆ　○六章、現在書目錄に曆數家六章六卷高氏撰とあり　○周髀、隋志に趙嬰注周髀一卷唐志に甄鸞注周髀一卷あり　○定天論、隋志に定天論三卷唐志に虞喜定天論一卷あり　○被任、格に被の上進の字あり　○所給公廨云々、類史政理部承和五年六月勅天平寶字元年勅書曰諸學生等云々夫全取二一年俸一物情難レ和分析之事宜レ有二節級一云々また貞觀十二年十二月諸國博士醫師受業料云々の條參考すべし　○受業師、原本受を爱に作る諸本及類史に據て改む　○唐禪院、東大寺要錄四に天平勝寶十年所二創建一也龍興寺和上居二住於此院一後移二住招提寺一とあり考證に按十年疑七年之譌龍興寺和上謂二鑑眞一也と云り　○十方、東西南北四維上下を云、諸方と云に同じ　○陛下、原本陛を陸に作る金本淀本に據て改む　○董、略記に薫に作るに從ふべし　○寶刹、原本刹を剎に作る金本淀本に據て改む　○等覺、考證に天臺四教儀云今且依二法華瓔珞一略明二位次一有レ八 云々七等覺是因果未、入妙覺是果位也と見ゆ

(十二月)三檀、佛說無量壽經序に三檀等備とあり、註に一財施、二法施、三無畏施也とあり
○來際、未來際を云
○十身、華嚴經に一無著佛、二願佛、三業報佛、四住持佛、五涅槃佛、六法界佛、七心佛、八三昧佛、九性佛、十如意佛と見ゆ
○乙巳、皇極天皇四年即ち孝德天皇大化元年なり
○昔今、原本今を令に作る金本賀本に據て改む
○大織、此下に冠の字あるべきか
○乙巳年功田一百町、皇極天皇四年藤原大織冠天皇と謀りて蘇我入鹿を誅す是に因れる功田なり
○一十町、原本十一町に作る金本賀本谷本に據て改む
○禰麻呂、金本賀本谷本禰を彌に作る
○從五位上伊吉連、大寶元年六月紀三年二月紀並に正五位下に作る
○伊余部連馬養、考證に按島養功田大寶三年紀書上田一町此云十町未詳と云り
○古麻呂、皇極紀子麻呂

○十二月辛亥、勅、普爲救養疾病及貧乏之徒、以越前國墾田一百町、永施山階寺施藥院、伏願、因此善業、朕與衆生、三檀福田、窮於來際、十身藥樹、蔭於塵區、永滅病苦之憂、共保延壽之樂、遂契眞妙之深理、自證圓滿之妙身、○壬子、太政官奏曰、旌功錫命、聖典攸重、褒善行封、明王所務、我天下也、乙巳以來、人々立功、各得封賞、但大上中下雖載令條、功田記文或落其品、今故比校昔今、議定其品、大織藤原内大臣乙巳年功田一百町、大功世々不絶、贈小紫村國連小依壬申年功田一十町、贈正四位上文忌寸禰麻呂、贈直大壹丸部臣君手、並同年、功田各八町、贈直大壹文忌寸智德同年、功田四町、贈小錦上置始連菟同年、功田五町、五人並中功、合傳二世、正四位下下毛野朝臣古麻呂、贈正五位上調忌寸老人、從五位上伊吉連博德、從五位下伊余部連馬養、並大寶二年修律令、功田各十町、四人並下功、合傳其子、以上十條、先朝所定、贈大錦上佐伯連古麻呂乙巳年功田四十町六段、被他駈率、効力誅姦、功有所推、不能稱大、依令上功、合傳三世、從五位上尾治宿禰大隅壬申年功田四十町、淡海

に作る　○四十町六段、原本四を三に作る、諸本に據て改む　○被仰駈率云々、原本率を卒に作る、金本曾本淀本に據て改む、事蹟は皇極紀四年に詳なり　○尾治宿禰大隅、考證に靈龜二年四月紀作贈從五位上、按持統天皇紀十年五月授直廣肆、直廣肆當從五位下、則其上階蓋贈爵矣と云り　○四十町、原本三十町に作る、金本曾本淀本に據て改む、持統紀にも賜水田四十町とあり　○警蹕、原本驚蹕に作る、宮本に據て改む　○大紫、原本紫を雲に作る、山崎校本に據て改む　○贈小錦下文直、靈龜二年四月紀贈大錦下に作る　○志太留、孝謙紀垂の一字に作る　○告吉野大兄密、吉野大兄とは古人皇子の御事なり、大化元年九月紀（紀下一七四頁）に詳なり　○石敷、書紀に石布或は磐鍬に作る　○奉使云々、齊明紀五年（紀下二一五頁）に詳なり　○賊洲、洲は卽ち州の字

朝廷諒陰之際、義興警蹕、潛出關東、于時大隅參迎奉導、掃清私第、遂作行宮、供助軍資、其功實重、准大不及、比中有餘、依令上功、合傳三世、贈大紫星川臣麻呂壬申年功田四町、贈大錦下坂上直熊毛同年功田六町、贈正四位下黃文連大伴同年功田八町、贈小錦下文直成覺同年功田四町、四人並歷涉戎場、輸忠供事、立功雖異、勞効是同、比校一同村國連小依等、依令中功、合傳二世、大錦下笠臣志太留告吉野大兄密功田二十町、所告微言、尋非露驗、雖云大事、理合輕重、依令中功、合傳二世、從四位下上道朝臣斐太都天平寶字元年功田二十町、知人欲反、告令芟除、論實雖重、本非專制、依令上功、合傳三世、小錦下坂合部宿禰石敷功田六町、奉使唐國、漂著賊洲、橫斃可矜、稱功未概、依令下功、合傳其子、正五位上大和宿禰長岡、從五位下陽胡史眞身、並養老二年修律令功田各四町、外從五位下矢集宿禰虫麻呂、外從五位下鹽屋連吉麻呂、並同年功田各五町、正六位上百濟人成同年功田四町、五人並執持刀筆、刪定科條、成功縱多、事匪匡難、比校一同下毛野朝臣古麻呂

等依令下功、合傳其子。以上十四條、當今所行、

二年（戊戌）春正月戊寅（五）、詔曰、朕以庸虛、忝承大位、母臨區宇、子育黎元、思與賢良共清風化、長固寶曆、久安兆民、豈意、佷戾近臣、潛懷不軌、同惡相濟、終起亂階、賴宗社威靈、遄從殲殄、既是逆人、親黨私懷、並不自安、雖犯深愆、尚加徽貶、使其坦然無懼、息其反側之心、如聞、百僚在位、仍有憂惶、宜悉朕懷、不勞疑慮、昔者張敞負譽、更致朱軒、安國免徒、重紆青組、咸能洗心勵節、輸欵盡忠、事美一時、譽流千載、今之志士、豈謝前賢、改滌過咎、勉己自新、方冀瑕不掩德、要待良治、用靡弃材、以成大廈、凡百列位、宜鏡斯言、夙夜無怠、務脩爾職、又詔曰、朕聞、則天施化、聖主遺章、順月宣風、先王嘉令、故能二儀無愆、四時和協、休氣布於率土、仁壽致於群生、今者三陽既建、万物初萠、和景惟新、人宜納慶、是以、別使八道、巡問民苦、務恤貧病、矜救飢寒、所冀撫宇之道、將神合仁、亭育之慈、與天通事、疾疫咸却、年穀必成、家無寒窶之憂、國有來蘇之樂、所司宜知、差清平使、勉加賑恤、稱朕意焉、以從五位下石川朝臣豐成、爲京畿內使、錄

なり
○大和宿禰長岡、考證に按據養老六年二月及天平九年十一月紀長岡小東人疑一人蓋長岡初名小東人後改今名也と云
○縱多、原本縱を雖に作る諸本に據て改む
○合傳、原本合を令に作る金本曾本淀本に據て改む
【天平寶字二年】貝戾、原本戾を淚に作る金本閣本に據て改む
○殲殄、殲は殱に作るべし宗は卽ち殄の俗字なり字書に殱は盡也殄も盡也絕也とあり滅し盡くす義なり
○張敞負譽、漢書張敞傳に罪によりて亡命し後召されて冀州刺史に拜せられしこと見ゆ
○致朱軒、朱軒は文選の注に二千石之車飾也とあり張敞始め罪ありて亡命せしが後召されて高官に擢用せられしを云
○安國免徒、原本徒を從に作る諸本に據て改む安國は姓韓字長孺梁人なり漢書韓安國傳に法に坐して罪にふれ徒刑に處せられしも後內史に拜せら

事一人、正六位下藤原朝臣淨弁爲東海、東山道使、判官一人、錄事二人、正六位上紀朝臣廣純爲北陸道使、正六位上大伴宿禰潔足爲山陰道使、正六位上藤原朝臣倉下麻呂爲山陽道使、從六位下阿倍朝臣廣人爲南海道使、正六位上藤原朝臣楓麻呂爲西海道使、道別錄事一人、

○二月(癸卯朔)辛亥(九)、左大舍人廣野王賜池上眞人姓、○壬戌(二十)、詔曰、隨時立制、有國通規、議代行權、昔王彝訓、頃者民間宴集、動有違愆、或同惡相聚、濫非聖化、或醉亂無節、便致鬪爭、據理論之、甚乖道理、自今已後、王公已下、除供祭療患以外、不得飲酒、其朋友僚屬、內外親情、至於暇景、應相追訪者、先申官司、然後聽集、如有犯者、五位已上停一年封祿、六位已下解却見任、已外決杖八十、冀將淳風俗、能成人善、習禮於未識、防亂於

れ御史大夫の官に至り丞相の事を行ひしこと見ゆ　○重紆青組、青組も二千石之車飾也とあり重れて青組をまとひたりとなり陸上衡謝平原内史表に安國免徒起紆青組張敞亡命坐致朱軒とあるに取れるなり何れも過て罪に陷りしも後顯職大官に昇り青組朱軒の車に乗り駟馬に鞭うちて馳するやうの人となれりとなり　○瑕不掩德、禮記聘義に瑕不掩瑜瑜不掩瑕忠也とあるに取れり　○要待良治、良治は玉を作る良工なり良治あれば玉の瑕をも磨きて美玉と爲べしとなり　○用靡弃材、老子に聖人常善救人故無棄人常善救物故無棄物とあるより出づ　○大廈、廈は大屋也材を棄ることなくして大家屋を完成すべしとなり　○聖主遺章、聖王の遺せる憲章の意　○順月宣風、新に正月來ればそれに順ひて風化を宣べ施すを云　○二儀無惑、陰陽たがふことなきを云　○休氣布於率土、率は原本卒に作る諸本に據て改む休氣は字書に美善也慶也とあり　○よき氣國中に洽く布き滿るを云　○三陽既建、三陽は三春と云に同じ建は生ずるを云　○和景惟新、和景は温和なる光景にて是も春の氣候を云　○別使、原本別を引に作る諸本に據て改む　○撫字、字は乳也愛也とあり撫愛に同じ　○來蘇、尙書仲虺之誥に徯我后后來其蘇とあるに取れり后は君、蘇は蘇生するを云　○錄事二人、事の字は諸本に據て補ふ　○紀朝臣廣純、金本曾本純を紀に作る

(二月)廣野王賜池上眞人姓、十二月癸丑紀にも亦出づ恐らくは誤あるべし、池上眞人は錄右京皇別に大原眞人同祖とあり敏達天皇孫百濟王の後　○議代行權、代は時代なり時代に隨つて相議するを云、行權とは權は權宜の制なり時宜を見て制を立て之を行ふを云　○便致鬪爭、金本曾本淀本便を使に作る　○療患以外、三代實錄及

未然也、○己巳、勅曰、得大和國守從四位下大伴宿禰稻公等奏偁、部下城下郡大和神山生奇藤、其根虫彫成文十六字、王大則幷天下人此內任大平臣守昊命、即下博士議之、咸云、臣守天下、王大則幷內任此人、昊命太平、此知群臣盡忠、共守天下、王大覆載、無不兼幷、聖上擧賢、內任此人、昊天報德、命其太平者也、加以、地即大和、神山、藤此當今宰輔、事已有効、更亦何疑、朕恭受天貺、還恐不德、吁哉卿士、戒之愼之、敬順神教、各修爾職、勤存撫育、共致良治、其大和國者宜免今年調、當郡司者加位一級、貢瑞人大和雜物者、特叙從六位下、賜絁二十疋、綿四十屯、布六十端、正稅二千束、○三月辛巳、詔曰、朕聞、孝子思親、終身罔極、言編竹帛、千古不刊、去天平勝寶八歲五月、先帝登遐、朕自遭凶憫、雖懷感傷、爲禮所防、俯從吉事、但每臨端五、風樹驚心、設席行觴、所不忍爲也、自今已後、率土公私、一准重陽、永停此節、○壬午、伊豫國神野郡人少初位上賀茂直馬主等、賜賀茂伊豫朝臣姓、○丁亥、船名播磨、速鳥、並叙從五位下、其冠者、各以錦造、入唐使所乘者也、

格には以をこに作る
○僚屬、原本僚を寮に作る三代實錄及格に據て改む
○暇景、暇ある日と云に同じ
○解却見任、却の字は三代實錄及格に據て補ふ
○大和神山、山邊郡大倭神社の山なり山邊郡なれど城下郡に近し故に城下郡と云しなるべし
○大平臣、閣本大を太に作る
○昊命、閣本晉本具命に作る
○太平者、原本太を大に作る金本に據て改む
○大和雜物、此四字は金本閣本晉本從本に據て補ふ
（三月）罔極、原本罔を岡に作る閣本及類史紀略に據て改む
○竹帛、支那にて古は文字を竹帛に記載せり故に書册を竹帛と云
○自遭凶憫、金本閣本及細井本遭を遺に、憫を閔に作る
○雖懷感傷、原本懷を情に作る諸本及類史に據て改む
○端五、初學記に周處風

士記曰仲夏端午注云端始也謂五月五日也とあり五に午の字を書くは陔餘叢考に古時端午亦用五月内第一午日云々後世以五月五日爲午節蓋午五相通之誤とあり　○風樹驚心、孔子家語致思篇に夫樹欲靜而風不停子欲養而親不待往而不來者年也不可再見者親也とあるをいへり　○卒土、原本率を卒に作る諸本及類史に據て改む　○一准重陽云々、大寶二年十二月勅九月九日先帝忌日也諸司當是日宜爲廢務焉とあり九月九日は天武天皇の御忌日なり故に重陽宴を停めらる之に准ぜられしなり　○此節、類史此下に爲字あり　○神野郡、類史に大同四年九月改伊豫國神野郡爲新居郡以觸上諱也と見え後新居郡と改めらる　○賀茂伊豫朝臣、慶雲二年四月紀伊豫國神野郡人賀茂直人主等四人賜姓伊豫賀茂朝臣と見ゆ之に據らば伊豫賀茂朝臣とあるべきなり　○播磨速鳥、淀本速を連に作るは非、播磨と速鳥と二船の名なり速鳥の事釋日本紀述義所引播磨風土記に見え始て之を造られしは仁德天皇の御代なり就て見るべし　○叙從五位下、遣唐の船の爵位を賜はりしことは慶雲三年二月紀に見ゆ　○所乘、原本乘を垂に作る金本閣本會本淀本に據て改む

（〔四月〕）夏四月、乙卯以下は四月の干支なること疑なし故に例に據て此三字を補ふ　○尾張連馬身、書紀に此人見えず　○阿倍朝臣佐美麻呂卒、原本倍を保に作る金本會本淀本に據て改む佐美麻呂は天平九年九月紀に始見、同十年閏七月少納言寶字元年七月參議となる　○難波藥師、考證云職員令集解引醫疾令義解云姓稱藥師者曰藥部即蜂田藥師奈良藥師之類　○泊瀬朝倉朝廷云々、雄略紀七年を參看すべし　○惠日、推古天皇卅一年七月紀及舒明天皇二年八月紀に見ゆ　○難波連、神龜元年五月紀を參看すべし　（〔五月〕）夏五月、考證に

○夏四月壬戌朔乙卯十四、從五位上藤原朝臣魚名爲備中守。○庚申十九、初尾張連馬身以壬申年功、先朝叙小錦下、未被賜姓、其身早亡。於是馬身子孫竝賜宿禰姓。○辛酉二十、中務卿正四位下阿倍朝臣佐美麻呂卒。○己巳廿八、內藥司佑兼出雲國員外掾正六位上難波藥師奈良等一十一人言、奈良等遠祖德來、本高麗人、歸百濟國。昔泊瀬朝倉朝廷（雄略）詔百濟國、訪求才人。爰以德來貢進聖朝。德來五世孫惠日、小治田朝廷（推古）御世、被遣大唐、學得醫術。因號藥師、遂以爲姓。今愚闇子孫、不論男女、共蒙藥師之姓。竊恐名實錯亂。伏願、改藥師字、蒙難波連。許之。○夏五月辛未朔丙戌十六、大宰府言、承前公廨稻合一百萬束。然中間官人任意費用、今但遺一十餘萬束。官人數多、所給甚少、離家既遠、生活尚難。於是以所遺公廨、悉合正税、更割諸國、

正税、國別遍置、不失其本、毎年出擧、以所得利、依式班給、其諸國地子稻、者、一依先符、任爲公廨、以充府中雜事、○乙未、（廿五）正六位上大和宿禰弟守、授從五位下、○六月（辛丑朔）甲辰、（四）大宰陰陽師從六位下余益人、造法華寺判官從六位下余東人等四人賜百濟朝臣姓、越後目正七位上高麗使主馬養、内侍典侍從五位下高麗使主淨日等五人多可連、散位大屬正六位上狛連廣足、散位正八位下狛淨成等四人長背連、○辛亥、（十一）陸奧國言、去年八月以來、歸降夷俘、男女惣一千六百九十餘人、或去離本土、歸慕皇化、或身渉戰場、與賊結怨、惣是新來、良未安堵、亦夷性狼心、猶豫多疑、望請、准天平十年閏七月十四日勅、量給種子、令得佃田、永爲王民、以充邊軍、許之、○丙辰、（十六）以從四位上佐伯宿禰毛人、爲常陸守、參議從三位文室眞人智努、爲出雲守、從五位上大伴宿禰家持、爲因幡守、○乙丑、（廿五）大和國葛上郡人從八位上桑原史年足等男女九十六人、近江國神埼郡人正八位下桑原史人勝等男女一千一百五十五人同言曰、伏奉去天平勝寳九歲五月廿六日勅書、偁、内大臣（鎌足）、太政大臣（不比等）之名不得稱者、

蓋因上脱夏四月三字後人妄増也されど金本を始め諸本何れも同じければ姑く舊のまゝにて改めず

○諸國地子稻、四年八月勅を參考すべし

（六月）○余益人、金本曾本淀本益を盖に作る

○余東人、人の字は金本曾本になし

○百濟朝臣、錄左京諸蕃に百濟朝臣百濟國都慕王三十世孫惠王之後也とあり

○高麗使主、姓氏錄に載せず

○多可連、同じく載せず、備後國三上郡多可郷、近江國犬上郡田可郷あり是に緣故あるか

○狛連廣足、連の字は金本曾本淀本に據て補ふ

○長背連、錄右京諸蕃に長背連高麗國主鄒牟王之後也とあり

○天平十年云々、此事同年の紀に見えず

○桑原史、錄山城諸蕃に桑原史狛國人淨聞之後也また攝津諸蕃にも見ゆ

○五月廿六日勅書、本書には見えず政事要略二十八に天平勝寳九年五月廿

今年足人勝等先祖後漢苗裔鄧言興幷帝利等、於難波高津宮御宇天（仁德）皇之世、轉自高麗歸化聖境、本是同祖、今分數姓、望請、依勅一改史字、因蒙同姓、於是桑原史、大友桑原史、大友史、大友部史、桑原史戸、史戸六氏、同賜桑原直姓、船史船直姓、

○秋七月（辛未朔）癸酉（三）、勅、東海東山道問民苦使正六位上藤原朝臣淨弁等奏、偁、兩道百姓盡頭言曰、依去天平勝寶九歲四月四日恩詔、中男正丁並加一歲、老丁者老俱脫恩私、望請、一准中男正丁、欲霑非常洪澤者、所請當理、仍須憫矜、宜告天下諸國、自今以後、以六十爲老丁、以六十五爲耆老、○甲戌（四）、勅、比來皇太后寢膳不安、稍經旬日、朕思延年濟疾、莫若仁慈、宜令天下諸國、始自今日、迄今年十二月三十日、禁斷殺生、又以猪鹿之類、永不得進御、又勅、緣有所思、免官奴婢幷紫微中臺奴婢、

六日の格を載て頃者百姓之間曾不知禮以御宇天皇及后等御名有著姓名者自今以後不得更然と云るを指せるか元年三月乙亥條を參考すべし

○鄧、恐くは劉字の譌か金本淀本には劉に作る

○帝利、金本曾本帝の上に言字あり　○桑原史云々、一桑原史、二大友桑原史、三大友史、四大友部史、五桑原史戸、六史戸合せて六氏なり　○大友桑原史、諸史に此氏人見えず下の大友部史桑原史戸亦同じ　○大友史、天平十五年九月紀に見ゆ　○史戸、神龜元年二月紀に史部虫麻呂見え錄攝津諸蕃史戸漢城人韓氏劉德之後也とあり　○桑原直、錄大和諸蕃に桑原直桑原村主同祖漢皇帝十世孫萬德使主之後也とあり　○船史、桑原氏と同祖か詳ならず大友桑原史大友史の八字金本淀本になし又大友部史の四字は閣本になし戸史の二字も同本になし又船直の船の字は金本なし　○船直、諸史に此氏人見えず

（七月）並加一歲、前詔に十八を中男とし廿二以上を正丁とすとある是なり

○以六十云々、戸令に六十一を以て老と爲し六十六を以て耆とすと見ゆるを改めて並に一歲を減ぜられしなり

○猪鹿、內膳式に元日より三日に至る供御に鹿肉猪宍見ゆ

○味淳、考證に淳疑醇字味醇卽味酒神護景雲三年四月紀有味酒部稻依と云り味酒は伊豫國溫泉郡の鄕名なり

○三當、原本當を富に作る金本曾本淀本に據て改む下同じ
○戸憶志、戸は氏、憶志は名なり戸氏は勝寶元年閏五月紀に出づ
○根連、錄宿泉皇別に根連布瑠宿禰同祖天足彥國押人命之後とあり靺鞨は東大寺文書天平十七年四月內染司解文に見ゆ
○轉讀、紀略此下に焉字あり

皆悉從良、從七位上葛井連惠文、正六位上味淳龍丘、難波連奈良、並授外從五位下、○丙子、正六位上阿倍朝臣乙加志授從五位下、正六位上額田部宿禰三當、戸憶志、根連靺鞨、生江臣智麻呂、調連牛養、山田史銀、並外從五位下、三當本姓額田部川田連也、是日、以額田部宿禰姓、便書位記賜之、○戊戌、勅、爲令朝廷安寧天下太平、國別奉寫金剛般若經三十卷、安置國分僧寺二十卷、尼寺十卷、恒副金光明最勝王經、並令轉讀、

續日本紀卷第二十

標注増補

○習宜連諸國（巻一、文武天皇元、十一、癸卯條、四頁）　習宜の二字は如何に訓むべきかといふに、橋本稲彦訂正の新撰姓氏錄右京神別上に、中臣習宜朝臣と見えたる習宜をば「シフギ」と訓みたれど、確乎たる證のありて傍訓を施したるものとも思はれず、栗田寛博士は姓氏錄考證巻十一中臣習宜朝臣の條（七二五）に習宜は大和國菅原郷の地名なるべし、須牙（スゲ）と訓べし、其は伴信友の考に、天平廿年法隆寺資財帳に大和國云々、添下郡菅原郷深川栗林一地、東限レ道南限二百姓家習宜池一云々とある是なりと云ひ、物部氏纂記にも同じく信友の說を引きて、習宜は大和國の地名なりとし、習宜まことに此說の如くならば曾々笠縫に由緣ありて負る姓にあらじかといはれたり、尙ほ考ふるに藤原家傳の下に至二于季秋一每與二文人才子一集二習宜之別業一申二文會一也と見え、藤原武智麻呂の別莊のありし地なること明かにて。法隆寺資財帳と合せ考ふるに習宜は添下郡にありしことを知らる、然らば如何にしてかく六ケしき文字を用ひしかといふに、和銅六年五月の制に畿內七道諸國郡鄕名著二好字一と宣給ひしによりて、もとは菅と呼びしを習宜の二字を充て用ふるに至りしかと思はれ、習宜は「スゲ」と訓むべきこと疑なかるべし、次に習宜といふ氏は此以外に神護景雲三年九月己丑の條に大宰主神習宜阿曾麻呂の事（續下一九六）見えたるが、此阿曾麻呂は天平神護二年六月乙酉朔の條に授二正六位上中臣習宜朝臣阿曾麻呂從五位下一（同下一三五）と見え、中臣習宜朝臣は養老三年五月癸卯の條に從八位中臣習宜連笠麻呂等四人賜二朝臣姓一（續上一四〇）と見え、天平神護元年正月己亥の條に中臣習宜朝臣山守（續下一〇八）文德紀天安二年三月丙寅の條に中臣習宜朝臣弘門（一七二）見えたるが、姓氏錄右京神別に中臣習宜朝臣、石上朝臣同祖神饒速日命孫味瓊杵田命之後也とあれば物部氏と同祖なること明かなり　○大極殿（同二、正、朔、五頁）　大極殿は書紀皇極天皇四年六月戊申の條（紀下一六五）に既に見えたるが、當時は大安殿と稱せしを後世より追稱して大極殿と稱せし由其標注に記したり、大極殿卽ち古への大安殿なることは、玉がつま一に大安殿は「オホヤスミドノ」と訓べし、すなはち大極殿のことなり、又天智紀に西安殿、天武紀に向安殿、內安殿、外安殿、舊宮安殿、文武紀に東安殿などもあるみなやすみどのなり、やすみは古き歌に、やすみしゝわが大きみとよみて、これ安らけくて天の下を見し給ふ意、見し給ふとはしろしめすことなり、されば天皇のましますす殿をば皆やすみどのと申せるなり、（中略）皇極紀天武紀に大極殿をおほあむどのと訓み、天智紀に西小殿とあるをにしのこあどのとよみ、上に出せる天武紀の內安殿をうちのあむどのと訓るなどは、何れもやすみどのと訓しめむために傍に安ドノと書たるを見て誤りて安を音によめるひがことなり（中略）大極殿は第一の正殿なるが故におほやすみどのと云るをやがて大安殿とも書れたるなり、續紀に大極殿と大安殿とは別なるが如く聞ゆる所もあれど然らず同じことなりといへり、（古事記傳二十八にも見ゆ）此說の如く大安殿と大極殿とは同じものなりと思はるゝが、書紀天武天皇朱鳥元年紀に正月癸卯（二十日）御二大極殿一而賜二宴於諸王卿一と見え之に續きて丁巳（十六日）天皇御二於大安殿一喚二諸王卿一賜レ宴と見えたり、大極殿と大安殿と同じものならむには斯く書分くること故無しと思はる、又續紀には巻一以下多くは大極殿とあれど、巻二大寶二年三月己卯の條には鎭二大安殿一大祓云々（續上二八）と見え、其他にも往々見ゆるが、大寶元年正月紀には、乙亥朔天皇御二大極殿一受朝、戊寅（四日）天皇御二大安殿一受二祥瑞一如二告朔儀一（同一八）と書し、巻十天平二年正月紀にも丁亥（二日）天皇御二大極殿一受レ朝、辛丑（十六日）天皇御二大安殿一宴二五位已上一（同二二五）と書し、同巻十四天平十四年正月紀にも、丁未朔百官朝賀爲二大極殿未レ成權造二四阿殿一於レ是受朝焉、壬戌（十六日）天皇御二大安殿一宴二群臣一（同三〇四）と書して大極殿と大安殿とを書分けたり、斯く書分けたるに據れば大極殿と大安殿とは全く同じものなりとはいふを得さるが如し、殊に十四年正月の文は朔日には大極殿未だ成らずをいひ、十六日には大安殿に御すとあり若し大極殿と大安殿と同じくはかくは記すまじきなり、尙ほ再考を要すべし　○巫部宿禰博士（巻二大寶二、三、戊寅、二八頁）　巫部は「カムナギベ」と訓むべし、そは伊呂波字類抄加の部姓氏の條二中歷姓氏の部に「カムナイヘ」と訓みたるにて明かなり、「カムナイ」は「カムナギ」の音便にて後に訛れるものなり、巫を「カムナギ」と唱ふることは倭名抄人倫部に巫、和名加牟奈岐、祝女也と見えたり、氏名を巫部と稱する原由は續後紀巻十五承和十二年七月己未條に右京人中務少錄正七位下巫部宿禰公成、大和國山邊郡人散位從六位下巫部宿禰諸成、和泉國大鳥郡人正六位上巫部連繼麻呂、後七位下巫部連繼足、白丁巫部連吉繼等、賜二姓當世宿禰一、公成者神饒速日命苗裔也、昔屬二大長谷稚武天皇（雄略）時一公成始

祖眞椋大連奏、迎二筑紫之奇巫一奉レ救二御病之脊育一、天皇寵レ之賜二姓巫部一、後世疑二謂巫覡之種一故今巾改レ之（續後二九）と見え、姓氏錄和泉神別にも巫部連、采女朝臣同祖、雄略天皇御體不豫、因レ茲召二上筑紫豐國奇巫一、令二眞椋（原書眞の下に源の字あり衍なること明かなり故に削る）大連率一レ巫仕奉、仍賜二姓巫部連一と見えたるにて、明かに物部氏と同祖なることも之にて明かなり、巫部連は山城神別にも見え、巫部宿禰は右京神別並に攝津神別に見え、何れも神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也と見えたり、氏人は此以外に本書卷十八天平勝寶四年五月丙寅條に、免二官奴鎌取一賜二巫部宿禰一祖足賀茂朝臣一（續上三八七）見えたり　○栢村村主磨心（卷六和銅七、九、壬子、一〇四頁）　栢原は姓氏錄には見えず、國史にも此以外には見えず、板本には柏原とありたれど金本伴本淀本に據りて栢原と改む、栢原は地名に據れりと思へど所見なし、柏原は姓氏錄左京神別に柏原連見え伊香我色乎命之後也とあり、國史には書紀卷三十持統天皇三年七月壬子の條に僞兵衞河內國澁川郡人柏原廣山（紀下三三四）見え、後紀卷二十二弘仁三年九月戊午の條に賜二勳八等柏原公廣足等十三人椋椅連一（一八五）と見ゆ、廣足は陸奥國遠田郡の田夷なりしを本姓を改めて公民とせられしなり、柏原は神別系の柏原連と蝦夷系の柏原公と加婆禰なき柏原廣山と見ゆれど村主の加婆禰なるは見えず、村主の加婆禰は姓氏錄左京蕃別上に下村主、上村主（何れも漢系）左京蕃別下に牟佐村主（同上）右京蕃別上に錦織村主、檜前村主（同上）右京蕃別下に高向村主（同上）坂田村主（百濟系）高安下村主（高麗系）見え、山城大和攝津和泉等にも村主の加婆禰の人あれども何れも蕃別系の人のみなれば、之より考ふるに栢原磨心も恐らくは蕃別系統の人なるべし　○余眞人（卷七養老元、正、乙巳、一二四頁）余は氏、眞人は名なり、余氏は姓氏錄には見えず、國史に見えたるは續紀卷八養老五年正月甲戌の條に余秦勝（續上一五六）同卷九養老七年正月丙子の條に余仁軍（同一七六）同卷十五天平十六年十月乙未の條に余義仁（同三二七）同卷十七天平勝寶元年閏五月甲辰の條に余足人（同三六六）三代實錄卷三貞觀元年十二月廿七日の條に余廣主（三上七二）見え、余氏の賜姓の事は續紀卷二十天平寶字二年六月甲辰の條に大宰陰陽師從六位下余益人造法華寺判官從六位余東人等四人賜二百濟朝臣姓一（續上四四七）と見え、同廿三天平寶字五年三月庚子の條に百濟人余民善女等四人賜二姓百濟公一（續下五一）と見え、續後紀卷九承和七年六月丙寅の條に備中介外從五位下余河成右京大屬正六位下余福成等三人賜二姓百濟朝臣一其先百濟國人也（續後一七四）と見えたれば其先は百濟に出てしこと明かなり、百濟に余氏のありしことは書紀齊明紀六年に百濟王子余豐璋、達率余自進（紀下二二〇）また同紀元年の注に百濟大使西部達率余宜受（同二〇八）など見ゆるにて彼國に於ける名族なりしことを知らる　○高麥大（卷十二天平九、九、己亥、二七〇頁）　高は氏、麥大は名なり、高氏は姓氏錄左京蕃別に高、高麗國人高助斤之後也、また高、高麗國人從五位下高金藏之後也と見えて高麗の歸化人なり、高は元來の姓なれば字音のまゝに「カウ」と訓むべきを、橋本稻彥の訂正本に「タカ」と訓を施したるは誤れり、高氏は百濟系、高麗系、渤海系のものもあり高麗系の高氏の國史に見ゆるは續紀卷九神龜元年五月辛未の條に、正八位上高正勝賜二三笠連一、從八位上高益信男捄連、正七位下高昌武殖槻連、勳十二等高祿德淸原連（續上一八八）と見えたり、御笠連は姓氏錄左京蕃別に高麗國人從五位高庄子之後也、男捄連は同じく左京蕃別には男牀連とき書高麗國人高道士之後也と見えたり、殖槻連は淸原連は姓氏錄には見えねど、高昌武高祿德も此に連ね擧げたるに據れば同じく高麗人なるべし、渤海系に屬する高氏にて姓を賜はりしは、後紀卷廿二弘仁四年正月壬辰の條に渤海國人高多佛賜二姓名高庭高雄一（文一九〇）と見えたり、又續紀卷廿三天平寶字五年三月庚子の條に高牛養等八人賜二姓淨野造一（續下五一）と見ゆるが、淨野造は姓氏錄に見えねど、續後紀卷三承和元年五月丙子の條に左京人正七位下文忌寸歲主、無位同姓三雄等、賜二姓淨野宿禰一、（中略）歲主三雄黜立等之先並百濟國入也（續後四三）と見ゆる淨野宿禰と同姓ならむには淨野造は百濟系なるべし、斯く高氏は異系のものあれば麥大はその何れに屬するか詳ならず

昭和十五年九月三十日印刷
昭和十五年十月八日發行

豫約頒價 金二圓

增補 六國史 卷參
（續日本紀卷上）

編纂者 佐伯有義
東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地

發行者 櫻木俊晃
東京市麹町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社

印刷者 小坂孟
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京 大阪 朝日新聞社